

# ポケットモンスター 煌

うたたねここ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

マサラタウンで療養中の女の子、マシロ。

ひよんなことからブルーと友達になるが、大きな鳥ポケモンにさらわれる。

さらわれたブルーを追いかけるが、森の中で力尽きてしまう。

その時、マシロは不思議なポケモンと出会う。

### 1章

マシロは出会った不思議なポケモンと共に、ブルーを探す旅に出る。

完

### 2章

無事ブルーと再開できたマシロは、ブルーをさらった大きな鳥ポケモンを操っていたトレーナーを探す中で四天王との戦いに巻き込まれていく。

完

### 3章

四天王との戦いが終わつが、ブルーをさらったポケモンとは関係がなかったことが判明した。シロガネ山で傷を癒やしたマシロは、仮面の男と鳥ポケモン、そして連絡が取れなくなったブルーの協力者を探してジョウトに渡る。

完

4章

チャンピオンになったことで有名人になった結果、逃げるようにホ  
ウエン地方に旅立つ。

目次

0章

第1話

2話

1章

3話

4話

5話

6話

7話

8話

9話

10話

11話

12話

13話

14話

15話

16話

17話

18話

1.5章

19話

20話

21話

1

4

9

14

20

24

32

39

49

56

61

69

77

84

93

100

111

118

129

135

144

3章

4  
3  
話

4  
2  
話

4  
1  
話

4  
0  
話

2.  
5章

3  
9  
話

3  
8  
話

3  
7  
話

3  
6  
話

3  
5  
話

3  
4  
話

3  
3  
話

3  
2  
話

3  
1  
話

3  
0  
話

2  
9  
話

2  
8  
話

2章

2  
7  
話

2  
6  
話

2  
5  
話

2  
4  
話

2  
3  
話

2  
2  
話

317 311 305 299

293 287 278 272 265 258 248 238 226 220 210 199

190 177 173 167 160 154

6  
8  
話

6  
7  
話

6  
6  
話

6  
5  
話

6  
4  
話

6  
3  
話

6  
2  
話

6  
1  
話

6  
0  
話

5  
9  
話

5  
8  
話

5  
7  
話

5  
6  
話

5  
5  
話

5  
4  
話

5  
3  
話

5  
2  
話

5  
1  
話

5  
0  
話

4  
9  
話

4  
8  
話

4  
7  
話

4  
6  
話

4  
5  
話

4  
4  
話

497 489 479 472 464 457 449 443 435 428 421 414 408 402 396 391 385 376 369 362 355 347 339 330 324

91話	90話	89話	88話	87話	86話	85話	84話	83話	82話	81話	80話	79話	78話	77話	76話	4章	75話	74話	73話	72話	71話	70話	3.5章	69話
679	671	662	654	646	638	631	624	615	606	598	590	582	575	566	558		551	542	533	527	519	513		508

9  
5  
話

9  
4  
話

9  
3  
話

9  
2  
話

709 700 693 686



## 0章 第1話

マサラタウン。

カントー地方の一角にある田舎町。

生まれつき体が弱いためにこの町に引っ越してきてはや2ヶ月。空気がキレイなぐらいでなにもない。

町外れには研究所があるらしいんだけど、そもそも両親が外に出るのを許してくれないためまともに外出すらしていない。

お陰で肌の色も薄いし、髪の毛も真っ白。まあ、髪の毛は生まれつきだけ。

そんな退屈な毎日と病弱な体に苦笑いをしながら今日もいつものごとく、窓から外を眺める。

すると今日はいつもと違い、一人の女の子が外を歩いている。

女の子が1人で歩いているのはこの2ヶ月で初めてな気がする。

おつかいかな？

私はおつかいどころか外出すらまともにしてないけど。

そのまま眺めているとふと、その女の子と目が合った。

お互いに数秒固まった後、てくてくと近づいてきて、窓越しに向こうから話しかけてきた。

「こんにちはー！」

「こ、こんにちは。」

元氣よく挨拶をされて、私は少しどもりながら挨拶を返す。

「あなた、見たことないけど最近引っ越してきたの？」

「えっと、引っ越してきたのは2ヶ月前なんだけど、体が弱くてあまり外に出られなくて・・・。」

おずおずと、そう話しながら目の前の女の子を見る。

するとその子は私の言葉を聞くと、目を輝かせながら前のめりになりながら話しました。

「え!?どこから来たの!?ここよりも都会?どうしてこの町に引っ越し

てきたの?」

「えつと、前に住んでたところはヤマブキシテイでビルがたくさんあって、ここよりも都会・・・かなあ。この町に引越して来たのは私は体があまり丈夫じゃないから、田舎の方が体にいい、らしいから。」

「ふーん、都会のほうが住みやすいと思うけどな・・・。それより! ヤマブキシテイってどんなところ? アタシ、この町から出たことなくって、他の町の様子とか聞きたいな!」

「どうやら都会に憧れてるみたいだけど、私は体が弱いから外出もしなかったかし、都会の様子も大体しかわからないんだけど。」

「私、こんな体であんまり外に出たことないからあんまり詳しくないよ?」

「いいのいいの! それでも行ったことのないアタシよりは詳しいでしょう?」

「まあ、そうかな・・・?」

「都会って、そんなにいいところって訳でもなかったけどなあ。私の体が弱いからそう思うだけかもしれないけど。」

「それじゃあ窓越しの立ち話も疲れるし、上がっていかない?」  
「いいの!?! おじやましまーす!」

「そう言うと、素早く玄関に回っていく女の子。ちようどお母さんは出掛けてるから、自分で玄関に向かう。今日はぜんそくも出てないし、調子がいいかな?」

「自分の体調を気にしながら玄関を開ける。」

「おじやましまーす!」

「どうぞ。こういうの始めてのだな。」

「え? 友達とか、家に来たりしないの?」

「私がそう呟くと、女の子は首をかしげる。」

「私、今まで誰かを家に呼んだことないから。」

「ん? 友達はいなかったの?」

「うん。私、体が強くないから仲間に入れてくれなくて。まあ、外に出れない子と一緒に遊んではくれないよね・・・。」

「そんなのひどいじゃない!だったら、アタシが遊びに来るよ!」

そう言っつて私の手を掴んだと思っつたらそのまま上下にブンブンと振る。

「あなたは、アタシに、ヤマブキシテイの事を教えて?アタシはあなたにこの町のこと教えるから?引越してあまり外に出てないんでしょ?」

「うん。話で聞いたことがあるぐらい・・・かな?」

「じゃあ決まりね!あなた・・・、じゃなくて。アタシはブルー!あなたの名前は?」

「私は、マシロ。」

「よろしくね、マシロ!これで、アタシ達友達だね!」

「え?」

「ト・モ・ダ・チ!あなたと、アタシが!つて。ち、ちよつと、なんで泣いてるの!?!どこか痛いの!?!」

そう言われて私は自分の顔を触る。その時始めて自分が泣いてることに気付いた。

今まで、体が弱かった私に友達になろうなんて言っつてくれる人はいなかった。むしろ近づかれることすらなかった。そんな私に友達になっつてくれるつて言われて。

「ううん、痛くないよ。ただ、すごく、嬉しくて。」

「そうなの?なんかよくわかんないけど・・・。」

そう言っつて女の子は私の頭を撫でてくれた。気恥ずかしさを感じながらも、私が泣き止むまで、ずっと、撫でてくれた。

## 2話

ブルーが友達になってから1ヶ月。

家をまともに出たことのない、私の話のネタは尽きてしまったので、最近はマサラタウンのことや、ポケモンのこと等、ブルーが話すことのほうが増えてきた。

それに、毎日のように家に来たブルーは、お母さんとも仲良くなり、今では3人で話したりすることもある。

むしろ、私よりお母さんのほうが良く話してる気がする。

そりゃ、まともに出ない私の話なんかよりお母さんの話の方が楽しいよね……。

それでも私はブルーの友達なんだから、友達らしい事をしたたい！

「という事で、今日は天気もいいし、体調もヨシ。ブルーのお迎えに行こうかな。」

そう呟き、外に出る準備をする。いつもより暖かい格好で、リビングのお母さんに声をかける。

「ちよつとブルーを迎えに外に出てくるね。」

「体調は大丈夫？」

「うん！」

「余り遠くには行かないようにね。」

「うん！」

そう言っただけで私は家を出る。いつもはブルーが歩いてくる道を今度は私が歩いていく。

友達を迎えに行くのも初めての経験。

このときの私はきつと笑ってたと思う。それぐらい浮かれてた。そして、視界にブルーが映ったときは、それはもう最高潮で、私は嬉しそうに手を振ってブルーに駆け寄った。けど、ブルーは慌てたように私の方に駆け出した。

私は、後ろから迫る大きな鳥ポケモンに全く気づいていなかった。

「あぶないー！」

それに気づいたのは私に駆け寄ってきてたブルーが私を突き飛ば

し、ブルーが大きな鳥ポケモンに連れて行かれた瞬間だった。

「え？」

突き飛ばされ、呆然とする私。

今はもう影にしか見えない鳥ポケモンを見る。

「待って……」

震える声で呟く。

私の初めての友達。

体のことを知っても友達になってくれた。

土を握りしめて立ち上がる。

「待ってよ……」

私は走り出した。

影だったものが点になって、私の足じゃ追いつけないこともわかってる。

それでも止まれなかった。

「返してよ……！私の、初めての友達！」

目の前には森が迫っている。

子供だけが入るのは危険なのはわかってる。

きっと、大人の人を呼ぶのが正解。

自分の体だって、丈夫ではない。

でも、そんなことは関係なかった。

私は、ブルーを連れて行った鳥ポケモンを追いかけて、森の中に入った。いった。

森に入って数時間、あたりは真っ暗になり、月明かりだけで照らされた森は、とても幻想的だった。

私は方角がわからなくなっても、ブルーを諦めることはなく、ただ

闇雲に足を進め続けた。

しかし、マサラタウンに引越したことで良くなってきたこの体も、限界が訪れた。

「はあ、はあ。ゴホッ・・・」

口の中に鉄の味がする。私はそばにあった木によりかかり、そのまま座り込む。

思い出すのは、ブルーが連れ去られたときの光景。

「私をかばったから、ブルーが代わりに連れて行かれたのかな・・・？」  
そう思うと、涙が溢れてきた。

「私のせい・・・なのかな・・・？ごめんね、ブルー。」

ただでさえ病弱な体を酷使し続けた結果、体はもう、動かなかった。

(このまま野生のポケモンに襲われて死んじゃうのかな。)

それもいいかもしれない。ブルーは私をかばって連れていかれた。お母さんも私のせいでお父さんをおいてマサラタウンに引越すことになった。

私はいない方がよかったのかもしれない。

でも、それでも。

もつとブルーとお話したかった

もつと一緒にあそびたかった

元気になって一緒に外に行きたかった

ポケモン、捕まえに行きたかった

ポケモンバトル、してみたかった

涙は止まらず、後悔だけが溢れてくる。

歩くことすらままならないまま、木の幹に視線を落とす。

「なにこれ、繭？」

うつすらと鼓動をするように光を放つそれは、半分ほどを地面にめり込ませていた。

私はそれを、そばにあった石ころで掘り返す。

「なんだろう、これ・・・」

そう呟きながらも、小柄な私でも抱きかかえることのできる大きさ

のそれを抱きあげる。

『やつと、あえた。』

「え？今、なにか。」

そう言った瞬間、繭のようなものから光が溢れ思わず目をつむる。

そのまま光が消えるまで数秒。気づけば抱えていた重さがなくなり、目の前には星型のような、見たことのないポケモンがいた。

『あえた！あえた！』

頭に直接響くような、不思議な声が聞こえる。しかし、周囲には星型ののようなポケモンしか見当たらない。まさかとは思いつつ、目の前のポケモンに声をかける。

「君が・話しかけてるの？」

『うん！ぼくをおこせるひとを、ずっとまっていた！』

「私が、起こしたの？どうやって？」

『わかんない！ただなんとなく、ビビってきた！』

よくわからないけど、とりあえず私が起こしたらしい。

しかし、限界の私はとても眠たくなってきた。

「そつか。でも・・・私は。とつても眠たい・・・かな。」

『だいじょうぶ？いまねたらきつと、おきられないよ？』

「そうかも・・・ね。でも、友達を・・・助けられないなら。もう・・・いいかな。」

そう言うって私は目を閉じる。もう、体は動かない。

意識が薄れていく中、声が聞こえる

『ともだち、たすけたい？』

(うん。)

もう、自分でも返事ができてるのかも分からない。

『だったら、おねがい、して？』

(お願い？そんなの決まってる。)

友達を助きたい。

(あと、ブルーが怪我してないと、いいな。)

私の意識はそこで途切れた。



# 1章 3話

ブルーがさらわれたあの日、森の中で気を失っていた私は、捜索隊に発見された。

どうやら、大きな鳥ポケモンを見ていたのは私だけじゃなかったよ  
うで、あの後捜索隊が作られたらしい。

そのまま私は2週間ほど寝ていたらしく、目が覚めたときにはも  
う、ブルーの捜索も打ち切られていた。

その後、オーキド博士に大きな鳥ポケモンについて必死に訴えた  
が、影しか見ていない私の話はあまり役には立たなかった。

あれから6年

あの日から変わったことがいくつもある。

一つは、病弱だった体が健康優良児に。

それにあわせて、オーキド研究所に毎日入り浸るようになった。や  
ることは当然、大きな鳥ポケモンについて調べること。

そしてもう一つ。

『きょうもけんきゆうじよ?』

「うん、そうだよ。きららには退屈かもしれないけど・・・」

『そんなことないよ? いろんなぽけもんとおそべてたのしい!』

「そっか。それじゃ、今日もみんなと遊んでてくれる?」

『わかった!』

なぜか私にだけ声が聞こえる。このポケモン。

黄色い頭に白い体、頭にはオレンジっぽい短冊が3つ。背中に羽衣  
がついた、誰も名前を知らない星の形のポケモン。

6年前のあの日、気を失った私にずっと引っ付いて、片時も離れな  
かったらしい。それからずっとそばにいてくれるこの子。

名前がわからないから、「きらら」って呼んでる。

オーキド博士って、鳥ポケモンについてなにも分からないし、きらのことも知らないしで。

博士って意外と大したことないのかなあ？

割と失礼なことを考えながら今日も研究所へ向かう。

「おじやましまーす。」

『おじやましまーす。』

「おお、よく来たの。今日も頼むぞ。」

そう返事を返してくるのは、オーキド博士。この研究所の所長？でいいのかな？他の人ほとんど見たことないけど。

その間にきらはぴゅーつと外の広場に飛んでいってしまった。遊びに行ったのかな？

一応、自分の事だけやるのも悪いから、研究の手伝いをしていただけで、いつの間にか博士の助手扱いされているらしい。

まあ、便利だからいいんだけど。

「ところで博士？鳥ポケモンの情報は？」

「ないのう。6年間毎日来ておるが、何か他のことに目を向けてはどうかの？」

なにか言い出した博士をキツ、と睨み付けると慌てたように続ける。

「いや、ブルーの事を諦めろと言つとるんではなくてじゃな。たまには息抜きでもしたらどうかな・・・と思つての。」

「私の事はいいですよ。ブルーは私をかばって連れていかれたんだから、私が息抜きなんて、やってられない。」

「ううむ・・・」

そう言う顎に手をあてて唸りだす。

最近、よく唸ってるけど何か気になることでもあるのかな？  
まあ、どうでもいいんだけど。

それより、6年間経つてまともに情報が集まらない。

ここで研究の手伝いをしながら待つのも限界・・・かな？

「ねえ、博士？」

「なんじゃ？」

「ここ以外でポケモンの研究や情報が集まる場所ってある?」

「そうじやの、文献なら博物館のあるニビシティ。情報ならタママシ大学のあるタママシシティ。あとは、研究所があるグレンタウン、かの。」

「ニビとタママシとグレン、か。」

研究所のグレンタウンは後回しでいいかな。博士の研究所で6年経ってもまともに情報が集まらなかったんだから、期待できないし。となると、ニビシティ経由でタママシシティに行くのがよさそうかな?」

「1人でぶつぶつと、急にどうしたんじや?」

おっと、どうやらさっきまでの博士と同じ事をしていたらしい。

でも、とりあえずやることは決まった。

「とりあえず、ニビシティに行きます。博物館で何か情報が集まるかもしれないんで。」

「ふむ、旅に出る、と?」

「そうですね。これ以上ここにいても得られるものは無さそうなんです。」

「とりあえずその、さらつと毒をはくのはやめてくれんかの?」

「大丈夫です。本音なんで。」

「それは大丈夫ではないんじやよ...」

ため息をつきながら、博士は後の棚からリュックを取り出す。

「ここに、基本的な旅の道具が入っておる。これを持っていくといい。」

「えらく用意がいいですね?」

「いつかは飛び出していくと思ってたんじやよ。まあ、黙って飛び出していく方が早いかと思っていたがの。」

そう言つて笑いながらリュックを渡してくれた。

「博士もさらつと、ひどいことを言ってますけどね?」

「はっはっ。もう6年の付き合いじや。それぐらい許してくれんかの。」

「なら、おたがい水に流しておきましょうか。」

笑いあう私達。なんだかんだ6年間顔を会わせていたから、悪口の言い合いなんてなれたものだ。

まあ、研究所に居ないときもあつたけど。

「今のお主なら問題ないとは思うが、体には気を付けていくんじやぞ。」

「体は大丈夫だよ。博士も知ってるでしょ?」

「そうじゃの。あと、これも持っていくといい。」

「なにこれ、手帳?」

差し出されたのは赤い色をした、手帳サイズの機械。

「ポケモン図鑑じゃよ。出会ったポケモンのデータを自動的に記録してくれる、ハイテクなアイテムじゃ!」

「要らないです。」

どや顔してるところ悪いけど、研究所を離れてまで研究の手伝いをするつもりはないかな。

それに、余計なことをするつもりはないし。

「なん・・・じゃと・・・」

「面倒だし、そんなことをやってる暇はないし。」

ため息をつきながら図鑑をしまう博士。

そんなにデータを集めてほしかったのかな?

「後は、そうじゃな、困ったことがあればグリーンを頼るといい。少し前にポケモン図鑑を埋めるために、旅に出たところじゃ。」

「グリーンかあ。愛想がなくて苦手なんですよね、彼。」

「まあ、とにかくじゃ。ブルーのこと、頼めるなマシロくん?」

「任せてください。私がブルーの為にこの6年、どれだけの資料を漁ったか、知ってるでしょう?」

「フツ、そうじゃな。野暮なことを聞いたかの・・・。それじゃあ、頼んだぞ!」

「はい!」

「あと。母親には・・・」

何か言っているがそれに気づかないふりをして、私はリュックを背負い、外に駆け出す。この6年で伸ばしたきららとおそろいのツイン

テールをなびかせて、私はきららに聞こえるように叫ぶ。

「きらら、行くよー」

『ましろ、きょうははやいね？どこかいくの？』

そう言いながら飛んでくるきららに、私は駆け出しながら答える。

「私の、初めての友達を探しに！」

## 4話

私は、オーキド博士から受け取ったリュックを背負って、トキワシテイに向かっていた。

ニビシテイに行くには必ず通る町で、一旦そこで一休みしようと思う。

お母さんには間違いなく止められるから、黙って出てきたけど、博士が上手いこと言いくるめてくれるでしょ！

そう考えながら、となりをフワフワと浮かんでるきららが話しかけてくる。

『ましろ、ましろ。ともだちって、ぶるーってひと？』

「そうそう。ブルーっていう、私の初めての友達！マサラタウンに居てもブルーの行方は分からなかったからね、こっちから探しに行くよ！」

『そっか！ともだち、だいじ！』

「そう、大事！だから、探しに行くの。まずはトキワに行くのかな」

そう話しながら歩く私達。きららは飛んでるけど。

そんな私達の前に、黒ずくめの集団が目に入る。

この辺りでは見かけない顔ぶれで、何やら大きな声で会話しているお陰で、だいぶ離れている今の距離でも聞き取れた。

「まだこの辺りにいるはずだ。なんとしても探し出すのだ、幻のポケモンを。」

そう言っつて黒ずくめの集団は西の森の方へ走って行った。

幻のポケモンかぁ……。あの鳥ポケモンとなにか関係あるかな？

そう思った私は、少しだけ寄り道することにした。

伝説のポケモン。どんなポケモンなんだろう……。？

西の森に入って数時間、辺りは暗くなり月明かりだけが森を照らしていた。

幻のポケモンとやらも見つからず、完全に無駄足になったことで、疲れだけが残った。

「幻のポケモン、気になったけど見つからないし、そろそろ切り上げよっか？」

『いない？』

「うん。だから・・・」

そろそろ、と。そう言つて帰ろうとした時、きららが後ろを見ながらおもむろに。

『あっちからなにかくるよ？』

「え？」

きららに言われ、森の奥の方に振り返つた瞬間。

白いポケモンが森の奥から飛んでくる。私でも抱えられそうなサイズの大きなポケモン。

しかし、私はそのポケモンが、サイズなんかでは計れないポテンシャルを秘めていることを知っていた。

「幻のポケモンって、あなただったんだね。ミュウ。」

幻のポケモンと呼ばれるミュウ。すべてのポケモンの遺伝子を持ち、すべての技を使えると言われている。この6年、博士の研究所で読み漁った資料に度々出できたものの、遭遇数はかなり少なく、体毛だけでも高値で取引されるとかなんとか。

でも、鳥ポケモンとの関連はなさそうなんだよね。

だから、ミュウに関しては余り興味を惹かれなかった。

「さっきの黒ずくめの人達に追われてるのかな？それなら、私達が来たほうに行くといいよ。誰とも会わなかったから、すんなり森を抜けられると思う。」

そう言つて横にそれる。ミュウは私達の周りをぐるりと回るとそのまま私達の来た方に飛んでいった。

「なんか、雰囲気 gira gira に似てたね？もしかして、きららも幻つて呼ばれるポケモンなの？」

『わかんない！けど、さっきのぼけもん、いままでみてきたぼけもんなかで、いちばんつよそうだった！』

「やっぱり幻のポケモンって、強いのかなあ。きららが戦ったら勝てそう？」

『たぶん、かてるよ?』

なんでもないように言うきらら。

やっぱり、この子も幻の1体なんじゃないかなあ?

使う技も見たことないものばかりだし、他のポケモンと比べて技の規模が違いすぎるし。

ここで考えても仕方がないので、さっきのミュウを追うようにして歩き出す。

この子や、鳥ポケモンに、ブルーの行方。分からないこと気になることばかりだけど、少しずつ探していこう。

そうして森を抜けた私達は、そこで、

1人の少年とであつた。

「あれ?グリーン?こんな所で何してるの?」

そこにいたのはオーキド博士の孫で、グリーンという少年。なんでも、留年から帰ってくるや否やポケモン凶鑑を埋める為に旅に出たらしいが、まだこんな所に居たんだ。

「マシロか。ミュウが居るって聞いてな。あわよくばと思ってやってきたが……。流石にレベルが違いすぎて手を引いたところだ。なんでお前がこんな所にいるかは知らんが、戦う相手は選ぶことだな。」

「相変わらず、上からだねえ……。ま、とりあえず先輩からの忠告として受け取っておくよ。」

フン、と鼻を鳴らすグリーン。

そのまま、ボールを取り出して構える。

「さっきの戦いはさっさと手を引いたから消化不良だな。少し付き合え。」

「ええ、バトルはあんまり好きじゃないんだけどなあ。」

後ろから指示を出すだけで、勝った負けたを決めて、ケガをするのはポケモンだけ。そんなバトルがあまり好きではなかった。

「しようがないね。きらら、いける?」

『ぼとるー?いけるよー?』

「ちゃんと加減はしてね?」



『おっけー。まかせて!』

「お前達は本当に会話してるみたいだな……。だが、手を抜いて吠え面かくなよ!」

ボールから繰り出されたのはヒトカゲ。博士から受け取ったポケモンかな。

「お願い、きらら。」

『まかされたー!』

「いくぞ、ヒトカゲ!」

こうして始まったポケモンバトル。

あれ?そういえば私、トレーナーと戦うのって始めてじゃない?

「ヒトカゲ、かえんほうしゃ!」

ヒトカゲから放たれるかえんほうしゃ。しかし、小柄な体格を活かしてきららは、ひらりひらりと躲していく。

「相手が小さすぎるか……。なら接近戦だ!ヒトカゲ、きりさく!」  
「カゲ!」

鳴き声をあげ、ヒトカゲがきららに飛びかかる。

でも、飛びかかってくるなら、反撃もしやすいよね。

「押し返して。サイコキネシス。」

一直線に飛びかかってくるヒトカゲに対して、サイコキネシスで押し返す。そしてそのまま木の幹に叩きつけた。

ガア、と鳴き声をあげ、地面に落ちるヒトカゲ。

バキツ、と鈍い音がしたけど、ちゃんと加減したよね?

「ヒトカゲ、無事か?」

そう言ってヒトカゲに駆け寄るグリーン。ポケモンにはそれなりに優しいのね。

他人に対してもそれぐらいの態度で接したらいいのにな。

「エスパークタイプか……。見た目にだまされたな。」

『フーン!どうだ!』

「おつかれさま、きらら。そうだね、見た目はノーマルっぽいけど多分エスパーであってるよ。」

胸をはっていきららを褒めながら、返事をする。

グリーンはヒトカゲの様子を見たあとボールに戻しながら続ける。

「これで加減してるってなら大した威力だ。それなら、さっきの一言は余計なお世話だったな。」

「そんなことないよ。これでもトレーナーと戦うのは始めてだったし。」

「なん・・・だと・・・。オレは初心者に負けたのか・・・。」

「気にすることはないんじゃないかな？多分、私が強いんじゃないかって、きららが強いだけだよ。」

「ぐ・・・。慰められると余計に惨めになるな・・・。」

うなだれるグリーンの上で、つよい？つよい？と言いながら回るきらら。

それは慰めじゃなくて、煽りって言うんだよきらら。

やめなさい。

「見かけに騙されると痛い目を見る、か。覚えておこう。マシロ、お前はさっき見かけたトレーナーよりも、自分のことを理解している。きつと良いトレーナーになるだろう。」

褒めてるのかどうか分かりづらいけど、多分褒めてるんだよね？

まあ、負けた側のセリフではない気がするけど。

「それじゃあな。オレは行くぜ。」

そう言っただけ私の返事も聞かずにそのまま歩いていった。

私はそれを見送ったあと、きららに話しかける。

「きらら？ヒトカゲ強かった？」

『すこし、かな？』

「やっぱりかぁ・・・。」

おそろく、だけどグリーンはどちらかと言うと強い部類に入ると思う。

でも、そんな相手でも加減が必要なぐらい、きららが強すぎる、と思う。

ワンサイドゲームになるのも、あまりバトルが好きではない理由の1つ。

今まで野生のポケモンと出会ったら、サイコネシスで吹き飛ばして終わってたし、トレーナーと戦ったことがないから、客観的にきらを見るのがなかったけど。

いぎ、グリーンとのバトルで実力のある者との戦いを客観的に見て確信する。

「強すぎる、よねえ。何か威力の抑えめな技、覚えたほうがいいかな・・・?」

きらならなら、スピードスターとか使えそうだけど・・・。

とりあえず、技の事は後で考えよう。暗くなってきたし、トキワシテイに向かおう。

## 5話

トキワシテイにたどり着きポケモンセンターで一晩。

昨日は変な集団が追いかけてる幻のポケモンやら、グリーンとのバトルやらで疲れたせい、目が覚めると夕暮れ時。

旅の初日つてもあつて、疲れがたまつたのかもしれない。

流石にこの時間からトキワの森に行くのは危ないので、

準備だけしておこうと思い、フレンドリイショップに向かう。

歩いていると、目の前に飛び出てきた一匹のポケモン。

そのポケモンは私の姿を見ると、私に飛びついてきた。

「わわっ、なにごと？つてあれ？あなた、研究所のニャース？なんでこんなところに？」

抱えたポケモン、ニャースをまじまじと観察しながら話しかける。

ニャー、と言うだけでよくわからない。

研究所から逃げてきちゃったのかな？

「まてー、ニャース！」

そして、ニャースの飛び出してきた方からやってくる一人の少年。

その少年はニャースを追いかけたようだ。

「その人、ニャースを捕まえてくれたの？助かります！」

「いや、ニャースから飛び込んできたから、捕まえたというか何と言うか……。とりあえず、この子を追いかけたの？」

「そうなんです……。研究所にお邪魔した時に、オレのせいでたくさんポケモンを逃がしちゃつて……。」

そう言つて頭をかく目の前の少年。研究所から逃げてきたのは確定らしい。

とりあえず、少年が持つていたボールにニャースを戻しておこう。

ボールに戻すのと同時に、少年のやつてきた方から自転車に乗つたおじいちゃんがやつてきた。

「ぜえ……。はあ……。よ、ようやく……。捕まつた……。かの……。はあ……。はあ……。ぬ？……。マシロ……。くん？」

おじいちゃん。というか、オーキド博士だった。ニャースを追いか

けてきたのか、老体に鞭打って、トキワシティまでやってきたらしい。息も絶え絶えで今にも倒れそう。とりあえず、博士の息が整うまで待つことにした。

「ふう、マシロくんのおかげで助かったわい。残りはフシギダネだけじゃ。」

「まだ全部捕まってないんだ……。」

「うむ、研究用にボールに入れていたポケモン達を、この少年が開放してしまつての。」

「え？研究用ってことは、私が町を出る前からボールに入ってたあの子達ですか？そりゃあ、ずっとボールの中にいたんだから、ストレスが溜まつて、はしやくに決まつてますよ。」

「返す言葉もない……。」

うなだれるオーキド博士。しかし、まだフシギダネが外に出たままらしい。

あの子は他のポケモンとの面識がないらしく、外では人やポケモンの姿を見て逃げ回っていると思う。

「逃げたものはしょうがないんで、フシギダネを探しましょう。博士はその少年とジムの方をお願いします。私はジムの反対側に向かうんで、1時間後にセンターで落ち合ひしましょう。」

「すまん、世話をかけるの。行くぞ、少年。」

「わかりました。また後で会いましょう。」

そう言つて博士と少年がジムの方へ向かう。

そして私はそれは反対方向に向かう。

とりあえず、無事に見つかるといいね。

1時間後、私の方ではみつからなかったのでポケモンセンターに帰ってきた。そこには既にさっきの少年とオーキド博士が到着していた。

「博士、そっちはどうでした？」

「おお、マシロくん。こっちでちようどジムに逃げ込む所に出くわしての。なんとか捕まえたわい。」

「ケガとかしてませんでした？あのフシギダネ、外、始めてでしょう？きつとパニックになってたと思うんです。」

「それがの、その少年がの・・・」

そう言つて傍らの少年を見る。少年の横には話に出ていたフシギダネ。どうやらこの少年が上手いことやったのかな？

フシギダネも彼には懐いてるみたい。

「所で少年、君の名前は？」

「オレ、レッドって言います。ほんとに研究所に強いポケモントレーナーになるための方法を聞こうと思つてお邪魔しました。」

「なるほど・・・。ふむ、レッド。君にとつて強いトレーナーとはなにかね？」

「うーん・・・。」

考え込むレッドという少年。その姿を見て、話の矛先を私に向ける。

「では、マシロくんはどうかね？」

「え？私ですか？私はトレーナーなんてだいそれたものじゃないけど、きつとケガをしないようにしたいですね。」

「そうじゃの。マシロくんはポケモンの事を第一に考えておる。きつと良いトレーナーになるじゃろ。そしてレッド。君も、さつき見せたフシギダネへの優しさ。その気持ちを持ち続ければ、きつとポケモンも答えてくれる。強いトレーナーというのはそういう関係を築くことができるトレーナーじゃと、ワシはそう思うよ。」

「なるほど・・・。わかりました！」

「あと、これを持っていくといい。ポケモン図鑑と言う。」

「ポケモン・・・図鑑。」

「ポケモンに出会うたびに、ポケモンのデータを記録していくアイテムじゃ。その図鑑に、すべてのポケモンのデータを記録したとき、お主はきつと、最強のポケモントレーナーと呼ばれるじゃろ。」

「ありがとうございますー。」

ポン、とポケモン図鑑を渡すオーキド博士。

簡単に渡してるけど、あの機械つて結構貴重品なんじゃないのかな？

あ、私が必要ないって言ったから、人手が足りないのか。

「さて、このポケモン図鑑。マシロくんも、欲しくはないかの？」

「だから、要らないってば。」

そう言っつてレッドと言う少年に渡したのと、同じものをどさくさに紛れて私に渡そうとする。

昨日要らないって言ったじゃん。

「やはり、受け取ってはくれんか……。3人でデータを集めてもらったら、研究も捗るんだがのう。」

苦笑いしながら図鑑をしまう博士。申し訳ないけど、私はブルーを見つげるただけに研究の手伝いをしていただけで、研究所以外で研究の手伝いをするつもりはないのです。

「さて、今日はもう遅い。休むとしよう。」

「そうですね、オレもつかれました。」

そう言っつて2人はポケモンセンターに入っていく。

流石にマサラからポケモンを追いかけてきたら疲れるよね。

と思っつていたら、レッドが出てくる。忘れ物でもあったのかな？

「オレ、レッド！えっと……。マシロ、でいいのかな？よろしく！」

「え、うん。よろしく。」

律儀に挨拶をしてから、ポケモンセンターに戻っていくレッド。

きつと、あんな感じの人を陽キャつて言うんだろなあ……。

## 6話

またまたトキワシティで一晩過ごした後。

私は、早朝から出かける準備をしていた。

昨日はボールで休んでたきららも、今は元気に周りを飛び回っている。

「今日はトキワの森を早く抜きたいから、そろそろ出発するよ?」

『おっけ。』

「それじゃ、行こっか。」

会話を切り上げ、ポケモンセンターを出た所で知り合いと会った。

「あれ?グリーン、こんな時間まで外で凶鑑のデータ集め?」

「・・・ああ、そんな所だ。少し休憩したら、準備をしてトキワの森に向かう。」

少し歯切れの悪い返事が帰ってきたが、愛想がないのはいつものことなので特に気にしない。。

「じゃあ、目的地は同じだね。どうせなら、一緒に行く?」

「オレに構うな。気にせず先に行けばいい。」

「そう・・・。それじゃ、先に行くね。きらら、行くよ!」

『グリーン!』

駆け出す私についてくるきらら。

森の中で一晩、なんて事になるのは嫌なのでさっさと行こう。

でも、グリーンはこんな時間まで外でなにしてたのかなあ・・・

—グリーン視点—

行ったか。

全く、あいつに負けたから西の森に籠もってた。なんて言えるかよ。それに、オレを負かした奴と一緒に行くなんて、どんな罰ゲームだ。

それはともかく、オレもさっさと回復してもらおう。

そう思ってポケモンセンターに入ったんだが、また知り合い、とい



うか、おじいちゃんに会うとは思わなかったぜ。

「ん？おじいちゃん？なんでこんな所に？」

「おお、グリーンか！いや、研究所から逃げ出したポケモンを追っていたらこの町まで来てしまったんじゃよ。」

そう言つて、はっはっはと笑うおじいちゃん。年を考えてほしいもんだ。

「ところでグリーン。凶鑑のほうは順調かね？」

「ああ。この辺りのポケモンのデータはあらかじめ記録した。この後、トキワの森に向おうと思う。」

「そうか。ん、トキワの森と言えば、今あそこにガルーラがいるらしいんじゃが・・・」

「ガルーラか。ついでだ。捕獲していこう。」

「うむ、頼んだぞ。」

話している間に回復してもらったポケモンを受け取る。

あまりあいつに遅れをとりたくはないが、準備はしっかりしないと。次はフレンドドリイシヨップか・・・

「ああ、そうじゃ。」

「まだ何かあるのか？」

「実は、もう一人ポケモン凶鑑を託した少年がいるんじゃが・・・」

「少年？マシロじゃないのか？」

「うむ、あの子には断られてしまったの・・・。それで、その少年のことなんじゃが・・・」

「別に、オレには関係ないな。二人で仲良くデータ集めなんて、効率が悪い。別々で集めたほうがいいだろう。」

「うむ、まあ、そうなんじゃが・・・。何かあったときは協力してやってくれんかの？」

「気にはとめておく。話はそれだけか？」

「そうじゃの。あとは、体に気をつけるんじゃよ。」

「フツ。おじいちゃんもな。」

さて、ポケモンは回復した。後は道具を買い足して、トキワの森に急ぐか。

待ってるよ、ガルーラ。

ーマシロ視点ー

トキワの森を抜けた私達。

森では特に変わったことはなく、きららが野生のポケモンとトレーナーをなぎはらって行くだけの散歩になった。

その過程できららがスピードスターを使えるようになったけど、技ってそんな簡単に使えるようになるものかな？きららが特別なかもしれないけど、よく分からない。

そんなこんなでも、森を抜けた時には夕暮れ時。

この時間から博物館に行っても、すぐに閉館時間になりそう。

「仕方ない。今日はもう休もつか。」

『つくかくれくた〜よ〜』

「ふふっ。きららもお疲れさま、ありがとね。」

『ぼく、もうもどる〜』

そのままボールに引っ込むきらら。普段からボールの外にいる子がボールに戻るってことは、よっぽど疲れたんだね。ありがと、きらら。

それじゃ、早いところポケモンセンターに向かいますか。

次の日。

一晩休んだ私達は、元気に博物館を訪れていた。

「さて、片っ端から漁っていきますかね。きららには退屈かもしれないけど、今日は我慢してね？」

『う〜、分かった』

ボールの中から返事をするきらら。一応、博物館でポケモンを出したままなのは良くないと思い、ボールにしまってる。

とりあえず、端から順番に攻めていこうかな。

特にめばしい情報はなかった。

博士の所で手がかりがなかったから、過去の文献にはあまり期待はしてなかったけど……。

閉館時間なんてとっくに過ぎてるし、博士の名前を使って特別に許可を貰ったけど、後ろに警備員の人が張り付いてるしで、色々と申し訳ない。

「ありがとうございます。助かりました。」

「いえ、これも仕事なので。」

帰り際、警備員さんに声をかけて博物館を後にする。

辺りは日が沈んだお陰で真っ暗。

この時間まで粘っても成果なしは辛いねえ……。

と、そんなことを考えていた時。

ドカアン!!

と、向かっている方向から凄い爆発音が聞こえてきた。

きららをボールから出し、音の方に駆け出す。

「きらら、なにかあったみたい。手を貸してくれる?」

『りょーかい!』

「ありがとう、きらら。」

さっさきの爆発音の場所はすぐに見つかった。

ポケモンセンターが黒こげになっていたからだ。

そして、その傍らには二人組の黒ずくめの男と、その足元に一匹のゴローン。

さっさきのはゴローンのだいはくはつ、かな?

「これで、オツキミ山に向かうトレーナーも足止めを食うだろう。」

「これで、任務完了だな。」

「長居は無用だ。さっさと撤収するぞ。」

「こいつはどうする?」

「いらん。どうせ奪ったポケモンだ。放っておけ。」

そう言っただけは足元のゴローンを蹴り飛ばす。

それを見た私は、頭にピキって音が鳴った気がした。

「ねえ？なんでそんなことするの？」

「ああ？任務だからだよ。分かったらさっさと消えろ。」  
「・・・」

二人組の片方が答える。もう片方の男は何もしゃべらない。

なら、口が軽そうな方にいろいろ喋ってもらおうかな。

「その、ゴローンと蹴り飛ばすのも任務？」

「んなわけねえだろ。邪魔だから蹴り飛ばしただけだ。」

「行くぞ、任務は終わった。引き上げるぞ。」

寡黙そうな男が話を切り上げ、そのまま踵を返して立ち去ろうとする。  
る。

でも、そのまま帰すわけにはいかないよね？

「きらら、あの二人を止めて。」

『まかせて。』

そのままサイコキネシスで二人の動きを止める。

「な、体が!？」

「これは、ねんりきか・・・？」

「少し、おとなしくしておいてくれる？」

驚いている二人は放ってゴローンに駆け寄る。

「大丈夫？ごめんね、人の勝手な都合に巻き込んで。」

そう言ってゴローンに手をかざす。

すると、だいたいばくはつの反動で動けないほどのケガだったゴローンのキズがみるみる消えていく。ケガが治った頃には元気に動けるようになった。

「君、一人でトレーナーの所に帰れる？」

ゴローンは私の言うことを聞いてくれたのか、そのままこの場所から離れて行ってくれた。

よかった。このまま近くにいたら巻き込んだじょうかもしれないからね。

それじゃ、と私は拘束している二人組に向き合う。

「あなたたちには聞きたいことがあるんだけど？」

「ガキが、こんなことして、ただで済むと思ってるのか？」  
「・・・」

もう一人の方はだんまりなんで、私は口の軽そうな方をターゲットにする。

「ただで済むかって？あなたたちの方がよっぽとただで済まないでしょ。ポケモンセンター爆破してるし。」

ポケモンセンターを爆破することに比べたら人間二人を拘束擦るぐらい何てことないでしょ。そんなことよりも、だ。

「それより、さつき言ってた、人のポケモンってどういうこと？」  
「そんなの簡単さ。その辺のトレーナーから奪ったんだよ。」

その言葉に、あの日のブルーの姿が重なる。

あのとときの私見たいに、こいつらは無理やりトレーナーからポケモンを引き離したのか。

人のポケモンを奪って、ポケモンセンターを爆破して、用が済んだら蹴り飛ばす？

そんなの、許せるわけないよね？

「きらら、どう思う？」

『こいつら、わるいやつー！』

「そうだね。じゃあ、どうしようか？」

『わるいやつ、やつつけるー！』

「うん。手伝ってくれるかな？」

『とーぜん！』

「ああ？一人で何を喋ってやがる？」

きららの声は私にしか聞こえないから、一人で納得している用に見える私に怪訝な目を向ける。

「決めたよ、ロケット団。あなたたち、全部、叩き潰す。」

『やるよー！』

「それじゃ、あなた達には色々と喋って・・・」

と、言い終わる前に私達に向かって一筋の光が飛んでくる。

「くっっ！」

それを避けた瞬間、きららの拘束が緩みロケット団が逃げ出した。

「ちっ、ようやく抜け出せたぜ。」

「今のは……、ナツメ様。助かりました。」

「戻りが遅いから様子を見に来たら、子供一人に何をてこずってるんだい？」

長い髪をした女の人が、一人増えた。しかも浮いてる。後ろのフリーデインのねんりきのおかげかな？

向こうの味方ってことは、ロケット団？

それに、今の技。

「今の、きららの技に干渉してた所を見ると、サイケこうせんかな？」

「おや、ただの子供かと思えば。意外と賢そうだね？」

「まあ、知識だけはあるからね。」

6年分、ずっとため続けてきた訳だし。

「それより、今の口ぶりからあなたがその二人の上司？」

「そうね、ロケット団三幹部の一人だから、上司ってことになるのかしら？」

「なら、話が早いかな。あなたたちのボスは誰？どこにいるの？」

「頭ごなしに話してんじやねえよ！いけ、ラッタ！でんこうせっか！」

「よせっ！チッ、ゴルバット！つばきでうっ！」

女の人と話してる途中、割り込んできた口の軽い方。遅れてもう片方もゴルバットを繰り出す。ラッタの速攻と後ろからゴルバットのつばきでうつのコンビネーションで仕掛けてくる。

「きらら、スピードスター。」

『うん！』

目前に迫るラッタに至近距離からスピードスターを打ち込む。ラッタはそのまま後ろのゴルバットを巻き込み、口の軽い方に吹き飛んでいく。

「ぐへっ。」

「今はこの人と話してるんだから、邪魔しないで。」

「強力なスピードスターだ。よく鍛えられている。」

グリーンもそうだけど、トレーナーってみんな上から目線なの？

「それはどうも。それで、ナツメ？って言ってたっけ？さっきの話の

続きだけど、ボスって誰？どこにいるの？」

「フツ。そう簡単に教えると思ったか？」

「一応聞いただけだよ。駄目でも無理やり、口を開かせるからね！いくよ、きららー！」

『わるいやつ、やつつける！』

きららがスピードスターを放つ。

しかし、それらはナツメに届く前に全てねんりきのような技で打ち落とされた。これも多分、後ろのポケモンの技かな？

「付け焼き刃のスピードスターじゃ、届かないか・・・」

「勢いがあるのはいいが、下の二人を放っておいていいのか？」

「別にいいよ。あの二人が逃げても、あなたを捕まえればいいだけだしね。」

「そういうことなら、お言葉に甘えて撤収させましょうか。ケーシィ！」

そうやってケーシィを二人の元へ繰り出す。

「レポートでさつさと引き上げな！」

「感謝します、ナツメ様。」

もう一人の寡黙そうな男は、ラッタの下敷きになった男を引きずりながらケーシィと共に消えた。

「3対1をわざわざ1対1にしたのは余裕ってこと？」

「そんなことはない。単に足手まといは必要ないだけさ。それに、あいつらの仕事はもう終わった。」

そうやって地面に降りてくるナツメ。

そして、ナツメの前に出るフリーデイン。

「ここからは、私の仕事だ。邪魔者は消す」

## 7話

降りてきたナツメと対峙する。

さつきは2人を逃しても良いって強がったけど、実際は捕まえておきたかったんだよねえ……。情報は多い方がいいし。

でも、この人相手に隙は見せられそうにないしなあ……。

「フリーデイン！サイケこうせん！」

「きらら、弾いて！」

フリーデインから放たれたサイケこうせんをきららのサイコキネシスで軌道を反らし、弾く。

『このひと、まえにたたかったひとより、つよいよ？』

「えー、そうなの？グリーンより強いのかあ……」

「一人で何を言っている？来ないのならどんどんいくぞ？」

フリーデインからサイケこうせんが連続で放たれる。

今のところ、きららが全部弾いてるけど、サイコキネシスは互いに干渉して効果は薄そうだし、ここは量で押しきろう。

「きらら、たくさんのスピードスター、いける？」

『おっけー！』

サイケこうせんを全て叩き落とした後、きららの掛け声と共に、目の前を埋め尽くす程の星がナツメとフリーデインに押し寄せる。

それらはナツメを中心に渦を巻き、ポケモンと共に身動きがとれないように周りを埋め尽くした。

「おお、さすがきらら。」

『えっへん！』

「さて、ナツメって人間こえる？聞こえてたら降参するか、星に埋め尽くされるか選んでほしいんだけど？」

「これで勝ったつもりか？なら、試してみるといい。」

うーん、ただの強がりかもしれないけど、遠慮する必要はないかな。

「きらら、やっちゃって！」

『おっけー！……ん？』



「どうしたの?」

『なんか・・・弾かれてる?』

ナツメが何かやってるらしいけど、星に埋め尽くされて何をしているのか全くわからない。

でも、スピードスターを消すと、またフリーデンが出てくるし・・・!?!」

その時、どこからともなくサイケこうせんが放たれる。威力はさっきのフリーデン程でもないけど、確実に私を狙ったもの。

一発目は横っ飛びで回避したけど、流石に2発目は・・・無理!

「きららー」

『うんー』

危機一髪な所できららに助けてもらったが、その間にナツメを取り囲む星は、フリーデンのサイコキネシスに叩き落とされたのか3分の1ぐらいまで減っていた。

「なるほどね、何をしたのかと思ったら。バリヤードのひかりのかべかな?」

星の間から見えるシルエットが2つから3つに増えていた。

増えた影はバリヤード。

壁を張るのが得意なポケモン。

「ご明察。本当なら、察しのいい子供は嫌いじゃないんだけどね、邪魔者となると話しは別さ。フリーデン、残りも叩き落とせ。」

残っていたスピードスターもフリーデンのサイコキネシスで叩き落とされる。

周囲には姿の見えないポケモンに、正面にはナツメとフリーデンとバリヤード。

あまり、よくない状況・・・かな。

スピードスターは壁で防がれ、押しきろうにも周りのポケモンに邪魔をされる、かあ・・・

「仕方ない。きらら、エネルギーは貯まってる?」

『きようはほしがきれいだから、いっぱいあるよー!』

「危ない技その1、やるよ。出力は30%ぐらい!」

『おっけー！かげんはまかせろー！』

「任せて大丈夫だったことはないんだけど、ね。」

私達が話している間、ナツメはじっと待つてくれている。

「それで、待つてるのは余裕ってやつかな？」

「最後まで、花を持たせてやろうという、大人の心遣いさ。最後の作戦会議は終わったか？」

「うん。それじゃ、子供の心遣いを一つ。」

「なんだ？」

「その壁、できるだけ前に重ねておいてね。じゃないと、どうなるかわかんないよ？」

「ほぎけー！全方位、一斉掃射！」

フリーデイン、バリアード、周囲からサイケこうせんが押し寄せてくる。

でも、その程度の威力じゃ、この技はどうしようもないよ！

「きらら、すごいはいこうせん！」

その瞬間、きららから一筋の極光が放たれる。

その光は周囲のサイケこうせんを弾き飛ばし、目の前のサイケこうせんをも飲み込み、地面を抉りながらナツメに迫っていく。

「なんだと．．!?ちっ、バリアード、フリーデイン、ひかりのかべだ！」  
当たる直前に2体ばかりで壁を張ったみたいだけど、その程度でこの技は防げないよ？

「ぐおおおおおお．．．」

歯を食い縛り、ひかりのかべの後ろで耐えているものの、膠着は一瞬。かべは砕け散り、極光はナツメを飲み込む。

「ちよつときらら、やり過ぎー！上！残りのエネルギー上に飛ばして！流石に死んじやうって！」

『はい。』

光が空に昇っていく。夜なのに明るいなあ．．．いや、それよりもだよ。

予定では壁を砕いて相手を吹き飛ばすぐらいだと思つてたんだけど、そのまま光に飲み込まれちゃった．．．。

「死んでないよね？」

「なん・・・だ。それ・・・は？」

砂ぼこりが晴れ、姿が見える。服はぼろぼろだけど、一応生きてるみたい。よかった。

さすがにポケモンは気絶してるみたい。

体を張ってナツメを守ったのかな？

「はかいこうせんみたいな技？だと思う。とりあえず、はかいこうせんではない、かな？」

「げほつ。ふざけた・・・威力だ・・・。」

「だから、普段は使わないんだよね。」

「くそ・・・。」

倒れたまま、フーデインとバリヤードをボールに戻す。

「さて、大人しくなったところで、ボスについて、話してもらおうかな？」

「話すと・・・思っている・・・のか？」

「話さなくても、そのまま警察に突きだすだけだよ。」

「ちつ・・・。」

舌打ちをすると体を起こし、その場に座り込む。

「何を聞かれようとも、私から教えることは何もない。」

「はあ・・・。それじゃ、警察に引き渡すから、大人しくしておいてね。」

しゃべらないとは思ってたけど、実際にそう言われるとため息が出るねえ・・・。

「それはそれとして、あなたが潜ませてるポケモン、集めてくれる？」

「フツ、断る。」

「そう言うと思った。仕方ないから、こっちで探すよ。きらら、とりあえずこの人拘束しておいて。」

『はい。』

きららに拘束されたナツメがふわふわと浮き上がる。とりあえず、警察に連れていきますか。

「いいのか？そのポケモンが私を拘束していると、トレーナーが無防備になるぞ？」

ナツメがニヤリと笑った。

その瞬間、私の体を衝撃が襲った。

「きゃー！」

そのまま私は吹き飛ばされる。

いたた。思ってたより痛くて少し泣きそう。

いや、今はそれよりも。

きららがあわててこっちに飛んできたから、ナツメが！

『ましろ、だいじょうぶ!?!』

「まさか、子供一人にここまでやられるとはな……」

傍らにユンゲラーを携え、起き上がるナツメ。私もそのまま起き上がる。

「いたたあ……。あなたこそ、大人げないんじゃない？直接私を狙うなんて。ポケモンバトルに勝てないって言ってるようなものでしょ？」

「ねえ？ヤマブキシテイ、ジムリーダー。ナツメ？」

そう言うと、明らかに顔色が変わる。

「人違いじゃないか？」

「そうかな？私、元々ヤマブキシテイ出身でね。住んでいた町のジムは多少知ってるね。長い髪のナツメって名前の人だって。」

「偶然だろうか？」

「それと、ここ数年はいろんな事を調べててね？ジムリーダーも少しかじってるんだ。そしたらさ、ヤマブキシテイのジムリーダーはエスパークタイプのエキスパートだって？」

「……。」

「ほら、口数がへってるよ？」

ニヤリと笑う私。

「ちっ。あんたのせいで勘のいい子供は嫌いになりそうだ。戻りな、ユンゲラー。」

ユンゲラーがさらに2体、ナツメの側に現れる。

「文句は名前をばらしたしたつぱに言うことだね。」

「ああ。そうするよ。今回は私の負けだ。だが、次会ったときはお前を消す。覚えておけ。」

『ひとりのこっつてるよ?』

「覚えておくけど、一人に忘れてるよ?」

「まったく。勘のいい子供は嫌いだよ。」

そう言うと、ユンゲラーを手元に戻す。そのままナツメはテレポーターでこの場から消えていった。

最後の1体はきららに教えてもらったただけなんだよね。

「きらら、ケガはない?」

『ぼくはだいじょうぶだけど、ましろがけがしてる・・・』

「これぐらいなら大丈夫。それよりも・・・」

周囲の惨状を見渡す。

きららの技で抉れた地面。

サイケこうせんでできた穴。

だいぼくはつで吹き飛んだポケモンセンター。

痛む左腕を押さえて思わずつぶやく。

「これは・・・。逃げた方がいい・・・かな・・・?」

ーナツメ視点ー

(なんなんだ、あの子供は!?)

テレポーターでヤマブキシティに戻った私は、シルフカンパニーのビルを歩きながら内心で愚痴る。

帰りの遅い手下の様子を見に行けば、白い髪の子供に絡まれ、バカみたいな火力の攻撃にあい、まともな戦いでは勝負にならない。

かと思えば、正体までばれたあげく、最後は数で押しきり逃げ帰ってきた。

ジムリーダーとしても、ロケット団幹部としても、とても許されることではない。

しかし、だからといって報告を怠っていい理由にはならない。

「サカキ様、ご報告があります。」

「入れ。」

許可をもらい、部屋に入る。サカキ様の前で片膝を突く。そして、さっきの出来事を話す。

「白髪の子供か・・・。」

「はい、いかがでしたでしょうか・・・?」

「今は放っておけ。下手に刺激して被害を増やされても困る。」

「良いのですか?」

「必要ない、今は手を出すな。他のものにもそう伝えろ。いざとなったら・・・、私が消す。」

「はっ。」

返事をしてそのまま部屋から出る。

正直、手を出すなど言われてホッとした。

あれを相手に勝てる気が全くしない。

せめて、キョウとマチスの3人がかりなら、なんとかなるかもしれないが・・・。

それに、その1とか、30%とか、あのバカげた威力の技が他にもあつて、なおかつ抑えてあの威力。あの子供がああ技の向きを空に変えなかったら、死んでいたかもしれん。

そういえば、オツキミ山にはキョウがいたな。

無事に戻れるといいが・・・。

## 8話

ニビシテイでの惨状から逃げ出した私達。

ニビシテイの外れでキャンプを広げて一晩を過ごした。

さすがにあのままオツキミ山の麓のポケモンセンターまで行くのはしんどい。

撃たれた左腕も痛いし。

「さてと、とりあえずオツキミ山のポケモンセンターまで行こうか。博士にお願いしたいこともあるし。」

『ほんとにだいじょうぶ？』

「大丈夫、大丈夫。問題なし！きららは疲れてない？」

『さくやは、ほしがきれいにみえてたから、げんきいっぱいになったよ！』

「そっか、よかった。」

きららを撫でながら考える。

昨夜の戦闘で思ったこと。

それは、手持ちがきららだけだと、ルール無用の戦いになると圧倒的に不利なこと。

戦闘面では、きららが相手を圧倒してた。

でも、きららがいくら強くても、数で押しきられるんだよね。

実際、昨夜は数で押し負けたし……。

だから、手持ちを増やそうと思う。

旅に出たときはこんなにハードな事になるとは思ってたかったからなあ……。

こんなことなら、最初からあの子を連れてくればよかった。戦うことが好きだし。

まあ、忘れてたんだけどね。

そんなこんなでポケモンセンター。

早速パソコンをかりて、オーキド博士に連絡をとる。

「おお、マシロくんか。何かあったのかい？」

「いえ、実は……」

かくかくしかじか。

「なるほどのう、ロケット団か……。なにやら、ポケモンを使って悪どい商売や、生体実験をやっておるらしいが……。昨夜の閃光もロケット団の仕業じゃったか……。」

「ごめんなさい、それはロケット団じゃなくて、きららの仕業です。とりあえず、旅のついでに、ロケット団を見かけたら潰していこうと思っただけです。」

「お主には危ないことに首を突っ込まずにブルーのことだけを考えるとほしいんじゃないか……。」

「いやー、ポケモンを道具みたいに使ってるのを見て我慢できなくなっちゃって……。」

「気持ち分かるがの……。」

あははー、と笑う私に呆れる博士。

「ちなみに、博物館でも特に進展はないです。」

「そうか。次の目的地はタマムシシティか?」

「はい。それで1つお願いがあります……。」

「なんじゃ?」

「ミスタ、送ってくださいませんか?」

「あやつは、まだ帰ってきとらんぞ?」

「ええ……。そろそろ帰ってくる頃だと思っただけ……。」

「お、噂をすれば雨が……。少し待っておれ。あのじゃじゃ馬に話を付けてくる。」

30分後

「お主、というか、きららがいないと知って暴れ散らしたわい……。とりあえず、こやつは送っておくぞ。」

「あははー、ありがとうございます。」

「それじゃあの。ミスタが散らかした片付けをせにやあならんな。な。」

通信が切れ、手元に1つのボールが送られてくる。この子はきららに出会ってすぐぐらいかな?」



きららの使える技を知りたくて、海に向かってヤバい技を撃ち込んだら、そこに住むポケモン達を怒らせて、大戦争みたいになったんだよね。

その時はきららが全部叩きのめしちゃったんだけど……。

この子はそのなかにいた1体で、そのあとからも、定期的にマサラタウンにやって来てはきららに勝負を挑んでくる、すごい根性の子。まあ、きららが負けるわけないんだけどね。

で、一回研究所にいるときに突撃されて、片付けが大変になったからその時にゲットしたんだけど。

多分、この子は戦いたいのか、強くなりたいかのどっちかだと思うんだよね。

だから、1度捕まえて、研究所では暴れないようにしてお話した後、ボールからだして放し飼いみたいな状態。

そうしたら、どこかで武者修行を積んでから帰ってきて、きららに挑むっていうサイクルが出来上がった。

ちなみに、帰ってきたときは挑戦状のかわりなのか、あまごいをしてながらやってくる。

とりあえず、センターの外に出よう。

ミスタが暴れるかもしれないし。

「でておいで、ミスタ。」

ボールから出てくるのは、星形のポケモン。スターミー。

研究所に行ったら、きららがいないと知ったからか大分怒りの様子。

「ごめんごめん、うっかりミスタのこと忘れてて。でも、ここなら、きららと戦えるよ?」

ピクツ、と動きが止まる。

すると、だんだんと雲行きが怪しくなり、雨が降ってきた。

「じゃあ、きらら。お願いー!」

『ええ、またばとるく……。』

「帰って来たミスタ、きららと戦わないと落ち着いてくれないからさ、

お願い！」

手を合わせてお願いすると、きららもやるきになってくれたみたい。よかった。

そして私は少し離れたところで二人を見守る。

これはミスタときららの戦いだから、指示を出したりはしない。横槍みたいで嫌だし。

バトルが始まると、先に動くのはいつだってミスタ。

ハイドロポンプを撃つ。おお、また強くなってるねえ。

しかし、小柄なきららはスイスイとハイドロポンプを躲して当たらない。

そして、きららはお返しとばかりにスピードスターを撃つ。

これもミスタは高速で回転して弾き飛ばす。

そしてそのまま電気タイプの技を放つ。

ミスタが使うのを始めて見るけど、10まんボルトかな？

(そういや、ミスタってどこで新しい技覚えてるんだろう？いつの間にかヒトデマンから進化してたし。)

そんなことを考えてるあいだに、きららはサイコネシスで浮かせたその辺の岩で10まんボルトを防ぐ。

そしてそのまま岩をミスタに投げつける。

電気技を使い慣れてないのかな？技の後にすぐ回避行動に入れなかったみたいで、岩が直撃した。

岩が帯電していたからか、ミスタにかなりダメージが入ったみたい。結構苦しそう。

すると、ダメージをおったミスタはその場で光を集め出した。

(ん？この技って？)

それを見たきららも、多分同じ技を撃とうとしてる。

「いや、なんでミスタが使えるの？というか、そののぶつかり合いはヤバイんじゃない」

そう言った瞬間、昨夜見たものよりも全然規模が小さいものの、ミスタから極光が放たれる。

(やっぱり、すごいはいこうせんじゃん・・・)

そして、きららからも放たれる極光。こちらも昨夜程の規模じゃないものの、ミスタの極光を軽く飲みこみ、ミスタに襲いかかる。

「――」

機械音的な悲鳴(?)が聞こえ、光の通りすぎた後には倒れてるミスタの姿。その姿を確認して、ミスタに駆け寄る。

「ミスタ、生きてる?」

「――」

「まだ元気そうだね。とりあえず回復しておこうか。」

多分、悔しがってるのかな? 苦笑いしながらミスタを起こして傷を治す。

ちなみに、この他人の怪我を治せる能力もきららに会ったあとから使えるようになった。なぜかはわからないけど。

「――」

『えー、またこんどねー。』

もう一回!とか言ってるのかな?

きららが嫌そうな顔をしてる。

6年ぐらいつつと挑まれてるときすがにうんざりもするよね。

でも、きららには根気よく相手してもらわないと、周囲の被害が大変なことになるし。

「ところでミスタ。私達、ちよつと厄介な集団に会ってね? 手を貸してほしいんだけど・・・?」

「――」

多分、修行にでるから無理!って言ってる・・・のかな・・・?

「一緒に来てくれたら、いろんなポケモンと戦えるよ? あときららも。」

『ぼくをつけないでよー。』

「――」

よかろう! って感じかな? よかった。

「よろしくね、ミスタ!」

『ほどほどにしてよー?』

「――」

ミスタが仲間になってオツキミ山に向かうと、早速ロケット団が入り口を見張ってる。

3人かな？ミスタが増えたからなんとかなるでしょ。

そう思いロケット団の方に歩き出す。

「さて、ここは通行禁止だ。」

「いや、こいつは!？」

「引くぞー！報告にあったやつだ！手を出すなよ！」

「え?」

何故か逃げていくロケット団。

報告にあつたつてことは、昨日のあれのことかな・・・。

情報が回るの早いなあ。

「とりあえず、追いかけてよっか。ミスタ、お願いね。」

私は、ミスタを前に出して洞窟に入った。

そして迷った。

いや、これは私が方向音痴とかそういう感じじゃなくて・・・。

ミスタが好戦的すぎたんだよね。

出会ったポケモン全てに戦いを挑んであつちについていたり、こつちにいたりでいつの間にか現在地がわからなくなった。

でも、ミスタはたくさん戦えたお陰かご機嫌の様子。

そりゃ、逐一回復して好きなだけ戦えたらご機嫌にもなるよね・・・。

私は疲れてくれたくたなんだけど・・・。きららも疲れてボールに戻っちゃったし。

そんなこんなで洞窟をさ迷う私達。

意気揚々と進むミスタの後ろをぐつたりとしながら追いかける。

そんな時。

ドゴオン!!

ガラガラガラ!!

どこかで洞窟が崩れたような音が聞こえる。

(ええ・・・?この洞窟大丈夫?途中で崩落しないよね?)

と思っていると、目の前の通路を1人の少年が駆け抜けていく。

人を背負って走っていったけど、今の崩落に巻き込まれたのかな?

「つていうか、今のは、レッド・・・?」

とりあえず、レッドを追いかければ洞窟を抜けられるかも!

レッドが駆け抜けてきた通路にでて、追いかけてしようとした時。

ドガアン!!

と、私の後ろから岩を砕く音。

「ちっ、逃げたか。おい、3人は奴を追え。他は・・・ん?貴様は・・・」

砂埃が晴れると、そこにはたくさんのロケット団。

「報告にあった、白髪のがキカ・・・」

「またロケット団・・・。そういうえば、オツキミ山で何かしてるって言うてたっけ?」

「手を出すなどの命令だが、自分の目で確かめてみるか・・・。いけっ、

サイドン!」

姿を見るや否や、サイドンを突っ込ませてきた。相変わらず、いきなりだね。でも。

「ミスタにはおあつらえ向きだね!ハイドロポンプ!」

向かってくるサイドンにハイドロポンプを浴びせる。きららはお休み中だから、できればミスタだけで倒したいかな。

「つのドリルで巻き返せ!」

サイドンはハイドロポンプにつのドリルをぶつけて、そのまま打ち返してきた。

「れいとうビーム。」

打ち返してきた波はれいとうビームで全て凍らせる。一緒にサイドンの体も氷づけにする。

「ミスタ、このまま押しきるよ!ハイドロポンプ!」

「ぐおお・・・。」

氷づけになったサイドンをハイドロポンプで押し流す。余波で周りのロケット団とかが流されてるけど、まあ死なないでしょ。

(さてと)

サイドンは隅っこで目を回してるし、さっきのロケット団は……つと。

「いたいた、1人だけマフラーしてるから見つけやすく助かるよ。」

「手を出すな、という指示はこういうことか……」

え、なに？もしかして、私避けられてる？

「とりあえず、次は逃げられないようにしないとね。ミスタ、れいとうビーム。」

ロケット団の手足を氷づけにする。凍傷になるかもしれないけど、まあ自業自得ってことで。

「あなたたちは、ここで何をしてたの？」

「つきのいしを探してたのさ。あの石は進化の研究に役立つからな。」

「ふーん、つきのいしねえ。ま、残念だけど、あなたはそのまま警察に突きだすから。」

あれ、なんかデジャヴ？

「それは、どうかかな？ゴルバット、ちようおんぱ！」

あ、頭ががが。私は両手で耳を押さえる。

その隙に、洞窟の影からゴルバットが飛び出し、ロケット団をつかんで距離を取る。

(くそっ。やられたー！)

「サイドンーじしん、いわおとしー！」

「ミスター！」

ちようおんぱとじしんで脆くなった岩盤をいわおとしで崩していく。

巻き込まれそうになったミスタを急いでボールに戻し、ふらふらしながら巻き込まれない位置まで下がる。

がらがらがら

どっしやーん

目の前の通路は瓦礫に塞がれてしまった。

「あーあ、また逃げられたかあ……。」

ため息をつきながら呟く。

きららなら、瓦礫を吹き飛ばせるかもしれないけど、最悪洞窟が崩れるかもしれないし……。

(仕方ない……かな。)

落ち込む私に反して、ボールの中のミスタはご機嫌なご様子。

「ミスタ、おつかれさま。ちゃんと指示を聞いてくれてありがとうね?」

ミスタ、他人に指示されるのは好きじゃないと思ってたけど。

多少は認められてるってことかな?

「さつきみたいな人と、これから先たくさん戦うことになると思うから。これからもよろしくね?」

ボールが震える。きつと、まかせろ!とか言ってるんだろなあ。心強い。

「でも、レッドはこんな所で、人を背負って何してたんだろ……?」

まさか、さつきのロケット団に追われてたりはしない……よね

ロケット団視点

「まさか、最初に逃げたガキと同じことを俺がする羽目になるとはな……。」

「キョウ様。ご無事ですか?」

部下が、こおりなおしで手足の氷を溶かす。

小娘一人にいいようにやられるとは、3幹部の名折れ。

だが、手を出すなどの指示が出ている以上、俺が何をすることはない……が。

「やられっぱなしというのは、嫌なものだな。」

「なにか?」

「なんでもない。」

俺のつぶやきは、幸運にも部下には聞こえなかったようだ。

「改めて伝令だ。あの小娘には手を出すな。何かあれば、ボスが対応する。」

「了解です!」

「さて、ここは引き上げるぞ。小娘が追いかけてきたらたまらん。」  
この借りはいつか返すぞ。



## 9話

オツキミ山の戦いから5日。

なんだかんだでロケット団との連戦だったので、ハナダシティで長めに休息を取る。

一回博士に連絡をとろうかな？またロケット団も出てきたし。

あいつら、そのうち研究所とか襲撃しそうなんだよね。

「博士、そっちの様子はどうか？何か変わったことない？」

「おお、マシロくんか。変わったことと言えば、少し前に泥棒に入られての。もうすぐ泥棒の写真が送られてくると思うんじゃない？」

「博士、ボケてませんか？レッドにポケモンを逃がされてまだ少ししかたっていないのに。」

「いやはや、面目ない・・・。」

「あ、それと博士。昨日もロケット団に会ったけど、博士も気を付けてよ？あいつら、何してくるかわかんないから。そのうち研究を手伝えとか、資料を寄越せとか言ってきましたよ？」

「大丈夫じゃ。こう見えて、ワシは過去のリーグ優勝者じゃからの。」

「知ってる。と言うか、大丈夫じゃないから盗まれてるんでしょ？」

そう言うのと、ぐぬぬと唸って黙りこんでしまった。

事実だから仕方ないじゃん。

「それで、何を盗られたの？」

「ゼニガメじゃ。幸いと言うべきか、被害は一匹だけじゃ。」

「ヒトカゲとフシギダネだけ旅に出た報いかな？」

「そう言わんとってくれんかの？お、写真が来たぞ・・・。」

そのまま博士は黙りこんでしまう。

「また黙りこんで、どうしたんですか？」

「マシロくん、落ち着いて見てもらいたいのじゃが・・・。」

そう言うって1つの写真を転送してくる。

その写真を受け取った私は、思わずパソコンに掴みかかった。

「ちよっと！はかせ！この写真の子！ブルーじゃないですか！」

「お主もやはりそう思うかの？あと、とりあえず落ち着いてほしいんじゃないが……。」

「こんなことなら旅に出るんじゃないやなかったかも！とんだ入れ違いになっちやった！」

「おお。荒れとるのう……。」

とりあえず、一旦落ち着こう。

何故かは分からないけど、ブルーはゼニガメを盗んで行った、と。

「それで、ブルーは何処に行ったか分かります？」

「それが、分からのだよ。」

「なるほど。(使えないね。)」

「聞こえとるぞ。とにかくじゃ、今ハナダにおるんじゃないか？」

「そうです。」

「なら、一度離れの岬に住んどるマサキ、という少年に会っておくとい。彼はタمامシ大学の人間にも顔が利く。きつと力になってくれるじゃろう。」

「わかりました。とりあえず、そこに向かってみますね。」

まあ、ブルーが生きててどこかにいるなら、もうタمامシ大学にく理由はなないんだけどね。

一応、顔だけ出しに行こうかな。

その後、離れの岬に向かう私達。

トレーナーがたくさんいたり、森を抜ける途中野生のポケモンが出てきたりと、なかなかいそがしいね。

まあ、ミスタが張り切って全部倒したんだけど。

きつと、全部自分の獲物だと思ってるんだろうなあ。

おかげできららは隣でふわふわしてるだけである。

「ようやく……かな？」

眩いた私の前に1つの小屋が見えてきた。

なんでこんなところに住んでるんだろう？すごく不便だと思うんだけどなあ……。」

「こんにちはー。」

『こんにちはー』

「はーい、どちらさんやー?」

ガチャ、とドアを開けて出てきたのは1人の男の人。

「ん?見たことないお人やけど、どちらさんですか?」

「えっと、私はマシロっています。オーキド博士の紹介で一応やって来ました。」

「一応って言い方が引つ掛かるんやが、まあええわ。とりあえず、上がっていきさかい。」

かくかくしかじか

「なるほどなあ。そのブルーって子を探すために、伝承やらなんやらを探すためにタمامシシテイに向かったと。で、途中でブルーって子が見つかってしもうた訳やな。」

「そんな感じなんで、タمامシ大学のパイプ役をお願いしようと思っただけど・・・」

「不要になったつちゅう訳やな。」

「そう言うことです。あ、ちなみにこの子です。」

スツつと、写真を差し出す。

ゼニガメを抱えた女の子が写った写真。

マサキは、それを手に取る。

「なんならこの子の事、研究仲間に聞いてみましょか?」

「え?いいの?」

「ええって、ええって。あ、わいはマサキつちゅうねん。よろしくな。」

そう言つて挨拶を交わす所で、通信の入った音がなった。

「ん?通信・・・?レッドのやつから・・・?おい、どないしたんや?」

そう言つてパソコンを操作するマサキ。

ん?レッド?レッドって、トキワで会ったあのレッドのこと?

「すまん、マシロはん。ちよつとまつてーな?ブルーって子のごとは後で聞かさかい。」

『ブルー?カメールを連れてた女の子のことか?』

「その話、詳しく!」

その言葉を聞いた瞬間、パソコンの前のマサキを押し退ける。

ふぎや、とかなんとか言ってるけどこっちはそれどころではない。降って湧いたような手がかり。逃す手はない。

『君は、マシロ？なんでマサキの所に？』

『そんなことはどうでもいいのよ！ブルーとはどこで会ったの!』

『あ、ああ。その子とはタمامシシティで会って・・・』

かくかくしかじか

『なるほど、少し前までタمامシで一緒だったと。』

『そのあとはわからない。ミュウの写真を売りに飛んでいったからな。』

写真の販売ねえ・・・？お金が必要なのかな？

『もういいかな？こっちもマサキに聞きたい事があつて。』

『あ、うん。』

『まったく、偉い目にあつたわ・・・』

マサキを押し退けていた手をどけると、疲れたようにパソコンの前に戻ってくる。

うん、ごめんなさい。

『それで、なんの用事や？』

『実は、イーブイってポケモンを探してて・・・。』

『イーブイ、か。どんな姿なんや？』

『それが、さっぱり。』

『そうか。姿さえわかれば、研究仲間に片っ端からあたるんやけどなあ・・・。』

ふむふむ、なるほど。ジムの挑戦の際に条件を出されたと。イーブイとは、また珍しいポケモンを指定されたねえ。

ブルーの情報のお礼ってことで、少しだけ手を貸してあげましょう！

『姿がわかればいいんだね？少しパソコンを借りるよ？』

『ええけど、なにするんや？』

『イーブイの画像データを持ってきます。それがあればなんとかなるんでしょ？・・・はい、この子がイーブイ。』

『こいつが・・・。』

『イーブイ……』

「マシロはん。よお、イーブイの画像データなんかもってはったなあ。」

「オーキド博士のお手伝いをしてたからね。ちよつとそのデータベースにアクセスして、ちよちよつと。」

「へえ。それで、データベースにアクセスできる権限を持つとると。」

「実際は、勝手に押し掛けて好き勝手やってただけなんだけど。それが意外と研究の役にたったんだって。まあ、よくわかんないけど。」

「はあ……。まあええ。姿がわかったならこつちのもんや。パソコン越しってのもあれやさかい、今からタママシに向かうで。マシロはんもくるやろ?」

「え? いいの?」

「かまへんって。画像データももらたし、お礼みたいなもんや。」

「画像データもお礼みたいなものなんだけど……。」

まあ、タママシまで連れてつてくれるみたいだから、お言葉に甘えよう。

鳥ポケモンに乗ってタママシシティまでひとつ飛び。

空を飛ぶって便利だねえ。ミスタも似たようなことできないかな? 後で聞いてみよう。

「久しぶりやな、レッド!」

「マサキもな。マシロも久しぶり、データサンキューな!」

「いいよいよ。ブルーの情報のお礼ってことで。でも、よく私の事覚えてたねえ。」

「白い髪は珍しいからな、すぐにわかったよ。」

「世間話もええけど、早めにイーブイ探さんと、他のトレーナーにとられるで?」

「おつと、そうだな。」

「それじゃ、私はブルーの事を聞き込みに行こうかな? ついでにイー

ブイの事も聞いてみるよ。」

「ありがとな、マシロ。」

「こつちも研究仲間にイーブイと一緒にブルーって子の事聞いてみるわ。」

「ありがと。それじゃ、また後でね。」

二人と別れ、タمامシシティで聞き込みを始める。

「なんか、よくわからないアイテムとか売ってたなあ。」

「幻のポケモンの写真とか売ってたわねえ。」

「プリンに掴まって飛んでったよ。」

とりあえず、色々売って次の町に行つたって感じ。やっぱり、お金が必要なのかな？

ちなみに、イーブイに関しては

「ちよくちよくこの辺りで見かけるわよ?」

とのことなので、イーブイは町中にいる模様。町中にいるポケモンを捕まえてこいって、変わったジムリーダーだねえ。

思つてたよりも早く情報が集まったので二人と合流する。二人とも、別れた場所でパソコンの前でいろんな人と話をしていた。

私が戻ってきたことに気づくと通信を切つた。

「お、早かったやん。人探しは終わったんか?」

「まあね。とりあえず、この町にはいなさそう、かな。」

「そうかー。こつちは進展なしやー。」

それなら、私が聞いた情報が役に立つかな?

「イーブイなら、町中でちらほら見かけてるらしいよ?だから、探すなら町中がいいかも。」

「ほんとか!?マシロ、サンキュー!町中にいるなら、こんなところでパソコンの前にいるより、聞き込みをしながら探す方が早そうだ。行くぞ、マサキー!」

「お、おう。マシロはんはどうするんや?」

「うーん、私は別行動かな?少し、気になることもあるし。」

「さよか。じゃあな。イーブイの件、ありがとさんやで。」  
そのまま走り去る二人。

と思ったら、レッドが戻ってきた。

「あと、ブルーを探すなら気を付けた方がいい。」

「どうして?」

「ロケット団がブルーを探してた。もしかしたら、今も探してるかもしれない。」

なるほどね、ロケット団がブルーを……。

とりあえず、潰そうか。

「ふむふむ。ちなみにアジトの場所とかボスの居場所とか知ってたりしない?」

「ゲームセンターの地下にあつたぞ? 通路のポスターの裏に隠しス  
イッチがあつて、それを押すと地下への隠し階段が出てくる。」

ん? 思ってたより有用な情報が出てきたね。

「ありがと。とりあえず行ってみるよ。」

「ああ。気を付けろよ……。え? 行ってみる?」

「レッド、何しとんのや。はよ、いくでー。」

「ほら、マサキが呼んでるよ?」

「あ、ああ……。じゃあな。」

煮え切らない態度でマサキの方に走っていくレッド。

思わず口が滑っちゃったね。危ない危ない。

さてと。

ロケット団がブルーを追いかけてるなんて言われて、黙ってなんか  
いられないよね。

## 10話

ゲームセンターにやって来た。

一応中を回ってみたけど、スロットがあるだけ。

特に変わったところはない、なんてことはなかった。

本棚の後ろに行き止まりの通路とか、意味がわからないんだけど？  
怪しすぎでしょ。

とりあえず、壁に注意しながら行き止まりの通路を歩く。

ポスターの裏にスイッチがあるんだっけ？

これかな？剥がした後がすごいんだけど、とりあえず、剥がしてみよう。

ポスターを剥がすと話に聞いていた通り、スイッチがあつた。ポチツとな。

ボタンを押すとウィーンと隠し扉が開き、地下への階段が出てくる。

なるほどね、ここがロケット団の研究施設か……。

とすると、ゲームセンターはロケット団の資金源なのかな？

まあ、今はどうでもいいか。とりあえず、降りてみよう。

「きさら、お願い。」

『りょーかいー！』

ゲームセンターに入るとき、ボールに戻したきさらをもう一度外に出しておく。

ロケット団のテリトリーだから、用心するに越したことはないでしよ。

階段を下りた先は、なにかの研究室みたいになってた。

大きなフラスコの中に見たことのないポケモン。半身が溶けてるような、よくわからない状態。

なんか、かわいそうだな……。

そのフラスコの隣に、髪の毛がない髭の生えたおじさんが1人。どうやら、他のロケット団は出払っているらしく、ここにいるのは



はげたおじさん1人みたい。

「君は・・・？」

「通りすがりの正義の味方、かな？そんなことより、ここってロケット団の研究施設？」

「そうだか、こんなところに何か用事かね？」

「ちよつと人探しにね。ここの人達、ブルーって女の子を探してるらしいじゃない？私もその子に用があつて、居場所を知ってたら教えてほしいかなって。」

「その子なら、もうタマムシにはおらんだろう。見ての通り、全員出払つても捕まえた報告がない。」

「そっか。それともう一つ。ブルーの事諦めてくれないかな？無理ならここを吹き飛ばす、つもりで来たんだけど・・・。この子は？」

フラスコの中のポケモン（？）を指差す。

このまま吹き飛ばしたら、この子も巻き込んだじゃうよね。それは嫌だな。

「私が・・・私達が作り上げたポケモン。名をミュウツー。それより、正義の味方・・・か。ここがロケット団の研究施設だと知って乗り込んで来たのかね？」

「そんな感じかな。私、ポケモンを道具みたいに扱う人嫌いだから。」

「そう、だろうな。私もそう思うよ。」

ん？そう思うのにロケット団に手を貸してるの？

何か訳有りかな？

「なにか人質とか？そんな感じ？」

「そんなやむおえない事情、という訳ではない。私も始めは好奇心だけでポケモンを実験材料に使っていた、ただの科学者だったよ。」

「研究者の風上にも置けないね。心配して損したよ。」

「その通りだ。」

「それで、今更心変わり？」

「そう・・・だな・・・。先日、ロケット団の格好をして忍び込んできた少年がいてな。その少年はとても真つ直ぐな目をしていた。」

多分その少年ってレッドのことだよな？

ロケット団を改心させるなんて、結構やるじゃん。

グリーンは見習うべきじゃないかな？

「そして、その少年はロケット団からミュウを守る為に戦い、守りきった。それを見て私は自分が恥ずかしくなってるね。言われるがままにイーブイや、他のポケモンを実験材料にしか見ずに、ただただ好奇心のままに実験を行っていた。」

だが、そんなことはやめだ。ロケット団も抜ける。」

まあ、やめるやら抜けるやらは勝手にやってくれればいいや。今までポケモンを実験材料にしか見てなかった人の話なんて信用できないし。

「そう。それで、この子はどうするの？なんか、体が半分しかないけど？」

「申し訳ないが、このまま処分するしかない。さっき私の細胞を移植したが、なんの反応もない。」

この言葉を聞いたときは、流星に頭に血がのぼった。

「勝手に作っておいて処分するとか身勝手にも程があるんじゃない？」

「耳が痛いな。だが、私にはもうどうしようもできん……。」  
「だったら。」

私はフラスコに近づく。

フラスコ越しに治すのはやったことないけど、大丈夫かな？

「私が手を加えてもいいよね？」

フラスコに手を添える。

すると、フラスコの中のポケモンを光が包み、ゆっくりと半身を形成していく。

「これは……!？」

はげのおじさんが呟いた時には五体満足のポケモンがフラスコの中にいた。

「信じられん。君はいったい……?」

「いつの間にか、人やポケモンのケガを治せるようになってた、って言ったら信じる?」

「目の前で見せられた以上、信じるしかあるまい。」

「とりあえず、私ができることは終わったかな？後はこの子次第……とと。」

話ながら少しふらつく私。

流石にフラスコ越しで、治したことのないような状態を治したからかな？かなり疲れたみたい。

『ましろ、だいじょうぶ？』

「ほんとはこの場所を吹き飛ばすつもりで来たんだけど……。ちよつと予定外、かな。」

「無理はしない方がいい。ミュウツーも、私が何とかしよう。信じられんかもしれないが、今は私を信じてほしい。」

きららにも心配されてるし、はげのおじさんを信じるしかない、か。

「それじゃ、はげのおじさんに任せるよ。」

「は……。ああ。他の者が戻ってくる前に帰るといい。」

おっと、思わずはげって言っちゃった。

ま、いつか。はげって言われるよりひどいことを沢山してきてるだろうし。

そんなことよりも。すごく疲れたから、さっさとポケモンセンターに行って休もう。

イーブイの搜索は手伝えそうにないや。レッド、ごめんね。

ー研究者視点ー

行ってしまったか。

通りすがりの正義の味方……。か。名を明かさないのはロケット団を警戒しているからか、自信の表れか。

どちらにせよ、あの子のおかげでミュウツーは処分せずにすんだ。戦うことだけを考えて作られたポケモンが生まれることが、いいことなのかは分からないが、勝手に作っておいて勝手に処分するのはあの子の言うとおり身勝手すぎるだろう。

なら私は、ミュウツーが生まれたとき。こいつが自由に生きていけるように準備しておこう。

フツ。せめて、名前を聞いておけばよかったか・・・。  
そう思ったとき一瞬、右腕が痛んだような気がした。

## 11話

ロケット団の研究施設から戻った次の日。

1日休んだお陰かすつかり元気になった。

反対に、何故かきらは疲れてる様子。

『むくり〜』

珍しくきらはボールから出てこずに、ボールにこもってる。そんな気分な日もあるのかな？

うーん、きらがお疲れだからどうしよう。

ブルーはもうこの町にはいないみたいだし、次の町に向かってもいいんだけど……。なんか、きらが隣にいないと調子が狂うんだよね。

仕方ない、昨日のイーブイ探しても手伝おうかな。見つかってなければ、だけど。

「とは言ったものの、あの2人がどこにいるか知らないし……。あ、ジムに行けばいいのか。」

たしか、イーブイはジムに挑戦するための条件だったよね？なら、ジムリーダーに聞けばわかるでしょ。

えっと、ジムは町の端っこだけ？

とりあえず、行くだけ行ってみよう。

「おじやましまーす。誰かいませんかー？」

「はい。」

出てきたのは和服の女の人。

そういえば、ここは和服の格好をした人がジムリーダーをしてたっけ？確かエリカって人。その人のやり方なのか、ここのジムトレーナーは女の人しかいないらしい。

とりあえず、この人に聞くよりエリカって人に直接聞いた方が早い気がする。

「ジムリーダーっていますか？」

「挑戦ですか？少々お待ち下さい。」

そのまま奥に引っ込んでいく。

いや、挑戦じゃないんだけど……。というか、条件はないの？まあ、無いならいいや。話だけ聞いて挑戦は辞退しよう。

そう思っていた所に、1人の女の人がやって来た。

黒髪のボブの髪型の女の。この人がエリカって人かな？

「挑戦者と伺いましたが、貴女で間違いありませんか？」

「えっと。実は挑戦じゃなくて少し聞きたいことが。」

「はい。何でしょうか？」

一瞬不思議そうな顔をしたあと、ニコツと笑い首をかしげる。

「イーブイって、無事に捕まったのかなって。」

「どこでその話を？」

イーブイって単語を出した瞬間、笑顔が消えた。一瞬で真顔になり、こちらを睨み付けてくる。

え、なんか地雷踏んだ？

ん？そういえば昨日、はげの人がイーブイを実験に使ったって。

それで、ロケット団の実験施設のある町でイーブイの捕獲依頼。

極めつけは、ロケット団にはジムリーダーも所属してるっていう事実。

え？エリカって人、実は真つ黒？

「どうしました？私の質問に答えられないんですか？」

「ジムに挑戦するためにイーブイを捕獲してほしいって言われたって聞いてね。少し気になって。で、こっちの質問には答えてくれないのかな？」

「無事に捕獲されましたよ。無事にね。」

なんでこの人無事になって笑顔で強調するのよ。むしろ怪しいんですけど？

「ところで、こっちも聞きたいことが増ちやあって。聞いてもいいかな？」

「何ですか？」

「なんでわざわざ、イーブイなんて珍しいポケモン捕まえさせたのか

なつて。」

「それは、もちろん。実力を計るためですよ。弱い人とは戦いたくありませんから。」

「それじゃ、私は？」

「女性の方の挑戦は珍しいので、無条件で受けますよ。」

「もうひとつ質問いいかな？」

「何でしょう？」

「イーブイが実験台になつたつて話、知ってる？」

そう言つた瞬間、もう一度笑顔が消えた。

そして、いきなりポケモンを繰り出してきた。

「ラフレシアー！はなびらのまいー！」

「ミスター！れいとうビーム！」

予想していたから、すぐにミスタを出してれいとうビームで壁を作る。この反応、やっぱり！

「あなたも、ロケット団！」

ん？

ーエリカ視点ー

昨日は無事にイーブイも保護できて、レッドの人となりもよくわかりました。カスミが押すだけのことはありましたね。

きつと、彼は私達の力になつてくれるでしょう。

「エリカ様、挑戦の方がやって参りました。」

「わかりました。すぐにいきます。」

さて、今日の挑戦者はどんな方でしょうか？

その方は白い髪をツインテールにしている、とても可愛らしい方でした。人を見かけにはよりませんから、こんな見た目でもジムバッジをあつめるトレーナーなのでしょう。

「挑戦者と伺いましたが、貴女で間違いありませんか？」

「えっと。実は挑戦じゃなくて少し聞きたいことが。」

「はい。何でしょうか?」

「おや、挑戦者と聞きましたが伝え聞いた者の早とちりだったのでしょうか?」

「しかし、ジムリーダーに聞きたい事と言うなら、それなりの事情の  
はず。」

私は笑顔で先を促した。

「イーブイって、無事に捕まったのかなって。」

「どこでその話を?」

私の笑みは一瞬で崩れ、目の前の女の子を睨み付けます。その話を  
知っているのはレッド。もしくは、ロケット団しかないはず……。  
まさか、この女の子もそうなのではないか?」

「どうしました?私の質問に答えられないんですか?」

「ジムに挑戦するためにイーブイを捕獲してほしいって言われたって  
聞いてね。少し気になって。で、こっちの質問には答えてくれないの  
かな?」

「無事に捕獲されましたよ。無事にね。」

やはり、遠回しに答えてきますね。

なので、私もあえて無事な所を笑顔で強調して揺さぶりをかけま  
す。

まあ、遠回しに答える時点でほぼ黒と見ていいでしょう。

「ところで、こっちも聞きたいことが増ちやあって。聞いてもいいかな  
?」

「何ですか?」

「なんでわざわざ、イーブイなんて珍しいポケモンを捕まえさせたの  
かなって。」

「それは、もちろん。実力を計るためですよ。弱い人とは戦いたくあ  
りませんから。」

「それじゃ、私は?」

「女性の方の挑戦は珍しいので、無条件で受けますよ。」

「もうひとつ質問いいかな?」



「何でしょう?」

「イーブイが実験台になったって話、知ってる?」

その事を知っているという事は!

やはりこの方、逃がすわけにはいきませぬね!

「ラフレシアア!はなびらのまい!」

「ミスタ!れいとうビーム!」

私の先制攻撃は、氷の障壁で止められてしまいました。ですが、やはりその反応の早さ!

「あなたも、ロケット団!」

え?

ーマシンロ視点ー

「いやー。てつきり、実験に使うイーブイを探してるロケット団の1人かと。ごめんなさい。」

「私のこそ、早とちりしてしまって申し訳ありません。」

苦笑いしながら頭を下げあう私達。

「それでは、レッドが無事にイーブイを捕獲できたか気になって訪れただけだということですか?」

「そうそう。少し人探しが行き詰まってね。それで、イーブイ捕獲の手伝いでもしようかな、と思って。」

「友達思いですね。イーブイに関しては先程言ったように無事に保護できました。今はレッドが連れていきます。彼ならきつと適任でしょう。」

そっか、無事に保護されたなら気にする必要はないかな。それじゃあ、この後どうしようか?

と思っただけど、そうもいかない様子の子が1人。

「あの、ひとつお願いがあるんですけど・・・」

「はい、なんですか?」

「ミスタ・・・、この子の相手をお願いできませんか?」

久しぶりの強敵だったからか、もう一回もう一回と急かすように体

当たり前してくる。

こうなると思ったからジムには来なくなかったんだよね……。

「それは、ジムへの挑戦でしょうか？」

「いえ、バッジは要らないです。この子、いわゆる戦闘狂みたいなやつで……。強い相手だとこんな感じでやる気になっちゃうんです。」

「なるほど。そういうことならお相手いたしましたでしょう。ラフレシア、先程の続きですよ。」

そう言うとラフレシアも乗り気のように、意気揚々と前に出る。そのラフレシアの前に出るミスタ。

「それじゃ、ミスタ。自由にやっちゃっていいよ。」

「指示は出さらないですか？」

「勝つための戦いならある程度指示は出すけど、今はいいかな。指示を出されるのも多分好きじゃなさそうな子だしね。」

「では、こちららもラフレシアに任せましょう。しかし、指示をあまり出さないトレーナーなんて変わってますね。」

「そう？ 私はトレーナーなんて柄じゃないからわかんないけど。ただ、あの子が戦うのが好きだから、何故か妙にロケット団が絡んでくるこの旅に誘っただけだしね。捕まえたのも成り行き。」

捕まえたポケモンだからって、命令するのも柄じゃないし。

「いろんな関係があるんですねえ。ちなみに、何故ロケット団と？」

「たまたま旅の途中でかち合ってたね。後、私の探してる人をロケット団が追ってるって聞いて。あ、ところで、ゲームセンター地下にあるロケット団の研究施設って知ってる？」

「どういうことですか？」

ロケット団の事になると顔つきが変わるなあ。ん、もしかして私もそんな感じなのかな？

かくかくしかじか

「なるほど。研究施設にはげた研究者、ですか。」

「なんか、ロケット団をぬけるって言ってたから昨日はそのまま帰っ

たけど、数日たったならもう一回行ってみるつもり。」

「それがいいでしょうね。その方を信じたいですが、その場しのぎの言葉かもしれないし。」

「ん？なんか含みのある言い方だけど、はげに心当たりがあるのかな？」

「だったら、その時に一緒に行ってもらえないかな？あいつら、容赦って言葉を知らないから。何をしてくるかわかんないし。」

「そういうことなら、同行しましょう。」

「ありがと、助かるよ。前に、ナツメにはひどい目にあわされたからね。エリカがいてくれると心強いよ。」

「ナツメって、ジムリーダーのナツメのことですか？」

「うん。やっぱり知らなかった？」

「ええ……。マチスがポケモンの輸送を行っていたと聞いて、他のジムリーダーももしや……。とは思っていましたが。」

マチスって、クチバシテイのジムリーダーだっけ？ジムリーダーのうち、何人がロケット団なのやら。大丈夫かな、ポケモンリーグ。

そういう話しているとミスタが戻ってきた。

ラフレシアは……。ありや、こおりづけになってるや。

タイプ的には不利なはずなのに勝っちゃってるよ、すごいねこの子。

でも、傷だらけだから結構ギリギリの勝利って感じかな？

「あらあら、負けてしまいましたか。お強いですね、そのスターミー。」

「まあ、私が育てた訳じゃないんだけど。」

「そうなんですか？とてもなつかれてるように見えますが……」

「まあ、きららに返り討ちにあったときは毎回私が治してたんで、それのせいかも。あ、きららっていうのは、もう一体の手持ちで、この子の目標……。みたいなものかな？」

「そうですね。あなたが治したというのはポケモンセンターではなく、きずぐすりを使ったということですか？」

「それは、見てもらった方が早いかな。」

ミスタに手をかざす。すると、ミスタの体を淡い光が包みケガを治

していく。

「まあ、こんな感じ。」

「これは……。言葉にならないというのはこういうことなんでしょうね。」

「私自身もいつの間にか使えるようになった能力だから、詳しくは知らないんだけどね。」

「そうですか……。そういうことなら、詮索はしないでおきますね。」

「ありがとうございます。それじゃ、そろそろ引き上げようかな。ミスタも満足したみたいだし。」

ついでにラフレシアも治しておく。ミスタの相手をしてもらったしね。

「ありがとうございます。それでは、また後日会いましょう。その時にはリベンジ、させていただきますね。」

「え?」

「負けっぱなし、というのは嫌いなので。私も、この子も。」

そう言つてラフレシアを撫でる。

え、大和撫子みたいな人だと思つたら、実は負けず嫌い……?

でも、それならミスタの相手にはうつつけかもしれない。

「そういうことなら。」

「ありがとうございます。それでは、お気を付けてお帰りください。」

笑顔で見送られる。

なんか、イーブイの事を聞きに來ただけなのに、大事になつた気がする。まあ、丸く収まつたからいいか。

とりあえず、きららが元氣になつたらもう一度エリカの所に向かうかな。

あー、ブルーの行き先も氣になるけど、ロケット団も放っておけないよね。

## 12話

エリカと会ってから数日。

レッドがタマムシを離れた後、私はもう一度ジムに訪れた。

というのも、一旦イーブイの安全を確保してから動きましよう。とのエリカの言葉から、イーブイを連れれたレッドが出発するのを待っていたのである。

「さて、エリカ。準備はいい?」

「大丈夫ですよ。行きましようか、マシロ。」

『いくよー!』

そして、今日はきららも絶好調。さすがに数日休むと元気にもなるか。

「ところで、そのポケモンは?見たことがないポケモンですが・・・。」

「私もなんて言うポケモンかわからないから、きららって呼んでる。

見た目はかわいいけど、実力はお墨付き・・・かな?」

まあ、実際はお墨付きどころか最強?

とにかく、きららが負けるところは想像できない。

「そうですね。頼もしいですね。」

「でも基本的に大技ばかり覚えてるから、加減を間違えると地形が変わっちゃうんだよね。」

「え?」

『ましろー、うえにこのまえあったひとがいるよー?』

「上?」

とりあえず、エリカの疑問は置いておいて上を見る。

確かに、何かの影のようなものは見えるけど・・・。あれ人なの?

「上がどうかしましたか?」

私につられて首を傾げながら上を見るエリカ。

ここからじゃよくわからないし、行って見る方が早いかな。

「エリカ、少し待ってて。ちょっと見てくる。」

「見てくるとは、どうやって・・・?」

「ミスタ、あそこまで行ける?」

私はミスタをボールから出して聞いてみる。

うん、多分行けるみたい。私はミスタに飛び乗る。

レッドかタمامシを離れるまでの間、マサキのそらをとぶをまねてミスタに乗せてもらえないかお願いしたところ、意外とすんなり乗せてもらえるようになった。

「お願い、ミスタ。あそこまで飛んで！」

「――」

掛け声と共に高度がグングン上昇する。

ちよつとまって、これ。結構怖い！

鳥ポケモンと違って、不安定な感じが物凄い！

『すごいー！ましろがとんでるー！』

「飛んでるー！飛んでるけど、ものすごく怖いんですけどー！」

『あははー。』

きららは楽しそうにミスタと私の周りをグルグルと飛び回る。そうこうしていると、小さな影が人影にみえてくる程に近づいていた。

「あれって、ナツメ？」

私が呟いた時には、その人物の前でミスタが停止していた。

「ちっ。イーブイを追っていたら、また面倒な小娘に見つかったか……。」

「面倒な、なんて子供に向かって言う言葉じゃないよ？」

「貴様こそ、子供なんて言葉は似合わんがな。あの時は流石に死ぬかと思った。」

ナツメと普通に会話する。あれ？今日は問答無用で攻撃してこないね。

？  
そういえば、オツキミやまで私避けられてたっけ。そのせいかな？

「今日は前と違って大人しいね。らしくないんじゃないの？」

「ほざけ。お前に用はない以上、こちらから仕掛ける理由はない。」

「でも、この前は。邪魔者は消す、って言ってたよね？」

そう言うのと、また舌打ちをして黙り込んだ。やった。

うーん、どうやらロケット団全体に私を避ける命令が出てるのかな

？

「まあいいや。とりあえず、1つ聞きたいことがあって。」

「・・・なんだ？」

「ブルーって子知ってる？」

「知らん。」

「そっか、ならいいや。あともう1つ。あのイーブイはどうするの?」「奪い取る。と、言いたいところだが。そう言うと、お前は どうする?」

「ぶっ飛ばす、かな。」

そう言うと、ナツメはフツと笑う。

「危ない橋を渡るぐらいなら、イーブイの一匹ぐらい放つて置けよ。」

「そう。それならもう用はないかな。戻るよ、ミスタ。」

そう言って戻ろうとするナツメに呼び止められた。

「さて。大人しく戻るのほらしくないんじゃないか?」

「まあね。捕まえたいのはやまやまだけど、こんなところで戦うと、最悪どっちか死ぬかもしれないから、できれば戦いたくないかな。それに、ブルーの事は知らないみたいだから、ね。」

こんな高さから落ちたら絶対に死ぬでしょ。

あと、怖い。ここ高すぎるんだよね。せめて、この高さに慣れてからじゃないと無理。マジ怖い。

「そうか、相変わらずのあまちゃんだな。まあ、せいぜい気をつけることだ。きつと、近いうちに私達のボスがお前の相手をしてくださる。」

「それは、おあつらえ向きだね。首を長くして待ってるよ。」

「ほざいてろ。」

言うだけ言って、ナツメはテレポートで消えていった。

さて、私達も早く降りよう。

降りている間、私は浮遊感に慣れるか別の鳥ポケモンを捕まえるか頭を悩ませた。

下に降りると、エリカが駆け寄ってくる。

「ふう、怖かったあ。」

「上で何かありましたか？」

「上で、と言うか上が・・・かな？」

「??？」

首をかしげるエリカに苦笑いをする。

「こつちの話。とりあえず、上にナツメがいたから追い払っておい  
た。」

「え？ケガはありませんか？」

「大丈夫、穏便に・・・、ではないかもしれないけど。話だけで終わっ  
たよ。」

「そうですか。ご無事で何よりです。」

「時間とつちやったね。それじゃ、ゲームセンターに向かおうか。」

「はい。」

そう言って歩き出した瞬間。

ドカアン！

ゲームセンターの方から爆発音。

そして、そこから高速で飛び去っていく一筋の影。

「エリカ。」

「ええ、行きましょう。」

短く会話した私達は、ゲームセンターに駆け出した。

「これは・・・！」

「派手に壊れてるねえ・・・。」

目の前には以前、ニビシティで吹き飛ばされたポケモンセンターと  
同じぐらいぼろぼろになったゲームセンター。

とりあえず、早朝の開店前だから一般客はいないと思うけど、従業  
員とかはいるかもしれない。

「きらら、瓦礫をどかせろ？」

『まかせてー！』



「もんじやら、あなたもお願いします。」

きららが瓦礫を浮かせて、もんじやらが蔓で脇にどけていく。

さすが、ジムリーダーのポケモン。パワーがすごい。

瓦礫をどけていくと、白衣を着た研究者、というかこの前のおじさん？

「おじさん、生きてる？」

「君は……。この間の……。」

生き埋めになってただけあって、息も絶え絶えで返事をする。とりあえず、きららに引つ張り出してもらった。

「やはり、あなただったんですね。カツラさん。」

そう言って、エリカはおじさんの前に立つ。

やっぱり、知り合いだったの？えっと、カツラって言うの？この人。

「エリカくん……だったかね？顔を会わせるのは久しぶりだね。」

「ええ……。マシロの話を聞いてもしや、とは思いましたが。こんなところで会いたくはありませんでしたわ。」

「ふふつ、そう……。だろうな。」

話が長くなりそうだから、私は割って入る。

「二人とも、話は後だよ。おじさん、他に人は？」

「大丈夫だ。あの日から人払いをしておいた。従業員も、開店前には立ち入らないようにしている。だから、私以外誰もいない。」

「そっか。なら、早く離れよう。爆発したのがロケット団の研究施設なんてばれたら、おじさん捕まっちゃうよ？」

「だが、私は……。」

いまだにうだうだ言っているおじさん。

個人としてはそのまま放っておいて捕まってもらってもいいんだけど……。

なんか、エリカの知り合いみたいだし。

それに。

「ロケット団、抜けるんでしょ？だったら、おじさんのことをどうするかはエリカに任せるよ。」

「マシロ。ありがとうございます。」

「ミスタ、この人乗せてあげて。」

私はミスタにおじさんをお願いして、エリカに向き直る。

「場所は、ジムでいいかな? いい感じに町から離れてるし。」

「そうですね。お願いします。」

私達は、おじさんをミスタに乗せてやって来た道を引き返していった。

ジムに戻ってきた私達。

とりあえず、このおじさんって何者? エリカの知り合いみたいだけど。

「マシロ。紹介しておきますね。この人はカツラさん。グレンタウンでジムリーダーをしています。」

「この人もジムリーダー? ジムリーダーの半分がロケット団って、ポケモンリーグやばくない?」

「耳が痛いですね……。とりあえず、ケガの手当てをしましょうか。」

「それなら、私が治すよ。」

そう言っただけでケガを治そうとする私。

しかし、きららが慌てて止めてくる。

『ましろ、だめだよ! これいじょうはからだによくないよ!』  
「え?」

言われたときには既にケガを治し始めていた私は、途中で止めることもできずにケガを治しきってしまった。

「きゆうに、どう……。したの……。? きら……。?」

あれ? なんか視界が? 横向き……。に?

そのまま私は気を失った。

ーカツラ視点ー

私のケガを治したとたん、目の前の少女は倒れてしまった。

「マシロ!?!」

「マシロくん、というのかね? 彼女は一体……。?」

「私も詳しいことは知りませんが、ロケット団に敵対している心優しいトレーナーですよ。」

エリカくんはそう言っただ倒れてしまったマシロくんを抱き上げる。

「思ったより軽いですね。この子をベッドに運んでくるので、少しお待ち下さい。ラフレシア、ここはお願いします。」

ちやつかりポケモンも置いていく。相変わらず抜け目がないな。

「まったく、私は何をやっているのやら・・・」

ロケット団を嫌っているはずの女の子に諭されて、ケガまで治してもらった。

おそらく、そのせいで彼女も倒れてしまったのだろう。本来であれば私のような人間など治したくなかっただろうに。本当に頭が下がる。

「お待たせしました。それで、お話を聞かせてもらって構いませんか？」

「そうだな。私のしてきたことと、私が出会った少年少女のこと。あまりいい話ではないがな。」

「分かっていますよ。それを聞いて、私もあなたをどうするか決めましょう。あなたの事は、マシロに任せられたので。簡単には決められません。」

「では、聞いてくれて。私の犯した罪を。」

そうして、私は今までの罪を懺悔するように話した。イースターやギャラドス、その他色々なポケモンを実験材料のように扱ってきたこと。

そして、私の目を覚ましてくれた少年と少女のこと。

エリカくんは黙って話を聞いてくれていた。

「それで、あなたはこの先どうするつもりですか？」

「そうだな・・・。飛び出していったあいつも、今はもう1つの命。私がどうこうする必要もあるまい。それならもう、私の出る幕はあるまい。大人しく自首しよう。」

「それなら、私達を手伝ってもらえませんか？」

それは、意外な提案だった。仮にもジムリーダーの看板を背負いな

がら、ロケット団として活動していたこの私を・・・

「私を、許そうと、言うのか。」

「それを決めるのは私ではありませんよ。あなた自身です。その為には贖罪の場は必要でしょうか？」

なるほど、自分の手であげなえと。そう言うことか。

「他人に任せるな、と言うことか。なかなか手厳しい。」

「マシロに任されたので、中途半端なのは許しませんよ。彼女に許してもらえるまでは、あなた自信の行いで、罪を償ってください。」

そう言っつて、私と彼女は薄く笑いあつた。

## 13話

ん……？あれ、ここは……？

目を覚ました私は、見慣れない天井に戸惑う。

辺りを見渡すと、少しだけ見覚えのある雰囲気気づく。

「エリカの……ジム？」

隣の台を見ると、私の荷物とモンスタールが2つ。

もしかして私、あのまま倒れちゃった？

後でお礼を言っておかないと。

そう思っ立ち上がると、いつもと違う自分の格好に気づく。

あれ？着物になってる。エリカがやってくれたのかな？何から何まで頭が下がる。

その時ガラガラと、ドアを開けてエリカが部屋に入ってきた。

「おや、気が付きましたか？」

「うん、ありがとう。これ全部エリカが？」

そう言っ袖を掴み両手を広げる。

「はい。うふふ。随分質素な格好でしたので、着付けがいがありましたよ。」

「あはは……」

そう言っ笑うエリカに、乾いた笑いを返す。

そういえば、マサラタウンを飛び出すようになってきたから、長袖長ズボンのシンプルな格好のままだったんだよね。

それに比べて、今は青を基調にして赤と緑を入れているのかな？

青。

ブルー。

「………ヨシ！」

「随分と気に入っているようで、私も嬉しいですよ。」

「え？聞こえてた？」

「ええ、バツチリ。」

ちよつと！なんか恥ずかしいんですけど！

私は顔を抑える。真っ赤になってない？大丈夫？

「青には少し、思い入れがあつて・・・ね。」

「そうですか。白い髪によくお似合いですよ?」

「ア、アリガト。」

やめて!今褒められるとニヤけてとまらなくなるから!

とにかく、私は恥ずかしさを隠すように続ける。

「それで、おじさんは?」

「彼はグレン島に戻りました。」

「あれ?警察には突き出さなかつたんだ。」

「ええ。あなたのお陰ですよ。」

「私?」

首を傾げる。特に何かした覚えはないんだけど・・・。

「フツ。わからなくても構いませんよ。そんなあなただから、彼も変わったんです。」

「ふーん、よくわからないけど・・・。」

「それでいいのです。それより、一週間ほど寝てましたが、お身体の方はどうですか?」

え?一週間?

そう言われるとなんだかとても。

「お腹が空きました。」

「ですよ。昼食・・・には遅いですが用意してあります。食堂にどうぞ。」

「ありがと、エリカ。」

そう言いながら先に歩き出すエリカ。

ん?既に用意してあるって事は、一週間毎日用意してくれてたのかな?

「ねえ、もしかして。ご飯も毎日・・・?」

「ええ。用意しておりました。」

「ごめんね、いっぱい無駄にさせちゃつて。」

「いえ、大丈夫ですよ。ただ・・・。」

「ただ・・・?」

スウつと、少し息を溜めるエリカ。

「少々体重が増えてしまいましたね」

「ヒイツ！」

振り返り、うしろにゴゴゴゴと効果音が聞こえそうな笑みを浮かべる。

それってつまり、私の分も・・・ってことだよね・・・。

「ゴメンナサイ！」

「別に謝る必要はありませんよ？私が勝手にしたことですからね？」

「ヒイツ！」

怖い！ミスタの上なんか比じゃないぐらい怖い！

これが、ジムリーダー・・・！

戦慄していると、フツとプレッシャーが消える。

「申し訳ありません。からかいすぎましたね。」

「あははく・・・」

いやいや、からかうなんてレベルじゃないって。寿命が縮むかと思っただ。

そんなこんなで遅い昼食後。

「エリカ、少しパソコン借りてもいい？」

「構いませんよ。どこかに連絡を？」

「うん。ちよつとオーキド博士にね。探し人の足取りが掴めたけど、すぐにわからなくなっちゃって。」

「先日仰っていたことですね？」

「そう。とりあえず報告だけでもしておきたいかなって。」

そのままパソコンを操作する私。あれ、いつもなら直ぐに出るんだけど・・・。何かあったのかな？

あ、繋がった。

「あ、もしもし博士？」

「その声は、マシロか？」

「え？その声ってレッド？」

博士に繋いだはずなのに、何故かレッドが出た。しかも映像がないから、最初は誰かわからなかったし。

「なんでレッドがそこに？博士は？」

「博士はロケット団に連れて行かれた。どうやらヤマブキシティにいるらしい。そこでオレをまちかまえているそうだ。グリーンいわく、ロケット団との最終決戦になるって。」

レッドを誘ってる？ロケット団に恨みを買うような事をしたのかな？

まあ、私は心当たりしかないけど、二人も何かしらの因縁があるみたい。

「とりあえず、オレはヤマブキシティに向かう。博士に用事なら、オレ達が博士を助け出したあとにしてくれ。それじゃ。」

そう言っただけで一方的に通話を切られる。

えっと、ヤマブキシティで大きな戦いがあるってことでいいのかな？

「エリカ、聞こえてた？」

「はい。早速、カツラさんにも手伝ってもらいましょう。」

見逃したおじさんにも手伝わせるらしい。

まあ、手を貸してくれるのなら、見逃した意味はあった・・・のかな？

ご飯を食べ、手早く準備を終える。

さてと、ロケット団との最終決戦がヤマブキシティで待ち構えてる以上、私もここでじっとしてる訳にはいかないよね。ブルーのことも気になるし。

「それじゃ私は、ヤマブキシティに向かうけど・・・。ほんとにこれ、着ていった方がいいの？」

「構いませんよ。それより、お気をつけて。私もタケシとカスミ、それとカツラさんが揃い次第、ヤマブキシティの東西南北のゲートを抑えます。」

「ありがと。そっちも気をつけてね。」

そう言っただけでヤマブキシティのゲートに来てみたものの。

「ここは通行禁止だ。ん？いや、ちよつと待て。白い髪の女が来たと



きは連絡しろって通達があったな……。少し待ってろ。」

と言って待たされてる。まあ、心当たりしかないし。

最悪、強行突破しよう。

「待たせたな。ゲートを出た所で、待っている。迎えが来る。」

「迎え？誰が来るの？」

「知らん。俺の仕事はこの門番であって、子守りじゃない。さつさと行け。」

しつしと手を振られたので、さつさとゲートを抜ける。冷たい門番だったけど、門番ってみんなあんな感じなのかなあ……。

さてと。ここで待ってればいいらしいけど誰が来るのやら。

そう思っていると、人影はすぐに現れた。

スーツを着た、今度は髪の毛のあるおじさん。

「待たせたな。こちらにも準備があつて少々てこずった。」

「言うほど待ってないよ。それより、準備ねえ……。最終決戦前の下準備……。かな？」

「ほう……。タイミングから、偶然ではないと思つたが。やはり、今日を狙ってきたのか。君に招待状を出した覚えはないんだがね。」

「知つたのは偶然だけだね。それで、あなたはロケット団の幹部？」

「フッフ、ハッハッハッハッ!!」

聞いたとたんに笑いだす目の前のおじさん。

人が質問してるのに笑うって失礼じゃない？

気持ちが顔に出たのか、私の顔を見ると笑うのをやめた。

「いや失礼。面白い冗談だったものでな。」

「冗談のつもりはなかったんだけどな。」

「そうか。では改めて……。我が名はサカキ。ロケット団のボスをしている。」

「なるほど。ボスに対して幹部？なんて聞いたら笑い話にもなるか。」

「そういうことだ。お前の事は、ナツメから聞いている。名前を聞こうか。」

「……マシロ。ナツメにはずいぶんひどい目にあわされたよ。」

「フツ。それはお互い様だろう。あそこまで手酷くやられたあいつを

見たのは初めてだ。」

互いに軽口をたたきあう。ロケット団のボスがなんで出迎えに来たかは分からないけど、口論でも負けたくはないよね。

そう思ったとき、ふと何かが消えたような不思議な感覚がした。

「今のは・・・？」

「ナツメのバリヤードがやられたか。どうやら、招待客が来たようだ。」

「レツドのこと？」

「他にも招待していない者もいるようだがな。」

そういうやいなや、背中を向けて歩きだすサカキ。

「ついてくるといい。私のアジトに案内しよう。」

私は、歩きだすサカキの背中を追いかける。

「わざわざ案内してくれるのはありがたいけど、どういう意図？」

「一番の理由は、お前を自由にさせておくわけにはいかないからだな。

おそらく、三幹部では止められん。」

「あなたなら止められるって？」

「無論だ。」

すごい自信。さすがはロケット団のボスってところかな？

「それで、一体どこまで歩くの？」

「この町の中央にあるシルフカンパニー。そこが私の、ロケット団のアジトだ。」

そう言って黙ってしまったサカキ。そのまま足を進め続けていると、いつの間にか、この町で一番大きなビルが目前に佇んでいた。

「ここだ。」

「なんか燃えてない？」

「そのようだな。」

しかし、立派なビルも何故か炎上し所々窓から煙が立ち上っていた。

「どうやら、もう始まっていたらしい。」

そうつぶやくと、こっちに振り返る。

「それでは、こちらから始めようか。」

そう言つてサカキは上着を翻し、ポケモンを繰り出す。

サイホーン、サイドン、ダグトリオ、ニドキング、ニドクイン、ゴローニャ。

あれが、サカキのポケモン全部・・・かな？

「改めて名乗ろう。ロケット団のボス、そして。トキワシテイ、ジムリーダー。大地のサカキ！サイドン、じわれだ。」

そして、サカキは自分の後ろの道をサイドンで踏み砕く。

「さて。これで、君は私を倒さないとシルフカンパニーには行けなくなつた訳だ。」

「迂回したり、ポケモンに乗っていけば行けるんじゃない？」

「フツ。私がそんなことを許すと思つているのか？」

まあ、そんな悠長なことできないか。

「まさか。それに、ロケット団のボスを見捨てる理由なんて。」

「こっちにもないんだから！」

## 14話

「行くよ、ミスター！」

私が選んだのはミスタ。相手は地面タイプ使い。相性は抜群。それに、一番槍ほどこの子に似合うものはないしね。

「ニドクイン、お前からだ。ひっかく！」

相手はニドクイン。ひっかくから使ってくるってことは、相手はミスタが接近戦が苦手なのを知ってる？

「ミスタ、迎え撃つよ。ハイドロポンプ！」

ニドクインが近づいてくるのを待ち、ハイドロポンプを撃ち込む。吹き飛ばされたニドクインはサカキの横で止まった。

「流石にこの距離で受けたら起き上がれないでしょ。」

「ああ、その通りだ。だが・・・」

サカキが吹きニドクインをボールに戻した瞬間、ミスタがふらつく。

「ミスタ!？」

ミスタにかけよって見てみると、体に一本のトゲが刺さってる。

「やられた・・・。どくばり、だね？」

「その通り。その毒はじわじわとスターミーの体力を削っていく。さて、いつまで持つかな？」

「そんなの、私が・・・!」

治す！と言おうとしたとき、きららの声を思い出した。

(これいじょうはからだによくないよ！)

そうだ、能力を使ってミスタを治しても、また私が倒れるかもしれない。そんなことになったら迷わずトレーナーを狙ってくる。

だとすると、能力は使えない。

こんなことになるならもつと道具を買っておくんだったよ！

「毒で倒れる前に、あなたを倒す。」

「できるかな？そら次だ。ダグトリオ！」

次はダグトリオか。素早いポケモンだから、ハイドロポンプは当たりにくいけど・・・。

毒のせいで悠長なことはやってられない。

「ミスタ、もう一回！」

「あなをほるだ。」

ダグトリオにはあなをほるで逃げられる。

でも、地面から出てくるなら！

「ミスタ、上に飛んで！出てきた瞬間を叩くよ！」

ミスタは上に飛び上がり、ダグトリオが出てくるのを待ち構える。

「そんな悠長にしても大丈夫か？こっちは別に、潜ったままでもかまわんのだぞ？」

「ちよつと！それずるくない!？」

「勝つためには手段を選ばないのが、我らロケット団だ。」

ああ、もう！これじゃじり貧でミスタの体力が尽きちやう！こういう時は交代するのがセオリーなんだろうけど……。

私は袖にしまつてあるボールをちらつと見る。

目が覚めてからきらは一度もボールから出てきていない。

つまり、きらの調子はかなりよくない。

そういえば、私が能力を多用した時はいつも寝てた気がする。

もしかして、いつもきらが寝てたのって、私のせいなの？

「どうした？考え込んでいたらスターミーが倒れてしまうぞ？こちらは一向に構わんが。」

ああもう！

状況はかなり悪くなってきてる。

それも全部私のせいかもしれないなんて笑えないし！

でも、今は考えてるときじゃないよね！

「ごめんねミスタ。こんな状況になったのは私のせいみたい。少し無茶させるかもしれないけど、頑張ってくれる？」

「……」

返事はいつもの機械音。それでも、任せろって、言ってくれてる気がした。

「考えはまとまったかな？」

「まあね。派手にいくけど、ケガしないでよね？ミスタ、全部掘り返す

よ！」

「ム？」

その言葉を受けて、ミスタは光を集めだす。

いつの間にか、空には月が輝き、星は綺麗に見えている。

きららいわく、星の綺麗な日はエネルギーがたまりやすいのと。と。

つまり……。

「つまり今日は、この技を使うのにうってつけてことだよ、ミスタ！  
すごいはいこうせん！」

その瞬間、ミスタから一筋の極光が放たれる。その威力はきつと、  
ニビシテイできららが使ったときと同じぐらい、それぐらい凄まじい  
威力だった。

その光は地面を貫き、地中に隠れていたダグトリオごとえぐりとつ  
た。

「ぬおおおお。」

余波が吹きすさぶ中、サカキは顔の前に両腕をあげてこらえる。  
私も顔を背け、片手で顔を庇う。

静まり返ったときには、抉られた地面とサカキの横で目を回すダグ  
トリオ。

そして、苦しみながらも未だに健在のミスタ。

「凄まじい威力だ。とても鍛えられている。」

「それはどうも。」

サカキはダグトリオを戻し、残りの4体も戻した。

「あれ？他のメンバーも戻すの？」

「ああ。他のやつらではハイドロポンプを止める手段がない。避けら  
れる速さがない以上、撃ち抜かれて終わるだけなのは目に見えてい  
る。」

「それじゃ、大人しく捕まってくれる？」

「そう急くな。ジムリーダー、大地のサカキとしての敗北は認めよう。  
受け取れ。」

そう言って何かを投げってくる。

パシッ、と手のひらで受けとる。

これは・・・バツジ？

「そして。これからは1トレーナーとして、マシロ。お前に挑む。ゆくぞ、スピアー！」

「ミスタ、もう少しだけ頑張つて！」

突っ込んでくるスピアーを迎え撃つミスタ。

「その根性は買うが、弱ったスターミーでは私のスピアーは捉えられんよ。貫け、ダブルニードル！」

左右に動く、的を絞らせない動きなのに高速で接近してくるスピアー。

「それは速すぎじゃないの!?!ミスタ、十万ボルト！」

速さに対応するために、こつちも早い技で対抗する。しかし。

「言つたはずだ。」

高速で動くスピアーには当たらずに、スピアーの針に貫かれる。

「手負いのスターミーでは捉えられん、と。」

「ミスタ!?!」

スピアーの技を受けたミスタはそのまま倒れこむ。

流石に三連戦はきつい・・・か。

私はミスタをボールに戻す。

「ありがとミスタ。ごめんね、私がしっかり準備していなかったから・・・。」

「さて・・・。次はどうする?いるのだろうか?とっておきのポケモンが。」

確かに。ミスタがやられた以上、手持ちはきららだけ。

でも、きららはまだボールの中で寝て・・・。そう思った瞬間。

ポンッ

『よくねたよ〜』

「きららー！」

『ん〜?どういいうじょうきょう?..』

「そいつが、お前の相棒か。では、決着をつけようか。どうやら上もクライマックスのようだ。」

そう言つて上を見上げるサカキにつられて上を見る。

そこには、網目状の蔓の上に立つ3人の人影。

そして、3人と対峙する3体の鳥ポケモン。

「あれは、レッドとグリーンと・・・」

。「ブルー!?なんでここに?ああもう、そんなことは後でいいや。とりあえず助けなと!」

「あれに手出しはさせんよ。スピアー!」

きららに飛びかかってくるスピアー。

きららはその針をヒラヒラとかわす。

『すごいすごい!ましろ、このぽけもん!いままであつたなかでいちばんはやいよ!』

「ちよつときららら!?遊んでる場合じゃないよ。ブルーを助けなと! エネルギーはたまつてる?」

珍しく楽しそうにスピアーの攻撃をかわしているきららに思わず叫ぶ。

『からっぽだよ』

「から・・・え!?なんで?」

『ましろがぜんぶつかっちゃった』

あ、やっぱり私のせいなのね・・・。

予想はしてたけど、実際に聞くと少し落ち込む。でも、今は落ち込んでる場合じゃない。

「スピアー、こうそくいどうだ。やつとのスピードの差を詰めていくぞ。」

サカキもきららとのスピードの差をじわじわと詰めてくる。

「のんびりしてる暇はないか・・・。きらら、少しの間だけでもいいから、スピアーを押し返せる?その隙に上の鳥ポケモンにあれを撃ち込むよー!」

『むりく。えねるぎーがたまつてないから、どっちかしかできなない。』

「ええ!?!」

それじゃあ、上を助けるか、スピアーを倒すかのどっちかしか選べ



ないってこと？

私は上を見上げる。

上では鳥ポケモンに対してリザードン、フシギソウ、カメックスで対抗している。

けど多分、フシギソウのパワーが劣ってるのかな？押し負けそう……。

ガシャアン！

私の横に瓦礫が落ちてくる。

このままだと、ビルが崩れるのが先かもしれない。

目の前へのサカキを見据え、もう一度上を見あげる。

このままじゃ、私もビルの下敷きになるかもしれない。きっと、避難した方がいいと思う。でも……！

「上を……ブルーを助けられないなんて選択はありえないよね！きらら、危ないやつその2を上を上に撃ち込むよ！準備して！」

『できないよ。このほけもんがじゃま〜！』

「大丈夫。合図したら一気に飛び退いて！」

ちらりと、視界の隅で上を確認する。

3……2……1……

「今！きらら、用意して！」

「させん！追えスパアー！」

一気に飛び退いて技を撃とうとするきららに一直線に飛んでくるスパアー。

でも残念だけど……。

「そこは通行止めだよ。」

眩いた瞬間にはスパアーは落ちてきた瓦礫に押し潰される。

「なんだと!？」

サカキが驚いているが、気にしている暇はない。

「きららー！用意は?！」

『いつでもいけるよー!』

私は上を指差す。狙うのは3体の鳥ポケモンの中心。エネルギーの塊のようなポイント。

「核を撃ち抜け！すごいいわおとし！」

瞬間、空から大量の石がふりそそぐ。

それらは3体の鳥ポケモンとビルに突き刺さり、そのうちの1発は3体の中央、エネルギーの核を撃ち抜いた。

ーブルー視点ー

ふう、危なかった。

ビルから吹き飛ばされたときはどうなることかと思っただけど、レツドのフシギソウのおかげで助かったわ。

と言っても、あれをどうにかしないとさっきの二の舞になるわね。

アタシはレツドの肩を借りて立ち上がり上を見上げる。

そこには3体の鳥ポケモンをエネルギーで合体させたものが佇む。

「もう一度だ！ゴツドバード！」

ナツメの指示でもう一度突っ込んでくる。

「こつちも3体の攻撃で！ブルー！」

「ええ！」

レツドの声に合わせてカメちゃんをだす。

そして、リザードン、カメックス、フシギソウの、3体の攻撃で迎え撃つ！

「かえんほうしゃ！」

「ソーラービーム！」

「ハイドロポンプ！」

3体の攻撃は、3体の鳥ポケモンとぶつかり合う。拮抗したかに見えたエネルギーの衝突は、少しずつだが確実に押されていく。

「ちよつとレツド!?なんでフシギバナになってないのよ?あなたの攻撃だけエネルギーが少ないのよ！」

「文句言うなよ、これでも全力なんだぞ!」

「言い合いしてる暇があるなら手段を考えろ。このままだと、押し負けるぞ!」

いつの間にか増えていたもう一人の男が叫ぶ。この人、バリアが

張ってあったときに上で会ったわね。

「これ以上どうしろって言うのよ!? 他のポケモンを出しても重量オーバーで蔓がもたないわよ? えっと・・・、あんた誰よ!」

「それ、今言うことか・・・?」

大声で文句を言い合う。名前を呼ぼうとしたがわからないことに気づく。

ああもう! 今は名前なんてどうでもいいのよ!

そんなことよりこの状況をどうにかしないと!

八方塞がりかと思つたその時。

ズドドドドド!

と、鳥ポケモンに対して岩がふりそそぐ。

それはさながら流星のようにビルを削り、鳥ポケモンのエネルギーを奪っていく。

「これは・・・?」

「ポケモンの技・・・かしら?」

名前のわからない男とアタシは周囲を見渡す。

すると、地上にこつちを見上げている女の子が目映る。

あの子のおかげかしら?

「あいつ・・・。チツ、借りができたな。」

「知り合い?」

「・・・少しな。」

あまり話したくないのか、それ以上は黙りこむ。

「グリーン! ブルー! 今はそんな事を言っている場合じゃないだろ!」

「そうね、このタイミングを逃す手はないわよ。」

「ああ。やるぞ!」

「ビルが崩れる、その前に!」

「いけええええ!!」

レッドが叫んだ瞬間、フシギソウの体が光に包まれる。

これって……。このタイミングで進化!?

光が収まったときにはフシギソウはフシギバナに姿が変わっていた。

そして、エネルギーの削がれた鳥ポケモンに対して、進化したフシギバナの分のパワーが合わさった結果。

決着は一瞬。

そして、さつきまでの膠着が嘘のようにこっちの3体の攻撃が3体の鳥ポケモンをバラバラに吹き飛ばした。

そして、吹き飛ばされたポケモンはそれぞれ別の方向に飛び去っていった。

「解放されたのか……。よかった。」

レッドが呟いてる。

まったく。よく他人の心配ができるわね……。さつきまであれにやられそうだったってのに。

ふふっ。まあ、レッドらしいか。

「なに笑ってんだよ?」

「何でもないわよ。」

「そうか? じゃあ、さっさと降りようぜ。ビルが崩れそうだ。」

「そうね。」

そう言って地上に降りる私達。

いつの間にか、空は白くなり始めていた。

## 15話

ふう。

うまいことスピアーを瓦礫に閉じ込めて、上にあれを撃ち込めた。「あれがいわおとし・・・だと？まるで隕石ではないか。」

上を見上げたまま、サカキが呟く。

確かに、言われてみたら隕石って感じだね。

『つかれた〜。』

ふらふらと飛んできたきららを抱き止める。

これを使うときららがかなり消耗しちゃうんだよね。

でも、すごいはいかいこうせんはエネルギーがたまってないと全然威力が出ないし、なかなか使い勝手が悪い。

「ありがときらら。私のせいで無茶させてごめんね。」

『そうだよ。ほかのひとをなおすのはほどほどにしてよね!』

「うん。今度からそうするね。」

そうやって抱き抱えたきららを撫でる。

ささと。

「上は決着が着いたけど・・・。サカキ、あなたはどうするの?」

「計画の要である3体が解放された以上、貴様の足止めも必要なくなつた・・・か。」

そう言ったときに、ようやく瓦礫からスピアーが起き上がる。

「戻れスピアー。もうここに用はない。」

起き上がったスピアーをボールに戻す。

そして、そのまま私の前まで歩いてくる。

「どうするか・・・か。私はこのまま失礼させてもらおう。」

「逃がすと思ってるの?」

「その満身創痍な状態で・・・か?」

サカキは胸に抱えるきららに目を向ける。

ぐぬぬ。確かにミスタは倒されちゃったし、きららのエネルギー

空っぽだし。

「ハア・・・。どうしようもない、かな。」

「懸命な判断だ。」

「次は負けないからね。」

「フツ。負けてはいないだろう。」

「あなたを捕まえられない時点で負けてるようなものだよ。」

目の前にいるのに自分の力不足のせいで逃げられるのってものすごく腹立つね。

「そう言うな。これでも敬意をはらっているのだぞ？その気になれば、残りのメンバーで貴様を踏み潰すこともできる。」

「・・・そういえばそうだったね。」

「そういや、まだ4体も手持ちが残ってたっけ。あ、スピアーも入れたら5体か。」

何体連れてるのよこいつ。ずるくない？

「・・・次は逃がさないから。」

「そうか。」

サカキは短く返事をする、すれ違いざまに私の肩をポンと叩きそのまま歩き去っていった。

『よかったの？』

「うん。きららに無理はさせられないしね。」

『むちやをしたのはましろだよ？』

「そうだっけ？」

『そうだよ？』

「そっか。」

きららを撫でながら上を見上げる。

蔓の上にはもう誰も残ってない。

「ブルーはもういない・・・か。流星にまだその辺りに居るよね？」

私は踏み抜かれ荒れ果てた地面を迂回しながらビルの周りを歩き始めた。

ビルの正面に差し掛かったとき、そこではレッドやグリーン、オーキド博士やエリカ達がぐるぐる巻きになったロケット団の横で話を

していた。

あれ？ブルーはどこに行つたんだろう？レッドかグリーンなら知ってるかな？さつきまで一緒にいたんだし。

そう思つて近づく私に気づいたレッドが話しかけてきた。

「あれ、マシロ？なんでここに？」

「お前、気づかなかつたのか？」

その言葉に反応したのは、何故かグリーン。

ん？と言うことは、私に気づいてたのかな？

「え？なんのことだ？」

「気づいてないならいい。それよりマシロ。今回は借りておくが、必ず借りは返す。」

「貸したつもりはないからそのまま受け取つておいてよ。」

「そうはいくかよ。」

「??？」

借りとかいいからレッドみたいに頭に？マークでも浮かべといてくれないかなあ……。

いや、じゃなくて、ブルーのこと！

「そんなことより、ブルーは？一緒にじゃないの？」

「え、あれ？そういえばどこに行つたんだろう……？」

「ブルーと言うのは、オレ達と一緒にいたあの女のことか？」

ん？一緒にいたのにグリーンは知り合いじゃなかつたの？

「そうそう。おかしいな……。さつきまで一緒に居たと思うんだけど……。」

「わからないならいいや。自分で探してみるよ。」

とりあえず、歩いてみようかな。

そう思つて歩き出した私をきらが止めた。

『そつちじゃないよ。たぶん、あつち。』

「町の外れの方？」

『そうみたい。』

わざわざ一人で外れの方に行つたつてこと？

あ、もしかして、オーキド博士が居るからか。

そりや、どろぼうに入った家の家主には会いづらいよね。  
そう思いながら町の外れの方に歩いていくと、木の影に隠れた女の子を見つけた。

その姿を見た瞬間、私はきららを放って駆け出す。

『あわわ。ましろ、きゆうになげないでよー!』

空中で体勢を立て直して文句を言うきらら。

でも、そんなことはもう私の耳には入らない。

そして、私は木の影に隠れてたブルーに抱きついた。

「やっと思つた!」

――

まったく、新種のポケモンを手にいれようと思つたらとんだ目に遭つたわね……。

それも、よりもよつて鳥ポケモンなんて最悪!

それに……。なんである人がいるのよ!?

木の影からちらりと、視線を向ける。

そこには、グリーンに支えられたオーキド博士。

盗みに入った家の人と顔を会わせられるわけないし、早いところなどころからはおさらばしちやいましょう。

そう思っていた時、アタシに飛びかかってくる人影。

「やっと思つた!」

そう言つて私に抱きついてきたのは、白い髪を着物をきた女の子。

「会いたかつたよ、ブルー!」

そう言つて抱きついたままアタシを見上げてくる。

うーん、アタシの名前を知ってるみたいだけど、アタシ、こんな子

知らないわよ?

「あなた、誰?」

「え?私、マシロだよ……。覚えて……。ない?」

そう言つて目に涙をため、いまにも泣き出しそうになる。

ちよつと!?泣くのは得意だけど泣かれるのは初めてなんですけど



!?

「ちよつと!?!人の胸のなかで泣かないでよ……。」

そのままこの子の頭を撫でる。

マシロって言ったつけ? そんな知り合い、いたかなあ……?

そう思ったとき、ふと懐かしい気持ちになる。なんか昔、同じようなことがあったような……?

その時、ほとんど覚えていなかったマサラタウンでの出来事を少しだけ思い出した。

少しの間だけだけど、仲がよかった、一人の病弱な女の子。

「え?!マシロって、あの引きこもりのマシロ!?!」

「引き……。うん、その引きこもりのマシロです……。」

「あ、ごめん。引きこもりは言い方が悪かったわね。え、それより体は大丈夫なの? 確か、体が弱かったはずじゃ……。」

そう言うともシロは少しアタシから離れると、袖を掴んでその場でくるつとまわる。

「お陰さまでこの通り、二元気になりました!」

むむ、この子可愛いわね。今といいさつきといい、あざといし。天然なのか、狙ってるのか……。まあ、出てるところはないんだけど。

「それより。やっと思つけたって、アタシの事を探してたの?」

「あ、そうそう。」

そう言っアタシの前に来てくと歩いてくる。ううむ、あざとい。

「ブルー、博士の所からゼニガメ盗んだでしょ?」

「え!?!」

「鳥ポケモンにさらわれた子がマサラタウンに帰ってきてるのに挨拶も無しにポケモンを持っていったら気になるでしょ?」

「ああ、そっか。そっちから見たら、そんな感じになるのね。あれからこっちも色々あって……。アタシはマサラタウンのこと、ほとんど覚えてないのよ。だから、挨拶どころか、両親の顔もわからないのよね。」

「そっか……。もう6年も前だもんね。でも大丈夫! 私はブルーのこ

と忘れたことないから!」

「あ、ありがと……。」

何が大丈夫なのかはわからないけど、これは慰められてるのかしら。

「そういや、なんでブルーはゼニガメを盗んだの?」

「え? あー、えっと……。」

ポケモン凶鑑を貰って旅に出たトレーナーが羨ましかった。なんて言えないし……。

「ちよつとやることがあつてね。」

「そうなの? 私も手伝おうか?」

さーらつと信じたわね、この子。

普通、盗人の言うことなんて信じないでしょ。まあ、嘘は言つてないけど……。

「それじゃ、これを渡しておこうかしら。」

「これは?」

マシロの手に小型の機械とスプーンを押し付ける。

「小型の通信機よ。手を貸りたくなったら連絡するからちゃんと持つててよ?」

「スプーンは?」

「ロケット団のお姉さまからバッジのついでに頂いたものよ。いらないからあげるわ。」

「要らないけど貰ったの?」

「まあね。貰えるものは貰っておくものよ。」

アタシはプリンを出す。カメちゃんはずっきまで戦ってたから、無理はさせられない。

けど、この町にはあの人が居るから同じ町には居づらい。

「それじゃ、アタシはやる事があるから。」

「行つちやうの?」

「ええ。やることあるって言ったでしょ? それに、手元のそれがあるから会おうと思えばすぐに会えるわよ。」

アタシはマシロの手の中指を指差す。そのままアタシ

は膨らんで少しずつつ浮いていくプリンに捕まる。

「それじゃあね、マシロ。」

アタシはそのままプリンに捕まって上空に浮かぶ。

ちらりとマジロの方を振り返る。その小さな人影は、ビルでアタシたちを助けてくれた女の子の姿に重なって見えた。

あの時の女の子って、マシロ・・・？

だとすると、本格的に手伝ってもらおうことになるかもしれないわね。

――

あーあ、行っちゃた。

6年ぶりに会ったのにあつけない感じだったなあ・・・。

それに、私の事忘れてたみたいだし！

6年ぶりだし仕方ないかもしれないけど、実際に言われるとへこむや・・・。

「まあ、思い出してくれたみたいだからいいけどね。」

そう呟いて手元のアイテムを見る。

スプーンはよくわからないけど、通信機は嬉しいかな。

これで、いつでもブルーとお話できるしね！

とりあえず、スプーンはリュックにしまっておこう。要らないけ

ど、ブルーから貰ったものを捨てるなんてあり得ないし。

「それじゃ、皆のところに戻ろうかな。」

『おいかげなくてよかったの?』

『いいの。もう、追いかげなくても良くなったし。それにね?』

『??』

不思議そうに首をかしげるきららを捕まえて、胸に抱きかかえる。

「きららも疲れたでしょ?ミスタも頑張ってくれたし、これ以上は無理はさせられないから。」

私はもう一度きららを胸に抱えて、レッドたちの方に歩き出した。

## 16話

ヤマブキの戦いの後……。

あれから、数日。ロケット団は壊滅つてことになったみたい。奪われていたポケモンやロケット団が使っていたポケモン達は今、ジムリーダーが管理しているらしい。

奪われていたポケモンは、順次もとの持ち主へ。

ロケット団が使っていたポケモンはジムリーダーが正しく育て直すんだって。

「あなたにも手伝っていただけませんか？」

ってエリカに言われたけど、私はトレーナーって訳じゃないし。それに、ブルーが見つかったから旅する目的も無くなっちゃったしね。

そもそも、私はポケモンをまともに育てたことなんてない。

きからは最初から強かったし。

ミスタは勝手に強くなった。

私は何もしてない。

そんな私が人のポケモンを育てるのは無理だって。

「そうですか……。適任だと思っんですが……。」

「エリカ、人の話聞いてた？」

ってな感じのやり取りの後、私はエリカの所に居候することに。

というのも、

「寝たきりだったのに、起きてすぐに動いたんですから。しばらくは体を馴らす意味でも、ゆっくりしてください。」

ってエリカに言われちゃって。

ってことで、のんびりさせてもらってます。

ミスタも相手が沢山いて嬉しそうだし。

そう思いながら縁側でのんびり日向ぼっこをしていると、エリカが歩いてきた。

「マシロ、あなたにお電話です。」

「え、私に？ わざわざ私に用がある人なんていたかなあ……？」

「相手はカツラさんですよ。」

「ああ、はげのひとか・・・。」

「フフツ・・・。失礼ですよ。」

エリカは口を押さえて笑いをこらえる。

口を押さえている辺り、エリカもそう思ってたんだなあ・・・。

「もしもし?」

『もしもし、マシロ君か?療養中に済まない。急遽君に頼みたいことがあってね。』

「わざわざ私に?他の人じゃダメなの?」

『ダメ・・・ではないが、適任だと私は思っている。』

「とりあえず、話を聞いてからでもいい?」

『かまわない。ハナダ北西部が壊滅した話は知っているか?』

「話だけならね。」

『それともうひとつ。君は、研究施設で治したあのポケモンを覚えているかね?』

「あんな状態の子、忘れるわけないよね。」

『君に助けられたあの日。あのポケモン、ミュウツーが研究施設を破壊して逃げ出した。』

そっか、あのととき飛び去ったのはあの子だったんだ。施設を破壊できるときぐらいに元気になったんならよかったかな。

「それと、ハナダになんの関係が?」

『どうやらハナダ北西部を壊滅させたのはミュウツーのようだ。』  
「え!?!」

それは流石に元気すぎるでしょ・・・

『だから、君にミュウツーを止めるのを手伝ってほしい。』

「なるほど。治したんだから手伝ってことかな?」

『そこまで言うつもりはないが、君も気になるだろうと思ってるね。』  
確かに。あの時の子が暴れてるって言うなら気になるね。

「おっけー、手伝うよ。で、止めるってどうするの?処分・・・何て言わないよね?」

『そんなことはしない。ミュウツーを捕獲する。その為に君に声をかけたんだ。』

通信が終わり、エリカに声をかけられる。

「行くんですか?」

「うん。ほっとけないしね。」

「こちらには帰ってきますか?」

「うーん、状況次第ってことで。まあ、居心地はいいから、また来る…かな?それじゃ、行ってくるね。」

「お気をつけて。」

それじゃ、ハナダに向かおうかな。

ーハナダ北西部ー

ハナダまでミスタに乗ってひとつ飛び。

怖いのは相変わらずだけど、少しなれた…。かもしれない。

えっと、あの人は…。っと。いたいた。

目立つ頭でギャロップにまたがってる。

「お待たせ。早かったね。」

「ヤマブキの戦いの後から、ずっと追いかけているからな。」

「あれ?あの時ってまだハナダ北西部の事件も起きてなかったのに、どうやって追いかけてたの?」

「少々訳ありでな。この右腕が教えてくれる。」

そう言って右腕の袖を捲る。

その腕はひどいやけどの後のように、ひどく爛れていた。

「どうしたの、それ?」

「私の細胞を移植した際、ミュウツウの細胞に入り込まれたようだな。こいつのお陰で、奴の居場所が分かるんだよ。」

うわあ、痛そう…。なんか蠢いてるし。

と思ったら、ピンと真っ直ぐになっただし。

そして、その真っ直ぐになった先には1つの竜巻があった。

「もしかして、あれ?」

「どうやら、そのようだ。」

しかも、なんか竜巻から「うわああああ」って聞こえるんだけど、気のせいかな？

「なんか、悲鳴みたいなの聞こえない？」

「どうやら、私の空耳ではないようだな。」

「ちよつと見てくるよ。ミスター！」

私は、ミスタに乗って竜巻の上まで昇る。

竜巻の中ではレッドと6体のポケモンがぐるぐると回っていた。

こんなところになにやってるの？

とりあえず、助けないと。

「きさら、起きてるっ？」

『んー？』

ボールの中で寝てたきさららに呼び掛ける。一応起きてたみたい。

「ちよつと手伝ってもらえないかな？」

『んー……。わかった。』

ポンと、ボールからきさらが飛び出す。

とりあえず、この竜巻を何とかしないとね。

『とりあえず、さんわりぐらいしかかいふくしてないよ？』

「わかった。とりあえず、すごいはいこうせんの用意をお願い。」

『わかったー。』

きさらには、竜巻の上で用意してもらって、と。

「レッド？聞こえるー？」

「その声、マシロか!？」

「とりあえず、竜巻は何とかするから、後は自分で何とかしてね！」

「え!?!なんとか?！」

レッドには一応声をかけたし、大丈夫でしょ。

「きさら、用意は？」

『いつでもいけるよー？』

「狙いは渦の中心。とりあえず、1割ぐらいでいける……。かな？」

『おっけー!』

「それじゃ、発射！」

きさらから放たれる一筋の極光。

それは、渦の中心に突き刺さり少しだけ地面を削って竜巻を打ち消した。

そして渦の中心には、あの時に見たポケモン、ミュウツーが無傷で佇んでいた。

「あれを受けて無傷かぁ……。」

『すごいね！あのぼけもん！』

感心している私達の下で、竜巻から解放されたプテラがギャラドスを掴み、そのギャラドスをカビゴンとフシギバナの蔓が掴み、そのフシギバナにニョロボンがレッドを掴んでぶらさがり、そのレッドにピカチュウが掴まっている。

確かに何とかしろとは言ったけどね。そんな風になるとは思っていなかったなあ……。

まあ、カビゴンが重たそうだけど、無事に地上に降りていったから大丈夫でしょ。

とりあえず、ミスタには少しずつ下に降りてもらって。

「それよりも、だよ。」

『あのぼけもん、こつちをみてるよっ。』

「だよねえ……。」

竜巻を打ち消したからか、ターゲットがレッドから私達に変わったみたいなんだよね。

なんと言うか、降りてくるのを待ってる？

降りたくないなあ……。

「ギャロップー！」

そう思っていると、カツラさんがギャロップに乗ったままミュウツーに突っ込む。

ミュウツーは突進をバリアで受け止めると、どこからともなくスプーンを作り出し、ギャロップを弾き飛ばす。

私は、ギャロップが吹き飛ばされた先にミスタを着々させると、レッドも駆け寄ってくる。とりあえず、ポケモンはボールに戻したみたい。

「カツラさん、大丈夫？」



「ああ。それよりもレッド？どうしてここに？」

「あはは、強いポケモンつて聞いてつい……。」

「全く……。今のを見たらどう？複数相手だとエネルギーで竜巻を作り出し、一体だとそれをスプーンの形に収束させる。これでは、普通にミュウツーを捕まえるのは無理だ。」

なるほどね。数で押しきれないし、一対一だとまず勝ち目がないと。

「それじゃ、どうするの？わざわざ私を呼んだぐらいなんだから、何かしらの手はあるんだよね？」

「もちろんだ。それが、これだ。」

カツラさんが取り出したのはマスターボール。ポケモンなら必ず捕まえられるっていう噂のボール。

実在したんだなあ……。

「本当は、私が突っ込んでいる間に、君にこのボールを投げてもらい、君のきららのサイコキネシスでボールをぶつける作戦だったが……。」  
「なるほどねえ。」

「でもそれじゃ、カツラさんが！」

「私の事は構わんよ。」

まあ、あんな竜巻を作る相手に一人で突っ込むとか危ないとは思っけどね。

と思っつてミュウツーの方を見ると姿がない。

その瞬間、カツラさんはさっと右腕の袖を捲る。爛れた右腕は後ろを指し示す。

「後ろだ！」

「ええ!？」

「きらら、受け止めて！」

カツラさんはレッドの頭を押さえてミュウツーとは距離を取るようにかわす。

その間に、きららがサイコキネシスでスプーンを受け止める。

「きらら、いけそう？」

『ちよつときびしいかも。』

「そっか。仕方ないかな……。ミスタは嫌かもしれないけど、二人で攻めるよ！」

「――」

やむなし……。って言ってるのかな？ミスタ的には2対1は嫌いだろうけど、今回は我慢してもらおうしかないかな。

「ミスタ、一旦押し退けるよ！ハイドロポンプ！」

スプーンを受け止めているきららの横から至近距離で技を撃ち込む。

流石に受けきれなかったのか、ミュウツーはそのまま大きく吹き飛び壁にたたきつけられ、砂ぼこりが舞う。

「カツラさん、その腕！」

「少々訳ありでな。今はそれよりも、だ。」

「ミュウツーはこつちで何とかするから、隙を見て捕獲して！」

後ろで話す二人に叫んで、ミスタに飛び乗る。

「いくよ、きららー！ミスター！」

ミスタは私を乗せて、ミュウツーに向かって飛ぶ。

その瞬間、砂ぼこりを切り裂いてエネルギー弾が飛んでくる。

「きららー！」

声と同時に私達の前に飛び出るきらら。そのままサイコキネシスで横に弾く。

「そのままスピードスターー！」

そして、スピードスターを放つ。

それらはミュウツーに向かって一直線に飛んでいくが、スプーンで全て弾かれる。

その間にミスタがミュウツーに突っ込む。

「痛いかもしれないけど、お願いねミスタ。きらら、援護はよろしく！」

「――」

『まかされたー！』

ミスタは体ごとミュウツーに突っ込むが、スプーンで受け止められる。

拮抗は一瞬でミスタはスプーンで弾き飛ばされる。

「うわっ、とと。」

私は、ミスタにしがみついて落ちないように踏ん張る。

その間にきららはミュウツをスピードスターの渦に閉じ込めた。

「ナイス、きらら！ミスタ、あれの用意お願い！」

「……」

軽い機械音の後にミスタはエネルギーを集めだす。今のうちに降りて……と。

どうやらミュウツは、スプーンでスピードスターをはたき落とし  
てみたいで時間がかかっている。きららさままだね！

「ミスタ、用意はいい？姿が見えたら撃つよ？きらら！一発だけの  
でっかいその2、お願い！」

「……」

『りようかい！』

二人の返事が重なって返ってくる。頼もしいね。

用意はできているから、後はタイミングだけ。

そして、最後の星を叩き落としたミュウツが、こっちに飛びか  
かってきた。

「今！」

合図と共に、ミスタからすごいはいこうせんが放たれる。

それは、さっき撃ったきららの技よりも少しだけ強く、一直線に  
ミュウツに直撃した。……でも。

「あれ、バリアみたいなので防いでる？」

『すごいね！このわざふせげたぼけもんもはじめて！』

「きらら、感心している場合じゃないよ。その2、手加減なしでお願い  
ね。加減なんてしてる場合じゃなさそう。」

『いつでもいけるよ？』

「なら、ミスタの技が止まったときに畳み掛けるよ！」

『おっけー！』

話している間にミスタの技が止まる。

「きららー！」

『うん！』

そして、合図した瞬間に空から1つだけ、直径5メートルはありそうな岩がミュウツーに押し寄せる。

それは、少しの間だけバリアーで押し返されたが、少しずつバリアーにヒビを入れていく。

「カツラさん！ボールの用意は!？」

「もうできている。バリアーが砕けた瞬間を狙う。」

「すげえ……。」

カツラさんはギャロップに乗って、いつでも駆け出せるように準備をしている。

レッドはその後ろでなんか呟いてる。

パリン!!

ドカーン!!

その時、バリアーが砕ける音が響き渡る。

そして、岩を受けきれずに衝突し、砂ぼこりをあげる。

「ギャロップ！」

カツラさんの声に、ヒヒーンといなくなると、ミュウツーに向かって駆け出していく。

「ボールを当てさえすればいい。突っ込め！」

そして、砂ぼこりに突っ込もうとした瞬間、砂ぼこりを引き裂くようにスプーンを振り回すミュウツー。そのスプーンはそのままギャロップを弾き飛ばした。

「しまった！」

「まだまだよ、オレが!」

今度は弾き飛ばされたギャロップからレッドが飛び降りる。その手にはマスターボールが握られていた。

「いけっ！」

そのままレッドはミュウツーに向かってマスターボールを投げる。

しかしそれは、ミュウツーのスプーンで上に弾かれる。

「くそっ。ピカ、頼む！」

「ピッカー！」

レッドの背中を蹴り、弾かれた先にピカチュウが飛び出す。ピカチュウはそのまま尻尾を叩きつけてマスターボールをミュウツーに打ち返す。

そして、マスターボールはミュウツーの額にぶつかり、ミュウツーをマスターボールに収めた。

ふう。

とりあえず、ミュウツーの捕獲には成功……かな？でも、そのかわりに、きらら達に無茶ばかりさせてる気がする。

『ましろく。さいきんたたかいはっかかりで、えねるぎーがたまらないよ……。』

ふらふら飛んでくるきららを抱き止める。

「ありがとう、きらら。ごめんね、なんか最近忙しくて。」

『ちようききゆうかをしようする……。』

「フフツ。どこでそんな言葉覚えたの？」

『えりかのところく。なんかいっぱいほんがあったよ?』

「そっか。それじゃ、長期休暇をあげましょう！とりあえず1週間！」

『やった〜!』

そう言うと、ボールに戻っていく。

確かに。最近は色々とあってずっと戦い続きたったからね。お休みは大事。

流石にもうなにも起きないことを願いたいね。

「マシロくん、無事か？」

「そっちは……、大丈夫そうだね。レッドも無事？」

「あ、ああ。オレは大丈夫だけど……。」

ん？なんか歯切れが悪いけど、どうかしたのかな？なんか呆然とした顔してるけど。

「実はマシロって、すごいやつだったんだな……。」

「急に何言ってるの？それより、カツラさん？」

「なにかね?」

「その子のこと、任せてもいい?」

「無論だ。」

すぐに言い切るカツラさん。元ロケット団だからって疑いの目で見てたけど、本当に改心したみたい。これなら信用できそうかな。

「それじゃ、私は帰るね。最近はロケット団と戦ったり、ミュウツウを治したりで疲れたよ。」

ミスタもボールに戻しておく。ミスタにも無茶させたからね。とりあえず、帰りは歩き・・・かな?

「それじゃあね、カツラさん。レッドも、無茶ばかりしないようにね。」

そのまま手を振りながら、私はハナダを後にした。

空の旅に慣れたあとの徒歩帰宅は、結構疲れしました。

## 17話

ミュウツーを捕獲した後。

あの後私は、結局エリカの所に帰った。

なんやかんや言っても、居心地はいいし、ミスタは満足するし、きららはのんびりできるし。

「日向ぼっこが最高だよねー。」

『ねー。』

あれから1週間。

きららもボールから出てくるぐらい元気になった。ミスタはエリカのポケモン達と毎日バトル。私は縁側で天日干しされる毎日。

これだけ気持ちいいんだから、天日干ししたお布団だって、そりや気持ちいいに決まってるよね。

そうやって縁側で溶けていた私の横に、エリカが歩いてくる。

「あらあら、今日も溶けてますねえ。」

「疲れも何もかもが溶け出てるよお・・・。」

笑いながら話しかけてくるエリカに、やる気のない返事を返す。

だってきららも元気だし、気にすることもなくなっただんだよ？

そりや溶けるって。

「ところで、なにか用事？」

「用事というほどではないのですが、セキエイには向かわなくてよかったですか？」

「セキエイ・・・？ああ、ポケモンリーグか。いいよ、そんなの。柄じゃないし。」

「そうですか。マシロなら、きっと優勝できると思ったんですが・・・。」

「エリカって、私の事持ち上げすぎじゃない？」

「そうですか？マシロは自分の事過小評価してると思いますよ？」

「すごいのは私じゃなくて、きららとミスタだよ。」

最近、エリカは私の事を持ち上げてくる。

何かさせたいのか何なのかはわからないけど、そんなに持ち上げてどうしたいのやら。

「あと、ポケモンリーグにブルーという方が出場しているらしいですよ。」

「え？ブルーが？」

「はい。確か、お知り合いのかたでしたよね？」

「そうだね。・・・そっか、ブルーが出てたんだ。」

私は縁側で溶けながら考え込む。

写真やらなにやら売ってたら嬉しいし、ポケモンリーグは賞金も出るから・・・。

やっぱりお金が必要なのかな？

そういうことなら私も出たらよかったかなー？と思いつながら立ち上がる。

「行くんですか？」

「ブルーが出てるなら、応援ぐらいしとかなないとね。」

「その方が好きなんですネ。」

「そうだよ。私の初めての友達で、ずっとずっと追いかけてきた、とっても大事で大好きな人。と言つても、今はもう追いかけてなくても良くなったんだけどね。」

「フフツ、そうですか。」

「うん。やりたいことがあるつて言ってたから、邪魔しちや悪いかなーつて。でもまあ、応援ぐらいならいいでしょ！」

私はミスタを迎えに歩き出した。

ーセキエイこうげんー

あの後、エリカのポケモン達とバトル中のミスタにお願いして、セキエイまで連れてきてもらった。

流石に長距離飛行は疲れたようで、今はボールでお休み中。きららも人混みの中で邪魔になるといけないからボールの中。

私もようやく慣れてきたのか、ミスタの上でもあまり怖くなくなってきた。

『只今より、準決勝1回戦。ブルー選手対ドクターO選手！』

おっと、ぎりぎりセーフだね。



もう少し遅かったらブルーの勇姿を見逃すところだった。エリカに感謝だね。

会場に入ると、中は超満員。うーん、前の方には行けそうにないね。仕方ない。出遅れた私が悪いから、ここで立ち見しよう。

中央のステージでは、プリンとオニスズメの戦いが繰り広げられていた。

プリンがトライアタックを放ち、オニスズメに命中する。しかし、オニスズメは怯むことなく、みだれづきを浴びせる。

耐えきれなかったのか、うたうでオニスズメの動きを止めようとするけど、鳥ポケモンには届かない。

そのままプリンのトライアタックでオニスズメを狙うが、最初に当たったのは偶然だったのか、一向に当たらない。

んー、なんかブルーと、あれは・・・レッドかな？二人が言い合いをしてるけど、ここからじゃよく聞こえない・・・。

仕方ない。迷惑だけど、無理やり前に行こう。  
ちよつとごめんねー。

ふう、ようやく前にこれたと思ったたらカメックスがハイドロポンプの噴射の勢いで空を飛んでる。へえ、そんなこともできるんだ。

「オウムがえしー！」

「反射や！オニスズメがエネルギーを反射する壁を作つとる！」

あ、マサキもいたんだ。解説ご苦労様。

でも、あのドクターOつて人。どこからどうみてもオーキド博士じゃない？なんで顔を隠してポケモンリーグに出場してるんだらう？

と思っていたら、反射したハイドロポンプでカメックスが撃墜される。

そして、技を撃とうと近づいてくるオニスズメに対して頭を抱えて尋常じゃないくらいに怯えだす。

「いや・・・こないでー！！！」

「やはり、鳥が怖いかブルー。」

様子が変わったブルーに周りがざわつきだす。

「6年前、マサラから5歳の少女が大きな鳥に連れ去られる事件があった。当時、同じ年だった孫がおったから、他人事とは思えなくての。ずいぶん捜索に協力したから、今も姿をよく覚えとるよ。」

そして、スツと写真を取り出す。そして、顔を隠しているほうがいいがスルリと剥がれ落ちる。

「まさかその子がゼニガメを盗みに入って防犯カメラに写るとは思いもよらなかつたがね。あんなに怖い思いをしたんじゃ、鳥が苦手になつても無理はないのう、ブルー。」

「くっ……。ええい、カメちゃん！みずでっぽう！」

「オウムがえし！」

「きやあ！」

そのままカメックスのHPは0になり、勝者はオーキド博士に決まる。負けが決まると、ブルーはガクツと膝から崩れ落ちる。

「さて、説明してもらおうかの。ポケモンを盗むなら他でも手に入るものを、どうしてわしの所から盗み出したのか。」

ブルーはうなだれながら、ポツポツと話始める。

「くやしかったの……。知らない、遠いところでアタシは育ったわ。覚えているのは自分が生まれた町、マサラタウンという名前とおぼろげな景色だけ……。」

ある時、同じ歳のマサラタウンの二人の男の子がオーキド博士からポケモンと凶鑑をもらって旅だったことを知ったわ。」

ここまで話すと、堪えきれなかったように涙を流しながら叫んだ。「アタシだつて！アタシだつて、マサラのトレーナーだもの！二人とおなじことがしたかったのよ！博士にポケモンをもらって、凶鑑を持って！冒険の旅に出たかった！」

そう叫んだ後うつ向いたままひつく、ひつくと泣き続けるブルー。そんなブルーに、博士はそつと近づきブルーの手をとる。

「ブルー。どんな理由があつても、人を騙したり盗ったりしちやダメだ。もうしないと約束できるなら……。」

「あ……。」

博士が手をどけると、ブルーの手にはポケモン図鑑が握られていた。

「3つ目の図鑑だよ。これで君も、マサラノトレーナーだ。」

それを見た瞬間、ブルーは博士に抱きついてもう一度泣き出した。

「うわああーん。」

「君が無事で何よりじゃ。」

そう言っつてブルーの頭を撫でる博士。

観客席では何故かマサキが「わかるわその気持ち！」ってもらい泣きしてる。なんで？

まあ、マサキはほつとこう。それよりも、ブルーが負けちゃったか。勝っつてほしかったなあ。

「でも……」

博士、ブルーが鳥ポケモンを苦手だと思っつて鳥ポケモンで出場したのかな？

なんか、ずるくない？

というか、ブルーのトラウマえぐつて勝つとかひどくない？  
ちよつと文句言いに行こう。

ー控え室ー

控え室の前でドアをノックしようと思っつたら、博士とグリーンの話し声が聞こえた。

「オレとレッド。勝つた方がおじいちゃんと決勝か。」

「いやー、わしは昔1度この大会で優勝しとるし、もういいよ。棄権するから、決勝戦はお前らでやつてくれ。」

「……願っつてもないな。」

そのまま控え室から出てくるグリーンとぶつかりそうになる。

「おつと。」

「……マシロか。お前はこの大会にエントリーしてなかつたんだな。どうせならお前ともう一度戦いたかつたんだが。」

「え？うーん、ミスタだつたらよろこんでやつてくれると思うけど……。」

「ミスタ？マシロの新しい手持ちか？」

「あ、うん。」

「そうか。この大会が終わったら改めて挑戦させてもらおう。」

「わかった。ミスタにお願いしておくよ。博士は中？」

「ああ。おじいちゃんに用か？」

「うん。ちよつと・・・ね。」

「そうか。それじゃあ、オレは行くぜ。」

「がんばってねー。」

ステージに向かって歩いていく背中に声をかけると、振り向かずに片手をあげて決勝戦のステージに向かっていった。

さてと・・・

ーオーキド視点ー

「はかせー、いるー？いるよねー？」

「おお、マシロくんか。どうかしたかの？」

「どうもこうもないかな？さつき棄権するって聞こえたけど？」

「ああ。わしはもういい。後は若いもんに任せるよ。」

団扇をパタパタとあおる。ふう、いい汗かいたわい。

「ふーん。棄権するくせに、ブルーのトラウマを抉るような事までしたの？」

マシロ君のプレッシャーに、思わずパタリと団扇を落とす。さつきまでとは違う汗が背中を伝う。

「いや、落ち着くんじゃ。これには深いわけがあつての・・・。」

「へえ・・・。深いわけねえ・・・。とりあえず、聞くだけ聞こうかな？」

「う、うむ。まず、わしはもう若くない。普通に戦ったらブルーにはまらず勝てんじやろう。しかし、ブルーに勝てんと本音を引き出すことができんと思つての。」

「一応、理由があつたんだね。」

「そういうことじゃ。」

ふう、落ち着いてくれたか。

相変わらずブルーの事となると手がつけられんの。やれやれ。

「ほんとはミスタにぼこぼこにしてもらおうと思っただけどね。さつき先約ができちゃったし、今日は見逃しておくね。」

「あやつは容赦がないから勘弁してくれ……。」

研究所がめちやくちやになつたときの事を思い出す。あの時は掃除が大変じゃったわい……。

「それに、ポケモン凶鑑を貰ってブルーも嬉しそうだったし……ね。」

「それはお主のせい……というか。マシロ君のおかげじゃよ。」

「私？」

心当たりがないのか、首を傾げる。

「ポケモン凶鑑は量産できるものではなくての……。今はあの3台しかないのじゃ。それを君が、ブルーの搜索の邪魔になると受け取らなかった結果、ブルーの手に渡った。つまり、マシロ君がブルーの事を思って受け取らなかったからこうなったんじゃ。」

「なんか、私のお下がりをみたいに聞こえて嫌だな。その事、ブルーには言わないですよ？」

「わかっておるわい。本当に君はブルーの事になると目の色が変わるのう……。」

「当たり前でしょ？だって。」

「私の初めての友達なんだから!!」

## 18話

ポケモンリーグが終わり、表彰式のあと。

会場の中でブルーを探していた私は、ちょうどブルーに呼び止められた。

「マシロ、少しいいかしら?」

「あ、ブルー! 私も探してたんだ! 3位おめでとう!」

まあ、博士の事は祝わないけどね。今でも根に持つてるし。子供のトラウマを抉るのは大人のすることじゃないよ。

「あ、ありがと。まあ、博士が棄権してからの繰り上げ3位だから、めでたいものじゃないのだけれどね。」

「人のトラウマに付け込む人のことは気にしないほうがいいよ。」

「あなた、博士に対しては辛辣じゃない?」

なんだかんだ、長い付き合いだからね。そんな感じにもなるよ。

「いいのいいの。それで、私に用事?」

「あ、そうだった。マシロにお願いしたい事があるのよ。」

「いいよ、何をすればいい?」

「話が早いのは助かるのだけれど……。せめて話を聞いてからお願いを聞きなさい。そのうち悪い人に騙されるわよ?」

「大丈夫だよ、無条件で助けるのはブルーだけだから!」

何故か溜息をつくブルー。なんでだろう?

「まあいいわ。マシロ、あなたも覚えてるわよね? アタシをさらった大きな鳥の事。」

「うん。忘れたことなんてないよ。」

「あれを操っていたトレーナーを探してるの。」

「あれ、操ってるトレーナーがいたの? はた迷惑な……。」

「そうなのよ……。で、アタシが連れていかれたのはジョウト地方。そこであなたにジョウトで調査をお願いしたいのよ。」

「おっけー。ジョウトに行けばいいんだね? ところで、ブルーはそのトレーナーについて何か知らないの?」

「それがね、変な仮面を付けてたし、アタシ達も変な仮面付けられたし

で詳しくわからないのよね……。」

ふーん、変な仮面をつけてたのかぁ……。それだと、顔もわからないか。それを自分達にもつけられた……。ん？

「達？他にも誰かいたの？」

「ええ。他にもいたんだけど、今はそれは置いておきましょう。とにかく、そのトレーナーの事を調べる為にお金も貯めたし、力もつけた。」

「あ、だから色々やってたんだ。」

「そういうこと。あいつのお膝元であるジョウト動いたら、せつかく逃げ出したのに見つかるかもしれないしね。」

なるほどねえ。だからわざわざカントーで写真を買ってたのかぁ……。

「という事で、お願いできるかしら？」

「おっけー。」

「話は終わったか？」

私がブルーのお願いを聞き終わったぐらいにグリーンが話しかけてきた。

あ、そういや控え室で挑戦するとか言ってたっけ？

「ちよつとグリーン？今はアタシの話の途中なんだけど？」

「だから終わったか、と聞いただろう？」

「終わってないわよ。長くなりそうだし、そっちの用事を先に済ませたいわよ？」

「助かる。マシロ、いつかのリベンジマッチだ。外に出ようぜ。」

そう言うのと、背中を向けてさっさと歩いていく。その後ろを少し離れて追いかける私とブルー。

「リベンジマッチって……。マシロ、グリーンに勝ったことあるの？」

「一応リーグ準優勝者よ？」

「あー……。ちよつと前、リザードンがまだヒトカゲだった頃にね。」

「そう。ま、細かいことはいいわ。あなたがグリーンよりも強いなら、さっきのお願いもあてにさせてもらおうわよ？」

「任せといてよ。ブルーのお願いなら全力だよ？」

「フフツ、ありがと。」

「—————」

会場の外に出た私達。

会場の近くだと未だに人が多いから、道を外れて適当な場所に行く。

「まあ、この辺でいいだろう。」

グリーンが振り返る。

リーグ会場自体が山の麓だし、遮蔽物なんてないから、どこでも良さそう。

「それじゃ、始めるか。マシロの手持ちは何体だ？」

「2体だよ？」

「に・・・？え、2体？本当か？」

「ほんとほんと。お陰で色々と苦労したよ。」

何故か驚いてるけど、ホントなんだからしようがないじゃん。

まあ、捕まえなかった私が悪いんだけど・・・。

「それじゃあ、2対2の入れ替え制でやるか・・・。マシロも、それでいいか？」

「いいよ。先に2体とも戦闘不能になったら負け？」

「ああ。それじゃあ、いくぞ！」

「お前からだ、キュウゴン！」

「お願いね、ミスタ。」

同時に繰り出したのはキュウゴンとミスタ。

相性は有利だけど、グリーンはどう出るかな？

「タイプは不利だが、やれるな？」

「ゴン！」

グリーンの声に気合いの入った返事をするキュウゴン。なにあれかわいい。

「いけっ！かえんほうしゃ！」

「ミスタ、ハイドロポンプ！」



キュウコンの炎とミスタの水がぶつかり合う。結果はまあ、当然のようにミスタのハイドロポンプが押しきる。

そのまま命中止し、キュウコンが少しだけ怯んだ。

「ミスタ、休ませないで！十万ボルト！」

畳み掛けるように攻撃を浴びせる。

「キュウコン、堪えろ！9本分を全部まとめて撃ち出す！」

しかし、攻撃を受けながらキュウコンは9本の尻尾の炎を1つにまとめ、大きな炎を作る。

「今度はごつちの番だ。だいもんじ！」

そして、キュウコンは電撃を受けながらも、だいもんじを放つ。9本分の炎の塊は技を出し続けているミスタに命中すると、大の字に広がりミスタを焼きつくそうとする。

しかし、キュウコンは技を出し終わるとドサツとその場に崩れ落ちた。

「よくやった、キュウコン。・・・あつちはどうだ？」

グリーンはキュウコンをボールに戻す。

炎が収まると、そこでは少しだけ焦げたミスタが体を振っている。すずを払ってるのかな？

「ごつちは大丈夫だね。」

「効果はいまひとつ、か。ならば・・・。」

グリーンが2体目のボールを構える。そして、そのボールを投げようとした時。

「グリーン。姿が見えないと思ったたらこんなどこにいたのか。ん？マシロとポケモンバトルしてるのか？いいな、オレも混ぜてくれよ。」

と、叫びながらレッドが会場の方から走ってくる。なんか増えた。

「今はオレの番だ。戦いたければオレの後にしろ。」

「わかった。マシロ、後でオレともやろうぜ？」

「え、いや。連戦はしんどい。」

「そんなこと言うなよ。」

増えたと思ったら何故か対戦を申し込まれた。嫌だよ。

「それじゃ、ダブルバトルでいいんじゃないかしら？」

「「え?」」

唐突に挟まったブルーの言葉に、3人の声が重なった。

「レッド・グリーン対マシロでちょうどいいでしょ?それに、私もマシロに用があるから、あんまり長くなるのも困るしね。」

「よし、それでいこうか。ブルーが困るのは困る。」

「「え?」」

一も二もなく同意する私に、今度は二人の声が重なる。

ブルーを待たせてるんだから、グリーンの後にはレッドの相手なんかやつてられないや。

「グリーンも、それでいいよね?」

「いや、オレは前回のリベンジを」

「い・い・よ・ね?」

「はあ・・・わかった。レッド、オレの足を引っ張るなよ?」

「そこないとな!頼んだぜ、グリーン!」

物分かりがよくて助かるよ。

あれ?これって、リーグ優勝者と準優勝者のコンビとのバトル?

「レッド、二人がかりで勝てないなんて事になったら笑い話にもならないぜ?」

「わかってる。グリーンも、1人だからって油断するなよ?」

うーん、ブルーが困るからってダブルバトルを受けたけど、普通に負けそう。

1人なんだから、手加減ぐらいしてほしいなあ・・・。

でも、受けちゃったものは仕方がない。

「お前とのタッグなら、こいつしかかないな。行けっ、リザードン!」

「だったら当然。いけえ、フッシー!」

グリーンとレッドがそれぞれ、リザードンとフシギバナを繰り出す。あの2体は博士のところにはいたポケモンだね。

博士の所に居たときに比べたら、すっかり大きくなっちゃって。

「ミスタ、大丈夫?」

「ー」

うん、元気そう。むしろ、いつもと違う相手だからかウキウキして

る。

「連戦、お願いね。あとは……。おいで、きららー!」

きららをボールから出す。

今日は人混みに行くから、ボールのなかでおとなしくしてもらってただけど、どうしてこんなことに……。私

のせいだよ、ごめんなさい。

「きらら、今日もミスタとタツグでお願い。」

『りょーかい!あ、もりでたたかっただー!』

「そうそう。そのトレーナーのリベンジマッチだって。何故かダブルバトルになったけど……。私

『ふーん?よくわからないけど、わかったよー。』

私の前にはミスタときらら。

グリーンとレッドの前には、それぞれリザードンとフシギバナが並ぶ。

「レッド、スターミーは任せるぞ。リザードン、いつかの雪辱戦だ。」

「OK。引き受けた。」

言うやいなや、リザードンがきららに向かって突っ込んでくる。

まあ、前回は遠距離攻撃は全部当たらなかったからね、そうなるか。

「ミスタ、迎え撃つよ!」

きららの前にミスタが飛び出す。そして、リザードンに技を出そうとしたとき。

「フツシー、邪魔をさせるな!」

フシギバナのつるがミスタに巻き付いて、フシギバナの方には引き込まれる。

「ミスタ!」

「フツシー、畳み掛けろ!はっぱカッター!」

「ちよつと、横やりはするいでしょ!れいとうビーム!」

引き寄せられながら、はっぱを凍りつかせて防ぐ。ついでにつるも凍らせていく。

「余所見していいのか?リザードン、ほのおのパンチ!」

「ああ、もう忙しい!きらら、サイコキネシスで投げ飛ばして!」

拳を構えたりザードンをサイコキネシスで押し返し、そのままフシギバナの方に投げ飛ばす。

「フツシー、リザードンを！」

「こっちも畳み掛けるよ。きらら、スピードスター！」

フシギバナの方に飛んで行くリザードンの足につるが巻き付く。

そして、フシギバナを中心に円をかいて

遠心力でもう一度きららの方に向かって投げ飛ばす。

すれ違ったスピードスターはフシギバナに命中し、凍ったつるを断ち切る。

「リザードン、炎を纏え！」

「ミスタ、用意はできてる？きららもいいね？」

「フツシー、オレ達も！」

きららに向かって炎を纏ったりザードンが飛んでくる。

ミスタとフシギバナは共に光をためている。もつとも、太陽と星の光の違いはあるけどね。

「突っ込め、リザードン！」

「フツシー、ソーラービーム！」

「きららは加減してよ！すごいはいこうせん！」

きららのビームとリザードンがぶつかり合い、その向こうではミスタとフシギバナのビームがぶつかり合う。

その結果、リザードンはフシギバナの隣まで吹き飛ばされ、逆にミスタはきららの隣まで吹き飛ばされた。

「ちっ、あれでも押し負けるか……。リザードン、まだいけるか？」

「よくやった、フツシー。」

「あの技が押し負けるの初めて見たかな？ミスタ、大丈夫？」

きららの隣で倒れるミスタに声をかける。

ミスタはその場で立ち上がると、機械音をならす。ん、あっち？

「ああ、フツシーの花が！」

レッドの声を聞いて、フシギバナの方を見ると、フシギバナの花が根元から半分程凍ってる。上の方はソーラービームで溶けたのかな？

「というか、凍ってたのに押し負けたってことはかなり強いね、あのフシギバナ。」

「それに今日は天気がいいから、ソーラービームもかなり強化されてたかな？」

「その横のリザードンは、一応起き上がったけど飛ぶのは無理そう。」

「レッド、こっちは後一発が限界だ。」

「フッシーも花とつるが凍ってるし、できることは少ない……。あつちがスターミーにはダメージを与えたけど、もう一体の方はノーダメージ、か。ところで、グリーン。」

「なんだ？」

「もう一体のあのポケモン、何て言うんだ？」

「知らん。というか、マシロもわからんらしい。」

「そうか……。あれ、強すぎない？」

「それは知っている。でも、だからといって尻尾巻いて逃げられるかよ。」

「そうだな、勝つぞグリーン！」

「あつちは作戦会議かな？」

「うーん、ミスタもただではやられてないけど流石にもう無茶はできなさそう。」

「きららは全然元気そうだから、きららに頑張ってもらうしかないね。」

「マシロ、次で決着をつけるぞ、真っ向勝負だ。レッド、用意はいいか？」

「ああ。と言っても、ソーラービームしか撃てないからな。」

「いつでも来なよ、二人とも。」

「返事を返し、私はミスタときららに声をかける。」

「ミスタ、後一発だけ頑張つて。きららもよろしくね。」

「ー」

『うん、まかせといて！』

うん。気合いは十分だね。  
それじゃ、最後だ。

「かえんほうしゃ！」

「ソーラービーム！」

「ハイドロポンプ！」

炎と草のエネルギーがハイドロポンプとぶつかり合う。このままじゃ、押し負ける・・・けど！

「きらら！お願い！」

『まかされたー！』

ぶつかるハイドロポンプをサイコキネシスで渦を巻くように動かし、

渦を巻いたハイドロポンプは相手の技を飲み込んでそのまま押し返す。

そして、そのままフシギバナとリザードンを

飲み込んだ。

「なんだと!？」

「これは、ミュウツウの竜巻と同じ!？」

そう、先日戦ったミュウツウの使った技を真似てみたんだけど。なんか、思ってたよりも強いね。

遠心力に絡めとって技を無力化して、そのまま相手に押し返してるし。さしずめ、ハイドロウエーブってどこかな？

収まったときには目を回したフシギバナとリザードン。ってことは。

「私の勝ち、かな。」

「そして、オレ達の負けか。」

「ちくしよー、やっぱりマシロは強かったんだな！」

2体をボールに戻して歩いてくる二人。

お疲れさま、ミスタ、きらら。私もボールに戻しておこう。

「これで2連敗か。これでは、借りを返すのもいつになるのかわからんな。」

「返さなくていいって言ってるのに。」

「マシロ、すげえじゃん！ミュウツウの技を真似するなんて！」  
「大体きららのお陰かな。」

二人と話していると、バトルを見ていたブルーが駆け寄ってくる。  
「ちよつと、マシロ！あなた、そんなに強かったの？」

「いや、強いのは私じゃなくてきらら達だし。」

「そんなのどっちも同じじゃないのよ。とにかく。グリーンもレッドも、用が終わったならマシロを借りてくわよ？」

「ああ。マシロ、次は負けないからな。」

「そうだな。はあ、ジムリーダーまでの道は遠そうだ……。」

ふーん、レッドはジムリーダーになりたいのか。ミスタのあれに押し勝ったんだから、実力は申し分ないと思うけどなあ。

「それじゃ、マシロ。乗って？」

隣でブルーがプリンをボールから出す。

「ん？ここじゃダメなの？」

「あのね、あなた達が派手にやったから目立ってるわよ？」

そう言われて周りを見ると、道を外れてる割にはちらほらと観客が……。いつの間に。

「はあ。リーグ優勝者と準優勝者が2対1で負けてるなんて、話題性抜群じゃない？リーグにも出てないあなたにはあまり目立ってほしくないのよ。アタシの切り札としてね。」

そう言うと、膨らむプリンの上に私を押し。

私はプリンの上に抱きつくように乗っかると、ふわふわと浮き出す。ブルーはプリンの足に捕まった。

それにしても、ブルーの切り札……。フフツ……。  
思わず顔がにやける。

ブルーに頼られると、やっぱり嬉しいなあ。

ー

上の方まで飛ぶと、下からブルーが上ってきた。

「よいしょっ……。ここまでくれば、野次馬もいないでしょ。それで、どこまで話したっけ？」

「ジョウトに行ってほしいって所。」

「そうそう。ジョウトで色々調べてほしいんだけど……。まず、大前提。さつきみたいに目立つことはしないように。」

「うん。わかった。」

確かに、大会直後に優勝者と準優勝者が敗北なんて目立つよね。それも、無名の人だと尚更。

「それで、調べてほしいことは一つ。ジョウトで起きる事件について。」

「事件を？」

「そう。さらわれたのは一人じゃなかったって言ったでしょ？だから、組織だって動いてる可能性もあると思うのよ。だから……。」

「だから、ジョウトでもロケット団みたいな組織が暗躍してるかもしれない……。ってこと？」

「そゆこと♪話が早くて助かるわ。」

そう言っってウインクするブルー。かわいい。

「だから、そういった組織に目をつけられないように、目立たないように立ち回って情報を集めてもらいたいのよ。」

「わかったよ、ブルー。その仕事、任された。」

「頼りにしてるわよ、マシロ。」



## 1. 5章

### 19話

ブルーの話を引き受けてジヨウトに向かう船に乗る私達。

船の上には手すりにもたれてる私ときらら以外に誰もいない。

うん、ちようどいいかな。

「きらら、聞きたいことがあるんだけど。」

『んー、なにー?』

「私の他人を治すやつって、きららのエネルギーを使ってるの?」

『そうだけど、そうじゃない。かなー?』

「んん??どゆこと?」

『たにんをなおすことは、ぼくのえねるぎーをつかわなくてもできるよ。でも、それをすると、ましろのいのちをたにんにわたすことになって。そのままつかつてるとたぶん、じゅみようがちぢむ・・・かな?』

「え、そんな代償があるのかあ・・・。確かに、考えてみたら、ノーリスクでそんな都合のいいことなんてないか。・・・あれ?それじゃ、なできららのエネルギーが空っぽになったりしたの?」

『えつとね、ましろがちからをつかうたびに、かたがわりしてたから。』  
「てことは、きららがいなくなったら私の寿命は・・・。」

『かなりへつてた、かな?』

「きらら・・・。ありがとう!」

そう言つて隣で浮いてるきららを抱き締めた。

『だから、あんまりつかつちやだめだよ?とくに、ひとあいてはよくない。』

『どうして?』

『わかんない。たぶん、あいしようみたいなかんじ?ぽけもんをなおすのは、ぽけもんのえねるぎーでできるけど、ひとをなおすのは、ぽけもんのえねるぎーじゃ、むりなのかも・・・。』

「ふーん、なるほどね。そのエネルギーって、あのすごいはいこうせ

んのとときに使ってるやつ?」

『そうだよ?ほしから、ちからをもらってるんだー。』

「それを貯めてる、と。」

『そうそうー!』

でも、ミスタは毎回撃つ前に貯めてるから……。

もしかして、その星の力つてのは本来は貯めておけるようなものじゃないのかもしれない。

となると、この子はやっぱり特別なのかな。

「ありがとね、きらら。いつも助けて貰ってばかり。」

『いつでもたすけるよ。ぼくをおこしてくれたのはましろなんだから。』

「それ、あんまり覚えてないんだけどなあ……。」

『ぼくがおぼえてるからいいよ。』

「フツツ。それ、私がブルーに言ったやつでしょ。」

思わず笑ってしまう私。きららからそんなことを言われるとは思わなかったなあ……。

「ねえ、きらら。こうして海を見ているとき、初めてミスタに会ったとき

の事、思い出さない?」

『うえー。みすた、にがてー。』

「きららは毎回相手をしてたから苦手なんだよね。」

そう言ってまた笑う。

私は笑いながら、初めてミスタと出会ったときの事を思い出した。

—————

あれは、きららと出会ってからすぐだったっけ。

ふと、きららが使える技つてどんな感じなんだろうと疑問に思ったのがきっかけだった。

「ねえ、きらら。あなたってどんな技が使えるの?」

『えつとね。すごいびーむと、すごいいわおとすと、なんかすごいやつ。』

「なんかすごいやつ?」

『うん。』

「ふーん。よくわからないから、少し試してみようよ。ちよつと、海岸に行こっか。」

そして、海岸に到着。ここを真っ直ぐ行くとグレン島があるんだよね。

「それじゃ、その1つてことですごいビームから撃ってもらっていい?」

『うつよー?セーの!』

きららが合図した瞬間、一筋の閃光が水平線を平行にとんでいった。

「なにあれ?ヤバくない?」

『いちおう、いちわりにおさえてただけど……。』

「え?あれで1割?」

とりあえず、考えるのを止めよう。

じゃないと、かわいい見た目なのにヤバイポケモン認定することになりそう。

「えつと……。それじゃ、その2いつてみようか。とりあえず1割ぐらいで。」

『たくさん?いつこ?』

「え?たくさんつてなに?怖いんだけど。……とりあえず、1個で。」

『おっけー。』

いうやいなや、空から1個の岩が降ってくる。なにあれ、隕石?

「あれがその2?」

『そうだよ?』

その岩は直径1メートルぐらいだったけど、その1メートルの岩が海に落ちると、ものすごい音と水しぶきがあがり、軽い津波が発生する。

「あれ?ここの、危ない?」

『だいじょうぶだよ?』

そう言った瞬間、きららが銀色にひかる。そして、次の瞬間、津波がきれいさっぱり消えた。

「きらら、なにしたの？津波は？」

『んー、きえた？』

「え？消えた？これ、なんかすごいやつ？」

『そうだよ？』

「確かにすごいけど……。とりあえず、すごいやつは使用禁止だね。」

『えー。わかったー。』

ふう。なんかよくわからないけど、物を消すような技は危なすぎるよね。きららが納得してくれてよかったよ。

そう思っただけで安心したときだった。

「ギャオオオー!!」

と雄叫びを上げてギャラドスが海から飛び出してきた。

なんか、すごい怒ってる？

「きらら、あれ、どうしようか？」

『どうしよつか？』

話していると、ギャラドスからはかいこうせんがとんでくる。

問答無用って、やっぱり怒ってるよね!?

「きらら、そのー!」

『はーい。』

私の声に応じて、ヤバイ技その1を放つ。

その1ははかいこうせんを飲み込んで、そのままギャラドスを撃ち抜いた。

そして、ギャラドスは海に崩れ落ちた。

「ごめんね、いきなり攻撃したのはこっちなのに。きらら、私をあそこまで運べない？」

『いけるよー?』

「それじゃ、お願い。」

私はきららのサイコキネシスでふわりと浮かぶと、ギャラドスの所まで運んでもらう。

えっと、げんきのかげらとぎずぐすりを用意しておく。

きららが怪我したときのために買っておいたんだけど、こんな使い方をするとはおもってなかったなあ……。

ギヤラドスの横に到着すると、げんきのかけらときずぐすりを使うと、ギヤラドスは起き上がった。

でも、さつきまでの元気はなさそう。

「大丈夫？ごめんね、悪いのはこっちなのに。」

そう言っつてギヤラドスの頭を撫でる。

すると、撫でている手が淡い光を放ち、ギヤラドスの怪我が治っていく。

「え、なにこれ？」

眩いたときにはギヤラドスの怪我が治り、元気いっぱいになっていた。

うーん、まあいいか。とりあえずギヤラドスは元気になったし。

治したお陰か、ギヤラドスもおとなしくなってくれたし。あ、帰ってた。

「きらら、海岸に戻ろうか。……きららっ。」

海岸に戻ろうときららに声をかけたけど、返事がない。周りを見ると、水面にいるヒトデマンとその上に浮かぶきらら。

今度はヒトデマン？でも、なんか様子がおかしい。きららが困ってる？

「きららー、どうしたの？」

『ましろー、たすけてー！』

「??」

とりあえず、海岸に運んでもらおう。ふわふわしてるのは落ち着かないや。

ヒトデマンは海岸までついてきた。

「それで、この子は？」

『んーとね、さつきのぎやらどすにあこがれてるこ？』

「??」

かくかくしかじか

なるほどね。

要約すると、さっきのギャラドスはこの辺りのボスのなやつで、そのギャラドスに憧れてただけで、そのギャラドスをきららが倒しちゃったから、新しくきららが憧れの対象になったと。

「きらら、良かったね。」

『よくないよー。なんかたたかえっていつてるしー。』

「相手してあげたら？その子の目標がきららになったってことでしょ？」

『えー……。』

その出来事から、ミスタはどこかで修行してからきららに挑む。っていうルーチンができた。

—————

今となつてはミスタと一緒に旅をしてるっていう。人生どうなるかわからないものだね。

「でも、最近ミスタもいろんな人と戦ってるから、きららが相手をしなくても満足してるじゃん。」

『そうなんだけどく。』

最近のミスタは自分より強い相手と戦うことが多かったから、きららに対しての憧れっていうのが薄くなってる気がする。

世界は広いね。

「お客さん、もうすぐアサギにつくよ。忘れ物しないようにね。」

いつの間にかジョウトが近くなっていたらしい。見回りに来た船員に声をかけられる。

「はーい。わざわざありがとう。」

さてと、いよいよジョウト地方に到着だね。

ブルーの期待に応えられるように頑張ろうっと。

## 20話

ジヨウト地方、アサギ港。

地方と地方を繋ぐ貴重な町。

船を使わないなら、あとは自力で山を超えるか空を飛ぶかなんだけど、そんな長距離はミスタも飛べないし、自分の足で行くのもしんどいし。船が一番楽だよね。

「到着つと。」

『ながかったねえく。』

「きららは船旅楽しかった？」

『わかんない！』

「そつかり、わかんなかったかー。」

船を降りながら、きららと話す。

きららにとつては船の上でも浮いてるだけだもんね。船旅の良さはわかんないか……。

とりあえず、ブルーに連絡しておこうかな。

ブルーに貰った小型の通信機を取り出す。

「もしもし、ブルー？聞こえる？」

『聞こえてるわよ。通信機の調子もいいみたいね。そつちはどう？』

「聞こえてるよ。こつちはちょうどジヨウトに着いたところ。」

『そう。それじゃ、今から行動開始つてことね。頼りにしてるわよ、マシロ。』

「了解！期待にそえるよう頑張るよ。」

ピッ。

通信終了つと。

さて、これからどうしようかな？とりあえず、仮面の男……女？とりあえず、仮面の男でいいや。そいつの尻尾を掴まないかね。

そういえば、アサギにはジムがあつたっけ？チャレンジャーって感じでお邪魔してみる？でも、カントーのジムリーダー半分ロケット団所属だったし……。

ん？でもそれは、むしろ好都合？

いや、でもジムバッジを集めてるトレーナーは目立つよねえ……。  
むむむ。

「あら、挑戦者の方ですか？」

「え？あれ？」

考えながら歩いていたら、どうやらジムの前まで来ていたみたいで、ちょうどジムから出てきた髪の長い女の子とばったり出会う。

「んーと、ちよつと考え中……かな。」

あごに指を当てて答える。

「そうですね。わたしは少し灯台に用があるので、もし挑戦するのなら少しだけ待ってくださいね。」

そんな私に用事がある、と言って私の横を通りすぎていく。そっかー、用事があるなら仕方ないよね。……あれ？っていうことは？  
後ろ姿を駆け足で追いかける。

「ちよつと、待ってー！じゃあ、あなたがジムリーダー？」

横に並ぶと、その子はこつちを向いてニコツと笑う。

「はい。わたしがアサギジムのジムリーダー、ミカンです。ご存知なかったんですか？」

「さつきジョウトに着いたばかりだからね。この地方に関しては少し疎くて……。」

あははー、と笑ってごまかす。

こんなことならジムリーダーのことも調べておけばよかったかな。

「ということは、ジムチャレンジのためにこの地方に来たわけじゃないってことですか？」

「んー、そうだね。目的のためにはジムに向かった方が早いかもしれないと思っただけけど、ジム自体は目的じゃないかな？」

「はあ……。よくわからないけど、その目的は聞いてもいいことですか？」

「えーっと、最近変わったことない？」

「え？急に変わったことを聞きますね。えーっと……。」

「あ、己紹介がまだだったね。私、マシロ。よろしくね。」

そういえば名乗ってなかったね。ごめんごめん。



「はい。よろしく願いします。それで、最近変わったことですか……。」

「うん。何でもいいんだ。」

「それなら、アカリちゃんの様子が少しだけおかしいような気がします。」

「アカリちゃん？誰、それ？」

「あ、えっと、デンリユウの名前です。デンリユウのアカリちゃん。最近、灯台のお仕事をしてるとき、たまに光が弱くなるときがあつて……。」

「病気かなにか？」

「わかりません。やつぱり、病気ですかね？」

「ポケモンセンターで治らないなら、病気じゃないのかなあ……。」

「そう、ですよね。」

二人で灯台までの道を歩く。

私の知りたいことじゃなくて、ただの世間話になっちゃってるよ。まあ、何事もそんなにうまくはいかないよね。

「海の向こうのタンバには、すごい薬屋さんがいるらしいんですが……。」

「薬屋さんがあるなら、薬を貰いに行けばいいんじゃない？」

「それが、その薬はとても貴重なものらしくて、少し様子がおかしいだけでそんな貴重なものを使うのも気が引けて……。わたしの気のせいかもしれないし。」

「なるほどね。」

流石にこの子はロケット団とか、悪の組織の人じゃないよね？これで悪人とかなら、私は人間不振になる自信しかないよ。

「ねえ、きさら。病気とかでも治せるかな？」

『うーん、たぶんなおせるとおもうけど……。』

「エネルギーたくさん使っちゃおう？」

『やってみないとわからないけどね、はんぶんぐらいはつかうとおもう。』

「えっと……。その子とお話ができるんですか？」

不思議そうに首をかしげるミカン。

「まあね。この子とは長い付き合いだから。」

「なんか、うらやましいですね。」

「そうかな?」

「そうです。わたしも1度くらい、アカリちゃんやハガネちゃんとお話してみたいです。」

話しているうちに灯台に着いた。

「えっと、マシロちゃんはどうしますか? 灯台を登るの大変ですけど?」

「そのアカリちゃんは、灯台の上にいるんだよね?」

「そうですけど・・・。」

「なら、私も登るよ。」

「わかりました。それじゃ、一緒に登りましょう。ところで・・・。」

「ん?」

「その子、見たことないポケモンですけど、かわいいですね。」

そう言つてきららの方を見る。

いつもは初対面の人と話すときにはボールに戻すんだけど、かんがえごとをしていたから戻しそこねてたんだよね。ミカンはいい人っぽいからいいけど、悪い人だと、珍しいってだけで奪おうとするから。

あれ? ジムリーダーのミカンも見たことないってことは、この地方でも、きららって珍しいってこと?」

それじゃ、出しっぱなしは目立つじゃん・・・。

「かわいいでしょ。ボールの中が嫌いだから、普段はボールの外にいるんだ。」

「へえー、ちよつと抱いてもいいですか?」

「きらら、いいかな?」

『いいよー』

そう言うとききららはミカンの胸に飛び込んでいく。

「柔らかいのに、芯がしっかりしてる。まるで・・・ハガネみたい。」

「ん?」

なんか、ハガネみたいって言ったときのミカンの気配に背筋がゾ

ワッテした。なにそれジムリーダーのオーラ？

「ありがとうございます。堪能しました。」

「そう？それならよかった。」

さっきの感覚は一瞬だけできれいに消えてしまった。気のせいかな？

「それじゃ、登りましょう。」

登りだすと、すれ違うトレーナーに声をかけられる。主にミカンが。

「今日でアカリちゃん交代かい？」

「ええ。」

「今日はバトルはしていかないのかい？」

「今日はお客様がいるので。」

「かわいい子が二人になってやがる！」

「お上手ですね。」

こんな具合に大人気である。

いつもはバトルしながら登ってるの？ハード過ぎない？

というか、そのワードをだすと、うちの戦闘狂が……。

ガタガタガタガタ

とボールが震え出す。言わんこつちやない。

こうなったら止められないし、仕方ないか。

「ミカン、ちよつと先に行つててくれる？」

「はい？」

「でておいで、ミスタ。」

ボールからミスタを出す。

「この子が戦いたいって。」

「……」

「他のトレーナーも、たくさんいますよ？」

その言葉は火に油を注いでるんだよねえ。

「こうなったら止まらないからね、この子。仕方ないから戦いながら

上にいくよ。」

「わかりました。それじゃ、上で待ってますね。」

そう言っただけミカンは先に上に上がっていった。

ささと。

「それじゃ、いくよミスタ。」

「――」

登りながらバトルとか、なんの罰ゲームだろう……。

――

「あー、もう。疲れた！」

「――」

灯台の一番上に登った私達。

疲れきった私とは対称的に、ミスタはたくさんバトルしてきたから  
ご機嫌な模様。

そんなミスタにため息をつきながら奥に進む。奥にはミカんとデ  
ンリュウが座っていた。

「あら、早かったですね。ここにはジムに挑戦するような方がたくさ  
んいるので、こんなに早く登れるとは思ってなかったです。」

「そうなんだ。なんだかんだ戦闘好きだけあって強いからね、この  
子。ジムの挑戦者ぐらいには負けないかな。」

「すごい自信ですね。是非ともジムに挑戦しに来てください。」

「考えとくよ。それよりも、この子がアカリちゃん？」

「はい、そうです。」

アカリちゃんの前に座り込む。そして、そのままをかざしてみ  
る。

外傷がないけど、治せるかな？

そう思ったときには手から淡い光がでて、しばらくすると消えた。

よくわかんないけど、これで大丈夫かな？

「キラキラ、どつどつ？」

『へったのはさんわりぐらいかな？』

「予想より少ないね。よかった。」

「あの、今のは？」

不思議そうに首をかしげるミカン。アカリちゃんも同じように首をかしげる。

「私、触るだけで他人の怪我を治せるんだ。だから、アカリちゃんも大丈夫。と言つても、病気を治すのは初めてだから、確実とは言えないんだけどね。」

「そうなんですか。にわかには信じませんが、とりあえず様子を見てみますね。」

「うん、そうしてもらえると助かるかな。治つてたらもうけぐらいに考えておいて。」

さっきの様子から、アカリちゃんも自覚症状みたいなのはなさそうだし、このまま何事もなければいいね。

「それで、ミカンはどうするの？」

「今日はアカリちゃんを迎えに来ただけなんで、このままジムに戻ります。・・・挑戦、していきますか？」

ミカンの目が鋭くなる。

ジムリーダーって妙な凄みがあるよね？エリカもそうだったし、こんな人ばかりがジムリーダーなら、そりゃバツジも集まらないよ・・・。

「とりあえず、今日はパスかな？灯台を登ったから疲れたし。」

「そうですか。では後日お待ちしてますね。」

「いや、後日もお邪魔するかはわかんないよ？」

あと、意外と好戦的。

「んー！」

灯台を降りて、グツと伸びをする。

それを見て隣のミカンがクスツと笑う。

「お疲れですね。」

「そりゃ、こんな高い建物登ったら疲れるでしょ。」

灯台を見上げながら答える。

「今はもう慣れましたけど、確かに初めの頃はわたしも疲れま  
ね。」

「でしょ？エレベーターでも増設しておいてよ。」

「わたしにそんな権限はないんですけど……。」

そう言つて苦笑いするミカン。

まあ、もう登ることはないかもしれないからね。別になくてもいい  
や。

「それじゃ、私はポケモンセンターで休もうかな。」

「では、ここでお別れですね。明日、お待ちしてますね。」

「いやだから、行くかは分かんないんだってば。」

「それなら、マシロちゃん。ポケギア持ってますか？」

「ポケギア？」

「こういうやつなんですけど……。」

取り出したのは、ブルーのから貰った小型の通信機。私もポケット  
からそれを取り出す。

「これ、ポケギアって言うんだ。知らなかったよ。」

「連絡先教えて貰ってもいいですか？もし挑戦するのなら、連絡して  
ください。もちろん、遊びに来るだけでもいいですよ？お友達ですか  
ら。」

「とも……だち……!?!」

ギギギと音がなりそうな感じで視線をポケギアからミカンに移す。

「はい。お友達、です！」

そう言つてニコツと笑うミカンに、私は思わず抱きついてしまつ  
た。

「わわっ、どうしました？」

「なんでもない。嬉しかったただだよ。」

「そうですか。」

頭を撫でられる私。なんか、友達ができる度に頭を撫でられてる気  
がする。まあいいや。

それじゃ、そろそろ離れないとね。

「それじゃ、登録しよつか。」

「登録？」

「ちよつと借りますね。ここを、こうして、と。はい、できました。」

「早いね？もう終わったの？」

「登録自体はすぐに終わりますから。これで、いつでも連絡がとれますね。」

「そうだね！ありがとう！」

「それじゃ、連絡お待ちしてますね。」

うふふ、と笑いながら手を振ってジムに帰っていく。

私も大きく手を振り返す。

えへへ、友達増えちゃった！

ミカンの姿が見えなくなるまで私は手を振り続けた。

## 21話

ミカンと友達になった次の日。

ジムに挑戦するかはともかく、ミカンに会いに行こうかな。

そう思っただけで準備をしていたところ、かばんから何かしらの振動が。

「ポケギア? いや、ポケギアはここにあるし……。なんだろう?」

机の上のポケギアに目を向けつつ、がさごそとかばんを漁ってみると、かばんの中でプルプルと震えている一本のスプーン。

これって、この前ブルーに貰ったやつじゃん。なんでこれが震えてるんだろう?」

そのまま震えるスプーンを手に取る。すると、スプーンはくいつと曲がり、一方の方向を指す。

「なにこれ……。? きらら、どう思う?」

『んー? これ、ただのすぷーんじゃなくて、ぽけもんがつくったすぷーんだよ?』

きららにスプーンを見せると、どうやら普通のスプーンではないらしい。

ってことは、何かしらの意味があるのかなあ……。

「スプーンの指す方に行ってみようか。もしかしたら、ブルーの願いに何か関係あるかもしれないし。」

私はポケギアを取り出し、ミカンに繋げる。

「もしもし、ミカン?」

『はい。マシロちゃん、どうかしましたか? もしかして、挑戦ですか?』

「ちよつと野暮用で、今日はお邪魔できなくなっちゃった。ごめんね。」

『そうですか……。用事なら仕方ないですね。』

声だけでかなりしょんぼりしてるのが分かる。なんか、悪いことしちゃったかな?

「用事が終わったら遊びに行くから。」

『わかりました! その時はおもてなしますね!』



「いや、普通でいいよ。普通で。」

遊びに行くと言った途端元気になる。その様子に少し笑いながら返事をする。まあ、いつになるかはわからないけど、できるだけ早めに遊びに行くようにしよう。

「それじゃ、用事が終わったら連絡するね。」

『はい！お待ちしますね！』

「それと、マシロでいいよ。ちゃんづけはなんかすぐつたいや。」

『わかりました！マシロ！』

「うん。それじゃあね。」

さてと。電話を切ってスプーンを掴む。

「これの指す方に行ってみますか。なにがあるのやら。」

—————

ミスタに乗って、スプーンの指す方に飛んでいく。土地勘がないので、どの辺りか分からないけど、そこそこの距離を飛んでる気がする。

そう思ったとき、スプーンが指す方向を変えた。

「この下ってこと？ミスタ、降りて。」

そのままミスタに地上に降りてもらおうと、そこには五歳ぐらいの男の子と女の子がいた。周囲は争ったように荒れ果てていて、男の子は気を失っているのか、女の子のそばで倒れていて、女の子はそこで泣きじゃくっている。

「ちよつと、大丈夫？何があったの？」

「えぐつ……。野生の……。ポケモンが……。ひつく……。」

「野生のポケモンに襲われたんだね。怪我はない？」

「あたしは大丈夫。……。でも、ひぐつ……。」

泣きながら少年の方を見る。

私は急いで少年を抱き起こすと、彼の額が切れて血が出ているのを見つける。

「額が切れてるね。目じゃなかっただけ、不幸中の幸い、かな？」

かばんから救急道具を取り出して、消毒とガーゼを貼る。本当は力でサツと治してあげたいけど、また倒れたら困るしね。

「こつちの子は大丈夫。見た目よりも傷は浅いよ。」

「ぐず……。ほんとに？」

「ほんとほんと。それより、大人の人は近くにいないの？」

「あっちにいる。」

「それじゃ、そつちに行こうか。この子をここで寝かせとくわけにもいかないしね。」

男の子をおぶり、女の子の手を引いて歩き出す。早いところ、お医者さんにも見せないかね。私のは所詮応急処置だし。

その後は早かった。話を聞いた女の子の父親がてきぱきと手配をして、男の子は病院へ。その際、男の子の母親が付き添っていった。

そして、残された私達。

「いやはや、キミのお陰で助かったよ。応急処置も完璧だったみたいだし。」

「いえ、私は通りかかったただけなんです。それにしても、野生のポケモンに襲われることってよくあるの？」

「いや、そもそもボーマンダなんてこの辺りにいないはずなんだが……？」

ボーマンダ？聞いたことないポケモンだけど……。

これも、仮面の男に関係してるのかな？

「ま、そこを気にするのは警察の仕事で、私達ではないか。」

「私は気になるんだけどなあ……。」

「何か言ったかい？」

「いえ、こつちの話です。それより、さっきの男の子のは？」

「近くの病院へ運ばれたよ。気になるのなら、後でお見舞いに行つてあげてほしい。彼の母親も、君にお礼を言いたいはずだ。」

そう言つて、タウンマップに印をつけてくれた。

「こんな状態だけど、明日には私達はハウエン地方に帰らないといけないんだ。よければ、娘のかわりに気にかけてやってほしい。」

娘の、といった瞬間。

今は父親の手を握っていた、女の子の肩がビクツと跳ねた。  
ん？なにかあったのかな？

しかし、それに気づかなかったみたいで、父親は話続ける。

「おっと、自己紹介がまだだったね。私はオダマキ。この子は娘のサファイアだ。キミが助けた男の子はルビーと言う。」

「私はマシロです。」

「ありがとう、マシロ君。キミのお陰でルビー君は大事にならなくてすんだ。」

「いえいえ、大したことはしてないですよ」

頭を下げるオダマキという人に、頭を上げてもらう。

実際、ことは全部終わってたしね。

「それでは、私は一応サファイアを病院へ連れていくよ。」

頭を上げると、女の子の手を引いて歩き出す。女の子が少しだけ振り返ったので、小さく手を降る。

女の子も少しだけ手を振ると、そのまま前を向いて歩いていった。「さてと。それじゃあルビーだっけ？彼の様子を見に行ってみようかな。」

—————

次の日。

あの後。病院へ行ってみたものの、ルビーは寝たままで会えなかったので、ルビーのお母さんと挨拶だけして帰った。怪我は大したことはないらしい。

ブルーのお願いもあるし、わざわざ気にかける必要はないんだけど、サファイアって言ったかな？あの子の反応が少し気になるんだよね。

という事で、出直してきました。ノックして部屋に入る。

「失礼します。」

「あら、今日も来てくれたのね。ありがとう。」

男の子の座っているベッドの横で、椅子に座っていたルビーのお母さんが振り替える。

それにつられて男の子もこつちを向く。

「お母さん、この人は？」

「この人があなたを手当てしてくれたのよ？」

「そうなんだ。ありがとう、お姉さん。」

「いいよ、気にしないで。それより、怪我は痛くない？」

「うん。痛くないよ、大丈夫。」

「それはよかった。」

その時、部屋にノックの音が響く。

「失礼するよ。」

「あら、オダマキさん。今日ハウエンに戻る日じゃなかったかしら？」

「はい。戻る前に挨拶を、と思いましたが。本当はサファイアも連れてきたかったんですが、昨日のことがショックで塞ぎこんでしまつて……。」

「そうですか……。わざわざありがとうございます。ルビー、少し外でお話してくるから、この人と待っていてくれる？」

「わかった。」

え？さつき初対面なのに、二人きりにするの？

そう思ったときには既に部屋の外に出ていってしまった。信頼、されてるってことかなあ……。

「あの子、来てくれなかったな……。」

ルビーの呟く声が聞こえた。

そういえば、昨日サファイアの様子少し変だった様な……。ポーマンダ以外に何かあったのかな？

「ポーマンダの事がよっぽどショックだったのかな？」

「ううん、違うんだ。あの子が怖かったのは、ポーマンダじゃなくて、僕なんだ。」

「どういうこと？」

ルビーはポツポツと昨日の出来事を話し出した。

—————

「なるほどねえ、ポーマンダよりも、それを追い払おうとした君の姿

が、あの子にとっては怖かったんだね。」

「そうみたい……。」

だからあの子の様子もおかしかったんだ。そりゃ、お見舞いとか、来れるわけ無いか……。

「もう、あの子とは会えないのかな……。」

彼の目から一筋の涙がこぼれる。

思わず私は、ルビーの頭を抱き寄せた。

「頑張ったね。えらいえらい。」

「え？」

「ルビー。君は、ちゃんとあの子を守れたんだよ？それはきつと、誉められるべき事。私は守れなかったからね。」

6年前のあのとき、ブルーが連れていかれたときを思い出す。あの時は生きた心地がしなかったなあ。

あれ、実際死にかけてたっけ？

「でも、あの子は……。」

「うん。そうだね。あの子は君が怖かったんだよね？でもそれは、守ったこととはまた別。頑張ったね。」

「う……うわあああん!!!」

もう一度頑張ったねと言うと、せきを切った様に泣き出すルビー。よしよしと、頭を撫でる。

「女の子の為に頑張ったのに拒絶されたら辛いよね。」

「僕は……僕は!」

「うん。大丈夫、分かってるよ。」

「守りたかっただけなのに!」

「うん。」

「なんで……こうなっ……たん……だろ……。」

泣きつかれたのか、胸のなかでそのまま寝ちゃったや。

私も経験あるけど、小さいときに拒絶されるのってかなりメンタルにくるからね。仕方ないかな。

とりあえず、ルビーはベッドに寝かせておいて、と。

「そろそろ入ったらどうですか？」

「ごめんなさい、水を差さないほうがいいと思って。」

「そうですね。ありがとうございます。」

声をかけるとルビーの母親が部屋に入る。

空気を読める人でよかったよ。泣いてる所で部屋に入られると私  
が、と言うかルビーが困るかな？思春期の男の子は泣いてる所を見ら  
れるのは嫌・・・なはず。

「あれ、さっきの人は？」

「時間がないからつてもう出発しちゃった。ハウエンに帰るんですつ  
て。」

「そうですか。忙しい人なんですね。」

「あれで一応、博士って呼ばれる人だから。」

そうなんだ。それなら仕方ないよね。オーキド博士もそうだけど、  
忙しい時はかなり忙しそうだったし。

「それじゃ、私は帰ります。」

「ありがとうございます。手当てだけじゃなくて、ここまでルビーに良くしてく  
れて。」

「んー・・・。なんとなく私と似ててほっとけないんですよ。また明日  
来ますね。」

「本当にありがとうございます。」

そのまま病室を後にする。

そう言えば、ルビーのお父さんの姿を見てないけど、ルビーのお父  
さんも忙しい人なのかな？もしかして博士だったりして？

—————

そして次の日。

またまた病室に向かって歩いていく。

ブルーのお願いもあるんだけど、少しぐらい後回しにしてもいいよ  
ね？気になるものはしょうがない。

部屋に着くと、ノックをして部屋に入る。

「失礼します。」

「どうぞー。」

部屋に入ると、ルビーが一人で私を出迎えた。とりあえず、ベッドの横の椅子に座る。

「あれ、1人？」

「うん。退院の手続きだったって。」

「そっか、よかったね。」

そう言うと、なぜか俯くルビー。

「でも、もうあの子はいないんだよね？」

「あー……。昨日、ハウエンに帰るって言ってたっけ。」

「そっか……。」

なるほど。怖がらせたままで、もう女の子に会えないから落ち込んでいるのか。

「ねえルビー。君は、その子に会ってどうしたい？」

「そんなの……。わかんないよ。」

「そうだよ。怖がらせたまま会っても、どうしたらいいかわかんないよね。」

「……。うん。」

「じゃあ、今度会ったときはカツコいって言わせちゃおう！」

「え？」

驚いた顔でこつちを見る。

ようやく顔をあげてくれた。俯いたままだと、考えもネガティブになっちゃうからね。

「戦う姿が怖かったのなら、次はカツコよくなった所を見せてあげようよ。」

「でも、あの子はハウエンに帰ったんでしょ？今更カツコよくなんて……。」

「じゃあ、君はそのままの君でもう一度あの子に会うの？それとも、もう会いたくないの？」

「そんなことない！もう一度、会いたいよ！」

ルビーが叫ぶ。そうだよ、私もそうだったもん。だからきつと、ルビーの事、放っておけなかったんだなあ。

「じゃあ、今のままじゃ会えないよね？」

「うん・・・！今度は、怖い。なんかじゃなくて、カッコいいって言われる僕になつて、もう一度あの子に会うよ！」  
「そっか。」

私はルビーの頭をポンと叩き立ち上げる。

「頑張れ少年。その決意を忘れなかつたら、きっとカッコいいって言われる素敵な男の子になれるよ。」

「お姉さん？」

「退院するなら、邪魔になりそうだし。私は帰ろうかな。ルビーも、もう大丈夫そうだしね。」

「ありがとうございます。通りかかっただけなのに・・・。」

「気にしないで。好きでやったことだし。それじゃ、元気でね。」

手を振りながら病室を後にする。

あの様子なら大丈夫かな？子供は素直だから、思ったことをそのまま言っちゃやし、言われた方もそのまま受け取っちゃうからね。こういう時は大人がケアしてあげないとね。

まあ、私は１１人だけだ。

「さてと、ハウエン地方は遠いけど・・・。仕方ないかな。」

――ルビー視点――

「行っちゃった。」

通りかかったただけなのに、この3日の間だっけで、とても大事な事を教えてもらった気がする。

「カッコいい、か。それなら、コンテストに出てみようかな。それで、コンテストで結果を出すまでは戦う姿は他人には見せないようにしよう。また、あの子みたいに怖がらせるかもしれない。」

でも、お父さんポケモンバトル大好きだからなあ。許してくれるかな？

そう思ったとき、お母さんが病室に帰ってきた。

「終わったわよ、ルビー。あら、なにかスッキリした顔して、何があったの？」



「ちよつとね。それより、寝たきりで疲れたよ。早く帰ろう。」

「ふふつ、元気になってよかった。」

「お姉さんのお陰かな？　そういや、名前聞いてないや。お母さん、あの人の名前知ってる？」

「あら？　そう言えば聞いてないわね。あ、連絡先も知らないわ……。」

「ええ!?!　しつかりしてよ……。」

「どうやら、お姉さんと会うことは難しそうだ。でも、いつかコンテストで有名になったら。」

カツコよくなつたねって、ほめてくれるかな？

## 22話

ルビーの様子を見た後。

私はハウエン地方に向かう船を手配する。

まあ、私がなんやかんやする必要はないんだけど、女の子も気になっちゃってるんだよね。

とりあえず明日出航らしいから、一応ブルーに連絡しておこう。

ジョウトから離れるから、お願いが進まなくなるからね。

プルルル・・・

「あ、ブルー？」

『えらく早い連絡ね。何かあったの？』

「それが・・・。悪いんだけど、少しジョウトを離れることになつて・・・。」

『え？なんで？』

「正直、ブルーのお願いとはあまり関係ないかもしれないけど・・・。ちよつと気になる事ができて。」

『んー・・・？まあ、いいんじゃない？少し離れるだけでしょ？アタシもすぐに手がかりが見つかるとは思ってないしね。そっちの事はマシロに任せるわ。』

「ありがと、ブルー。」

ピツつと、通信を切る。

それじゃ、ブルーの許可ももらったしアサギに戻って船を待とうかな。

出航は明日だし、ミカンの所に遊びに行こうつと。

—————

次の日。

船着き場で船に乗る前に見送りに来てくれたミカンと話す。

「昨日はありがとね。ミスタの相手してもらっちゃって。」

「いえいえ。こちらこそ、対戦ありがとうございます。ハガネちゃんが負けたの久しぶりです。」

「それは相性の差だよ。ハガネちゃん、すごいタフだったし。」

昨日はあの後、ミカンの所に遊びに行ったらミスタがソワソワしましたので仕方なく相手をしてもらったんだけど……。

ハガネちゃん、スゴイ固かったなあ。ただのイワークとは思えないぐらいだった。だからハガネちゃんなのかな？

「ジムバッジ、本当に要らないんですか？」

「うん。そういうの、あんまり興味ないし。ミスタが満足してるから、それで十分かな。」

「わかりました。また、いつでも取りに来てください。」

「うーん、まあ考えとくね。」

そのうち必要になったら取りに行こう。まあ、今のところそんな予定はないけど。

「それじゃ、行ってくるね。」

「ホウエン地方までは、ジョウトとカントーの間に比べて長旅になるので。船旅を楽しんでください。」

「うん。いろいろありがとね。」

私は手を振りながら船に乗り込む。

ミカンも手を振り替えてくれる。

短い間だったけど、いろいろあったねえ……。

まあ、思い返すのは後にしてまずは部屋に行こうかな。

——ミカン視点——

「行っちゃいました……。なんと言うか、不思議な方ですね。」

ジムの前で悩んでいると思えば、灯台についてくるし、見たことないポケモンとお話してるし。

あ。それと、アカリちゃんの病気を治したって言ってました。嘘をつくような方ではないみたいですが、本当なんでしょうか……。

「うーん、不思議な事しかありませんでした。マシロも、ジムバッジが要らないと言っていたけど、トレーナーとしての腕はかなりのものでしたし。」

あれだけの強さでバッジに興味がなくて、変わった事が無いかって

聞いてくる……。

「警察の人かな？あの若さでそれは流石にないよね……？」

船が見えなくなると、わたしはきびすを返してジムに帰った。

——マシロ視点——

船に乗って5日。

ジョウトからカントーに行くときと比べて大分かかったけど、ようやくついたね。

ホウエン地方、カイナシティ。人とポケモンが行き交う港町。

「きさら、船旅はどうだった？」

『うーん、まえよりもつとながかった！』

「そっかー、長かったかあ……。」

感想が楽しかった、とかじゃなくて長かったって事は、自分で飛んだ方が早いんだろうなあ……。

自分で飛べるポケモンは、きつと船旅は向いてないね。  
船を降りてうーんと伸びをする。

私も、5日の船旅はくたびれたや。自分の足で歩きたくなるね。

とりあえず、きさらはボールに戻しておこう。そう思ったときだった。

「おや？お嬢さん、とても珍しいポケモンを連れてるいるね？」

「え？」

不意にかけられた声に振り替えると、そこには、青っぽい銀色の髪にスーツを着ている人。

この人が声をかけてきたのかな？というか。

「きさらの事、知ってるんですか？」

「きさらというのは、その子のニックネームかい？そうだね。とても珍しいポケモンで僕も見たのは初めてだよ。なんとたつて1000年に1度、1週間だけ目覚めると言われているポケモンだ。名をジラーチと言う。」

「え？1000年に1度？1週間……？」

へえ、ジラーチって言うんだ。

んん？でも、きららとは6年前からずっと一緒なんだけど……。どゆこと？

「どうかしたかい？」

「いえ、なんでもありません。それよりあなたは？」

「僕はダイゴという。君の名前も教えてもらってもいいかな？」

「マシロです。もう少しきらら……。ジラーチの事教えてもらってもいいですか？この子の事を知っている人に初めてあったので……。」

「構わないよ。僕が知っていることでよければ。」

「ジラーチは1000年に1度、1週間だけ目覚めると言われているポケモンだ。その生態故に、出会った事のある人は非常に少ない。そして、どんな願い事も叶えてくれると言われている。」

「願いを叶えてくれる……。かあ……。」

「と、まあ。僕もこれぐらいの事しか知らなくてね。すまない。」

「いえ、名前が分かっただけでもよかったです。」

私は隣に浮いているきららに話しかける。

「あなた、ジラーチって言うんだね。」

『そうなの？きらめきさまは？』

「きらめき様は、なんだろう……。？敬称？まあ、昔の人は呼び方が分からなかったからそう呼んでたんじゃない？」

『そっかー。ぼくはきららがいいやー。』

「きららはきららで、なにも変わらないよ。」

『わーい！』

喜びながら私の回りをぐるぐると飛び回る。クスツと笑うと、目を丸くしているダイゴさんと目が合う。

「マシロくん、君はポケモンと話せるのかい？」

「きららとだけ……。かな。他のポケモンと話せたことはないですよ？」

「そうなのかい？それでも、通訳とかできるんじゃない？……？」

「お願いすれば多分出れると思いますけど……。やりたくはないですね。」

「どうして？」

「だって、最初からその子の事を理解しようとしてないみたいで、嫌

じゃないですか？それに、通訳なんてなくても、なんとなく分かりませすしね。」

「フツ……。なるほど。君は良いトレーナーの様だ。」

うーん。最近よく持ち上げられるけど、トレーナー界隈って良くないトレーナーがたくさんいるのかなあ……。

これぐらい普通だと思うんだけど……。

「ところで、君はハウエンに来た所かい？」

「はい。少しやることがあつて。」

「そうか……。時間があるなら、オススメの場所を案内するんだが。」  
「へえ、そんな場所があるんですね。」

「ああ。石の洞窟と呼ばれる場所がムロタウンの近くにあるんだ。あそこでは珍しい石がよく採れるんだ。」

「え、石？」

「うん。石。」

聞き間違いじゃなかった。石が採れるからオススメって、ハウエンじゃ一般的なのかな……？

一応、時間があれば後で行ってみようかな。

「後で行ってみますね。」

「それがいいよ。それじゃ、僕はそろそろ行くよ。」

「あ、あとひとついいですか？」

「ん？なんだい？」

「オダマキって博士、どこにいるか知ってます？」

「オダマキ博士なら、ミシロタウンに研究所を構えてるよ。」

「そうですね。ありがとうございます。引き留めちゃってすみません。」

「構わないよ。それじゃ。」

片手を上げると、ダイゴさんは青いポケモンをボールから出す。

そして、それに飛び乗るとそのまま飛び去って行った。

「見たことないポケモンだったねえ……。はあく……。カントーを出ると知らないことばかりだよ。」

小さくなつていく姿を見ながらため息をつく。

これでも6年間ずっと知識だけは溜め込んでたと思ったのになあ。少し落ち込むや。

『ましろでもわからないことがあるんだね。』

「ま、それだけ世界が広がってことで。あまり気にしないようにしよう。それじゃ、ミシロタウンに出発しようか。」

『ブーッー！』

ボールからミスタを出して、飛び乗る。タウンマップを確認して、ミシロタウンの方角に飛んでもらう。

「お願いね、ミスタ。」

「ーッー」

最近ではミスタに乗ることに慣れたものだねえ……。最初はあるなに怖かったのに。

でも、思わぬ所できららの事が知れたのは収穫だったね。

願い事を叶えてくれるポケモンかあ……。

隣をふわふわと飛んでいるきららを見る。

「全然そんな感じしないけどねえ。」

『なにがー?』

「なんでもなーいー!」

私の呟きに首をかしげるきららに、私は笑いながら答えた。

## 23話

ダイゴさんと別れてから少し。

私はミスタに乗ってミシロタウン上空にやって来た。

「なんというか、マサラタウンみたいな田舎だねえ。」

『だねえ。』

博士って、みんな田舎に研究所を建てるのが好きなの？単に広いからとか？

オーキド博士は広さがある方がいいって言ってたような気がするけど……。

オダマキ博士もそうなのかな？

「とりあえず、降りてみようか。多分、あの大きな建物が研究所だよね？」

ミスタに声をかけて、地上に降りてもらおう。

とりあえず、ミスタもきららもボールに戻ってもらって、と。

アポなし訪問とか追い返されるかもしれないけど、その時はその時考えよう。

ピンポーン

「今日は来客の予定はないはずなんだけどなあ……。はいはい、どちら様ですか？」

家の中から声が聞こえてくる。

そして、ガチャッとドアが開く。

「急な訪問でごめんなさい。先日はどうも……。」

「おや？君は……。マシロ君……。だったね。こちらこそ、あの時はありがとう。君のお陰で大事にならなくてよかった。所で、どうしてここに？」

よかった。とりあえず、追い返されることはなさそう。

「少し、サファイアの事が気になって。」

「サファイアか……。あから、妙に元気がなくてね。どうしたものかと頭を抱えてたんだけど……。もしかして、なにか心当たりが？」

「そうですね。多分、サファイアも自分からは話しづらいことだと思



うんで、私から話します。」

「なるほどねえ……。確かに、ルビー君が怖かったと言うのは、言いづらいか。だからお見舞いも……。だとするとルビー君はショックだっただろう……。あの子は大丈夫だろうか。」

「ルビーなら、きっと大丈夫ですよ。それより、サファイアはどんな様子ですか？」

「うーん。なんというか、心ここにあらずみみたいな感じかな？ 普段は普通なんだけどね、ふとしたときになにか気が抜けてる、というのかな？」

ふむふむ。やっぱり少し様子がおかしいみたいだね。

とりあえず、お話してみようかな？

「話をしても構いませんか？」

「構わない。と言うよりむしろ、こちらからお願いするよ。身内なんかよりも、君の方が適任かもしれない。」

そう言うと、サファイアを呼びに家の中に戻っていった。

さてと、どう話したらものか……。

頭をひねっていると、サファイアを連れてオダマキ博士が出てきた。

「待たせたね。ほら、サファイア。」

「この前はありがとうございました。」

オダマキ博士に促されて、後ろから前に出てくるサファイア。

「私は仕事があるから、サファイアと二人で少し歩いてくるといい。ホウエンは詳しくないだろうか？」

「そうですね。さっきついたばかりなんで、さっぱり。」

「と言うことなんで、サファイア。頼んだよ。」

「え？ちよつと……。」

そうやって、サファイアの話を見聞かずにドアを閉じる。その際、今度は声を出さずに「頼んだよ」と、口パクで私に伝える。

オダマキ博士も、結構強引だなあ……。

サファイアもあつけにとられてるし。

「とりあえず、その辺を歩こうか。サファイア、案内頼めるかな？」

「え？・・・うん。この辺りなら大丈夫。」

「それじゃ、よろしくね。」

私はサファイアの手を取って歩き出した。

「……………」

ミシロタウンを出て、道なりを歩く。サファイアは私の手をぎゅつと握ったまま、話し出した。

「101番道路は、気性の荒いポケモンは少ないから、あんまり危なくはないけど……………」

そこで言葉が途切れる。

あ、そつか。前にボーマンダに襲われたから、どんなところでも安全とは言えないのか。

「大丈夫。今は私が守るよ。」

サファイアの前に屈み、空いている手で頭を撫でる。そして、少し迷ったけどこのまま話すことにした。

「・・・ねえ、サファイア。ポケモンが怖い？」

「……………」

驚いた表情と、手を握る力が少しだけ強くなったことで、大体のこととは察した。

ポケモンに襲われたら、そりゃ苦手にもなるよね……………」

「よし……………ミスタ、きららー！」

おもむろにミスタときららをボールから出すと、サファイアを抱き上げ、そのままミスタに飛び乗る。

「きゃっ！」

「ミスタ、できるだけ高くお願い！きららは回りを見てて！」

「……………」

『わかったー。』

サファイアが驚いているけど、私は気にせずにミスタときらららにお願する。

そして、ミスタときららが返事をした瞬間、ミスタは急上昇した。  
「きゃああああああああ!!」

「大丈夫。掴まってて。」

叫び声をあげるサファイアに私は声をかけると、サファイアは私の首に腕を回してぎゅつと目を閉じた。

私も最初はこんな感じだったなあ……。

そう内心で笑っていると、ミスタが上昇を止めた。

「急にごめんね？怖いとは思うけど、目を開けてみて？」

「……。うわあ……!!」

今、私の視界にはハウエン地方の森や山、青い海が広がっている。

サファイアにも同じ景色が見えているはず。

「どう？」

「スゴい……。キレイ！」

うわあ……、と景色に見とれているサファイア。そんな私たちの横を小さな鳥ポケモンが通りすぎていく。

「ねえ、今のポケモンは何て言うの？」

「えつとね、スバメ！」

「じゃあ、あつちの青いのは？」

「あれはキャモメ！」

私の質問に意気揚々と答えてくれるサファイア。

やっぱり、怖いけどポケモンは好きなんだね。

「ねえ、サファイア。今も、ポケモンが怖い？」

「……うん。」

「そうだよ。でも、ポケモンが嫌いな訳じゃないよね？だから、どうやって接したらいいかわからない。そんな感じ、かな？」

「そう……なのかな……？」

「まあ、本人が分からないことを私が偉そうに言えないけどね。それでも……。」

一呼吸おいて、私は続けた。

「ポケモンはこんなにも素敵なお所に連れてつてくれるんだよ。怖がつてるだけじゃもつたないよ。」

そう言つて私は周囲を見渡す。

「ポケモンは人なんかよりもずっと強い生き物だから、怖い一面もあるよ。それでも、ボーマンダから守ってくれたのは男の子とその子の連れていたポケモンでしょ？」

「・・・うん。」

「そうやって、人を助けてくれるポケモンもいるんだよ。今のミスタときららみたいだね。だからね、怖い所も受け止めて、全部ひっくるめて。ポケモンを受け入れてくれると嬉しいかな。」

「・・・」

「あと、男の子の事も・・・ね。」

ちよつとむずかしいかもしれないけど、言いたいことは伝わったかな？

サファイアから返事がないけど、きつとこの子も迷つてる。あとは、この子次第。

なんか説教みたいになつちやつたなあ・・・。

「それじゃ、降りようか。」

「待つて。もう少しだけ・・・。」

「わかつた。少しなんて言わずに満足するまで、ここに居よつか。」

そのあと私達はしばらくの間、ハウエンの景色を眺め続けた。

—————

ハウエンの上空から降りると、サファイアは意を決したように喋りだした。

「あたし、お姉さんみたいな凄いトレーナーになれるかな？」

「ん？私？私は別に凄くはないよ。凄いつて言うのは、サファイアを守つた男の子みたいな事を言うんだよ。」

「そつか・・・。守つてくれた男の子が言つてた。11才でポケモンリーグを勝ち抜いた人がいたつて。それぐらい強くなれば、ポケモンの事も怖がらずに受け入れられるようになるかな？」

「あー、うん。そうだね。」

「11才でリーグを勝ち抜いた・・・？それって、レッドの事？」

「なんか、ポケモンを逃がした悪ガキみたいなイメージだったけど、  
そういやポケモンリーグでグリーンにも勝ってるんだよね。」

「そう考えると、トレーナーとしては優秀なのかな？」

「お姉さん？」

「ううん、なんでもない。そうだね。それぐらい強くなれば、ポケモン  
だってへっちゃらだよ。」

「あたし、頑張る。」

「そう言っただけでいいって、握りこぶしを作る。」

「子供って、立ち直りが早いねえ。さっきまで落ち込んでたとは思え  
ないや。」

「素直なのは良いことだね。」

「それじゃ、帰ろっか。」

「うん！」

「もう一度サファイアと手を繋いで歩き出す。」

「この様子なら大丈夫かな？」

「あのままポケモンを嫌いになったら嫌だし。」

「とりあえず、研究所に帰ろう。」

「—————」

「研究所に帰ると、玄関の前をうろうろソワソワしながら行ったり来  
たりしているオダマキ博士と目が合うと、そのまま駆け寄ってきた。」

「とりあえず、じっとしていられたことはよく分かったよ。」

「思ったより早く仕事が終わってね、手持ちぶさただったんだよ。」

「いや、そんな取り繕わなくても。私はまだ何も言っていないよ？」

「まあ、ジト目では見てたかもしれないけど。」

「お父さん、あたしにポケモンのこと教えて！」

「お？・・・おう、任せろ！」

「そんな様子には気づかなかったのか、サファイアはオダマキ博士の  
足に抱きつき、ポケモンの事を知りたいとお願いしている。」

「一瞬呆気に撮られてたけど、すぐに快く返事をする。」

「なんか、問題解決っぽいんで私は帰りますね。」

「もう帰っちゃうの？」

「うん。友達との約束もあるしね。長居はできないかな。」

「しゃがみこみ、視線を合わせてサファイアの頭を撫でる。」

「なんだか、子供のお守りをさせただけみたいで申し訳ない。」

「いえいえ。私も急な訪問でごめんなさい。」

それに、私が勝手にやったことだし。オダマキ博士が気にする必要はないかな。

「それじゃ博士。サファイアにポケモンの事ちゃんと教えてあげてください。」

「そういうのは任せておいてくれ。そういうのは得意分野だ。」

「そうでしたね。それじゃサファイア。お父さんの言うことをよく聞くんだよ。」

「わかった。・・・お姉さん、また会える？」

「うん。また遊びに来るね。」

「いつでも遊びに来てくれ。フィールドワークで家を空けていることもあるが・・・。せめてものお礼に、木の実を持っていくといい。疲れたときにでも食べてくれ。」

「ありがとうございます！」

お礼を言つて、私はボールからミスタを出す。

「じゃあね！」

一言だけ声をかけて、ミスタに飛び乗りそのまま飛んでいく。

後ろをチラツと見ると二人が手を振っているのが見えたので、私も手を振る。

通りかかっただけの私がしゃばりすぎな気もしたけど、ルビーもサファイアも立ち直ったから結果的にはよかったかな。

と言うか、あの立ち直りの早さなら私が何をするまでもなく立ち直ってた気が・・・。

まあ、結果良ければなんとやら。ジョウトに戻ろうか。

## 24話

と言う訳で、やってきました石の洞窟。

目の前にはポツカリと口を開けたように洞窟の入口が。

いや、私も早く帰ろうと思ったんだけどね？

船着き場に行ったら

「次の便は3日後です。」

って言われた以上、仕方ない。

とりあえず、ダイゴさんにおすすめされた石の洞窟の事を思い出して、向かってみようかとムロタウンに行って、洞窟の事を聞いてみた  
ら……。

「町のハズレにあるけど、あんなへんぴなところに行きたがるなんて……。変わってるねえ。」

って言われた。

おかしいなあ、ダイゴさんにはオススメって言われたんだけど……。

これは、ダイゴさんが少女を連れ込もうとした変態か、隠れた絶景スポットか、ただの洞窟マニアのどれかかな？あ、石マニアかも。

「……………絶景スポットが待ってますように。」

洞窟の入り口で手を合わせる。

せめて変態ではありませんようにと祈りながらきららをボールから出して置く。

「きらら、護衛よろしくね？」

『おっけー、まかされたー！』

なにかあつたら、きららに全部吹き飛ばしてもらおう。

へんぴなところって言ってたし、他の人を巻き込むことはない……はず。

「それじゃ、中に入ろうか。」

『おー！』

—————

洞窟に入るとズバットやイシツブテ、ゴローンといったポケモンとすれ違う。

「ふーん。洞窟に生息してるポケモンはどの地方でもあまり変わらな  
い、のかな？」

『ましろー、わかれみちだよー？』  
「ん？」

きららの声で前を見る。

暗くて気づくのが遅れたけど、左右に枝分かれした道。  
さて、どっちに行こうかな。

「きららはどっちがいい？」

『まよったらひだりのほうそく！』

「え、なにそれ？」

『しらない！』

「知らないのかー・・・。」

まあ、根拠なんてなくてもいいや。

船が出るまでの暇潰しを兼ねた観光だしね。

別にダイゴさんに会えなくても問題はなし。

あれ？ダイゴさんに会えなくていいなら、わざわざこんな洞窟入ら  
なくてもよかったのでは・・・。

ロリコン変質者の可能性もあるし・・・。

「よし！左に行って何もなかったらそのまま帰ろう！」

『りよーかーい。』

そうして分かれ道を左に進む。

そのまましばらく進むと小さな湖のような少し開けた場所に出る。

その湖は洞窟の隙間から差し込む光を反射してキラキラと輝き、ま  
さに絶景と呼べるような場所だった。

「見てみてきららー！凄いきレイだよー！」

『すごいー！きららきららしてるー！』

そう言つて湖の水を背中羽衣で飛ばしてくる。

「ちよつと、きららー！冷たい！」

『あははー。』

文句を言いつつ、笑いながら水をかけ返す。

最近では戦つてばかりだったから、きららと遊んだのも久しぶりか



も。

こういう時間も大事だね。

—————

きららと水を掛け合ってしばらく。

「うへえ……。びしょびしょだよお……。」

『あははーびしょびしょだねー!』

「やったのはきららでしょ?もう……。」

とりあえず、着替えようかな。こんな洞窟に人なんか来ないだろうし、ちやちやつと着替えよう。

と言っても、替えがあるのは着物だけなんだよね。洞窟なんかで着たくはないんだけど仕方ない。風邪引くよりましでしょ。

ということで、着替えました。着ていたやつは絞れるだけ絞ってカバンに突っ込んでおいた。

んー……。ヤマブキじゃあんまり歩かなかつたから気にならなかつたけど、洞窟だと裾とか袖が気になるなあ……。

カントーに戻ったらエリカに頼んで仕立て直してもらおうかな。

今はどうしようもないから、注意して歩こう。

「きらら、着物には水をかけるのはなしだよ?」

『はーいー!』

一応、きららにも注意しておいてと。

それじゃ、どうしようかなあ……。

ここまで来てダイゴさんには会えなかつたけど、湖で遊んだし、もう帰ろうかな?

「ん?あのポケモンは……?」

帰ろうと思った矢先、湖に見たことのないポケモンの群れがやってくる。

見た目はかわいいんだけど、頭に大きな顎みたいのがついてる。

「すごいねえ、あんなポケモンもいるんだ……。」

『かたそうなたまたまだねえ。』

群れから隠れるように岩影に移動する。

「どうや、あのポケモン達は水を飲みに行って来たみたいで、水を飲んだらそのまま来た道に戻っていく。」

「そうして引き返していく群れの中に、一人だけ遅れて湖にやってくる子がいた。」

「その子は周りより少しだけ体が小さく、湖に着くと少し咳き込んでいる。」

「あの子、体調が悪いのかな?」

『んー、かおいろはわるいね。』

「様子を伺っていると、咳がおさまった様でゆっくり水を飲んでいく。」

「その間に他の子達は先に行ってしまった。」

「他の子達は待つてくれないんだね…。野生だと、弱いものから切り捨てられていくのかなあ…。」

『なんか、かわいそうだねえ…。』

「ねえ、きさらぎ?あの子治してあげてもいいかな?」

『うん。まえになおしてからだいぶたってるし、えねるぎーもだいじょうぶだよ。だから、なおしてあげて?』

「きさらぎも賛成してくれてるし、私も放っておけない。」

「自然の摂理的にはよくないかもしれないけどね。」

「とりあえず、あの子の所に行こうか。」

「岩影から姿を出して、さっきのポケモンの方に歩き出す。」

「すると、向こうも気づいた様で少し後ずさる。怯えさせたかもしれないから、大体2メートルぐらい手前の所で立ち止まる。」

「そして、視線が合うようにしやがみこむ。」

「体調が悪そうだけど、大丈夫?」

「クチー!」

「うん、警戒されてるねえ。」

『どうするの?』

『どうしよう?』

「・・・」

うーん、あつちも無言で睨んできてるしどうしようか。気を引けるものがあるといいんだけど・・・あ！

がさごそと、博士から貰った木の実を取り出す。すると、向こうも気になったのか少しずつ近づいてくる。

「お腹すいてない？どうぞ。」

目の前にまで来たその子に、木の実を手渡す。

その子は木の実を受け取ると、少しの間だけ眺めると、少しずつかじりだした。

今なら少しぐらい触っても大丈夫かな？

木の実を食べている頭に手をかざし、そのまま力を使う。少しだけ淡い光を放つと、すぐに消えた。

「きらら、どう？」

『もんだいないよ。えねるぎーもぜんぜんへってない。』

「よかった。ただの風邪だったのかな？」

「くちゅ？」

きららと話している間に、木の実を食べ終わった子が不思議そうに私を見上げる。

「体調はどう？」

私はその子のもう一度声をかけると、ピョンとその場で一回ジャンプする。

「くちゅー！」

「よかった。元気そうだね。」

『ましろー！あぶない！』

きららの声が聞こえたと思ったら、サイコキネシスで後ろに引っ張られる。

「わっ・・・とと。」

こけそうになったところをバランスをとる。

そして、さっきまで私が居たところに突っ込んでくるポケモン。

そのポケモンは、さっきまで木の実を食べていた子と同じ種類のポケモンだった。

「チーー！」

突っ込んできた子は、さっきの子を庇うように私の前に立ち威嚇している。

はぐれたこの子を探しに来たのかな？

それなら……。

私の前に入るきららを抱え、そのまま来た道に走り出す。

「あの子が元気になった以上、長居は不要！帰るよ！」

『わーい、らくちん！』

なんかきららは楽しんでいるけど、まあいいや。

さっきは助けて貰ったし、今は楽しませてあげよう。

## 25話

ポケモンから逃げ出した私は、分岐のあった所で足を止めた。

「ふう。ここまで来ればさすがに追ってこないでしょ。」

『ましろ、おそーい。』

「そりゃ、きららやミスタと比べたら遅いよ。私はポケモンじゃないし。」

笑いながら軽口を言いあう。その間に呼吸を整える。

「おや？君は……。」

「え？」

声をかけられて振り向くと、私が行かなかった方の分かれ道からダイゴさんが出てきた所だった。

「来てくれたんだね。どうだい？良いところだろうか？綺麗な石も沢山ある。」

「はい。綺麗な湖もありましたし……。石？」

「うん、石。」

やっぱり石なのか……。

「石はいいです。というか、石以外になにかないんですか？」

「ん？石以外何か必要なのかい？」

懸念してた点は大体あつてたみたいだ。まあ変態は変態でも、石が好きな変態みたいだけど。

「いや、大抵の人は石だけじゃ満足しないと思いますが……。」

「そうなのかい？でも、これを見てほしい。さつき見つけたやつなんだけど、このツヤといい形といい、美しいとは思わないかい？」

「ないです。」

「そんな……!?!」

言い切つたらこの世の終わりみたいな顔をされた。

なんでそんな顔されなきゃいけないんだろう。むしろ私が洞窟をオススメされたときに、その顔をするべきだった。

「まあ、綺麗な湖を見れたんで良かったです。」

「湖……？ああ、あそこか。あそこも綺麗だよね。」

「知ってたのにそれを差し置いて石を猛プッシュしたんですか？」  
「え？石のほうが綺麗だろう？」

この流れ、さつきもやったよ……。  
話が進まないし、とりあえず洞窟を出よう。

「話が進まないのです、とりあえず先に出ませんか？」

「そうだね。僕も満足したし、出ようか。」

そう言って、二人で出口に向かって歩き出す。

「そーいや、その服似合ってるね。」

「あ、どうも。」

そーいやって言う辺り、ホントに石以外に興味なさそうだなあ……。

—————

そんなこんなで出口にたどり着いた。

歩いている時も石のトークで場を繋いでいたダイゴさん。石はもういいって。

『ましろ、うしろからついてきてるよ。』

「え？誰？」

『さつきのこ。』

後ろを振り返ると、岩影に隠れてこちらを伺っているさつきの子。

「ホントだ。どうしたんだろう？」

「ん？どうしたんだい？」

「えっと、野性のポケモンがついてきてるみたいで……。」

「ふむ。あのポケモンは、クチートだね。君を追いかけてきたのかい？」

「みたいです。あの子、クチートって言うんだ。」

二人で足を止め岩影に隠れたポケモン、クチートを見つめる。

すると、見られていることに気づいたクチートは岩影に引っ込み、出てこなくなりました。

「きらら、だっこはここまでね。」

『よはまんぞくじゃ。』

「どこでそんな言葉覚えたの？」

抱えていたきららを放して、クチートが隠れている岩影に向かう。そこでは、右往左往しているクチートの姿があった。

クチートが私に気づくと、少し迷ったようなそぶりをしたあと、1つの宝石のようなものを差し出してきた。

「これ、くれるの?」

「くちー!」

「ありがとー!すごいキレイだね。なんか、七色に光ってる……。」  
しゃがんで差し出してきた物を受けとる。

「ここじゃ暗くて分かりにくいけど、絶対にキレイなやつだね。」

「さっきのお礼かな? わざわざありがとね!」

「ちー!」

頭を撫でると、嬉しそうになくクチート。  
かわいい。

「野性のクチートは、油断させてから大顎で噛みつくものなんだが……。ずいぶんなつかれてるね。」

「そうなんだ。きのみをあげたからかな?」

「でも、こんなにかわいいなら噛まれてもいいかも。」

「ちなみに、クチートの大顎は鉄骨ぐらいなら軽く噛みきるよ。」

「え?」

「思わず手を引っ込める。」

「噛まれてもいい、なんてことはないね。」

「慢心よくない。」

「ははは。それだけなつかれてるなら大丈夫だよ。」

「……ほんとに?」

「ちっく!」

返事はクチートから返ってきた。

「どうやら、本当になつかれてるみたい。」

「という事で、もう一度頭を撫でる。」

「うん。噛まれない。」

「そのクチート、連れて行ってあげたらどうかな?」

「え?この子を?」

私は首をかしげる。とりあえず、クチートがどうしたいか、かな。

「んー、どうする？一緒に来る？」

「くちー！」

「それじゃ、一緒に行こっか！」

一緒に来てくれるみたいなので、クチートを抱き上げる。

うん、少し重たい。でもまあ、新しい仲間が増えたことで我慢。

きららも、わーいわーいと、まわりをくるくる回っている。

「ん？ボールにはいれないのかい？」

「空のボール持っていないんですよ。カバンの中には少しの着替えと回復アイテムだけなんで。」

「でも、ポケモントレーナーなんだよね？」

「私としては、そんなつもりはないんですよね。家族とか、友達とか。

そんな感じ。」

「やっぱり君は変わったトレーナーだね。」

そうやってボールを差し出してきた。

「これを使うといい。空のボールだ。」

「ありがとうございます。後で使わせてもらいます。」

受け取ったボールと、宝石のようなものをカバンにしまう。

せっかく新しく増えた仲間だもん。ボールに入れるのは後でいいよね。

「ボールの代わりに、と言ってはあれだけど。僕と戦ってくれないかな？」

そう思っていたら、ダイゴさんに勝負を挑まれた。

なんで？



## 26話

洞窟を出ると、ダイゴさんは私からある程度距離をとる。

「このぐらいでいいかな。」

「やらないと駄目ですか？」

「ポケモンバトルは嫌いかい？」

「まあ、好きではない・・・かな。」

言いながら、抱いていたクチートをおろす。

と言っても、私の手持ちには戦闘大好きっ子がいるんだよね。さつきからボールがガタガタしてるし。

「分かってるよ。お願いね、ミスタ。」

「――」

待つてました、と言わんばかりに勢いよく出てくる。

確かに最近はあるまりバトルしてなかったから、ストレスが溜まっていたのかも。

「スターミーか。他の手持ちを聞いてもいいかい？」

「え？いませんですけど・・・。」

「・・・成程。それなら、2対2の入れ替え制でやろうか。」

ん？なんか、きららも頭数に入ってるけど大丈夫かな？

「きらら、数に入っちゃってるけど、どうする？久しぶりにバトルする？」

『やるやるー！』

きららも久しぶりのバトルでノリノリだった。

でも、きららとまともな勝負になるトレーナーのほうが少ないんだよね・・・。

「ちゃんと手加減はしてよ？」

『でも、あのひと。かなりつよいよっ。』

『そうなんだ。どれくらいかわかる？』

『まえに、やまぶきでたたかったひととおなじぐらい、かな？』

「え？サカキと同じぐらい？」

『そうそう！そのひと！』

「うへえ……。」

きららと話している間、首を傾げているあの石マニアの人が？

人は見かけによらないって言うけど、サカキと同じぐらいっていうのは驚きだねえ……。

「話はまとまったかい？」

「そうですね。2対2の入れ替え制で大丈夫です。」

こっちの先発は、と考える前にミスタが前に出る。

まあ、ミスタ以外ありえないんだけどね。あの子ほど、切り込み隊長なんて言葉が似合う子はいないし。

「久しぶりのバトルだけど、指示はいる？」

「……」

ふるふると、体を横に振る。

好きにやらせろってことね。了解。

「それじゃ、メタング。頼んだよ。」

今朝見たポケモンより一回り小さい感じのポケモンを繰り出す。メタングと言うらしい。進化すると、今朝見たポケモンになるのかな？

ってことは……。

「手加減されてる……のかな？」

『かな？』

「ちー？」

いや、きらら？真似しないでよ。

クチートも真似しちゃったじゃん。

「それじゃ、始めようか。」

「いつでもどうぞー！」

まあ、ミスタが好きにやるから私の方は特に身構えることもないし、ね。

「先手はもらうよ。バレットパンチ！」

メタングが高速で突っ込み、ミスタに向かって拳を振り上げる。

それに対して正面から十万ボルトで迎え撃つ。

技を受けたメタングは、多少怯んだもののミスタにその拳を叩きつ

ける。

・・・あれは拳でいいのかな？まあいいか。

「そのままコメントパンチ！」

そして、逆の拳をもう一度ミスタに叩きつけようとする。

うーん……。ミスタ、接近戦は苦手なんだよね。主砲のすごいはいこうせんも、ハイドロポンプも少し溜めが必要だから、近づかれると相手の方が早い。どうするんだろう？

そう思っていると、ミスタは正面からコメントパンチを受け止め、ガンツ、と鈍い音が響く。

「え？ミスタ、大丈夫？」

まさか、正面から受け止めるとは思わず声が出た。

でも、心配はいらなかったみたい。

受け止めた時に、れいとうビームを撃つてみたいで、メタングは拳を叩きつけた姿のまま凍りついていた。

メタングの氷柱の出来上がりだね。

「ー」

メタングを凍りつかせたミスタはいつもの電子音を響かせる。

とりあえず、殴られた分は問題ないってことかな？

ダイゴさんはどうするんだろうか。

ふと彼の方を見ると、ニヤリと不敵に笑ったような気がした。

「っ!!ミスタ、飛んで！」

「しねんのずつきー！」

私が叫ぶのと、ダイゴさんの指示はほぼ同時だった。

ミスタは私の声に反応して上に飛び、メタングはずつきで正面の氷を叩き割った。

「あいにく、氷には強いんだ。でも、よく気づいたね？」

「顔に出てましたよ？」

「そうか。ポケモンじゃなくて、僕の仕草から反応したのか……。いい判断力だね。」

「ありがとうございます。」

ちらりとメタングの方を見る。

割れたのは正面の部分だけ。後ろ半分は未だに氷に包まれてる。それなら……。

「ミスタ、すごいはいこうせん！」

「メタング！ てっぺき！」

凍りついても動けるようなポケモンだからね。中途半端な攻撃じゃ倒せないかもしれない。

そう思っつて、まだその場から動けない今。メタングに最大級の一撃を放つ。

ミスタから放たれたビームはメタングの氷ごと粉碎して、浜辺の砂を巻き上げる。

あー、これは砂まみれになるやつだ……。

『きららがーどー！』

と思っつたらきららがサイコネシスで私の周りの砂を弾いてくれた。

「ありがと、きらら。今日はよく助けられてるね。」

『うむ。よきにはからえ。』

「ほんと、どこで覚えたのそれ？ それに使い方間違ってるよ。」

『がーん!!』

私の周りをフラフラと飛んだあと、私の頭の上にぺたんと着地する。リアクションもバツチリだね。

あ、そういえば船の中で見てたテレビに似たようなことやってたっけ。その影響かな？

とりあえず、頭の上のきららは置いといてダイゴさんの方を見る。……なんか、頭に砂の山を作ったまま微動だにしないんですけど。

あ、動いた。

「驚いたな。メテオビームを使えるのかい？」

「メテオビーム？ すごいはいこうせんのこと？」

「君はそうよんでいるのかい？」

「はい。まあ、はかいこうせんよりすごいから、すごいはいこうせんって言っただけなんですけど。」

「そうなのか……。今の技はメテオビームと言って、宇宙の力を吸収して打ち出す技なんだ。」

「ソーラービームの、宇宙バージョンってことですね。」

成る程。だからよく晴れた星のキレイな日は威力が高いんだ。エネルギーが集めやすいってことだね。

「戻れ、メタング。」

ダイゴさんがメタングをボールに戻す。

すごいのか……。じゃないね。メテオビームを受けたら流石に耐えれなかったみたい。

「あれは予想外だったね。甘く見てたかな？」

ダイゴさんはそう言って頭と肩に積もった砂を払っていく。

その間にミスタは私の横に降りてきた。

「ごめんね、ミスタ。思わず口出ししちゃった。」

「ー」

ミスタに謝ると、最初と同じように体を横に振る。

油断した自分が未熟！って感じかな？

おっと、きららじゃないけど私も影響されちゃってるね。

「お疲れ様。選手交代だね。きらら、いつまで頭の上にいるの？」

「むー、ましろがつめたい。」

「はいはい。船に乗ったら、一緒に続きを見ようね。」

『わーい！』

喜びきららは、私の周りをぐるっと回ると前に出る。ちよろい。

『やるぞー。』

「きららもやり過ぎないなら、自由にやってもいいよ？」

『ほんとに？やったー！』

きららもたまには自由にやりたいよね。

サカキと同じぐらい強いなら、多少やり過ぎても大丈夫だろうし。

「メタグロス。次は君だ。」

グオオ、と声をあげながら新しいポケモンが出てくる。こっちはメタグロスと言うらしい。

「こっちの方が強そうだね。きらら、気をつけて。」

『りよーかいつ!』

『準備はいいかい?』

『いいですよ。』

『いくよ!・ラスターカノン!』

メタグロスと言うポケモンから銀色のビームが放たれる。

・・・さつきから知らない技ばかりだなあ。

もしかして、私の知識ってカントーの物に片寄ってるのかな?

『えいつ!』

きららのかわいい掛け声から放たれたのはメテオビーム。

それはラスターカノンよりも大きく、砂を巻き上げながらラスターカノンを飲み込んでメタグロスに直撃した。

あー、いつの間にか辺りは暗くなってるし。今日も星がキレイだから絶好調だね。

あと、ダイゴさんがまた砂まみれになってるよ。

『あのぽけもん、すごいね。』

『え?』

『まだ、たってる。』

『うそ!』

メテオビームが収まり、砂ぼこりがやむと、さつきと同じ場所に立っているメタグロス。

苦しそうに見えるけど、あれをまともに受けて立ってたポケモンは始めてだよ。

『すごいねえ・・・。』

『次、いくよ!』

きららはそのままメタグロスに向かって、すごいいわおとしを1つだけ落とす。

見た感じ、ダイゴさんと同じぐらいの岩が1つだから加減はしてるけど、あのポケモン大丈夫かな?

『メタグロス! てっぺきとりフレクター!』

そう思っていたら、自分を固くするであろう技と自分を守る壁を出す技を同時に展開する。

そして、空から落ちる岩がリフレクターに衝突する。

リフレクターは岩に押されて少しずつヒビが入っていき、数秒の均衡のあと砕け散り、岩がメタグロスに直撃した。

衝撃でまた砂が巻き上がり、今度はダイゴさんだけじゃなく、私も巻き込まれた。

「ああ、もう！せつかくの着物が台無しだよ。大丈夫？」

巻き上げた砂が落ち着いた後、砂を払いながら隣のクチートとミス々に声をかける。

「くち。」

クチートは元々洞窟に住んでたからか、全然平気そう。

ミスタは、体を振って砂を落とした後、自分で洗い流してる。

便利そうだね、それ。

「メタグロスの方は？」

『まだ、たってるよ。』

「ホントに!？」

『でも、たってるだけかな?』

「え?」

そのポケモンの方を見る。

どうやら、立ったまま気絶してるみたい。

加減してたとはいえ、消耗してないきららの攻撃を受けて立ってるのすぎすぎない?」

「と言うかダイゴさん、また頭の上に砂の山を作って微動だにしないんですけど。」

あ、動いた。

「今度はりゅうせいぐん、か。君のポケモンには驚かされてばかりだね。」

「りゅうせいぐん?」

メタグロスをボールに戻しながらこちらに歩いてくる。

頭の上に砂の山ができてますよ?」

「うん。別の地方で伝えられる、ドラゴンタイプの究極の技だね。」

「へえ、そんなにすごい技だったんだ。」

「これも知らなかったのかい？」

「はい。すごいわおとしてよんでました。」

「はは。間違っではないね。」

なんか笑われた。

いや、たしかにバブルこうせんをなんかすごいあわとかよんでたら、私も笑うかもしれない。

「あ、それなら……。」

「ん？」

「もうひとつ、よく分からない技があるんですけど、わかりますか？」

「どんな技だい？」

「きらら、あれ消せる？」

そう言ってさっき落とした岩を指差す。

『できるけど、つかってもいいの？』

「今回はいいよ。でも、岩だけを消してよ？」

『おっけー。』

すると、きららから銀色の光が溢れる。

その光は岩に収束し、光が消えると岩もキレイに消えていた。

「みたいな技です。」

「ふむ……。おそらく、はめつのねがい、かな？僕も見ることがないから断言はできないけど……。」

「はめつのねがい……。」

「ジラーチだけが使える技があるらしいから、それだと思う。予想ばっかりで申し訳ない。」

「いえ、全然わからないよりいいですから。それより、砂積もってますよ？」

「おっと。」

ダイゴさんが頭と体の砂を払っていく。

「ふう。こんなもんかな？それより、ここまで一方的になるとは想像なかったな。」

「いえ、きららのメテオビームとりゆうせいぐんの両方を使ったのは始めてですよ？」



「一応、誉め言葉として受け取っておくよ。しかし、それだけ強いのにポケモンバトルは嫌いなのかい？」

「そうですね。いくら強くても絶対にケガをしないわけじゃないですし、ケガするのは私じゃなくてポケモンですから。」

「だから好きじゃない、と。」

「はい。それに、きらは出会った時から強かったし、ミスタは勝手に強くなったし。だから、私がトレーナーって言われても違和感しかないんですよ。」

そう言うと、ダイゴさんは顎に手を当てて何か考え込む。

「成る程。マシロ君はポケモンを育てたことがないんだね。」

「ですね。」

「それなら、このポケモンを連れていくといい。」

そう言っつてモンスターボールを差し出してきたので、思わず受けとる。そして、中から飛び出してきたのは青い鋼鉄の体を持った小さなポケモン。

「ダンバルと言っつて、進化するとメタング、メタグロスに姿を変える。まあ、育てるのはなかなか大変なだけだね。」

「唐突ですね。ハウエン地方には、ポケモンを送る風習でもあるんですか？」

「いや、ないよ?。」

「それなら、なんでこの子を?。」

「多分、君がポケモンバトルを嫌いなのは、自分でポケモンを育てたことがないからだと思うんだ。普通のトレーナーは自分の力量にあつたポケモンを連れて、ポケモンと一緒に強くなるものなんだ。そして、ポケモンと喜びを分かち合っつて、また強くなろうとする。そうやって少しずつ成長していくんだよ。」

「最初から強いポケモンを連れてるのはレアケースっつてことですか・・・。」

「そうだね。だから、そのクチートとダンバルと一緒に強くなった時には。ポケモンバトルも楽しむことができる、と思うよ。」

「そんなもんですかね?でも、それならダンバルは渡さなくてもいい

んじゃ?」

「そうなんだけどね?なんか、そのままだと野性のポケモンを捕まえることは無さそうな気がして……。空のボールも持つてなかったし。」

まあ、確かに私は野性のポケモンを捕まえる気はなかったけどね。だからってポケモンを1体ポンと渡せるものなのかなあ……。

「あとは、先行投資、みたいなものかな?」

「先行投資?」

「うん。この先、いつか君の力を借りるときが来るかもしれない。その時は力を貸してほしいと思つて。その時の手持ちが3体だけだと心もとないからね。年はいくつだい?」

「11です。」

「16以上なら即スカウトするんだけどね。だから君の将来に期待して、そのポケモンを君に預ける。ダンバルがメタグロスに進化した時には、力を貸してもらえるかな?」

「よくわかりませんが、将来手を貸してほしいってことですね。わかりました、暇なら手を貸しますね。」

「ああ、うん。とりあえずそれでお願いするよ。」

とりあえず、将来的に弱いと心もとないってことかな?

実際、サカキとかミュウツーとか、2体だと危ない時もあったしね。

「それじゃ、ポケモンセンターに帰ろうか。今日は疲れたよ。」

「それ、私のせいですか?」

「いやいや、そんなことはないよ。君との勝負は実に有意義なものだったよ。」

「そう?なんかトゲを感じたんですけど……。あ、バトルに負けたから?」

「はっはっはっ。」

沈黙と愛想笑いは肯定なんですよ……。

—————

ダイゴさんとバトルした翌日。

ダイゴさんは朝からさつきと出発してしまった。

ほんとに石だけ掘りにきたんだねえ……。

それか、バトルで負けたからかな？

とりあえず私もサクツと着替えていつもの長袖長ズボンに。

「さてと。それじゃあどうしようかな。」

船が出るまであと2日ある。

現状、行きたいところも、やりたいこともないので絶賛悩み中である。

あ、でもやっておかないといけないことはある。

私はボールからクチートとダンバルを出す。

「ボールの中はどう？快適？」

「くちー！」

「そっか。よかった。」

この子はボール初体験だから、少しだけ心配してた。まあ、ミスタときららに文句を言われたことはないからそれなりに快適なのかな？

いや、きららには言われたことがあったような……。

まあいつか。

ダンバルはクチートの隣でしきりに首をかしげる仕草をしている。

「では、名前をつけたと思います。一晩悩んだけど、とりあえず発表していくよ！まずは、クチート！」

「くちー！」

「かぶちー！かぶつと噛みつくクチートから！どう？」

「ちー！」

お、好感触。気に入ってくれたみたい。よかった。

「よろしくね、かぶちー。」

「ちつくー！」

「次はダンバル！」

と、呼んでみたけどさつきからしきりに首をかしげている。

「もしかしてあなた、最近捕まったの？」

コクコクと、頭を上下に振る。

ただでさえ捕まったばかりで慣れない環境にいたのに、知らない人に預けられるとそりや戸惑うよね。

と言うか、捕獲したばかりのポケモンを会ったばかりの他人にポンと預けるのはどうなんだろうか・・・？

信用されてるってことかな？

あの短時間で信用できるのかは疑問だけど。

「ダイゴさんが何を思ってあなたを預けたのかは分からないけど、よろしくね。」

もう一度コクコクと頭を上下に振る。

とりあえず、分かってくれたみたい。

それじゃ・・・。

「あなたの名前は、グロウ！進化先のメタグロスにかなり引つ張られたけど、どうかな？」

すると、私の周りをクルつとまわる。喜んでるのかな？

「これからよろしくね、ふたりとも。」

——ダイゴ視点——

やれやれ、参ったね。

あそこまで一方的にやられるとは思わなかった。

「さすがに予想外だったね、メタグロス？」

「グオオ。」

「はは、ごめんってば。ラスターカノンで様子見は悪手だったね。」

メタグロスも悔しかったらしい。

ドラゴンタイプもいわタイプも、効果は今一つ・・・なはずなんだけど。

ジラーチというポケモンが強いのか、あの子のジラーチが規格外なのか。

「それに、スターミーも強かったね。予想外のことばかりだ。」

それに、観察眼と判断力。

まさか、僕の仕草から読まれるとはね。

子供にばれるようじゃ、僕もまだまだだね。

しかも、あのポケモン達は彼女が育てたポケモンじゃないらしいし。

なんで一緒にいるのだろうか？

「不思議な子だったね。思わずスカウトしたくなったよ。まあ、まだ若いから、とりあえず将来的助けてもらえたらと思って、捕まえたばかりのダブルを預けてみたけど・・・。」

さてさて、彼女はどんなトレーナーに成長するのかな？

楽しみにしてるよ？マシロくん。

## 27話

……2年後……

「ハガネちゃん、アイアンテール！」

「グロウ、コメットパンチ！」

ハガネちゃんの尻尾と、進化したグロウ、メタングの拳がぶつかり合う。

しかし、両者の一撃は拮抗することはなく、ハガネちゃんの尻尾が振り抜かれ、グロウは地面に叩きつけられた。

「グロウ!?大丈夫……じゃないね。ありがとう。」

倒れたグロウをボールに戻す。

あかりちゃんを倒した後の連戦だからキツかったよね？

お疲れさま。

そして、次のボールを構える。

「いくよ、かぶちー！」

繰り出すのはかぶちー。

このバトルできららとミスタもには頼らない。

このバトルは私が、と言うか、私とグロウとかぶちーがどれだけ成長したかをはかるためのもの。

だから、グロウとかぶちーの二人と一緒に戦う。

「強くなりましたね、グロウ。あかりちゃんを倒せる程に。」

「ミカンのお陰だよ。私、ポケモンを育てたことがないから、凄く助かった。」

「助言はしましたが、育てたのはマシロですよ。あかりちゃんを倒したんです、自信をもってください。」

「うん。ありがとう。」

「それじゃ、続きです。2対2で互いに最後のポケモン。全力でいきます。」

そう言うのと、さっきまでのほわほわした雰囲気から一変し、キリツとした目付きになる。

やっぱりジムリーダーはそこら辺のトレーナーとは違うね。

「ハガネちゃん、かみくたく！」

ハガネちゃんの大きな体が、小さなかぶちーに迫る。

正面からまともに受けたら勝ち目はない。

だから、起こりを叩く！

「ふいうちー！」

ハガネちゃんの大きな顎がかぶちーに噛みつく前に、こちらから飛び込み、顎を打ち上げる。

「そのまま、はたきおとす！」

そして、返すように頭を叩き、ハガネちゃんを地面に叩きつける。

少しは効いてるかな？

そう思ったのも束の間。モクモクと砂埃が舞う中、ハガネちゃんはムクリと体を起こす。

「後の先を取る、ですか……。お上手ですね。」

「いやいや、ハガネちゃんピンピンしてるじゃん……。やっぱり硬いねえ。」

ミスタがハガネちゃんに勝ったときは遠距離から相性で押し切ったけど、かぶちーは接近戦しかできないから余計にそう感じるや。

「アイアンテール！」

今度は尻尾を振り回す。

これだけサイズが違っていると、近づくのも難しいかな？

となると、全部躲すしかないか。

「かぶちー、つるぎのまいー！」

縦横無尽に尻尾が迫る中、それを舞うように躲す。

「すごいですね。まるで踊っているみたい。」

「エリカ直伝の舞だからね。見た目も効果も保証するよ？」

目の前では尻尾を叩きつけるハガネちゃんと、それを躲すかぶちーの舞。

確かに、そう言われると踊ってるみたいだ。

ダンスパートナーがハガネちゃんか……。

サイズが違いすぎない？

「ずっと見ていたい気もしますが、これ以上好きにはさせません！ハ

「ガネちゃん、すなじごく！」

ハガネちゃんが尻尾で地面を叩くと、巻き上げられた砂がかぶちーを取り囲む。

身動きが取れなくなったかぶちーはつるぎのまいを中断する。

「ストーンエッジ！」

地面から生える岩の突起が、すなじごくに捕まったかぶちーに迫る。

多分、かぶちーは砂で周りが見えてないよね？

だったら、私がタイミングを測って……。

「かぶちー、跳んで！」

私の声と同時に地面から岩が生える。

しかし、それに合わせてかぶちーが飛び上がることで、すなじごくから飛び出す。

「流石ですね。でも、逃がしませんよ。ハガネちゃん、かみくだく！」

「くるよーかぶちー、ほのおのきばー！」

空中でぶつかり合うハガネちゃんとかぶちー。

数秒の拮抗のあと、押し勝ったのはかぶちーだった。

「いっけえええー！！！」

思わず声をあげる。

かぶちーがハガネちゃんを掴んだまま地面に叩きつける。

ドガアンと、轟音と砂埃をあげながらそこから立ち上がったのはかぶちーだけで、ハガネちゃんは倒れたまま気絶していた。

「やったよ、かぶちー！初勝利だよ！」

私はかぶちーにかけよって、そのまま抱えあげてくるとその場でまわる。

「すごいすごい！頑張ったね、ありがとう！」

「ちー！」

かぶちーも嬉しそう。

確かに2年ずつと負けっぱなしだったもんね。そりや嬉しいよね。私も嬉しいもん。

「ふふっ、大はしゃぎですね。」



ハガネちゃんをボールに戻しながら歩いてくる。

おっと、笑われるほどにはしゃいでみたい。ちよつと恥ずかしい。

「いやいや。始めて育てたポケモンで、始めてジムリーダーに勝ったんだよ？そりや嬉しいでしょ？」

「ふふっ。そうですね。」

恥ずかしさを隠しながら反論すると、見透かされてるのか、ミカンは笑いながら賛同する。

「それでは、ジムリーダーに認められた証のスチールバッジ。今回は受け取ってくださいますか？」

「うん。」

私はミカンの手のひらからバッジを受けとる。

その時、ふとダイゴさんが言っていたことを思い出した。

ポケモンと一緒に強くなる、か。

なんとなくわかったような気がする・・・かな？

「でも、ミカンに勝つまで2年もかかったよ。」

「強くなるのに、早い遅いはありませんよ。やるかやらないか、です。」

「そういうものなの？」

「そういうもの、です。」

まあ、ジムリーダーがそう言うならそうなんだろうね。

「あとその着物、似合ってますね。」

「ほんとに？ありがとうございます。」

「でも、エンジュの踊り子さんより大分スマートな感じがします。裾なんて膝ぐらいまでしかありませんし。」

「あ。それはね、洞窟で動きづらかったから裾とか袖を色々動きやすいようにしてもらったんだ。・・・すごく怒られたけど。」

「えっ？」

「えっとね・・・」

—————

「ねえ、エリカ？この着物の裾とか袖、短くできない？」

「できますけど、どうしてですか？」

「洞窟とかだと動きづらくて。」

「動き・・・づらい・・・?」

なんか、後ろにゴゴゴゴって文字が見えそう。

「いいですか!?動きづらいのは、服が悪いんじゃないやありません!作法がなっていないんです。まずは・・・」

—————

「つてことがあってね・・・。それでも着物は直してくれたから、ありがたい話なんだけどね。」

「あはは・・・。」

「お陰ですごく動きやすいんだよね。まあ、背が伸びないから着られてる感じだけど。」

ミカンと話していると、カバンにしまっていたポケギアがプルルと鳴る。

「ちよつとごめんね。」

よいしよと、かぶちーを降ろしてからポケギアを取り出す。相手はブルー。

まあ、ブルーとミカンしか登録してないんだけどね。

「もしもし?」

『あ、マシロ?そつちの様子はどう?』

「それが、全く進展なし。やっぱり手がかりがないと厳しいかも。」

『そう。それならちようどいいわね。マシロ、急いでカントーに戻ってきてくれる?』

「いいけど、何かあったの?」

『さつき、レッドのピカを見かけたのよ。すぐに見失ったんだけど。でも、レッドもないしサワムラーに追われてるしで、なんか嫌な予感がするのよね。だから、そつちの進展がないなら、こつちで手を貸してほしいのよ。』

「わかった。すぐに戻るよ。」

『お願いね。』

ピッ、と通信を切る。

「行くんですね。」

「うん。なんか、急ぎみたい。」

そう言っただかぶちーをボールに戻す。

「この時間なら、明日の船で出発するのが一番早いですね。」

「明日かぁ……。まあ仕方ないか。」

きららとミスタは元気だけど、かぶちーとグロウは疲れてるしね。今日はゆっくり休もうかな。

「それじゃ、今日は早めにポケモンセンターに戻って休もうかな。」

「わかりました。今日はゆっくり休んでください。」

そう言っただミカンはポケモンセンターまで送ってくれた。

ポケモンセンターへの帰り道、ポツリとミカンが話し出した。

「しかし、2年前とは見違えましたね。かぶちーを連れてお友達の調査の手伝いに行っただと思っただら、ボロボロのかぶちーを抱いて戻ってきた時とは大違いです。」

「まあ、あの出来事があったから強くなれた、って所はあるんだけどね。恥ずかしいからできれば忘れてほしいところだけど……。」

「ふふ。絶対に忘れません。」

「ええ……。。」

と言うのも、2年前ジョウトに戻ってきた後。

かぶちーと一緒に調査に出掛けた矢先、女の子に出会った事から始まる。

—————

「ねえ、その人。見たことないポケモンだね？」

「え？かぶちーのこと？」

「えっと、名前は知らないけど足元の子。」

見た感じ、私と同じか少し年上っぽい女の子の人が、かぶちーを指差す。

「クチートって言うんだ。ハウエンで捕まえたんだけど、ジヨウトにはいないの?」

「あたしは見たことがないかな。」

「そうなんだ・・・。」

ジヨウトにはいないんだ・・・。

それならボールから出したままじゃ目立つね。ちよつと迂闊だったかな?

仕方ないけど、ボールの中で我慢してもらおう。

「ねえ、せつかくだし勝負していかない?」

「勝負?」

「そうそう。見たことないポケモンだし、せつかくだから。」

かぷちーをボールに戻そうとすると、バトルを挑まれる。

「どうするかぷちー?」

「くちー!」

どうやら、やる気みたいだけど、この子にとっては初めてのトレーナ戦・・・大丈夫かな?

でも、かぷちーとの初めてのバトルで、すこしワクワクしてる自分もいる。

うん。受けようか、この勝負。

かぷちーとは初バトルだけど、初勝利を目指して頑張ろう。

そう思っていたんだけど。

女の人の出したロコンに、私とかぷちーは、一方的に敗北した。

「やったね、ロコン!」

喜んでいる女の人を尻目に、私はかぷちーを抱いて、きずぐすりを使う。

・・・負けるのって、こんなにも悔しいものなんだね。

ぐつと唇を噛み締める。

「大丈夫、かぷちー?」

「ちー・・・。」

「ごめんね、勝たせてあげられなかった。」

「あたしの勝ちだね。でも、その子バトルに慣れてなさそう感じたかったけど・・・。」

「そうだね。一緒に行くようになってから初めてのバトルかな。」

「そうなんだ。ちよつと申し訳なかったね。」

「いいよ、気にしないで。」

なぜか申し訳なさそうにする女の子にそう言うと、少し表情が明るくなる。

さてと。

「それじゃ。私はこの子をポケモンセンターに連れていかないよ。」

「・・・あなたは、強いね。」

歩き出そうとした私にそんな呟きが聞こえて思わず足を止める。

「負けたのは私だよ?」

「勝敗の話じゃないよ。負けて、とても悔しそうなのに・・・。でもそれを飲み込んで、その子の事を気遣ってあげてるのがね。負けると全部ポケモンのせいにする人もいっぱいいるから・・・。あたしもロコンにあたったことあるし・・・。」

そう言つてロコンをなでている。

トレーナーつてのも色々な人がいるんだねえ・・・。

と言うか、悔しがつてたのばれてるんだけど。恥ずかしい。

「んー、そうだね。私は、強い弱いで一緒にいる子を決めてるわけじゃないし。それに・・・。」

「それに?」

「トレーナーとポケモンは一緒に強くなるものなんですよ?なら、普通の事なんじゃないかな?」

そう言うで一瞬、ぽかんとしたあとに、ふふつと笑う。

「やっぱり、あなたは強いですよ。その普通をできないトレーナーもいっぱいいるのに・・・。少し、羨ましいくらい・・・。」

「少し・・・何?」

「ううん。なんでもない。それより、ポケモンセンターに行かなくて

もいいの?」

「おつと、そうだった。それじゃ、行くね。」

「はい。さようなら。」

さつきアサギを出たところなのに、すぐに帰ることになるとは思わなかったよ。

「強い、弱いじゃない・・・か。負けた人が言う台詞じゃないと思うけど。ホウエン地方ね、行ってみようかな?」

最後のつぶやきは、私には聞こえなかった。

—————

「あの日、出発したと思ったたらすぐに帰ってきましたからね。」

「意気揚々と出発したのに、すぐに帰ってくるとか恥ずかしすぎるよねえ・・・。」

と、そんなこんなでポケモンセンターに到着。

軽く挨拶をして、ミカンはジムに帰っていった。

と思ったら、振り返って別れ際に、

「おめでとうございます。先程はお見事でした。」

そう言うと、今度こそ帰っていった。

改めて言われると、なんか心にくるものがあるね・・・。

「やったね、かぷちー、グロウ。」

ボールを出して声をかける。

中を覗くと、二人ともボールの中で寝てる。

起こしちや悪いと思い、私はそつとボールをしまう。

「二人とも、お疲れさま。」

## 2章 28話

次の日。

ミカンは、アサギを出発する私を見送りに港まで来てくれた。ありがたいけど、ジムリーダーって結構自由だね。悪の組織の幹部やってたりするし。

あー、やっぱりジムでも回るべきだったかなあ。

バツジを集めると目立つと思つてやめたけど、成果ゼロよりマシだったかもしれない。

まあ、結果論だね。

「どうかしましたか？」

「なんでもないよ。」

「そうですね。それより、本当に置いていくんですか？」

ミカンの手には、かぷちーとグロウの入ったボール。

昨日から続いてスヤスヤとお休み中。

「うん。昨日の疲れが残ってるみたいだから、預かっておいて。元氣になったら通信システムで送ってくれる？」

「わかりました。お預かりします。・・・グロウちゃんの鋼鉄の身体、

一回抱いてみたかったですよね。」

「なんて？」

「なんでもないですよ？」

「そう？」

なんか、すごいウキウキしてる気がするけど・・・。

なんでだろう？まあ、いつか。

「それじゃ、またね。」

「はい。」

手を振るミカンに手を振り返し、船に乗り込む。

さて、ブルーに一応連絡しておこうかな。

プルルル。

「もしもし?」

『マシロ? どうしたの?』

「今から船でカントーに戻るから。多分、昼頃には着くと思う。」

『え? 思ってたより早いわね。どうしようかしら……。』

「どうやら、ブルーの予想より早かったらしい。」

「なんかまずかった?」

『まずくはないわ。ただ、何を手伝ってもらうか、まだ決めきれてないのよ。何をマシロに任せるのが一番いいかしらね……。んー、こっちに着いたらもっかい連絡してくれる?』

「わかった。それじゃ、また後でね。」

ピッ。

通信を切った瞬間、船が出発する。

とりあえず、何をするかはわからないけど、

短い船旅の間はのんびりしようかな。

—————

船の甲板で手すりにもたれながらのんびり海を眺めていると、小さくクチバの港が見えてきた。

「お、ようやく見えてきたね。……。ん?」

眩いた時、船の下を大きな影が通りすぎる。

「今のはカイリユーかな? 珍しいね。」

そう言った瞬間、ボールからミスタが飛び出してくる。

「ミスタ?」

声をかけるが、ミスタはそのまま海に飛び込んでいった。

「ちよつとお!? もうすぐクチバに着くのどこ行くのよ……。」  
「なんか、海の中でドカンボタンやってるし。」



あー、そういうや昨日のジム戦でかぶちーとグロウしか戦ってないからか、よっぽど戦いたかったんだ・・・。

だからって通り魔みたいなことはやめてほしいなあ。

あ、出てきた。

水飛沫をあげて海から出てきたミスタは、船の甲板に飛び乗ると何故か私を無理やり担ぎ上げる。

「え？ミスタ？なんで？」

やはり、ミスタは答えずにそのまま海に戻っていく。

「ちよ！きらら、助けてー！」

あ。そういうや、きららは部屋でテレビ見てるんだった。

そのまま私はミスタに乗せられて、海に連れ込まれた。

そして、連れてこられたのは海底。

いや、流石に海底まで息を止めとくのは無理！

「ぶはっ。あれ、息が吸える。なんで？」

まあ、よく分からないけど生きてるからいいや。

それよりも・・・

「ミスタ、なんでここに連れてきたの？」

ミスタの方を見ると、これを見ると言わんばかりの動き。

ミスタの横にあるのは、台座のようなものに花びらのように置かれた4つの石。

ほのおのいし、みずのいし、かみなりのいし、リーフのいし。

あと、中央に見たことない石が1つ。

そういうや、クチバ湾に、使ってもなくならない石が沈んでるって伝説があったっけ。ブルーの事を調べてるときに知ったけど、関係ないからすっかり忘れてたや。

ってことは。もしかしてミスタはここで進化したのかな？

「それで、これを持っていけってこと？」

「ーーーー」

「ん？持っていくんじゃないやなくて、誰かにあげる・・・？」

ミスタのジエスチャーを読み取ると、誰かにあげようってことらし

い。

でも、石なんか欲しがる人なんて……。

居たねえ……。

「成る程ね。ダイゴさんにあげようってことかな？確かにあの人なら喜びそう。」

「……」

そうそう、と言わんばかりに体を揺らす。

意図は分かっただけど、海に連れ込まれた時は焦ったよ。

とりあえず4つの石はカバンに入れて、見たことのない石を手にする。

「冷たい。これも進化のいしのひとつなのかなあ……？まあ、ダイゴさんなら知ってるでしょ。」

手に取ったそれもカバンにしまう。

「それじゃ、戻ろうか。早く戻らないと、船に乗ってる人が1人いなくて、海に落ちたんじやないかって大騒ぎになっちゃう。」

あれ？間違っでない様な気が……。

うん。早く戻ろう。

船に戻ったときは、まだ私が海に落ちたのに気づかれてなかった様子だった。よかった。

ただ、部屋までびしょ濡れのまま歩くことになった。

掃除が大変かもしれない。ごめんなさい。

『ましろ？みずあそび？』

部屋に戻った私を、きららの呑気な声が出迎えてくれたので、びしょ濡れのまま抱きついてやった。

つめたーい、って楽しそうだった。

船がクチバに着くと、手早く船を降りる。

びしよ濡れだったから、服は着物に着替えた。

昔の名残でずっと長袖のものを着て旅をしてきたけど、体調が悪くなることはなかったからもうずっと着物にしようかな。やっぱり可愛いものが着たいよね。

そうなるよ、またエリカにお願いしないと。

・・・最近、頼んでばかりな気がするなあ。また怒られないといけど・・・。

まあ、それは後で考えよう。

私はポケギアを取り出し、ブルーに電話をかける。  
プル。

「出るの早」

『マシロ？ちょうどよかった。カントーに着いた？』

早いね、と言う前にブルーが食いぎみに言う。

「あ、うん。今着いたよ。そんなに慌ててどうしたの？」

『急いでトキワの森に向かって！麦わら帽子の子が襲われてるから、助けてあげてくれる？あたしも向かってるから。』

状況はよく分からないけど、トキワの森で麦わら帽子の子を助ければいいのか？

急ぎみたいだし、早速向かおうとミスタに飛び乗る。

「ミスタ、トキワの森。できるだけ急いで。」

ミスタが飛び上がり、きららが付いてくる。

「で、相手はまたロケット団？」

『いえ、四天王だそうよ。レッドも四天王に負けて行方不明。唯一逃げ延びたピカを追いかけて始末しようとしてるみたいね。』

「なんか、色々と物騒なことをしてるねえ。というか、レッドが負けたってほんとう？」

『本当でしょうね。じゃないと、ピカだけが逃げてくるなんてあり得ないわ。』

「リーグ優勝者が負ける程の相手・・・か。」

『そうゆうこと。ホントはマシロに四天王を一人ずつ蹴散らしてもらうのも有りかと思ってたんだけど・・・。レッドが勝てない相手だと

「あなたも勝てないかもしれないでしょ?」

「こっちはこっちで結構、物騒なことを考えてたよ……。まあ、勝てるかどうかはやってみないと分からないけど。」

「と言っても、全力のきららで勝てない相手なんて想像できないんだけどね。」

そう思ったときに、ふと冷気と変な音を感じた。

なんか下で川が氷ってる。あれかな?

女の人と対峙する麦わら帽子の子とマサキ。

あれ?なんでマサキがいるの?

まあ、マサキは置いておこう。

「見つけたよ!」

『見つけた!』

ブルーと私が着いたのは同時だったみたい。

麦わら帽子の子は足元の氷ごと川の流れにのって逃げだし、ブルーは森に身を隠しながら攻撃、私は上から女の人に向かってスピードスターを放つ。

「ちよつとそこのお姉さん?麦わら帽子の子を追いかけるのはやめてくれないかな?」

『ちよつと!?!レッドをしのぐ実力者なのに、なんで正面から向かっていくのよ!?!アタシは逃げるわよ!』

「え?」

なんか、置いていかれた……?

いや、確かに悪手かもしれないけど何も置いていなくても……。しかも通話も切れてるし。

「あなたは?」

「うくん、通りすがりの正義の味方。かな?」

「通りすがりなら、わざわざ麦わら帽子の子、なんて言わないわよ?」

「だよねえ……。失言だった……。」

「まあ、あなたがどこの誰か、なんて関係ないわ。邪魔するのなら始末するだけよ。ジュゴン!」

女の人はジユゴンを繰り出す。隣にはパルシエンが居るから、氷か水かその辺りの使い手かな？

「パルシエン、オーロラビーム！ジユゴン、れいとうビーム！」

2体のポケモンから、それぞれ別の氷タイプの技を放つ。

「きらら、メテオビーム！」

それを、きららのメテオビームで押し返し、凍った川ごと女の人の足場を砕いた。

「チッ！」

女の人はジユゴンに飛び乗り、氷の砕けた川に着地……着水かな？

「きらら、加減がうまくなったね。」

『えらい？』

「えらいえらい。」

『うむ。くるしゆうない。』

また影響されてるよ。

少し苦笑いの私に、怪訝な顔をして女の人が声をかける。

「あなた、何者？」

「あれ？どこの誰だかは関係ないんじゃないの？」

「通りすがりの強い人だなんて、流石に気になるでしょう？」

「人に名前を聞くときは、自分から名乗るものじゃない？」

「……四天王のカンナよ。これでいいかしら？」

「……マシロ。」

少しイラツとした感じで答えるカンナ。からかいすぎたかな？

名乗ってもいいかしら少し迷ったけど、私の名前ぐらいはいいでしょ。

私が矢面に立てば、ブルーの事も気づかないかもしれないし。

「なんであなたがあの子を庇うのかしら？」

「ピカは、知り合いの手持ちだからね。そりゃ助けるでしょ？それより、なんでピカを狙ってるの？」

「どんなトレーナーも、ポケモンも逃がさない。それが私達四天王。」

大層なものだね、四天王って。

「でも、今まさに逃げられてるじゃん。」

「口の減らないおちびちゃんね。あなた、人をイラつかせる才能があるわよ?」

「そう?ありがとう。」

「本当に人をイラつかせる子ね。そこから降りてきなさい!ふぶき!」

ジユゴンがふぶきを放ち、上空の私達を凍らせようとする。

でも、こっちには万全のきららがいる。

「きらら、サイコキネシスで押し返して!」

上に向かったふぶきは、サイコキネシスで下に押し返される。

そして、ジユゴンとパルシエンごと川を凍りつかせた。

凍って砕けてまた凍って。川も忙しいね。

「ふざけたパワーね。ふぶきごと押し返すなんて。」

「まったく、そんな事しなくても降りるのに。よいしよと。ありがとうねミスタ。」

凍りついた川に降りる。

急いでくれたミスタもお疲れさま。

「ジユゴンとパルシエン、凍ってるけどどうする?まだやる?」

「私達が諦めると思ってる?」

一応聞いてみたけど、まあそうだよな。

「思っていないよ、聞いてみただけ。それじゃ、ついでにもう一つ。レッドはどうしたの?」

「そんなの始末したに決まってるでしょ。」

あー、やっぱりそうなんだ。

でも、しぶとく生き残ってる可能性もあるかもしれない。現にピカは逃げてきたわけだし。

「考え事なんてしてていいのかしら?パルシエン!ちようおんぱ!」  
「え?」

凍りついた川からパルシエンが飛び出す。

そして、辺りに響く不快な音に思わず耳をふさいでしゃがみこんでしまった。

そして、音が止んだときにはカンナの姿は見当たらなかった。

「あ、頭が痛い……。それより逃げた、かな？」  
『くらくらするく。』

きららもグロッキーだね。ミスタは……。急いだからかな。疲れてるけどちようおんぱの影響はなさそう。

とりあえず、麦わら帽子の子は逃げられたから当初の目的は達成できたけど、カンナにも逃げられた。

「でも、レッドがねえ……。生きてるといいけど。」

まあ、生きてると信じよう。

死んでたらどうしようもないしね。

それより、ブルーはどこ行ったんだろう。

ポケギアを取り出し、ブルーを呼び出す。

プルルル

『もしもし?』

「ちよつと?置いていくなんてひどくない?」

『いや、流石にアタシは四天王に正面から挑めるほど強くないわよ。それより、マシロは無事なの?』

「とりあえずは大丈夫だよ。麦わら帽子の子も逃げられたみたいだし。まあ、カンナにも逃げられたけど。」

『……やっぱりあなたも大概よね。まあ、無事で何よりだわ。マシロにはそのまま麦わら帽子の子に合流してくれる?』

「了解。その子、名前は?」

『イエローって言うの。きっとまた四天王に狙われると思うから、守ってあげて。』

「分かった。今度は置いていかないですよ?」

『……善処するわ。』

通話が切れる。

「……せめて即答してくれないかなあ。」

今度も似たようなことがあったら、また置いていかれそう。

まあ、ブルーが無事ならそれでいいんだけど。

ブルーに助けられた事を思えば全然安いや。

「痛っ。あのちようおんぱは効いたなあ……。」

痛みのあまりに、頭を押さえる。

『ましろ、だいじょうぶ?』

「大丈夫じゃないかも。ちよつと休んでいこうか。ミスタも急いだから疲れてるしね。」

—————

「追ってこない・・・か。」

安堵してホツと一息つく。

あんなトレーナーが居るなんて聞いてないわね。

白い髪のアインテール。

スターミーと、見たことないポケモン。

スターミーの方はわからないけれど、見たことないポケモンの方はふぶきごと押し返すエスパーの技を使える、と。

「キクコに聞いてみましようか。」

コンパクト型の通信機を取り出し四天王の1人、キクコに繋げる。

『フェフェエ、そつちの首尾はどうかの?』

「どうもこうもないわね。白い髪のおちびちゃんに邪魔されて逃げられたわ。マシロって言うらしいけど、心当たりある?あのレッドのお友達だそうよ。」

『フム。白い髪の女の子なら、2年前にセキエイでポケモンリーグの優勝者と準優勝者とダブルバトルをやっていた子じゃないかね?』

「そういえば、そんなこともあったわね。あの時は確か、女の子が勝つたのだったかしら?。」

『そうさね。なんであの実力でポケモンリーグに出場しなかったのやら。』

「道理で強い訳ね。イエローとピカチュウを始末する前にマシロって子を始末しないと駄目ね。」

『どうするのかえ?』

「タイミングを見て、仕掛けるわ。その時は手伝ってちょうだい?」

『フェフェエ、了解だよ。でも、子供相手に2人がかりなんて大人げないねえ。』



「それだけ危険人物ってことよ。」

『それならアタシも一目見に行こうかねえ。フエフエフエ。』

「うっかり返り討ち、なんてやめてよ?」

『分かってるさね。』

そう言っつて通信が切れる。

イエローの能力もそうだけど、マシロの強さも想定外。

ピカチュウに逃げられるし、想定外の事ばかりで嫌になるわね。

「まあ、嘆いても仕方ないか。」

それじゃ、私も動きましようか。

どうせなら私もマシロの監視を兼ねてキクコと合流するのもいいかもしれないわね。

## 29話

ひと休みしてるといつの間にか寝ていたみたいで、日が暮れていた。

「ん……。少し休みすぎたね。少し、急がないと。」

うーんと伸びをしてから立ち上がると、周りを警戒してくれていたきらが戻ってきた。

「ありがと、きらら。カンナとか来なかった？」

『こなかったよー。』

「そっか、良かった。」

それじゃ川を下ろうか。のんびりすぎたかもしれないけど、イエローの痕跡を見つけられるかな？

「ミスタ、お願いね。」

ミスタをボールから出すと、元気よく飛び出してくる。

さつき急いでもらったから、疲れてるかと思ったけどそんなことはなさそう。

なので、ミスタに乗って川を下る。

そして、しばらく川を下っていると、タمامシ近くの森に差し掛かったときになにやら騒がしい音が聞こえる。なんだろう？

「ミスタ、そっちに向かって。」

川から離れて森のなかに入る。

騒がしい方に向かうと、何故かボロボロのエリカがいた。

「エリカ!?なんでそんなケガしてるの?」

「マシロ?なんでここに?ジョウトにいたのでは?」

「ちよつとブルーに呼ばれてね。麦わら帽子の子を追いかけてたんだけど。それより、エリカは大丈夫?」

「私なら大丈夫です。それよりその子なら、ピカを連れ去った理科系の男を追いかけて行きましたわ。」

あれ?麦わら帽子の子と無関係でもなさそう?

「もしかして、そのケガも?」

「はい。レッドの格好をしていたので、完全に油断しました。匂いま

で偽装していたので、ピカも気づきませんでしたし。」

「ふうん。理科系の男・・・ね。エリカにこんなケガさせて。ただじゃ済ませないよ?」

私の胸に怒りが込み上げる。が、エリカにいさめられる。

「マシロ、落ち着いて。レッドの手がかりが見つかるかもしれない。ん。」

「・・・そうだね。喋れる体力ぐらいは残しておかないと。」

「いえ、そういうことでは・・・。」

「とりあえず、ミスタに乗って。私が歩くよ。」

「ありがとうございます。二人はタمامシの方に行きました。」

私がミスタから降りて、エリカをミスタに乗せる。

その動作も痛そうで、また怒りが込み上げる。

やっぱり理科系の男は喋れなくなってもいいんじゃないかな?

「マシロ?何か悪いことを考えてませんか?」

「考えてないよ?ホントだよ?」

「怒ってくれるのは嬉しいのですが、やり過ぎないでくださいね?」

「任せて!」

「不安になる程、気持ちのよい返事ですね・・・。」

大丈夫大丈夫。

それより、早く二人を追いかけよう。

タمامシシティに入ると、何やら嫌な音が聞こえてくる。

音の方に向かうと、イワークとスターミーに挟まれた眼鏡をかけた

白衣の男。

あれが理科系の男かな?

「ありがとうございます。タケシ、カスミ。感謝しますわ。」

ミスタから降りながらお礼を言う。

イワークを連れている方がタケシ、スターミーに乗っている方がカスミって言うのかな?

ってことは、ジムリーダーの人？

「噂に聞く正義のジムリーダーか。だが、お前たち3人については一通り情報を……。その小さいのは誰だ？」

「それって私の事かな？」

小さいとは失礼な。まあ、2年前から身長は伸びてないけど……。150ぐらいしかないけど……。！

「悪いが、4人でもないぞ。」

そう言っただけ現れたのは、イエローを抱えたカツラさん。

お、ジムリーダー集結だね。これは流石に理科系の男も逃げられないでしょ。

「2年前、ロケット団に対抗していたのは3人だったはず。ぐぬぬ、5対1とは卑怯な。」

「あら？自分は安全なところに身を隠して影から狙い打つあなたと、どっちが卑怯かしら？」

へえ、そんな事してたんだ。エリカにケガさせるし、最低にも程があるでしょ。

そう思っただけ男の方を見ると、何やら後ろでがさごそしている。

「きらら、サイコキネシス！」

何をやろうとしたかは知らないけど、問答無用で地面に押し付ける。

私の友達を傷つけるような奴は、地面とキスでもしてればいいや。

「マシロ？やり過ぎないように、と言いましたよね？」

「いや、何か怪しそうな動きをしてたんでつい……。」

「ハア……。今回は多めに見ましようか。状況が状況ですしね。でも、気を失ってしまった様で、話は聞けそうにありませんわ。」

エリカが怒りながら理科系の男の様子を伺うと、気を失ってしまったらしい。

ちよつと皆、白い目で見ないですよ。確かに、やり過ぎたかもしれないけど。

「ならここは私の出番だな。ガーディ。」

「どうするんですか？」

「こいつの鼻はよくきくんだ。だからこいつで、ピカも騙された匂いを探る。」

エリカの疑問に答えるとガーディに指示を出す。

そして、ガーディが理科系の男の匂いを嗅ぐと、北に向かって吠える。

「北って言うと、ニビ、ハナダの方かな？」

「少し待て。この男の着ていた物から成分を調べてみる。」

そう言って顕微鏡のような物を取り出すと、服を適当に千切って作業に没頭する。

「フム、わずかに月光線の反応がある。」

「月光線って、つきのいしが帯びてるあれ？」

「詳しいな、マシロくん。そう、その月光線だ。」

「ここから北でつきのいしに関係している場所。」

つまり。

「」「オツキミ山！」「」

五人の声が重なる。

オツキミ山かあ……。山の中でたった一人の手掛かりを探すのはキツくない？

『ましろ、なにかくるよ！』

「え？」

『たおれてるひとのところ！』

きららに言われて理科系の男に目を向けると、理科系の男の身体に黒い霧が纏わりつき、宙に浮かべる。

宙に浮いた理科系の男は苦しそうな表情を浮かべる。

「イカン！このままでは死んでしまう。」

「引きずりおろすぞー！」

「はい！」

「ええー！」

カツラさんはガーディを前にだし、タケシはゴローン、カスミはオムナイトをボールから出す。

そして、そのタイミングでイエローが目を覚ました。

「あ……れ？さっきの……男は？」

「あ、起きた？あの男はあそこで宙ぶらりんだよ。口封じのために連れていこうしてるのか、このまま殺そうしてるのか。」

「そんな……。助けないと！」

さっきまでボロボロにやられてたのに、相手のことを心配するなんて、優しい子だね。

個人的には、エリカにケガさせたやつなんてどうなってもいいと思うんだけど。

「まあ、ジムリーダーが集まってるんだから大丈夫だよ。」

「でも……！」

大丈夫と言っても食い下がってくるイエロー。

……ハア。

「仕方ない。きらら、あれ引きずり下ろすよ。」

『わかったー。』

「イエロー？あの木の枝にいる子、任せていい？」

「え？あ、ハイ！」

「ミスタはメテオビームの用意。」

「ー」

ミスタは短い返事をして、力を集め出す。

その間に、ゴローンのメガトンパンチ。オムナイトのみずでつぼうで霧を払う。

そして、2体の技で霧が途切れた瞬間、理科系の男の後ろにゴースが姿を表す。

「今だよ、きららー！」

『おっけー！』

ゴースが現れた瞬間、オムナイトとゴローンごと理科系の男をゴースから引き離す。

「うおー！」

「これって!？」

なんか驚いた声が聞こえる。急に割り込んでごめんね？

ただ、タイミングは今がベストっぽいから許して。

「イエロー！」

「ハイ！」

イエローの名前を呼ぶと、ピカの入ったボールを釣竿を使い、木の枝に向けて放る。

へえ、上手だねえ。

つと感心してる場合じゃないね。

「ミスタ、撃ち抜いて。」

ピカが木の枝に乗っていたポケモンを助けた瞬間、ミスタのメテオビームがゴースを撃ち抜く。

撃ち抜かれたゴースは戦闘不能になり、ドサツと地面に落ちた。

「ナイスだよ、イエロー。」

「ありがとうございます。．．．ところで、どちら様ですか？」

「あれ？私の事聞いてない？ブルーに頼まれて来たんだけど．．．？」

「いえ、全く。」

説明する暇がなかったのかな？

そういや、さつきも四天王のカンナに襲われてたし、きっとそういうことなのでしょう。

「ちよつと、加勢するなら一言声かけてよ。」

「そうだな。だけど、君のおかげで無事に助けさせた。」

「ごめんごめん。タイミング的に今しかないと思って割り込んじゃった。」

理科系の男がどうなってもいいとか考えてて出遅れたのは内緒にしておこう。

「あのう、あなた達は？」

「おっと、自己紹介してなかったね。私はマシロ。」

「私はカスミ、レッドの友達よ。マシロとは初対面ね。エリカから話は聞いているからすぐに分かったわ。」

「オレはタケシ。二人とも、さつきは見事だった。」

「私はカツラ。マシロくんも、久しぶりだね。」

3人がそれぞれ私とイエローに挨拶していく。そのなかで、カツラさんと私は少し離れて話す。

「久しぶり、カツラさん。あの子は元気？」

「ああ。君のおかげで元気にやっているよ。まあ、色々と制約はあるがね。」

「ミュウツー、どこか悪いの？」

「いや。ミュウツーではなく私が、だな。未だに右腕が良くない。」

「そっか・・・。」

「君が気にする必要はない。私の過ちだ。」

「カツラさんがそう言うなら、気にしないようにするよ。」

「君は若いのに割りきるのが上手いな。」

「そうかな？」

カツラさんみたいな年長者に言われるぐらいなら、そうなのかもしれない。

・・・つまり、老けてるってこと？

まだ13なんですけど・・・。

「どうやら、オレの出番はなかったようだな。」

シヨックを受けていると、懐かしい声が響く。

「あれ？グリーン、久しぶりだね。こんなところでどうしたの？」

「マシロのポケモンが使う技の光が見えてな。」

メテオビームのことかな？

確かに、夜に使うと目立つよね。

前にもそんなことがあったような・・・。まあ、いつか。

グリーンは、地面に倒れるゴースをチラツツと見る。

「おそらくそいつは、ゴーストタイプの使い手、四天王キクコの差し金だろう。」

また四天王。そのうち、あと2人も出てくるかな？

でも、目的がさっぱりわからない。

レッドのピカチュウを追いかけたり、イエローを追いかけたり。何がしたいんだろうか？

というか、それより。

「グリーン、やけに詳しいね。」

「以前戦ったことがある。偶然だが、無人発電所だな。まあ、キクコに



は逃げられたが。」

カンナも逃げたし、四天王つてみんな逃げ足は早いねえ……。

「四天王の奴らは、手加減なんて物を知らない。事を構えるなら、せいぜい鍛えておくことだ。」

そう言われたイエローは少しだけ考えると、私に向かつて頭を下げる。

「お願いします！ボクを鍛えて下さい！レッドさんを助けるために、強くなりたいんです！」

「え、私？うーん、私よりグリーンの方が向いてるんじゃないかなあ……？」

そう言つてチラツとグリーンの方を見る。

「ねえグリーン、イエローを鍛えてあげてくれない？」

「なんだと……？マシロに頼んでるんだから、お前が鍛えてやればいい。」

「えー？でも、私に借りがなかったっけ？」

「……チツ！貸した本人は気にするなど言つたくせに。」

「必ず返すんじや……？」

「分かったよ！好きにしろ。」

「つてことで、グリーンについていって。」

「ハイ！」

無理やりグリーンに押し付けたけど、私よりも適任でしょ。

私が育てたポケモンなんてかぶちーとグロウだけだし。

「オレのゴローンも連れていけ。」

「あたしのオムナイトも。3体で行くより心強いはずよ。」

「ありがとうございます！」

イエローは、カスミとタケシからポケモンを受けとるとリザードンに乗り込む。

それじゃ、私も付いていこうかな。ブルーのお願いだし。

ミスタ、お願いね。

「……マシロも来るのか？」

「ブルーのお願いでね。イエローのボディーガード。」

「あの女か……。まあ、マシロなら四天王が相手でも問題ないだろう。と言うか、ついてくるなら自分で面倒を見たらどうだ？」

「聞こえない。」

「フン。調子のいいやつだ……。」

そのまま飛び上がるリザードン。

そして、それを後ろから追いかける。

しかし、今日は疲れたね。

四天王やら何やらで忙しかったし、早く休みたいなあ……。

—————

リザードンの上で、ボクはグリーンさんに話しかけた。

「グリーンさん、ありがとうございます。」

「……何がだ？」

「ボクの事を引き受けてくださって。マシロさんに無理やり押し付けられたみたいだったんで……。」

「気にするな。イエロー、お前が悪い訳じゃない。」

「……借りがあるって言ってましたが、昔何かあったんですか？」

「2年前に少し助けられた。それだけだ。」

そう言って遠い目をする。

2年前って、ボクがレッドさんに助けられた時と同じぐらいの時期かな？

「ボクがレッドさんに助けられた様に、グリーンさんもマシロさんに助けられたんですね。」

「オレだけじゃない。レッドとブルーも同時に助けられたさ。もつとも、レッドの奴は気づいてなかったがな。」

「ええ!? レッドさんとブルーさんも?」

「ブルーの事も知っていたか。」

ボクは、レッドさんが助けられたことに驚いた。

あんなに強い人なのに、助けられたことがあったんだ。

マシロさんって、レッドさんより強いのかなあ……。

「先に言っておくが……。」

グリーンさんが言葉を区切ると、後ろをチラッと見る。

ボク達の後ろには、スターミーに乗って着物とツインテールをなびかせてのんびりとした表情でついてくるマシロさん。

「マシロはオレ達、凶鑑所有者より強い。」

「え!?!」

「なのに、バトルはポケモンがケガするからと、そんなに好きじゃないらしい。よくわからん奴だ。」

「そうなんですか……。」

ボクと同じ事を思う人がいて、少し嬉しくなった。マシロさんのこと、もう少し詳しく知りたいな。

「それに、あいつはいつも言っていた。私はなにもしてない。最初から強かったか、勝手に強くなった、と。それが本当ならイエローの鍛えてほしい、という頼みは難しいだろう。」

「そんなポケモン達が、マシロさんの言うことを聞くんですか?」

「不思議なことにな。それが、アイツの才能というやつだろう。」

「本当に不思議ですねえ……。」

ボクと同じくらい的身長なのに、レッドさんより強いんだ。

ボクも頑張らないと。

### 30話

翌日。

グリーンに着いていくと、荒野の様なところにやってくる。辺りには草木がかなり少なく、かなり殺風景。

ひどく寂しい場所だねえ……。

そう思いながら周囲を歩いていると、遠くでグリーンが特訓をしていた。

リザードンが上から岩を投げて、飛んでくる岩を下でストライクがひたすら細切れにしている。

……その特訓、殺意高すぎない？

「グリーンさーん！ボクにも教えてくださーい！」

グリーンを眺めていると、イエローの声が聞こえる。

と言うことは、イエローを放っておいて、自分の特訓をしてたってことかな？

昨日お願いしたのに早速放置とはこれいかに。

ちよつと念を押しておこう。

そう思つてグリーンの方に歩いていくと、またイエローが声をあげる。

「ああ！おまえは昨日の！なんでこんなところに？」

イエローが抱き上げていたのは昨日、木の枝から助けたキヤタピー。

イエローを追いかけてきのかな？

なんだか、かぶちーを思い出すなあ……。

「そいつを捕まえて、育てておけ。」

その様子を見ていたグリーンがぶつきらぼうにイエローに言うと、そのまま私の方に歩いてくる。

「なんか冷たくない？もつと、ちゃんと教えてあげないの？」

「これぐらい普通だ。それに、明日になったらちゃんと教えてやるさ。キヤタピーの成長具合を見て、どうするかを考える。」

「そっか。意外と考えてたんだね。」

「お前はオレをなんだと思ってるんだ……？」

「うくん……。無口な冷血漢？」

「……。ケンカを売っているのか？」

「素直な感想だよ？」

「フン……。まあいい、久々に会ったんだ。特訓ついでに付き合え。セキエイではレッドに割り込まれたしな。」

そう言っつてボールを構える。

「確かにそうだけど、やらないとダメ？ 四天王に目をつけられてる時に、疲れさせることはあんまりしたくないんだけど。」

「なに、互いに加減はするだろ？」

「それができない性格なのがいてね……。」

ほら、さつきからボールがガタガタしてるし。

ミスタ、負けず嫌いだから加減なんてできないでしょ。

「どうなっても知らないよ？」

「吠え面かかせてやるよ。」

とりあえず、ミスタはやる気になっちゃってるからボールから出してあげる。

「それじゃあミスタ。好きにやっていいよ。」

「なんだ、指示はださないのか？」

「私はイエローの様子を見てるよ。」

「……。分かった。」

そんなな気にするなら自分で鍛えてやれよって顔してる。

とりあえず、文句を言いたそうなグリーンは放っておいてイエローの方に歩いていく。

イエローはキャタピーと対峙して、困った顔をしていた。

「どうしたの？」

「あ、マシロさん！ えっと、実はボク野生のポケモンを捕まえたことないんです。弱らせるために傷つけるのが苦手で……。マシロさんはいつもどうやってるんですか？」

「私？ 野生のポケモンをバトルして捕まえたことないよっ……。」

「え？ ないんですか!? レッドさんより強いのに!?」

「誰に聞いたの、それ？」

「グリーンさんです。」

「あー、グリーンね。また何を言ったのやら。」

「何を聞いたかは知らないけど、あんまり真に受けないですよ。すごいのは、私じゃなくてミスタときららんだから。」

「かぶちーとグロウが居たら、私が育てた！」

「って言えるんだけどね。今はミカンの所でお休み中だし。」

「まあ、それはそれとして。とりあえず何か技を出してみたらどう？」

「えつと……。分かりません。」

「え？知らないの？」

「ハイ……。スイマセン……。」

「それでよくカンナから逃げられたねえ……。」

「え？カンナさんのこと知ってるんですか？」

「あ、そう言えばブルーから何も聞いてないんだっけ……。」

「とりあえず、説明しておこうかな。」

「つと、その前に。」

「とりあえずその子。そのままボールに入れてあげて。」

「え？弱らせなくていいんですか？」

「なついてくれるから、きつと大丈夫だよ。私はそうだったよ？」

「分かりました、やってみます！」

「そう言っつてボールを当てると、キヤタピーはそのままボールに収まった。」

「わあ、ホントだ。今まで1度も捕まったことなかったのに。」

「どんなポケモンも、嫌な人にはついていきたくないし、好きな人にはついていきたいものだよ。」

「出会った人にいきなりボールを投げつけられたり、攻撃されたらそりや怒るよねって話。」

「まあ、それはそれとして。とりあえずブルーの事を説明しないと、だね。」

「へえ、それじゃ10年近い付き合いになるんですね。」

「間の6年は行方不明だったけどね。」

ブルーのお願いの事だけ話そうと思ってたのに、いつの間にか馴れ初めから話すことに……。

おかげで日が暮れそう。

と言うかブルー、駆け出しトレーナーとも呼べない様な子にピカを任せないでよ……。

イエローが無事なのって、結構奇跡的だったんじゃない？

「マシロさん？」

考え込んでいると、イエローに声をかけられる。

「なんでもないよ。それよりなんか、余計なことばかり喋っちゃったね。」

「いえ、全然！とつても楽しかったです。かぷちーとグロウにも会ってみたいな。」

「そのうち会えるよ。そういや、ミスタとグリーンは何してるんだろう？」

「何してる、じゃない。」

イエローと話していると、いつの間にか後ろに立っていたグリーンが話しかけてくる。

「どしたのグリーン？」

「お前のスターミ、加減というものを知らないのか……。」

「ああ……、多分知らないかな？だから言ったじゃん、どうなっても知らないよって。」

「そのままの意味だとは思わないだろ……。」

そう言っただけグリーンはため息をつく。

そう言われても、そのままの意味だから他に言いようがないんだけど……。

「それで、ミスタは？」

「オレの手持ちを3体戦闘不能にした辺りで倒れた。今もそこで寝てるだろうから、早く引き取ってくれ。」

「分かった。ちよつと行って来る。」

多分、久しぶりにグリーンと戦えて舞い上がっちゃったんだろうね。

それじゃ、迎えに行こうか。

グリーンに言われた方に歩いていくと、地面が段々と荒れていく。まあ、元々荒れてただけだけどそれがさらにボロボロになった感じ。派手にやってみたみたいだねえ……。

つと、いたいた。

地面に横たわるミスタと、その奥で思い思いに休んでるゴルダック、ポリゴン、キュウコンの3体。

それらを見ながら、ミスタの横まで歩いていく。

「派手にやったね、ミスタ。手当てするから、じつとしててね。」

ミスタのとなりに座り、鞆からきずぐすりを取り出し、ミスタに吹き付ける。

後、げんきのかけらを3つ取り出す。

「そっちの子達も、ほら。」

そう言つて、取り出した物を放り投げる。

キュウコンとゴルダックそのまま口でキャッチ。

ポリゴンは目の前に落ちた奴をかじる。

よしよし、ちゃんと食べてるね。

「ミスタ？嬉しかったのはわかるけど、ちよつとやり過ぎかな？」

「……」

ミスタの電子音を聞いた感じだと、久しぶりでやり過ぎた、申し訳ない。つて感じかな？

「慌てなくても、そのうち四天王つて人達が来るだろうから、その時に好きなだけ戦えるよ。……ああもう、動かないでつてば！」

喜びのあまり跳び跳ねようとするミスタを押さえる。

しばらくじたばたしていたが、疲れているのか、諦めたのか、すぐにおとなしくなる。



この勝負に対する貪欲さはきつと、きららに勝つまでは変わらないんだらうなあ……。

「はい、終わりーそれじゃ、次はそっちかな？」

そう言っつて、グリーンンのポケモンも手当てしていくと、道具のストックが一気になくなっつていく。

まあ、アイテムが減るのは仕方ない。ミスタがやった事だし、トレーナーの私が責任持たないと。

「これでおしまいっつと。どう？痛くない？」

グリーンンのポケモン達は三者三様にうなづく。よかつた。

それにしても、キュウコンがもふもふして気持ちいい。

キュウコンの尻尾に顔を埋めていると、いつの間にかグリーンンが隣まで来ていた。

「オレは引き取れと言っつたんだが？」

「それだけだと、悪い気がしてね。四天王の相手もするかもしれないし、できるだけ手当てはしておくべきでしょ？」

「……礼は言っつておく。あと、イエローの特訓は明日からやる。マシンも手伝え。」

「ミスタの加減のできなさを見て、まだ頼むの？」

「……ちゃんと指示は出せよ？」

「分かつたよ。」

### 31話

イエローとグリーンの特訓に付き合って5日。

見た目通りと言うべきか、グリーンの特訓はスパルタだった。

「マシロさくん……。」

って、何度泣きつかれた事か。

それで、1度だけ特訓の相手を変わったんだけど……。

「グリーンさくん……。」

って今度はグリーンに泣きついてた。

やっぱり、他人を鍛えるのは向いてないみたい。

グリーンの特訓より私とミスタの相手をする方が嫌らしい。

……それはそれでショックなんだけど。

プルルル。

少し落ち込んでいると、ポケギアに通信が入る。

相手を見ると、ミカンからだった。

「もしもし?」

『あ、マシロですか?かぶちーとグロウ、元気になりましたよ!』

「そっか。ありがと、ミカン。結構時間かったね。……堪能した

?」

『はい!……聞こえてたんですか?』

「あはは、まあね。」

『もう……。マシロって結構意地悪ですよね。……でも、ありがと

うございました。堪能させていただきました。』

「どういたしまして。それじゃ、ポケモンセンターに向かうから

ちよつと待ってて。」

『分かりました。』

ピッ。

結構かかったね。

多分、ミカンが堪能してたせいもあるんだろうけど。

まあ、四天王の相手をする前に皆が揃うのはありがたい。早速向かうか。

「グリーン、イエローのこと任せていい？」

「構わん、と言うか元々押し付けてただろうが……。それで、急にどうした？」

「ちよつとポケモンセンターに用事。すぐに戻るよ。」

「そうか、早く戻れよ。1人でイエローの相手をするのは疲れる。」

「分かった。できるだけ早く戻るよ。ミスタ、お願いね。」

ミスタをボールから出して、その背に乗る。

さて、それじゃあポケモンセンターに向かおう。

ポケモンセンターでミカンから送られたかぷちーとグロウを受け取り、フレンドリイショップで少なくなった回復アイテムを補充しておく。

買い足したものを鞆に詰めていると、鞆の中から妙な振動を感じる。

「ん？なんだろう？」

振動しているものを引っ張り出してみると、いつだったかルビー達の所に導いてくれたスプーン。

懐かしい、すっかり忘れてたよ。

取り出したスプーンは前回と同じようにクイッと曲がり、ある一定の方向を指す。

北の方かな？

北と言えば、この前話題にでてたね。オツキミ山にレッドが居るかもしれないって。

・・・もしかして、この先にレッドがいる？

「行くべきか、行かざるべきか・・・。」

と言っても、前はルビー達を助けることができたからなあ・・・。

少し悩んどけど、行かない選択肢はないかな。

よし！そうと決まれば早く向かおう。

ボールを投げ、きららとミスタを出す。

「きらら、ミスタ。オツキミ山に向かうよ。」

『はーいー!』

「ーー」

前はボーマンダに襲われてたらしいし、今回も何かあるのか分からないので、きららとミスタを出して向かう。

まあ、レッドが居るだけで何事もなければいいんだけど、何かあることやら。

ーーーーーーーーーーーー

さて、オツキミ山に到着つと。

とりあえず、ミスタはボールに戻して休んでもらって、きららと二人で山の上を歩く。

スプーンは・・・あっちを指してるね。

スプーンのナビに従って歩いてしばらくすると、前方に人影が見える。

そして、その人影が誰なのか分かる距離になると向こうもこちらに気づく。

そして、その人物はレッドではなく意外な人物だった。

「ハア・・・。なんでこんなところにいるの？サカキ。」

意外すぎて思わずため息が出た。

「マシロか。こんなところでピクニックか？」

「違うよ。というか、先に聞いたのは私なんだけど？」

「フツ。なに、お前と同じ目的だろう。」

「私？私はスプーンが指す方に来ただけなんだけど・・・。」

「スプーン？ああ、ナツメの運命のスプーンか。ということはレッドを助けに来たわけではないのか？」

私の手にあるスプーンを見て、何かを察したように言う。

ナツメの運命のスプーン？

いや、それよりもだよ。

「レツド? やっぱりオツキミ山にいるの?」

「ああ。氷漬けだったのは予想外だったかな。お陰で、氷を割る為のポケモンを持つてくるために一度山を降りる羽目になった。」

「え、氷漬け? 生きてるのそれ?」

「分からん……。が、割ってみれば分かるだろう。気になるなら付いてくるといい。」

そう言うときさつきと歩き出そうと踵を返す。

その背中を追おうとしたとき、第三者の声が響いた。

「それ、私も混ぜてくださらない?」

その人物は、1週間程前にイエローを襲っていた四天王の1人、カクナだった。

「誰だ、貴様は?」

「四天王のカクナよ。そこのおチビちゃんを始末しようとしてたら、まさかこんな大物が釣れるとは思ってもなかったわ。」

「何? サカキに用事でもあるの?」

「そうね。だから今回は貴女に用はないから、おとなしく引つ込んでいて下さる?」

始末しようとしてたのに、用はないって、ずいぶんとひどい扱いだね。まあ、放つといてくれるならそれはそれで助かるけど。

「あなたが持つてるグリーンバッジ、大人しく渡してくださらないかしら?」

グリーンバッジ?

なんでバッジがいるんだろう。バッジ集めが趣味なんて事はないだろうし……。

「何故バッジを集める?」

「あなたが知る必要はないわ。キクコ、いるんでしよう? やるわよ。」  
「フェフェエ。小娘の相手かと思えばとんだ大物じゃないかえ。」

キクコと呼ばれたお婆さんがスツと、霧と共に現れる。

あの人がグリーンの言ってた四天王か。

ゴーストタイプを使うって言ってたっけ。

そのキクコが、指をパチンと鳴らすと岩影からのそりと、上半身裸

の大男が現れる。

「あら？シバも連れてきたの？」

「レッドと決着をつけると言って、オツキミ山をうろついておったからの。ついでに連れてきたわい。フェフェ。」

「・・・」

こんどは3人目かあ。シバって呼ばれてたけど。さつきから何も喋らないし、目が虚ろなんだけど・・・。

「ふむ、3対2か。」

「え？私も頭数に入ってる？」

「なに、レッドを助ける為だ。敵の敵は味方と言うだろう？」

まあ、確かにレッドの居場所を知ってるのはサカキだけだし、私だけで山の中をあてもなく探すのは難しいか。

となると、協力するのが一番良いとは思うんだけど・・・。

「でも、レッドは氷漬けなんだよね？」

「ああ。」

「だったら、少しでも急いだ方がいいよね？」

「・・・そうだな。」

サカキも私の言いたいことを理解したみたい。私は鞆から3つの石をサカキに投げる。サカキは難なくキャッチすると、そのまま走り出した。

「まさか、貴様に背中を預けることになるとはな。」

「同感。それ、クチバ湾の石だから。レッドにちゃんと渡してよ？」

「よかろう。」

すれ違いざまに短く言葉を交わすと、サカキは近くの横穴に飛び込んでいく。

たしか、レッドはイーブイを捕まえていたはず。なら四天王と戦う際、あの石は役に立つ・・・かもしれない。

「逃がさないわよ！」

カンナが叫び、シバが飛び出す。

「行かせないよ！きらら、りゅうせいぐん！」

シバが横穴に飛び込む前に、サカキの飛び込んだ横穴をりゅうせい

ぐんで塞ぐ。

これで簡単には追えないでしょう。

「チツ…… やってくれるわね。」

「仕方ないの。この小娘は放っておいてサカキを探そうかね。バツジの確保は何よりも最優先じゃ。」

どうやら、私の事は眼中にないらしい。

けど、レッドを助ける為にも追わせる訳には行かない。

私は鞆から1つのアイテムを取り出す。

「放っておいてもいいけど……。これ、欲しかったんじゃないの？」  
そう言っただけで見せつける様に親指で弾き、落ちてきたグリーンバツジをキャッチする。

「そいつは……グリーンバツジ!？」

「なんであなたがそれを持っているのかは知らないけど、予定変更ね。いえ、当初の予定通りかしら?」

「フェフェ。3対2が3対1になったんだ。こちらとしてもやりやすいねえ。」

レッドを優先的に助ける為とはいえ、3対1は厳しいかもしれない。けど、やるしかないよね。

相手は右手にカンナ、正面にキクコ、左手にシバといった感じに散開する。

「……」

そのなかで無言の男がエビワラーを繰り出す。

エビワラーで来るなら……。

「グロウ・コメットパンチ!」

エビワラーの左の拳とグロウの右の拳がぶつかり合う。ギリギリと拮抗したかと思えば、今度は反対の拳を繰り出す。

グロウはそれも反対の拳を打ち付けて受け止める。

互いに両腕を封じられた形になったけど、こっちは腕だけじゃないんだよね。

「しねんのずつきー!」

両腕を使えないエビワラーは、しねんのずつきを避けられずにもろに顔で受けると、シバの隣まで吹き飛ばされる。

それを見たシバは顔色一つ変えずに、今度はサウムラー繰り出した。

そして、手足を伸ばしたかと思えば離れているはずのグロウを横から蹴りあげる。

「グロウ!?手が伸びるサウムラーは聞いてないんだけど?」

「シバのサウムラーが特訓で身につけた、特別な能力よ。」

余裕なのか知らないけど、手を出さずに解説してくれる。

やりやすいから、そのまま静観してくれないかなあ・・・?

それより、あの縦横無尽に飛んでくる蹴りはグロウじゃ対応できないね。

「グロウ、下がって。かぶちー、あなたの番だよ!」

一方的に打ち付けられているグロウを一旦下げて、かぶちーを前に出す。

今度はかぶちーに対して、遠くから脚を伸ばしてくるサウムラー。でも、かぶちーなら対応できる。

「つるぎのま〜!」

遠くから大振りの技は、かぶちーなら全部避けられる。

つるぎのまいでかわしていると、しびれをきらせたサウムラーが距離を詰めてくる。

そのまま、とびひざげりを放つが・・・。

「それ、待ってたよ!ふいうち!」

サウムラーの手足が伸びきる前に、サウムラーの体にかぶちーの一撃が炸裂する。

そのままサウムラーはエビワラーと同じく、シバの隣まで吹き飛ばされた。

「あらあら、やっぱ1人じゃ駄目ね。」

「フェフェ。そのようじゃのう。」

カンナはジユゴン、キクコはアーボックを繰り出す。

「もう少し様子見してもいいんだけど?お年寄りはおもつと自分の体



を労りなよ。」

「フェフェ。なかなか言う小娘じやの。それだけ余裕がないってことかねえ?」

ばれてるや。

正直、きららがいれば何とかなると思ってたけど、3対1は想定外なんだよね。

私の挑発にもものってこないし、キクコが一番厄介かな?

「おしゃべりはそこまです。ジュゴン、れいとうビーム!」

「ミスター!れいとうビーム!」

ジュゴンのれいとうビームにあわせてミスタのれいとうビームをぶつける。

私とカンナのちようど真ん中辺りから、一帯の地面が凍りつく。

「ミスタ、少ししか休めなかったけど戦える?」

「――」

電子音と共にうなづく。大丈夫そう。

と言うより、前回戦えなかったからやる気十分って感じかな?

「フェフェ。余所見してる場合じゃないよ!まきつく!」

キクコのアーボックがいつの間にかミスタの隣まで迫り、ミスタを拘束しようとする。

「きらら!サイコキネシス!」

ミスタに巻き付こうとしたアーボックは、そのままキクコの隣まで吹き飛ばして地面に叩きつける。

「その子はお返しするね?」

「聞いていた通り、ふぎけたパワーじやの。」

「きららはキクコの相手をお願い。多分、指示を出す余裕はないと思う。」

『わかったー。』

「加減はしなくていいけど、余力は残しておいてほしいかな?」

『んー、むずかしいけどがんばる!』

「ふふっ、お願いね。」

こんな時だけど、がんばる!と言って両手を握るきららを見ると、

笑みがこぼれる。

「笑ってるなんて余裕ね？だったら、これはどうかしら？パルシエン、とげキャノン！」

「ミスタ！ハイドロポンプ！」

新しく繰り出したパルシエンのとげキャノンをハイドロポンプで打ち落とすと、それと同時に左からイワークが突っ込んでくる。

「グロウ、コメットパンチ！」

もう一度グロウを前に出し、イワークの頭にコメットパンチを打ち付ける。

が、イワークの勢いはそれで止まらずグロウを押し潰そうとする。

グロウだけで駄目なら！

「かぶちー！はたきおとす！」

「チック！」

かぶちーの声と共に、上からイワークの頭を地面に叩きつけると、そこで勢いを止めた。

さすがに正面と上から押さえつけられたら止められた。

イワークに押しつぶされてミンチは遠慮したい。

「やるじゃない。私たちの攻撃をここまで受け止めるなんてね。それじゃ、次はどうかしら？パルシエン、とげキャノン！」

カンナはパルシエンのとげキャノンをもう一度放つ。

そして同時にイワークの上を高速で駆けてくるエビワラー。

「ミスタ、ハイドロポンプ！グロウはバレットパンチ！」

エビワラーのマツハパンチとグロウのバレットパンチがぶつかり合う。

「次はそれだけじゃないわよ！ジユゴン、れいとうビーム！」

カンナは、パルシエンのとげキャノンに、れいとうビームを上乗せする。

れいとうビームでコーティングされたとげキャノンは、ハイドロポンプを凍らせて砕きながら進み、ミスタを直撃した。

「ミスタ!？」

さつきは打ち落とせたからって油断した。

これは私のミスだね……。ごめん、ミスタ。  
心の中で謝っていても、相手は待つてくれない。

グロウとエビワラーの拮抗は一瞬で、エビワラーを吹き飛ばしたが、入れ替わるように上からサワムラーが攻撃を仕掛けてくる。

やっぱり、3対1はズルくない？

「くっ!!かぶちー!はたきおとす!」

グロウに向かって色々な方向から飛んでくる蹴りは、かぶちーが全て叩き落とした。

そして、エビワラーはそこで尽き、吹き飛ばされた場所で倒れる。  
やっとなり。

チラツとキクコの方を見ると、きららがゴルバット相手にスピードスターを撃ち込んでいた。

……こつちと違ってきららは余裕そうだね。

「スターミー、大丈夫かしら?あなたも、指示を出すのがいっぱいばいのようなね?」

「そうだね。……でも、次はないよ?ね、ミスタ?」

声をかけると、ミスタがのそりと起き上がる。

「ありがとう、ミスタ。もう少しだけ頑張つて。」

「そう?なら、もう一度試してみましようか。パルシエン、ジユゴン!」

カンナがさつきの技をもう一度繰り出そうとする。

さつきは私の指示が悪かっただけで、ミスタはあの程度の技に負けないよ。

「ミスタ、全力でいいよ。あいつらを見返してやろう。」

「ー」

うなずいたミスタは力を集め出す。

「ツッ!シバー!」

カンナの焦った声に反応してサワムラーが飛び出す、グロウがバレットパンチで吹き飛ばす。

ありがとう、グロウ。

「チッ!だったらそのまま撃ち抜くだけよ!」

パルシエンとジユゴンの複合とげキャノンが放たれる。

残念だけど、ミスタの準備は終わってるよ！

「メテオビーム！」

私が叫んだ瞬間、ミスタから放たれた閃光が辺りを照らし、とげキャノンを溶かしながらパルシエンとジユゴンを飲み込む。

ドサツと、パルシエンとジユゴンが倒れる。

「その技、前に川を砕いたやつね。まさかスターミーも使えるとは思わなかったわ。」

倒れた2体をボールに戻しながら、驚いたように言う。

「努力の賜物だよ。……まあ、出し惜しみなんてしてる場合じゃなかったみたいだけどね。」

おかげでミスタも一撃で戦闘不能近くまでもっていかれたし。

「ホント、油断ならないおチビちゃんね。キクコ、そっちはどう？」

カンナがキクコに声をかける。

つられて私もそっちを見ると、ゲンガーをサイコキネシスでふっ飛ばしていた所だった。

「どうもこうもないわい！なんじゃ、こいつは!?全く歯がたたん！」

「きらら、ありがと。戻ってくれる？」

『わかったー。』

焦るキクコとは対象的に、ふわふわとのんびり戻ってくる。

きららが戻ってくると、私はミスタをボールに戻す。

戻す瞬間、え!?私まだ戦えますか?みたいな反応をしていたけど駄

目です。休んでください。

「あら、やつぱり?凍らせた川ごと砕いたり、ふぶきを丸ごと押し返したりしたから、普通じゃないとは思っていたけれど……。」

「カンナが警戒していた理由が分かったわい。」

「仕方ないわね。レッドを始末したあれ、やるわよ。」

カンナがそう言うのと、シバはサウムラーを前に、キクコはゴース、カンナはルージユラをボールから出す。

この人達、何体連れてるんだろう……。

いや、それより何かやろうとしてる……?

「シバ、キクコ、合わせなさい！」

「氷・闘・霊の陣!!」

カンナの声に合わせて、それぞれのポケモンから眩い光を放ちながら、エネルギーが襲いかかってくる。

これはまずいかも!?

「かぷちー!グロウ!下がって!きらら、りゅうせいぐんで全部押し潰すよ!」

『おっけー!』

向かってくる3つのエネルギーに対して、きららはりゅうせいぐんで迎え撃つ。

加減はしなくていいと言ったからか、加減する余裕がなかったのかはわからないけど、今まで見た中で最大規模のりゅうせいぐんがエネルギーを押しつぶしていき、そのまま四天王の3人も飲み込んだ

### 32話

りゆうせいぐんが止み、辺りに静けさが戻る。

「ふう……。あの3人、生きてるかな？」

『たぶんいきてるよー。』

「そっか、それなら良かった。」

流石に私のせいで死人が出るのは寝覚めが悪いし。

「それより、エネルギーどれぐらい残ってる？」

『んー……。さんわりぐらいかなー？』

「結構ギリギリだね。疲れてると思うけど、もう少しだけ頑張れる？」

『うん。がんばるよー！』

やっぱりきからは頼もしいね。

ミスタがほぼダウンしてる以上、エネルギーが空っぽだと、かぷちーとグロウだけになる。

そうなると3人の相手は正直無理だと思うし。

そう考えていると、がらがらと瓦礫を押し退けて起き上がる人影。

「ん？ここは何処だ？」

ガラガラと瓦礫を押しつけて起き上がったのは、四天王のシバ。

さつきと違って目に生気が宿ってる。

ここは……。って言うてるあたり、操られてたとかそんな感じかな？

「あらあら、シバが正気に戻ってるじゃない。」

「フェフェ、さつきの技がそれ程の威力だったってことさね。」

遅れてカンナとキクコも起き上がる。

3人とも傷だらけで、満身創痍って感じだけど……。

「あれを受けてその程度のケガで済まされるとは思わなかったよ。」

「シバのイワークのお陰ね。」

傍らではシバが2体のイワークをボールに戻している。

あ、もう1体いたのね……。

「それで？その状態でまだやる？」

こっちの状態を悟られないように、さも余裕があるように話しかける。

「フェフェ。カンナ、流石にこれ以上は無理じゃないかね？」

「そうね。」

キクコと話していたカンナがこっちに向く。

「決着を付けたければ、スオウ島までいらつしやい？もてなしてあげるわ。」

「それ、私が行くと思ってるの？」

わざわざ敵の懐に飛び込むなんてするわけないでしょ。

「来ないなら、来ないで良いわよ？その時は私達にとつて邪魔な子達を順番に始末するだけ。イエローと、ブルーと言ったかしら？」

「・・・ブルーをどうするって？」

ブルーの名前が出た瞬間、頭に血が昇る。

思わず、口調が荒くなった。

「あら？あなたの焦った声初めて聞いたわね？トキワの森で、イエローを助けたタイミングがあまりにもよかったから、何か関係があるかと思つてカマをかけたのだけれど・・・。」

「・・・ツッ！」

やられた。

私は唇を噛み締める。

落ち着け。大丈夫。ブルーは用心深いから、簡単にはやられない。心を落ち着けると、フツと息を吐く。

「いいよ、その挑発乗ってあげる。せいぜい首を長くして待つててよ。」

「ふーん、よっぽどブルーって子が大切みたいね。」

そう言つと、じつとこちらを見つめる。

「まあ、今はあなたの方ね。厄介なあなたには、プレゼントをあげるわ。ルージュラ！」

カンナがルージュラを呼ぶと、瓦礫の下からのそりと起き上がる。

と言つても、イワークに守られた上でかなりボロボロの様子。

そのルージュラが両手をかざすと、手のひらに氷の人形が出来上が

る。人形を作り出したルージュラは力尽きたのか、それをカンナに渡すとそのまま倒れた。

あれは・・・私の人形？

「今度は人形遊び？」

「フフツ、そうね。」

私の問いかけに短く返事をする。

・・・なんか、えらく余裕だけど何をする気？

「ここを、こうやると・・・。」

そう言つて口紅を取り出すと、私の人形の右手首にバツ印をつける。

「えっ?」

その瞬間、私の右手首に氷の結晶のようなものが現れ、手首から先が動かなくなる。

「これなら、少しは大人しくなるでしょ? スオウ島に来れなくなつても困るから、もう一箇所だけにしておきましょうか。」

「させるわけ、ないでしょ! きらら、あの人形とつて!」

『分かった!』

きららは返事を返すと、サイコキネシスでカンナの手から氷の人形を奪い取る。

その瞬間、右腕に激痛が走る。

腕を見ると、肘から先が氷に覆われている。

なにこれ、めっちゃくちや痛いんだけど!?

「あらあら。無理矢理持つていくから、手が滑つて口紅が肘から先にベツタリついちゃったわね。」

きららが手元を持ってきた人形を見ると、肘から手首まで口紅が真っ直ぐについていた。

『ごめん、ましろ。しっぱいしちゃった。』

「ううん。よくやってくれたよ。ありがときらら。」

申し訳無さそうに、しよぼんとしているきららを励ます。

そして、カンナをキツとにらみつける。

「えらく、悪趣味なプレゼントだね?」



「お気に召したようだなによりだわ。それじゃ、キクコ、帰りましょうか。」

「了解だわね。」

キクコが返事を返すと、四天王の周りに霧が立ち込める。

そして、霧が晴れたときには3人の姿は消え去っていた。

「・・・きらら、周りに誰かいる?」

『うくん、いない・・・かな?』

どうやら、3人とも本当に帰ったみたい。

気が抜けた私はその場にへタツと座り込む。

そして・・・

「いったあああ!!なにコレ!?あんなの聞いてないよ!」

痛さのあまり思いっきり叫んだ。

ひとしきり叫んだあと、鞆からこおりなおしを取り出し右腕に吹き付ける。氷の人形は叫んでいる途中で溶けて消えた。

・・・腕の氷は全然溶けないんだけどなんで?

まあ、溶けないなら仕方ない。私は地面に下ろした鞆からポケギアを取り出す。利き腕が使えないと、道具を取り出すだけで一苦労だよ・・・。

でも、思わぬ所で四天王の拠点が分かった。それに、あの氷の人形のことにも伝えとかないと。

あれは初見殺しにも程がある。

そんな事を考えていると、ポケギアの呼び出し音が止まる。

『もしもし、マシロ?どうかしたの?』

「いや、ブルーの方は何か変わったことはないかなーって。」

『うーん・・・。こっちは特に変わったことはないわね。』

「そっか。それならよかった。さっき四天王に絡まれてね・・・。ブルーの事気づいてたっぽいから気を付けてね?」

『そう、いつかはバレるものだからしょうがないわね。それは分かったわ。それより・・・、四天王に絡まれたってどういう事よ!?!イエロー

とあなたは大丈夫なの？」

ブルーの慌てた声が聞こえる。

とりあえず、私の腕以外は問題ない。

・・・腕は大問題だけでも。

「うん。イエローとは丁度別行動してたときに絡まれたからね、イエローは無事。今はグリーンと一緒に居るよ。」

『それならいいけど……。ん？イエローは……。？あなたは無事じゃないの？』

あ、余計なことを言ったかも。

とりあえず、適当に誤魔化しておこう。

「大丈夫大丈夫。あいつらもさつき帰ってったし。それで、スオウ島ってところを拠点にしてるらしいよ。」

『スオウ島ね……。戦力が集まるなら、こつちから仕掛けるのもありかしら……。？ん、あいつら？相手は1人じゃなかったの？』

ブルーが目ざといのか、私が抜けてるのか、色々と突っ込まれる。

あまり心配をかけたくはないんだけどなあ……。

「3人だったよ。」

『はあ!? 3人？ハア……。トキワの森で目をつけられたんでしようね。やっぱりあの時、正面からいくべきじゃなかったのよ……。ま、無事で何よりだよ。』

「そうそう。無事だから問題なし！あ、それと、カンナの人形には気を付けてね。」

『人形？』

「うん。なんか、相手そっくりの氷人形を作ってその人形の部位に×印をつけると、本人のその部位が凍りついて動かなくなるんだ。」

『えげつないことしてくるわね……。わかった、カンナと会ったときは注意しておくわ。』

「うん。気を付けといて。」

こんな痛い思いをブルーにさせるわけにはいかないしね。

『ところで、えらく詳しいけどマシロ？その凍りつくやつ、受けてないわよね？』

「え?」

『え?じゃないわよ。マシロはあたしの切り札なんだから、いざというときに戦えなくなると困るのよ。』

切り札だって!

頼りにされてるみたいですよっごく嬉しい!

「エへへへへ。」

『いや、エへへじゃなくて。』

「大丈夫!ブルーの為なら腕の1本ぐらい!」

『はあ!?まさか、片腕が凍りついてるとかじゃないでしょうね?』

「右腕の肘から先だけだよ!めちやくちや痛いけどね!」

『それは大丈夫じゃないのよ。。。』

向こうでため息をつく声が聞こえる。

なんでだろう?・

『マシロ。あなたはしばらく休んで、腕を治すことに集中して。』

「え?でも。。。。」

『でもも、きさらもない!』

「きさらは言っていないよ?」

そう言うと、隣のきさらが返事をする。

『よんだ?』

「呼んでないよ。」

『しよぼん。』

今は右手が動かないし、左手はポケギアを持ってて、構ってあげられないから後でね。

『いいから!マシロは頼りにしてるけど、ケガを押してまで戦ってほしくはないのよ。分かった?』

「。。。うん。分かった」

『よろしい。それじゃ、後はあたしに任せなさい!じゃね。』

そのまま通信が切れる。

そして、会話中は気にしないようにしていた腕の痛みを顔をしかめる。  
る。

通話の切れたポケギアを鞆にしまって、もう一度こおりなおしを吹

き付ける。

さつきは溶けてない様に見えたけど、少しずつ溶けている・・・気がする。

「いたた・・・。ブルーにはああ言ったけど、ブルーが戦ってるのに、私だけが休んでなんかいられないよね。」

ブルーがケガをするぐらいなら、私が無茶する方がよっぽどまし。

『ましろ。えへへーって、すごいかおになってたよ?』

「え、ホント?」

『うん。にへらーってかんじ。』

おとと。

まだ四天王との戦いは終わってないんだから、気を引き締めないと。

気を引き締めると、スツと立ち上がる。

『ましろ、休まないの?』

「うん。みんなには無茶させちゃうけど、お願いできるかな?」

振り返ってかぷちーとグロウに問いかける。

二人とも私の腕を気にしながらもうなずいてくれた。ありがとね。

お礼を言って、かぷちーとグロウをボールに戻す。

「きづらもお願ひ。四天王の事が片付いたらちちゃんと休むから。」

『むー・・・。わかったー。』

きづらもしぶしぶ、頷く。

ミスタはまあ、聞かなくても大丈夫でしょ。

と言うか、私が行かないと1人でスオウ島に突っ込みそう。

「とりあえず、この氷をどうにかしないとねー・・・。」

そう、小さく呟く。

ミスタも怪我してるし、早いところポケモンセンターに戻ろう。

そう思って歩き出したら、ドカァン、ときららが塞いだ横穴の瓦礫が吹き飛ぶ。

「やれやれ、無茶をするやつだ。洞窟が崩れたらどうするつもりだ?」

瓦礫を吹き飛ばし、砂埃の中から現れたサカキは、開口一番に文句を言ってきた。

「何言ってるの？地面のエキスパートでしょ、崩れてもなんとかできるでしょ？」

「まったく……。それで、四天王の奴らはどうした？」

「スオウ島に帰ったよ、奴らの本拠地だつてさ。」

「スオウ島か……。む、その腕はどうした？」

サカキの視線は私の右腕に注がれる。

まあ、肘から先が氷漬けだとそりや気になるか。

「四天王のカンナにね。まあ、見た目通りかなり痛いんだよね。だから、あんまりサカキに構ってる余裕はないかな。」

ホントならロケット団のボスなんてやすやす見逃したりはしないんだけど、腕がこれじゃあね……。

「貴様はどうするんだ？」

「とりあえず、腕の氷が溶け次第スオウ島に向かうよ。」

「そうか……。なら、2日後だ。」

「え？」

「明日は、腕を治すことに専念しろ。明後日、スオウ島に乗り込む。」  
「手伝ってくれるってこと？ロケット団のボスがどういう風の吹き回し？」

私が怪訝な目を向けると、サカキは気にすることなく続ける。

「なに、さっきの借りとその腕の分は協力してやろうというだけだ。」

「さっき……。？ああ、四天王を引き受けたこと？それは単にそっちのほうが良いさうだからそうしただけだよ。というか、レッドは？」

「知らん。氷から助けた後、直ぐに引き返したからな。まあ、生きてはいたからそのうち会えるだろう。石も渡しておいたぞ。」

「そう。生きてたなら良かった。……。それで、借りだけで協力なんかしないよね？サカキならそんなもの踏み倒すでしょ？」

「フツ。私が入れるこの世界で、好き勝手されるのが気に入らんだけだ。」

四天王も滅茶苦茶なことやってるけど、サカキも似たようなものだよねえ……。

でも腕がこんだし、使えるものは使うべきかな？

「・・・分かった。2日後だね、どこで落ち合う?」

「クチバで落ち合おう。」

「おっけー。」

落ち合う場所を決めると、サツサと歩いていくサカキ。

その背中が見えなくなつたぐらいで私も歩き出す。

『よかつたの?』

「良くはない・・・かな?でも、戦力としては破格の強さなんだよね。できることはやっておかないと。」

きららのエネルギーも半分以上使っちゃつたから、天気次第だけど当日は半分のエネルギーでなんとかしないといけないし。

正直、あまり余裕はない。

「ま、先のことよりも目先の事だね。とりあえず、山を降りながら腕の氷をどうにかしよう。」

ミスタに無茶はさせられないから、徒歩で下山かなあ・・・。

腕の氷を溶かしながらのんびり戻ろうか。

ーーーースオウ島ーーーー

スオウ島に戻ってきた四天王のカンナとキクコ。

二人はこれから島に訪れるであろうマシロに対して頭を悩ませていた。

「規格外と言うのは、ああいう奴の事を言うのかねえ・・・。フエフエフエ。」

「笑い話じゃないわよ・・・。マシロって子、どうしましょうか?」

「バツジさえ揃えば、後はワタルがなんとかするじやろ。」

カンナはキクコに問いかけるが、キクコは全部ワタルに丸投げする様に言うので、思わずため息をつく。

「はあ・・・。そう言えばワタルは何処に?」

「サカキが居るといふ情報が入ったから、クチバに行くと言って出ていったわい。」

「あら?さつきオツキミ山に居たわよね?」

「フェフェエ。ガセネタを掴まされたってことさね。」

どこもかしこもうまくいかないものね。

「仕方ないわね……。それじゃ、私達はジムリーダーに邪魔されないように部隊を編成しておきましょうか。」

「了解だの。……。ところで、シバはどうしたのかえ?」

「それなら、ブルーの方に向かわせたわ。多少なりとも、マシロの弱味になればいいんだけどね……。」

人質でもなんでもいい。

少しでもマシロの弱味を握りたいところね。

「ブルーには手を出さないんじゃないのかえ?」

「あら?そんな事を言った覚えはないわよ?」

「フェフェエ。ひどい女だえ。」

ひどい言われようだけど、あのおちびちゃんに関してはいくら警戒しても足りないぐらいなもの。

打てる手は打たせてもらおうわ。

### 33話

オツキミ山の戦いの後。

あの後、私は半日程かけて下山しながら腕の氷を溶かした。ハナダの町にに着く前に腕の氷が溶け切ったのは助かった。流石に町中を凍りついた腕で歩き回りたくはないよね。

そして、ポケモンセンターに着いて皆を預けると、そのまま丸一日寝込んでいたみたい。

『ましろく？だいじょうぶ？』

という、きららの声に起こされた私は

「今何時？」

『えつとね、まるいちにちねてたから・・・。』

「え、そんなに!?それじゃ、今日が落ち合う日じゃん!」  
って飛び起きた。

体を起こして右腕をぐるっと回すと、鈍い痛みがはしり、顔をしかめる。

腕はまだ痛む。だけど、凍ってたときほどじゃない。

大丈夫、戦える。

他の皆も元気になってるし、準備はオツケーかな。

「ミスタ、クチバまでお願い。」

私はミスタをボールから出すと、その背に飛び乗った。

ミスタの背中の上からクチバが見えた時、私は思わず声を上げた。

「なにこれ?町にクレーターができてるんだけど・・・?」

海岸からジグザグに地面をえぐった跡と、その先で爆発があつたかのようなクレーター。

何をしたらこんな事になるんだろう・・・。

メテオビームとか、はかいこうせんかな?でも、こんな無茶苦茶な軌道で撃てるものなの?



少し考えた後、きららをボールから出す。

『ふわあく……。うわあ、まちがめちやくちやだねえ。』

ボールの中で休んでたきららは、ボールから出て少し背伸びをする  
と、町の惨状に目を丸くする。

「お休み中、ごめんね？何があるかわからないから、一緒に行つてくれる？」

『わかったー。』

「ありがと。今、エネルギーはどれぐらい回復してる？」

『はんぶんぐらいー。』

「そっか。あんまり無茶はできないね。」

今晚スオウ島に乗り込もうって話なのに、その前にエネルギーを全部使っちゃうとお話にならないからね。

とりあえず、クレーターに続くジグザグの後を追いかけて海岸に向かおうか。

ーーーーイエロー視点ーーーー

イエローは町を破壊した男と対峙していた。

「なぜ町を？」

「探し物をしていたのさ。ああすれば余計な手間が省ける。……まあ、結果的には無駄足になってしまったがな。」

「ッ！そのために多くの人やポケモンが！」

言いながらクチバの惨状を思い出す。

あれだけの被害だ。きつと、被害は少くない。

しかし、その考えを否定したのはその惨状を引き起こした目の前の男だった。

「死んじゃあいないさ。あのコンテストはクチバの一大行事だ。町は空っぽだったはず。」

「え？」

「まあ、トレーナーの1人や2人、くたばったかもしれないがな。」

「ッ！」

そして、目の前の男はキツとボクをにらみつける。

「そして、お前もな。オレを追ってきたということは、次の朝日は拝めないということだ！」

そういうや否や、ハクリューがぎしつとボクの体に巻き付く。

「うぐっ！ロケット団のようにポケモンを悪事に利用するなんて……！」

ハクリューに締め上げられながら、ボクは言葉を絞り出す。

しかし、目の前の男はそれを鼻で笑った。

「フツ。悪事か……。そうか、あの行為はお前にとっては悪事か。だが、考えてもみろ。ポケモンにとつては、狭い町で飼い慣らされるよりも自然に暮らすほうが良いとは思わないか？」

ハクリューの締め付けを緩めずに言葉をつづける。

「ポケモンが生きやすい世界に人間は邪魔なのだ。この世界で優秀なトレーナー以外の人間を滅ぼす。それがドラゴン使いであり四天王の将、ワタルの目的だ！」

人間を……滅ぼすだって？

この男、ワタルを何とかしないとクチバみたいに他の町も滅茶苦茶にされてしまう……。そんなこと、させるもんか！

まずは、ハクリューから抜け出さないと！

「ぐっ……ピカ？合図をしたら、みがわりでワタルを、ピカはハクリューを攻撃。できる？」

「ピカ！」

ハクリューに締め上げられながら、小声でピカに指示を出すと、ピカは頷いてくれる。

よし、いくよ！

「ピカ！みがわり！」

「ピツカア！」

「フン。向かってくるか……。身の程を知れ！ハクリュー、はかいこうせん！」

ワタルは、ハクリューに駆けていくピカに向かってはかいこうせんを放とうとした。

その瞬間だった。

「目的を話してくれるのは助かるけど、先にその子を放してくれないかな？ かぷちー、グロウー！」

はかいこうせんを放つ瞬間に、見たことのないポケモンがハクリューの体を突き飛ばし、ボクの体は宙に放り出された。

「うわっ!!」

「よいしょっとー！」

よいしょの声と同時にボクの体を受け止めたのは、少し前から別行動だったマシロさんだった。

—————

私はミスタに乗ったままイエローを受け止める。

「いたた……。やっぱりこの腕で受け止めるのは無茶だったかな？ イエロー、大丈夫？」

「はい、ボクは大丈夫です。ピカは!？」

「ピカは下に居るよ。」

サイコキネシスでキャッチしたきららが、ピカとみがわりを流されてきたサーフボードに下ろしている。

「よかった。ところで、今までは何をしてたんですか？ すぐに戻って……。」

「ごめんね、ちよつと四天王に絡まれてたんだ。」

「そうだったんですね……。それで、四天王は？」

「追いついたよ。……大分苦労したけどね。」

少し苦笑いをしながら返事をする。

「それにしても、よくここが分かりましたね。」

「偶然だけだね。」

—————少し前—————

海岸に行くと、焦って逃げる人が沢山。

砂浜に転がっている垂れ幕には、なみのりコンテストの文字。

そっか、今日はなみのりコンテストの日だったんだ。それで人がこ

んなにしているんだ。

でも様子を見る限り、なにかアクシデントでもあったのかな？

「おーいー！」

下から松葉杖をついてる人がこっちに手を振っている。なんだろう？

私はミスタに砂浜へ降りてもらおう。

「どうしたんですか？」

「あなた、ポケモントレーナーですよね？イエローくんを、助けてあげてください！」

「え、イエロー？なんでクチバに？」

なんでイエローがクチバに居るのか分からないけど、グリーンが一緒にいたはず。グリーンは一緒じゃないの？

「まあ、それは後でいいか。それより、助けてってどういう事？」

「イエローくんが、町を壊した奴を1人で追いかけて行ってしまいまシター！イエローくんは、なみのりをできるポケモンがないのに、デス。どうか、イエローくんを助けてあげてください！」

そう言って私に頭を下げる海パンの人。

どうやら、イエローは1人だったみたい。今度グリーンに会ったら文句言っておこう。

と言うか、なみのりができないのに追って行ったってどうやったんだろうか……？

まあ、追いかければ分かるか。

「頭を上げて、早く避難しなよ。その足だと歩くのも苦労するでしょ？イエローは、私が追いかけるから。」

「ツ!!ありがとうございマス！」

私が追いかけると言うのと、頭を上げると、またお礼を言いながら、ペコペコと頭を下げる。

いや、だから早く避難しなよ。砂浜を松葉杖だと歩きにくいでしょ。

うーん……。私がここを去った方が早いかな。私が居たらこの人ずつとペコペコしてそうだし。

「ミスタ、上に！」

ミスタが上空に飛び上がると、海を見渡す。すると、ある方向に雷雲が集まるのが見える。

「あっちだね。行くよ、ミスタ！」

—————

「まあ、そんな訳でイエローの場所が分かったのはその人のお陰のこと。」

「海パンさんが……。あ。助けてくれて、ありがとうございます。」

「気にしないでよ。元々イエローの護衛がブルーのお願いだしね。」

話ながらピカの方に下りていくと、サーフボードにイエローを降ろす。

腕も痛くて抱き抱えるのもつらい。

「これは……。？ピカのみがわりが水をはじいてる？」

「それじゃ、ピカをよろしくね。後は自分でなんとかなりそうかな？」

足元のサーフボードを不思議そうに見ているイエローに声をかける。

「はい。これなら大丈夫そうです。……マシロさんは？」

「その四天王の将って人が待ってるからね。流石にこのまま帰してはくれなさそうだし、ちよっとお話してくるよ。」

「ボクも一緒に！」

「イエロー、飛べる？」

「いえ……。」

「なら、先に逃げて。ちよっと今は庇いながら戦う余裕はないんだよね。」

「ツッ！」

そう言うといエローは悔しそうに唇を噛み締める。

今、きららのエネルギーは半分しかないし、慣れない海の上での戦い。おまけに夜はスオウ島に乗り込む予定。

他人を気にする余裕はない。

「・・・分かりました。気を付けてください！」

イエローはそれだけ言うと言わさずサーフボードに乗って海を駆けて行った。

おお、綺麗になみのり出来てるね。あれなら逃げ切れそう。

「話は終わったか？」

「ご丁寧に待っていてくれたの？」

「フン。貴様がマシロだろう？カンナが油断できないとこぼしていたからな。警戒するのは当然だろう？」

やっぱり私の事は他の四天王から聞いてるよね。

まあ、おかげでイエローが逃げる時間が稼げたからいいかな。

それより、ここはどうしようか？

四天王の1人と1対1。各個撃破するには絶好の機会ではある。

となると、やらない手はないよね。

「まあ、待て。少し話でもしないか？」

そう意気込んだ私の出鼻を挫いたのは、ワタルの言葉だった。

「私は話したいことなんてないんだけど？」

「お前は、オレの目的を聞いてどう思う？イエローと同様、悪事だと思うか？」

全然人の話を聞いてくれないし。

これは、話につき合わない駄目なやつかなあ・・・。

「はあ・・・。ポケモンの為に人間を滅ぼすってやつ？そりや、善か悪かで言えば悪でしょ。」

「ポケモンの住処を破壊しているのが人間だとしてもか？」

「そりやそうでしょ。一部の人間がやっつてることに、関係のない人間も巻き込んで滅ぼすとか暴論にも程があるでしょ。」

と言うか、そもそもそんな事が可能なの？

とてもできるとは思わないけど。

「そんなにポケモンが大切なら、ポケモンだいすきクラブにでも入ったら？」

「フン。貴様ほどのトレーナーなら或いは、と思ったが・・・。どうやら、同士にはなり得ないようだな。」

なんか1人がすっかりしてるけど、なんで同士になると思ったんだろう？

「なら、ここで海の藻屑となれ！ハクリュー、はかいこうせん！」

「グロウ、ひかりのかべ！」

はかいこうせんに備えてグロウがひかりのかべを展開する。  
が。

「無駄だ！」

ワタルが叫ぶとはかいこうせんの軌道が縦横無尽に変化する。そして、壁を迂回してグロウの後ろからはかいこうせんが迫る。

「かぶちー、後ろ！」

「くちっ！」

グロウの背中に乗ったかぶちーが、後ろから迫るはかいこうせんをはたきおとす。

はかいこうせんが海に沈み、水しぶきを上げる。

いやー、スゴいね。はかいこうせんってあんなに曲がるんだ。

きららとミスタもメテオビームをあんな感じでコントロールできないかなあ……。

と言うか、町を壊したのもさっきのはかいこうせんかな？ギザギザの軌道も納得だよ。

「ほう、あれを叩き落とすか。聞いていた通りの実力だな。」

「コメットパンチ！」

軽口を叩き続けるワタルを無視してグロウが鋼の拳を叩きつける。

ハクリューはそれを尻尾で受けとめ、ガツツと鈍い音が響く。

「重たい拳だ……。だが、その状態からひかりのかべは出せまい。はかいこうせん！」

「ふいうち！」

ハクリューが額にエネルギーを溜めだした瞬間を、かぶちーの大顎が撃ち抜く。

「ぐっ！」

攻撃を受けたハクリューはそのまま吹き飛ばされ、溜め込んだエネルギーが霧散する。

「接近戦は不利か……。なら、このまま距離をとって戦うだけだ！」  
崩れた体勢を立て直し、接近戦が不利とみると今度は距離を保った  
まま、額にエネルギーを溜める。

この距離だと、グロウが近づくより相手の方が早いか……。  
それなら！

「グロウ下がって！ミスタ、力比べだよ！」

かぷちーを乗せたグロウが後ろに下がり、ミスタが力を溜める。  
そして。

「はかいこうせん！」

「メテオビーム！」

2つの閃光がぶつかり、辺りを覆い尽くす。

あまりの閃光に私はとっさに左腕で顔を隠し、目を閉じる。

弾けた閃光が収まり、目を開いたときにはワタルの姿はなかった。

「逃げた……？ワタルに逃げる理由なんてないと思うんだけど……」  
『いっしゅんだけど、おつきみやまでたたかったひとのけはいがした  
よ？』

「ってことは、キクコって人が連れてったのかな？これは大分警戒さ  
れてそうだなあ……。」

きつとこんなところで1対1で決着をつけるより、自分たちのホー  
ムっていう有利な条件で戦おうって考えでしょ。

「……はあ。ここで1人ぐらい倒しておけば楽になるかと思ってたけ  
ど、相手もかなり慎重だなあ……。」

まあ、逃げられたものは仕方がない。

イエローが無事に逃げられたし、それでよしとしよう。

「それじゃみんな。クチバに、戻って休もうか。今夜が決戦だよ！」  
私の言葉にみんなはうなずいてくれる。

ありがとうね。頼もしい限りだよ。

—————スオウ島—————



「何故邪魔をした？」

「フェフェエ。マシロと戦うなら、できるだけ有利な条件で戦いたいだけじゃよ。」

「・・・あのままでと、オレが負けたと言うのか？」

「その可能性もあったの。なんせ、後ろに控えていた星型のポケモンが手を出さなかったということは、本気ではなかったということだ。」

「・・・。」

「まあ、慌てることはないさ。近いうちにグリーンバッジを持ってこの島にやってくるわい。」

「何？あいつがグリーンバッジを持っているだと？間違いないのか？」

「フェフェエ。実際に見せられたからの。間違いないさ。」

「そうか・・・。」

「あいつがこの島に来ると言うなら、あの場で決着をつける必要はない。」

「むしろ都合だ。」

「それまで勝負は預けておくれ、マシロ。」

### 34話

ワタルとの戦いの後、クチバに戻った私は港の船着き場に座り足をぶらぶらさせていた。

「そろそろ時間だと思っただけど、サカキはいつ来るんだろう?」  
すでに日は暮れて、空には月が煌めいている。

『わすれてたりしてー?』

私の頭の上に乗っかってるきららが軽くショツキングなことを言う。

「それはないでしょー。」

「・・・ないよね?」

いやでも、ロケット団は信用できないし・・・。

え、それだと一人で乗り込む事になるんだけど・・・。

まだ待ちあわせまで時間はあるから、もう少し待ってみよう。

「ところできらら、ワタルが言ったポケモンにとって人間は邪魔つてのはどう思う?ポケモン側からすると実際に邪魔だったりするの?」

『うくん・・・。わかんない!』

「そっかー、わかんないかー・・・。」

というか、1000年に1週間だけ目覚めるようなポケモンに聞いても分かるわけないか。

きららには棲みか、みたいなものはなさそうだし。

私としては、ワタルの言ってることも分からなくもない。実際に、この前グリーンが特訓してた所も人間が開拓した結果だろうし。そのせいで棲みかを追われたポケモンもいると思う。

まあ、だからって全部滅ぼすのはないよね。

「待たせたな。」

少し考え込んでいると、後ろから声がかかる。

「やっときた。すっぱかされたかと思ったよ。」

ようやくやって来た。文句を言いながら立ち上がり砂を払う。

うーん、右腕を使わずに立ち上がるの、結構つらいね。

「それじゃ、早く行こうか。面倒事は早く片付けたいし。」

「そうだな。」

「あ。それと、四天王が片付いたら次はサカキの番だからね？」

「次？」

「そうそう。四天王の次はサカキを捕まえるから。」

「そうか。期待せずにはまってるぞ。」

サカキは興味なさそうに返事を返し、パルシエンを出してその背に飛び乗る。

勝者の余裕ってやつ？

確かにヤマブキでは負けただけだね、次は負けないよ。

顔に出さないように意気込みつつ、私もミスタを出してその背に乗る。

しかしまあ、ロケット団のボスと手を組むことになるなんて思わなかったね。でも、毒を以て毒を制すとも言うし。

「行くぞ。」

「ミスタ、サカキについてって。」

サカキが私の前をなみのりで進んでいく。

この劇毒、取り扱いには気をつけないと。

ーーーーーブルー視点ーーーーー

スオウ島でイエローと合流したアタシとマサキは、鍾乳洞の洞窟を進む。

「ホントはレッドの行方を調べるだけだったんだけどね。マサキの家に行ったら手足の伸びるサウムラーに襲われて、仕方なく一緒に行動してたのよ。」

「なにが仕方なくや。ヒトン家の鍵、勝手に開けてからに。そのせいで家は壊れるし、戦いに巻き込まれるわでさんざんやー！」

「おかげでレッドが生きてることは分かったじゃない。」

レッドが生きている、と聞いた途端イエローは嬉しそうに声を上げ

る。

「やっぱりレッドさんは生きてるんですね！タケシさんがオツキミ山で、レッドさんの氷の抜け殻？みたいなものを見つけてたんで……。」なるほど、イエローの方でも何かしらレッドの情報は掴んでたみたいね。

それより、氷の抜け殻……か。マシロの忠告を聞いて、島に来てから上着を羽織ったのは正解かもしれない。

「ところで、イエローの方は大丈夫だったの？アタシ達がサワムラーに襲われてたのは足止めの為だと読んでるんだけど……。」

「えっと、クチバで四天王の1人に襲われました……。でも、偶然居合わせたマシロさんに助けてもらいました。」

「はあ!?あのおバカ……。休んでなさいって言ったのに……。って、え？偶然……?」

「はい。マシロさんはそう言っていました。」

叫んだあと、思わずため息をつく。

まあ、偶然なら仕方ないか。

「偶然ってことはあの子、クチバに何か用事があったのかしら？イエローは何か聞いてない?」

「いえ、何も……。」

「そう……。」

うーん、本当に偶然かしら?

あの子なら、私に止められたから表立って動かずに裏から守る、なんてこともやりかねないし……。

と、そんな事を考えていると、ピツくんが入ったボールがガタガタと震える。

「お、ピクシーやないかい。」

「この子、耳がいいのよ。きつと何か聞こえたんだわ。イエロー、お願い。」

「ハイー!」

イエローがピツくんの入ったボールを受けとり、両手をかざす。すると、両手から淡い光がこぼれる。

「人の声が聞こえたみたいです。驚いてはいませんが、怯えてる感じではない……。知っている人みたいですね。」

「知ってる人……か。味方だといいわね。マシロが来ない以上、戦力は少しでも多い方がいいもの。」

「え!?今、カントーが襲撃されてて、ジムリーダー達が動けないのに、マシロさんも来ないんですか?」

「そうよ。四天王3人掛かりで襲われて、ケガしちゃったみたいでね。流石に頼めないわ。それより、ジムリーダーの援護も難しい……かあ……。」

少しあてにしてたんだけど、動けないなら仕方ないわね。

「はえ〜……。3人がかりで来られたら、ボクなんかはケガどころか瞬殺ですよ……。」

と、イエローが放心してる。

まあ、そうよね。サウムラーだけで大分時間を取られたのに、四天王の3人を同時に相手にするなんてアタシだって無理なもの。

「ちよいまちー!つてことは、ワイはマシロはんの穴埋めに連れてこられたつちゅー訳かいな!」

「当たり前よ。さつきも言ったけど、戦力は多い方がいいもの。」

そう話ながら歩いていると、前方に人影が見える。

向こうもこちらに気付いているようで、近づくと向こうから声をかけてきた。

「ずいぶん賑やかな登場ね。」

声をかけてきたのは聞いたことのある、そしてあまり会いたくない、以前一度だけ戦ったことのある人物だった。

「ナツメ!?なんであなたがここに?」

「私だけじゃないわよ?」

ナツメの後ろにはキョウとマチス。

そして、その後ろにグリーンとカツラ……だったかしら?

ロケット団3幹部に、ジムリーダーと凶鑑所有者。

いったいどういう集まりよ……。

「なんでグリーンがここに居るのよ?マシロからイエローを頼まれた

んじやなかったの?」

「そいつが自分から離れて行っただけだ。オレのせいにするな。」

「イエローくん、そっちの人は?」

「ブルーさんと、マサキさん。ボクをたすけに合流してくれました。」

アタシとグリーンが言い合いをする横で、イエローはカツラさんにアタシ達の事を紹介する。

「で、なんでロケット団の幹部なんかと一緒にいるわけ?」

「偶然ここで鉢合わせただけだ。」

グリーンにそう言われて、ロケット団の3人に目を向ける。

「別に難しい事はない。オレ達も四天王を倒すためにここに来た。そもそも、オレ達がここに居るということは、だ。」

「私達ロケット団は壊滅した訳じゃないわ。地下に潜伏して復活の準備をしていたのよ。」

「ところが、だ。四天王とか言うやつらが人間を滅ぼそうとしてるじゃないか。いずれ、オレ達の手中に収める場所で勝手なことは許さん。」

マチス、ナツメ、キョウの3人がそれぞれ憤りをあらわにする。

「つまり、私達の目的は同じって訳。どう?お互い邪魔しないのであれば、手を組んであげてもいいわ?」

そう言つて、ナツメが私達に提案する。

上から目線なのは腹立つけど、ロケット団3幹部の実力は本物なのよね。実際に戦ったし。

でも、信用してもいいものかしら・・・?

「手を組んでやってもいい・・・か。それはこっちの台詞だ。オレはおじいちゃんと同縁のある四天王、キクコを倒す為だけに来た。その邪魔をしないなら、お前達が何をしようと思つたことじゃあない。」

グリーンはどちらでもよさそうだけど、アタシはできるだけ勝率は上げておきたいのよね。

「そうね。他のジムリーダーの援護が望めない以上、今できる最善の手をうちましょう。無いものねだりをして仕方がないわ。」

「フフ、決まりね。フーデイン!」

ナツメの後ろにいたフリーデインが、各々にスプーンを配る。

「ナツメよ。運命のスプーン、というわけか。」

マチスが納得したように呟く。

「そうよ。アナタ達はカントーが襲撃されている今、この島が手薄だと思っっているかもしれないけれど、どういう訳か四天王は全員この島から動いていないわ。敵は4人、こちらは8人。」

「つまり、2人1組の4チームで戦うのがベターってことねね。」

それにしても、四天王全員がいるとは思わなかったわ。カントーが襲撃されてるなら、1人ぐらいは居ないものだと思ってたけど・・・仕方ない。全面戦争ね。

「で、このスプーンはなんなのよ?」

そう言って、手元のスプーンに視線を落とす。

「そのスプーンを持ったら、戦う気持ちを強く念じるのよ。その念に對してスプーンがベストな相手を選んでくれるわ。」

アタシの戦う気持ち・・・か。アタシは四天王が大きな鳥ポケモンを操ろうとしてるって聞いたから、四天王を探ってただけなのに。なんでここまで大事になったのかしら。

ま、ここまで来ちゃったし、乗り掛かった船ね。マシロも巻き込んじゃったし、最後ぐらい責任はとらないと。

「1組目、決定ね。」

ナツメの言葉で顔を上げると、イエローとカツラさんのスプーンが曲がってお互いを指し合っている。

ちよつと、早くない?焦っちゃうじゃないのよ。

・・・そうね、アタシがこの中のメンバーで上手く肩を並べられそうなのは誰・・・?

「2組目、3組目決定ね。」

周りを見ると、キョウとグリーン。アタシのスプーンはナツメの方を指している。

「偶然だけど、シルフカンパニーで戦った相手になったわね。4組目は・・・。」

ナツメの言葉で未だにスプーンの曲がらない2人を見る。

「運命のスプーンは戦う意思の無い者や、組むべき相手が居ない時には反応しない。」

「と言うことは、オレの相手はここにいないってことか。キョウやナツメと同じなら、オレの相手はレッドってことになるがな。ワハハ。まあいい。数あわせだ、来い！」

「なんやて!？」

そう言つてマチスはマサキを抱えると、1つの横穴に入っていく。

「行くぞ、イエローくん。」

「ハイ！」

カツラさんとイエローはまた別の穴に。

「じゃあな。」

グリーンとキョウも別の穴に。

「それじゃ、私達も行きますようか。」

「そうね。頼りにしてもいいのかしら、お姉さま?..」

「ジャマをしないならな。あと、お姉さまはやめろ。気色悪い。」

アタシ達も別の穴へ向かう。気色悪いはひどくない?

さて。マシロがいない状態だけど、予想外の戦力アップね。これならなんとかなるかもしれないわ。

でも、マシロがここにいたら誰と組むことになっていたのかしらね  
?

—————

「……ねえサカキ?」

「……何だ?」

「……パルシエンのなみのり、遅くない?」

「……そんな事はない。」



### 35話

なみのりをするサカキに付いてしばらく。

ようやくスオウ島に上陸した私達。

「大分かかったねえ……。夜が明けるかと思つたよ。」

「奇襲には夜明け前が効果的なんだぞ?」

「相手が招待したのに、奇襲もなにもないと思うんだけどな……。」「  
と言うより、もっと激しい歓迎が待ってると思つてたけどなにもない。」

となると、この島も結構広そうだし、何処にいけばいいのやら。

そう思つて島を見上げると、島の一部が崩れている。

自然に崩れたものじゃなさそうだけど……。

「ふむ。どうやら先客がいるようだな。」

同じところを見てサカキが呟く。

「つてことは、四天王はそつちの相手をして私達はすんなり上陸できたつてことかな?」

まさか、のんびり来るのが吉とでは思わなかったよ。

でも、こんな島に誰が来てるんだろう?」

その時、ドカアン!と轟音が鳴り響き……。

火山が噴火した。

「え、噴火?このタイミングで?」

「どうやら先客はあそこにいるようだな。派手にやりあっているらしい。」

そう言つておもむろにサイドンをボールから出す。

「私はサイドンで最短ルートを掘り進む。マシロは上から行くとい。」

そして、サカキはそのままサイドンに乗って行ってしまった。

「……確かに別行動をすれば、あわよくば挟み撃ちとかできるかもしれないけどさ、各個撃破される可能性もあるんじゃないの?」

私の意見は聞かずに行っちゃったし……。

まあ、いいや。そういうことなら、私は上から行こうか。

「ミスタ、ゆつくり飛んでたけど疲れてる？」

「――」

うん。まだ元気って感じだね。

「それじゃ、もう少しだけお願い。」

「――」

いつもの電子音で返事をする、私を乗せて上空に飛び上がった。

――イーエロー視点――

「ピーすけ、ギブスを！」

バブルこうせんで折れた右腕を、ピーすけの糸で固定する。

溶岩に沈んだと思ったら、バブルこうせんの泡の中で身を守っていたのか……。

それに……太陽が登ったことで、光の反射を利用した見えないバブルこうせん。

とにかく、逃げ回りながら対策を考える。

見えない以上、動き回るしかない。

「ハア、ハア……。……ふう。」

見えないバブルこうせんに追われながら、周囲を走り回る。

そして、ある程度逃げ回った後岩を背にして息を整える。

よし、準備はできた。ボクはみんなに小声で作戦を伝える。

「いいかいみんな。さっき動き回った時に、ピーすけの糸を周りに張り巡らせた。細い糸だから、ワタルにはまだ気づかれてはいないはず……！」

一旦言葉を区切り、ワタルと周囲に張った糸を視線だけ動かして確認する。

「泡が糸に触れた瞬間、それを察知したラツちゃんがピカに合図して、ピカが電気を流す。その糸はオムすけがあらかじめ濡らしてある。」

説明中にラツちゃんが反応して、ピカが電気を流す。パンパンと、泡が破裂する音が連続で響く。

「そして、ワタルがこの仕掛けに気づいた瞬間。きつと一瞬だけ気が

反れる。」

「む？この音は・・・？」

泡が見えないのはワタルも同じ。だから異常に気付いた時に、一瞬だけ周囲を見渡した。

「今！」

ボクが叫んだ瞬間、ゴロすけがドドすけをぶん投げ、一直線にワタルを守る大きな泡に突撃する！

「ドリルくちばし！」

そしてそのまま、大きな泡に突き刺さった・・・が。

「成る程。糸自体が身を守るのと同時に、オレの隙を作り出すための罠でもあったか。・・・だが。」

ワタルを守る、一際大きな泡を破ることはできなかった。

「悲しいかな。パワー不足だ！」

ギャラドス達が大量のバブルこうせんを吐き出す。

ワタルにばれないようにと細く張った糸は、そのまま吐き出した大量のバブルこうせんで、容易くぶちぶちと切れていく。

そして、それはそのままボクにも襲いかかってきた。

「うわああああー！」

泡の量が増えたことよって、光の反射が上手く作用しなくなり目で見えるようになったが、結局避けられなかったら同じこと。

ボクはもう、迫ってくるバブルこうせんから逃げることしかできなかった。

そして、そのバブルこうせんがボクに当たる瞬間だった。

誰かがボクの体を抱えて、バブルこうせんから飛び退いた。

そして、バブルこうせんの範囲から逃れるとそこで下ろしてくれた。

「ぐっ・・・。誰か知りませんが、ありがとうございます。でも・・・ワタルはトキワのトレーナーじゃないと倒せないんだ。ボクが・・・なんとかしなくちゃ・・・！」

そう言っ立ち上がる。

できる事はは全部やった。それでも、ボクはトキワのトレーナーな

んだ……！ボクが諦めるワケにはいかない！

が、助けてくれた人はボクの肩をポンと叩くと、そのままボクの体を引つ張り前に出る。

「心配するな。オレもトキワのトレーナーだ。」

隣に立っているその人を見上げると、スーツを着たおじさんだった。

見たことない人だけど、誰だろう……？味方、なのかな？

そして。

「なにがトキワのトレーナーよ。一人で先に行かないでくれないかな？」

上から隣に降りてきたのは聞き慣れた声。

「待たせちゃったかな？遅れてごめんね？」

「マシロさん！」

ブルーさんが来ないといっていたはずの、マシロさんだった。

—————

私はボロボロのイエローの隣に降りる。ミスタは一旦ボールに戻しておく。ずっと乗せてもらってたからね、少し休んで。

それにしても、誰が来てるのかと思えばイエローだったんだね。見た感じ、大分無茶をしたみたい。

「でも、何でイエローがここに？」

「今、カントーが襲撃されていて。今ならここが手薄なんじゃ無いかってカツラさんと2人でこの島に来たんですが……。」

「え？今そんな事になってるの？」

四天王も本格的に動き出してるんだ。ってことは、私を誘い込んで邪魔が入らないようにしてたってことかな？

そうなるとイエロー達がこの島に来たのは奴らにとってもイレギュラーなはず。私にとっては追い風だね。

「話は後だ。貴様らは下がっている。」

イエローと話していると、サカキが間に割って入る。

「1人でいいの？」

「オツキミ山の借りの分だ。隙はつくってやる、期は逃すなよ!」

「オツケー。イエロー、下がるよ。ほら、ピカも威嚇しないで。」

ほっぺたから電気をピリピリ流すピカをなだめ、イエローと一緒に後ろに下がる。

「あの人、1人で大丈夫なんですか?」

「本人が大丈夫って言うてるんだから、大丈夫でしょ。それより、きらら。いつでも撃てるようにしておいてね。」

『まかせて!』

「ところで。大きいのを少しと、小さいのをたくさんつてどっちの方が疲れる?」

『おおきいほうがつかれるかな?でもそのぶん、ちいさいといりよくがさがるよ?』

「じゃあ、小さいのたくさんでお願い。」

『わかった!』

そして、私の後ろに待機してるきららに声をかけておく。仕掛けるタイミングは、サカキ次第かな?

あ、指をたててちよいちよいと、挑発してる。

「なんのつもりか知らんが、誰だろうとこのワタルの邪魔はさせない。バブルこうせん!」

ハクリューとギャラドスからバブルこうせんが放たれると、それらはすぐに見えなくなる。

「まずい……。また見えないバブルこうせんが!」

「見えなくなる泡が……。色の3原色つてやつを利用してるのかな?とりあえず、グロウ、かぶちー!」

私とイエローの前にグロウ、その上にかぶちーを出しておく。すると、ミスタの入っているボールがガタガタと震える。

ミスタはもう少しお休みしてね。きっと出番はあるから、そんなにガタガタしないでよ。

「ひかりのかべ、お願い。」

「グオオウ。」

うなるような返事をする、グロウの前に壁が展開される。

見えないけど、何か壁にぶつかり衝撃音と破裂音が響く。

「これで、前から来るのは大丈夫かな？それで、カツラさんと2人で乗り込んだの？」

「あ、それがですね。この島でグリーンさんとブルーさんとマサキさん。それと、元ロケット団の3幹部の人と合流しまして……。」

「え？ロケット団の幹部？それに、グリーンとブルーって……。同窓会でもやってたの？」

いや、それよりブルーが居るのはまずいなあ……。

私がここに居るのがばれたら怒られるじゃん。

「えっと……同窓会かどうかはわかりませんが、ロケット団の方達もカントーを好き勝手されたくないみたいでしたよ？」

「えー、サカキと同じこと言ってるんだけど……。考えることは同じなのかなあ……。」

「あの人、サカキって言うんですか？マシロさんとは、どういう関係で？」

「えーっと、腐れ縁みたいなものかな？」

一瞬、言葉に詰まるが無難な事を言っておく。

流石にロケット団のボスなんて言いづらいし、何でそんな人と知り合いなのかも聞かれたくないし。それに腐れ縁も的外れって訳でもないしね。

「それより、あの人すごく強いですね。」

イエローの視線を追うと、サイホーンが粉碎した岩を巻き上げて光を遮断し、泡を見えるようにした後、ニドクインがそれらを全て叩き割る。

そして。

「そのまま本体も割ってしまえー！」

ワタルを守る大きな泡を殴りつけるが、そのまま跳ね返り、地面に叩きつけられた。

あれ、すごい丈夫だねえ……。

「溶岩にも耐えるこいつに、そんなものが効くかあ！はかいこうせん！」

そして、ハクリューとギヤラドスから、周囲を縦横無尽に駆け巡るはかいこうせんが放たれた。

ズガガガと、周囲の岩肌を削りながらサイホンとニドクインを撃ち抜くだけでなく、そのままグロウのひかりのかべにも激突する。

「うわああ!!」

「グロウはそのままこらえて! かぶちーは流れ弾に注意して!」

「グオウ。」

「クチー!」

グロウは前から来るはかいこうせんを防ぎ、かぶちーは壁を避けてこつちに飛んできた分をはたきおとす。

そして、このはかいこうせんにさらされているサカキをチラツと見る。

すると、こちらを一瞬だけ見た後ワタルに分からないようにボールを落とした。

多分、仕掛けるってことかな?

「きららー!」

『りよーかい!』

私が呼ぶと、島の上に飛び上がる。

「マシロさん? 一体何を・・・?」

「大丈夫。もうすぐ終わるよ。」

私が呟いたのと、サカキが口を開いたのはほぼ同時だった。

「真下がガラ空きだ! スピアー、ダブルニードル!」

ワタルの真下で開いたボールから飛び出したスピアーがワタルを守る泡を突き破り、ワタルが体制を崩す。

「チッ! これしきの事で!」

ハクリューの後ろに控えていたカイリューに飛び乗ろうとするが、それは私が許さないよ。

「真上もガラ空きだよ! きららー!」

『いくよー!』

きららの声と共に、拳程の大きさのりゆうせいぐんが無数に降り注ぎ、ワタルとその周りにいるポケモンを火口に打ち付けた。

### 36話

大きいのを少しだけ降らせるより、小さいやつをたくさん降らせる方がエネルギーの消費が少ないらしいからそうしてもらったんだけど……。

さっきのワタルのはかいこうせんよりは確実に山を削ってるよ……。

これのどこら辺の威力が落ちてるって？

ワタルの横に倒れてるカイリユールなんて、他のポケモンをその下敷きにしてるし。

……まあ、いいや。

膝をついてるワタルとサカキの所まで行こうか。

「イエロー、歩ける？」

「ハイ。大丈夫です。」

イエローを伴い2人に向かって歩いてみると、おもむろにワタルが口を開く。

「……トキワジムのジムリーダーだな？」

「そうだ。」

「えっ？ジムリーダー最強って言われてるあの？」

後ろのイエローが驚いている。

「多分、そのジムリーダーで間違いないんじゃないかな？」

私も話ぐらいしか聞いたことないけど、サカキってかなり強いしね。ジムリーダー最強ってのもあながち間違いじゃないと思う。

……というか、そんな人がロケット団のボスをやったとかカントーってかなりヤバかったんじゃないの？

「そんな人を援軍に呼べるなんて、マシロさんスゴいですね！」

「いや、今回はたまたま……かな？それに、好きで呼んだわけじゃないんだよねえ……。」

「??」

頭に？がたくさん浮かんでいる気がするけど、サカキに関してはイ



エラーにあんまり説明したくはないんだよね。

この子、他人に妙に優しいからロケット団のボスとか言うと話がこじれそう。

「さっきはパワー不足だと言っていたが、こいつはどうだ？本来、地面以外は専門外だがこいつは特別でな。それに、マシロの追撃も効いただろう？」

「なんでサカキが偉そうなのよ。」

『そうだそうだー。』

サカキの後ろに追い付いて文句を言うと、きららも続く。

いや、きららの声は私以外の人には聞こえないから。

しかし、サカキは私の言葉を無視して指をパチンと鳴らすと、スピアーの針がワタルの喉元に突きつけられる。

「なにもそこまでー！」

驚いたイエローがサカキを止めようと近づいたが、それを片手で制しワタルに話しかける。

「我が組織は不滅だ。今は壊滅状態だが、いずれ復活を果たす。だが、今カントーはお前達四天王の襲撃を受けている。いずれオレ達が制圧するはずの場所で、勝手なことは許さんー！」

「サカキもかなり勝手なことを言ってるんだけど、自覚ある？」

「・・・我が組織ってなんですか？」

「流石は最強のジムリーダー。そのガキとは迫力が違う。いや、ロケット団のボスと行った方がよかったか？サカキ殿。」

「え、ロケット団のボス!？」

イエローが驚いてサカキと私を交互に見る。

あーあ、ややこしくなりそうだから余計なことは言わないでほしかったなあ・・・。

「マシロさん、このおじさんがロケット団のボスってどういうことですか!?マシロさんは知ってたんですか!?そもそも、マシロさんもロケット団なんですか!？」

ほら、面倒なことになった。

「イエロー、落ち着いて。あと、私をロケット団なんかに入れなくて

よ。」

あんな組織に入ってるなんて失礼にも程があるので、とりあえず額にでこぴんをしておく。

「あう……。ぐめんなさい。」

「その辺は四天王が片付いてから説明するよ。まずはワタルから、だね。」

そうやってワタルの方を見た瞬間だった。

「ククク……。ハハハハ!!」

ワタルが声を上げて笑いだすのと同時に、サカキの胸元から眩い光が空に伸びる。

サカキの胸元から飛び出し、宙に浮かんでいるのは……。グリーンバッジ？

いや、サカキだけじゃなくて私の鞆からも光が空に伸びてる。

そういえば、私もグリーンバッジ持ってたね……。

「集めるほどにポケモンを操る能力を高めるバッジ。オレも7つまでは手に入れていた。」

ワタルが口を開くと、カイリユーの下からプテラが飛び出し、ワタルがその背中に飛び乗る。

「手にいれた7つは、この島の周囲から天に向かって突き出た石柱の下に隠してある。集めたバッジが共鳴し力が発揮できる位置に、な。炎・岩・草・電・毒・水・念・地。この並び、お前にも覚えがあるのではないか?」

「まさか!?!」

「そう!この島自体がエネルギー増幅装置!さつきお前の胸元を離れて輝きだしたのが最後の1つ。あとはそれを島の中央に配置するだけだよかった。お前たちはオレを追い詰めたつもりだろうが、逆だ。この場所に誘い込んだんだ。」

あー、成る程ね。だからカンナは私をスオウ島に招待するなんて言い出したのか。

単に自分に有利な場所で戦いたいとかじゃなく、そもそもこの場所に来させることが目的だったと。

エネルギー増幅装置はよくわかんないけど。

「そして、立ち昇ったエネルギーを求めてやってくる巨大なポケモン。あいつを操り、ポケモンを人間から解放する！」

立ち昇った光の先には、大きな鳥のようなポケモン。

・・・ブルーが四天王に関わってたのはこれのせいか。こいつが自分を連れ去ったポケモンかもしれないから。

でも・・・。

ブルーを連れていったのはこいつじゃない。

思わず右手をぎゅつと握ってしまい、痛みでハツとする。

「いたた・・・。でも、あの時のポケモンじゃないってことは、ワタルは仮面の男じゃないってことかな。」

小さく呟きながら、考えをまとめる。

とりあえず、別人と考えてよさそう・・・かな？

「まったく・・・。とんでもない仕掛けを用意してたもんだ。マシロ、借りの分は働いた。後は任せたぞ。」

そう言うやいなや、グリーンバッジを放ってサカキはきびすを返して走り去っていく。

「え？おじさん!？」

「いやいや、帰るの早くない?」

すぐに姿は見えなくなる。逃げるの早すぎない?

あれたけ逃げ足が早いんだから、そりゃ捕まらないよね。

「さあ、行くぞプテラ。あと、動けるのはハクリューとギャラドスだけか・・・。まあいい。ついてこい！」

ワタルは、ハクリューとギャラドスを連れて上に飛んで行く。

あれ、カイリューの下敷きになったんじゃないやなくて、カイリューが庇ってたのか。

「あーワタルが行っちゃうー！」

イエローが上空に飛んで行くワタルを見つめる。

そういや、イエロー飛べないって言ってたっけ。

うーん、どうしよう。ワタルもだけど、サカキも放っておけないし・・・。

「イエロー、ワタルのこと任せてもいいかな？」

「え？ボクに・・・ですか？」

「そう。ワタルの手持ちは半壊してるし、あれならイエローにも勝機はあると思うんだ。」

「マシロさんは、どうするんですか？」

「私はサカキを追いかけるよ。さつき聞いたと思うけど、ロケット団のボスだからね。流星に放置はしたくないし。」

「でも、ボクは飛ばませんよ？」

「それは大丈夫。きらら、ミスタ。」

『はい。』

ミスタをボールから出して、きららを呼ぶ。

「この子達をイエローに預けるから。だから、ワタルのこと任せたよ？」

少しだけ迷ったような表情をするが、それも一瞬。

「ハイ！わかりました！」

覚悟を決めた表情に、元気な返事。

うん。ワタルのことはイエローに任せても大丈夫そう。

「きらら、ミスタ。イエローのことよろしくね。」

「ーーー」

『まかせてー！』

返事を聞いて、ミスタの背にイエローが乗る。

ふと、イエローの右手にギプスが巻かれているのに気付く。

「ちよつと、じつとしてて。」

「え？」

イエローの右手に左手をかざすと、淡い光がこぼれる。そして少しすると光が消える。

ワタルと戦うんだから、イエローには万全の状態で挑んでもらわないとね。ケガにつけこまれて負けました、なんて目も当てられないし。

・・・きららが心配そうな表情をしてるけど、気付かないふりをしておこう。

「これで大丈夫かな。」

「すごい・・・！ボクはポケモンのケガしか治せないのに！」

「え？イエローもポケモンのケガを治せるの？」

「ハイ！人間のケガは治せないんですけど・・・。」

そう言うてあははー、と笑う。

「そっか。まあ、私もこの能力は多用できないんだけどね。それでも、女の子のケガは早めに治したほうがいいでしょ？」

「ありがとうございます！・・・気づいてたんですか？」

何故か恥ずかしそうに麦わら帽子を押さえる。多分、仕草とかで同じ女の子なら気付くんじやないかな？

「うん。まあ、隠してたっばいから触れないようにはしてたけどね。それじゃ、ワタルのことよろしく！」

「ハイ！うわああああ・・・。」

叫び声と共に飛び去っていくミスタときらら。

私も最初はあるな感じだったなあ・・・。

しみじみと思いつつも、意識を切り替える。

「よし、私達はサカキを追うよ！かぶちー、グロウ。よろしくね。」

「チツク！」

「グオウ！」

返事を聞いて一歩踏み出した瞬間、よろけて転びそうになる。

「おっとと・・・。」

イエローを治したからかな？

体に力が入らないや。それに、腕の痛みも増してる気がする。

「でも、後少しだからね。もう少しだけ頑張ろう。」

でも、歩くのはしんどいや。グロウ、背中貸してくれる？

### 37話

マシロさんに託されたミスタに乗って、ワタルの後を追う。後ろにはもう1体、マシロさんが託していったきさららが飛んでいる。

クチバでは戦力外って言われたようなものだったけど、今回はミスタときさららを置いて行ってまで任されたんだ。絶対にワタルを止めないと。

でも、マシロさんは大丈夫なんだろうか・・・？

「いや、他人の心配をしている余裕はないか。ボクはワタルに集中しないと。」

ワタルの背中が見える。

そして、そのままワタルの横にミスタときさららと共に躍り出た。

「何をしに来た！」

飛び出したボク達にプテラがはいこうせんを放つ。

曲がることもせずにつますぐ迫ってくるはいこうせんを、ピーすけを繰り出して受け止める。

マシロさんに託されたんだ。

逃げることも、避けることもしない・・・。

全部正面から受け止める！

はいこうせんを受け止めた瞬間、ピーすけの姿を光が包み込む。

そして、はいこうせんを受け止めた際の衝撃と閃光が収まったとき、そこにはトランセルに進化したピーすけの姿があった。

「キャンセルボタンはもう押せない。・・・いや、キャンセルボタンはもう押さない！」

ワタルを止める為に、マシロさんはボクを信じてミスタときさららを託していった。

ここでワタルを止められないと、人類が減ぶ。絶対に負けられない。い。

「ピカ。ラツちゃん。オムすけ。ドドすけ。ピーすけ。ゴロすけ。きつと、人とポケモンは共存できる。ボクはそれを証明したい！みんな。」

な・・・力を貸して！」

声を上げ、みんなをボールから繰り出すとみんなを光が包む。光が消えると、みんなの姿が変わっていた。

オムナイトのオムすけは、オムスターに。

ドードーのドドすけは、ドードリオに。

ゴローンのゴロすけは、ゴローニヤに。

トランセルのピーすけは、バタフリーに。

みんなが、ボクの気持ちに答えてくれた！

「一斉進化に、2段階連続進化だと・・・？」

「行くよ、みんな！」

バタフリーに抱えてもらい、ボクは飛び上がる。連れてきてくれてありがとう、ミスタ。

「人間はポケモンの敵だ！やつらを排除するために、幻のポケモンを手に入れる！」

「違う！人間はポケモンの味方だ！ボクはみんなの世界を守る！」

ワタルのハクリューに対して、オムすけ、ゴロすけが対峙し、ギャラドスにはラツちゃんドドすけが突撃する。

そしてボクとピーすけとピカが、ワタルとプテラに対峙する。

「ちようおんぱ！」

「サイケこうせん！」

互いの技がぶつかり合い、衝撃と共に弾かれる。

「くっ！」

「ちっ！」

互いに距離を取りながら体勢を整える。

「ハクリューもギャラドスも動けないか・・・。なら、トレーナーの貴様からだ！はかいこうせん！」

「10万ボルト！」

プテラのはかいこうせんを相殺しようとするが、ピカの10万ボルトを突き破るはかいこうせん。

「ツツ！やつぱり・・・強い！」

はかいこうせんの余波でバランスを崩す。そこに高速で接近する

ワタルとプテラ。

「遠距離では戦えても、空中での接近戦ならフィジカルの差は埋められまい！」

「まずいつーピカー！」

急いでピカが電気を溜めるが、ワタルの方が速い！

「くっ！」

思わず目を閉じて衝撃に供える。

キインと甲高い音が響く。が、衝撃は一向にやってこない。

恐る恐る目を開くと、プテラの翼を体で受け止めるミスタの姿。

「ちっ！」

「ありがとう、ミスター・ピカー！」

「ピ！」

ミスタが受け止めたことで動きを止めたワタルとプテラに10万ボルトを放つ。

「ぐあっ！」

苦しそうな声を上げて、プテラとワタルは距離をとる。

それを見ると、ミスタはそのまま後ろに下がってしまった。

「え？」

すれ違う際に、聞こえたのはミスタの声・・・かな？

(これはお前たちの戦いだ。決着は自身の手でつけろ。)

守ってはくれるけど、加勢はしないってこと・・・なのかな？

そして、ミスタの気持ちと同時に、ピカの記憶も流れ込んでくる。

ピカの思い出せなかった部分の記憶が、戦いの中で戻ってきているみたいだ。

その記憶の中に、発生したエネルギーに対する対抗策があった。

発生した以上、止めることはできない。できるのは、それ以上のエネルギーで吹き飛ばす事だけ。

「だったら・・・！」

ボクは、右手のギプスの糸をほどき地上に垂らす。これに気づいた誰かが、少しでも手を貸してくれるように。

「みんな！ありったけのエネルギーをピカに集めるよ！」



ボクが声をあげると、みんなが集まってくる。

「させると思っているのか？ 来い！ ハクリュー、ギャラドス！」

みんなが戻ってきた以上、ワタルの元にハクリューとギャラドスが戻る。そして。

「はかいこうせんー！」

3体分のはかいこうせんが放たれる。

くそっ。これじゃ、エネルギーが集められない……！

「ピカーーーーえっ？」

その瞬間、きららがボク達の前に飛び出し一瞬だけ振り向いて、ウインクをする。

(ここは、引き受けるよ。)

きららの声が聞こえた瞬間、きららから極大の閃光が放たれた。

「すごい……！これなら！」

閃光ははかいこうせんを押し返し、そのままワタルを飲み込んだ。

「ぐおおおおお!!!」

ワタルの叫び声が響く中、糸にそって下から大量のエネルギーが送られてくる。

「これは、レッドさん達のー！」

発生したエネルギーを吹き飛ばすのは、ワタルが動けない今しかないかな  
い！

「やるよ。ピカ！」

「ピ！」

レッドさん達のエネルギーとボク達のエネルギーをピカに集める。  
そして、それを放とうとした瞬間、きららからもエネルギーが送られてくる。

「え？これ、きららのエネルギーだけでレッドさんとボク達の10倍  
ぐらいあるんじゃない？」

きららから送られてくるエネルギーに驚く。

でも、これ程のエネルギーなら発生したエネルギーだって吹き飛ばせる！

「1000万ボルトオオオオ!!」

目を開いていられない程の7色の閃光が周りを照らす。

ここまで・・・か。

と言う眩きが聞こえた気がしたけど、それと同時にボクの意識も薄れていった。

—————

イエローを見送った後、グロウに乗ってサカキの後を追う。隣にはかぷちーが乗っているからか、スピードは抑え気味。

多分、グロウよりミスタのほうが移動速度は早そう。その分、人は沢山乗せられそうだけど、今の所そんな予定はないかな。

「こつちに逃げてったと思うんだけどなあ。グロウ、もう少し早くてもいいんだよ?」

私が声をかけても、スピードを上げることはなかった。きっと、私の体調を気にしてるんだと思う。

実際、体調はすこぶる悪い。歩くのはしんどいからグロウに乗せてもらってるし。右腕は痛いし。

それでも、サカキを放っておくのも嫌だしね。

「見えた!」

考えながら追いかけていると、サカキの背中が見える。

どうやら、向こうも気づいた様でその場で振り返る。

「仮は返したはずだが?」

「次はサカキだって言ったよね?」

「フツ。期待はしていない、とも言ったがな。」

サカキと対峙して、グロウから降りる。

おっとっと。

バランスを崩しそうになりながら、地面に足をつける。

「フム。きつきと比べて、ひどく調子が悪そうだな?」

「サカキに心配されるほどじゃないよ。」

その時、スオウ島の上から轟音が鳴り響く。

「上は始まったようだが、放っておいて良かったのか?」

「上は任せてきたからね。きららとミスタがついてるし、私がいなくても大丈夫だよ。」

「主力もなしに、オレと戦おうと言うのか?」

「サカキだって、ワタルと戦ってるんだからトントンでしょ?」

まあ、主力がないのも事実だし体調も良くないけど、サカキだってワタルと一戦交えた後なんだから消耗してるはず。

「フハハハハハハ!面白い。だが、主力もなしに勝てると思わないことだ!ニドキング!」

「確かに。主力はいないけど、他の子が弱いつて訳じゃないからね。グロウ!」

「ほのおのパンチ!」

「コメットパンチ!」

サカキの繰り出したニドキングとグロウの拳がぶつかり合い、ギリギリと拮抗した後、互いに弾かれる。

「成る程。パワーは十分、と言うわけか。前は見なかった顔だが、よく鍛えられている。」

「そりやどうも。」

ロケット団のボスに誉められても、あまり嬉しくはない。

「グロウ!」

声に合わせてニドキングとの距離をバレットパンチで詰める。

そして、そのままニドキングの胸を穿つ。

「ほう、早いな。だが・・・。」

バレットパンチを受けたニドキングは、衝撃で少しだけ後ろに下がったが、グロウの拳を体で受け止めた。そして、ニヤリと笑うと。

「今度はこっちの番だ。ニドキング!」

「・・・ッ!てっぺき!」

胸に拳を突き出した状態のグロウの上から炎を纏った拳が振り下ろされ、地面に叩きつけられる。

ドガアンという音と共に舞い上がる砂ぼこり。

「これで、決着か?」

「それは・・・どうかな!」

私が答えた瞬間。

グロウは全身を回転させて砂ぼこりを吹き飛ばし、そのままコメツトパンチをニドキングに叩き込んだ。

グロウに吹っ飛ばされたニドキングは、地面に腕と膝を突き立ててバランスを取りながら勢いを殺し、サカキの隣で停止した。が、ダメージは大きそうでその場で片膝をつく。

「ふむ。頑丈なポケモンだな……。」

サカキは驚いた表情で呟く。

「主力がないから勝てない、なんて言わせないよ?」

「どうやら、そのようだ。」

「そう思うなら、大人しく……え?」

大人しくしてくれないかな?と言おうとした瞬間。

スオウ島の上空で7色の閃光が輝き周囲を照らす。

そして、弾けたエネルギーが光になって島の上空から島全体に降り注いだ。

「これは……?」

「弾けたエネルギーを、イエローの力が変化させたか。」

足元を見ると、光が降り注いだ所から花や草が芽吹く。

「これでこの島も、草木に溢れる島になるだろう。そして、どうやら時間切れの様だな。」

「え?」

「ボス!」

「貴様は、マシロ!?!」

島の奥から現れたのはナツメと、金髪の男。イエローの話と容姿からして、マチス……かな?

サカキに援軍ってことだね。

……タイミングの悪い。

「誰だあ、この小さいのは?ボスとやりあおうってんなら、オレが相手になるぜ?」

「ここは任せたぞ、マチス、ナツメ。オレはこのまま修行の旅に出る。今のままでは世界征服なんぞ夢のまた夢だ。」

「はっ！」

「ちよつと！勝手に帰ろうとしないでくれない？」

しかし、サカキは私の言葉には耳を貸さずにニドキングをボールに戻す。そして、そのまま背を向けて歩き出した。

その背中を追いかけようと一歩踏み出した瞬間、私はそこでバランスを崩した。

あ、やば……。そろそろ限界かも……。

倒れる直前にグロウがサツと近づいて支えてくれる。そして、心配そうにグオオと声を出す。

「大丈夫。ありがとね、もう少しだけ頑張るよ。」

「マシロ、腕を治したければシロガネ山に行くといい。おまえらはせいぜい自分のジムでも守ってる。どうせ、しばらくはロケット団も活動できん。……弾けたエネルギーがカントー本土に広がってやがる。あのエネルギーを吹き飛ばすだけの力をつけんとな……。」

振り返らずに言いたいことだけ言って、サカキは歩いて行った。

そして、その背を守るようにマチスとナツメが立ちふさがる。

「そこ、退いてはくれないよね？」

「当然だろ？どこの誰だか知らねえが、ボスに任されたこの場所を退くわけねえだろうが！」

「油断するなよマチス。こいつは、私とキヨウを退けた女だ。」

「ん？ってことは、こいつが2年前に話してたやつか。あの頃はいつ会えるかと楽しみにしてたが、ようやく会えて嬉しいぜ？」

そう言ってマチスはニヤリと笑うと、エレブーを繰り出した。

「エレブー！かみなりパンチ！」

「かぶちー！ほのおのキバ！」

エレブーの拳をかぶちーの顎が受け止め、周りにバチバチと火花が迸る。

そして、そのままエレブーの拳を掴んだまま振り回し、地面に叩きつけた。

あれ、思ったより弱い……。いや、弱ってる？

「ちつ……。四天王との戦いのダメージが残ってるか。」

「1人で突っ込むな。お前も四天王との戦いで消耗してるだろ？フリーデー！」

ナツメの出したフリーデーからサイケこうせんが放たれる。が、かぶちーは飛び退いてかわす。

その時、掴んでいたエレブーを離してしまった為エレブーが自由になり、マチスの元に戻る。

そして、不敵に笑いながらナツメが言う。

「それじゃ、仕切り直しといきましょうか？」

こっちには仕切り直す程の余裕なんてないんだけどなあ……。

グロウに支えられながら、マチスとナツメと対峙する。

四天王との決着をつけるはずなのに、なんでこうなったのかなあ……。

「大分調子が悪そうだが、ボスのことは諦めたらどうだ？」

「ロケット団のボスなんて、放っておいたら何するかわからないのに、放っておくなんてできないでしょ。」

「交渉決裂、だな。エレブー！」

「なら、仕方がないわね。フリーデイン！」

「10万ボルト！」

「サイコキネシス！」

エレブーとフリーデインから、電撃と衝撃波がかぶちーに迫る。

「グロウ、お願い！」

グロウは軽く頷くと、かぶちーの前におどりでる。

かぶちーはステップを刻みながらグロウとすれ違い、その後ろにまわる。

「ひかりのかべ！」

そして、そのままエレブーとフリーデインの攻撃を受け止める。

グググ、と少しずつグロウの体が後退し、ひかりのかべにヒビが入る。

「やるじゃねえか。だったら……。エレブー、かみなりパンチだ！」

10万ボルトを中断し、サイコキネシスを受けて動けないグロウに飛びかかってくる。

そして、グロウに拳を叩きつけようとした瞬間、グロウとエレブーの間に割り込むかぶちー。

「ふいうちー！」

グロウの後ろから飛び出したかぶちーがエレブーの前に飛び出し、そのままエレブーをふっ飛ばす。飛んで行ったエレブーはマチスを巻き込んで地面に倒れ込んだ。

「へぶっ。」

エレブーに押しつぶすされて、マチスは変な声を上げる。

「マチス！……タッチ。フーデイン、サイケこうせん！」

潰れたマチスには目もくれずに、かぶちーにサイケこうせんを放つ。

そして、エレブーを吹き飛ばした体勢ではサイケこうせんを避けられずに、弾き飛ばされる。

「かぶちー!?!」

直撃を受けて思わず声を上げるが、空中でくるつと体を回転させて、スタツと私の隣に着地した。

「ちー！」

隣に着地したかぶちーは、私の方を向いて安心させるように鳴く。

よかった、大丈夫そうだね。

「さっきのステップはつるぎのまい、か。そして、ひかりのかべで受け止め、その間にもう一体で反撃する……と。」

「正解。よく見てるね。」

「フ、貴様は油断できんからな。油断すると、そこで寝てるマチスのようになる。」

そう言つてナツメは軽く笑う。

「油断してくれると、楽……なんだけど……な……。」

いつものように、ナツメに軽口を叩こうとしたけど、うまくいかない。

あれ……? 体に力が入らないや。

やっぱり、イエローのケガを治したのはやり過ぎだったかなあ……。そんな事を思いながらぐらりと倒れる私を、誰かがサツと抱き止める。

「なんでマシロがここにいるのよ?」

薄れていく意識の中で、そんな声が聞こえた気がした。

ーーーーブルー視点ーーーー



カンナを倒した後。

「他の戦いも終わったようだな。こちらもカンナを倒した……。これで、我々がこの島に来た目的の大半は達成された。」

「そう、それは朗報ね。」

「そして、私達の戦線協定もここで終わり……。だな。フーデイン！」  
「え……。？ちよつとお！」

お姉さまは、言いたいことを言うと言とレポートで消えていった。  
相変わらず自分勝手ねえ……。

でも、他のチームも四天王を撃破したのは大きいわね。こつちも総力戦だったから、他のチームの援護をする程の余裕は残ってないし、連戦なんてもつてのほかだわ。

ふう、と一息ついてふと上を見上げる

すると、洞窟の切れ間から空が見え、そこから大きな鳥ポケモンが見える。

あれ、いつからいたのかしら？

「あれが、四天王の目的のポケモン……。でも、あの時の鳥ポケモンじゃない……。？」

断片的にしか見えないけど、あの時の鳥ポケモンとは違うような気がする。

「つてことは、四天王は仮面の男じゃない……。か。まあ、それならそれでいいわ。とりあえず、他の人と合流しましょう。」

あたしは洞窟を歩き出した。

そして、しばらくするとポケモン凶鑑から聞きなれない音が鳴り出す。

「え？これって……。共鳴音？」

確か、3つの凶鑑が揃ったときで、なおかつ正しい所持者が持っている時に限り発せられるって博士が言ってたっけ。つてことは……。

「レッドもこの島に来てるってことね。方向は……。こつちかしら？」

そのまま共鳴音に導かれるように洞窟を進むと、広場になっている所でレッドとグリーンとバツタリ遭遇した。

「レッド！やっぱり無事だったのね！」

「どうやら、命は拾ったようだな。」

「あはは、お陰さまでね。」

「とにかく、外に出よう。話はそれからだ。」

グリーンの言葉で、あたし達は洞窟の外に向かった。

でも、なんでレッドは洞窟の中で自転車に乗ってるのかしら？ 走りにくいと思うんだけど……。

そんな事を思いながら、洞窟の外に出る。

「うわ、まぶし……。夜が明けちゃってるじゃないのよ、もー。」

手で影を作りながら空を見上げる。

「カツラさん!？」

そんなあたしの横をレッドが通りすぎていく。駆け出した先には地面に横たわる人影。

カツラさんってことは、イエローと一緒にいった人よね？

「カツラさん、大丈夫?」

「レッドか……? 無事だった様だな。」

「ああ。シバを倒して来たぜ。」

「オレはキクコを。」

「で、あたしはカンナを倒したわよ。ってことは、上で戦ってるのはイエローね。なら、この糸はイエローが垂らしたのかしら?」

上空から垂れ下がっている糸を掴む。

「ワタルはドラゴン使いだ。糸を垂らすことができるポケモンはいないだろうから、おそらくそうだろう。」

「だったら……!」

レッドがフシギバナ。

グリーンはリザードン。

あたしはカメラちゃんを繰り出す。

「糸に沿ってオレ達のエネルギーを送るんだ!」

それぞれが糸に沿ってエネルギーを送り込む。

そして、上に到達したかと思った瞬間。

上空で7色の光が迸り、エネルギーが弾けた。

「今のは・・・？」

「オレが見てくる！」

それを見たレッドがプテラを出すと、上に飛んで行った。

「元気ねえ・・・。ま、上はレッドに任せましょう。グリーンはカツラさんをお願いね。」

「仕方ないな。」

「世話をかける・・・。」

「おい、ブルーも手を貸せ。」

「え？レディーに力仕事をさせるつもり？」

「・・・。」

カツラさんに肩を貸しながら何か言いたげな顔をするグリーン。あたしは気付かないふりをして歩き出す。

上はエネルギーが弾けたと同時に鳥ポケモンは飛んで行った。それに、レッドが向かったから大丈夫でしょう。

「ほら、さっさと帰るわよ！キビキビ歩く！」

「勝手な女だ。」

「・・・済まないな。」

そのまましばらく歩いてみると、なにやら騒がしい音が聞こえてくる。そして、そっちの方向から電気が迸るのが見えた。

「誰かが戦ってる？」

「四天王は全員倒したはずだが・・・。」

「ブルー。」

「分かってるわよ。」

グリーンが肩を貸しているから、自由に動けるのはあたしだけ。つまり、見てこいってこと。

「ちよっと見てくるわ。」

「頼んだ。」

グリーンのを声を聞かぬやいなや、あたしは駆け出した。

四天王は全員倒したのに、誰が戦ってるのよ・・・。今日はもう疲

れたっつのに！

そして、駆け出したあたしの目に飛び込んできたのは、エレブーを吹っ飛ばしたマシロの後ろ姿だった。

「・・・マシロ？」

思わず足を止めたため息をつく。

止めたはずなんだけど、なんでこの島にいるのよ・・・。

と言うか、なんでマチスとナツメの2人と戦ってるの？

いや、考えるのは後でいいか。とりあえず、マシロの所に行きましよう。

そう思ってもう一度駆け出し、マシロの隣に着く瞬間、マシロの体がグラリと傾いた。

あたしはあわててマシロを抱き止めると、色々と言いたいことがあるなかで、とりあえずの疑問を口にした。

「なんでマシロがここにいるのよ？」

### 39話

「ちよつと!?急にどうしたのよ?」

抱き止めたマシロに声をかけるが返事はない。どうやら、意識がないみたい。

・・・と言うか、軽いわね。イエロー並みに小さいし、あたしでも支えられるぐらい。・・・じゃなくて!

「なんでお姉さまとマシロが戦ってるのよ?」

ナツメの方に視線を向ける。

「ボスの命令だ。」

「ボス?命令って、いったいどんな命令よ?」

「マシロの足止めさ。」

足止め?なんでこんなところで・・・。というか、ボスってことは、サカキがここにいたのかしら?

「そう。でも、足止めならもう十分じゃない?そっちのマチスはそこでのびてるし、マシロはこんнадし、こちら辺で引いてくれないかしら?」

「・・・そうだな。時間は稼いだし、お互い四天王との戦いで疲労している。ここいらが潮時か。」

そう言うとなツメはマチスを伴ってレポートで消えていった。

「ふう・・・。大人しく引いてくれて助かったわね。流星にもう戦うのは勘弁してほしいわ・・・ん?」

呟いていたあたしに、見慣れないポケモン達がよってくる。

そして、青い鋼鉄の体をしたポケモンが背中を差し出す。

・・・乗れってこかしら?

「それじゃ、失礼して。・・・あら、ありがとう。」

小さい方が乗るのを手伝ってくれる。

この子達、マシロの手持ちかしら?エレブーを吹っ飛ばしてたし。

・・・そう言えば、この小さい体でエレブーを吹っ飛ばしてたのよね?さすがとしか言えないわ。

そう思いながら鋼鉄のポケモンの背に乗る。

「それじゃ、あたしが来た方に戻ってくれる？他の仲間がいるの。」

「グオオ。」

「ちー！」

ポケモン達が返事をして、小さい方があたしの隣に飛び乗る。

そして、ゆっくりと進み始めた。

グリーン達のところに戻ると、レッドが戻ってきていた。その腕にはイエローを抱えている。そして、その後ろにはきららとミスタ。

一緒にいないと思ったら、イエローに付いてたのね。

「あら、イエローは大丈夫なの？」

「ああ。全力を出しきったんだろう。気を失っているだけだ。マシロはどうしたんだ？」

レッドはあたしの膝の上で寝ているマシロに目を向ける。それと同時にミスタがあたしの後ろに、きららはあたしとマシロの周りをぐるぐると回り、マシロの隣にちよこんと降りる。

「イエローと一緒に・・・何故かナツメとマチスと戦ってたけど。」

「え、なんで？共闘してたんじゃない？」

「詳しくは知らないわ。まあ、この子はこの子でロケット団と何かしらの因縁みたいなのがあるみたいよ。」

「キョウは居なかったのか？」

話の途中でグリーンが口を挟む。

「そう言えば、居なかったわね・・・気になるの？」

「さっきまでチームだったから、気になっただけだ。」

ふーん、こいつも相変わらず素直じゃないわねえ。

「ワタルはイエローが倒したし、これで戦いは終わったな！」

「うむ。」

「ああ。」

「そうね。」

レッドの言葉に、あたし達が頷く。

「それじゃ、帰ろうぜ！」

「————マシロ視点————」

私が目を覚ましたとき、最初に目に入ったのはブルーの顔だった。  
「あれ？ブルーがいる。」

思わず手を伸ばし、その頬を指でつつく。……うん、ぷにぷにで  
柔らかい。

「……なにやってるのよ？」

「あれ……本物？夢とかじゃなくて？」

「夢じゃないし、真正正銘あたしよ。」

「え？どういう状況？」

「四天王は全員倒して、みんな揃って帰る途中よ。」

体を起こして周囲を見渡すと広がるのは青一面の海。どうやら、グ  
ロウの背中に乗っているみたいで、ブルーと私、それにきららとかぷ  
ちー。グロウの後ろにはミスタ。

そして、周囲を見渡したその景色のなかに、ギャラドスに乗るレッ  
ドとイエロー、カツラさんとマサキ。

ゴルダックに乗ったグリーン。

ああ、みんな無事だったんだ。よかったよかった。

気が抜けた私はそのままもう一度倒れ込む。

その時、ふと気づいた。

「あれ？これって膝枕？」

「分かってるなら、どいてくれないかしら？」

「つてことはずつと？」

「そうね。……それで、どいてくれないのかしら？」

「……もうちよつと。」

「ハアア……。」

ブルーの盛大なため息がきこえた。

いやだって、どうせならもつと堪能したいでしょ？

それに、体も重たいし。

別に、言い訳とかじゃなくて本当だし。

『ましろー、やっぱりたおれてるー!』

「あ、きらら。」

『むちやはよくないよー!』

あの時、イエローを治した事を言ってるよね？

「ごめんごめん。でもワタルは倒せだし、終わりよければ全て良しってことだ。」

『むー!』

横になったままきららに手を伸ばし、頭を撫でる。よしよし。

「いつもありがとね。きららがいるから無茶ができるんだよ?」

『えへへ。．．あ!やっぱりむちやしてるんだー!』

「あ、失言だった。」

「何を話してるのかわからないけど、相変わらずね仲良しねえ。」

「まあね、長い付き合いだし。それに、ブルーとも仲良しだよ?」

「．．別にそんな事で張り合いたい訳じゃないわよ。」

そんな事を言って、照れたようにそっぽを向くブルー。かわいい。

「あ、そう言えばナツメとマチスは?」

「あの2人なら、あなたが倒れた後さっさと逃げてったわよ。」

「そっか。」

「なんであの2人と戦ってたの?と言うか、なんでスオウ島に来てるのよ?」

「あ．．．いや、少しでも力になれるかなーって．．．。」

とりあえず、四天王直々に招待されたのは黙っておこう。余計に怒られそうだし。

「ハア．．．まあ、その気持ちはありがたいけど無茶はしないでよ。前にも言ったけど、マシロはあたしにとって切り札なんだから。」

「フへへ．．．。いたたたた!右手は、右手は止めて!」

切り札と言われて思わず笑みがこぼれるが、同時に右手を握られる。

「あら、ごめんなさいね。でも、握られるだけで痛いんでしょ?そんな



状態で戦ったりしないで、休むときは休む！」

「ハイ、ゴメンナサイ。」

悪びれもせずに右手を握ってくるブルーに、涙目になりながら謝る。

やっぱり怒ってたよ。

でも、ブルーだけに任せるなんてできないもん。しょうがないよね。

そう思った瞬間、また右手が握られる。

「痛い痛い！なんで!？」

「なんか、不埒なことを考えてそうだったから。」

「むー。」

相変わらず勘が鋭い。

いや、だからって手を握るのは辞めてほしい。痛いから。

「でも、ありがとね。」

「ぐす……。ん？何が？」

涙目のままブルーに聞き返す。

「あなたの情報がなかったら、あたしの可愛い右手がおさらばするところだったわ。」

「え？それって……。」

「そ。あたしはカンナと戦ったのよ。その際、マシロが言ってた氷の人形のせいで右手が千切れちゃってね。」

「え?？」

思わずブルーの右手を見る。

そこにはちゃんと、ブルーの右手があった。

そんな私の反応を予想してたのか、ブルーは笑いながら続けた。

「フフ、安心しなさい。千切れたのは擬態してたメタちゃんよ。マシロが教えてくれたから、あらかじめ擬態させてたの。だから、あなたのお陰。」

「そっか。役に立ったなら良かったよ。」

それにしても、ブルーの手が千切れかけたのか……。

あの時、カンナだけでも仕留めるべきだった。

「ていつ!」

「いったあぁっ!!」

そんな事を考えると、再三右手を握られる。

「怖い顔をするのはやめなさい。大方、オツキミ山でなんとかしておくべきだった。とか考えてるんでしようけど。」

「ソナナコトナイヨ?」

「目を見て言いなさい……。あのね、マシロが全部背負うことないのよ。今回の件はあたしが頼んだんだから、それに……。」

「それに?」

「マシロは笑ってる方が、似合ってるわよ。」

以外の台詞にブルーの顔をじっと見つめる。

すると、ブルーはぷいっとそっぽを向く。

ん?これはもしかして……。

「あれ、照れてる?」

「……自分でもらしくないと思ってるわよ。」

「そんなことないよ。」

お返しとばかりに、もう一度ブルーの頬を指でつつくと、視線だけをこっちに向ける。

そして、数秒見つめあった後。

「フツツ。」

「あはは。」

どちらともなく笑いあった。

「ま、ひとまず戦いは終わったし、しばらくはゆっくりしましょう。」

「うん。私はもうしばらくブルーの膝を堪能しておくかな。」

そう言うと、ブルーは不敵に笑う。

「あら?あたしの膝は高いわよ?」

「え、買うに決まってるじゃん。」

「即答しないでくれるかしら……?」

と思つたら、呆れ顔になってため息をついた。

## 2. 5章

### 40話

スオウ島の戦いから数日。

私はエリカの所にお邪魔していた。

と言うのも、どうやら四天王の手下がジムのある町を襲ってたみたいでタمامシシティも例に漏れず襲撃されてた。

だから、復興を手伝う為にエリカの所に来たんだけど……。

「なんで部屋に押し込められてるんだらうねえ……。」

「それは、マシロが無茶ばかりしてるからですよ。」

以前お世話になった部屋で、私の正面にいるエリカがそんなことを言う。

「いやいや、復興の手伝いに無茶もなにもないでしょ?」

「はい。ですから、マシロのポケモン達にはすぐく助けられていますよ。でもマシロは怪我をしてて、役に立ちませんよね?」

ぐさつ。

確かに復興を手伝ってるのはきらら達だし、怪我してる私が出来ることなんてないんだけどさ……。

「なんか、言葉にトゲがある気がするんだけど……。」

「大丈夫ですよ?実際にトゲがありますから。」

「なんで!?!」

「それは、ブルーに釘を刺されたからですな。」

「え?ブルーが来てたの?」

「はい。被害の出た町に飛んで、それぞれの被害状況をまとめていました。一番酷いところにレッドとグリーンの2人を派遣してやるわ!って意気込んでましたよ。」

「あはは……。ブルーらしいね。」

どうやら、ブルーはブルーで復興に力を貸してるみたい。

でも、私は何も聞いてないんだけど……。

もしかして、私が怪我した事気にしてるのかなあ・・・？  
そんなに気にすることないんだけど。

「その時に『もしマシロが来たら、怪我してるから無理はさせないで。』って言ってました。」

と思つたら、どうやら先回りされてたらしい。

スオウ島から帰る途中に、エリカの所に行くって言わなければよかったかな？

「それで、この部屋に押し込まれた訳ね。」

「そういうことです。しばらくはここで大人しくしてください。」

「ハア・・・。分かった。しばらくは大人しくしてる。」

「そうしてください。」

諦めてため息をついたときに、前にお世話になった時の事を思い出  
す。

「そういうえば、ヤマブキシティでの戦いの後もこの部屋でお世話になつたっけ。」

「そうですね。あの時もこの部屋でした。」

「思えば、なんやかんやでエリカには色々と助けて貰ってるなあ。」

「私も助けてもらっていますよ？ヤマブキシティでも、理科系の男に  
だまし討ちされたときも。それに、スオウ島の時もです。私達ジム  
リーダーが動けないときに戦ってくれました。」

「理科系の男はともかく、他のは成り行きでそうなたただけなんだけ  
どね。」

「それでも、助けてもらったことには変わりません。」

ニコツと笑いながら、真っ直ぐにこちらを見つめて言い切ってくる  
ので、少し照れくさい。

「あ。それとエリカに聞きたいことがあったんだ。」

そんな心情なのを隠すようにエリカに問いかける。

「なんですか？」

「元ロケット団の幹部だったジムリーダーって捕まらないの？」

「その事ですか・・・。」

「スオウ島でバツタリ会ってから、気になってね。今もジムリーダー

を続けてるの?」

「・・・そうです。ポケモン協会は疑いがあるだけで証拠不十分だ、と。それに、2年前にロケット団が壊滅してからは真面目にジムを守っているし、トキワジムのジムリーダーが行方不明な今、ジムリーダーが不在になる町が増えるのは得策ではない。・・・とのことですよ。」

「えらく保守的な考え方だねえ・・・。そんなだからロケット団の人間がジムリーダーなんかになるんだよ。」

「耳が痛いですね。」

思わず呟いてしまった声に、そつとエリカは顔を伏せた。

「・・・ごめん、言い過ぎた。エリカもジムリーダーだから協会の人間だもんね。」

「いえ、その通りなので・・・。でも、そのお陰でカツラさんもお咎め無しでジムリーダーを続けられている事実もあつて、こちらも強く言えないんです。」

「ああ、そう言えばカツラさんも元ロケット団の研究者だったわけ? もうすっかり正義のジムリーダーって肩書きが似合う人になったよね。」

「ふふ。カツラさんが聞けばきつと喜びます。」

そう言つて、今度は嬉しそうに笑う。

「いやいや、私に言われてもそんなに嬉しくないですよ?」

「いえいえ、そんなことはありませんよ?」

むむむ。

このままだと、いやいやいえいえの応酬になりそう。

そう思った時、エリカのうしろの襖が開いた。

「お邪魔するわよ?」

「あれ?ブルー?」

襖を開けて部屋に入ってきたのはブルー。

なんでここに来たんだろう?復興を手伝ってるんじゃない?・・・?

「ハア~~~~・・・。エリカからマシロが来てるって連絡があつたから飛んできたけど、ホントにいるじゃないの・・・。マシロ、休んでなさいって言ったのになんでここにいるのよ?」

盛大なため息をついたと思っただら何故か怒り出した。

「いやいや、休もうと思つてエリカの所に遊びに来たんだよ。」

「嘘おつしやい。外できらら達が復興を手伝つてるの見たわよ?」

適当についた嘘はすぐにばれて、顔をしかめる。すると、額をでこぴんで弾かれる。痛い。

「そんな顔しないの。別に、怒るために来たんじゃないんだから。スオウ島の帰りにマシロが言つてたシロガネ山について調べてきたわよ?」

「え? ホントに? ありがとう!」

「どうやら、シロガネ山の秘湯には傷ついたポケモンが集まるらしいの。それなら、あなたの怪我も治せると思うわ。・・・それより、こんな話誰から聞いたのよ? あたしは聞いたことなかったわよ?」

「えーっと、それは内緒で。」

情報源がロケット団のボスなんて言つたら止められるかもしれない。そもそも信用できるか怪しいからブルーに調べてもらったんだし。

でも、実際にケガを治すことが出来そうなのは驚きだね。てつきり適当な嘘か毘だとおもつてたよ。・・・まあ、その可能性がきえたわけじゃないんだけど。

「まあ、出どころの話はいいわ。マシロの怪我が治せるかが重要だし。ってことでエリカ?」

「はい。」

「マシロ、借りてくわよ?」

「どうぞ!」

何故だろう、すごくいい笑顔。

「ほら、きらら達を集めてシロガネ山に行くわよ? あそここの山には手強いポケモンが群れを作つてるんだから。」

「え? ブルーも来るの?」

「麓まではね。マシロを見送ったら町にとんぼ返りで復興の手伝い。」

「そつか。そつちの手伝いができなくてごめんね。」

「なんで謝るのよ? あたしは最初から休めつて言つてるでしょ?」

「あはは。そういやそうだっけ？それじゃ、お言葉に甘えて秘湯でゆつくりしてくるよ。」

「そうそう。あなたは大人しくゆつくりしてなさい。」

ブルーと話ながら部屋を出る。

それじゃ、町の復興を手伝ってるきらら達を集めてシロガネ山に向かおうか。

「あ、そうだ。」

私は顔だけを部屋を覗かせる。

「また着物の仕立てお願いね、エリカ。それじゃ、行ってくるね。」

そう言っただけで最後に手を振り、私達はエリカのジムを後にした。

——シロガネ山——

グロウに乗った私達は、セキエイへの道の途中で道を逸れて山道に入る。

「さつきも言ったけど、シロガネ山は手強いポケモンがたくさん生息しているから、普通のトレーナーはほとんど足を踏み入れないの。」

「そんなに危ないの？」

「ええ。普段から人を見慣れてないポケモン達がいる場所だからね、気の短いポケモンが相手なら問答無用で襲いかかってくるわよ？自分の縄張りに！ってね。」

「なるほど。それが群れを作ってるから、さらに危ないと。」

「そうそう。それに、シロガネ山は気温が低いからよく雪が降ってるのよ。怪我をして動けなくなったら、助けが来る前に凍死しちゃうかもしれないしね。」

そう言われると、少し肌寒いような気がする。ポケモンだけじゃなく、環境にも気を付けないといけないのか。

「さて、それじゃあたしはこの辺りで戻りましょうか。」

「分かった。案内ありがとね。」

「いいのよ。それより、早く治しなさいよ？怪我が治ったら、また手伝ってもらうんだから。」

「あはは。うん、その時は任せておいて。」

そしてブルーはカメちゃんを出してその背中に乗ると、じやあね、と手を振って飛んで行った。

「それじゃ、みんなよろしく！」

私はかぷちーとミスタをボールから出しておく。

きららは・・・、まだお休み中かな？

ワタルとの戦いでエネルギーを使いきったみたいで、ボールの中で眠ってる。

「きららがいなくても大丈夫・・・だといけど。」

「ーー」

「分かった、分かった。そんなに急かさないでよ。」

ミスタが待ちきれないとばかりに訴えてくる。

いやまあ、ミスタの性格だとそうなるよね。

「それじゃ、秘湯を探す山登りに出発だね！」



## 41話

シロガネ山を探索して数日。

私は麓の温泉でのんびりくつろいでいた。

「いやー、このポケモンは手強いねえ……。」

『そうなの？よくわかんないや。』

返事をしたきからは、仰向けのまま湯船の上を漂っている。

「そりゃ、きららからすればあんまり変わらないかもしれないけどね。」

シロガネ山に来てから探索を始めてしばらくすると、きららは目を覚ました。

そのまま、きららにも秘湯を探す手伝いをしてもらった結果、意外と早く温泉が湧き出ている場所を見つけたことができた。

できたんだけど……、1ヶ所目はまともに浸かれそうではなかったから、ここは2ヶ所目である。

と言うのも、ミスタが派手に野生のポケモンと戦うから、奥に進むにつれてどんどん野生のポケモンが増えていった結果、山奥で見つけた秘湯では野生のポケモンが集まってきて全く落ち着くことができなかった。

なので結局、そこは諦めて山を降りる途中の麓で見つけた秘湯で一息ついた。腕だけ浸けておくのも体制的にしんどいからそのまま服を脱いで浸かつちやおう。

服を脱いでる間に、何故かミスタとかぷちーとグロウは山を登っていった。

だから、結局一息ついたのは私ときららだけになった。

「しかし秘湯が見つかるやいなや、ミスタは山に行っちゃつうのは分かるんだけど、グロウとかぷちーもなんでついに行っただろう?」「なんかねー、しゅりよくじゃない?っていわれたことを、きにしてるみたいだよー?」

「主力じゃない?…あ、もしかして、サカキに言われたことかな?」

あんな奴の言うことなんか気にしなくていいのに。」

スオウ島で対峙した際、ミスタときららがいない時にそんな事を言われたっけ。

そもそもグロウは、サカキのニドキング倒してたじゃん。

ジムリーダー最強って言われてる相手に勝ち越してるんだから、気にする事ないのに。

「まあ、ミスタに付いていったなら大丈夫でしょ。ミスタならこういう状況は慣れっこだろうし。それにしても、秘湯って言うだけあって浸かつてる間は痛みも痺れもなくなってるや。・・・出たら元通りなんだけども。」

温泉に浸けていた右手を空に掲げる。すると、つけている間になかった痺れのような痛みがじんわりと襲ってくる。私はそれを確認すると、そのまま温泉に戻した。

とりあえず、効果はありそうかな。

そう思った時だった。

「先客・・・？誰かと思えばマシロか。」

「・・・なんでナツメがここに？」

『だれ〜？』

薄い霧の中、先日スオウ島で戦った相手ナツメが姿を現した。

声をかけられるまできららが気づかなかったことは、きららはまだ本調子じゃなさそう。それに他の皆も山に行っちゃってるし。皆がいない時に来るなんて、タイミンクの悪い。

私の考えていることが顔に出ていたのか、ナツメは片手を上げて続けた。

「待て、今は争うつもりはない。私もここで怪我を癒しに来た。」

「怪我？そう言えば、ブルーがナツメと繋がったままカンナと戦ってたって言ってたっけ。」

「そうだ。・・・まあ、あの女はメタモンで擬態した腕だったからなんの怪我もしていないがな。」

そう言うと、さっさと服を脱いで温泉に浸かる。

裸になるってことは、さつき言った通り敵対の意思は無いってこと

でよさそうかな？

「しかし、本当に効果はあるのか？」

「一応、痛みとかは引いてるよ。まあ、浸かっている間は、だけどね。」  
「そうか。なら、気長に療養を続けるさ。サカキ様がいらない以上、ロケット団も実質解散状態で、急ぐ必要は無くなった。」

「そう、サカキはまた行方不明なんだ。私からすれば、2度と出てきてほしくはないんだけど。」

「そんな心配は無用だ。あの方は必ず戻られる。」

と、ナツメは自信満々に言い切った。

でも、私もそんな気がしてるんだよね。なんだかんだしぶとそうだし。

「そ。せっかく証拠不十分で見逃されてるんだから、大人しくしててよね。」

「フ。時が来るまでは大人しくしているさ。・・・まあ、怪我が癒えるまでかなり掛かりそうだな。」

そう言つてナツメは自分の左手をさする。

「早く治したいなら、山を登れば？上にも温泉はあったし。めっちゃ熱かったから、ここよりは効果は高いんじゃないかな？」

「そうなのか。ん？そんな場所があるなら、なんでマシロは行かないんだ？」

「いやいや。熱いし、大量の野生のポケモンに囲まれるしで全く落ちて着かなくて、温泉なんて浸かっていられなかったよ。」

「そ、そうか・・・。お前がそこまで言うんだ。私も止めておこう。」  
おお。ナツメがびびってる。

ロケット団の元幹部のジムリーダーでも、大量の野生のポケモンに囲まれるのは嫌なんだね。

あれ？ジムリーダーと言えば・・・。

「ヤマブキの復興はいいの？」

ジムのある町は全部四天王に襲撃されていたはず。だとすると、ヤマブキシティも襲撃されてたはずなんだけど・・・。

「ヤマブキは、カントーで1番企業が密集している町だ。ジムリー

ダーがいなくても、各企業が復興に力を貸している。問題はない。」  
「そつか。元々ヤマブキシテイに住んでた身としては少し気になつてね。」

「・・・マサラタウン出身ではなかったのか。」

「そうだよ？元々体が弱かったから、療養のためにマサラタウンに引越したんだ。」

「とても体が弱い様には見えんが・・・。」

ナツメは驚いた顔で私を見る。

まあ、ロケット団や四天王と戦ってるのに体が弱いなんて思わないよね。

「今はそうでもないよ。むしろ丈夫なくらい。」

「そうか・・・。」

そう呟くと神妙な顔になり、なんだか微妙な空気になる。

一応、気を使ってるのかな？その空気を払拭するかのようになつ、ナツメは聞いてきた。

「やはり、ヤマブキシテイよりマサラタウンの方が体には良かったのか？」

「まあ、ブルーに会うまではヤマブキよりはましかな？つてぐらいだったね。」

「・・・何か、含みがある言い方だな？ヤマブキで何かあったのか？」

「・・・遊びたい盛りの子供達の中に、毎回遊んでると途中で体調が悪くなる子供が居たら、どんな扱いをされると思う？」

「フン。子供のやることは分からん。」

『お前と遊んでもつままない。』つて言われて、仲間に入れてもらえなくなるんだよ。」

「・・・」

今でもあの頃の事は鮮明に思い出せる。

体調が良いからって近所の子供達と一緒に遊んでも、毎回具合が悪くなつて。

遊んでる途中なのに、私を家まで送ってもらつて。

そんな事が続いた結果、冷たい目でお前と遊んでもつままない、つ

て言われるようになって。

それで私は家から出ることを止めて、体調が良い日でも部屋からあまり出なくなつた。

それを見かねたからか、マサラタウンに引越すことになつたんだよね。

まあ、当時はなんで私の体はこんなに脆いんだろうって恨んだこともあつたけど、ブルーに会つてからそんな事を思う暇はなくなつただよね。

ブルーと会うのは楽しかつたし、その後連れ去られるしで。

「でも、子供の言うことだよ。純粹につまらないからつまらないって言つただけで、そこに悪意なんてなかつたよ。」

「・・・そつちのほうがよくほど残酷じゃないのか？」

「そうかもね・・・。だから、当時は引きこもつてばかりだつたよ。ブルーと出会うまではね。」

「成程な。だからお前はそんな性格なのか。」

「性格？」

ナツメの言葉に首を傾げる。

「達観していて割り切りが早い。それに、排他的で親しい者には優しいがそれ以外には容赦がない。特に、敵対している者に対しては、な。」

「そう?・・・確かに。深く考えたことはなかつたけど、言われてみるとそうかもしれない。」

そう言えば、カツラさんにも似たような事を言われたっけ?

ということは、他の人から見たら結構分かりやすい・・・?

「気を付けよう・・・。」

「分かりやすくして私は嫌いではないがな。」

「ナツメには嫌われる方が良さいんだけど・・・。」

「フツ。そうか。」

嫌な顔をしている私とは対照的に、薄く笑うナツメ。

と言うか、なんでナツメとこんな話をしてるんだろう?

「そんな嫌な顔をするな。さつきも言つたが、ロケット団は解散状態

だ。こちらに敵対の意思は無い。互いに怪我が癒えるまで長い付き合いになりそうなんだ。気を張ってばかりいると疲れるぞ?」

「・・・それもそうだね。とりあえず、ロケット団として動いてないならいつか。」

「・・・そういう所だ。」

・・・こういう所らしい。

さつき気をつけようって言ったそばからこれなんだから、この性格は直りそうもないや。

あー、多分こういう所だ。自覚した。

『むずかしいはなしはよくわかんなくい!』

ずっとナツメと話していたからか、きららに温泉をかけられた。

## 42話

スオウ島の戦いの後。

目的を失ったオレは、カイリユーマに乗ったままあてもなくカントー地方を彷徨っていた。

「悪かったな、カイリユーマ。無理をさせたのに、目的を果たせなかった。」

「クウーン。」

カイリユーマも、力及ばず……といった感じでしょうぼんとしている。そして、クチバ湾の上空を飛んでいる時、この場所で戦った少年達の事を思い出した。

『人とポケモンは共存できる!』

『ボクはそれを証明したい!』

人はポケモンの敵ではない、共存できると言った、黄色い髪の少年。『ポケモンの為に人間を滅ぼすってやつ? そりゃ、善か悪かで言えば悪でしょ。』

『一部の人間がやつてることに、関係のない人間も巻き込んで滅ぼすとか暴論にも程があるでしょ。』

少年とは違い、オレの行いをシンプルに悪だと言い切った白い髪の少女。

思えば、性格も行いも反対のような2人だった。

一方は諭す様に戦い、一方は断罪するかの様にこちらの考えを否定しながら戦っていた。

そう思っていたとき、ふと白い髪の少女が言った事が頭をよぎった。

『そんなにポケモンが大切なら、ポケモンだいすきクラブにでも入ったら?』

「……行ってみるか。」

自分の手で破壊した町に踏み入るなど、本来なら絶対にありえない

ののだが……。目的を失った今宛もなく彷徨うよりかはマシか。  
そう思い、クチバの町に向かうことにした。

町の中にカイリユーに乗ったまま入るとかなり目立つ為、町の外れで一旦カイリユーをボールに戻しておく。

クチバシティに入ると、町の中ではあちこちで人とポケモンが行き交い復興に勤しんでいた。

(ジムリーダーの足止めの為に町を破壊したが、結果的には対した効果はなかったな。)

ジムのある町に手下をけしかけたが、結局スオウ島にはジムリーダーが4人集まり、招いてもいない凶鑑所有者も集合。客観的に見れば過剰戦力にも見える。

(いや、サカキを含めるとジムリーダーは5人か。)  
そんな事を考えながら、慌ただしく動く人達を尻目に町の中を歩く。

案の定というべきか、ポケモンだいすきクラブのクラブハウスにはデカデカト看板が掲げられていた為、あまり苦勞することなく目的の場所に到着した。

「ここか……。」

建物の前で少しだけ立ち止まり看板を見上げると、  
そのままクラブハウスのドアを開く。

「邪魔するぞ。」

そう言っただけ放つだ部屋はシーンと静まり返っており、部屋の中には人っ子一人いなかった。

「フツ、それもそうか。町がめっちゃくちゃなんだ。どいつもこいつも町の復興に忙しくて、こんなところでのんびりしている暇なんて無いか。」

気まぐれで来たものの、無駄足を踏んだと思いそのままUターンしようとしたら、後ろから声をかけられた。

「おや、お客さんですか？ わざわざ足を運んでもらったのに、おもて



なしも出来ずに申し訳ない。ささ、どうぞ中にお入りください。」

声をかけてきたのはスーツにシルクハットのじいさん。

じいさんはそのままオレの背中を押して部屋の中に入り、部屋にある椅子に座らせる。

そして、じいさんも別の椅子に座った。

「申し遅れましたな。わしがこのポケモンだいすきクラブの代表をしております。どうぞ、会長とお呼びください。さて、今日はどのような用件で？」

「・・・特に用件と言うものはない。知り合いに、行ってみたらと、勧められたから来ただけだ。」

つい先日、戦った相手を知り合いと呼んでも良いのかは分からないが、それ以外に表現のしようがなかった。

「なるほど。つまり、用がなくてもここに来るほどのポケモン好きと言う訳ですな。」

「どうしてそうなった・・・。」

オレは頭に手を当ててうなだれるが、このじいさんはこちらの様子を気にすることなく話を続ける。

「もうじき、会員の皆も休憩のために戻ってくるはずですよ。」

そう言ったそばから、クラブハウスの外が騒いくなっていき、老若男女様々な人が部屋に入ってくる。

「お宅のワンリキー、相変わらず大活躍ねえ。」

「いえいえ。そちらのイシツブテの方が活躍しましたよ?」

「私とキャタピーは何も出来なくて、ゴメンナサイねえ。」

といった感じで、自分のポケモンを自慢するかのように話していた。

そして、彼らはこちらに軽く会釈をすると、また自慢話に戻ってしまった。

「・・・いつもこんな感じなのか?」

「そうですね?今は町の復興の手伝いに行っていますが、普段はここに集まって自慢のポケモンの話をしております。」

「・・・ポケモンバトルはしないのか?」

「いやー、恥ずかしながらここに居る者達は皆バトルはしたことがなくてですね。」

「なら、何のためにポケモンと共にいる?」

「・・・はて、そんなこと考えたこともありませんでしたな。」

目の前のじいさんは、オレの質問に心底不思議そうな顔をた後、当然のように答えた。

「人もポケモンも、互いに一緒に居たいから共にいるのでは?確かにわし達は皆バトルはでんし、ポケモンも強くはない。ですが、ポケモンに向ける愛情というものは他の誰にも負けないと思っております。だから、一緒にいるだけのトレーナーであるわし達にも、ポケモンはなつてくれるのです。」

「・・・。」

オレは、今までポケモンと共に居るためには同じ目的が必要だと思っていたが、ここではそんなものは必要ないらしい。

『人とポケモンは共存できる!』

あの時の言葉を体現している事に驚きつつ、この場所を口にしたのはオレの事を悪だと言い切った少女の方だという事に少しだけ笑ってしまった。

「・・・?なにかおかしなことでも言いましたかな?」

「いや、ただの思いだし笑いだ。気にするな。」

「ハア・・・。」

そんな気の抜けた返事を返すじいさんをしり目にオレ立ち上がると、その横を通りすぎてクラブハウスを出る。

じいさんは、そんなオレを追いかけてきた。

「もう行かれるのですか?」

「ああ。オレの計画は早計だったのかもしれない。」

「何の話ですか?」

「こつちの話だ。カイリユ。」

オレは、カイリユをボールから出す。

「ムホー!これは素晴らしいカイリユですな!育てるのが難しいと言うドラゴンタイプのポケモンをここまで育てるとは、もしや凄腕の

「トレーナーですか？」

「そんなことはない。こいつの願いを叶えてやれなかった、駄目なトレーナーさ。」

「……なにかあったのですか？」

「……行くぞ、カイリユー。」

オレはじいさんの質問には答えずにカイリユーに飛び乗ると、そのまま飛び立った。

「人間を滅ぼすのは、気が早かったかもしれない。イエローの言った通り、共存は可能のようだ。」

「クウン？」

カイリユーは、これからどうするのかと聞いてくる。

「そうだな。しばらくはジョウトにでも身を潜めて、世界の行く末を見守ろうと想う。人とポケモンとの、な。」

—————

「フム、行ってしまったのう……。カイリユーなんて、この先会うことはないかもしれないと言うのに全然触れなかったわい……。」

そう言っつてシヨボくれている会長の背中に声がかかった。

「ねえ、おじいちゃん？さっきの人誰？」

「ムム、そう言えば名前を聞いてなかったですな……。ところで、あなたは？」

会長が振り替えると、そこには黒いノースリーブのワンピースを着た女の子が立っていた。

「そう……。あたしのことは気にしないで。ただの通りすがりだから。」

名前を聞いてないと聞くと、短くお礼だけ言って誰かに電話をかけた。始めた。

「遠目にしか見えなかったけど、今のつてワタル……よね？なんでこ

ここにいたのかは知らないけど、飛んで行った方角は西・・・か。」

と、独り言を呟いていると電話が繋がる。

「もしもし、シルバー？・・・いや、何かあった訳じゃないんだけどね。ワタルらしき人物が西の方に飛んで行ったの。それで、先日の鳥ポケモンと一緒にワタルの事も追ってほしいのよ。・・・ありがと、ジヨウトでの調査は頼んだわよ。」

電話を切って肩を落とす。

「・・・ふう。ほんとはマシロに頼みたかったんだけど、四天王との戦いの怪我が治ってないから仕方ないわね。その分、シルバーの負担が増えるけど頑張ってもらいませうか。あたしも復興でしばらくは忙しそうだし。」

「それに、あたしにもやることがあるからね。」

## 43話

――1年後――

腕の療養の為にシロガネ山に通いながら、カントーの復興の手伝いをしていたら、いつの間にか1年が過ぎた。

その間に、レッドはジムリーダー試験に向けて勉強したりトレーニングに励んだり。

グリーンはよく知らないけど、どこかで修行とか言っってレッドに差をつけられないようにトレーニングをしてそう。

ブルーは、ワタルと西に飛んでいったポケモンについて調ながら、なにかやってみたみたい。おかげで、電話だけで顔を合わせる事はなかった。

それに、手伝おうと思っても……。

「大丈夫よ。今回は協力者が他にもいるから。」

ってあまり詳しく教えてくれなかったし。

まあ、そのお陰で右手は完治したかな。

右腕を伸ばして、手を握ったり開いたりする。……うん、問題ないね。

「さて、それじゃ私はどうしようか。カントーの復興も概ね終わったし……。仮面の男を探しにジョウトに向かおうかな。あの後、大型のポケモンも西に飛んで行ったらしいし。」

とりあえず右腕は治ったしね。温泉の横で身だしなみを整える。

「髪よし、着物よし、ミスタよし。」

一通りチェックした後、ミスタが居るかも確認しておく。

ミスタは温泉にプカプカと浮いていた。

シロガネ山にいくと、すぐに野生のポケモンに向かって飛び出して行っちゃうから今日は大人しくしててくれて助かったよ。

もしかしたら、今日でシロガネ山に通うのは最後になるって気づい

てたのかな？

だからか、いつも付いていくかぷちーとグロウもボールの中。

『つぎは、じょうとにいくの？』

「うん。とりあえず、仮面の男と鳥ポケモンを追おうかなって。」

きららは私の護衛ってことで、ボールから出でずつとそばにいてくれた。

まあ、野生のポケモンに襲われることはなかったんだけどね。

・・・多分ミスタが好き勝手に暴れてたからだと思っけど。

ここのポケモン達に警戒されてたんだろうなあ・・・。

「一応、ブルーにも連絡しておこうか。何か他にも変わったことがあるかもしれないし。」

私はポケギアを取り出しブルーに電話をかけると、ブルーはすぐに電話に出た。

『もしもし、マシロ？腕の調子はどう？』

「おかげさまで、もう大丈夫だよ。」

『そう、それはよかったわ。それで、今日も手伝いをしてくれるって話？』

「そうそう。とりあえず、私もジョウトに向かおうかなって。それで一応連絡してみたんだ。」

『完治したなら、もう少しゆっくりしても良いと思うんだけど？』

「1年ぐらいゆっくりしたから大丈夫だよ。」

『そう言いながら、あなた復興の手伝いをしてたじゃないの。』

「・・・なんで知ってるの？」

『あたしの情報網、甘く見ないでよね。』

「ブルーに隠し事はできないなあ・・・。」

ブルーとは通話だけで、顔を合わせてはないはずなんだけどな。

そういえば、ブルーは何してたんだろうか？

レッドとは、たまに会ったけど。

・・・ん？そう言えば。

「ところでレッドって今、元気？」

『最近会ってないけど、殺しても死なないような奴だから、元気なん

じゃないの？急にどうしたの？』

「いや、レッドって氷づけになってたけどなんともないのかなって思ってた。」

『ハア？氷づけってどういうこと？』

「あれ、ブルーは知らなかったっけ？四天王に襲われてたとき、行方不明になってた間、氷づけになってたんだよ。」

『・・・成る程。だからなんともないのかって聞いてきたのね。あいつ、ポケギア持っていないからグリーンにでも聞いてみるわ。マシロと同じ症状がでてるなら、シロガネ山の事も話しておく。』

「ありがと。何ともないならそれで良いんだけどね。それじゃ、私はそろそろ行こうかな。」

そう言っただけで電話を切ろうと思ったら、ブルーから待ったをかけられる。

『あ、ちょっと待って。それならもうひとつ頼まれてもらえる？』

「いいけど、何かあったの？」

『半年ぐらい前から、あたしの協力者と連絡がとれなくなってるね。その協力者も一緒に探してほしいのよ。シルバーって男の子なんだけど。』

ふーん、男の子ね。私の知らない名前が出てきたなあ。

「そのシルバーって子と、どんな関係なの？」

『ただの協力者・・・と言いたい所んだけど、鳥ポケモンに連れ去られた先で出会った子でね。あたしが年上だったから、義理の弟って感じかしら？』

そっか、ブルーと同じ境遇の子なんだ。それなら、連絡が取れなくなる不安にもなるよね。

「オツケー、シルバーね。容姿はどんな感じ？」

『容姿は・・・って、説明するよりは写真を見た方が分かりやすいわよね。後で送るから、確認しておいて。』

「分かった。シルバーの事も、飛び立ったポケモンの事も、仮面の男も全部引くくめて追いかけてみるよ。」

『とりあえず、シルバーの事を最優先で良いわよ。その次に仮面の男

で、鳥ポケモンはついでに、ぐらいの感じでよろしく。』

「うん。結局スオウ島ではあんまり役に立たなかつたしね。次は頑張るよ。」

『そんなことないわよ。だから、あなたまで連絡が取れなくなるなんて事にならないでね。』

「分かった。それじゃね。」

ピツ、と通話を切ると、私の背中に声がかかった。

「行くのか。」

温泉に浸かって背中を向けたまま、ナツメが話しかけてきた。

「うん。腕も治ったし、もうここにいる理由はないしね。ナツメはのんびりしなよ。」

「ああ、そうさせてもらう。まあ、私の方ももうすぐ完治しそうだな。」

そう言うと、一呼吸入れて続ける。

「・・・それよりも。1つだけ忠告だ。」

「忠告？ナツメがそんな事を言うのは珍しいね。」

「なんだかんだ、ここで長い付き合いになったからな。」

「確かにね。・・・それで？」

少し苦笑いしながら、話の続きを促す。

「マシロ。お前のその割りきった性格は、お前が一緒にいる凶鑑所有者や、正義のジムリーダーと言われる者達の側ではない。どちらかと言うと私達、悪の組織と呼ばれる側のスタンスだ。」

「・・・だから？」

「状況次第でこちら側に転がり込んでくるようなことになりかねん。せいぜい、こちら側に来ないように気を付ける事だ。・・・個人的には大歓迎だな。」

ナツメはそれ以上言うことはないと言うように、黙りこんだ。

「・・・そうならないように、気を付けるよ。」

小さく呟くように返す。

若干、自覚はあるしね。もし、さらわれたブルーを助ける為の手段があつたらロケット団にだって入ってただろうし。



『んー、むずかしいはなしはおわった?』

『終わったよ。ミスタも待たせちゃったね。それじゃ、行こうか。』

私はミスタに乗ってシロガネ山を後にすると、ポケギアを取り出した。

『またでんわー?』

「うん。とりあえず、ジョウトの事を聞いておこうと思つてね。」

そう言つて、ポケギアを操作する。

呼び出すのは私の数少ない、友達の1人。

・・・最近はいろんな人と知り合つたけど、友達つて呼べる人は増えてない気がするなあ。

『もしもし、マシロですか?お久しぶりです!』

「あ、ミカン?久しぶり、元気だった?」

『はい。わたしの方は元気ですよ。マシロの方は色々大変だったみたいですね。』

「あー、やっぱりジョウトの方でも有名になつてるんだ・・・。」

『そうですね。町が襲撃されたけど、それを阻止したのが凶鑑所有者の少女少女達だつて。』

ロケット団が関わつてるのは伏せられたつてことかな?

まあ、悪の組織に助けられたつて言うより、オーキド博士に認められた子供達に救われたつて言う方が、世間的にも評判的にも良いか。

・・・そう言えば、博士が新型のポケモン凶鑑を作つたつて言つてたつて。博士にデータ収集を手伝つてくれんか?つて言われたけど、要らないつて突き返したらしよんぼりしてた。

「概ねそんな感じだよ。まあ、復興もほとんど終わつてるからもう心配は要らないかな?」

『概ね、つて言うことはマシロも関わつてたんですね。カントーに戻つたタイミングからして、何かしら関与しているとは思いましたけど。』

「少しだけね。1番頑張つたのは凶鑑所有者だから、ミカンが聞いた話で間違つてないよ。それより、1年ぐらい療養でジョウトに行けなかつたけど、その間に変わったことはない?」

『変わったこと、ですか。それなら1つだけありますけど……。』

お、あるんだ。前みたいに手がかりなしで探す事にならなくてすみそう。

「それ、教えてくれない？」

『その前に、療養って何があつたんですか？』

ミカンのトーンが少しだけ下がる。あ、口が滑った。

「大丈夫大丈夫。もう完治したから。」

『完治ってことは、怪我してたつてことですよ？』

さらに墓穴を掘つたかもしれない。

「あ、えつと、はい。怪我してました。」

『ハア……。だから1年ぐらい連絡がなかつたんですね。』

「ゴメンナサイ。」

『まあ、完治してるならよかったです。元気そうな声を聞いて安心しました。』

電話の向こうでホツとする声が聞こえる。

心配をかけないようにつて連絡しなかつたけど、余計に心配をかけたちゃつたかな。

「それで、今ジョウトに向かつてるんだけどお邪魔してもいいかな？

さつき言つてた変わったことも聞きたいし。」

『うーん……。今回も船ですか？』

「ううん。今回はポケモンに乗つて向かつてるよ。何か問題？」

『いえ。さつき育て屋のおじいちゃんから、わたしが預けてたポケモンが持つてたタマゴがかえつたつて電話があつて。』

「タマゴつて、ポケモンの？」

『はい。かえるまでは本当にポケモンのタマゴかはわからなかつたけど、中からポケモンが出てきたつて。』

「へえ、タマゴからかえつたばかりのポケモンねえ。」

博士が聞いたら飛んでいきそうな話だね。

『それで、今からコガネシティの外れにある育て屋さんの所に行くところだったんで、空路ならちようどよかつたです。そのまま育て屋さんの所で落ち合いませんか？』

どうやら、ミカンの方でも用事があったみたい。アサギまで行くよりも近いし、こちらとしても助かるね。

「いいよ。コガネシティの外れだね。多分、私の方が先に着くと思うから待ってるよ。」

『わかりました。それなら、育て屋さんの方には私から話しておきますね。わたしもすぐに向かいます。』

通話を切ると、すぐにミスタに声をかける。

「アサギシティに行くつもりだったけど、予定変更。コガネシティに向かってくれる？」

「……」

ミスタは聞き慣れた電子音で返事を返す。そして。

『れっつ(っ)……!』

と、きららの掛け声とともに育て屋さんに向かった。

### 3章

#### 44話

コガネシティの外れ。

コガネシティから南に行った場所に目的の場所があった。

ポケモン育て屋さん。

少し大きな小屋に、広い庭を囲む柵。

この柵は預かったポケモンが逃げないようにするためかな？

ミカンの話だと、老夫婦がポケモンを預かってるらしいんだけど。

「お疲れ様、ミスタ。きららも警戒ありがとね。しばらくボールに戻って休んでで。」

乗せてくれたミスタと、移動中に周りを警戒してくれてたきららをボールに戻して、小屋についている呼び鈴を鳴らす。

すると、すぐに中から声が聞こえた。

「はいはい、どちら様ですか？」

そう言って玄関を開けたのは、おじいちゃんだった。この人が育て屋老夫婦のおじいちゃんかな？

「ミカンと待ち合わせしてる者ですけど・・・。」

「おお、君がマシロ君かね。ミカンから話は聞いておるよ。若者にしては珍しく着物を着ているから、すぐに分かるよ。」

「あはは。友達に似合ってるって言われて、ずっと着てるんです。」

「うむうむ。よく似合っておるよ。ささ、もうすぐミカンもここに来ると思うから、中でのんびりしているといい。」

「はい。ありがとうございます。」

おじいちゃんに促されて中に入る。

廊下を歩いていると、奥の方でどつたんばつたんと、ポケモンバトルをやっているかのような騒音が聞こえてくる。

「奥が賑やかだけど、何かしてるの？」

「奥では預かったポケモンが運動をかねてバトルをしておるよ。なに

せ、育て屋さん、じゃからの。・・・もつとも、今は旅の途中の少年が相手をしておるがの。覗いてみるかい？」

「・・・それじゃ、少しだけ。」

正直な所、赤の他人のバトルなんかには全然興味はなかったんだけど、勧められた事を断るのもあれかと思って見に行っただけ。

家の奥では、檻のような部屋のなかでたくさんポケモンと戦っているツンツン頭の少年。そして、その部屋の前で少年に助言をしているおばあちゃん。

あの人が育て屋老夫婦のおばあちゃんの方かな？

「ばあさんや、調子はどうだい？」

「なかなか順調じゃよ。あの小僧なかなか骨があるわい。オーキドが凶鑑を託すだけの素質はありそうじゃな。」

「え、博士が凶鑑を託した少年？」

「おや、その子は？」

聞きなれた単語に思わず口を挟んでしまった。そんな私を見て、おばあちゃんは怪訝な顔をする。

「この子は？」

「ミカンの友達じゃよ。さつき電話があって、ミカンとここで待ち合わせしておるそうじゃ。ばあさんは逃げたポケモンを追いかけたり、少年を良いように使ってたから知らんだろう。」

「ふむふむ、成る程の。」

そう言っって、私の事をじっと見る。そして。

「そっちの少年より、素質はありそうじゃな。」

「何の話？」

「こっちの話じゃよ。良かったら、お主もあの中でトレーニングしていかんか？」

「え、あの中で？」

檻のような部屋の中を見る。

中では少年がヒノアラシ、ヒマナツツ、エイパム、ウソツキー、ニョロモ、もう1体は知らないポケモンを入れ替えながら、大勢のポケモンの相手をしている。あの見ただことないポケモン、ミカンが連れてた

トゲチックと似てるなあ……。

それはともかく、少年の方は苦戦してるけどよく戦ってるね。……でも。

「あれ、弱くない？」

「そうじゃな。だが、あの少年はまだ発展途上じゃ。これからじゃよ。」

「いや、そっちもだけど相手が、だよ。あれなら、シロガネ山の野生のポケモンの方が強かった。」

「……ホッホッ。シロガネ山を戦い抜けるトレーナーなら、こんな所でトレーニングなんてする必要はないの。」

一瞬だけ絶句したが、笑いながら同意するおばあちゃん。

でも、そんな私に檻の中から少年が噛みついてきた。

「オイオイオイオイ、中で聞いてりゃ好き勝手言いやがって。そう言うあんたはどんぐらい戦えるんだよ？」

「まあ、あなたよりは戦えるよ。それなりに修羅場はくぐってきたしね。」

「ほお？言うじゃねえか。だったらその腕、この中で見せてみるよ？」

「嫌だよ、私はミカンと待ち合わせしてるだけだし。何より面倒。」

「なんだとおく!!」

そう言つて檻を掴んでがしと揺らす。

落ち着きのない少年だなあ……。

そう思った瞬間、ヒノアラシの体がぶるぶると震えだし光が包み込んだ。

「うおっ！なんだ!？」

そして、光が収まった時にはヒノアラシがマグマラシに進化していた。

「ふむ、マグマラシに進化したようじゃな。ちゃんと、強くなつとるじゃろ？」

「どこまでもついていきます、おばあさま……だが、そこでふんぞり返ってるだけの、あんたの事は認めねえからな！」

檻の向こうからおばあちゃんの手を握りながら私を睨んでくる。

「いいよ、別に。」

そんな相手に私は手をヒラヒラと振っておく。

「フン！・・・それじゃ、残りも片付けるからな、そこで見てろよ！」

少年は鼻を鳴らすと、残っているポケモンに向かっていった。

それを見送って、おじいちゃんとおばあちゃんに話しかけた。

「さつきオーキドって言ってたけど、オーキド博士の事？2人とも、博士の知り合い？」

「うむ。昔は6人でよく集まって遊んでおった。進む道も決まっておらず、只々気ままに集まって騒いでいたわい。ほれ、これがその頃の写真じゃ。」

そう言うとおじいちゃんは、廊下にあつた写真立てを取って手渡し  
てくる。

受け取って見ると、そこには5人の少年少女が写っていた。

「真ん中がわしで、その横の女性がばあさんじゃよ。で、わしの反対側の男性がオーキドじゃ。」

「確かに、言われてみると面影があるねえ。。。ん、1番端の女の人って、もしかしてキクコ？」

「ほほう、キクコとも知り合いなのかね？」

「えーつと、うん。まあ・・・知り合い、かな？」

おばあちゃんに知り合いかと聞かれて口ごもってしまう。

流石に始末されそうになった仲、とは言えないし。

「それより5人しか写ってないけど、さつき6人って・・・。」

「・・・色々あつての。」

「・・・そつか。」

そう言うって私は写真を返す。

「何も聞かないのかね？」

「色々話したくないこともあるでしょ？私でもあるんだから、私の何倍も生きてる人なら、それこそ山のように。」

私がキクコのことを口ごもったように、おじいちゃんにも言えないことや言いたくないこと、言いにくいこともあるでしょ。

「ホッホッ。年の割には悟ったような事を言いおる。」

なぜか、おばあちゃんには笑われたけど。

そんな時、隅っこに置いてあるラジオから臨時ニュースが流れてきた。

『臨時ニュースです。先程、エンジュシティで震災が発生しました。大規模な地盤沈下が発生した模様です。原因は不明。現在、住民の避難が始まっています。くれぐれも、震災地域へ近づかないようお願いいたします。繰り返します……。』

このニュースを聞いた瞬間、私達の顔色が変わった。

「ねえ、エンジュシティってもしかして……。」

「うむ。ミカンが通りかかっているかもしれない。もしや、巻き込まれているかも……。」

「いや、しかしまだ巻き込まれたと決まった訳じゃ……。」

ちょうどミカンが通りかかっているタイミングで震災が起きたみたい。実際、巻き込まれたかどうかはわからない状況だけど、可能性があるなら行かない理由なんてないよね。

「ちよつと行ってくるよ。もし入れ違いになったら連絡するように言っておいて。」

そう言っただけに出ようとすると、おばあちゃんに呼び止められた。

「待て。あやつも連れていってくれ。何かの役に立つかもしれないし、人手は多い方がいいじゃろ？」

そう言うと、おばあちゃんは檻を開けて中の少年に声をかける。

おばあちゃんが少年を呼ぶ間に、おじいちゃんに声をかけておく。

「おじいちゃん、まだミカンが巻き込まれたって決まった訳じゃないよ。だから、落ち着いて待っててよ。」

「……すまんの。ミカンの事、よろしく頼む。」

「うん、任せておいて。何かあったとしても、私が助けるよ。」

おじいちゃんと話していると、おばあちゃんが部屋のなかから少年を連れてくる。

「ほれ、この女の子じゃ。この子を探して来てほしい。」

「えー、なんでオレが？ さっきまでトレーニングやってて疲れてるんすけど？」



写真を見ながらぼやく少年に、少しだけ苛つく。

何かあつてからじゃ遅いんだけどなあ……。

「ならいいよ。私だけでいくから。」

少し角が立つ言い方になったかもしれないけど、いいよね。

急いでるし、やる気のない奴の事を待つ理由なんてないし。

「ムカツ。いいぜ、行ってやるよ。」

「無理しないでいいよ。あてにしてないから。」

「ゼツテー行くからな！」

何故か対抗心むき出しなんだけど、足を引つ張られないといいなあ……。

「ホッホ。ゴールドの扱い方をわかつとるのお。」

「君、ゴールドって言うの？」

「……おう。」

「私はマシロ。短い付き合いだろうけど、よろしくね。」

「後でゼツテー吠え面かかせてやるからな！」

ゴールドとは気が合わないような気がするよ……。

## 45話

エンジュシテイに向かう間に、ミカンのポケギアに電話をかけたけど繋がらなかった。

こうなると、震災に巻き込まれた可能性が高そう。

そう思っただけでミスタに急いでもらってエンジュに來ただけで、意外なことにゴールドもあまり遅れずにエンジュシテイに到着した。

「こりゃ、派手に崩れてるねえ。」

「ゼエゼエ……。早すぎんだろ……。！ハア……。ハア……。」

「ゴールドも、スケボーにしては早かったね。」

でも、息も絶え絶えでしばらく話すことはできなさそう。

「さて、電話も繋がらないし避難所にも居なかったってことは……。」

「ハア……。ハア……。オレが……。着くまでに……。避難所も……。見えてきたのか……？」

「1番最初に見てきたよ。」

「そう……。かよ……。！」

そんな状態でも返事を返すのは、意地なのか何なのか。

そう思いながら町を見渡していると、震災で傾いた塔の上の階から光が出ていた。

「あの光は……。アカリちゃん？」

「知って……。んのか？」

「うん、デンリユウのアカリちゃん。行ってくるから、ゴールドはそこで待ってなよ。疲れてるでしょ？ミスタ、お願い！」

私はミスタに乗ってスズの塔に向かった。

「オレも行くに……。決まってるんだろ！」

塔の上の方、光が出ている階の外側に着く。

「これだけ壊れてたらいいか。ミスタ、このまま突っ込んで！」

そして、そのまま外から窓を突き破って中に入り廊下を突き進む

と、光を出してるアカリちゃんと、その横で倒れているミカンを見つける。

「ミカン！大丈夫？」

「マシロ・・・？どうしてここに？」

「育て屋さんの所で待ってようと思ってたんだけど、ラジオの臨時ニュースで地盤沈下が起きたって聞いてね。飛んできたよ。」

「ありがとうございます。正直助かりました。」

ミカンに肩を貸して体を起こす。

「急いで来て正解だったね。アカリちゃん、ミカンのこと乗せてくれる？」

そう言うと、アカリちゃんはかがんで背中を差し出してくる。その背中にミカンを乗せる。

「ありがとう。それじゃ、早く出ようか。」

そのまま飛び込んできた廊下を戻ろうと振り返ろうとしたとき、人の気配を感じた。

「誰がいる・・・。逃げ遅れた人かな？」

崩れた廊下の奥に視線を移すと、赤い髪の少年が、ポケモンの彫像の前でなにやらごそごそしている。

「アカリちゃん、ミカンのことよろしく。奥にいる人に、ちよつと声をかけてくるよ。」

「奥にも人が・・・？わかりました。気を付けてくださいね。あちこち、崩れやすくなってるので。」

「わかった。ミスタ、いくよ。」

私はミスタに乗って廊下の奥に向かった。

廊下の奥では、さっきの少年が未だに避難せずに彫像の前でかがんで何かをしていた。

そして、振り返らずに声をかけてきた。

「誰だ？」

「通りすがりの、正義の味方・・・かな？」

「なんだそれは？」

「君が逃げ遅れて困ってるなら、ついでに助けてあげようかと思って

ね。」

「必要ない。」

そう言って振り返りながら立ち上がり、視線が交差する。

目付きが悪いなあ。

「何か言いたそうな顔だな?」

「何でもないよ。それより、何をしてた……の……?」

どうやら、また顔に出てたみたいで思わず話を変えようと彫像を見た瞬間。

一瞬、呼吸が止まった。

そして、ドクンと自分の心臓の音が聞こえた。

「こいつだ。」

「何?」

あの時、ブルーを連れていったポケモン。

彫像のしたには『ホウオウ』と彫られたネームプレート。

「ジョウトのポケモンかあ。そりゃ博士の所で見つからない訳だよ。と言うか、前にジョウトに来たときに、もつと歴史を調べておくべきだったなあ……。」

「何をぶつぶつ言っている?」

隣の少年の声に気づかず、一人で自己嫌悪に陥っているとゴールドが階段を駆け上がった。

「ハア……ハア……。やっと、追いついたぜ!」

「あれ?待っててって言ったのに来たんだ。」

「当たり前だ!オレだけのけ者にされてたまるかよ!」

そう元気に叫ぶゴールドが、赤い髪の少年の方を見た瞬間、また叫んだ。

「シルバー!?!何でここに!?!」

「うるさいのが増えたな。あんたもゴールドと知り合いなのか?」

うんざりした顔でゴールドを見たあと、私の方を見る。

「え、うん。知り合ったのはついさっきだけだね。」

「そうか。友達を選んで方がいいぞ。」

「そうだね。私もそう思う。」

「けんか売ってんのかおまえら?」

意外と気が合いそうだと思いつながら2人と話していると、ゴゴゴゴと地鳴りの音が聞こえてくる。

「話してる暇はなさそうだね。2人とも、早く出るよ。」

と言った瞬間、廊下に土砂が流れ込んできた。

「ミスター!」

私は乗っていたミスタに声をかけると、ミスタは全力で廊下を戻っていく。そして、途中でアカリちゃんとも合流して廊下を駆け抜け、ぶち抜いた窓から飛び降りた。

「わわわわ。」

「グロウ、お願い!」

そのまま地面にぶつかりそうになるアカリちゃんとミカンがグロウが受け止める。

「あ、ありがとう。・・・グロウ、久しぶりですね。」

ミカンは、受け止めたグロウにお礼を良いながら撫でる。グロウも久しぶりにミカンと会えて嬉しそうだ。

「さてと。2人とも、無・・・事・・・?」

振り返りながら声をかけるとそこには誰もおらず、かわりに少しずつ沈んでいく塔の姿があった。

「いやいやいや、何してるのよあの2人は!?!沈んでるんだけど!?!」

思わず叫んでしまった。

どうしよう、残ってる塔の上だけでも吹き飛ばす? いや、掘り起こす方がいいかな?

と言うか、赤い髪の方は必要ないって言ってたじゃん!

「仕方ないか。ミカン、あっちの方に避難所があるからアカリちゃんに連れていってもらって。避難所なら、手当てしてもらえはるはず。」

「マシロはどうするんですか?」

「とりあえず、掘り起こそうかな。」

「え?」

「ま、ミカンは避難所で休んでてよ。アカリちゃん、よろしく!」

「わわ、アカリちゃんもうちよつとゆつくり!」

何か言いたそうなミカンを、アカリちゃんに無理やり連れていってもらう。

「さてと。かぶちーなら掘り起こせるかな？」

かぶちーをボールから出す。

かぶちーは元々洞窟に住んでたから、掘り起こす事はできる・・・はず！

そう思っつかぶちーを出した瞬間、塔から勢いよく水が吹き出し、水と一緒に取り残されていた2人が飛び出してきた。

ゴールドは私の前で尻餅をついたけど、赤い髪の少年は綺麗に着地した。

「お見事。」

思わずぱちぱちと拍手をしてしまう。

「フン・・・さつきの子はっ。」

「先に避難所に行ってもらったよ。なにせ、2人が生き埋めになっちゃったからね。どうしようかと思ったよ。」

「助けは必要ないと言ったはずだ。」

「何言ってやがる。オレのニョたろうが居なかったら脱出できなかっただろうが！」

ゴールドの横にはニョロトノ、赤い髪の少年の横にはアリゲイツがついていた。

ふむふむ。

「地下水を使って、脆くなった地盤ごとぶち抜いた感じかな？地下に沈んだからこそ出来た荒業だね。」

「・・・。」

赤い髪の少年は答えなかったけど、少しだけ驚いた表情をしてたから間違っはなさそうかな。

「ま、無事ならいいや。かぶちー、グロウ、避難所に帰るよ。」

かぶちーはグロウに乗って、私はミスタに乗ったまま避難所に戻ろうとしたとき、周囲を人影に囲まれていることに気づいた。その人影は、揃いも揃って胸にRのインシヤルを入れた黒い服を着ている。

「なんでジョウトにロケット団がいるのかな？」

「町の住人は全員避難したと思ったが、子供が残っていたか。」

そう言ったのは、したつぱとは違う服を着ている男。もう1人違う服の女の人がいるけど、その2人がリーダーかな？

「お前は、アルフやヒワダで暴れてやがった残党ども！」

「よく知っているな。だが、姿を見られたからには。」

「そうね。ただで帰すわけにはいかないわね。」

「いや、出てきたのはそっちでしょ？」

「減らず口を・・・！総員戦闘体勢！」

叫んだ瞬間、周囲から色んな技やポケモンが飛んでくる。

「グロウ！」

グロウが私達の前でひかりのかべを張り攻撃を受け止める。

「かぶちー！」

かぶちーは正面以外の攻撃をはたき落とす。

「ミスター！」

私はグロウの上に飛び移ると、ミスタが飛び上がる。そしてハイドロポンプを撃ちながらその場で回転して、周りのポケモンをなぎ払った。

「うわああー！」

「ぐああー！」

吹き出したポケモンに押し潰されたり、ミスタの流れ弾が当たったロケット団から悲鳴が上がる。

「2人は大丈夫？」

「や、やるじゃねえか・・・。」

「お前よりは腕がたちそうだな。」

「なんだとお!？」

「大丈夫そうだね。」

振り返って声をかけると、けんかを始める2人。けんかするぐらい元気なら大丈夫でしょ。

と言うか仲いいね。とりあえず、私はリーダー格の人に話を聞かせてもらおうかな。

「グロウ、いくよー！」

グロウに声をかけると、リーダーと思わしき2人の前に飛んでいく。後ろからミスタもついてくる。

「わざわざ1人で来たの？それなら、他の奴らは残ったガキの相手をやりな！」

リーダー格の女が部下に指示を出すと、他のメンバーはゴールド達の方に行ってしまった。

相手にする人数が減るのはちょうどいいね、話しやすい。

「あなた達に聞きたいことがあつてね。なんでロケット団がジョウトにいるの？サカキはいないはずでしょ？」

もしサカキが戻ってきてるなら、ナツメがシロガネ山であんなにのんびりしてる訳ないし。

「今は別の首領が率いているのさ。もつとも、あのお方の目的は世界征服などではないがな。」

「・・・ホウオウと関係があるの？」

「やはり、噂通り油断できない相手のようだ。名前は・・・マシロ、だったかな？」

「よく知ってるね。」

「以前、ロケット団相手に色々と横やりを入れていたらしいじゃないか。その残党がいるんだから、あんたの話も聞いているさ。まあ、聞いた話ではもつと質素な格好つて聞いていたけどね。」

残党から私の事を聞いていたみたい。

質素なつてことは、ニビシテイ辺りの事かな。

まあ、そこはどうでもいつか。

「その新首領つて、仮面の男？」

「そこまで知っているのか。いや、そもそもお前の目的があのお方なのか。」

「目的の1つではあるかな。」

「なら、ここで始末しておくか。・・・と言いたところだが、向こうの様子が芳しくない様だ。」

そう言つて、リーダー格の女は私の後ろに目を向ける。

私も後ろをチラツと見ると、ゴールド達の周りに沢山のポケモンが



倒れていた。

あの2人、意外とやるねえ。

「総員、残りの全ポケモンを用意！」

ゴールド達と対峙していたリーダー格の男が、全体に指示を出す。……が。

「待て。ここにいるのはその2人だけじゃない。ここは引くべきだ。ホウオウの本能、我々の仮説が正しければ目的は果たされたも同然。」  
「ぬう……。やむをえん、総員退避！」

男が叫ぶと、したっぱ達が一齐に逃げていく。そして、リーダー格の男が女の隣に駆け寄る。

「カーツ、あの女を足止めするぞ。」

「さつさと逃げた方がいいのでは？」

「悠長に背中を見せられる相手じゃない。ペルシアン！」

「分かった。ヘルガー！」

互いに3体ずつペルシアンとヘルガーを繰り出す。

「ほえる!!」

そして、そのうちの2体ずつがほえるを使う。すると、自分の体が重たくなった。グロウとかぶちーも動きにくそう。

「これは……。！」

「相手の戦意を奪う技。我らが使えば相手の動きさえ封じる。今のうちに引くぞー！」

残ったポケモンにそれぞれがまたがると、踵を返して走り去っていく。

「まだ話は終わって……。！ああ、もう！」

思ったように動けずに悪態をつく。

「ミスター！れいとうビーム！」

ほえるを使って無防備な4体をまとめて氷漬けにすると、ようやく体が自由になる。

ロケット団が逃げた先を見ると、大分背中が小さくなっているがまだ追い付けるかな？

グロウとかぶちーを一旦ボールに戻す。

「グロウとかぶちーは少し休んでね。ミスタ、ずっと動きっぱなしだけど追える？」

「……………」

「ありがとう。」

ゴールド達をチラツと見ると、疲れたのかその場で話し込んでる。

あの様子なら、ほっといてもよさそうだね。

「きららー！」

『はい！』

「ロケット団を追うよ！仮面の男を知ってそうだし、全力で捕まえる！きららの力を貸して！」

『わかった、まかせて！』

「いくよ！きらら、ミスタ！」

ロケット団を追ってミスタは飛び上がった。

## 46話

ロケット団を追いかけると、すぐにその背中が見えた。けど、ミスタのスピードが遅くなって追いつくにはもう少し掛かりそう。

今日はずっと飛んでもらったから、無理させてるね……。

「ごめんね、ミスタ。ずっと飛びっぱなしで疲れてるよね……。もう少しだけ頑張ってくれる?」

声をかけると少しだけスピードが上がる。

ミスタ、ありがとね。

「ちっ!想定より追い付くのが早いね!」

「ヘルガー!マグカルゴ!かえんほうしゃ!」

カーツと呼ばれていた男が、ヘルガーの背中にマグカルゴを出し、マグカルゴかえんほうしゃを放つ。

「きらら!メテオビーム!」

が、かえんほうしゃごとヘルガーとマグカルゴを撃ち抜く。

「なんだと!?!……ちっ、もどれ!」

「このままだと追い付かれる、か。」

「だが、どうする?」

「仕方ない。相手は1人だ、全員でかかればなんとかなるかもしれない。」

「なら、急いで先に行った奴らと合流しよう。」

逃げていく2人はスピードを上げる。

どうやら、先に逃げたしたつぱ達と合流するみたい。

2人だけを相手にする方が楽だけど、合流してくれるならまとめて捕まえることができる。

……いや、あの人数を1人で捕まえるのは手が足りなくなるから2人を相手にするほうがいいか。

でも、ミスタは疲れてるし合流されるまで追いつけない。

そう思った時、ポケギアに連絡が入る。

「こんな時に誰！……ってブルー!？」

私は慌てて電話を取る。

「もしもし、どうしたの?」

『今朝話してた、シルバーの写真送つといたわよ。……と言うか、風の音?なんか賑やかね。』

「ちよつと今、ロケット団を追いかけてね。仮面の男の事知ってそうだから、捕まえてくるよ。」

『仕事が早いわね。それじゃ、取り込み中みたいだから失礼するわ。』

そう言うのと、ブルーは通話を切った。

期待に応えないとね。

そう思いながらポケギアを鞆に戻そうとした時、受け取った写真を開いてしまう。

そこには、さつきまでゴールドの隣にいた赤い髪の少年はが写っていた。

「え?シルバーってさつきの!？」

あー!

そう言えば、塔の中でゴールドが赤い髪の少年の事をシルバーって言ってたっけ!もつと早く気づけばよかった。

私は慌ててブルーに電話をかけ直した。

「もしもしー!」

『なによ、ロケット団を追ってたんじゃないの?』

「そうなんだけど!シルバーって少年、さつきまで一緒にいたの!」

『は……え?なんで?どういう事?』

「どうする?今から引き返せばシルバーの事、捕まえられるかも。でも、ロケット団の事は……。」

『……そうすると、ロケット団の事は諦めるしかないってことね。いやホント、あなた仕事が早すぎるわよ。』

「あはは……。」

『あー……、もうー!』

ブルーは電話口で叫び、少しだけ黙り込む。

「・・・ロケット団は後回し！先にシルバーの事を捕まえて！」

「いいの？」

『いいわよ！仮面の男なんかより、シルバーの方が大事！』

「わかった。引き返すね。」

なんか、最後の方はやけくそ気味に叫んでたけどシルバーの方が大事って言う辺り、やっぱりブルーって優しいね。

私はミスタの背中を軽く叩く。

「ミスタ、引き返して。」

そう言うと、ミスタはそのままUターンする。

そして、飛んできた道を引き返し始めた。

「・・・見逃された？まあいい。何があつたかは知らないけど、このまま逃げるわよ。」

引き返す私の背中に、そんな声が聞こえた。

『悪いわね、せっかく尻尾を掴んでたっていうのに。』

「仕方ない、運が悪かつたんだよ。それに仮面の男より、そのシルバーって子の方が大事なんですよ。」

『そうね。それに、どちらかと言うと運は良かつたのかしら？』

「そうかもね。」

電話越しに笑い合う。

『あたしが動けたら良かつたんだけどね、もう少しかかりそう。』

「かかりそう？」

『こつちの話。完全にあたしの個人的な事だから、気にしないで。』

「そうなの？わかった。」

ブルーと話していると、陥没した町が見えてくる。

そして、崩れた町の中で対峙しているゴールドとシルバーを見つけた。

「いたいた。・・・なんか、バトルしてる？」

『そうなの？じゃあ、そのバトルが終わったら、シルバーとかわつても

「らえる?」

「・・・いや、止めてくるよ。崩落してるのにこれ以上壊されると、余計に復興が大変だし。町の復興って結構疲れるんだよ?」

『知ってるわよ・・・。あたしだって、復興には力を貸してたわけだし。』  
「ま、そんな訳で・・・。ミスタ、割り込むよ。」

終わったら休んでね、ミスタ。

—————

ロケット団の残党が退き、一息つく。

「ふう・・・。引いたか。」

だがあのリーダー格の女の方は、着物の奴をやたら気にしていたな。

確かに、最初ロケット団のポケモンを蹴散らした時は驚いたが・・・。そんな事を考えていると、ゴールドがおもむろにポケモン図鑑を差し出してきた。

「返せよ、オレのニョたろう!通信進化って、要するに交換じゃねーか。どーりで言うことを聞かないはずだぜ。」

「少しは力をつけたようだな。」

ポケモン図鑑を操作してニョロトノを送り返す。

「へへ、育て屋の特訓はダメじゃないぜ。・・・お帰り、ニョたろう。」  
用は済んだ。

そう思い、踵を返したところで、ゴールドが声をかけてくる。

「ところでシルバー。ホウオウってなんなんだ?スズの塔の中の彫像に書いてあった名前、ロケット団の女も口にした。」

「・・・」

「オレは見逃さなかったぜ。ホウオウという言葉に反応していたお前の事を・・・な。おめえ、いったい何者なんだ?」

「・・・」

ゴールドはひたすら疑問を投げ掛けてくるが、話す必要はない。

そのまま黙っていると、応える気がない事が伝わったのかやれやれ

と頭をかく。

「何か目的があるんだろうが、まあいいや。どうせ答えねえだろうし。それよりもだ。お前はいつも目的目的って、任務みたいに戦って……。今まで楽しんでポケモンバトルをやったことがあるのかよ？」

「……何？」

あのポケモンに連れ去られてから、生きていくのに必死でバトルを楽しんだことなんてなかった気がする。

……いや、姉さんといたときはまだ楽しめてはいたか。

「そこでだ。お互いポケモン凶鑑とウツギ博士のポケモンを持つ者同士、フェアな条件だ。邪魔物もいなくなつたし、1度本気で手合わせしてみねえか、シルバー？」

「挑戦状か……。受けてたとう。」

本来なら、受ける必要のないこの勝負。何故だか受けたくなくなつた。こいつに感化されたか……。

「ふっ。まあいいか。」

「ん？なにか言つたか？」

「いや……。それより、ポケモンセンターの跡地に向かうぞ。もしかしたら、非常電源が生きているかもしれない。互いに1戦やりあつた後だ、万全の状態じゃないと悔いが残るだろう？」

「へっ。そうだな。」

そう言つて揃つて歩き出す。

ポケモンセンターは崩れているが、幸運にも非常電源は生きていたから互いのポケモンを回復させることが出来た。

「お前、5匹しか連れてないのかよ？」

「ハンデだ。それじゃ、始めるか。」

「前は邪魔が入つたが、今回は決着をつけようぜ。1体はハンデとか言つたこと後悔させてやるぜ！」

「勝負！」

オレが最初に出したのはアリゲイツ。それに対してゴールドはマグマラシ。

性格的にウツギ博士のポケモンを出すと思つたのが当たつたな。

「ちっ、いきなり不利かよ！ひのこ！」

「一気に決める！みずでっぽう！」

そして、互いに技を出そうとした瞬間。

アリゲイツとマグマラシが、上から降ってきたポケモンに叩き潰された。

「なっ！」

「誰だ！」

ゴールドと同時に上を見上げる。

そこにはスターミーに乗った、さつきロケット団を追いかけたいた、着物の少女の姿があった。

その少女はそのままオレ達の間以降りる。

「横やりを入れちゃってごめんね？でも、これ以上この町を壊すのは止めてくれないな？」

「おいおいおい！急に割り込んで来やがって、何の用だ!？」

「だから、町の中でバトルするのは止めてくれない？あと、ゴールドに用はないよ。用があるのはそっちのシルバーの方。」

「・・・なんだ？」

割り込んで来たと思ったら、オレに用があると言う。

だが、この女とは初対面だし心当たりはない。

と思つたら、ポケギアで誰かと話します。

「・・・うん。じゃあ、わかるね。ちよつとこの電話に出てくれないかな？」

ポケギアで誰かと話すと、こつちにポケギアを差し出してくる。つまり、用があるのはこの女じゃなくてポケギアの向こうの人。

姿を見せずに初対面の人間を向かわせる辺り、信用はできない。

「・・・断る。」

「えー、それは困るんだけど・・・。」

「オレを無視するんじゃないよ！せっかくシルバーとタイマンで勝負してたのに横やり入れやがって。」

「そんなにバトルがしたかったの？一応、謝つたでしょ・・・。」

そう言うと、ポケギアから何か言われたのかぼそぼそとポケギアに



むかって話し出した。

「断られちゃって……。確かに、用心深いところはブルーに似てるかもね。ハア……。どうにか話を聞いてもらうから、ちよつと待ってね。」

ポケギアの相手と話終わると、ため息をつきながらこちらに向き直る。

今、ブルーって言ったか？電話の相手が姉さんなら、この女は……

「あんた、マシロか？」

「あれ？私の事知ってるの？」

「姉さんから聞いている。あんたにずいぶん助けられたってな。」

「そっか。私、ちゃんとブルーの助けになってたんだ。えへへ、良かった。」

さつきまでの表情からうってかわって、急に笑顔になる。

コロコロと表情が変わるやつだ。……本当にこんなやつが姉さんが言うほど強いのか？

「ゴールド、悪いが勝負はお預けだ。」

「はあ!? どういうつもりだよ!?!」

「あんた、かなり強いんだって？オレと勝負しろよ。」

それに、マシロと戦うことで強くなる為の秘訣が分かるかもしれない。

「……終わったら、電話に出てくれる？」

「いいだろう。」

「わかった。それなら、いいよ。」

今度はスツと真剣な顔になる。

本当にコロコロと表情が変わるな。

「だから、オレを無視すんなよ!?!これは、オレとシルバーの真剣勝負なんだぜ？シルバーもなんでこんなやつと!」

「お預けだと言っただ。」

「はあ!?!ぎげんなよ!」

「……ハア。ゴールド、そんなに戦いたいのか？」

「つたりめえだ!」

「それじゃ、2人で来なよ。」

喚くゴールドにため息をつくとき、信じられない言葉を吐いた。

こいつ、さっきの人数を2人で追いついたのを見ていたはずだろう……。

それとも、オレ達の2人でも問題ないとも言うのか？

「ああん？2対1ってことか？」

「そ。それが嫌なら、話が進まないから引っ込んでよ。」

「ちっ、こいつ……！シルバー、オレが入っても構わないか？」

1対1のほうが良かったが、聞いていた通りのマシロの強さを知るには都合がいいか。

「……ああ。だが、油断するなよ。」

「へっ！オレ達が組んで負けるかよ！」

## 47話

いけすかねえなあ。

オレはマシロに対してそう思っていた。

始めて会ったときにはオレの事を弱いといい、エンジユに着いたときは早かったねと皮肉をいわれた。

お前はオレが来るまでに避難所まで見てたクセに、早いなんて嫌味でしかねーよ！

オレとシルバーが塔の中でもたついてた時も、1人だけ素早く脱出してやがった。

多分、腕がたつのは確かなんだろう。

だからって……。

「言われっぱなしでいられるかよー！」

「むきになるな。冷静さを欠いたら、勝負にすらならないぞ？」

「わ、わかってらあ。……でもよ、既に1体ずつ戦闘不能なんだぜ？焦るのも仕方ねえだろ……？」

「……。」

そう言うと、シルバーの奴も黙ってしまった。

しかもあいつのアリゲイツも一撃って、どんな威力だよ。

「良かったら使って。」

そう思っていると、鞆から取り出した何かをこっちに投げてよこす。それを、シルバーと同時にパシツと受けとる。

拳を開くとそこにはげんきのかけらがあった。

「へっ、気のきいたことで。」

「……。」

オレ達がそれをバクたろう達に食べさせると、元気になった様でその場で跳び跳ねる。

「お、やる気十分ってか？」

「いくぞ。」

あいつのアリゲイツも立ち上がった。

「それじゃ、かぶちーとグロウ。よろしくね。」

マシロが、かぶちーと呼ばれた小さいポケモンと、グロウと呼ばれた大きいポケモンが前に出る。

さつき、バクたろうとアリゲイツをポケモンを倒した奴らだ。

「1撃で戦闘不能にされたんだ。気を付けろ。」

「分かってらあ！」

「2人とも、あんまり壊さないでよ？復興するのも大変なんだから。」

あいつはさつきから町の事ばかり言いやがる。オレ達のことは眼中にないってか？

さつきからイラつかせやがるぜ。

「・・・ん？きららはお休みだよ。きららが戦っちゃうと、町が無くなるかもしれないし。・・・加減しても、地盤が脆くなってる町だからね。沈んじやうかもしれないからダーメ。」

あいつ、あのフワフワ浮いてる奴と話てんのか？

「それじゃ、いつでも来なよ。」

話終わったのか、オレ達に声をかける。

「アリゲイツ、きりさく！」

「遅れんなよ！バクたろう、ひのこだ！」

マグマラシが放ったひのこの後ろを、アリゲイツが駆ける。

「グロウ、ひかりのかべ！」

だが、グロウと呼ばれたポケモンが前に飛び出し、ひかりのかべでひのこを受け止める。

ひかりのかべを貼ったそいつに向かって、アリゲイツが腕を振り上げる。

「ふいうちー！」

が、アリゲイツを小さい方のポケモンがぶっ飛ばした。

「マジかよ！あの体でどんなパワーだ。ちっ・・・。バクたろう！」

ぶっ飛ばされたアリゲイツを受け止める為に、バクたろうがアリゲイツの方に飛び上がると、バクたろうを踏み台にしてもう1度小さい方のポケモンに飛びかかった。

「かみつくー！」

「ほのおのきばー!」

今度はアリゲイツの顎とかぶちーと呼ばれたポケモンの大顎がぶつかり合う。・・・が、苦しそうなのはアリゲイツの方だ。

「くっ……。やはり、体力が減っている分、厳しいか。」

「だったら、2人で倒すまでだ! バクたろう、かえんぐるまで援護だ!」

「ツ……。よせ、相手は1体じゃないんだぞ!」

「行かせないよ。コメットパンチ!」

アリゲイツの援護に向かうバクたろうを、大きい方のポケモンが横からぶん殴った。

「バクたろう!?!」

バクたろうは、オレの足元まで吹き飛ばされる。

「かぶちー!」

それと同時に、アリゲイツも小さい方にぶん投げられて、シルバーの足元に叩きつけられた。

「アリゲイツ……。!」

「ちっ! やりやがる……。!」

体力が減ってるとはいえ、ここまで一方的にやられるのかよ!

「さて、まだやる?」

一区切りついたらと言わんばかりに聞いてくる。

まだ勝負は始まったばかりだろうが!

「当たり前だ、まだ手持ちは残ってる。それに、あんたにまだ吠え面かかせてねえからな!」

「次だ。ニユーラ!」

シルバーはニユーラを出して、スピード勝負に出るってところか?

「だったら……。ウーたろう!」

オレはパワーで押すぜ!

「オレが小さい方の相手をする。お前は大きい方をやれ。」

「オーケー。今度は体力が満タンだ。さっきみたいにはいかないぜ!」

ニユーラが小さい方、ウーたろうが大きい方と対峙する。

「ウーたろう、ばくれつパンチ！」

ウソツキーが地面を削りながら、相手に突っ込む。

「グロウ、受け止めるよ。てっぺき！」

そんなウーたろうを、相手は手を交差させて受け止め、地面に足を突き立てて堪える。

「へっ！そんなんで耐えられるかよ、いけえっつ！」

ウーたろうのばくれつパンチは、相手の体を地面を削りながら数メートル後退させる。

その最中、破片が辺りに散らばりそのうちの1つがシルバーの腕につけていたポケギアを弾き飛ばした。

「おい・・・！」

「わりいわりい。」

シルバーに睨まれる。

よくあることだ、気にすんな。

「それに、ウーたろうの攻撃はちやんと当たってるじゃねえか。」

「そうか？オレには効いてない様に見えるが。」

「ないい!?!」

砂ぼこりが晴れると、腕を交差させてばくれつパンチを受けきったポケモンの姿が現れる。

「マジかよー！」

「次はこっちの番だね！コメットパンチ！」

驚いた表情のウソツキーに対して、今度は相手の拳が振り上げられる。

「ものまねだあ！」

とっさにもものまねで、同じ技をそのまま返し、互いの拳がぶつかり合う。

が、その拳は弾かれ、そのままウーたろうの体を撃ち抜き、さつき後退した倍の距離、弾き飛ばした。

「嘘だろお!?!」

同じ技でもここまで一方的に負けるのかよ！

「ちっ！ニューラ、いわくだけー！」

一方、シルバーの方を見ると、ちょこまかと跳び跳ねる相手を捕ま  
えられずに、しびれを切らしたのか、力業で突っ込んでいた。

「かぷちー、ほのおのきばー!」

それを大顎で受け止めると、そのままギリギリと締め付ける。

「ニューラ!? ヤミカラスつばさでうっ!」

その姿を見たシルバーは、ヤミカラスを繰り出し、挟んでいたポケ  
モンを弾き飛ばす。

大顎から解放されたニューラは、地面に着地すると片ひざを着い  
た。

弾き飛ばされた方は、空中で体制を立て直すとスツツと着地した。

「おい、シルバー! 全然歯が立たねえぞ、どうなってんだ!」

「それだけ力の差があるんだろう。・・・聞いていた通りの実力だな。」

「あん? お前、あいつの事知ってんのか?」

「・・・3年前と1年前にカントーで起きた事件を知っているか?」

「カントーつつうと、ロケット団と四天王の事か?」

「そうだ。その事件の解決に一役かかっていたそうさ。」

「にやろう、だからあんなに余裕なのか・・・!」

実力があるのは理解した。だが、オレはまだ諦めねえ!

「1対1を何度やっても無理だ。息を合わせて2対2で戦うしかな  
い。」

「言いたいことは分かるが、出来んのか?」

「勝つためにはやるしかない。行くぞ!」

ウーたろう、バクタろうはやられちゃった。・・・なら!

「ニヨたろう!」

「リングマ! オレが前に出る。お前は後ろから隙をつけ。」

「分かった!」

「かぷちー、グロウ、来るよ!」

リングマの後ろをニヨたろうがついていく。

それに対して、大きいやつが前に出ると、リングマと組み付いた。

「今だ!」

「ニヨたろう、ばくれつパンチ!」

リングマを飛び越え、上からばくれつパンチを叩き込もうとする。「かぷちー!」

マシロが叫ぶと、小さい方がニョたろうに向かって飛び上がる。

「させるか、リングマ! みだれひっかき!」

組み付いていたリングマが飛び上がり、爪と顎が火花を散らす。

ナイス、シルバー!

「頭上から空きだぜ!」

邪魔者がいなくなったニョたろうのばくれつパンチが、青い鋼鉄の体を地面に叩きつけた。

「よっしゃ!」

喜ぶオレに対して、シルバーの顔色は悪い。

「戻れ、リングマ。」

「ん? いい感じなのに戻すのかよ?」

「よく見ろ。」

戻ってきたリングマの爪を見るとボロボロになっていた。思わず相手のポケモンを見るが平然としている。

「今の一瞬でボロボロかよ...」

「ああ。それに、リングマだけじゃない。見ろ。」

シルバーに言われニョたろうを見ると、ばくれつパンチを叩き込んだ手が真っ赤に腫れている。

そして、叩きつけられたはずの相手はその場でムクリと起き上がった。

「まじかよ、あいつらどんな硬さしてやがる。」

「2体とも、鋼のような体だ。生半可な攻撃だと、こっちの首を絞めるだけだ。」

クソつ、オレの残りはエーたろう、キマたろう、トゲたろう。ニョたろうのばくれつパンチが通じなかった以上、あいつらに対抗できるポケモンはいねえ...。

そう思ったとき、地面に落ちたシルバーのポケギアから声が聞こえた。

『シルバー、次の指示だ。いかりの湖に向かえ。詳細は不明だが、そこ



でポケモンに変わった動きがあったらしい。まずは現場を確認しろ、  
以上だ。』

それだけ言うと通話は切れた。

「おい、シルバー。今のは？」

「ゴールド、悪いが共闘はここまでだ。」

「なんだと？」

声の事を考えていると、シルバーはハイパーボールを取り出した。

「いけっ、バンギラス！」

声と共にボールを投げると、現れたのはバンギラス。

「オイオイオイ、お前こんなやつ持ってたのかよ！」

「ああ。だが、レベルが高すぎて、オレの手には負えないようなポケモンだ。だから、共闘は無理だ。」

ボールから出た瞬間、周囲にすなあらしが吹き荒れる。

酷いすなあらしに、思わず顔をしかめる。

「そう言うことかよ……！」

でも、これほどの力を持ったバンギラスだ。マシロの奴だつて！

そう思い、マシロの方を見た瞬間だった。

「町の中で、自分の手に負えない様なポケモンを出さないでくれるかな？」

さつきまでとは違う一段低い声に、全身に鳥肌がたち、冷や汗が流れる。

なんだ？こいつ、急に雰囲気か……。

ちらりとシルバーの方を見ると、シルバーも同じ様子だった。

「きらら、メテオビーム！」

そんな中できららと呼ばれたポケモンが前に飛び出す。そして、はかいこうせんに似た閃光を放つと、すなあらしごとバンギラスを撃ち抜いた。

「なん……だと……。」

「まじ……かよ……。」

直撃を受けたバンギラスはそのまま倒れる。

そして、呆気を取られているオレ達に近づきながら、ポケギアを差

し出す。

「ほら、負けたら出るって約束でしょ？」

「・・・そうだったな。」

「な、オレはまだ戦えらあ！」

「今を見て、まだ勝てるかと本気で思っているのか？」

「ぐっ・・・！」

言葉につまる。

確かに、ああもあっさりバンギラスを倒す事なんてオレにはできない。  
い。

つまり、それだけ実力の差があるってことだ。

・・・悔しいが、認めないといけねえようだ。

そう思っていると、シルバーがポケギアを受け取る。

「もしもし？」

シルバーがポケギアを受け取った瞬間。

『もしもし？・じゃないわよーこのばかシルバーー！』

ポケギアから誰かの叫び声が聞こえた。

## 48話

シルバーにポケギアを渡す。

その後、ポケギアの向こうにいるブルーと話すシルバーを尻目に、私は皆の様子を見る。

「みんな、お疲れ様。かぶちーとグロウは、元気そうだね。まあ、四天王と比べたら大したことないか。・・・バンギラスが出てきたときは驚いたけど。きららも、ありがと。お陰で町に被害が出なかったよ。」

『ふふーん、どんなもんだー!』

そう言っけきららは胸をはった。

「ふふ、ホントにありがとね。」

バンギラスとは、シロガネ山で戦ったことがあるけど、その時は周りが酷いことになったからねえ・・・。暴れる前に止められて良かったよ。

らきららにお礼を言っていると、何故かしおらしくなったゴールドが近づいてきた。

「あんた、強かったんだな。」

「まあ、ゴールド達よりは強いかな。」

「ぐっ・・・。いちいち癩に障るが、言い返せねえ。」

拳を握りしめてプルプルと震えている。

「だから、認めてやるよ。マシロの事を。」

「認めるって、何を?」

「だあああ!お前の方が強いってことだよ!察しろよ!」

妙に素直になってるから、少しだけからかってみるとプイッと顔を背けた。照れてるのかな?

「あはははは。じゃ、改めてよろしくねゴールド?」

「ああ。・・・ったく、調子狂うぜ。生まれて11年、ここまで相性の悪いやつは初めてだぜ・・・。」

「そうなの?なら私は14年だね。」

「年上え!？」

ゴールドが驚いて飛び上がった。

まあ、私の方が身長は小さいしね。多分、イエローと同じぐらいだし。

「……いやまあ、もしかしたらイエローより小さいかもだけど。」

「ごほん……。あー……。えっと……。いろいろすいませんっした。」

そう言つて頭を下げる。

調子に乗りやすいけどその反面、ずいぶん素直なんだなあ。

そう思うとまた笑いがこみ上げる。

「なん……。っ！すか……。?？」

「あははっ！いいよ、いつも通りで。やりにくくて笑いが……。!フフフ……。」

「くそっ……。!マジであんたとは相性が悪そうだよ!!」

お腹を抱えて笑っていると、またしても拗ねたようにそっぽを向いてしまった。

でも仕方ないじゃん。年上だと分かれると、急に態度が変わるんだもん。そりゃ、笑うって。

「でも、マシロのポケモンこの辺りじゃ見かけないやつばかりだな。スターミーは分かるが、他のやつはさっぱりだぜ。」

私の後ろでペタンと仰向けになっているミスタに視線を向け、その後かぶちー達の前に屈む。

「かぶちーもグロウも、ハウエン地方で出会ったから、ジヨウトでは珍しいかも。きからはもつと珍しいみたいだけどね。」

「もつと珍しい?？」

かぶちー達に、ヨツと片手を上げて挨拶をしていたが、珍しいと聞いてこつちに顔を向ける。

「うん。きからは1000年に1度、1週間だけ目覚める、ジラーチつてポケモンなんだって。ちなみに、かぶちーはクチートつて種類のポケモンで、グロウはメタングつて種類のポケモン。」

「はええ〜。1000年つて、途方もねえなあ……。」

「まあ、そうは言っても9年ぐらいずっと一緒にいるんだけど。ね、き  
らら。」

『ねっ!』

「なら、1000年ってのはただの噂とかじゃねえの?…しっかし、  
9年も一緒にいるからか、仲がいいんだな。本当に話してるみたいだ  
ぜ。オレも生まれたときから一緒にだが、何を言ってるかは、何となく  
しか分かんねーからな。」

生まれたときから一緒、か。

私は病気だったから、ポケモンと一緒に暮らすこともできなかった  
けど、生まれたときから一緒っていうのは少しだけ羨ましいね。

ま、代わりといったら変だけど、きららとは実際に話してるんだけ  
ど。

「おい。」

そう思っていると、シルバーの声と同時にポケギアが飛んできた。  
笑いをこらえていたせいで、受け取りそこねたポケギアは私の額に  
コツンとぶつかるど、地面に落ちた。

「いたっ!…ちよつと、投げないでくれる?ブルーから貰ったもの  
なんだから。」

文句を言いながらポケギアを拾う。

画面を見ると、…うん。まだ通話は続いているね。

「話は終わった?」

『ええ。ありがとう、手間かけさせたわね。』

「いいよいいよ。初日から問題が1つ解決したし。」

『…そのせいでロケット団を取り逃がしちゃったけどね。』

「そっちはまた追いかけるよ。」

『悪いわね。…あたしがさっさと克服できたらいいんだけどね。』

「克服?」

『さっき言ったでしょ?こっちの話って。あたしの恥をさらすみたい  
であんまり言いたくなかったんだけどね。』

「言いたくないなら、言わなくていいんじゃないの?」

『マシロ達が頑張ってるのに、あたしの事を話さないのは不公平で

しよ。』

「別に気にしないけどなあ。」

『気にしなさい!』

何故か怒られた。理不尽だ。

『・・・実は、あれから鳥恐怖症を克服しようとしてるんだけど、うまくいなくてね。』

ブルーに言われてポケモンリーグでの出来事を思い出す。

そういやあのとき、鳥ポケモンと対峙しただけで動けなくなってたっけ。確かにそんなんじや、鳥ポケモンを操ろうとしている相手に、表だって立ち向かえないよね。

だから、四天王の時も今回も裏で動いてたんだ。

「鳥ポケモンは、私がおかするよ。だから、無理はしないでよ?」

『それだとマシロが無茶をするでしょ?』

「そんな事ないよ?」

『そんな事あったでしょ。腕の事もう忘れたの?』

「いや、あれは無茶じゃないし。」

『なんですって?』

「なんでもないです・・・。」

何故かまた私が怒られた。理不尽だ。

『そんな訳で、もう少しあなた達で頑張つて。あたしも頑張るから。』  
「のんびりしててよ。ブルーに頑張らせるぐらいなら、私が全部片付けるから。」

『そういうところよ!・・・はあ、マシロはいくら言っても聞かないんだから。』

「聞いている聞いている。」

『いや、聞いてないでしょ・・・。ま、そういう訳だから、仮面の男も含めてシルバーの事も頼むわね。』

「分かった。任せといて。」

こっちでブルーと話している間、ゴールドとシルバーも話をしていた。

「次は決着をつけようぜ。」

「ふん。マシロに借りを返すのが先だ。」

「へっ、そうだな。それより、お前は塔で何をやってたんだ？」

「・・・このエンジユの事件は、ホウオウを呼び込もうとするロケット団の計画の一部だ。スズの塔を破壊することで、ホウオウの帰巢本能に訴えることが出来るか、のな。」

「やつらがやっていたことは分かったが、お前の目的はなんなんだよ？」

「・・・言うなれば、やつらを潰すことだ。それとは別にホウオウには因縁があるがな。その因縁を絶ちきるためなら、オレは手段を選ばない。たとえ、非合法と責められようとな。」

そして、話が終わったと思ったら、シルバーは駆け出して行ってしまった。

私はポケギアの通信を切ると、シルバーの背中を見送る私とゴールド。

「ホウオウに、ロケット団か・・・。相手がなんであれ、一人で戦う必要はねえんじやねえかなあ。マシロはどう思う？」

「それはそうだと思うけど、行っちゃったよ？」

「行き先は多分、いかりの湖だからすぐ追いつける。それより、マシロに頼みがある。」

「ん？」

「マシロも一緒に戦ってくれ！さっきまでさんざん生意気な口を利いて、凶々しいのは百も承知だが、マシロの腕を見込んでの事だ！あいつを、シルバーを一人で戦わせる訳にはいかねえ・・・！」

そう言っつて、綺麗な土下座を披露するゴールド。

「なんでシルバーの為にそこまでするの？」

「・・・うまく言えねえけど、なんかほっとけないんだよな。何故か自分が戦わねえと、つて感じで。多分、今まで他人に頼ることなく生きてきたんじやねえかな・・・？」

確かに、ブルーと同じでホウオウに連れ去られたのなら、生きていくのに苦労したはず。

「それに・・・。さっきあんたがロケット団の連中と話してた時に聞こ

えたんんだ、仮面の男って。」

「・・・!!知ってるの!?!」

「・・・ああ。ウバメの森でやつと戦ったけど、まるで歯が立たなかった。さっきのマシロの時みたいに。悔しいが、今のオレとシルバーじゃあいつには勝てないかもしれない。だけど、マシロの力を借りればきつとあの男にも勝てる!」

ゴールドが歯が立たなかったって事は、仮面の男は結構強いのかも。

さつき戦った感じだと、ゴールド達もそんなに弱くはないし、ロケット団のしたつばは、難なく蹴散らしてたしね。

「とりあえず、立ってよ。・・・私も、シルバーの事はサポートするつもりだったし、そんな事しなくても手を貸すよ。」

「そうか!ありがとな!」

立ち上がると、私の手を取って上下に振り回す。

ゴールドって、良くも悪くも素直で真っ直ぐだなあ・・・。

「落ち着いてよ。」

とりあえず、振り回すのを止めさせる。

「あ、すまねえ。」

「とりあえず、ゴールドはシルバーを追って。」

「マシロは?」

「私達の最初の目的を忘れたの?ミカンが先に避難所に行ってるから、様子を見てくるよ。その後は少しでもエンジュの復興を手伝おうかな。さつき追加で暴れちゃったし。だから、しばらくは合流出来そうにないかな。その間シルバーのことよろしくね。」

「そういやそうだったな。一応、ポケギアの番号を登録して、と。それじゃ、その子によろしく言っといてくれ。」

互いにポケギアの番号を登録すると、シルバーを追ってゴールドも駆け出した。

「待ってるよシルバー。オレ達も一緒にたたかうぜ!」

叫びながら走るゴールドを見送る。

「ふう・・・。なんか、途中から調子が狂わされっぱなしだったなあ。」



バトルに勝って認められたと思ったら、年上だと知って口調がおかしくなるわ、あげくの果てには土下座までされちゃったし。

「ホントに、ゴールドとは相性が悪そうだ。」

『でも、うれしそうだよ?』

でも私の顔は緩んでいたようで、きららに嬉しそうって言われる。

「まあ、悪いことも悪くない・・・かな?」

『んー? わかんない!』

「あはは、わかんないかー。」

『むー!』

きららが頬を膨らませると、抗議するかのよう私の頭の上に乗る。

「それじゃ、ミカンの様子を見に行こうか。」

『わかんない!』

きららの羽衣に背中をばしばしされながら、ミカンのいる避難所に歩き出した。

## 49話

「先日はありがとうございました。」

「もういいって。怪我也大したことなかったんだし。」

「でも、マシロが助けてくれなかったらあのまま生き埋めになっていたかもしれませんし。」

「でも、毎日お礼を言われると流石に疲れるよ。」

「そうですね?・・・そうですね、すいません。」

そう言って苦笑いをするミカン。

そんな顔されると、罪悪感が胸をチクチクと・・・。

そんなつもりで言ったんじゃないかな.. . .

「ふふ、冗談です。でも、ずっとお礼を言われるのも疲れますよね。もう言わないようにします。」

「・・・そうしてくれると助かるよ。」

と思っただけど、ミカンなりの冗談だったみたい。

ホツと胸をなでおろす。

あの事件から数日、私はミカンとエンジユに残って復興の手伝いをしていた。

カントーで復興の手伝いをしていた身としては、この町も放っておけないし。

・・・なんか、最近同じようなことばかりしてるからかな?

お陰で手際はかなりよくなった気がするや。

「それじゃ、スズの塔の復旧を進めましょうか。」

「今更だけど、なんでこの塔の復旧を急いでるの?」

「それは、ハウオウの怒りを鎮めるため、らしいです。」

「スズの塔って、ハウオウと関係があるの?」

「ええ。スズの塔は、ハウオウが降り立つ場所。そして、もう1つの塔と共に残る言い伝え・・・。」

「あー・・・。ミカンがそういう話を知ってたのなら、前回ジョウトに



私は右手だけだったけど、レッドは全身こおりづけだったもんね。そりゃ、体に何かしらの不調が出るよ。

「それで、エンジュの塔の言い伝えについて聞こうと思ってきたんですけど……。ちようど、そちらの方とお話されてたので一緒に聞きたいと思って……。」

そうやってミカンの方を向く。ミカンは話についていけず困った顔をしていた。

「あ、ゴメン。紹介が先だったね。こっちの麦わら帽子の子はイエロー。」

「はじめまして、ボクはイエローと言います。良ければ復興の手伝いをさせてください。」

「ありがとう。わたしはミカン、アサギジムのジムリーダーよ。」

そうやって握手を交わすふたり。

「オレはヒデノリ。で……。エンジュのジムリーダーじゃなくて、アサギのジムリーダー？エンジュのジムリーダーなら、ついでに事件のあった日の事を聞こうと思っただんだがなあ。」

「それなら、わたしが話せるわ。なにせ、その一番酷い時にスズの塔に閉じ込められたんだもの。」

「ええっ!?大丈夫だったんですか?」

「ええ。マシロが助けてくれましたから。……なんでそんな拗ねたような顔をしてるんですか?」

そうやってミカンが私の方を向くと、驚いたような呆れている様な顔でそんな事を言う。

どうやら、顔に出てたらしい。

「いや、なんか私の時は敬語だけど、それ以外だとフランクだなーって。」

「それは、多分アカリちゃんを治してくれたからですかね?自然と敬語になっちゃうんですよ。」

「私もフランクなミカンがいい。」

「ふふ、マシロもそんな顔するのね。分かったわ。わたしもできるだけ敬語にならないように気を付けるね。」

「うんうん。そっちの方が私は好きだなー。」

「マシロって、知り合いと言うか友達に対する距離感が凄く近いよね？」

「そうかな？」

「そうよ。」

「・・・そろそろ話を戻していいか？」

ミカンと話していると、困った顔をした釣り人が話に入ってくる。「ごめんなさい、事件の事と言っても分かっているのはロケット団が起こしたと言う事ぐらいです。なにせ、そのロケット団もすぐに逃げてしまったので。」

「そうか。人災って噂は本当だったのか。」

「それで、言い伝えの方はどんな話なんですか？」

「それは・・・。」

イエローに促されて話始めようとした時だった。

「焼けた塔から火が出たぞー！」

と言う叫び声が聞こえた。

声のした方を見ると、崩れた建物から煙が上がっている。

そして、その建物に向かってたくさんの人がバケツリレーで水を運んでいるが、バケツリレーなんかじゃ間に合わないって！

「イエローー！いくよー！」

「はいー！」

私はミスタに乗って、イエローはピーすけに抱えられて塔の上に飛ぶ。

「ミスター！」

「オムすけー！」

「ハイドロポンプ!!」

そして、上から一気に水をかけて消化していく。

「イエローもすごいですね。」

「釣りの腕はオレが仕込んだんだぜ？」

「あはは・・・。そうなんですネ・・・。」

下ではミカンと何か話してるみたいだけど・・・つと。そろそろ大

丈夫そうかな。

「ありがと、ミスタ。」

「オムすけも、帰っておいで。」

ミスタを撫でながら、オムすけが釣糸を辿って戻るのを見守る。

そして、オムすけがピヨンとイエローの頭の上ののつた瞬間、何か  
がイエローの釣りざおを引っ張った。

「えっ？うわあああ・・・。」

「ちよっ！イエロー!？」

塔の中に引っ張られていくイエローの腕を掴むが、勢いは衰えず私  
はミスタごと塔の中に引き込まれる。

そして、煙の吹き出す塔の中に引き込まれたと思ったら全身を妙な  
感覚が襲い、どこかに着地した。

「いたたた。・・・ここどこ？」

周囲を見渡すと、なんだか景色がうねうねと混じりあっているよく  
分からない空間にいた。

「マシロさん、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。でも、ここは？」

「わかりません・・・。岩にぶつかっただけだと思っただけ岩の中に吸い込まれ  
て、気づいたらこの変な空間の中にいました。」

「そうなんだ・・・。私は煙でよく見えなくてよくわからなかったけど、  
ここは岩の中ってこと？」

「多分・・・。」

イエローは、自信無さげに頷く。

その時イエローの後ろでパリン、と何かが碎けるような音が聞こえ  
た。

「え？」

私はイエローの後ろに目を向けると、そこには大型の四足歩行のポ  
ケモンが3体立っていた。

さっきまではなにもいなかったと思うんだけど・・・。

「礼を言う。お前のお陰で呪縛から逃れ、現実世界への扉が開かれ  
た?？」

イエローがらしくない言葉遣いで喋る。

「・・・それ、そのポケモン達が？」

「はい。」

んー……。呪縛ってことはここに閉じ込められてたってことかな？でも、誰に？

「あつー！」

イエローの声に顔をあげると、さっきのポケモン達が上に開いた穴から外に飛び出していった。

私達もあそこから来たのかな？

「出口はあそこかな。と言うか、今のポケモン早いねえ・・・、つと。ぼさつとしてないで私達も出ようか。」

「あ、はい。そうですね。」

そう言う私達は、このよく分からない空間を抜け出した。

外では、ミカンと釣り人が驚いた表情で待っていてくれた。

「あ、マシロ！無事ですか？」

「うん。大丈夫。ありがとう。」

「イエローも無事のようだな。」

「はい。」

そして、釣り人が岩を叩きながら呟く。

「・・・それにしても、今のポケモンは？岩の中から出てきたと思ったからスゴいスピードで駆け抜けて行ったが・・・。」

「もしかしたら、言い伝えに関係しているかもしれないですね。」

言い伝えというときの話のことかな？

「さっきの話のことですか？」

イエローの言葉に、ミカンは静かに頷く。

「エンジュには昔、東と西2つの塔が建っていたの。そして150年前、突然起こった大火事で焼けてしまったのがこの焼けた塔。その火事で炎に巻き込まれて死んでしまった3体のポケモンがいたらしいの。その時、虹色のポケモンが空より現れ3体のポケモンを蘇らせ

た。」

「つてことは、オレ達の前を駆け抜けていったのがその3体つてことか!？」

「だからさつき、怒ったハウオウ様が帰ってくるって……。」

ん？ハウオウが帰ってくる？仮面の男は今、ジョウトでロケット団の新首領をやっているのに帰ってくるってどういうことだろう？

今はもう仮面の男とハウオウは一緒にいないってこと？

もしそうなら、ハウオウを追っても仮面の男にはたどり着かない……か。なら、ゴールドと一緒に動くのが良さそうだね。

「ありがと、ミカン。ホントはもつと早く聞くべきだったみたいだけどね。」

「役に立てたようで何よりです。……もう行んですか？」

「まだ何も言っていないんだけど、なんでわかるの？」

「そんな顔してる。」

ミカンはフフッと笑いながら答える。

……ポーカーフェイスの練習しとこ。

「イエローが復興を手伝ってくれるみたいだから、私は抜けても大丈夫だと思うし。」

「復興の事は任せて。マシロはマシロのやるべきことをやって。」

「分かった、後は任せたまよ。イエローもまたね。急な話だけど、もう行くよ。」

「ブルーさんのお願いですか？」

「そんなとこ。」

「相変わらずですね。分かりました、また会いましょう。」

イエローもクスツと笑っている。

「まったく、2人して笑って……。」

文句を言いながらも、笑いながらミスタに乗る。

「それじゃー！」

手を振りながら飛び上がる。一旦、ゴールド達と合流しよう。

そう思った瞬間、私のポケギアが鳴った。



## 50話

「まったく、大量のギャラドスに赤いギャラドス。あいつに関わると退屈しねえなあ！」

シルバーを追いかけ、いかりの湖に着いた途端にギャラドスの大量発生に巻き込まれた。

どつやら、電波による強制進化によって発生していたらしい。

その電波のアンテナの役割をしていたのが赤いギャラドスってのには驚いたぜ。

「で、お前何をやってんだ？」

赤いギャラドスを捕獲し一段落ついたと思えば、オレの前でポケギアを操作しているシルバーに声をかける。

「さっきの電波の波形を記録した。こいつを辿って、発信元を突き止めて叩く。」

「おー、成る程。便利なもんだな。しかし、誰がこんなことを・・・。」

「ゴールド、これが最後の忠告だ。今、オレが追っている相手は、ロケット団残党とは比べ物にならない相手だ。好奇心で首を突っ込むな。」

「へっ、やなことだ。」

オレのやることはオレが決める。他人にどうこう言われる筋合いはないぜ！

「口で言ってもわからないなら・・・。」

「お、やるか？前は結局、有耶無耶になっちまったからな。ここで白黒つけても構わないぜ？」

ボールを構えるシルバーに、挑発的な言葉を投げかける。

前はマシロに横槍を入れられたからな、仕切り直しといこうじゃねえか！

そして、互いにボールを投げようとしたときだった。

どこからか、見覚えのある霧が漂ってきた。

「ツツ！この霧は・・・！」

「フツフツフツ。電波が途切れたからと来てみたが、見覚えのある顔ぶれじゃないか。」

「やっぱり、お前かよ・・・！」

姿を表したのは、前回ウバメの森で出会った仮面の男。・・・前は歯がたたなかつたが、今ならわかるぜ。

多分、マシロのやつと同じぐらい強い。

その時、オレのポケギアにウツギ博士から連絡が入る。オレは仮面の男から視線を動かさずに、指先だけでポケギアに出る。

『やつと繋がった！ゴールドくん、君が手に入れた金属の成分が分かったよ！あれは、ジムリーダーに配られたジムバツジの成分だった。それも、トレーナーに渡すレプリカじゃなくて、オリジナルのものだ。つまり、仮面の男はジムリーダーである可能性がある。だからゴールドくん、今後出会うことがあっても関わらないように！わかつ・・・。』

話している途中だったが、通話を切る。これ以上聞いている余裕はなさそうだ。

あと、その忠告はもう少し早く聞きたかつたぜ、ウツギ博士。

通話を切ると同時に、ポケギアを操作しておく。

「さて、あんたがジムリーダーかどうかはこの際、置いておくとしてだ。そんな仮面を被ってんだ、どうせ答えねえだろ？そんなことよ、あんたの目的はなんだ？ロケット団の残党を集めたり、このいかりの湖でコイキングを強制進化させたりしやがって。」

「ロケット団は優秀な組織だった。それなのに、何故壊滅したのか・・・。それは、コマ不足だったからだ。計画が大きければ大きいほど、強力なコマが大量に必要なのだ！」

「だから無理矢理進化させてたつてののか。」

「こいつの自分勝手な話には反吐が出るぜ。」

「人だろうとポケモンだろうと、小さい頃から教え込めば強力なコマになり得るのだよ。なあ、シルバー？」

「ニューラー！」

シルバーは言葉を遮るようにニューラを繰り出したが、仮面の男は足元にいたデリバードと共に飛び退き、ニューラの爪は地面を抉るだけに終わる。

「どうしたんだよシルバー、らしくねえじゃん。・あいつ、お前の名前を知ってるってことは知り合いか？」

「お前には関係ない。」

「そうだな。9年前、各地からさらっていた子供の1人なんて、そのガキには関係ない話だな。」

「んだと？」

コイキングだけじゃなく、9年前から子どもをさらってただつて？  
ろくでもねえ野郎だぜ。

「おい、シルバー。お前が色々やってたのは、こいつを倒すためか？」  
「・・・そうだ。」

「成程な。そう言うことならこいつの退治、手伝わせろ。こいつはポケモンや人を道具としてしか見ちゃいねえ。人として、トレーナーとしても許せねえぜ。」

「・・・勝手にしろ。」

「行くぜ、バクたろう！」

シルバーと2人で仮面の男に立ち向かう。

この間のマシロとの戦いを思い出すぜ。

「フツ、小賢しい。いけっ！」

森の中からデルビル、アリアドスが飛び出してくる。

「ゴールド！」

「おうよ！」

シルバーと短く声を交わす。そして・・・。

「いわくだけー！」

「かえんぐるまー！」

バクたろうがアリアドスに、ニューラがデルビルに、それぞれ技を叩き込む。

「マシロと戦ったときより、息があつてんじゃねーか？」

「フツ。そうかもな。」

「あん時の電話のせいかな？」

「……。」

あ、黙り込んだってことは凶星だなこりゃ。

「ほう、前に戦ったときよりは強くなっているようだな。」

自身の足元に倒れているデルビルとアリアドスを見ながら話す。

「つたりめーだ。オレだつて遊んでたわけじゃねーよ！」

「そうか。だが、シルバー。一緒に逃げた長い髪の娘はどうした？」

「……！」

「お前が慕っていたあの娘だよ。一緒にいないということは、逃げる途中で野垂れ死んだか？」

「ニューラ、でんこうせっか！」

仮面の男の台詞に苛立ったのか、もう1度ニューラが仮面の男に迫る。が、デリバードの氷の爪で弾かれる。

「いわくだけー！」

弾かれた腕をそのままデリバードに叩きつけるが、デリバードはニューラの攻撃を避けると、仮面の男を連れて空に飛び立った。

「ちつ、空に逃げたか。」

「おい、シルバー。落ち着けよー！」

「邪魔だ、離せ！」

落ち着かせようとシルバーの肩を掴むが、腕を振って振り払うとヤミカラスに掴まって仮面の男を追っていった。

「にやろう、おれは飛べねーっての！……ん？」

1人で呟いたオレの手には、1つのボールがあった。

—————

ゴールドなら、上手く使えるだろう。

そう思い、アイツを預けて仮面の男を追う。

「追ってくるか。だが、1人で私に勝てると思っているのか！ふぶき！」

「ぐっ！」

上から強力な冷気と氷塊が降ってくる。

それを躲しながら仮面の男に迫る。

「挑発にのって追ってくるとは、まだまだ甘いな！」

「……さっきの挑発はオレとゴールドを引き離す為のもの。その誘いにあえて乗ったことを教えてやる！」

ヤミカラスのつつきに、つばさでうつ。

技を繰り出してある一点に誘い込む。

「各地から子どもをさらい、影で人を操る貴様の非道。それを今ここで阻止する！そのためにもこの湖の中央まで誘導した！あんたとの因縁は、オレ自身の手で断ち切る！」

仮面の男が湖の中央に到達した瞬間、湖から大量のギャラドスが飛び出した。

「ヌー！これは、強制進化させたギャラドス！」

「自分の策略にハマる気分はどうだ？」

仮面の男に対しニヤリと笑い、赤いギャラドスを繰り出し、その背に乗る。

「電波の中継点として動いていた赤いギャラドスを捕獲したことによって、湖のギャラドス達は一方的なコントロールから開放された。こいつらの怒りは今、貴様に向いている。はかいこうせん！」

仮面の男に向かって、大量のギャラドスのはかいこうせんが放たれる。

勝った！

そう思った瞬間、ヤツから強烈な冷気が吹き荒れた。

—————

シルバーのやつ、どこ行きやがった！

森を走り回り湖に出たとき、凍りついた湖に大量のギャラドス。そして、その上に倒れているシルバーの姿があった。

「シルバー！」

「トドメだ。」

凍りついた湖の上から、シルバーに向けて巨大な氷塊が降ってくる。

くそっ、ここからじゃ間に合わねえ!

「仕方ない!ここで使うぜ、シルバー!」

去り際に、「どうせ、オレにも使いこなせん。何かあったときは使え。」ってしれつと置いていきやがって。

オレはリュックからキューを取り出すと、ハイパーボールを打ち出す。

そして、凍りついたギャラドス達に反射してシルバーの元でボールが開く!

「行け!バンギラス!」

雄叫びを上げてボールから出てきたバンギラスは、氷塊を噛み砕き、ペツと吐き出す。

マナーがなつてねえなあ。

まあいいぜ、おかげでシルバーの所まで行く時間が稼げた。

「おい、シルバー!・・・気を失ってやがる、仕方ねえ。」

オレはシルバーに肩を貸すと、凍りついた湖から出ようとする。・・・が。

「何処に行く?」

オレの背中に不気味な声がかかる。

後ろを振り返ると、氷づけになったバンギラスの姿。

「マジかよ!?!」

「他のやつより手強かったが、指示のないポケモンなど野生のポケモンと変わらん。そんなもの、取るに足らん。」

そう言うのと、上から大量のつららが降ってくる。

「くそっ!キマたろう、にほんばれ!バクたろう、かえんぐるま!」

キマたろうの援護をつけ、バクたろうが氷を溶かしながら弾き返す。が、追いつかない。つららが降ってくるスピードの方が早い。

「ウーたろう、エーたろう、ニョたろう、トゲたろう!」

全員をボールから出し、つららを弾き落とす。

が、1体また1体とつららの前に倒れていく。

「つくしよおおお!!」

シルバーを背負っている以上、つららを避けることもできない。帽子やリュックが落ち、靴が脱げながらも逃げるが、その際もつららを受け続ける。

そして、最後に巨大な氷塊が落ちてくる。

「避けきれねえ……。ここまで、か。」

眩いた瞬間、力が抜け、凍った湖の上に倒れ込んだ。そしてギュつと目を閉じる。その時だった。

「かぷちー、ほのおのキバー!」

なにかが砕ける音が響き渡った。

「なにか……。?」

薄れていく意識の中、薄つすらと目を開けると、そこには着物姿の白い髪の少女の背中。そして、その手持ちのポケモンと見慣れない大型のポケモン。

「ずいぶん……。遅かったじゃねえか……。よ……。」

「よく頑張ったね。後は任せて。」

「そうさせて……。もら……。」

最後まで言い切る前に、オレの意識は途切れた。

## 51話

声をかけると安心したのか、ゴールドは気を失った。

上を見ると文字通り、仮面をつけた男。

確かにこれは、仮面の男って呼ぶしかないね。

「隣に居るのはエンテイか、久しいな。…しかし、貴様は何者だ？」  
「この子、エンテイって言うんだ。ここに来る途中で会ったんだだけ。」

仮面の男の疑問には答えず、隣のエンテイを見上げる。

と言うのも、エンジュを出たすぐのことだった。

「……………」

ポケギアの表示を見るとゴールドの名前。

「もしもし?どうしたの?」

『さて、あんたがジムリーダーかどうかはこの際、置いておくとしてだ。そんな仮面を被ってんだ、どうせ答えねえだろ?そんなことよ、あんたの目的はなんだ?ロケット団の残党を集めたり、このいかりの湖でコイキングを強制進化させたりしやがって。』

ん?返事はないし、誰か私と以外の人と話してる?

しかも、仮面つてことは相手は仮面の男?それなら、悠長に私と話ができないような状況なのかもしれない。

だったら、のんびりはしてられないね。

「グロウ、かぶちー、きららー!」

グロウの上にかぶちー、私の横にきららを出しておく。

状況が分からない以上、先に備えておかないとヤバいかもしれない。  
い。

「仮面の男が見つかったぽいんだけど、ゴールド達がまずい状況かもしれない。急ぐよ!」

『おっけー!…ましろ?』

元気よく返事をしたと思ったら、きららは怪訝な顔をする。

「どうしたの、きらら?」



『なにかきてるよっ!』

きららがつぶやいた瞬間、私達に並走する赤い大きな4足歩行のポケモン。

それは、さつき焼けた塔から飛び出した3体のうちの1体だった。

「ちよつと・・・。今、あなたの相手をしてる暇ないんだけど?」

並走するポケモンに声をかけると、グルル、と低く唸るだけで敵意みたいなのは感じない。と言うより、私の横をずっと付いてくる。・・・もしかして。

「私に付いてくるつもり?」

「ガウ!」

どうやらそうらしい。どういうつもりか分からないけど、今はゴールドの所に行くのが最優先だね。とりあえず、邪魔をしないようなら時間も無いことだし、好きにさせておこう。

「急ぐよ、みんな!」

—————

って感じで急いできたけど、途中で通信が切れたときは焦ったね。でも、ギリギリ間に合ったみたいで良かったよ。

しかし、エンテイって呼ばれたこの子めちやくちや唸って威嚇してるんだけど、仮面の男とどういう関係なんだろう?

ホウオウに關係してるみたいだから、もしかしたらブルーをさらったことにも關係あるかと疑ってたんだけど・・・。

むしろ仮面の男とは敵対してる?

「まあいい。そこのガキもろとも湖に沈めてやろう!」

そう言うのと、さつきよりも1段と大きい氷塊をぶつけてくる。

「グロウ! かぶちー!」

名前を呼ぶと、グロウが氷塊を砕きかぶちーが当たりそうになる破片を弾いていく。

その間にゴールドとシルバーの様子を確かめると、靴やらリュックやらがない。

所々開いている穴から湖に落ちたかな?・・・諦めるしかないか。  
「エンテイ、ちよつと背中貸してくれる?2人を安全なところに連れてってほしいんだけど。」

そう言うと、何故か心配そうな目で見られる。1人で大丈夫かっところかな?まあ、2人がこれだけボロボロにやられてたら心配にもなるよね。

「大丈夫だよ。私、この2人より強いし。・・・それに、自分でも意外だったけど、割と怒ってるんだよね。知り合いをここまでボロボロにされたことに。だからさ、ここは任せてよ。その代わり、2人をよろしくね。」

そう言うと、エンテイは大人しく屈んでくれた。

「ありがと。きらら、手伝って。」

『はい。』

私がかがんだエンテイの背中にゴールドとシルバーを乗せる。私は背が低いから、きららのサイコネシスで手伝ってくれないと乗せれないんだよね。

「それじゃ、2人のことよろしくね?そうだね・・・、うずまき島とか良さそうかな。」

うずまき島ならこの地方の反対側だし、さっきのスピードなら簡単には追い付けないと思う。

ホントならミカンのいるアサギがいいんだけど、今はエンジュで復興の手伝いをしてるし、この男が本当にジムリーダーならエンジュなんてジムのある町に行くのもまずいかもしいれない。

それならむしろ、人気のない所に行ってもらった方が安全だよね。

エンテイの背に乗せると、周囲のポケモンを回収しておく。

『おつきなほけもんもかちこちだあ。』

「バンギラスが氷づけって・・・まあ、湖ごと凍らせるならそれぐらいできるか。」

バンギラスも回収してつと。これで全部かな?

「それじゃ、よろしくね。」

エンテイの背中を叩くと、少しだけ振り返るとそのまま駆け出し

た。

「ちいつ！行かせん！」

私からエンテイに標的を変えると、その背中に大量のつららを放つ。

「邪魔はさせないよ、きららー！」

『まかせて！』

エンテイの背中に向かったつららをサイコキネシスで弾く。

「ミスタ、ハイドロポンプ！」

そして、仮面の男に向けてハイドロポンプを放つ。

「無駄だ、デリバード！」

が、ハイドロポンプは仮面の男に届く前にデリバードによって凍りついた。

まあ、氷タイプ相手に水タイプ技は通らないか。それでも、ゴールド達が逃げる時間は稼げたかな。

ちらつと後ろを見ると、ちょうどエンテイが見えなくなるところだった。

「さて、ゴールドのお陰で大体聞きたいことは聞けたし。エンテイ達との関係はよく分からないけど、今はどうでもいいかな。」

「何を言っている？」

「こつちの話。ただ・・・。」

ふう、と一息ついて心を落ち着ける。

「個人的な恨みは山ほどあるから、覚悟してよね！かぶちー、グロウ！」

かぶちーがグロウに乗って飛び上がる。

「ミスタ、きららー！」

その後ろをミスタに乗った私ときららが追いかける。

「その仮面、剥がさせてもらおうよ！グロウ、コメットパンチ！」  
グロウの拳とデリバードの氷の爪がぶつかり合う。

「ヌー！」

砕けはしなかったが、ピキツと音をたてて氷の爪にヒビが入る。

「かぶちー、ほのおのキバー！」

そして、ヒビの入った爪ごとデリバードをかぶちーの大顎が挟み込むと、そのままぶん投げ地面に叩けつける。

「ミスター・10まんボルト！」

最後に仮面の男に向かって10まんボルトを放つが、仮面の男は身を翻して10まんボルトを躲すと、デリバードが叩きつけられた場所の隣に降り立つ。

「さっきのガキどもとは違うようだな。」

仮面の男が地面に降りると同時に、デリバードも立ち上がる。あれだけ打ち込んでもまだ立てるんだ。ジムリーダーってのも本当っばいね。

「ま、あの2人よりは強いかもね。きらら、スピードスター！」

地面に立つ仮面の男の周りをスピードスターで取り囲む。

「しやらくさい、全て吹き飛ばしてくれ。ふぶき！」

瞬間、周囲一帯に強烈な冷気が吹き荒れ、取り囲んだスピードスターを全て吹き飛ばすと、私達に向かってくる。

この威力、カンナのふぶきより強いかもしれない。

でも、関係ないかな！

「きらら、押し返して！サイコキネシス！」

きららが私達の前に飛び出すと、サイコキネシスで吹き荒れる冷気をまとめて仮面の男に押し返す。

「グオオオオオ！クソツ！デルビル、アリアドス！」

自身の冷気で凍りつきながらデルビルとアリアドスを呼ぶと、周囲の森から飛び出してくる。

飛び出してきた2体は、きららに向かってかえんほうしゃと糸を放つ。

「させないよ。かぶちー！グロウ！」

きららの隣にグロウとかぶちーが割り込むと、かぶちーが炎をまとった大顎で糸を焼き切り、デルビルの炎はグロウがひかりのかべで受け止める。

そして、かぶちーとグロウはそのまま2体に向かって飛び出した。

「ええい！ゴース、シャドーボール！」

その様子を見て焦ったのか、マントの下からゴースが飛び出しきらかにシャドーボールを放つ。・・・が。

「ミスタ、メテオビーム！」

ミスタのメテオビームがゴースのシャドーボールごとゴースを貫き、そのまま凍りついて動けない仮面の男もろとも飲み込んだ。

「メアアアアアア!!」

仮面の男の叫び声が辺りに響く。

そして、メテオビームの閃光と仮面の男の叫び声が収まった時には、ヒビの入った仮面にボロボロのマント。

そして、マントの下からむき出しになった体は・・・。  
氷で出来ていた。

「氷の体、ね。マントの下にゴースを隠して空中も自由自在に飛び回ってた、って感じかな？カンナといい仮面の男といい、氷使いつて妙な技が得意だよね。」

息も絶え絶えな仮面の男の前に降りて話しかけていると、かぶちーとグロウが戻ってくる。周りを見ると、横で伸びているアリアドスとデルビル。

ちゃんと倒してるね、ありがと。

「フッフッフツ、思い出したぞ。残党が言っていた少女の話・・・。名前は確か、マシロ、と言ったか。カントーでの事件の際に裏で動いていたという、白い髪の少女。ただの噂だと思っていたが、どうやら事実だったようだな。」

一応私のことは知ってたようだけど、ただの噂だと思ってたみたい。

「それで、ただの噂って気にしてなかった子どもにやられる気分はどう？」

「フツ。貴様の事はもっと注意しておくべきだったな。覚えておこう。」

「今更注意しても遅いよ。この状況で逃げられるとでも思ってるの？」

「それは・・・どうかな？」

ボロボロになっても、余裕を崩さない仮面の男。  
なにか、奥の手でも隠してるのかな？

そう思った時。

「ワオオオオオン!!」

と、森の中から遠吠えが響き渡った。

すると、森の奥からどんどんとデルビルが集まり、私達と仮面の男の周りを取り囲んでいく。

森の中に別のデルビルを残してたのかな？そいつが仲間を呼んできた、と。

「これが奥の手？有象無象をいくら集めても意味ないよ？」

「有象無象でも数を揃えれば力になる。コマを扱うというのは、こういうことだ！吠えろ！」

辺りにデルビルのほえるが響き渡る。すると、エンジユで受けた時の様に体が重くなる。

「どうだ？取るに足りん力でも、集めれば使えるものだ。ロケット団の残党の様にな！」

私の様子を見て勝ち誇ったように言う。

けど、1回受けたから予想してたんだよね。

「きらら。全部、黙らせるよ。」

『オツケー。』

「目標は周囲のデルビル。数が多いから、少しぐらいなら派手にやってもいいよ！きらら、りゅうせいぐん！」

「何をほざいて・・・！」

仮面の男が何かを言いかけると、空を見上げ息を呑む。

そこには、きららが放った大量のりゅうせいぐんが空を埋め尽くしていた。

空を埋め尽くすりゅうせいぐんは周囲のデルビルに降り注ぎ、直撃した者は倒れ、当たらなかった者も余波で吹き飛び、無事な者は散りじりに逃げていった。

お陰で周囲がボロボロの大惨事に。まあ、すでに湖は凍ってるし、ギヤラドスの氷像が沢山あるしで、元々大惨事か。

「ありえん、このようなことが・・・！」

地面に張り付いた氷の体を、バリバリと音をたてて引き剥がす。無茶なことするなあ、と思ったがふと気づく。

「ああ、氷の体で痛くないから無理やり剥がせるのか。・・・だったらいいか。」

「何を・・・!?!」

「かぷちー!」

仮面の男が地面から体を引き剥がした瞬間、逃さまいと氷の体をかぷちーの大顎が噛み砕いた。

その際、衝撃で仮面がコロンと外れる。

仮面の下にあったのは、氷の頭だった。

「全身が氷で、トレーナーはいない・・・と。いないんだから、逃げる必要もないし、そりや余裕が消えない訳だ。」

ん?ならどうやって指示をだしてたんだろう?

不思議に思い、周囲を見渡し転がっていった仮面を拾い上げると、仮面の裏にレンズの付いたポケギア。

なるほどね。これで映像を見ながら指示を出して会話してたんだ。

「ねえ、そっちの人こえてる?」

『聞こえてるとも。噂以上の実力だった、完敗だとも。』

「機械を通すことで声も変えてたんだね。用意周到なことだ。」

『褒め言葉として受け取っておこう。』

「どうせポケギアからも足がつかないだろうから、私から1つだけ言っておくよ。絶対に見つけるから。」

言いたいことを伝えると、相手の返事を聞かずにポケギアを放り投げる。そして。

「かぷちー。お願い。」

かぷちーの大顎が噛み砕き、粉々になったポケギアが辺りに散らばった。

『あれ、こわしてよかったの?』

「いいのいいの。仮面の男のポケギアなんて、何が仕込まれてるか分かったものじゃないし。それに、仮面の男の持ち物なんて持ち運びた

くないからね。それよりみんな、お疲れ様。」

「ちー！」

「グオウ！」

「ー！」

『ひさしぶりにつかれたよー。』

皆が返事をする中で、きらは私の頭の上にポトツと落ちてくる。

きらが頭に乗るのも久しぶりだね。

広範囲のりゆうせいぐんを使うのも久しぶりだし、大分お疲れっぽい。

少し休んでから、エンテイを追いかけようか。



## 52話

いかりの湖での戦いの後。

うずまき島に行くと、炎に囲まれたゴールドとシルバー、そしてそれを見守るエンテイの姿があった。

「ありがとね、お陰で助かったよ。」

そう言つて頭を撫でると満足そうに頷き、エンテイは走り去つていった。

・・・結局、エンテイの目的はなんだったんだろう？

まあいつか。とりあえず、今はゴールド達が起きるのを待とうか。それまでに少し仮面の男の情報を整理しておこう。

1. 仮面の男はジムリーダーの可能性がある。

これは、ゴールドとシルバーの2人を倒してるし、デリバードのタフさからしてもほぼ確定と見ていいんじゃないかな。

2. コマを集めてる。

ロケット団の残党を集めてるし、コイキングを強制進化させてたらしいから、戦力的には質はともかく数は揃つてそう。

3. 氷の人形を遠隔で操作してる。

これのせいで、いくら倒しても尻尾を掴めない。

この中でも、氷の人形つてのが問題だね。倒しても正体が掴めないし、代わりもきく。

それに、遠隔操作つていうハンデがあつてもゴールドとシルバーを倒してるんだよね。

私はきららがいるし、相手にとつては意表をつかれた感じになつたから完勝できたけど。仮面をつけてたり、氷の人形だったりで、かなり用心深い相手だし、次戦うときは対策されてそうだなあ。

考えれば考えるほど、次に会ったら不利な戦いになりそう。

逆に言えば、対策がとれるまでは私の前には出てこないかも。

それなら、こっちから会いに行こうか。

相手はおそらくジムリーダー。なら、ジムに行けば会えるはず。ジム戦って言えば断れないだろうし。

まあ、その前にゴールド達を何とかしないとね。

そう思ってたけど、ゴールド達が目を覚ましたのはそれから3日後の事だった。

—————

「……ん？ここは？」

「あ、ようやく起きた？」

薄暗い洞窟の中、体を起こしたゴールドに声をかける。

「助かった……のか。マシロが助けてくれたのか？」

「ギリギリだったけどね。あの時の通話が無かったら、間に合ってなかったかも？お手柄だったね。」

「役に立ったなら何よりだぜ。しっかし……。」

ゴールドは言葉を区切り、大きく息を吸い込む。

「負けちまったぜええええ!!!」

両腕を上げて思いっきり叫ぶと、そのまま後ろにパタンと倒れ込んだ。

「くそつ。シルバーと2人なら何とかなるかと思ってたが、マシロが来るまでの時間稼ぎしかできなかつたぜ、チクショー！」

「湖ごと凍らせるとは、オレも想定外だった。」

ゴールドより先に目を覚まして、洞窟の隅の岩にもたれて座っているシルバーも話に加わる。

「んだよ、お前はもう起きてたのか。」

「ああ。起きてそうそう、お前は元気だな。」

「オレの取り柄の1つだ！」

「ゴールドも目覚めた。いい加減、こんなところに連れてきた理由を話してもらおうか。」

そう言って、シルバーは私の方を睨みつける。

2回も説明するのは面倒だから、ゴールドが起きるまで待つてもらったんだよね。

そのせいですごい不機嫌そうだけど。

「こんなところ?」

さつき目が覚めたばかりでゴールドが話についていけずに困った顔をしながらムクリと起き上がる。その様子を見て、シルバーが答える。

「ここはうずまき島だ。」

「はあ!?なんでそんなジョウトの隅っこに!?!」

「・・・それを今聞いてるんだ。」

そう言うやいなや、2人してこっちを向く。

そんな急かさなくてもちゃんと説明するってば。

「うずまき島はいかりの湖とは反対の場所にあつて、仮面の男に見つかりにくい場所かと思つて。つてのが1つ。」

「なら、こんな誰もいない島じゃなくてタンバシテイとかでも良かったんじゃねえのか?」

「私もこんな洞窟で、子守なんてしたくなかつたんだけどね。」

「子守だとお?」

「ハア・・・。いちいち突つかかるな、話が進まん。」

「ぐっ・・・。ハイハイ、分かつたよ!」

シルバーに諫められると静かになるゴールド。

「じゃ、続けるよ?確かに、反対の場所つて意味ならタンバでも良かったんだけどね・・・。仮面の男つて、ジムリーダーの可能性があるんでしょ?」

「だから、ジムのあるタンバシテイを避けたのか。」

「そゆこと。シルバーは話が早くて助かるよ。これが2つ目。」

「でも、仮面の男はいかりの湖にいたじゃねーか。つてことは、ジムはもぬけの殻なんじゃねーの?」

「ジムリーダーが仮面の男1人ならね。」

「・・・2人以上のジムリーダーが関与している可能性がある?」

「オイオイオイオイ、それは洒落になんねーなあ!」

「ま、あくまで悪い方のパターンを想定した場合だけどね?」

「だとしたら、ポケモン協会真つ黒かよ・・・。」

実際にカントー、ジムリーダーの半分がロケット団だったからね。

ほんと真っ黒だよ。いや、真っ青かも。

「それに、仮面の男が実際にいかりの湖にいたら、ね。」

「・・・どうということだ？」

「・・・??実際にいたじゃねーか？」

シルバーは怪訝な表情をして聞いてくる。

ゴールドも意味が分からないと言いたそうな顔をしてる。

「あそこにいたのは、氷の人形だった。仮面の下にレンズの付いたポケギアをはめて、マントの下にゴースを隠して、あたかも人であるかのように動かしてたんだ。」

「!!」

「・・・待て。」

絶句するゴールドとは裏腹に、シルバーは静かに制止してくる。

「お前が仮面の下見た、ということ。・・・倒したのか？仮面の男を。」

「うん。手強かったよ。」

「聞いていた以上の実力・・・か。」

「マジカヨ・・・。やっぱりあの時、マシロに頼んで正解だったぜ。」

「ま、そういうことだからジムのある町は避けたんだ。」

「成る程、理解した。」

「おーけー、事情は分かったぜ。」

とりあえず、ここに来た理由は理解してもらえたかな。

「で、ここからが本題。」

そう言うと、2人して首をかしげる。

「貴方達には、しばらくここで過ぐしてもらおうから。」

「ハア!？」

「何故だ？」

「私は仮面の男を倒したけど、中身は氷の人形だった。ってことは、まだ本人は自由に動けるのは分かるよね？」

2人は頷く。

「で、自分の正体を隠してる様な奴が、1度負けた相手とまともに勝負してくると思う？」

「いや、それはねえだろ。」

「なら、どうすると思う?」

「ゴールドは少しだけ考え込むとすぐに答える。」

「数を集める、か?仮面の男自身がコマを集めてたみたいだし。」

「50点、かな。仮面の男が氷の人形を使って自分で動いているぐらだから、あいつらが集められる数って多分、ロケット団の残党ぐらいたと思うんだ。」

他に頼れる人がいるなら、自分で氷の人形なんて操作して動いたりはしないだろうしね。

「だが、ロケット団の残党ならオレとゴールドで蹴散らせる程度の強さだ。時間稼ぎにしかならないだろう。いくら集めてもマシロを倒せるとは思えん。」

「そゆこと。」

私の言葉にシルバーが続く。

ホントに話が早くて説明が楽だね。

「なら、どうすんだよ?」

「・・・弱味につけこむ、か?」

「お、シルバー80点。じゃあ、残りの20点。その弱味はなんだと思う?」

「いやいや、マシロの事なんてよく知らねえよ。」

「それは仮面の男も同じだよ。」

そこまで言うと、シルバーがハッと気づく。

「・・・オレ達、か。」

「正解。シルバーは察しがいいね。」

「???どういうことだ?」

話に付いていけないゴールドに、シルバーが説明を始める。

「仮面の男の視点に立ってみる。オレ達に止めをさそうとした瞬間、マシロはオレ達を助けに入ったんだ。オレ達とマシロに、何らかの関係があることは想像できるだろう。」

そう聞いて、ゴールドが手を叩く。

「仮面の男からすれば、マシロが助けに入るような間柄の人間に見えるって訳か。」

ここまで説明すればゴールドも分かったみたい。

「そういうことだ。マシロを消そうとするなら、まずはオレ達を人質に使用おうとする可能性がある。実際、オレ達は仮面の男に敗北している。狙うにはうってつけだ。」

シルバーは冷静に現状を把握してるね。

ゴールドは悔しそうな表情をしてるけど、文句は言わなかった。「理解したかな？だから、2人にはここで特訓をしてもらって、最低でも仮面の男から逃げられる程度の実力はつけてもらおうよ？」

「なるほどな、だから子守か。だが現状、仮面の男に敵わなかった今、願ったり叶ったりだ。」

「だな。それに、逃げられる程度なんて言うなよ。倒せるまで鍛えやがれってんだ！」

2人共、笑みを浮かべて答える。

ゴールド達の意気込みはバツチリみたいなんだけど、問題点が1つ。

私、誰かにポケモンバトル教えたことないんだよね。

・・・大丈夫かな？

## 53話

教える前に、ゴールドとシルバーのポケモンを一通り見せてもらった。

ゴールドは、マグマラシ、エイパム、ウソツキー、ヒマナッツ、ニョロトノ、トゲピー。

シルバーは、アリゲイツ、ニユウラ、ヤミカラス、リングマ、キングドラ、バンギラス。

らしいと言わねばいいのか。

発展途上のゴールドの対して、シルバーはもう完成してる感じ。流石はブルーの義弟ってとこだね。

その時「ギャラドスは、はぐれたのか……。」ってシルバーが呟いてたけど、なんの事だろう？

とりあえずシルバーは基礎ができてそうだから、ひたすらグロウとミスタと殴りあってもらおう。ひたすら強い相手と戦ってたなら、自分より強い相手との戦い方を掴んでくれる……はず。

「シルバーの方は、グロウとミスタが相手だね。最終的にはグロウの守りを崩せるか、ミスタの火力を越えられる事が目標だね。」

「了解した。」

「それじゃ、ミスタ、グロウ、お願いね。」

そう言うと、ミスタとグロウはシルバーと一緒に洞窟の奥に進んでいった。

確かに、ここで2組のトレーナーが特訓するには狭い、か。

で、問題ゴールドの方かな。ゴールドのポケモンって、シルバーと違って全体的に小さいんだよね。全員が進化してる訳じゃないし。

……ま、私が言えたことじゃないけど。きららもかぶちーもミスタも大きい方じゃないし、グロウもメタグロスに進化してないし。

「で、オレはどうすればいい？」

「そうだね……。ゴールドは基礎からだね。育てや夫婦の所でやって

たみたいに戦い方を覚えていこうか。」

「うっす！」

「ゴールドのポケモンはシルバーみたいに育ってないから、基本的な能力の底上げと、後は小さい体なりの戦い方ってのを教えてあげる。」

「小さいなりの戦い方・・・？」

「そ。例えば、かぶちー。」

私はかぶちーをボールから出すと、私と同じぐらいの岩を指差す。

「はたきおとす。」

「クチー！」

指示を出した瞬間かぶちーは飛び上がり、岩に対して大顎を叩きつけると、粉々に砕け散った。

「スゲー・・・。」

ゴールドの台詞に、かぶちーはえっへんと胸を張る。

「で、次はあれね。今度はつるぎのまいからはたきおとす。」

次に指差したのは、バンギラスぐらいの大きさの岩。

かぶちーは踊るようにステップを刻むと大きく飛び上がり、その岩に大顎を振り下ろす。

ドカアンと、さつきとは違う大きな音と共に岩が砕け散り、大顎が地面にめり込んだ。

「おおっ・・・。」

「まあ、こんな感じだね。小さくつても工夫すれば大きい相手だって倒せるんだよ。」

「いや・・・。あんたの場合、工夫なんていらんじゃ・・・。」

何故か驚いたような、あきれたような顔をしている。

「いやいや、そんなことはないよ。それより今はゴールドの話ね。とりあえず、レベルを上げつつ戦い方を考えていこうか。かぶちー、

ゴールドの相手お願いね。」

「チー！」

ゴールドの相手は、かぶちーにお願いした。

体が小さいかぶちーの戦い方から、何か掴んでくれるといいな。



「ーーーーあれから1週間ーーーー」

私は岩に腰掛け、きららと話していた。

「教えたことなんてないから、最初はどうなることかと思っただけど……。意外となんとかなるもんだねえ。」

『だねえ。』

私ときららの前では、ゴールドとシルバーが戦っていた。

「ニューラ、いわくだけき！」

「エーたろう、こうそくいどう！」

ニューラのいわくだけきをこうそくいどうで避け、ニューラの爪が地面を抉る。

「追え、でんこうせつか！」

「かげぶんしんだ！」

エイパムのエーたろうの背中に追い付いたと思ったら、次は多数の残像でかわすと、お返しとばかりに多数の分身がニューラを取り囲んだ。

「本体がどれか分かるか？今度はこっちの番だ！みだれひつかき！」

「ちっ！ふぶきだ！」

取り囲んだエーたろうがニューラに飛びかかる瞬間、ニューラから冷気が迸り、周囲の残像を消し飛ばしていく。

「これじゃ、近づけねえ。・・・なら、エーたろう！」

ふぶきが放たれた時、瞬時に下がってエーたろうはゴールドの声に合わせてバトンを作り出すと、ゴールドに向かって放り投げる。

「タツチだ、ウーたろう！」

それを、新しく出てきたウソツキーのウーたろうがバトンを受けとる。そして……。

「ふぶきを貫け、ばくれつパンチ！」

高速の拳がふぶきを貫くと、ニューラを吹き飛ばし壁に叩きつけた。

「ニューラ!?!」

壁に叩きつけられたニューラは目を回していた。

「へっ！オレの勝ちだな！」

「・・・そのようだな。」

シルバーはゴールドの声に頷くと、静かにニューラをボールに戻した。

「つても、1勝6敗でようやく初勝利だ。まだまだ仮面の男には届かねえか。」

「それでも、最初に比べたら大分マシになったんじゃない？」

「お、やっぱり？オレもそう思ってたんだよな！」

ウーたろうとハイタッチしている所に声をかけながら歩いていくと、嬉しそうにこつちに振り返った。

ま、6連敗からの1勝は嬉しいか。

目が覚めてから1週間。1日1回、2人には勝負してもらってる。最初はシルバーに押されっぱなしだったけど、今日ようやく白星を勝ち取った。

「シルバーもお疲れ様。」

「気にするな。オレ自身、仮面の男に敗北した以上もつと力をつける必要がある。」

「確かに今の2人でなら、仮面の男が相手でもいい戦いはできそう。」

「2人で、か。それに、勝てるとは言わないんだな。」

「勝てる・・・かも・・・？」

「ちえっ、疑問系かよ。取って付けたように言いやがって。」

「気休めを言っつて、返り討ちにあつても困るからね。」

ま、それでも2人の成長具合を見るにそろそろ私がついてなくてもいいかな？

「それじゃ、そろそろ私は仮面の男を追いかけるから、特訓は2人でやってね。ゴールドの実力もシルバーに並んできてるし、今なら問題ないでしょ。」

最初は実力に差があったから個別でやってたけど、今のなら実力も並んできてるし2人で特訓した方が効率は良さそう。

「うへえ・・・。こんなところで、シルバーと2人つきりかよ。」

「仮面の男を追うと言っつても、手がかりはあるのか？」

文句を言うゴールドと、疑問を口にするシルバー。やっぱり対称的だなあ……。

「とりあえず、全部のジムを回ってくるよ。ジムのチャレンジャーなら、門前払いなんて事はそうそうないと思うし。とりあえず、全部のジムを回るまではここで大人しくしてて。」

「了解した。」

「早くしてくれよ?。」

「努力はするよ。」

そう言うと、今度は隣のきららに声をかける。

「きらら、私がない間2人のことお願いしていい?。」

『えー?おるすばん?』

「うん。大丈夫だとは思うけど、一応ね。きららがいればなんとかなるでしょ?。」

『むー……。わかったー。おみやげわすれないでよー?。』

「はいはい、分かった。」

不服そうだけど、仕方ない。きらら以外だと最悪の場合、仮面の男が現れたときに負けるかもしれないし。

その点、きららがいればどうとでもなる。

「ミスタ、出番だよ!。」

私はミスタをボールから出し、その背に飛び乗る。

「まずはタンバジムから!。」

さて、ミスタの好きな道場破りだ。

## 54話

タンバシテイ。

海に囲まれた、海の町。うずまき島から1番近くて、ジムのある町。辺りが暗くなった町外れ。何故か大型の4足歩行のポケモンと、2人のトレーナーが戦っていた。

「透き通った体に、4足歩行の大型ポケモン……。どう見ても、焼けた塔から飛び出したポケモンの1体だよねえ……。」

前に会ったエンテイは仮面の男と戦ったときにゴールド達を助けてもらったけど、目的はよく分からなかった。ただ、仮面の男とは敵対してるっぽい。

こっちのポケモンはエンテイとはまた別の目的で動いてるのかな？よくわかんないや。

「あ、逃げ出した。」

そんな事を考えながら戦いを見てみると、大型のポケモンが踵を返して2人から遠ざかっていき、やがて見えなくなった。

何だったんだろう？逃げる姿を見た感じ、余力は残ってそうだし、本気じゃなさそうだったけど。スイクンの相手をしていたあの2人聞けば分かるかな？

「相変わらずなりふり構わねえ戦い方をするなあ、おまえは。そんなんだから弟子に逃げられるんだよ。」

「ああ。『トレーナー自身も鍛える』っていうオレの方針は、時代には合わんらしい。4年前にカントーに戻ったヤツが最後の弟子だ。しかし、そいつがトキワのジムリーダーに就任したって便りが来てな。オレのやり方は間違ってたかった、とも思ってたよ。」

「お疲れの所悪いけど、さっきのポケモンとどういう関係？」

2人は一息つきながら話していたけど、辺りも暗くなってきてる。申し訳ないけど、本題から入らせてもらおう。

「なんだ、お前は？」

「おいおい、若者に対してはそんな刺々しくせずにもっとおおらかに

いこうぜ。またあんたの弟子みたいに逃げられんぞ?」

「ヌウ……。」

上半身裸の胴着の人を、ジャケットを羽織った人が諫める。

と言うか、胴着の人ってジムリーダーのシジマさんじゃ……。

一通りジムリーダーの顔と名前は調べておいたから見覚えがあった。

「それで、嬢ちゃんはさっきのポケモンの事が知りたいうてことではないのか?」

「あ、うん。そんな感じ。」

「さっきのポケモンは、スイクンと呼ばれている。オレの前に急に現れたと思えば戦いを挑んできた。聞いた話だと、フスベジムのイブキのところにも現れたらしい。」

「そして、ジムリーダーであるオレ……か。」

「つまり、強いものを求めてさ迷っているって所だ。どうだ、参考になったか?」

「うん。ありがと。」

スイクンは強い者を探してさ迷っているらしい。

なんでそんなことをしているのかは分からないけど、今のところはジムリーダー並の相手の前に現れてるって事かな。

「それで、嬢ちゃんはあのポケモンとどういう関係だい?」

「えっと、特に関係があるわけじゃないんだけど……。」

「関係がないのに首を突っ込んできた、と?」

シジマに怪訝な目を向けられる。

まあ、急に出てきて関係ないのにスイクンの事を聞いてくるとか、不審者でしかないよね。

「スイクンと直接の関係はないよ。少し前、スイクンと同じ焼けた塔から飛び出したポケモンのエンテイと会ってね。それで、あの子達の目的が知りたくて。」

「ってことは、嬢ちゃんもエンテイと戦ったのか。」

「いや、一緒に散歩しただけだよ?」

「ハア？」

今度はジャケットの人にも怪訝な目を向けられる。

実際、仮面の男と対峙するまで一緒にいただけだしね。嘘は言っていない。

「だから、戦ってるのを見てどうしたのかなー、つて。」

「つまり、エンテイはお前に目もくれなかった、と。」

「おい、シジマ言い方。」

「いいよ。実際、私はエンテイと戦ってないし。」

もう一度、ジャケットの人が諫めようとしたのを止める。この人の遠慮のない口調を毎回諫めてたら、話が進まなさそう。

「ところで、そっちの人はジムリーダーのシジマって人であってる？」

「そうだが？」

「話ついでに、もう一つ。ジム戦、受けてもらえるかな？」

「クッククク……。ハッハッハッハッハッ！」

私の言葉を聞くと、シジマさんは次第に笑いを堪えられなくなったように大声で笑い出した。

「エンテイには相手にされなかったと言うのに、いっちょ前にジムリーダーに挑むか！良かろう、明日の朝、ジムでお前の挑戦を待つ。

名前は？」

「マシロ。」

「マシロ、お前の挑戦を待っているぞ。」

そう言うと、シジマさんは一人で町の方に戻っていった。

置いていかれたジャケットの人は、申し訳なさそうに頭をかきながら謝ってきた。

「悪いな、嬢ちゃん……。つと、マシロって言ったか。あいつはあんな感じで昔気質なところがあってな……。」

「いいよ、気にしてないから。それに、今はジムリーダーと仲良くする気はないし。」

「なにか訳アリってことか。」

「そんなところ。」

仮面の男の可能性があるジムリーダーと仲良くするなんて嫌だし

ね。そう言うとハヤテさんは渋い顔をしたが、それも一瞬だった。「おっと、自己紹介がまだだったな。オレはハヤテ。よろしくな、マシロの嬢ちゃん。」

「よろしく、ハヤテさん。それじゃ、明日はジム戦だから、私はポケモンセンターに行くよ。」

「それなら一緒に行くぜ。オレもさっきの戦いで疲れたしな。」

ということで、ハヤテさんと一緒にポケモンセンターに行くことになった。

—————

次の日。

ジム戦を終えた私は、何故か高笑いしているハヤテさんとジムを出た。

「ハツハツハツハツハツ!!見たかあの顔? 苦虫を噛み潰したような顔をしてたぜ!」

「いや、笑いすぎでしょ。」

というのも、ジム戦でミスタがはっちゃけた。

相手のニョロボンに対して空中から一方的に10まんボルトを浴びせ続けて、ニョロボンの攻撃はすべて躲しきった。

「あなたのスターミー、すげえ綺麗な戦い方するんだな。あいつの攻撃を全部躲すとか、やるじゃねえか。」

「いつもは躲したりせずに、正面からぶち破るんだけどね……。」

多分、昨日の『エンテイに相手にされなかった。』って言われたのが気に入らなかつたのかもしれない。

だから、いつもなら正面から受け止めるような攻撃も全部躲して遠距離から一方的に叩きのめした。

「多分、実力を示したかつたんだろうね。ミスタ、負けず嫌いだから。」

「ふうん。よくわからんが、お宅のスターミーは納得したのか?」

「うん。ご機嫌だったよ。」

最後、『マシロ、お前の事を見くびって礼を失っていたようだ。昨日

は笑ったりしてすまなかった。』ってバッジを渡しながら頭を下げられた。

それを見て満足したのか、ミスタは機嫌が直った。

「それで、マシロはこれからどうするんだ？ 次のジムに向かうのか？」  
「うん。次はエンジュのジムに向かおうと思ってる。」

「エンジュと言うと、マツバの所か。でも、今あいつはエンジュにいないぜ？」

「え？ まだ帰ってきてないの？」

エンジュ復興の時も不在だったし、どこをうろついているのやら。ジムリーダーってこんな適当でいいの？

「そういや、ミカンもウロウロしてたっけ。」

「マツバは特別な力、千里眼の持ち主で、依頼を受けたら人やら物やらを探すためにあちこち出向いてるのさ。ま、人がいいあいつだから断れねえんだろう。確か、今はエンジュから北西にある村に出向いてるんじゃないかったか？」

「そうなんだ。なら、そっちに向かってみるよ。情報ありがとね。」

「いいさ、あいつのあんな顔が見れたんだ。安いもんだ。」

「そう言ってまたクツクツと笑う。」

あの人の顔がそんなにツボに入ったんだ。まあ、そのおかげで無駄足を踏まずにすみそくだ。

「でも、やけにジムリーダーに詳しいね。」

「ああ、やっぱり気になるか？」

「そりゃ、ね。」

なんてったって、仮面の男に繋がる最短ルートだし。

「昨日訳アリって言ってたから、言い出しづらかったんだが……。実は、元ジムリーダーでな。少しばかり詳しいんだ。」

「元ジムリーダー、ね。そりゃ詳しいわけだよ。」

元ジムリーダーと言われて、色々と納得した。

と同時に、警戒度を上げておく。

「おっと、そう警戒しなさんな。こうなると思って黙ってたのによ。」  
両手を上げておどけたように言う、私から距離を取る。



「ま、その様子だと言っても聞かなそうだな。なら、オレは行くことにするぜ。ジムリーダーと仲良くする気は無いんだろ？」

「そうだね。ここで別れたほうがお互いに良さそうだ。」

私がそう言うと、ハヤテさんはエアームドを繰り出しその背中に乗る。

「それじゃあな！今日は良いもの見させてもらったぜ！」

私達はお互いに手を振りながら、ハヤテさんは飛び去っていった。とりあえず、今日は休んでからエンジュ北西にある村に向かおう。

—————

シジマ

昔気質のおじさん。あのタイプは裏表がないから、仮面の男の可能性は低そう。

ハヤテ

気ままなおじさん。元ジムリーダーだから、可能性は無きにしもあらず、かな。まだジムリーダー全員と会ったわけじゃないから考えは保留。

## 55話

ジム戦での疲れをとるため一晩休んだ後、ミスタに乗って私はマツバさんが来ているという、エンジユから北西にある村に向かっていた。

ちなみに、ポケモン協会が発行しているタウンマップには、基本的にジムとそれに隣接する町、ポケモンセンターのある町しか載せてないからこの村は載っていない。

だから、それ以外の町や村を調べたかったら、別の企業が発行するタウンマップを買わないといけないんだけど、このタウンマップには以前ジョウトに来た際にお世話になった。あれから何年もたったけど、ずっと仮面の男を追い続けてるのに、あまり進展した気がしないや。

そんなことを考えていたからか、私達に近づいてくるポケモンに気づかなかった。

森の中から飛び出したポケモンは、そのまま私達と並走してくる。

「わわっ、と……。え……スイクン？」

森の中を進む私達に並走してきたのは、昨日シジマさん達と戦っていたスイクン。エンテイのときもそうだったけど、急に出てきて並んで走るのが好きなの？

ミスタとスイクンは少しだけ話をしたと思ったら、急にブレーキをかけて停止した。

「おっと……。ミスタ、どうしたの？」

慣性で前のめりになりながら声をかけるが、動こうとしない。ふと、スイクンを見ると戦闘態勢のように体をかがめている。

「ミスタ？もしかして、戦いたいの？」

「……」

私の言葉にうなずくミスタ。

いや、このあとジム戦があるからあんまりやりたくないんだけど……。そう言えば、スイクンは強いものを探して彷徨ってるって

ハヤテさんが言ってたっけ？私も目をつけられた、と。

ミスタもやる気になってるし、こうなるとミスタは聞かないもんね、仕方ない。

「分かった。少しだけだよ？」

ミスタから降りて、少しだけ離れる。

それを見たスイクンは開戦の合図とばかりに、額のクリスタルを輝かせ、オーロラビームが放つ。

「れいとうビーム！」

それに対してれいとうビームをぶつけて相殺すると、ぶつかりあつた中央から周囲一帯が凍りつく。

やや私側に偏ってる辺り、氷技の威力はスイクンの方が上だね。

「ミスタ、10まんボルト！」

続けてミスタに指示を出し、攻め続ける。

れいとうビームは相性的に良くないし、そもそも力負けしてる。ハイドロポンプは凍らされて終わりだろうから使えない。

結果、相性的にも有利な10まんボルトで攻めたてる。

が、スイクンは森の中に飛び込むと周囲を駆け回り、木の影に隠れながら射線から逃げ続ける。うーん、速いなあ……。

こうも速いと、逃げるのを捕らえるのは難しいかな。

「ミスタ、ストップ。」

捕まえられないならしょうがない、違う手を考えないと。

森の中から出てこないと攻撃は当てられない。なら、次に森から出てきたとき……つまりスイクンが攻撃を仕掛けてきたとき。そこを狙う。

ストップというミスタは10まんボルトを止めて、私の意図を理解したのか力を溜めはじめ。

そんな最中、スイクンが周りを駆けながら、かぜおこしを繰り出す。そしてそれに混ざって氷の刃が飛んでくる。

「ミスタ、っくらえてー！」

力を溜めているミスタは技が撃てないから耐えてもらおうしかない。氷の刃がミスタの体にぶつかり傷だらけになるも、ミスタは怯むこ

となく力を溜め続ける。

その様子を見てらちがあかないと思ったのか、スイクンが額のクリスタルを輝かせながら森の中から飛びだした。

「メテオビームー」

瞬間、スイクンのオーロラビームとミスタのメテオビームがぶつかりあい、メテオビームがオーロラビームを貫いた。

そして、そのままスイクンに当たると思った瞬間。

スイクンの前に輝く半透明の壁が展開され、メテオビームが押し止められた。

「嘘でしょ、あのメテオビームを止めるの?」

いつもよりも溜め時間が長いメテオビームの威力は当然、普段のものよりも高い、はずなんだけどなあ。

それを押し止めるあの壁、強度がスゴイ。

スイクンの前の半透明の壁を見ていると、ピシッとヒビが入る。

その時、気づいた。

あれ・・・?あの壁、グロウのひかりのかべとは少し違う?

まじまじと観察して、壁の正体に気づく。

あれ、ミラーコートだ!

瞬間、スイクンのミラーコートは砕け散るが、メテオビームが跳ね返ってミスタを飲み込んだ。

あまりの衝撃に顔を覆う。光と衝撃が収まり周囲を見ると、地面を穿ったクレーターの中で倒れているミスタ。

そして、その前に静かに降り立つスイクン。あー、これは完敗かな?

と思ったらスイクンもその場に倒れ込んだ。

あれ、スイクンもすごく消耗してる・・・?

もしかして、さっきのミラーコートって大分無理してた?

確かに、さっきのメテオビームはフルチャージって程じゃないけど、かなり力は溜めてたからミラーコートを維持するのにはかなりの体力が必要なはず。最後まで持ちこたえたとはいえ、結局砕けちゃったし。

ってことは、ミスタが力を溜め始めてからすぐに動いたのはメテオ  
チームがヤバいことに気づいたからかも。

戦いながらその判断をしたってこと？

考えれば考えるほどすごいポケモンだねえ……。

まあ、でも今回は。

「今回は痛み分けて所かな？いや、ミスタが起き上がれないから私  
達の負けだね。」

起き上がれないミスタと、疲れ切っただけのスイクンではかなりの  
差がある。

ミスタはしばらく起き上がれないだろうけど、スイクンは少し休め  
ば動けるようになると思うし。

「でも、なんで急にバトルを仕掛けてきたんだろう？ハヤテさんは強  
い人を探してるって言ってたけど、そのため？」

スイクンに尋ねると小さく頷いた。

ってことは、腕試しみたいなものかな？腕試しにはお互い死力  
を尽くしてる気がするけど。

そんな事を思っていると、スイクンは立ち上がり少しだけ見つめ合  
うとそのまま駆け出して行った。

「よくわからないけど、納得したのかな？お疲れ様、ミスタ。惜しかっ  
たね。」

ミスタをボールに戻しスイクンの後ろ姿を見送っていると、どこか  
らかパチパチと拍手する音が聞こえた。

「見事な戦いだった。あのスイクンと互角に渡り合うとは驚きだ。」

音のする方に振り向くと、金髪の髪にバンダナを巻いた青年。

「あれ、もしかして……マツバさん？」

「ああ。オレはマツバだが、お嬢さんは？」

「マシロって言います。実はマツバさんに挑戦しようところまで来た  
んだけど、ばったりスイクンと遭遇しちゃって……。」

「ふむ。塔から飛び出した3体のポケモンが各地のジムリーダーに挑  
んでいるらしいが、君もスイクンに挑まれたのか。……ん？オレに  
挑戦？」

「はい。ここにマツバさんがいるって聞いて来たんですけど、スイクンと戦っちゃったから……。」

「そうか。片方だけ連戦というのはフェアじゃないな。……だが、その心配はいらない。」

心配はいらない？どういうこと？

私が首をかしげると、マツバさんはファントムバッジを差し出した。

「今の戦いを見て、君の実力は分かった。戦わなくてもいい。このバッジを持っていくといい。」

「あ、どうも。」

流れてバッジを受け取る。

いやいや、受け取っちゃ駄目でしょ！

バッジが目的じゃなくて仮面の男かどうかを見極めたいのに、戦わないと分からないし、意味ないじゃん！

……ん？今の戦いを見てたってことは、いつから見てたんだろう？

「ちなみに、今の戦いどこから見えました？」

「オーロラビームとれいとうビームがぶつかりあった辺りからかな。それより、スイクンとの戦いで疲れただろう？この先の村で休むといい。」

そう言うマツバさんは歩き出した。

私はその後ろを追いかけながら考える。

オーロラビームとれいとうビームがぶつかりあった所って、ほぼ最初から見えてたってことだよな？

もし仮面の男の正体がマツバさんなら、後ろから刺すなんてことは普通に有り得そうなんだけど。

そうしなかったってことは、マツバさんは仮面の男じゃないと見ていいかな？

—————

マツバ

千里眼を持っているらしい。スイクンとの戦いを察知して最初から見れたのはこの能力のおかげじゃないかな？

それだけ便利な能力を持つてるのなら、私に対して後手後手で動くことなんてないと思うから、仮面の男の可能性は低いね。

## 56話

北西の村で一晩過ごすミスタも元気になった為、次のジムに向かうことにした。

次は、コガネシティがいいかな。

「それなら、一旦エンジユに向かおうか。町の様子もどうなってるか気になるし。」

元気になったと言ってもミスタに無理はさせられないから、今日はグロウに乗って移動中。

森を抜けると、エンジユシティにあるスズの塔が見えた。他はボロボロなのに、スズの塔だけ真っ先に建て直されてる辺り、よっぽど大事な場所なんだねえ。

そんな事を思っていると、スズの塔の方からドオンと、鈍い音が聞こえた。

「今の音・・・、スズの塔の方かな？」

なにやらスズの塔の方が騒がしい。

ただのイザコザならいいけど、もしかしたらまたロケット団が何かしでかしてるのかもしれない。もしそうなら放つとくのはまずいか・・・。様子を見に行こう。

「グロウ、お願い。」

私はグロウに声をかけると、スズの塔の方に進路を変えた。

スズの塔に着いたとき、塔の上に大きな水晶のようなものが出ていた。と思ったら、上の方に少しだけ閉じきってない部分がある。

「いや、少しだけ隙間があるね。と言うか、あそこにいるの・・・スイクン？誰かと戦ってる？」

塔の下から上を見上げると、誰かとスイクンが押し合っている。

そして、バンと音をたてて水晶が閉じるとスイクンと戦っていた人が空中に放り出されて真っ逆さまに落ちてくる。

ちよっ！危ない！

「グロウ、急いで下に！」





ほいっと、クリスと呼ばれた女の子をマントの人に渡す。

女の子と言えど、小柄な私が抱えておくには重たいんだよね。

「おっと。．．．ありがとう、もう一度礼を言っておく。私はミナキ。スイクンを追うものだ。人は私をスイクンハンターと呼ぶ。」

「私はマシロ。ただの通りすがり。」

スイクンハンターね、大層な呼び方だね。

「む？スイクンは？」

「さあ？私が来たときにはもういなかったよ。」

「そうか．．．。」

ミナキと名乗った人はガツクリ肩を落とす。スイクンを追いかけてたのに、入れ違いになったらそりゃ落ち込むか。

「それでも、一応塔の中も確認しておこう。」

塔の方を見上げるミナキさん。確かに、塔の中は見えないからまだいるかもしれない。あの水晶が通れるのか分からないけど。

「そう。それじゃ、私は行くね。」

ま、そこは私には関係ないからいいか。早くジムを回りたいし、さっさとコガネシティに行こう。

「うむ。君のことはクリスにも伝えておく。さらばだ！」

クリスと呼ばれた子を抱えたまま塔に駆け出すミナキさん。

男の人はすごいねえ、人を抱えたまま走れるんだもん。私には無理だ。

それじゃ、コガネシティに向かおう。

—————

「ん．．．。ハニは？」

「おお、目を覚ましたか。ここはスズの塔の最上階、結晶壁の中だ。そして、スイクンはもういなくなっちゃった。」

「そうですか．．．。わたし、失敗したんですね。」

スイクンの捕獲に失敗したわたしは形を落とす。．．．あれ、でも塔から落ちたはずだけど、怪我が少ない。

自分の体を不思議に思うわたしに気づいたのか、ミナキさんが話す。

「マシロという通りすがりのトレーナーが助けたくれていた。」

「そうですか。」

思わず聞き流してしまいそうになったが、聞いたことのある名前が出てきて聞き返す。

「……え、マシロさん？その人、着物を着ていて白い髪をツインテールにしてみました？」

「そうだが、知り合いかい？」

「いえ、面識はありませんが聞いていた人と特徴が一致するので、多分その人です。なんでも、カントーの事件で裏で動いていたとか。」

オーキド博士にチラツと聞いたただけなんだけど、カントーの凶鑑所有者と一緒に動いていたとか。

今はジョウトにいるらしいから、もし荒事に巻き込まれる事があればマシロ君を頼るといい。捕獲に関しては門外漢だがな。

と言って笑ってたっけ。

「そうか。なら、次に会ったときはお礼を言っておくといい。」

「そうします。」

「ところで、少し前にこのスズの塔が地盤沈下に巻き込まれたのは知っているか？」

「え？でも、この塔すごく綺麗ですよ？」

確かに町はひどい有り様だったけどスズの塔だけ綺麗だから、てっきり影響を受けなかったのかと思ったけどそうじゃなかったみたい。

「そう。町が崩落していた中でこのスズの塔が優先して修復された。その答えはこの像だ。」

そう言って指差したのは目の前にある像。みたことのないポケモンだけど、この像がなにか関係してる？

「さつき離れた地盤沈下はロケット団残党が引き起こしたものらしい。スズの塔が沈めば、自分の居場所を失ったホウオウが怒り戻ってくる、という仮説に基づいた実験だったようだ。そして、ホウオウの怒りを恐れたマツバ……この町のジムリーダーがスズの塔の再建を

最優先させたらしいが、間に合わなかったようだ。」

「間に合わなかった・・・？」

わたしが疑問を口にした瞬間、ホウオウの像が光った。

「これは・・・!?」

「この像は主の帰巢に反応して輝きを放つらしい。つまり、ホウオウは怒り舞い戻ってくるということだ。やつらの思惑通りにな。もしかしたら、スイクンもホウオウに会うためにこのスズの塔に来たのかもしれない。」

「・・・え？」

そういえば、スイクンがエンジュに来たのは自分の目覚めた場所、やけた塔を指してるのかと思ってたけど、実際にいたのはここスズの塔だった。ってことは・・・。

「さて、スイクンがここにいないのなら私は行こう。楽しかったよ、素敵なレディ。」

考え事をしているわたしの手を取ると、その甲にチュッと口づけをする。すると、ずっと隣にいたメガピよんが<sup>チ</sup>メ<sup>コ</sup>リ<sup>ー</sup>タがミナキさんを威嚇する。

「な、ななななにを!!」

「あーっはっはっは！さらばだクリス。またどこかで会おう、我がライバルよ！」

そして、高笑いをしながら飛び去っていった。それを見送り、わたしは膝を抱えるようにペタンと座り込んだ。そんなわたしにメガピよんは寄り添ってくれた。

「心配させてごめんね。でも、悔しいの。」

そう言うとメガピよんが落ち込んだように頭を下げる。

「ううん。スイクンを捕獲できなかったことじゃないの。スイクンの気持ちを分かかってあげられなかったことが悔しいの。」

スイクンがいたのはやけた塔じゃなくてスズの塔。その時点でなにか理由がある事に気づくべきだった。

スイクンはきつと、ホウオウと会いたかったんだ。だから結晶壁をはったんだ、邪魔されないように。それなのに・・・。わたしの目から涙が零れる。

「それなのに、わたしはやみくもに勝負をしかけてスイクンの邪魔をしていた。ごめんねスイクン……。あなたの気持ち、分かって上げられなくて。」

そうして、ひとしきり泣いた後、重たい腰を上げてスズの塔を出る。「さて、気持ちを切り替えないとね。会えただけど、マシロさんにもお礼を言わないとね。」

その後、野生のポケモンを捕獲できなくなったわたしはスリバチ山に行くことになる。

## 57話

エンジンを通り過ぎてコガネシティにやってきた。

ここにはラジオ塔やカジノ等、多種多様な建物が入り交じり、ジョウトでは1番大きい町だと言われている。

まあ、ラジオもカジノもあまり興味はないしジムに行こう。

周りの建物には目もくれずに、私はジムに入っただけだった。

そして・・・。

「ふう、大した事なかったね。」

ジムから出る私の手には、キラリと光るレギュラーバッジが握られている。

コガネジムのジムリーダーはアカネという女の子。コガネ弁でまくしたてるのが特徴。世間ではダイナマイトプリティギャルと呼ばれてるらしい。・・・悪口かな？

そんなアカネの繰り出すミルタンク相手にグロウで殴り合ってたっさり勝利。あまり疲れてないとはいえ、移動やらジム戦やらグロウには頑張ってもらってるから、今日はそろそろ休んで明日ヒワダジムに向かおう。

アカネ

ギャルって呼ばれるだけあって、うるさい人だった。性格的にも強さ的にも仮面の男ではなさそう。多分ジョウト地方ジムリーダー最弱。

—————

次の日、早速ヒワダジムに向かうとジムの前でバツタリとジムリーダーのツクシと遭遇した。

「あれ？もしかして、ジムリーダーのツクシ？」

「そうですけど、あなたは？」

「マシロ。ちやうどジムに挑戦しようかと思って来たんだけど、すれ違わなくて良かったよ。」

「ふう……。さつきも、アルフの遺跡で透き通った四足歩行の大型ポケモンに挑まれたんだけど、今日はそういう日なのかな……。いいよ、少しだけ待っててくれるかな？」

「分かった。」

「ありがとう。アルフの遺跡ではこの前もロケット団に襲われたし、あそこには何かがあるんだろうか……。」

なにやらブツブツと呟きながらジムの中に入っていく。

透き通った四足歩行の大型ポケモンってスイクンじゃないの？また違う人の腕試しをしてんだ。そのうち全部のジムを制覇しそう。というかこれ、スイクンと移動ルート被ってない？もしかしたらまた会うんじゃない……。

「お待たせしました。中にどうぞ。」

「あ、はーい。」

声をかけられてジムの中に入る。

ヒワダジムではストライクとかぶちーが火花を散らし、無事にインセクトバツジを手に入れた。

それじゃ、この調子でキキョウシテイに行こう。

ツクシ

女の子みたいな見た目だけど男。以前、ロケット団に襲われたことがあるらしいから、仮面の男の可能性は低そう。流星に部下に自分を襲わせるなんて間抜けなことはいらないでしょ。

—————

ヒワダシテイを出た私はグロウ、じゃなくてミスタに乗ってキキョウシテイに向かっていた。

と言うのも、スイクンとの戦いでボロボロにされたから、ジム戦はかぶちーとグロウをお願いしたんだけど、それが不服だったみたい。

だから、次は自分がやるんだってボールから出てきたと思ったなら、私を乗せて意気揚々と次のジムに向かって飛び上がった。次のジム戦は譲らないって意気込みがひしひしと伝わってくるよ。

「元気になったのはいいけど、ミスタは相変わらずだねえ……。しかし、ジムリーダーって全員強いと思ってたけどそうでもないのかな？」

色んな所を旅してミスタは自分より強い相手に沢山出会った結果、きさらに対しての執着は薄くなったけど、強者相手の戦いには貪欲になった気がする。

でも、ツクシは強かったけど、アカネは弱かったなあ。相性の問題なのかもしれないけど。

でも、あれならレッドやグリーンの方が強いや。そんなことを考えていた時だった。

「ん？あれ、なんだろう？」

視線の先に2体のポケモンに追いかけるエアームドとそれに乗ったトレーナーの姿。よく見てみると、追いかけているポケモンはスイクン以外の焼けた塔から飛び出した2体のポケモン。エンテイと……。そういや、もう1体は何て言うんだろう？

追いかけてられている2人は真っ直ぐこつちに向かってくる。

「っ！その君、危ないから退いてくれ！」

「エンテイとライコウとの戦いに巻き込まれんぞー！」

2体のポケモンに追いかけられながら、目の前にいる私に叫び声を上げる。

あの黄色い方はライコウっていうんだ。

それより、エンテイ達もスイクンと同じで腕試しをしているのかな？

それなら邪魔しちや悪いし、道を開けよう。

そう思っってミスタの背中に声をかける。

「ミスタ、道を開けよう？・・・ミスタ？」

しかし、ミスタはむしろエアームドに並んでいく。

いや、避けようって言うてるのに何で寄っていくの？

・・・もしかして、スイクンに勝てなかったからエンテイとライコウでリベンジしようとしてる？

「聞こえなかったのか？何故隣に並ぶんだ!？」

「いや、私もそうしようと思ったんだけどね・・・。」



エアームドに乗った青年が叫ぶが、ミスタはもうやる気だし、こうなると話を聞かないから仕方ないじゃん。

「2対2だと思っただけど、隣のおじさんはなにもしてなさそうで、実質2対1だよな？それなら片方は私達がもらっていいかな？それに、ほのおもかみなりも苦手でしょ？」

「このハヤト、確かにほのおもかみなりも苦手だが……。分かった。君の相棒はスターミーか、それならエンテイを頼む。」  
「分かった。」

助けてくれたエンテイと戦うのは少しだけ気が引けるけどしょうがない。実際、ハヤトさんが言うように、ライコウとは相性が悪いしね。

「……あれ、ハヤト？」

名前を聞いて、相手の姿をまじまじと見る。

青い髪で袴姿の青年。この人、最近就任したキキョウシテイのジムリーダーじゃ……。

「……どうした？」

「いや、なんでもないよ。」

まあ、後でいつか。それより今はエンテイと、ライコウだね。

話している間に、私達の両隣にエンテイとライコウが追いついている。上には雨雲が広がり、そこから激しい電撃が迸るとハヤトさんの乗ったエアームドを襲った。

「ぐあああああー！」

電撃を受けたハヤトさんは悲鳴を上げるが、次はエンテイが休むことなくだいまんじとハイドロポンプを放つ。

「ミスタ、ハイドロポンプ！」

だいまんじとハイドロポンプがぶつかり、互いに相殺し、一瞬エンテイと視線が交錯する。

ゴメンね、邪魔するつもりはなかったんだけど成り行きで。とりあえず、心の中で謝っておいた。

それより、ほのおでみずを相殺されたかあ。すごい火力だね。

エンテイも相殺したのを見て、さつきよりも大きなエネルギーを溜

め始め、エンテイから炎が吹き上がる。

シンプルに威力を上げて押し切ろうってところかな。

それなら、メテオビームで……!と思ったとき。

「君！タイミングを合わせろ！」

ハヤトさんから声がかかる。そっちを見ると、ライコウもエネルギーを溜めている様でバチバチと帯電している。そんな中、エンテイとライコウの射線が重なるように私達に並ぶ。

これは、そういうことかな？

「オツケー。そっちもしくじらないでよ！」

そして、私達が並んだ直後エンテイとライコウから特大の炎と電撃が放たれる。

「今だ！」「今だよ！」

瞬間、私達はその場を飛び退き、私達のいた場所で炎と電撃がぶつかりあうと、激しい閃光を放ちながら互いに相殺した。

「よく気づいてくれたね。」

「たまたまだよ。」

「謙遜しなくてもいいさ。それより、さっきあれだけのエネルギーを使ったんだ。しばらくは技が打てまい。さあ、ボールに収まれ！」

ハヤトさんは2つのボールをエンテイとライコウに向かって投げ  
る。

が、その2つのボールは乱入者のバブルこうせんによって受け止められた。

「なっ！スイクンだと!？」

スイクンが来たことによつて、この場に焼けた塔から出てきた3体が勢ぞろいした。

「お、おい。流石に逃げようぜ！今のは惜しかったが、焼けた塔から出てきた3体が揃ったんだ、勝ち目はねえ！」

「いや、スイクンまで現れたんだ。尚の事、諦めるわけにはいかない！名だたるジムリーダーでも力が及ばなかったスイクン、やつも捕獲する！行くぞ、エアームド！」

「まじかよー！」

ハヤトさんはエアームドの翼を硬質化させ、スイクンに向かっていく。

「受けてみる、はがねのつばさー！」

スイクンの額の水晶とエアームドのはがねのつばさが激突し、ガキーンと鈍い音が鳴り響いた。

「嘘だろ、ヒビが!？」

おじさんの叫び声でエアームドの翼を見ると、ピキピキとヒビが入っていき、次の瞬間パリンと砕け散った。

あの水晶、はがねのつばさより硬いんだ。すごいね。

「まだだ!」

そう言うと、ハヤトさんは無造作にボールを周囲に投げ始める。

え、なんかめっちゃくちゃだけど大丈夫？

「どこ投げてんだよ!」

「黙って見ている。」

しばらくすると、無造作に投げられたはずのボールが変な軌道を描きスイクンに向かっていく。

何をしたんだろう?・・・1個ぐらいいいよね?

「ミスタ、れいとうビーム。」

ちようど私の上を飛んでいたボールを撃ち落とすと、手を伸ばしてキヤツチする。

「冷たっ。」

冷たさで危うく落としそうになりながら、凍りついたボールを観察すると、ボールの溝に何かが差し込まれている。これ、ブーメラン？

だから不規則な軌道でボールが飛ぶんだ。面白いね。

そんなボールがスイクンに向かって大量に飛んでいく。

「不規則に変化するボールの軌道、スイクンでも読み切れまい!」

ハヤトさんの勝ち誇った声と同時にボールがスイクンに当たる瞬間。

エンテイの放った炎とライコウの電撃が、スイクンの周囲のボールをまとめて焼き払った。

「なにっ!？」

そして、エアームドの体がガクツと傾くと地上に向かって落下していく。羽が砕けたからか、バランスを取れなくなったエアームドが地上に落下していく。

「まずっ！グロウ、お願い！」

地上に真つ逆さまのエアームドをグロウが受け止めると、ゆっくり地上に降ろす。

その様子を確認すると、私も隣に降りる。

「ありがとう、助かったよ。」

「気にしないでよ。一緒に戦った仲でしょ。それにしても、色々惜しかったね。」

「それでもないさ。結局、あの3体に決定打は一撃も入れられなかったんだ。力の差は歴然だった。」

そう言われれば、そうなのかな？

「だからさっさと逃げようって言ったんだ。」

それにしても、さつきから文句しか言わないこのおじさん。ハヤトさんとどんな関係なんだろう？

全然仲良さそうには見えないけど……。

「その人は……。」

と私が言いかけたとき、私達の前に3体のポケモンが降り立つ。そして……。

「さあ、次は君の番だ。」

ハヤトさんが静かに告げる。

え、私も戦うの？

焼けた塔から飛び出した3体のポケモンと対峙する私達。

「お、おい。こんなちつさい嬢ちゃんにも戦わせるのかよ。」

「彼らはそれを望んでいるようだ。」

静かに私の様子を伺う3体。

どうやら、本当に戦わないと駄目みたい。

ついこの前、スイクンと戦ったばかりなのになあ。

「はあ・・・、仕方ないか。かぷちー、ジム戦の後で疲れてる所ゴメンね。」

謝りながらかぷちーをボールから出す。

あまり無茶はさせたくないけど、相手は3体だからこつちも3体じゃないと勝ち目はないよね。

実際、スイクンには1対1でも負けちゃったし。

私の前にミスタ、グロウ、かぷちーが並ぶ。

「それじゃ、始めようか!」

私の声を合図にエンテイがだいもんじを放つと同時に、ミスタがハイドロポンプで迎え撃つ。

私達の間で激突したハイドロポンプは、水蒸気になって相殺される。

そして、その水蒸気を突き破り、電気を纏ったライコウが突撃してくる。この技はスパークかな?

「グロウ、コメットパンチ!」

ライコウの体とグロウの拳がぶつかり合い、周囲に電気が迸る。

拮抗したのは数秒だけ、押し合いに負けたグロウはバチバチと帯電しながらふっ飛ばされた。

「グロウ!」

グロウを吹っ飛ばされるが、相手も休ませてはくれない。

いつの間にか水蒸気を飛び越したスイクンが、額の水晶を輝かせオーロラビームを放とうとしていた。

「撃たせちや駄目だよ！かぶちー。ふいうちー！」

スイクンの体をかぶちーの大顎が穿ち、吹き飛ばす。

「ミスタ、いけるね？メテオビーム！」

そして、ハイドロポンプを撃ったあと、力を溜めていたミスタがライコウにメテオビームを放つ。

が、ライコウはその場を飛び退いてメテオビームを躲す。

メテオビームを躲したライコウはエンテイの隣に降り立つと、それと同時に吹き飛ばされたはずのスイクンもその隣に戻ってくる。

「おい……。あの嬢ちゃん、スイクンをぶつ飛ばしやがったぞ……。」  
「静かにしている。」

後ろの2人の眩きが聞こえる。確かにふっ飛ばしたけど、そのスイクンは涼し気な顔で戻ってきてるんだよねえ……。

でも、流石にノーダメージってことはない……よね……？

と、そんなことを考えていると吹き飛ばされたグロウが戻ってくる。

「グロウ、大丈夫？」

「グオオウ。」

小さく返事を返すが、受けたダメージは大きそう。それでもグロウは私達の前に出る。

すると、ライコウも合わせて前に出てくる。

どうやら、グロウの相手はライコウがするらしい。

「なら、ミスタはエンテイ、かぶちーがスイクンだね。」

そう言うと、不服そうにミスタが振り返る。

いや、そんな反応しないですよ。スイクンはミラーコートが使えるんだからミスタじゃ厳しいでしょ。リベンジしたいのは分かるけど。

それよりグロウ、大丈夫かな？さっきは押し負けてたけど……。

そんな事を思っていると、ライコウの体が電気を纏いグロウに突進する。

そして、グロウはもう一度それを正面から受け止めた。

基本的に真面目なグロウが、押し負けると分かっているのに、正面から受け止めるのには、きつとグロウなりの理由があるはず。

その証拠に、きつきは数秒しか保たなかった拮抗が、今はずっと続いている。だから……。

「信じてるよ、グロウ。」

ピカッ!!

私が小さく呟いた瞬間グロウの体が輝きだし、体が変わり始める。鋼鉄の体はより一層大きく、ゴツゴツしたものに。

腕は2本から4本に増える。

「グオオオオオオオオ!!」

進化したグロウが吠え、一回り大きくなった腕を振り上げると、コメットパンチを放ちライコウを殴り飛ばす。そして、振り切った腕とは逆の腕にエネルギーを集めると、殴り飛ばしたライコウに向かって銀色のエネルギー弾を放つ。

「あのポケモン、今度は殴り返したぜ……。」

「それに、追撃のおまけ付きだ。たが……。」

ラスターカノンがライコウに届く前、その間に割り込むのはスイクン。ライコウを庇うようにミラーコートを展開し、ラスターカノンを受け止め反射させようとする。

でも、グロウを信じて待っていたのは私だけじゃないよ!

「かぷちー! かみなりのキバ!」

ラスターカノンを受け止めるミラーコートに、電気を纏った大顎を叩きつけ、ミラーコートにヒビを入れる。

「このまま、ミラーコートごと叩き割るー!」

それを見たエンテイが炎を纏ってかぷちーに突進してくる。

でもね、今からカバーに入っても遅いよ?

「待ってたのは私とかぷちーだけじゃない、ミスタ!」

かぷちーと同様、力を溜めていたミスタが前が出る。チャージ完了、だね!

「メテオビーム!」

瞬間、閃光がエンテイを飲み込み、それと同時にパリンと甲高い音が響くと、ミラーコートを叩き割ったかぷちーがスイクンを地面に叩きつけた。

そして、メテオビームの閃光と、叩きつけた時に巻き上がった砂埃が消えたときには、エンテイとスイクンの姿は無かった。

何処かに行った、かな？

ふう、と息を吐くと、さつきまでの騒音が嘘のように静けさに包まれた。

「ふう……。次は私達の勝ちかな。それよりグロウ、立派になっちゃって。進化のタイミングが分かってたから正面から受けたんだね。」

一回り大きくなった体をペタペタと触ると、照れたように体をよじる。

何かをするつもりだとは思ってたけど、進化するとはねえ……。ライコウも殴り倒すし、ラスターカノンも使えるようになってるしで、より一層頼もしくなったね。

「ー」

「いや、ミスタもグロウが進化したからって勝負を挑もうとしない。さつきまで戦ってたでしょ？。あーもう、ちよつと戻って。」

言っても聞かずにグロウに突つかかるミスタをボールに戻す。バトルの後ぐらい一息つかせてあげてよ、ミスタ。

「まさか、あの3体を倒すとは思わなかったよ。」

「はええ……。人は見かけによらないもんだなあ……。」

後ろからさつきの2人組がこつちに歩いてくる。

「そっちも、怪我がなさそうだなにより。……ところで、ジムリーダーのハヤテさん、だよな？こんなところで何してたの？」

「少しばかり、トレーニングを。その時にたまたまこのおじさんに会ってね。なんでも、ポケモンの密猟をしたとか。ちようどその時にエンテイ達に会って成り行きで一緒に逃げてたのさ。」

「へえ、密猟ねえ……。そんなの、ドサクサに紛れて逃げる途中で捨てちゃえばよかったのに。」

白い目でおじさんを見る。

「おいおい、物騒なこと言うなよ。」

「そうそう。それに、立场上、放って置くことはできないから……ねっ！」



カシャ、という音と、ねっ、という言葉に合わせておじさんの手に手錠がハマる。

「へ?」

「僕は警察官だからね。悪人は捕まえる義務がある。」

そう言つてハヤテさんは懐から手帳を見えるようにとりだす。

「なるほど。」

「一緒に戦つた仲だろ?見逃してくれよお。」

一緒につて・・・あなた何もしてないでしょ。

ハヤテさんは、ハイハイ、大人しくしてろよと言いながらおじさんをエアームドに乗せると、こちらに戻ってきた。

「君はマシロくん、だよな?」

何か用かと思つたら、何故か私の名前を知っていた。

「そうだけど、なんで知つてるの?」

「スイクンが各地のジムリーダーを回つている中で、同時期に同じことをするトレーナーが、噂にならない訳ないだろ?」

「あー・・・確かにそうかも。」

そりやそうだ。ジムリーダーを巡るスイクンが噂になるなら、それと同じことをしてるトレーナーが注目されない訳ないよね。

「なら、今日はキキョウジムに挑戦しようとしたのかな?」

「そうなんだけど、流石に今日は疲れたから明日にするよ。」

「成る程ね。でも、それなら大丈夫だよ。今の戦いを見て君の実力を認めないトレーナーはいないさ。ウイングバッジ、持つていくといい。」

「あ、どうも。」

スツと差し出されたバッジを受け取る。

前もこんなことがあつたなあ・・・。またジムリーダーと戦えなかつたよ。ま、今回は隣で戦いを見ることができたからいいか。

「あ、それと。」

ハヤテさんがエアームドに跨りながら思い出したように言った。

「今、ポケモン協会からジョウトとカントーのジムリーダー全員に招集がかかっている。まだ行っていないジムがあるなら急いだほうが

いい。」

「招集？何かあったの？」

「詳しくは分からない。まあ、君の事は噂になっっているから、招集に応じるのをギリギリまで待ってくれるジムリーダーもいるだろうが、それでも入れ違いになるかもしれない。」

「そっか。それなら、急いでもいいね。」

私がそう言うと、エアームドはゆっくりと飛び上がる。

「それじゃ、健闘を祈ってるよ。」

最後にそう言うと、エアームドは飛び去っていった。

「さてと、ジムはあと2つ。急げば招集より先に回れるかな。それより……。」

私が言葉を区切ると、私の前に現れる3つの影。

「君たち、何処かに行ったんじゃないの？」

倒したあと姿が見えなかったエンテイ、ライコウ、スイクンが並んでいた。

「それで、私に何か用かな？」

そう言うと、スイクンは私の足元にある凍ったスーパーボールを指す。

「ん？もしかして、連れて行ってほしいの？」

コクリと頷く。つてことは、自分が選んだトレーナーに付いていきたいから各地のジムリーダーに挑んでたのかな？

「と言っても、空のボール持っていないし……。あ、そうだ！」

スイクン、エンテイ、ライコウ。

それぞれ水、炎、電気タイプ。それなら。

「カントーのジムリーダーなんだけど、カスミとカツラって人の所に行ってみてよ。カスミは水タイプ、カツラさんは炎タイプのエキスパートだから、私よりも相性はいいと思うんだ。電気タイプのエキスパートはマチスって言う人なんだけど……。あんまりオススメはできないけど、とりあえず会ってみてよ。」

それぞれのタイプのトレーナーとして見るなら、私よりも適任だしね。

そう言うと、スイクン達は少しだけ話をして、サツと飛び去っていった。

「ふう……。やっと一息つけるねえ。」

私は3体が飛び去った方を見ながら、小さく呟く。

でも、少しだけでもったいなかったかなあ。

せっかくあの強さのポケモンと一緒に来てくれるって言ったのに……。空のボール、持っておいたほうがいいかな？

でも、きららを入れると7体になるし、だからってスイクン、エンテイ、ライコウのうち2体だけ連れて行くのも、除け者にしたみたいで嫌だし。

とりあえず、カントーのジムリーダーが認められて、連れてつてくれるといいな。マチスが認められたら複雑だけど。

ハヤト

新米ジムリーダーで警察官。

最近就任したってことは、仮面の男の可能性はなさそうかな。

それにしても、あの3体の方がジムリーダーよりよっぽど強かったよ。

## 59話

エンテイ、ライコウ、スイクンとの戦いの後、チョウジシテイにやってきた。

やってきたんだけど……。

「チョウジジム、なんでこんな辺鄙な場所に建てたんだろう。それに、ジムも氷で出来てるし……。」

しかも、すごく寒い。

町の郊外で地下の奥、さらには氷で出来た建物の前で1人愚痴る。こんなところにジムを構えるとか、バッジを渡すつもりないでしょ？ そんな事を考えながらジムに向かって歩いていると、ジムの中からパウワウが出てくる。

パウワウは、私の前で立ち止まると啞えていた手紙を差し出す。

「これ、私に？」

コクリと頷くパウワウから手紙を受け取ると封を開ける。中から出てきたのは1枚の便箋とアイスバッジ。

『手紙での挨拶になって申し訳ない。本当は君の事を待つつもりだったのだが、理事長が直々に招集に来てしまつてね。だが、せつかく来てもらったのに手ぶらで帰つてもらうのも忍びないので、バッジを持っていくといい。なに、噂はかねがね。実力は申し分ない。気にせず持つていくといい。』

「あー、入れ違いになつたかあ……。ま、しょうがないか。」

ポケモン協会に招集をかけられたら、ジムリーダーは断れないだろうし。

でも、氷使いのジムリーダー。

状況的には仮面の男に1番近い相手だから、戦っておきたかった相手なんだけどな。

招集を口実に逃げた可能性もあるかもしれない。

でも会えないなら仕方ないや。最後のジムリーダーが招集に応じる前にさっさと次に行こう。

ヤナギ

会えなかった氷使いのジムリーダー。

相対的に他のジムリーダーよりも警戒度は高いかな？

というか、会ったことのないトレーナーにバツジをあげてもいいのだろうか？

—————

ジムリーダーが不在のチョウジジムはサツサと後にして、フスベシテイにやってきた。

ジムの前降り立つと、私を待っていたようでジムトレーナーが現れる。

「マシロ様ですね？お待ちしました。ジムリーダーのイブキ様がお待ちです。」

そう言つて踵を返し、ジムの中に進んでいく。

話が早くて助かるけど、この人私に来るまでずっと待ってたのかな？

「ずっと待ってたの？」

「いえ、そこまで長い時間を待つていないのでお気遣いは不要です。」

「やっぱり待つてたんだね、お疲れ様。」

気遣いは不要と言われても、ねぎらいの言葉はかけておく。それにしてもここのジムリーダー、人使いが荒いのかな？

そんな事を考えていると、広間のような場所に出る。そこには、ボディースーツにマントを羽織った女性、ジムリーダーのイブキが立っていた。

そのカッコウ寒くない？チョウジタウンとか行つてみなよ、絶対風邪ひくから。

「待つていたぞ、貴様がマシロか。噂は聞いている、スイクンと同様にジムリーダーを倒して回つていろ。」

初対面のハズなのに、すごい高圧的。

なんかこの人のことはあんまり好きになれそうにないなあ。

と言うか、妙にピリピリしてない？

「妙に気が立ってる気がするけど、何かあったの？」

「以前、スイクンに敗れてからずっとこうなのです。そんなときに貴女の噂を聞いて、次は負けられないと意気込んでおられるのです。」

小さい声で尋ねると、小さい声で返してくれる。

いや、あれは意気込んでるんじゃないと思うんだけど。それより、スイクンに負けた腹いせにボッコボコにしてやろうって感じじゃない？

「何をコソコソ話している！」

「いえ、何でもありません！」

「ならいい。それより、早く始めよう。」

案内してくれた人を怒鳴ると、早く始めたいのかスグにボールからハクリューを繰り出す。

「さあ、お前もポケモンを出すといい。それとも、隣のスターミーが相手をしてくれるのか？」

「そうだね。ミスタ、お待ちかねのバトルだよ。」

「――」

電子音を響かせ、意気揚々と前に出る。

「ハンデだ。先手はくれてやろう。」

「え？いいの？」

「構わん。好きなようにかかってこい！」

腕を組んで胸を張るイブキ。ミスタにそんな事を言っただ大丈夫？

「ねえ、ホントにいいの？」

「はい。イブキ様は先手を譲ってもなお勝つことで、圧倒的な勝利で溜飲を下げ……なんでもありません。」

「ジム戦でそんな私怨を持ち込んでいいの？」

「スイクンに負けたことがよっぽど堪えたのでしよう。……失言でした。忘れて下さい。」

小声で隣のジムトレーナーと話すと、どうやら私怨モリモリでバト

ルしているようだ。

「こんなのがジムリーダーでいいのかなあ。いや、ロケット団がジムリーダーをやってるカントーよりましか。」

「何をしている？早くかかってこい！」

「ハイハイ……。ミスタ、メテオビーム、全力で撃とうか。」

ミスタが光を集めて力を溜め始める。

「先に聞いとくけど、ジム壊してもいいの？」

「安心しろ。スターミー程度の攻撃ではビクともせん。」

「言質は取ったよ？」

さつき、スターミー程度って言われたときミスタの体がピクツて跳ねてたから、多分怒らせたかも。まあ、言質は取ったからいいか。

おお、ミスタの体が見たことないぐらい輝いてる。

戦闘中にこんな長時間溜める暇なんてなかったから、こんなミスタは初めて見たよ。

それじゃ、やっちやおうか！

「ミスタ、メテオビーム。」

静かに告げると、極大の閃光が放たれた。

「なっ！」

一瞬だけ聞こえたイブキの驚く声をかき消し、ハクリューを飲み込むとそのままジムの天井をぶち破って天へと光が伸びていく。

おお、この威力ならスイクンのミラーコートも砕けそう。

……。きらら、この威力のメテオビーム溜め無しで撃てるんだよね。

やっぱりあの子だけ規格外だなあ。

「バカな、なんだこの威力は……。スイクンの技なんかよりよっぽど強いではないか……。！」

膝について項垂れるイブキ。

「傲慢な態度だからそうなるんだよ。ワタルといい、イブキといいドラゴン使いはこんなのばかりなの？」

「今、ワタルと言ったか？」

さつきまで項垂れていたはずのイブキがキツとこちらを睨みつけると、何処からか取り出した鞭を振る。

「ちよっ！あぶなっ!!」

私がある場から飛び退くと、さっきまでいた場所を鞭が通り過ぎる。

「イブキ様、やりすぎです。落ち着いてください！」

「黙れ！兄者の事を知っている者だぞ、落ち着いてなどいられるか！」

「ガッ！」

イブキの振るった鞭が、隣のジムトレーナーを弾き飛ばす。それを見て思わず目を細くする。

「ねえ、何があつたかは知らないけど、この人は関係ないでしょ。流石にやりすぎじゃない？」

意識してなかったけど、自分で思っていたよりも低い声でた。

「・・・っ、うるさい！」

自分でもやり過ぎだと思つたのか一瞬怯んだ様子だったけど、引つ込みがつかないのか、もう一度私目掛けて鞭を振る。

「ハア、仕方がない。かぶちー！」

ボールから飛び出したかぶちーは、こつちに向かつてくる鞭を大顎で挟み込むと思いつき引つ張る。

「なっ！うわああ！」

短い悲鳴を上げて私の方に引つ張られたイブキは地面を転がり、私達の前で止まる。

「はたきおとす。」

そして、イブキの頭目掛けて大顎を振り下ろす。

ように見せかけて、イブキの頭スレスレに振り下ろした大顎が地面を穿った。

「ちよっとは頭が冷えた？」

「なっ・・・めるなあ!!」

少し脅しておけば大人しくなるかと思えばそんなことはなかった。鞭を放り捨てボールを投げると、そこから現れたのはキングドラ。

「キングドラ、はかい・・・。」

「グロウ。」

キングドラがエネルギーを溜めきる前に、グロウの腕がキングドラ



を地面に叩きつけると、溜めていたエネルギーが霧散した。

「この距離ではかいこうせんみたいな大技撃つのやめてくれる？」

まあ、人の話を聞かないみたいだしこの人の事は後回しにして、ジムトレーナーさんに肩を貸す。

「大丈夫？理由はよく分からないけど、災難だったね。」

「いえ……。イブキ様は兄弟子であったワタル様を慕っておりますので、思わぬ所で行方の分からないワタル様の名前が出て取り乱したようです。」

「ああ、ワタルと知り合いだったのね。」

ジムトレーナーさんに肩を貸して立ち上がらせると、悔しそうにしているイブキを見下ろす。

「心配なのは分かるけど、だからって鞭を振り回すのはやめてよね、危ないし。」

「……。お前に何がわかる？」

「分かるよ、経験あるし。」

私の場合は、目の前で連れて行かれて何もできなかったけど。思い出すだけで落ち込むや。

そんな私を見て、何かを察したのか顔を伏せる。

「……。すまない、取り乱した。お前にも申し訳ないことをした。」

「いえ、大丈夫です。お気になさらないでください。」

とりあえず、落ち着いたかな？

そう思つて一息ついていたら、奥からおじいさんとスーツを着たおじさんが歩いてくる。

「フガフガ。」

「これでは、どちらがジムリーダーかわからんの。器が違うわい。とおっしゃっています。」

「長！」

長つてことは、長老みたいな立ち位置の人？

というか、隣のスーツの人は通訳？フガフガしか言っていないのによく分かるね。

「フガフガフ。」

「イブキはこの通り、未熟者だが謝っておる故、許してやってくれんか？とおっしゃってます。」

「私は何ともないし、こっちの人も気にしないでって言ってるからもういいよ。」

実際、鞭が当たったのこの人だけだし。

「ありがとう。・・・これがライジングバツジだ。受け取れ。」

イブキがお礼を言いながら立ち上がると、バツジを取り出し、それを受け取る。これで全部のジムを回ったかな？

「あ、ちなみにワタルの居場所は私も知らないよ？1年前に戦ったつきりだし。」

「そうか・・・。」

さて、用事も済んだし今日は休んで明日うずまき島に戻ろうか。

あ、きららにお土産買って帰らないと。いかりまんじゅうとキキヨウせんべいでいいかな？

イブキ

短絡的で感情的。こんな人が何年も前から暗躍しているとは考えにくいかな。でも、短絡的ってことはなにをするか分からない、とも言えるし、白とは言い切れないかも。

—————

次の日、お土産を買ってうずまき島に戻ると・・・。

『うるさいー！ー！ー！ー！ー！ー！』

というきららの叫び声と、島から放たれるメテオビームの閃光。

そして、それを受けて吹き飛ばされていく大型の鳥ポケモンの姿があった。

## 60話

ふっ飛ばされていく大きなポケモンを見送り、そのポケモンがいた島に降り立つ。

『おひるねのじゃましないでよ〜!』

そして、怒りながら別の島から飛んでくるきらら。

「ただいま、きらら。」

『あー!おかえりましろー!』

声をかけると、嬉しそうに頭の上に飛び乗ってくる。

「おっとっと。それより、今のは何だったの?」

『しらない。おひるねのじゃまされたからとおくにいつてもらったー。』

「そっかー、知らないかー。」

お昼寝をしてたなら知らないのはしょうがない。

それじゃゴールド達はどこだろう?

そう思い辺りを見渡すとさっきのポケモンがいた場所にゴールドとシルバー、それにもう1人見覚えのある人が呆然と立ち尽くしていた。

「・・・おい。オレ達が散々苦労したルギアをぶっ飛ばしやがったぞ。」

「アイツがいればなんとかなるといふのは、比喻でもなんでもなくそのままの意味だったようだな。」

「今の・・・なに・・・?」

「3人ともボーっとしてどうしたの?というか、クリス・・・って言ったっけ?どうしてここに?」

私が声をかけるとハツとした様子で3人がこっちを見る中で、ゴールドが話し出す。

「いや、ポケモンの群れに襲われたら空飛ぶおっさんが現れてルギアにぶっ飛ばされたら海空陸のトライアスロンで吹っ飛んで行った。」

「ああ、うん。意味わかんない。シルバー、説明お願い。」

混乱してるのか、要領を得ない。

「おそらくだが、ルギアが暴れ出したことによってポケモンの群れが大移動をしようとした所にオレ達がかち合った。」

「ふむふむ。」

「それで、群れに紛れるように島を出たらそこにレアコイルのひかりのかべで作った檻のようなものに乗ったおっさんが現れて、オレ達の鞆を差し出したんだ。」

「・・・宅配便?」

「違う!・・・そいつは、鞆等の道具と引き換えに仮面の男の情報を求めてきた。だから、奴について話していたんだが、その最中にルギアが現れて暴れ回った。」

「ルギアって、さっき吹っ飛んでったポケモン?」

「ああ。そして、どうにか地上に引きずりおろしたが、そのまま押しつぶされそうになった所で。」

「あんたの頭の上のソイツがぶっ飛ばしたってわけ。」

最後はゴールドが言葉を引き継ぎ、クリスはコクコクと頷く。

おっさんはよく分かんないけど、きららを置いていったのは正解だったかな。

「ありがとね、きらら。あ、これお土産ね。おせんべいとおまんじゅう。」

『わーい!』

私の手からおせんべいを受け取ると、私の周りをクルクルと飛び回る。

「お、キキヨウ名物のキキヨウせんべいじゃねーか。オレにもくれよ。」

「え?ゴールドの分なんてないよ?」

「なにい!?!てめえ、その手に持つてるのよこしやがれ!」

『あげない!』

自分の分がないことを知ったゴールドは、きららからせんべいを奪おうと追い掛ける。おっさんが始まる。

「あいつはいつたいたい何をやっているんだ・・・。」

「あの・・・!」

それを見てシルバーは頭を抱えるなか、クリスが声をかけてきた。  
「マシロさん、ですよね？スズの塔では助けてくれたそうで。ありがとうございます。ありがとうございました！」

「お礼なんていいよ。たまたま通りかかったただけだし。ところでクリス、だったっけ？なんでここに？」

「はい。わたし、オーキド博士からの依頼でポケモン図鑑のデータを集めてるんです。それで、まだ捕まえていないポケモンが多い南西部に来たんですけど……。」

「巻き込まれちゃったか。」

「はい……。」

「あだだだだだ!!!」

『あはははははー!!!』

今度はきららがスピードスターを撃ちながらゴールドを追いかけていった。楽しそうに何より。

「おい、こつちだ。」

いつの間にか島の奥の洞窟を覗いていたシルバーが私達を呼ぶ。

「どうしたの？」

「これを見ろ。」

駆け寄った私とクリスに中を見るように促す。

洞窟の中には足跡や尻尾の後、それも大型のポケモンのもの。ってことは……。

「ここ、ルギアの住処？」

「うずまき島は、4つの島で成り立っていて地下で繋がってるって……。その広さならあのポケモンが住処にしてもおかしくないわ。」

「お前ら、そんなところで何やってんだよ？」

きららからおせんべいを奪うのを諦めたゴールドがこつちに走ってくる。その後ろにはいかりまんじゅうを食べるきらら。

『おいしいね〜。』

「気に入ってもらえて何よりだよ。」

『ありがとう！』

そのまま頭の上に降りるきらら。こぼさないですよ？

「なんだこりゃ!？」

「所々、暴れた跡もある。ルギアが暴れ出したのは、住処と自分自身を攻撃されたことによる怒りのためだろう。」

んー？それと同じ話、最近聞いたことあるんだけど……。

ロケット団がスズの塔を破壊したときと同じ状況じゃん。

ってことは、これをやったのはロケット団か仮面の男？

「これ見てー！」

クリスが大声を出してポケモン図鑑の画面を見せる。表示されているのはエラーメッセージ。

なにこれ？

「なんじゃこりゃ?！」

「追跡システム。あなた達もポケモン図鑑を持つてるなら知ってるでしょ?！」

クリス、この反応は絶対に知らないって。

どうやら、クリスも同じことを思ったみたい。

「嘘でしょ……?えっと、とりあえずルギアがどこに行ったかを追跡できるんだけど、エラーが出てるってことは……。」

「追跡できない状態。つまり……。」

「……捕獲された?！」

シルバーの言葉を引き継ぐ。

「んな馬鹿なことあるかよ!さつきまでそこにいやがったんだぞ?オレも追う、シルバーお前もやれ!やり方教えろよ……えっと、クララ?！」

「クリスです!はあ……。あなたはゴールドで、こっちはシルバーであってる?！」

「おう!！」

「操作は……。」

ポケモン図鑑を取り出し、カタカタと操作する3人。

「きらら、2人は強くなった?！」

『なった・・・かな?まだ、みすたのほうがつよいよ?』

「まあ、そうだろうねえ。」

きららの強さを目指して1人で旅して、私の手伝いをしてロケット団や四天王と戦ってきたんだから、簡単に追い付かれたらミスタの立つ瀬がない。

「だああっつ!!エラーだど!?壊れてんのか!?!」

「いや、オレのもだ。」

ポケモン凶鑑を振り回すゴールドに、シルバーは自分の凶鑑をみせる。そこに表示されているのもエラーのメッセージ。

「3台同時に故障なんてあり得ない。やっぱり捕獲されたのよ!」

「あの一瞬でそんな事できるのかよ!?!」

「多分、最初から捕獲が目的だったんじゃない?住みかを荒らして怒らせて、その主人を呼び込むって、全く同じ事をしてた集団がいたでしょ?」

私がそう言うと、3人がハツとして口を揃えた。

「**「ロケット団!!」**」

「多分、捕獲したのはロケット団か仮面の男で間違いないかな。ってことは、ホウオウも捕獲するのが目的なのかもしれない。」

「そういえば、ホウオウの像が光るときはもうすぐホウオウが帰ってくるって、ミナキさんが。」

「それなら、スズの塔でホウオウを待ってたら仮面の男も来るって事だよな?」

「でも、近々としか分からないって・・・。」

「そっか。なら、ホウオウのことはとりあえず置いておこう。」

その時、プルルルとクリスのポケギアが鳴る。取り出したポケギアにはオーキド博士の文字。

「もしもし、博士?」

『クリス君、無事じゃったか。タンバ周辺に異常気象と聞いて慌てて電話したんじゃない?』

「それが・・・わたしは無事ですが、大きなポケモンに襲われてイエローさんとはぐれてしまっ・・・。」

『はぐれたじゃと!?・・・いや、イエローはああ見えて危険には慣れるから心配はいらんと思うが、一応そっちに向かっている気象調査隊に捜索を依頼しておこう。』

イエローもこっちに来てたんだ、無事だといいいけど。

『それとは別に、新しい依頼がある。今からセキエイ高原に向かつてほしいんじゃ。』

「セキエイ高原?」

『そうじゃ。同じ事をもう1人の凶鑑所有者のゴールドに頼もうと思つてたんじゃが、連絡がつかんのだよ。あやつはどこで何をしているのやら・・・。』

「あの・・・、セキエイで何をするのかはともかく、彼なら今わたしの横にいます。」

「よっ!」

『な!』

まあ、ゴールドのポケギア湖に沈んでたもんね。そりや連絡なんてつかないよ。あの時、回収しておいた方がよかつたかな?でも、凍った湖に入るとか自殺行為だよねえ・・・。それに、回収しても、壊れて使い物にならなかつたかもしれないし。

『うおっほん!それなら、2人でセキエイ高原に向かつてくれ。今年のポケモンリーグでは、エキシビジョンマッチという名目でジムリーダーを全員招集してある。そこで、君達に仮面の男を見つけ出してほしいんじゃ。』

「分かりました。」

『一応マシロくんにも頼んでみるが、あの子はブルーのお願いか最優先じゃからのお・・・、聞いてくれるかどうか。』

「え、私?別にいいよ。」

『はっ!』

あ、私の名前が出たから思わず口を挟んじやった。

急に出てきたから博士も素っ頓狂な声を出してる。

いつ戻るか分からないホウオウを待つよりかは、セキエイに向かったほうが良さそうだから、引き受けよう。



『……マシロくんもいるのか?』

「……はい。」

『……珍しいこともあるもんじゃ。』

クリスと博士が同時にため息をついた。

『じゃが、マシロくんが手伝ってくれるなら心強い。やってほしいことはさつき伝えた通り、セキエイ高原で黒幕を暴いてほしい。』

「やることは分かったけど、もう1人の凶鑑所有者には頼まないの?」

『……もう1台の凶鑑は盗まれたんじゃ。だから、3台目の凶鑑所有者には頼めん。』

「ぬ・す・ま・れ・たあ!？」

クリスと私の声がハモった。

シルバーを見るとそっぽを向いて汗をダラダラと流している。

ゴールドも同じくそっぽを向いて汗をダラダラと流しながら口笛を吹いている。

この反応、ゴールドはシルバーが盗んだって知ってたね。

ブルーはゼニガメを盗むし、シルバーはポケモン凶鑑を盗んだのか……。似たもの姉弟だねえ……。

私とクリスの白い目線に耐えきれなかったのか、おもむろにヤミカラスを出してその足に捕まって飛び去る。

「あ、逃げた。」

『ん、逃げた?』

「ああ、いや。こつちの話。」

「そ、それじゃあ博士、わたし達はセキエイ高原に向かいますね。」

焦ったクリスが早々に通話を切る。

「いやー、シルバーが凶鑑を盗んだのは知らなかったなー。」

「そ、それはだな……。あいつはオレの手で捕まえたくて……。」

私の言葉に焦りだすゴールド。流石に犯罪者のことを黙っていたのは悪いことだと思ってたみたい。

「それに！バクたろうも、オーダーになったけど、ワニノコの事を自分で追いかけてよ。」

「ワニノコの事もお?」

「あ……。」

言ってから失言に気づいたみたい。  
なるほどなるほど。凶鑑だけじゃなくて、ポケモンも盗んで行つた  
と……。

やらかしすぎでしょ、義姉よりもやんちゃじゃん。

「ハア……。まあ、いいや。とりあえず、セキエイ高原に向かおう  
か。ここからだとは分距離あるし。」

「そうですね。」

「……次は置いてくよ？」

「……前は置いて行かれたの？」

そんなこともあつたねえ。

## 61話

ミスタに乗った私は、バクたろうに乗ったゴールドとメガびよんに乗ったクリスを伴い、セキエイ高原に向かう。

そういや、このメンバーはみんなニックネームをつけてるね。

ゴールドはたろう、クリスはびよん。それに比べて、私はインスピレーションで決めてるからコンセプト的なものはない。

でも、たろうはゴールドの性格が出てると思うけど、びよんって真面目なクリスらしくない気がする。

「ねえねえ？ゴールドのつけてるニックネームのたろうはなんとなく分かるけど、クリスはなんでびよんの？」

「おお、マシロはこのニックネームの良さが分かるか！」

「わたしは結構はずかしいんだけど、ママがびよんってつけてほし  
いって……。」

「そうなんだ。ってことはクリスのお母さんって可愛いものが好きなの？」

「そうですね、とても好きですよ……。」

何故か誇らしげなゴールドとは対象的に、クリスはげんなりしながら答える。

よっぼどはずかしいんだ、私はかわいいと思うけどね。

そんなことを話しているとクリスが思い出したかのように聞いてくる。

「ところで、シルバーのこと放っておいて良かったんですか？単独行動は危険なんじゃ……。」

「んー、多分大丈夫じゃないかな？今はジムリーダーに招集がかかって身動きが取りにくいだろうし……。それに、いつ帰ってくるかわからないホウオウのことを捕獲するのが目的なら、私達を気にする余裕はないと思う。」

「成る程、ちゃんと考えた結果大丈夫だと思ったんですね。」

私の言葉に納得するクリス。

「でも、少し意外でした。」

「なにが？」

「博士から荒事に強い人だと聞いていたので、てっきりゴールドみたいに物事を深く考えてない人かと。」

「ああん？ どういう意味だよ、クリス？」

「そのままの意味よ。」

そう言っただけ息をつくクリス。そして、その様子を見てゴールドがまた文句を言っただけ言い合いを始める。

しかし、博士は私の事をなんて説明したんだろう？ 今度会ったとき問い詰めないで。

ブルルル。

そんなとき私のポケギアが鳴る。

えっと・・・、ブルーからだ。

「もしもし、ブルー？ どうしたの？」

『どうしたの？ じゃないわよ。さっき、博士からの電話、話の途中で切ったでしょ。』

「あー、それに関しては少々やむを得ない事情が・・・。」

『なによ？ 煮え切らないわねえ・・・。』

いや、ブルーの義弟のせいなんだけどね。

『まあ、いいわ。それより、さっき話せなかった仮面の男の目的についてあたしから話すわね。ジムリーダーのカスミがスイクンから直接聞いたから間違いないはずよ。』

「お、スイクンはちゃんとカスミに会えたんだ。良かった、良かった。」

『・・・マシロ、スイクンともなにかあったの？』

「少しね。」

『ホント毎回、いつの間にかしれっと騒動の中心にいるわね・・・。いや、あたしが頼んだ事なんだけど・・・。』

電話の向こうでため息をついている。

そう言われるとそんな気もしてくる不思議。何故だろう？

「腹減ったな、やきイモでも食うか。ほらよ、クリス。デブらない程度に控えめに食いな。」

「女の子にそんなこと言う!?」

そして、後ろではゴールドとクリスが言い合いをしている。初対面だったはずなのに仲良しだねえ。

『話がそれたわね。ホウオウが9年前、各地の子供をさらっていったのは知ってるわね? 目的は時の支配。その為の駒としてさらった子供を使うつもりだった。でも、ホウオウを使って悪事を働くのを許せないポケモン達がいた。』

「それって……。」

私の頭に浮かぶのは、やけた塔から飛び出した3体のポケモン。

『そう、ホウオウに命を救われたポケモン達。スイクン、エンテイ、ライコウの事よ。そして、仮面の男に戦いを挑んだ結果、ホウオウを解放する事には成功したけど、やけた塔に封印されてしまったそうよ。』  
「そういうことね。だからエンテイは仮面の男に対してあんなに敵意を出してたんだ。」

『……仮面の男に会ったの?』

あ、そう言えば言っていなかったっけ。

あれから、2人を鍛えたりジムを回ったりしてすっかり忘れてたよ。

「仮面の下は氷の人形だったけどね。」

『そういう大事なことはちゃんといいなさいよ!!』

大声で怒鳴られた。いや、今回ばかりは私が悪い。

「ごめんなさい……。」

『いや、そこまでしよんぼりしなくてもいいわよ……。あたしも怒鳴って悪かったわ。頼ってばかりなのに、文句を言うのも筋違いよね。』  
「ううん。仮面の男についてはちゃんと言うべきだった。ごめん。」

『もういいわよ。それより、話を戻すわね?』

「うん……。」

落ち込んでてもしょうがない、次は怒られないようにしないと。少しでもだけ目を閉じて深呼吸。

うん。切り替え完了!

『それで……。封印されたってことは、3体がかりでも仮面の男には

勝てなかったってこと。だから、ジムリーダーを訪ね回って共に戦ってくれる人を探してたのよ。』

「それで、仮面の男と戦った事がある私にも会いに来たんだ。」

『あなたの所にも来たのね。あら？・・・それなら、なんでスイクンはカスミの所に？仮面の男と戦うなら、マシロが一番適任思うんだけど・・・。』

「あー、それは私が断ったからだね。その時は何の目的でジムリーダーを訪ね回ってるのか知らなかったから・・・。とりあえず戦った後、それぞれのタイプのエキスパートを紹介したんだ。」

『カスミの所にスイクンが行ったのは、あなたの差し金だったのね・・・。ん？それぞれ？』

「うん。スイクンとエンテイとライコウ。それぞれカスミ、カツラさん、マチスを。」

『マチスって、元ロケット団幹部でしょ・・・？紹介してもよかったのかしら・・・？』

「でも、マチス以外心当たりがなくて、しょうがなく・・・。」

『まあ、この話はいいわ。それで、この後あたしもセキエイ高原に向かうから。』

「ホント!?久々に会える!?!」

『いえ、まだ正体が分かってない以上固まって動いても効率が悪いわ。会えるのは仮面の男を片付けてから、ね。』

「そっか・・・。」

残念。久しぶりに会えると思ったのに。

『ま、頼りにしてるわよ、マシロ?』

「任せといてよ、ブルー。」

そう言っつて電話を切る。

さて、そろそろセキエイ高原だね。

「だいたいあなたは!」

「わかったわかったわるかったって!ったくしつけーなー!」

後ろは相変わらず賑やか。

仲良しだねえ。

—————

セキエイ高原に着くと、入り口は人で一杯だった。

「うわあ、人多すぎ・・・」

「なんだあ？一般入場やら、選手受け付けやらややこしい。・・・よし、先に行くぜ！」

うんざりするほどの人混みに眩く私の隣で、ゴールドはバクたろうから飛び降りると、意気揚々とスケートボードに乗って建物に突撃していつてしまった。

人混みであんなことされると凄い迷惑なんだけど、ああいうことはやめてくれないかなあ・・・。

「ちよつと、ゴールド!?マシロさん、追いかけてみましょう。」

「そうだね。」

そう言っただけ追いかけてようとした時、ふと看板が目に入る。

『バッジを8つ集めた方はこちらで受け付けをお願いします。』

そう言えば、今回のポケモンリーグからバッジを集めた人は予選免除って言ってたっけ。前回のポケモンリーグだと、博士とか本選出場者は控え室が与えられてたっけ？

それなら表はクリス達に任せて、私は裏から見て回ろうかな。

「クリス、ゴールドのこと頼んでいい？」

「え？マシロさんはどうするんですか？」

「私は会場じゃなくて、選手側から探ってみるよ。ちよつとバッジは揃ってるし。」

「すげい・・・。」

持っているバッジを見せると、クリスが感心したような声を出す。

「すげくでしょー。と言っても、バッジはついでなんだけどね。」

「え、ついで・・・？」

今度は驚いた声と、何かすごいものを見たような顔をしてこちらを見る。

人を化け物みたいに見ないでくれないかなあ……。

「クリス、オツケー？」

「ハッ……！分かりました、そういうことならゴールドの事は任せてください。」

ハッとしながらそう言うと、クリスはゴールドを追っていく。

さて、私は受け付けを終わらせないとね。

私は人混みを掻き分けて受付に進み始めた。

いや……。これ、体が小さい私にはしんどいんだけど……。



## 62話

「控え室はこちらになります。」

「どうもー。」

控え室に案内された私は、部屋のパイプ椅子に腰掛ける。

人込みは疲れるねえ……。受け付けだけでかなり時間がかかったよ。

一息つきながら部屋に備え付けられたモニターの電源を入れる。モニターにはリーグ会場の様子が映し出され、前回の優勝者のレッドが現れないことでブーイングが巻き起こっていた。

レッド、大人気だねえ……。

そんなことを思いながらモニターを眺めていると、会場にリニアが入ってくる。そして、その中から、カントー、ジョウトそれぞれのジムリーダーが姿を現す。

「さて、あの中の誰かが仮面の男のはずだけど……。」

怪しいのはヤナギとイブキ。まあ、偏見は入ってるけど。

そして、ジムリーダーの紹介が終わると、エキシビジョンマッチの対戦相手を決めるくじ引きが始まる。

その結果。

タケシVSミカン

カスミVSアカネ

アンズVSハヤト

マチスVSマツバ

ナツメVSツクシ

グリーンVSシジマ

カツラVSイブキ

エリカVSヤナギ

といった組み合わせになる。

「お、ミカンが一番乗りだね。」

ミカンが一番ということ、その戦いを観戦するが・・・。  
ミカンのハガネちゃんやんが圧倒的な防御力でイワークを倒した。  
「まあ、イワークでハガネちゃんの相手をしたらそうなるよね。」

さてさて、ミカンの勇姿を見届けたし。それじゃ私も動きますか。  
エキシビジョンマッチはゴールド達が見てるから、私は控え室を回ろ  
う。

氷の人形を遠隔で操作するなら、変な荷物とか持ち歩いてるかもし  
れないし、怪しい物を見つけたら警戒しないかね。私はきららをボー  
ルから出しておく。

「きらら？」

『なにー？』

「今から仮面の男を探るから、付いてきてくれる？何か気づいたこと  
があつたら教えてほしいんだ。」

『わかったー！』

きららを伴って部屋から出る。

さて、仮面の男の正体が分かるといいけど。

—————

そんな感じで控室のあるフロアを歩いていると、コソコソと動く人  
影を発見する。・・・その人影には見覚えがあつたけど。

だから私は、コソコソと動くその背中に遠慮なく声をかける。

「こんなところで何やってるの、シルバー？」

「うおおっつ!!」

すると、大声を出しながら飛び上がり私から距離を取る。そして、  
声をかけたのが私だと分かるとホツとしたように胸を撫で下ろした。

「マシロか・・・。驚かせるな。」

「そんなに驚かないですよ。で、何やってるの？」

「仮面の男の手掛かりを探している。今ならジムリーダー達はエキシ  
ビジョンマッチで控室にはいないはずだからな。今のうちに各部屋  
を回る。」

動きが完全に泥棒のそれだよね。とりあえず、私の近くでは怪しい真似はやめてもらおう。

「シルバー、とりあえず今は犯罪ムーブは禁止ね。不審者極まりないから。」

「なんだと?」

「そんなカリカリしない。変わりに私も一緒に行くからさ。」

シルバーの背中をトンと叩き、私が歩き出すとすぐに隣に駆け寄ってくる。

「こんな堂々と歩いていいのか?それに、仮面の男の配下に見つかりでもしたら・・・。」

「いいのいいの。仮面の男の配下が出てきてくれるなら、そっちのほうが好きだし。それに、シルバー達がうずまき島にいる間私が何をしていたか忘れたの?」

「・・・そうだったな。」

シルバーは納得したように頷く。相変わらず察がいいね。

「そゆこと。それに、正規の選手が知り合いの部屋を尋ねてもおかしくないでしょ?」

「・・・ジムリーダー全員と知り合いなのか?」

「1人を除いてね。その人が状況的に1番怪しいヤナギって人。うずまき島で聞いてたと思うけど、一応警戒しておいてね。」

「ああ。」

シルバーと話しながら、失礼しまーすと部屋を尋ねて回る。

「・・・なんだか、熱くないか?」

「・・・確かに。なんだろう?」

そうやって部屋を回っていると、いつの間にか周囲に熱気が充満していた。そして、『グリーン』と書いてある扉をスルーしようとしていた部屋の中からドアを蹴破り、中から人が飛び出してきた。

「ニュー「ストップ」。」ぐおおっ。」

咄嗟にニューラを出そうとしたシルバーの襟を掴んで止める。その様子を見て、シルバーと同時にボールを構えていたグリーンがその腕を下ろした。

「誰かと思えばマシロか。どうしてここにいる？それに、この熱気はなんだ？」

「私は一応選手だからね。熱気は分かんないかな？」

周囲をキョロキョロと見渡しながら話すグリーンに答えると、グリーンは驚いたように私を見る。

「お前が、ポケモンリーグに……？珍しい事もあるもんだ。」

「成り行きでね。そっちの方が都合が良かったんだ。」

「フツ……。そんな理由でポケモンリーグに出場する奴はお前ぐらいだろう。」

「2人とも、話は後にしろ。……奴がこの熱を放つ正体らしい。」

グリーンと話しているとシルバーが間に入り、階段の上を指差す。

そこには、やけた塔から飛び出したポケモンの1体、エンテイが立っていた。

「この熱気に……！」

「対抗するためには……！」

「はいストップ！」

「ぐっ!!」

そう言っただけで違うボールを構える2人の襟を掴む。その間に、エンテイは姿を消した。

カツラさんでも探しに来たんだろうか？

「何をする?!」

「……。」

文句を言うシルバーと、黙って私を睨みつけるグリーン。

「エンテイは敵じゃないよ。それに、グリーンのお迎えが来てるよ?」

「なに?」

グリーンが振り返ると、そこにはグリーンのお姉のナナミさんが立っていた。

「グリーン、時間でしょ?早くステージに行かないと。あら、マシロちゃん?久しぶりねえ。」

「お久しぶりです、ナナミさん。グリーンは持って行っていいよ。」

「おい、説明が……。」

「はいはい。あなたの師匠が待ってますよ。」

「チツ……。分、かった。」

そう言うとナナミさんは、グリーンを引つ張って行ってしまった。  
「それじゃあ、私達は……。あれ？シルバーは？」

いつの間にか姿の見えないシルバーを探して辺りを見渡すと、通路の奥で誰かと話しているのが見えた。

「いたいた。でも、もう1人のおじさんは誰だろう？」

なんか、ちんちくりんなおじさんがシルバーと対面している。

『あのおじさん、ぶるーだよ？』

「え、ブルー？なんであんなおじさんの変装してるの？」

『なんでだろう？』

2人は言いあらずっている様で、こっちには気づいてなさそう。  
ちよつと行つてみようか。

歩いていくと、2人の話し声が聞こえてきた。

「もし、戦いを諦めて帰るって言うなら、このおじさんがレポートさせてあげるけど、どーだい？」

「な、何を言っている!？」

「言った通りの意々味々。」

そう言うとおじさんの抱えたケーシイが、シルバーをレポートで飛ばそうとする。

「何やってるの、ブルー？」

「え？」

「ニューラ、どろぼう！」

状況はよく分からないけど私が声をかけると、おじさんが振り返り、その瞬間ニューラのどろぼうがケーシイを気絶させるとケーシイの持っていたメールを奪う。

そして、シルバーはそのメールを見る。

「……。確かに、義姉さんの字だ。」

シルバーはそう呟くとメールとおじさんを交互に見る。

「あーもう……。タイミングが悪いわねえ。」

そう言うとおじさんの顔にはりついたメタモンが取れていき、そ

こちら現れたのは紛れもなくブルーの顔だった。

「全く、これ以上巻き込まないようになっていう義姉の優しさよ？ありがたく受け取りなさいよね。」

そうボヤキながらケーシーをボールに戻す。

「オレはもう、守られるだけじゃない。そのマシロに鍛えられて、義姉さんと一緒に戦えるほど……。義姉さんを守れる程に強くなった。」

「マシロ、そんなことまでしてたの？」

「いやー、成り行きでね。」

ジト目で私を見るブルーに、あははーと笑いながら答える。

いや、実際ブルーの義弟って鼻屑は入ってるけど成り行きなのは間違いない。

「分かったわよ。それじゃシルバー、あなたにも手伝ってもらおうわよ？」

「元々そのつもりだ。それで、何をすればいい？」

「ここにはマシロがいるから、マシロに任せるわ。あたし達は祠を押しさえるわよ。」

「祠？」

聞き慣れない単語に思わず聞き返す。

「そう。仮面の男の目的が時の支配なら、間違はなくウバメの森の祠に現れる。マシロがここで仮面の男を見つけ倒す事が出来たら全部解決だけど、見つけれなかったり逃げられた時の為に、祠に先回りしておくの。」

「分かった。だが、それだとマシロだけで仮面の男の相手をする事になるが、それだと負担が大きんじゃない？おそらくだが、やつはルギアを捕獲しているはずだ。」

「ルギアがなによ、こっちはマシロよ？それに、ここにはジムリーダー達がいるじゃない。そこにマシロが加わるんだから、まず負けないわよ。」

確かに。カスミにはスイクンが付いてるって言ってたし、ジムリーダーは他にもいる。

でも、私を最終兵器のようには言わないで欲しいかな。・・・いや

まあ、頼られて嬉しいんだけどね？

「ま、そんなわけでこっちは任せたわよ。行くわよ、シルバー。」

「あ、ああ。」

手をひらひらと振りながらシルバーを連れて歩いていくブルーを見送る。

「さて、それじゃ私達も・・・。」

「マシロ様ですね？」

「動こうかな、と思っただら背後から声をかけられる。」

振り向くと、私を控室に案内してくれた人と同じ服を着た男人。でも、雰囲気が違う。

「そうだけど、何の用？」

「付いてきてもらえますか？」

「断ったら？」

「会場の周りに配置したロケット団の残党が、会場を襲います。」

「ふーん、相変わらずセコいことするね。・・・いいよ、どこ行くの？」

「こちらです。」

踵を返すと振り返ることなく歩き出し、私はそれについて行く。

しばらくすると、会場の裏口のようなところから外に出る。

それに続いて外に出ると、そこには顔の半分を隠す仮面を被ったロケット団の残党が周囲を取り囲んでいた。

「セコいと思っただけど、趣味も悪いね。なにその仮面？」

「僭越ながら、私達があなたの相手をさせていただきます。」

「残党が相手になると思ってるの？」

「思ってませんよ。だが、首領の命令は足止め。ただあなたに邪魔されないようにここに足止めするだけでいいんです。その為に残党の8割を集めました。」

男は大げさに両腕を広げて、周囲の残党をアピールする。

「8割はやり過ぎじゃない？」

「首領はそれだけ、あなたの事を警戒しています。」

「そう？ここに他のジムリーダーもいるのに、私だけを警戒してていいの？」

「その点もご心配なく。今頃ジムリーダー達はリニアに隔離されているはずです。そして……。」

男が言葉を区切った瞬間。  
ドガァン！

と、轟音と共にリーグ会場の天井が吹き飛んだ。そして、そこから飛び出したのはホウオウとルギア。それに、仮面の男。

「ホウオウを捕獲した首領が残った邪魔者を排除している。」

「やっぱり、ホウオウの捕獲が目的だったんだ。」

「やっぱり、ということは予想してたんですね。なかなか聡明な方だ。」

「全部状況から見た予測でしかなかったけどね。」

「十分警戒に値しますよ。それでは……。」

男は半分の仮面を取り出すと、自分の顔につける。

「こちらも始めましょうか！」



## 63話

残党の繰り出すポケモン達を、かぶちー、グロウ、ミスタの3体がなぎ払う。

『ぼくは〜?』

『きららは温存。』

『え〜?』

『今は我慢してて。』

『はい。。。』

かぶちー達が戦っている中、きららは私と後ろで待機している。と言うのも、仮面の男がルギアとホウオウの2体を従えているから。

どっちか片方だけなら消耗したきららでも勝てると思うんだけど、2体を相手にするならエネルギーは満タンでいきたい。

そう思いながらチラツと会場の方に視線を向けると、そこにはホウオウとルギアに立ち向かうスイクン、エンテイ、ライコウの姿。

そして、その背中にはカスミ、カツラさん、マチスが乗っている。それぞれパートナーに選ばれたんだね、良かった。

・・・マチスは選ばれて良かったんだらうか？

「よそ見とは余裕ですね。」

「まあ、それなりにね。」

軽口を叩いていると、かぶちーが戻ってくる。

戻ってきたかぶちーに回復アイテムを使うと、すぐにロケット団の放ったポケモン達に向かっていく。

「既に半数が戦闘不能ですか・・・。凄まじいですね。そっちのポケモンは参加しないのですか?」

「切り札だからね。残党程度にはもったいないよ。」

とは言っても、回復アイテムはさっきので最後なんだよね。

強がっていてもさすがに数が多いや。これでまだ半分なんだって。

アイテムはもうないし、これは温存とか言ってられないかもしれない。  
いい。

そう考えていたとき、会場の方が静かになった為私とロケット団の男が会場の方に目を向ける。

「む……？あれは、水晶壁！」

そこには、水晶壁とそれに挟まれた仮面の男。そして、その男に歩み寄るマチス。

「あれでは、首領は動くことが出来ない!？」

ロケット団の男が驚いてるが、私はむしろ危機感を抱いた。

「駄目だよ、あの体は氷でできてるんだから!!」

届かないと分かっても、叫んでしまう。

そして、私の声は届くことはなく自身の体を引きちぎった仮面の男はマチス共々、エンテイとライコウを吹き飛ばすとホウオウ達と共に飛び上がった。

スイクンは水晶壁の中で身動きが取れないみたいだし、仮面の男を止められる相手がいなくなった。

「不味っ……。このまま行かせる訳には……。！」

「行かせませんよー！」

男の言葉に、周囲のポケモンが一斉に飛びかかってくる。

仕方がない、こうなったら温存なんて言ってられないかな！

「きらら、いけるっ！」

『いけるよー！』

きららが周囲を一掃しようとしたときだった。

「その必要はない。」

「ここは任せて。」

私の前に2人の人影が現れると、周囲のポケモン達が見えない壁にぶつかった様に動きを止める。そして、ハガネールの尻尾がそれらをなぎ払った。

「今の、テレポートとバリアー……。？。それにハガネールのアイアンテール……。？」

「なかなか楽しそうな状況じゃないか。これに比べたらリニアなん

て、ガラガラだったぞ?」

「そうね。でも、女の子一人にこれはひどいんじゃないかしら?」

「ナツメ!?それにミカンも!」

振り返ったのはジムリーダーのナツメとミカン。

「何故ジムリーダーがここに!?リニアに隔離したはず!」

「そんなもの、全て片付けた。」

「それで反転したりニアで戻ってきたけど、ナツメさんが変な気配がするって言うから、跳んできました。」

「助かったよ!ここ、任せてもいい?」

「いいだろう。こいつらには個人的に思う所もある。」

「2人とも、知り合いだったんですね。」

「まあ、色々あつてね。」

ナツメはロケット団で、戦った事がある。なんて言えないけど。

「かぶちー、グロウ、ミスタ!ここは2人に任せて仮面の男を追うよ!」

かぶちーはグロウに、私はミスタに飛び乗ると急いで仮面の男を追った。

それにしても、マチスがライコウと一緒に戦っていたりナツメが助けくれたり。元ロケット団が味方として戦ってるのに驚きだね。もしかしたら、キョウもどこかで戦ってるのかもしれない。

いや、四天王の時もロケット団3幹部と共闘したって言ってたっけ・・・?私もサカキと共闘したなあ。

最後は戦ったけど。

—————

「ジムリーダーが来るとは、計算外ですね。」

「そう思うなら、せっかくのリニアだったんだ。もっと人を乗せておくべきだったな。」

「ジムリーダーを隔離するだけですから、囷となる数だけあればよかったですよ。それに、首領はあなた達ジムリーダーよりマシ口というトレーナーを警戒していました。その為に数を揃えたのですがね……。」

大げさに両手を広げて残っている残党達をアピールする。

「ふん。牙を失った獣共か。それに、悪趣味な仮面だ。」

「随分な言い方ですね、獣扱いですか……。」

「Raid On the City. Knock out Evil Tus」

この頭文字を取ったものがそのままロケット団、組織の名前になった。その誇りを失った者達は、ただの獣に過ぎん。」

そう言っつてナツメはフツと笑う。

「そんな連中には、お仕置きが必要だな。」

「あの……、何の話でしょうか……?」

そんな中、ミカンだけは首を傾げていた。

—————

私は仮面の男を追いかけるために飛び上がると、下では水晶壁に取り残されたスイクンとカスミが見える。

なんか取り込み中みたいだけど、ゴメンね。今そつちに行くと思失いそうだから、自分で何とかしてね。

前を見ると少し遠くに見える仮面の男とハウオウ達の背中。

このままだと追いつけるか微妙な所かな?それならこつちから打って出ようか。ミカン達のお陰できららのエネルギーは十分だしね。

「きらら、一発やるよー!」

『おっけ〜!』

「メテオビーム！」

きららから放たれた閃光に、仮面の男が振り返る。

「ルギア、エアロブラスト！ホウオウ、せいなるほのお！」

そして、きららのメテオビームをルギアとホウオウの攻撃で相殺させる。

その間に、仮面の男の後ろまで追いつく。

「何故貴様がここにいます？足止めはどうした？」

「さあね？今頃皆は寝てるかもね。」

「とぼけるのはやめてもらおう。ルギア、エアロブラスト！」

「グロウ、ひかりのカベ！」

ルギアの攻撃をグロウが受け止める。

が、エアロブラストを受けた瞬間、ひかりのかべは見る見るヒビだらけになる。

しかし、ヒビだらけになりながらもエアロブラストを受けきった。

「ほう、あれを受け止めるか。」

仮面の男が称賛の声を上げる。

「ヒビだらけで、ギリギリだけどね！・・・それより、変声機壊れてるよ、おじいちゃん？」

「・・・ツツ!!」

一瞬だけ驚いた声を出す、直ぐに平静さを取り戻すと。

「すでにバレていたか。それならこれはもう必要ないな。」

仮面とマントを脱ぎ捨てる。その下から現れたのは、郡の人形。そして、頭の部分に車椅子をはめ込み、そこに座った老人。

「チョウジジムのジムリーダー、ヤナギだった。」

「バレてなかったよ？カマかけただけ。」

「その割には驚いていない様子だが？確信はなかったが、それに足る理由があつたんじゃないかかね？」

「状況的に一番怪しかったから。実は、ジョウトのジムリーダーとは1人以外、全員に会ったことがあってね。それなのに、仮面の男の地声には聞き覚えがない・・・。つてことは、消去法で会ったことのないジムリーダー、ヤナギつてことになるよね？」

「成る程……。やはり、貴様はもつと早く消しておくべきだった。」  
ヤナギはチラツツと視線を下に向けると、ウバメの森が見えてくる。  
「だが、私のおしやべりに付き合ってもいいのか？そこまで知っているんだ、私の目的がウバメの森にあることは気づいているのだから？」

「まあね。でも、知っているんだから当然手は打つてあるよ。」

祠にはブルーとシルバーが向かつてる。話してるだけで時間が稼げるなら楽だしね。

「ふむ……。お主は私の足止めで祠には別の誰かが向かつている。と言ったところか。」

「正解。よく分かったね？」

「なに、私も同じことを考えていたからさ。祠には先に部下を向かわせて、私はジムリーダー達の隔離し、貴様は残りの残党に足止めをさせた、ハズだったのだが……。所詮は残党か、使えない奴らだ。」

所詮は残党つてのは同意だけど、使つてた側の人間が言うセリフじゃないよね。

「だが、私にはルギアとハウオウがいる。残党とは違う、圧倒的な駒だが……。羽はもう確保した、こいつらはもう必要ない。」

そう言うのと、ルギアとハウオウに視線を向ける。

「ルギア、ハウオウ、この場は任せたぞ。」

そう言うって先に行くヤナギ。

いや、その2体を足止めにするのはずるいでしょ!?

「行かせないよ！ミスタ、きさら、メテオビーム！」

追いついた時から力を溜めていたミスタと、きさらが同時にメテオビームを放つ。

が、その間に割り込んだルギアとハウオウが翼を折りたたみ体で受け止めると、その間にヤナギの姿は森の中に消えていった。

「逃げられた……。」

でも、祠にはブルーが向かつてるからなんとかしてくれるはず。ヤナギの手下も祠に向かつてるらしいけど、シルバーもいるし大丈夫でしょ。

なら、私がホウオウとルギアを引き連れてブルー達の所に向かう訳にはいかないよね、ブルーは鳥恐怖症だし。

「となると、ここで倒すしかないか。」

目の前の鳥ポケモン達に目を向ける。

ルギアは多分スオウ島にいたやつで、ホウオウは9年前ブルーを攫った張本人、・・・人じゃないけど。

なんか、今までの縁が結び付いたみたいな感じだねえ。

ま、邪魔するなら押し通るだけかな。特にホウオウには個人的な恨みがあるから、覚悟してよね？

「みんな、いくよー！」

## 64話

「きららはホウオウをお願い、出来るだけ引き付けて！」

『わかった！』

「グロウ、かぶちー、ミスタと私でルギアの相手！」

「グオウ！」

「チー！」

「ー！」

皆は三者三様の返事を返すと、それぞれの相手に向かっていく。

「グロウ、ラスターカノン！ミスタ、10まんボルト！かぶちーはつるぎのまい！」

かぶちーはグロウの背中で舞を踊り、グロウからはラスターカノン、ミスタから10まんボルトが放たれルギアに向かっていく。

が、ルギアはそれを身を翻してかわすと、そのまま森の上を滑空する。

「やっぱり飛んでる相手はやりづらいね。翼をどうにかしないとまともに攻撃が当たらないかも。」

私は呟きながらルギアの背中を追う。

「なら、出来るだけ近づいて避けられない距離で戦うしかないかな？グロウ、かぶちー！」

私の声に合わせて、グロウがかぶちーを乗せたままルギアに接近する。

「バレットパンチ！」

そして、その背中にグロウがバレットパンチを叩き込む。が、ルギアは意に介す事なく飛び続ける。

はがねタイプは相性が悪いのか、はたまたルギアがタフなのか…。「かぶちー、はたきおとす！」

ルギアの後ろにつけたままのグロウから飛び降り、かぶちーの大顎がルギアの背中に叩きつけられる。

すると、ルギアは苦しそうな叫び声をあげながら振り返ると翼を羽



ばたかせてグロウとかぷちーを吹き飛ばした。

「かぜおこし・・・と言うより、ここまでの威力だとぼうふうだね。・・・ツツ、まずい、かぷちーが！」

吹き飛ばされたかぷちーがそのまま森に向かって一直線に落下していく。

「グロウ、かぷちーをお願い！」

グロウはかぷちーに向かって飛んで行くが、ルギアはグロウとかぷちーの方を向くと、大きく息を吸い込む。

あれは、ヤナギがエアロブラストって言ってた技かな？

でも、グロウもかぷちーもやらせない！

「ミスタ、準備はできてるよね？ 援護に行くよー！」

ミスタは直ぐにグロウとルギアの間割り込む。それと同時に、森に突っ込みかけたかぷちーをグロウが受け止める。

そして、ルギアからエアロブラストが放たれた。

「メテオビーム！」

それを迎え撃つミスタのメテオビームがエアロブラストとぶつかり合い、私達の間で爆発をおこす。その爆風に煽られたミスタと私はその場から吹き飛ばされる。

「きゃっつっ!!」

振り落とされないように私はミスタにしがみつく。

が、ルギアは爆風をもともせずそのままグロウ達を追いかけ、エアロブラストを乱射する。

グロウは右に左にと動き、エアロブラストを回避し、外れたエアロブラストが森を穿っていく。

「まずい、後ろを取られた！ミスタ、早く戻るよ！」

ようやく体勢を立て直したミスタがもう一度ルギアに向かっていく。

その間にも、エアロブラストを乱射し森に穴を空けていく。

そして、乱射されるエアロブラストの1つがグロウに向かった。

「グロウ、ひかりのかべ！」

グロウは私の声で後ろを向くと、エアロブラストをひかりのかべで

受け止める。

が、今度は一瞬でひかりのかべが砕け散り、グロウ達が弾き飛ばさる。そんな中で、かぶちーはその背中にしがみついている。

そして、バランスを崩したグロウ達にルギアがエアロブラストを放とうとする。

「ミスタ、メテオビーム！」

ルギアの後ろに戻ってきたミスタのメテオビームがルギアに放つが、ルギアはエアロブラストを撃つのを止め、メテオビームを躲すし上空に飛び上がる。

その間に、体勢を立て直したグロウがかぶちーを乗せて戻ってくる。

「グロウ、かぶちー大丈夫？まだやれる？」

「グオオ！」

「チー！」

グロウとかぶちーは頷く。その間もかぶちーは、つるぎのまいを舞っている。

ルギアの方を見ると、最初にメテオビームを受けてるはずなのに未だに健在。

大きいだけあって、タフだねえ。

そんな事を思っていたら、ルギアがもう一度大きく羽ばたき、突風を巻き起こす。

「ミスタ、グロウ、堪えてー！」

今度はこらえて吹き飛ばされる事はなかったけど、このぼうふうの中じやまともに動けない。

そんな中で、ルキアは大きく息を吸い込んだ。

「ちよっ！今はまずいってー！」

そして、ルギアがエアロブラストを放とうとした瞬間。ルギアをほのおのうずが取り囲むと、かみなりが貫き、ふぶきが襲った。

「誰!?!... がやったかは後でいいか！グロウ、かぶちー！」

グロウはかぶちーを乗せてルギアに突っ込んでいく。それを見た

ルギアは動けない状態でもグロウ達にエアロブラストを放つ。

「ミスタ、メテオビーム！」

それをミスタのメテオビームが相殺させ、爆風が巻き起こる。

グロウ達の目の前で爆発し、グロウは爆風に煽られる中でグロウは、かぶちーをルギアに向かってぶん投げた！

「かぶちー！この一撃に全力を込めて！」

かぶちーがエアロブラストを放ったルギアの額に大顎を叩き込もうとした瞬間、かぶちーの体を光が包む。

それと同時に、私の鞆からも光がこぼれるが私はその事に気づかなかった。

そして、ルギアの額に大顎を叩きつけたかぶちーの大顎は2つに見えた・・・気がした。

そして、かぶちーの大顎を額に受けたルギアは轟音をたてて、ウバメの森に沈んだ。

「え、すごい・・・。メテオビームを受けてもあんなに元気だったルギアを一撃で沈めちゃったよ・・・って、かぶちーは!？」

落つこちてると思いきや慌ててかぶちーの方を見ると、サンダーの背中に乗って私達の方に戻ってきていた。その両隣にはファイヤーとフリーザー。

さっきの援護はこの3体だったんだ。でも、誰が連れてきたんだろう？私は首を傾げる。

「まあ、誰が連れてきたかは置いておこう。それよりきららの方は？」  
周囲を見渡すと、きららがハウオウに向かってメテオビーム放つ所だった。

しかし、ハウオウはそれをひらりと躲すしメテオビームは森に吸い込まれていく。

やっぱり、飛んでる相手はやりづらいね。

そして、お返しとばかりにハウオウがせいなるほのおを吐き出す。が、きららはサイコキネシスでその炎を全て弾き返すが、ハウオウはそれを予想していたのか、ゴッドバードでほのおを突き破り、きらら

に向かつて突進する。が、きららもそれをひらりと躲す。

空中戦だと、互いに決め手に欠ける・・・か。

私は振り返って、声をかけようとした。

「援護に・・・。」

けど、行かないと、とは言えなかった。

見渡すと、かなりダメージを受けたグロウ。サンダーの背中に乗ったかぶちーは肩を大きく動かし呼吸が荒く、かなり消耗してる。

さっきの進化みたいなやつのせい・・・？でも、かぶちーの大顎も1つに戻ってるし、進化ではない・・・？なんだったんだろう、気のせい？

でも、ルギアを一撃で沈めた一撃だもんね、かぶちーの負担が大きかったのは間違いない。

・・・こんな状態でホウオウと戦って、なんて言えないか。

「グロウとかぶちーは戻って。ミスタはもう少しだけ頑張ってくれませんか？」

グロウとかぶちーをボールに戻しながらミスタに問いかけると、ミスタは静かに頷いてくれる。ありがと、もう少しだけ力を貸してね。

「それで、君達も力を貸してくれるの？」

そう言うと、ファイヤー達は頷いてくれた。

こっちの戦力は半減してるから助かるよ。

「それじゃ、きららの援護に・・・。」

『も〜ちよこまかするな〜！』

行こう、と口にしようとした瞬間だった。

きららの叫び声が聞こえたと思ったら、空を覆い尽くす隕石。

それも、前にデルビルを追い払った時みたいに小さいのをたくさん。それが、ホウオウに向かつて降り注いでいく。

ホウオウは、翼を折りたたみりゆうせいぐんを受けるが、あの弾幕ではまともに動けないみたい。

そして、動けないホウオウに向かつてきららが特大のメテオビームを放つ。その閃光は、夕暮れ時の空を一瞬だけ真昼かと思わせるほどの輝きだった。

「ちよつと、キララら!」

あまりの眩しきで手で顔を覆った私は、ホウオウがどうなったか見えなかったけど、すぐあとに響いた何かが墜落するような音でどうなったかを察する。

閃光が収まると、ルギアの隣で倒れているホウオウの姿が見えた。

・・・うん、とりあえずキララに援護は必要なさそうだね。

「キララ、大丈夫・・・に決まってるか・・・。」

『だいいじょーぶ!』

私達の所に飛んできたキララは、軽快に答える。

「だよね・・・。でも、今までで一番強い相手だと思っただけど、ホウオウ相手でも勝てちゃうんだ・・・。」

やっぱりキララだけ、強さのレベルが違う気がする。

『いちばんじゃないかなー?』

「え?ホウオウより強い相手なんていたっけ?」

私にはそんな覚えはないけど・・・。

『んーつとね、ましろにあうまえ、かな。たいようとつきのけもの?つてよばれてたよ。そっちのほうがつよかったなー。』

「太陽と月の獣?なんか、凄い名前だねえ・・・。」

『しまのまもりがみといっしょにたたかっただけど、かてなかったんだー。』

「そっか、勝てな・・・え?勝てなかったの?」

キララが・・・勝てなかった・・・!?

『うん!でも、ひきわけみたいなかんじになってね!そのときにぴかぴかしたえねるぎーをもらったよ!』

『ピカピカしたエネルギーねえ・・・。』

キララが強いのはそのエネルギーのせいなのかな?

・・・つと、考えるのは後にしよう。一応、ルギアとホウオウの様子を見とかないと。あれを受けてホウオウが動けるとは思わないけど、ルギアはまだ動けるかもしれない。

—————

私達はルギアとハウオウの所に向かうと、2体とも森の中で倒れこんでいた。私が近づいても動く様子はない。

「これなら、しばらくは起き上がれないでしょ。それにしても……。」  
かぷちーの姿を思い出す。

一瞬だけ2つに見えた大顎に、ルギアを一撃で沈めるパワー。スゴかったねえ……。

でも、かぷちーもスゴく消耗してた……。

どうやったかはわかんないんだけど、あれに頼る戦いは勘弁してほしいなあ。

「さて、きららはエネルギーどれくらい残ってる？」

『んー、めておびーむいつかいぐらいかな？』

「おおー、結構ギリギリだったんだねえ……。ミスタは……。」

そうやって隣のミスタに声をかけた瞬間、ミスタの体がポテツと倒れた。

「ちよつと、ミスタ!？」

慌ててミスタに駆け寄ると、ミスタの体がすごい熱をもっていた。

メテオビーム連発させちゃったし、そりやそうなるよね。

でも、さつき乗ってた時は全然気づかなかったんだけど……。もしかして、無理矢理冷やしてた？

無茶するねえ……。いや、無茶しないと勝てなかったよね……。

「気づかなくてごめんね。ミスタも休んでて。」

ミスタもボールに戻す。

結局、ハウオウとルギアを倒すことは出来たけど、戦えるのはメテオビーム1発のきららだけ。

……後は、サンダー、ファイヤー、フリーザーだけど、誰が連れてきたんだろう？

そう思った時だった。

どこからともなく大量のポケモン達が現れて、倒れたルギアとハウオウを取り囲んでいく。

「こんなにくさんのポケモン、どこから……?」

マシロは知らなかったが転送システムの不調。それが復旧し、ジユウト、カントーのトレーナーがポケモン達を送ることが出来るようになった事で、戦いを止めようとしたトレーナー達がポケモンを送った。そして、その思いがポケモンを伝わり、ルギアとハウオウを解放する大きな力となった。

「なんか、あったかいね。」

『ほかほかだねえ〜』

その思いが伝わったのか、ルギアとハウオウは目を開けると体を起こす。

そして、周囲のポケモンと私を一瞥すると翼を広げて飛び去っていった。

そして、目の前にフワリと落ちてきたのは1対の、銀と虹の輝きを放つ羽。それを手のひらで受けとる。

「おお、キレイだね。」

目の前にかざすと、キラリと輝く。

「・・・さて、これでルギアとハウオウは大丈夫・・・かな？後は祠の方だけど、ヤナギはどうなったんだろう？」

私は祠がある場所を知らないし、闇雲に森を走り回るのも効率が悪い。どうしたものかなあ・・・。

プルルル。

「お、噂をすればブルーから。祠の方も片付いたかな？もしもし？」

ポケギアを取り出し、相手を確認すると電話に出る。

『ごめん、マシロ！ヤナギに逃げられた！』

電話の向こうから、ブルーの焦った声が響いた。

## 65話

「さて、ここがウバメの森ね。祠は森の中央……。急ぐわよ、シルバー。」

「ああ、背中は何てくれ。」

「フフツ、言うようになったじゃないの？」

「マシロに鍛えられたからな。」

「あの子、戦いを教えるのは苦手って言ってたんだから感謝しなさいよ？」

「止むを得ず、といった所だろう。それに、苦手というより不慣れ、という感じだったがな。」

「そう……。」

まあ、仮面の男と会ったことすら報告してこなかったぐらいだし、色々あったんでしょうね。シルバーを鍛えてたのは意外だけど。

「ありや、ホントにやって来たよ。」

「あの人があると云ったんだ。来るに決まってるさ。」

「誰だ!？」

森の中から2人分の声が聞こえてくる。

その声にシルバーは叫び声を上げるが、あたしにはその声に聞き覚えがあった。

「ブルー、こわいかおー！」

ボールからブルーを出し一点を指さすと、そこに向かってこわいかおをしたブルーが睨みつける。すると、そこから飛び出してきたのは2人組の男女。

「イツキがふざけて声をかけるからバレただろ？」

「アハハハハ、カリンそんな怒らないでよく。」

「まあ、いいさ。元々姿を隠す気なんてなかったしね。久しぶりだね、ブルー、シルバー。仮面の子供がマスク・ド・チルドレンこうして顔を合わせるのは初めてだね。」

「聞き覚えがある声だと思ったら、やっぱりそうなのね。ブルー、とっ



しん！」

「ブラツキー、だましうち！」

ブルーとブラツキーの体がぶつかり合い互いに弾かれる。

「ヒュ〜ヒュ〜、やるねえ〜。流石は同じ仮面マスク・ド・チルドレンの子供ってとこかな？でも、今日に限ってはここを通すわけにはいかないんだよね？」

「今日、あの人がようやく時をとらえる日だからね。だから、誰も通す訳には行かないのさ！」

「時をとらえる……。やっぱり！」

「そりゃ知ってるよねえ……。知ってるからここに来たんだろうし。それなら……。脱走した時にあの2枚の羽を持っていったのも偶然じゃないってことかな!? ネイティオ！」

「……。ツツ！鳥……。ポケモン!?!」

イツキが唐突に繰り出した鳥ポケモンの姿を見て、一瞬身体が硬直する。でも……。

「ニューラ！」

横からシルバーがニューラを繰り出してネイティオを切り裂く。

「シルバー！ありがとう、助かったわ。」

「言っただろう？一緒に戦うって。イツキはオレが引き受ける。義姉さんはカリンを！」

「……。ホントに、頼もしくなっちゃって。そっちは任せたわよ、シルバー。」

アタシは少しだけシルバーと視線を交わし、カリンと向き合う。そして、シルバーはイツキのポケモンとぶつかり合いながらあたし達から遠ざかって行った。

「そういう事だから、あなたの相手はアタシよ？」

「いいわよ？修行の途中で逃げ出したあなた達と、あの人の元で訓練を受け続けたアタイ達。どっちが強いか、なんて明白だろうけどね！」

「だから何よ？それを言うなら、あんたの言うあの人を倒したマシロがシルバーの師匠なんだもの。シルバーの方が強いんじゃないの？」  
言葉を交わす間に、あたし達の間でブラツキーとブルーが何度もぶ

つかり交差していく。

「・・・ツツ!!・・・だからあの人はたった1人のトレーナーに残党の大半を回したのか・・・。」

「あら?この事は知らなかったみたいね。まあ、それもそうよね。自分が負けたことなんて言ったら、士気にも影響するもの。」

残党なんて主体性のない奴らは、強いからつてだけで従っている者も多いはず。そんな中で組織のトップの敗北は、組織の崩壊に直結するかもしれないしね。

「ふん!それでも、途中で逃げ出したのはあんた達の方。今まであの人の元で訓練をつんだアタイ達が負ける訳ないのさ!」

「そう思うなら、好きなだけ思ってなさい!あたし達は今日、仮面の呪縛を解き放つ!」

「ブラッキー!」

「ブルー!」

「かみつく!!」

あたし達が同時に叫ぶと、互いのキバがぶつかり合う。そして、もう一度弾かれたその時。

あたし達の上部を小さな影が通り過ぎ、それを大きな影が追いかけてあたし達を通り過ぎる瞬間。

カリンもろともあたし達に、エアロブラストが降り注いだ。

「キヤアア!!」

「うわああ!!」

揃って悲鳴を上げながら上空を見上げると木々の隙間から一瞬だけ、大きな鳥ポケモンの影とそれを追う小さな影が見えた。

今の小さな影は・・・マシロ?

「今の大きな影はルギア・・・?なんで森の上で戦ってるのさ?セキエイを制圧したら、あの人の準備が整うまではアタイ達の所に来て、足止めをするはずじゃ・・・。」

「そういう手筈だったの・・・。つてことは、マシロがここに来たのは仮面の男にとってもイレギュラーつてことね。」

マシロがここに居るつてことは、仮面の男もここに来てるはず。

だったら、急いで祠に向かわないと！

あたしはブルーをボールに戻す。

「本当は、仮面の男と対峙するまでは取っておくつもりだったんだけど、仕方ないわ。」

「いったい何を!?!」

「見せてあげるわ！四天王との戦いの後、どうして自分でジョウトに来なかったのか。それは、やらなきゃいけない事。乗り越えないといけない事があったから。」

「だから！なんだと聞いている!?!」

「あなた相手に3体は勿体ないわ。1つだけ見せてあげる。いきなさい、ファイヤー!」

繰り出したのはカントーに生息する伝説の鳥ポケモンの1体。

「伝説の鳥・・・、ファイヤーだって？あんた、鳥恐怖症だったはずじゃ・・・。」

「言ったでしょう？乗り越えたって。ファイヤー、ほのおのうず!」

カリンとブラッキーの周りを炎が取り囲み渦をまく。

「くそっ・・・。これじゃ、身動きが取れない!」

「それじゃ、少しだけ大人しくしてもらおうかしら？ファイヤー、ゴッドバード!」

「クソおおお!!」

叫び声を上げるカリンを、ブラッキー共々ファイヤーのゴッドバードで吹き飛ばすと、鈍い音をたてて木に叩きつけられる。

そして、ドサツと地面に倒れ込むと動かなくなった。

ーーーーシルバー視点ーーーー

「なんでそんなきばつてるのさ。せつかく逃げ出したんだからさ、あの人に歯向かうなんてやめてもつと楽に生きなよ!」

「生き方、か。オレは自分の生き方を変えることなんて出来ない。それに、お前みたいに仮面の男にしがみつくような生き方はごめんだ!」

ニユーラがネイテイオを弾き飛ばす。そして、ネイテイオにおいちをかけるニユーラの爪と、ネイテイオの翼が交差し甲高い音を響かせ弾き合う。

「しがみつく、ね。そもそもボクたちは自分から弟子入りしたから、確かにそう見えるかもねえ。」

「なんだと!？」

「ボクもカリンも天才すぎたんだよねえ。小さい頃からどんな大人にも負けなかったし。だから、もつと刺激を求めて、もつと愉快的な暇つぶしを求めてたどり着いたのがあの人の所ってワケさ!だから、この戦いだったただの遊び、レクリエーションみたいなものだね!」

「・・・遊び、か。」

「んん?怒ったあ?」

「いいや、喜んでるのさ。同じ境遇のお前達と戦うことに、少しだけ躊躇いがあった。だが、今の話を聞いてそんな躊躇いは無くなった!」

「そうかい?それなら来なよ、シルバー坊や!」

そう言つて互いに構えた時、オレ達の上を小さい影が通り過ぎ、それを大きな影が追いかけていく。そして、その影が通り過ぎる瞬間。オレ達にエアロブラストが降り注いだ。

「ひゃあああああ〜!!」

「ぐああつつ!!」

オレは上を見上げると、森の隙間から過ぎ去っていく大きな影。そして・・・。

イツキ達をメテオビームが貫いた。

今のはルギアのエアロブラスト!それに、マシロか!?

イツキの方に視線を戻すと、メテオビームに当たったお陰で、酷くボロボロになっていた。

今のは……。狙ったものじゃなさそうだな。なら、流れ弾に当たったのか……。不運な奴だ!

「ニユーラ、おいうち!」

運悪くメテオビームの直撃を受けたネイテイオに、ニユーラがおいちをかける。

「ネイティオ!？」

「これで終わりだ! オーダイル、おんがえし!」

オレはニューラを引つ込め、オーダイルを繰り出すと、ネイティオを木に叩きつけた。

「まっつてよく。ポケモンがなついてないと威力の発揮しない、おんがえしであんなパワーを出すなんて聞いてないよく……。」

「お前達にとっては遊びかもしれない。だが、オレにとってこの戦いは、自分自身の運命に決着をつける戦い。その為に手にした力だ。」

「こんなの、全然楽しくないよ。元々、あの人にそこまでする義理はないし、ボクもうサヨナラするから。」

そう言っつてイツキは、この場から逃げ出して行つた。

「お前達とは、覚悟が違うんだよ。」

そう呟くと、オレは義姉さんと合流するために駆け出した。

————ブルー視点————

「これで、しばらくは起きてこないでしょ。」

「義姉さん!」

ちやうどその時、シルバーもイツキを倒したのか戻ってくる。

「シルバー、そつちは片付いた?」

「ああ。倒した……、と言うか、流れ弾が当たつてな。運の悪いヤツだ。」

さっきのあれ、シルバーの方にも降つてきたんだ。当たらなかつたのは運が良かったわね。

「片付いたのなら、なんでもいいわ。それより、早く祠に向かいましょ。」

「上は放つておいていいのか? ルギアが相手なら、手を貸した方が……。」

「駄目。仮面の男が祠にたどり着いたら、その時点で終了なのよ? それに、あたし空中戦はまだ苦手なのよね……。だから、マシロに加勢しようと思つても、かえつて足を引つ張ることになるかもしれない

い。」

「そうか……。マシロには、1番キツイ相手をさせてしまうな。」

「適材適所ってやつよ。それに、なにもしないとっては言っていないわ。」

そう言っただけはボールを2つ取り出す。

「サンダー、フリーザー。出てらっしゃい！」

出てきたのはサンダーとフリーザー。ファイヤーとは別の伝説の鳥ポケモン。

「あなた達はマシロの援護をお願い。」

そう言うと、3体は飛び上がっていく。

「あの3体がいれば、マシロなら何とかするでしょ。それより問題はあだし達よ。仮面の男より先に祠に向かわないと。急ぐわよ。」

「分かった！」

あだし達は祠に向けて走り出した。

その直後、何か大きな物が墜落するような音が響いた。

## 66話

祠を探して森の中心部に向かうと、少し開けた場所に出る。  
そこに祠はあった。

「ここね。」

「奴は……。まだ来ていないようだな。」

「みたいね……。後は、ここを守り切ればあたし達の勝ちよ。」

「それにしても、さっきの音は……。?」

「マシロがやってくれたんでしょ。」

シルバーと話している途中、目の前の地面が膨らみ始める。

それと同時にあたしのポケモン凶鑑からピピピと音がなり始める。

この音は共鳴音……。?ってことは、もしかして。

「ツツー誰だー!」

そして、それを見たシルバーが声を上げると、膨らんだ地面から顔を出したのはサイドン。その後ろから見慣れた2人の顔が出てくる。

「やっぱりレッド!?それにグリーンまで。どうしてここに?」

「ブルー!オレ達はこのスプーンに導かれて来たんだ。そう言うブルーこそ、なんでジョウトに?」

そう言うレッドの手にはスオウ島であたしも手にした事がある、運命のスプーン。

それを見ながらあたし達はポケモン凶鑑の共鳴音止める。

「少し、大きな借りを返しにね」

なんの事か分からない2人は首を傾げている。

あんな達は分からなくていいのよ。

「そうだ、2人とも。返しておくよ。」

そう言つて、おもむろにレッドから渡されたのは、1つのモンスターボール。

グリーンも同じようにボールを受け取り、あたし達はそれを開く。

中から出てきたのは、シロガネ山に行く時にレッドに預けたカメラちゃん。

あたしの鳥恐怖症を克服する為にも、カメちゃんに頼る訳にはいかない。そう思ってレッドに預けておいた。

グリーンが受け取ったボールからはリザードンが出てくる。

グリーンも同じようにレッドに預けてたのかしら？

そう思っていると、さっきの音を聞きつけた様子で新しい人影がこの場所にやってくる。

「今の音って、ポケモン凶鑑の共鳴音じゃ……。」

そう言いながら森の茂みから顔を出したのは麦わら帽子をかぶった、これまた見知った顔。

「イエロー!？」

「レッドさん!?それに、グリーンさんにブルーさんまで……。」

驚いた声を上げるレッドとイエロー。

なにこれ、同窓会かしら?なんと言うか、運命的な物を感じるわね。

「やれやれ、祠には誰も近づけるなど言っただはずなのに……。なんだこの賑やかな様子は。」

そう思っていると、森の中から声が聞こえる。

「誰だ!？」

シルバーが叫ぶと、全員が一斉に声のした方に振り向く。

そこには、背中にラプラスを背負った氷の人形に腰掛けるヤナギの姿があった。

「ジムリーダー、ヤナギ……。マシロの予想は的中していたな。」

「状況は掴めないが、奴は敵……。ということではないのか?」

「ええ。ポケモンリーグを襲撃した仮面の男の正体よ。」

グリーンという言葉に私は頷く。

その瞬間、この場に降り立つ人影。

「わたしもいます!」

「クリス!」

シルバーはその人影をクリスと呼び、その子はメガニウム、それと焼けた塔から飛び出したポケモン、エンテイ、ライコウ、スイクンを従えていた。

「シルバーの知り合い?頼もしい援軍ね。」



「ああ。凶鑑所有者の1人だ。」

そう言つてシルバーはポケモン凶鑑を取り出す。すると、ポケモン凶鑑は点滅を始めピピピと音を発しだした。

「この音は……！」

「共鳴音！つてことは、ゴールドが何処かに!?」

シルバーとクリスが驚いた瞬間。

「待ちやがれえええええ!!」

ツンツン頭の少年がこの場に飛び込んで来た。

「『ゴールドツ?!』」

—————ゴールド視点—————

セキエイから飛び立った仮面の男を、バクたろうに乗って追いかけていると、空から仮面の男を追う人影が見える。

そして、その人影は仮面の男に向かって一筋の閃光を放つ。

「今のは、メテオビーム!?つてことはあの人影はマシロか!」

うずまき島で特訓中、きららの奴に偶にぶち込まれたあの技。よく覚えてるぜ。

メテオビームを受けると、仮面の男はその場で静止し、マシロがそれに追いつく。

すると、2人は何やら話始めたようだった。

「なにか話してんのか?」

そう思っていると、仮面の男が仮面とマントを投げ捨て、踵を返し森の中に飛んでいく。

その背中に今度は2本のメテオビームが迫るが、それをハウオウとルギアが受け止めるとマシロの前に立ち塞がった。

あれじゃ、マシロの奴は動けねえな。だったら、オレが奴を追うぜ!

「逃がすかよ!!」

オレは逃げ出した背中を追って森の中を突き進む。相手は森の中

に逃げ込んで安心してたのかその背中にスグに追いついた。

「あの小娘が追いかけてきたのは計算外だが、あの2体なら易々と突破できまい。」

「そうかもな。だが、マシロと話してたお陰でテメエに追いついたぜ？」

「ム？貴様は・・・。」

「ようやく素顔が拝めたぜ、ジムリーダーのヤナギ。マシロの予想はバツチリ当たってたな。」

「・・・ウバメの森、いかりの湖、セキエイ。何度も敗れながらも立ち向かってくる。その諦めの悪さに敬意を評し、名を聞いておこう。」

「オレの名か？オレはワカバタウンのゴールドだ！よく覚えときな!!行け、エーたろう!」

ヤナギに向かってこうそくいどうで向かっていくエーたろう。

「みだれひっかきだ!」

「デリバード!」

それをデリバードが氷で出来た爪でエータロウをはじき返す。氷の爪か、それなら!

「バトンタッチ!ウーたろう、けたぐり!」

「ム!?!」

エーたろうと入れ替わったウーたろうが、けたぐりで氷の爪を砕くと、デリバードが仰け反って後退する。

「ならば、凍りつかせるまでだ。ふぶき!」

距離を取ったデリバードがふぶきを放つ。が、オレはこの光景に見覚えがあった。

この状況、シルバーの奴と特訓してた時と全く同じじゃねーか!あんにやろう、こういう事態も想定してオレと戦ってたってのかよ!

でも、それなら特訓の時と同じように!

「ふぶきを貫け!ばくれつパンチ!」

バトンを受け取った事で速度の上がったばくれつパンチが、デリバードのふぶきを貫きデリバードをぶん殴った。

「何っ!?!」

ヤナギは驚いた声を上げるが、デリバードはそのまま木に叩きつけられ地面に倒れ込む。そして、ウーたろうが氷の体を押さえつける。「へっーマシロの特訓は伊達じゃねえってことだ！それに、まだ終わりじゃねえぜ！マンたろう、キマタロウ！」

オレの頭上で、マンたろうがキマたろうを乗せて周囲を照らしだす。

「これは・・・、にほんばれか！」

「その通りだ！そして、最後はバクたろうの炎がその氷の体を溶かし尽くす！車イスなんかに乗ってんだ。その体がなけりや、満身に動けねえんだらう？」

そして、バクたろうが氷の体をどんどん溶かしていく。

「さあ、観念しな。年貢の納め時だぜ！」

「ぐおおおおお!!」

マシロの特訓のお陰で火力が上がったバクたろう。さらに、にほんばれで強化され、ヤナギにはもう打つ手はない・・・。そう思っていた。

「・・・まさか、貴様ごときに出す事になるとは思わなかったな。」

「なんだと？」

そう言つてヤナギは1つのモンスターボールを構える。そして、それが開いた瞬間、周囲を支配していた熱気が一瞬で冷気に包まれ、ウーたろうが凍りつく。

な・・・！にほんばれで強化されたバクたろうの火力を超えるだど!?

「紹介しよう、ラプラスのヒョウガだ。そして、私の切り札でもあり、目的そのものだ。」

「目的そのもの・・・？どういうことだ!？」

「おしゃべりをしている暇があるのか？」

「ツツツ!!」

そう言くと、ラプラスの放つ冷気はどんどん強力になっていき、いつの間にか周囲を凍りつかせ始めた。

そして、終いにはバクたろうすらも少しずつ凍りつかせる。

「マジかよ!?!」

オレが声を上げた瞬間、何か大きな物が墜落したような轟音と、地響き。

「今のは……。」

「まさか……!?!あの2体のどちらかがやられたというのか!!時間が無い、こうなったら!!」

ヤナギは手に持ったモンスターボールに、何やら細工を施している。そして……。

ヤナギの頭上に空間の歪みが現れた。

「完成だ!これで私は過去に戻り、あの時を取り戻す。……その前に、ゴールド。君とはここでお別れだ。」

「ちつ……くしょうが……!!」

ヤナギの放つふぶきは凄まじく、バクたろうの後ろにいるはずのオレやキマたろう達も少しずつ凍っていく。

バクたろうでさえ既に半分凍りついている。

クソつたれ!マシロの特訓でパワーアップしても、まだこれだけの力の差があんのかよ!!何か、何か手は……??

そう思つて周囲を見渡した時、ふぶきに煽られる野生のピカチュウ達が視界に入る。しかも、大事そうにタマゴを抱えている。

「テメエ、関係ねえ野生のポケモンまで……!」

「構わん。些細なことだ。」

「ぎげんなああああああ!」

オレはバクたろうの後ろから飛び出すと、ピカチュウとそのタマゴを抱えふぶきから守る。

「そうか、そのポケモン達を守ると言うのか。バカめ、そのまま凍りついてしまえ。」

ヤナギの言葉が聞こえるが、それに反応する程の余裕はない。

バクたろうの炎に守られていても少しずつ凍っていく程の冷気だ。

そいつは、バクたろうの後ろから飛び出したオレを一瞬で凍りつかせていく。

「ここまでかよ……。」

そう思った時、オレを襲う冷気が少しだけ弱くなる。

「何が……。」

と、後ろを振り返ると、野生のポケモンを抱えるオレを庇うように、ニョたろうとエーたろうがオレの背中を庇っていた。

「ニョたろう、エーたろう！お前ら!!」

そして、ニョたろうとエーたろうはそのまま凍りついた。

またか……。ここまでできて……。また、負けるのかよ……。

キマたろうとマンたろうも、いつの間にか凍りついている。バクたろうもほとんど凍りついて、先程までの炎なんて見る影もなかった。

「さて、そろそろお別れの様だな。言い残すことはあるか？」

「テメエに言い残すことなんか……。ねエ！以上だ！」

「そうか……。なら、そのポケモンごと、凍りつくといい！」

そう言つて、ヤナギがトドメを刺そうとした瞬間。

氷の体を、空間の歪みごと一筋の閃光が貫いた。

「ぐあああああああ！」

その衝撃でヤナギは氷の体を砕きながら地面に叩きつけられる。

そして、空間の歪みが消える。

「今のは、マシロのー！」

メテオビーム！なにせよ、ナイスだ！

「ぐっ……。そうか、またあの小娘か……。どこまでも邪魔をする

!!

氷の体を再生させながら起き上がると、忌々しそうに呟くと、さつきよりも小さくなった体で一気に飛び去って行った。

「なっ！にやろう……。や！」

起き上がろうとしたが、凍りついてうまく動けない。だが、腕の中のピカチュウ達は無事だ。そう安心していた時だった。

バクたろうの背中の炎が爆発したかのように燃え上がった。

バクたろうの炎が勢いよく燃え上がると、その炎は少しずつ、オレとオレの仲間の氷を溶かしていく。

「これは……。？」

「もうか」じゃな。」

唐突に現れた聞きなれた声に視線を移すと、そこには育て屋の老夫婦と、釣り人のおっさんの姿。

「育て屋のばーさん！それに、じーさんに釣り人のおっさんも……ぐっ！」

体の痛みに顔をしかめる。が、おっさん達もかなりボロボロ。

「ゴールド、大丈夫か？」

「オレに、大丈夫かって言う前に自分の心配をしろよ、おっさん。」

そんな様子でもオレの心配をするおっさんに思わず笑ってしまう。

「おお、キミがピカ達のタマゴを守ってくれたんじゃない。そんなボロボロになって……。ありがとう……。」

「へっ……。ボロボロなのはよくあるこった、気にすんな。それより、今、もうか」って……。」

「ポケモンの持つ特性と言うやつじゃ。バクタろうが、自身の危険を察知して発動したんじゃない。」

「火事場の馬鹿力みてえなもんか。」

育て屋のばーさんの話に納得すると、凍りついた仲間達の氷が溶ける。だが、1度凍りついたんだ、これ以上無理はさせられねえ。

「ありがとよ、みんな。」

バクタろう以外をボールに戻す。

「バクタろう、まだやれるか？」

バクタろうは大きく頷く。

「頼むぜ！もうか」ってやつ、あてにさせてもらうからな！」

そう言つてバクタろうに乗ろうとした瞬間だった。抱いていたタマゴが大きくなり、ガタガタと震える。そして。

タマゴから見たことの無いポケモンが生まれた。

「初めて見るポケモンじゃ。」

「ピカチュウ、じゃ無さそうだな。でも、その跳ねた前髪。親近感を感じるぜ。」

その小さいポケモンは、ぴよんとオレの頭に乗るとヤナギが逃げ出した方を指さす。

「お、ヤナギを追うってか？いいぜ、加勢なら大歓迎だ。頼むぜ！ちっ

さな相棒！」

そして、バクタろうに乗ったオレの両肩にさつき庇ったピカチュウ達が乗る。

おおう、流石に少し重てえな。

「うおつと!!てめえらも力を貸してくれるのか、助かるぜ。」

「ゴールド、オーキドから預かった手紙がある。だいぶ前に預かった物だから、戦いの役に立つか分からんが持っていていけ。」

「あんがとよ!行くぜテメエら、ヤナギを止める!」

育て屋のばーさんから手紙を受け取ると、バクタろうは駆け出した。

その背中で、オーキドのじーさんの手紙を開く。

『これまでわしの元から凶鑑を持って旅立った少年少女達は、それぞれ個別の能力に長けていたように思う。それは、ひとつひとつがトレーナーとして大切な能力ばかりじゃ。

わしは、「ポケモンとトレーナーとの関わり」を研究する者として、常に彼らの事に目を向けていた。

「戦う者」・・・レッド、ポケモン戦闘バトルの第一人者。

「育てる者」・・・グリーン、ポケモンの育成が上手い。

「癒す者」・・・イエロー、ポケモンの気持ちを読み取り癒す。

「捕らえる者」・・・クリス、ゲット捕獲の専門家。

「代える者」と「換える者」・・・ブルーとシルバー、2人でポケモンの進化と交換。』

手紙はここで終わっている。どいつもこいつもクリスから聞いた名前ばかりだがよ・・・。

「ああん?あのじーさん、オレには何も無いつてのか?だから手を引けってことか?わざわざ手紙でそんなことを伝えるなんてご苦労なことだ。でもよ・・・。」

1人で1番でつけえ奴とだが戦ってる、小さい先輩の姿を思う。

「凶鑑なんて持ってない奴だって戦ってたんだ。それなのに、何の能力も無いからって尻尾巻いて逃げられるかよ!」

こんな手紙、燃やしちまうか。

そう思つてバクたろうの背中の炎に突っ込もうとした時、封筒に残ったもう1枚の便箋に気づいた。

「ん？もう1枚あったのか。」

『ゴールド。お前は「孵す者」じゃ。お前が手にし孵したタマゴからは、潜在能力を最大限に引き出せるポケモンが生まれてきた。いや、能力だけじゃない。お前の意志や感情をも受け継いだポケモンの誕生。おそらく、沢山のポケモンと家族のように暮らしてきたお前だから身についたお前の能力。いや、お前だけの能力じゃ。』

おうおうおう、えらく褒めてくれるじゃねーか！俄然ヤル気が出てきたぜ。

「・・・ん？まだあんのか？」

そして、封筒に残った最後の1枚。そこに書いてあったのは・・・。「チツ、余計なお世話だつーの！・・・お、あの背中は！」

視線の先、開けた所にヤナギの姿が見えた。

「覚悟はいいか？行くぜおめえらー！」

オレは頭上と両肩のポケモンに声をかけると、広場に飛び込んだ。

「待ちやがれえええええ!!」



## 67話

飛び込んだオレたちを見てシルバー達が叫ぶ。そして、大きくなる共鳴音。

「シルバー、あの子が3人目の凶鑑所有者?」

「ああ。頼りになるかは分からんが・・・。」

「聞こえてんぞ、シルバー! ってか、なんだこの音? 壊れたのか?」

「何言ってるの、共鳴音よ! うずまき島で1度鳴ったでしょ?」

「おお!! そうだった!」

クリスに言われ、うずまき島の事を思い出すと凶鑑の共鳴音を止める。

「さあ、この戦力差でもまだ諦めないのかしら?」

綺麗なねーちゃんがヤナギに問いかけても、何も答えない。それどころか不敵な笑みを崩さない。

まだ何かあるって言うのか?

「お前の野望、今こそ潰える時だ!」

シルバーが先陣をきると、一斉に攻撃を仕掛ける。か、ヤナギの前に現れた氷の盾が攻撃を防ぐ。

「氷の盾、だと!」

「それだけではないぞ!」

驚いたのも束の間、氷の盾は形を変え人形の形になる。

完成したのは7体の氷人形。それが一斉にオレ達に襲いかかった。

「チツ、こいつら!」

「砕いても砕いても再生しやがる!」

「まだ終わりじゃないぞ、そら!」

オレ達が氷の人形を砕いていく間にヤナギがウリムーを出すと、ドンドン氷の人形を追加してくる。

そして、氷の人形はオレ達トレーナーを拘束しようとするが、バクたろう達は再生を続ける氷の人形に手一杯で、その手から逃れられなかった。

「きゃー！」

「クソっ！」

「離せっ！」

拘束した氷の人形はオレ達を抱えると、その場でドンドン凍りついていく。

チツ！これじゃ動けねえ!!

その時、祠から光が漏れ出すとその扉が開いた。

「あれは！ときわたりポケモン、セレビィ！」

セレビィ？何だそれ？

なんの事かは分からなかったが、ヤナギはセレビィが見えた瞬間ボールを投げ、セレビィを捕獲する。

「このままじゃ、まずいわね！」

「さあ、セレビィ。連れて行ってくれ。私の失った過去を取り戻す時間の旅へ。」

ヤナギの車イスの下に時計と温度計が現れ、時計が逆回転を始める。

「右が時計、左が温度計だ。時期に温度が273.15度に達する。全てが凍結する絶対零度だ。」

それじゃ、ヤナギを追う所じやなくなるじゃねえか！

「しゃあねえ、離れるオメエら！バクたろう、オレの事は気にすんな、焼き尽くせ！」

オレに乗っかっていたピカチュウ達が飛び降りた瞬間、バクたろうの背中が爆発し周囲の人形を溶かし尽くした。そして、バクたろうが放った炎がオレを包み込む。

「ちよつと、ゴールド!？」

「アイツ・・・！」

クリスとシルバーが、オレ行動に焦った声を上げる中。

「だああああアチャチャ!!」

オレは転がりながらそこから飛び出し、ヤナギと対峙する。

「ゴールド、そのパワーは・・・？」

「あん？もうか」 つつーらしいぜ？火事場の馬鹿力ってやつだ。

ああ、さっきの真似はあんまりオススメしねえぜ、シルバー。」

「やはり、最後まで歯向かうか。」

「つたりめえだ！バクたろう、かえんぐるまー！」

バクたろうが炎を纏うと、ヤナギに向かって突進する。その炎は、周囲を凍りつかせる速度を緩める程の火力だった。

「ほう、これ程の火力はジムリーダーでも出せんだろう。だが……！」

ヤナギの前にもう一度氷の盾が現れ、バクたろうを受け止め、その盾は溶ける度に再生を繰り返し、バクたろうを受け止め続ける。

「これが、永久氷壁の異名の由来かよ！……だったらよ、溶かし切るのが先か、凍りつくのが先か！オレとあんたで根比べといこうじゃねえかー！」

「それは一向に構わんが、お前のポケモンはもう限界ではないか？」  
「なんだと？」

そう言われ、バクたろうを見ると少しずつ炎の勢いが弱くなっている。それと同時に、辺りも少しずつ凍りつく速度を早めていた。

クソつ、バクたろうも限界に近い。何か手はねえのかよ……。

「一人じゃないさ。」

「そうよ、わたし達もいるわ。」

その言葉と共にバクたろうに加勢するのは、オーダイルとメガニウム。そして、エンテイ、ライコウ、スイクン。

「シルバー、クリス！テメエら、どうやってあの氷を?!」

「どうやら、エンテイの炎で溶けた氷は再生できないらしい。お前のように全て蒸発させる必要はないみたいだ。」

「ゴールドみたいに、火だるまにならなくて良かったわ。」

「こんな時まで真面目系はやめてくんねえか？……それでも、助かったぜ。」

「援軍か……。だが、9年前も私に勝てなかった者達だ。結果は変わらんよ、ヒョウガ、ウリムー。」

ヤナギは氷の盾を増やしオレ達の攻撃を受け止めるた上で、さらにふぶきを放つ。

ただでさえ気温が下がってるのに、ふぶきのおかわりかよ！

「さあ、これで終わ．．．この光景は!？」

そう言つてヤナギが上を見上げた瞬間。

オレ達に隕石が降り注ぎ、ヤナギごと辺りの氷を打ち砕いた!

「ぐああ!!」

「おわっ!!」

「きゃあ!!」

そして、色々な悲鳴が響く中夕暮れの空が一瞬だけ真昼のように照らされ、その後何かが墜落するような音。

「くっ．．．。またしてもあの小娘かああ!!」

なんだ、ヤナギのやつ急に空に向かって叫びやがって．．．。小娘ってことは、今のはマシロの仕業か？

「ゴホツゴホツ! 全く、マシロも遠慮なしね。あの2体相手なら仕方ないけど．．．。」

声が聞こえチラツと後ろを見ると、先輩方を氷つかせていた氷が全て砕けている。隕石の衝撃でまだ起き上がれそうにはなさそうだが、ヤナギもその様子を見て顔色を変えた。

「状況が悪いな。止めをさせなかったの心残りだが、これでお別れだ。どうせ、羽がなければ追つてこれん。」

そう言つと、ヤナギは祠に飛び込んでいく。

「待ちやがれ!」

オレはヤナギを追つて祠に手を突つ込むが、手を入れた瞬間腕がグニヤつと曲がり、あまりの痛みに思わず腕を引つ込めた。

「ぐっ! なんだこりゃ!？」

引つ込めた手を見るが、見た目に変化はない。祠を見ると、中はよくわからない空間が広がっている。

「時のはざまに入るには、銀色の羽と虹色の羽が必要なのよ。」

「さつきヤナギが言つた、羽つてやつか! それはねえのかよ?」

「それは．．．。」

綺麗なねーちゃんが言葉を区切りある一点を向いたままだまりこむ。それと同時に、オレの上に麦わら帽子が落ちてきた。

こいつは、さつきまで麦わらボーイが被つた．．．。さつきの隕

石で吹き飛ばされたのか？

それを手に取ると、帽子に刺さっているキラリと光る一対の羽。

「おーあるじゃねーか。借りてくぜ、麦わらボー……イ……？」

オレはその羽を引き抜くと、綺麗なねーちゃんが向いている方を向いて同じように絶句した。

おお……。ボーイじゃなくてガールだったか……。

視線の先にはポニーテールを恥ずかしそうに抑えている女の子の姿。どうやら麦わら帽子の下には、黄色い髪をポニーテールに結んだ長い髪が隠されていたらしい。そして、それを見た周りの奴らが妙な雰囲気になっていた。

「……と、とにかく……こいつは借りてくぜ！」

オレは変な空気を払拭するように叫ぶ。すると、どこにいたのかさつきタマゴから瞬った小さいやつが、バチバチと帯電しながらオレの頭の上にピヨンと乗っかる。

「お？なんか知らねえがえらくご機嫌じゃねーか。いいぜ、ヤナギの奴を止めるんだ！」

小さい体を覆っていた電気がオレ全体に広がり、オレを浮かび上げさせる。そして、そのまま祠の中に広がる変な空間に突撃した。

—————

祠の中ではオレの過去に起きたことが浮かび上がっては消えていく。

その中で、知らない青年の姿が映った過去が流れる。

ここにいるのはオレとヤナギだけ……。つてことは、これはヤナギの過去か！

その中では、ラ・プリスとラ・プルスと呼ばれたラプラスが砕けた氷原に飲み込まれていった。

「見たのか、私の過去を。」

「やっぱり、さっきのはあんたか。」

「そうだ。あの時失ったラ・プリスとラ・プルスを取り戻す為に、私は過去に戻る。」

「・・・だからあんたにとつて、ポケモンは道具だって言ったのか?」

そう言うのと、ヤナギは一瞬だけ間をおいた。

「・・・あの言葉は正確じゃなかったな。正しくは愛すべき存在!愛して、愛して愛しぬく!道具とは、その愛を貫くために利用するその他一切のもの!」

「へっ。やつとあんたの本音が聞けたな。だが・・・だからって諦める理由にはならねーけどな!」

「ゴールド。お前が羽を持つている以上、他の奴らが時のはざままで追ってくる事はない。つまり、ここでお前を倒せば、私を追えるものは居なくなる!ウリムー!」

「やってみやがれ!」

オレ達の間で氷と電気がぶつかり合う。

「どこにこんなエネルギーが・・・!」

「さあな!」

一瞬の拮抗の後、氷を貫いた電気はヤナギに迫るが、それを氷の盾で防ぐ。そして、直撃を受けた氷の盾は粉々になるが、直ぐに再生していく。

「無駄だ、いくら割つても再生する。潔く諦めたらどうだ?」

「なんだあ?今更そんな事を言うなんて・・・。もしかして焦ってるのか?」

「何を馬鹿なこと・・・。」

「そりゃ、そうだよなあ。」

オレはヤナギの言葉を遮る。

「なんだつて、時のはざまに入れば誰も追って来れないはずなのにオレっていう邪魔者がついてきた。それに、森の上にはここに入るために必要な羽の持ち主がいるんだ。そいつらが負けたら、あんたも勝てなかったマシロが羽を持ってここにやって来る。そりゃ、焦るつてもんだ・・・ぜっ!」

言い切ると同時に、盾の隙間からキューを氷の体に投げつける。

「ぐっ……！小娘ごときがあのだに勝てるよ、本気で思ってるのか！」

「だから、あんただけで先にここへ来たんじゃないのか？」

「……ツツ!!」

絶句するってこたあ、凶星か？

「ま、ここでオレがあんたをぶっ飛ばせば全部解決だな！喰らえよ、<sup>スーパー</sup>超ライジングサンダー!!」

「だが、まだ盾がある！」

「氷の盾なんて関係ねえ！人形に刺さったキューが避雷針だ！氷の盾ごと吹き飛びやがれ！」

「キサマ……!!」

電気が避雷針に届こうとした瞬間、人形の右腕が伸びオレに迫ったが、オレに触れる直前<sup>スーパー</sup>超ライジングサンダーがやつの体を吹き飛ばし、右腕は頭を掠めるだけに終わった。

「おっと！へっ、惜しかったな！」

「それはどうかな？」

「なんだと……、ガッ!!」

やつがニヤリと笑った瞬間、オレの体にもすごい負荷がかかる。まさかと思い、頭に手を伸ばすとゴーグルの間に挟んだはずの羽がなくなっている。

「テメエ……！」

「お前の狙いは見えていた。なら、私も同じ事を狙っているとは思わなかったのか？そら、ゴールドが持ってきた羽は、自慢の電気に巻き込まれて燃えているぞ？」

視線の先には燃え尽きて消えかかった羽。

「さあ、その状態では最早抵抗すらできまい。この空間で私の氷に閉じ込められるとどうなるか、身をもって知るがいい。ヒョウガ、ぶぶきー！」

ヤナギが放ったぶぶきがオレに迫るが、羽を失った以上まともに動くこともできない。

そう思った瞬間、オレ達の間には立ちはだかる3つの影。

「フリーザー、ふぶき！」

その1つがふぶきを押し止め、1つはオレを受け止める。その瞬間、体にかかる負荷が消える。そして、最後の1つには……。

「待たせたね、ヤナギ。ゴールドも1人で追いかけるなんて無茶したねえ。」

オーキドのじいさんに「守る者」と呼ばれたマシロの姿があった。



## 68話

『ごめん、マシロ！ヤナギに逃げられた！』

電話の第一声は、ブルーのそんな声だった。

「逃げだつて、どこに行ったの？」

『時のはざまよ！そっちはホウオウとルギアは倒したんでしょ？ちよつと、そいつらの羽を筆つて急いで祠に来て！』

え、時のはざまつてどこ？それに筆つて・・・？

「ホウオウとルギアはもう飛んでつたよ？」

『ハア!?あのゴールドつてお馬鹿は一組しかない銀色の羽と虹色の羽を持つて1人で時のはざまに行つちやつたから、それがないとヤナギを追えないのよ!!』

「え？ゴールドが1人で追つていったの？」

『そうよ。さっきの隕石のお陰でゴールドの手元に飛んでつちやつて、それを持つてそのまま追つて行つたわ。』

ごめん、それきららだ。

『よんだー?』

「呼んでないよ。」

『よばれたきがしたんだけどなー。』

きらら、エスパータイプだからか偶に察しがいいよね。

「それで、筆つてことは羽が必要なの？」

『そうなのよ。時のはざまの中は空間が捻れてて、羽に守られてないとまともに動けないらしいの。』

ふむふむ、時のはざまつていう変な空間に逃げ込まれて、それを追うために羽が必要、と。

「それなら大丈夫かも。飛んでつた時に、ちよつとその2枚の羽を落としていったから。」

『でかしたー!』

手元にある2枚の羽を見ながら答えると、ブルーは勢いよく叫んだ。

『マシロ、急いでこつちに合流できる?』

『できるけど、祠の場所知らないよ?』

『それなら大丈夫よ。そこにファイヤーがいると思うけど、その子にメールを持たせてあるからそれを見て。』

「あ、ファイヤー達はブルーが連れてきてくれたんだ。ありがと、助かったよ。」

お礼を言いながらファイヤーの懐に手を入れると、指先に何かが当たる。あつた、これだね。

出てきたのはながらメール。これ、セキエイでシルバーが奪つたやつだね。ふむふむ、祠の場所は森の中央辺り、か。

目を通すと、祠の場所や羽が必要な事、セレビイの事等、色々と詳細な事が書かれていた。

『それなら良かったわ。あたしも鳥恐怖症を克服したかいがあつたつてもものよ。』

「え?ファイヤー達で鳥恐怖症を克服してたの?」

『そうよ。のんびりしてる暇はなかつたもの。』

いや、ポケモンリーグのとき、博士のオニスズメで悲鳴を上げてたのにいきなりファイヤーとか、ハードモードすぎない?最初はイージーにポツポにしとけばよかったのに。

そんな事を思いながらファイヤーの背中に乗り込む。

「さて。ファイヤーお願いね。」

お願いすると、ファイヤーは飛び上がり森の中央に向かって飛ぶ。隣にはきさら、後ろにはサンダーとフリーザーがついてくる。

おお、ミスタより早いや。これなら直ぐに着きそう。

『いい?時のはざまでは羽に守られてないとまともに動けない。でも、それはヤナギも同じ。そして、ヤナギが時間を遡るにはセレビイというポケモンが絶対に必要なの。』

「メールに書いてた事だね。」

『そうよ。それで、ヤナギを守っているのは2枚の羽を使って作られ、セレビイを捕獲した特殊なボール。つまり・・・。』

言葉を区切ったところで、ブルーの言いたいことを理解する。

「つまり、そのボールを破壊すればセレビィを解放できて、なおかつ時のはざままでヤナギを無力化させられるってことだね。」

『そうゆうことよ。・・・現状、ヤナギにいいようにやられて、隕石でまともに動けるトレーナーはいない。情けないけど、最後の最後までマシロに頼ることになっちゃたわね。』

「気にしないでよ。それに、隕石に関しては私のせいだし。」

『・・・薄々、そんな気がしてたわ。』

そこまで話した所で、木々の間から開けた場所が見えた。そして、珍しいやら懐かしいやら。色々な顔が見えてきた。

「同窓会でもしてたの?」

「あたしも同じ事を思ったわ。」

森を抜け、広場に入って最初に顔を合わせたブルーにそんなことを聞いていた。思わず呟いた言葉に、手元のポケギアから私に視線を移すと、ブルーはそんな言葉を返してきた。

そこにいたのはレッド、グリーン、イエロー、シルバー、クリス。いや、ホントに同窓会だよね。

「あれ、イエロー帽子かぶるのやめたの? うんうん、ポニーテールの方が似合ってるよ。」

「いえ、そういう訳では・・・。」

「それも、あなたの隕石の余波で飛んでったのよ。ほら、そこに置いてあるでしょ?」

指さした方を見ると、祠に被せられた麦わら帽子。あ、それも私か・・・。

「えつと・・・ごめんね、イエロー。」

「いいのよ。レッドがボケつとしたまま戻ってこなくなっただけだしね。それに、あの隕石で砕けた氷は再生しないのは助かるわ。」

周りに散らばる氷の破片を見ながらブルーは呟いていた。

あの氷、再生するんだ。知らなかったよ。

「でも、それのおかげであたし達から援護も出来ない。だから、中に入ったら全部マシロに任せることになるわ。」

「分かった。その代わり、この子達借りてくね?」

「もちろん。その為にマシロの所に向かわせたんだもの。」

「じゃ、行つてくるね。」

「ええ、任せたわよ。」

最後に短く言葉を交わすと、私はファイヤー達と祠に飛び込んだ。

—————

祠の中は、1度見た事のある不思議な空間だった。

「これ、スイクン達が居た場所・・・？」

『みてみてー。あそこぼくたちがいるよー。』

きららの指さす方を見ると、私ときららが町の中を歩いている姿が映る窓のようなもの。

「昔の私達、かな？」

それが浮かんでは消えていく・・・なるほど、確かにこれは時はぎまだね。

眺めていると見覚えのないものが増え始め、その中の1つにゴールドとシルバーが戦っているものがあつた。今はバクフーンとオーダイルに進化してたけど、その中ではまだヒノアラシとワニノコの状態。

うーん、私の知らない事も浮かんでくるってことは、ここにいる人の出来事が浮かび上がってるって事かな？

そして、砕けた氷原に飲み込まれる2体のラプラスと、その近くで泣き崩れる青年の姿が浮かび上がる。

「今のは、私でもゴールドでもないよね？つてことは、ヤナギ？」

そう呟いたとき、視界の隅で迸る電気のような物が見えた。

「・・・あっちだね。行くよー！」

方向がよく分からないこの場所で、目印になるものがあると助かるね。

そんな事を思いながら光の弾ける方に行くと、ゴールドの持っていたであろう羽が燃え尽きる所だった。

「さあ、その状態では最早抵抗すらできまい。この空間で私の氷に閉

じ込められるとどうなるか、身をもって知るがいい。ヒョウガ、ふぶき！」

そして、ヤナギがゴールドに止めを刺そうとした瞬間。私達はその間に割って入った。

「フリーザー、ふぶき！」

氷には氷で。ヤナギの攻撃を相殺すし、その間にサンダーがゴールドを受け止める。

「待たせたね、ヤナギ。ゴールドも一人で追いかけるなんて無茶したねえ。」

「うおっ！・・・助かったぜ、マシロ！」

助かったって言う割に元気そうだけど。それに比べてヤナギは人形の左側がなくなっている。ゴールドに大分やられたみたい。

「・・・ホウオウとルギアはどうした？」

「倒したからこの空間に入ってきたんだし、ここにいるんだよ？」

「チツ！セレビィ、早く私を連れて行ってくれ！」

「前に、逃さないって言ったよね？ファイヤー、ほのおのうず！」

何かしようとする前に、ヤナギをほのおのうずに閉じ込める。あとは、あの大事そうに握ってるボールがブルーの言っていたやつかな？あれを壊せば終わりだね。

「ゴールド、まだ戦える？」

「悪いが、相棒もエネルギーが残ってなくてな・・・。それに、再生する氷の盾がうぎいのなんの。」

エネルギーに、再生する氷の盾、か。

さつきブルーが、きららのりゅうせいぐんで砕けた氷は再生しないって言ってたよね？ってことは、きららの攻撃は再生できないのかもしれない。

それに、ゴールドの相棒ってその頭の小さいピカチュウ的なポケモンのことなら、なんとかなるかも。

「ゴールド、その子でんきタイプ？」

「多分な。」

「それなら、エネルギーはサンダーから分けてもらって。氷の盾は、

こっちで何とかするよ。」

ゴールドのちいさな相棒は、サンダーからエネルギーを受け取ると、バチバチと帯電し体に蓄積させていく。それを見ると、私もきららに声をかける。

「きらら、最後の1発。用意はいい?」

『いつでもいいよー!』

ヤナギを見ると、ほのおのうずの中で氷の盾を作り出し身を守っている。あの炎の中で氷の盾を維持できるんだ。流石、腐ってもジムリーダーだね。

でも、これだとボールを壊せるか分からないから、最後はゴールドに頼む事になるかも。

「ゴールド。氷の盾ごとボールを破壊しようと思うけど、外した時はお願いね。」

「ちよっ!マジかよ!?まだ心の準備が!!」

「きらら、メテオビーム!」

ゴールドの返事も聞かずに放ったメテオビームは、ほのおのうずと氷の盾を容易く貫き、残った氷の体を粉碎した。

「ぐあああっつ!!」

が、吹き飛んだヤナギは残った車イスに片手で掴まり、反対の手には未だにボールが握られていた。

「外したっ・・・!ゴールド!!」

「テメエはやることが全部急なんだよ!・・・やるぜ相棒!」スーパリアルティメット 超 究 極

ライジングサンダー!」

ゴールドは、センスのない技名を叫びながら電撃を放つと、ヤナギが持っていたボールを正確に撃ち抜く。

そして、砕けたボールから飛び出した一体のポケモン。・・・あれがセレビィ?

「ゴールド、ちゃんとボールを壊せたのは偉いけど・・・さっきの、何?」

スーパリアルティメット

「超 究 極 ライジングサンダーの事か?カツコイイだろ。」

「ダサイ。」

「んだどお!？」

正直な感想を言ったら、偉く不服そうに文句を言われた。・・・いや、ダサくない？

それより、ヤナギは・・・っと。  
ヤナギの方を見ると、車イスに捕まり苦しそうに胸を押さえている。

羽の加護が無いとあなるんだ・・・。

放って置いてもいいんだけど、ブルーとシルバーの事を考えるとヤナギは連れて帰った方がいいよね？

そう思ってヤナギを助けようとした時、セレビイがラプラスを過去が映る窓が沢山ある所に連れていく。

氷原の中を歩いている2体のラプラスが映る窓や、2体のラプラスが氷原に飲み込まれる窓。

他にもラプラス達が映る多数の窓がある中で、ヤナギのラプラスは2体のラプラスが氷原に飲み込まれる瞬間のその窓に飛び込むと崩れる氷原を凍りつかせ、ラプラス達を助けると、2体のラプラスの間に飛び込んでいく。

「おお・・・。セレビイが、私の気持ちを汲んでくれたのか・・・?」  
その過去では、嬉しそうに寄り添う3体のラプラス。そして、それに駆け寄る過去のヤナギ。

「あなたがこんな事をしたのは、あれの為?」  
ラプラスが過去に飛び込む間に、ヤナギの隣まで移動して問いかける。

「そうだ。私の過ちを正すために、生きてきた。その為なら、他のものがどうなろうと構わなかった。」

「はた迷惑な話だねえ。」

と言っても、気持ちは分かるけどね。もし、過去に戻ってブルーを助けられたら私だって飛びついてただろうし。

・・・尤も、その原因は目の前のヤナギなだけだ。

「ま、それでも・・・。あなたのラプラスはあなたの事もなんとかしたかったんだろうね。」

「どういう意味だ・・・?」

「だって、沢山の過去の中からあの時間を選んだってことは、あのラプラス・・・ヒョウガって言うの?」

「ああ。」

「ヒョウガはきつと、ヤナギも助けたかったんだよ。」

「・・・ツツ!!」

詳しくは分からないけど、あの事故があつてからずっと過去を追い続けていたんだとしたら、それはとてつもなく長い時間を費やしたことになる。

それをずつと隣で見えてきたヒョウガも、きつと思うところがあつたんじゃないかな?しかも、それが自分の親の事がきつかけとなると尚更。

ーもういちどそこから見つめてほしい♪ー

「お、クルミちゃんの『ラプラスに乗った少年』じゃねーか!・・・ん?でも、声が違う?」

「こ、この歌は・・・!?!」

その時、どこからともなく聞こえてきた歌声に、ヤナギは驚きとともに涙を流す。

「あの時は受け入れられなかった歌が、今は心に沁みるようだ。・・・そうか、私も愛されていたのか。」

「あの時の事が何なのか知らないけど、そう思うならさっさと帰るよ。こんな所じゃ落ち着けないでしょ?」

「そう・・・だな・・・。」

一人で納得しているヤナギに手を伸ばすと、ヤナギも私の手を取ろうと手を伸ばす。が、その手は途中で止まった。

「いや・・・。どうやら、この老体はもう限界のようだ。」

そう言うと、ヤナギの体から力が抜けたように車イスを掴む手から力が抜ける。

そして、そのまま時のはざまに落ちていく。



「ヤナギ！」

「構わん。これは他人を受け入れられなかった私への報いなのだろう。」

落ちていくヤナギを助けようと飛び出しかけた私を静かに止める。そんなヤナギを追って、車イスからウリムーがぴよんと飛び降りる。

「お前も、私の事を愛してくれていたのか・・・？」

「ムー。」

「そうか。」

ヤナギはウリムーを抱き抱えると、時のはざまに消えていく。そして、それを追うようにしてセレビィも居なくなる。

『結局、私は最後まで他人の手を取る事は出来なかったな・・・。』

消える瞬間、ヤナギのそんな声が聞こえた気がした。

「最後まで、自分勝手だねえ・・・。」

私は、何も掴むことのなかった手を見つめて呟く。

「さて、帰るよゴールド。」

「ああ・・・でもよ、ヤナギの事、助けなくて良かったのか？マシロなら無理矢理助けることも出来たんじゃねーのか？」

「まあ、出来たとは思うけど・・・。本人がああ言ってたんだから、しょうがないよ。」

自分で報いだと言ってたんだから、それを私が止めるのもね・・・。ブルーかシルバーがここに居て、どうしてもと言うなら助けてただらうけど。

「しっかし、いいタイミングで助けに来てくれたもんだな。流石、『守る者』だぜ。」

『『守る者』？何それ？』

「ん？なんだ、知らねーのか？オーキドのじいさんにそう呼ばれてたぜ・・・ほら、この手紙に書いてある。」

ゴソゴソとリュックを漁ると、中からしわしわになった手紙を取り出す。

差し出されたそれを受け取ると、中を読んでいく。

「いや、しわくちやじゃん。読みにくいなあ・・・。」

1枚目には、レッド達を『戦う者』『育てる者』等と表現している手紙。

2枚目にはゴールドの事を『孵す者』と褒める手紙。

そして、3枚目。

『そして、マシロくん。あの子は頑なにポケモン図鑑を受け取ってくれん。だが、実力や才能といったものは他の図鑑所有者と同じ．．．いや、それ以上だとわしは思っておる。

だが、ポケモン図鑑を受け取らない事から分かるように、名誉や名声といったものには興味が無い故に、今まで図鑑所有者の影に隠れておった。

そんなマシロくんが戦う時は、いつもブルーの為か、誰かを助ける時だったように思う。つまり、あの子は自分の為じゃなく、誰かの為にしか戦うことは無いのでは無いかと思う。

それは、あの子の過去の出来事から、そうなってしまったのかもしれない。だから、この表現はマシロくんの才能というのは間違っているかもしれない。

じやが、いつかマシロくんが自分の為に戦うことがあるまでは、あの子の事を「守る者」と呼ぶ事にしようと思う。

追伸。ゴールド、お主もマシロくんを見習って少しは他人の事を思いやって行動．．．』

そこからは、つらつらとゴールドに対する小言がこれでもかと綴られている。

とりあえず、私を図鑑所有者達に混ぜないでくれないかなあ．．．いや、それよりも。

「手紙の内容より小言の方が長いんだけど．．．。ゴールド、博士に何かやったの?」

「え?いやー．．．。よくあるこった、気にすんな!」

ジト目でゴールドに問いかけると、頭を掻きながら誤魔化し始める。

その反応、絶対何かしでかしてるでしょ。

ため息をつきながら手紙をゴールドに返そうとしたら、もう1枚手

紙に何かが引っ付いていた。

「ん？なにこれ・・・アハハッ！」

「ん？どうした・・・ブハッ！」

それを見た私が笑うと、それを覗き込んだゴールドも笑い出す。

そこに描かれていたのは、赤い髪で目はギョロつとし、鼻はぺったんこでほっぺたは膨らみ、タラコ唇のブサイクな顔の手配書。

「ハハッ！あん時の手配書かあ！よく残ってたな。」

「手配書って事は、これシルバー？」

「おう！会心の出来だろ？」

笑顔で答えるゴールド。って、これゴールド作なのか・・・。

いや、似てるか似てないかの話なら圧倒的に似てないんだけど。それでも、ヤナギが消えていった後の微妙な空気を払拭したという意味なら。

「フフ・・・。確かにそうかも。」

「凶鑑盗難、及びワニノコ強奪の件でお前の身柄を預かる。」

時のはざまから出た私達が最初に聞いたのは、そんなグリーンの声だった。

声のした方を見ると、シルバーを連れて行こうとするグリーンの姿。

さっき一段落ついたばかりなのに、相変わらず真面目でお硬いねえ。戦いが終わったあとぐらい、肩の力を抜けばいいのに。

そのままシルバーを連れて行こうとするグリーンを見て、何故かゴールドが怒りだした。

「あのトゲトゲ頭、オレを差し置いてシルバーをしょっぴくだとお!? マシロ、その手配書よこせ!」

「これ?」

怒っているゴールドに、シルバーとは似ても似つかないおもしろ顔の手配書を差し出すと、ゴールドはそれをふんだくるように取る。

「おいおい、その兄ちゃんよお。慌ててしょっぴく前に、ちよつと確かめたほうがいいんじゃないか?」

そう言つてゴールドは手配書を放り投げると、グリーンが空中を漂う手配書をパツと掴む。

「その手配書とそいつの顔はよお、笑つちまうぐらい全然違うぜ!」

ゴールドはサンダーから飛び降りると、グリーンの所に文句を言いながら歩いていく。

「ゴールドも元気だねえ。ヤナギにいいようにやられてポロポロなのに。」

それを見て苦笑いを浮かべながらファイヤーから降りると、1人になった私にブルーが歩いてくる。

「マシロ、終わったの?」

「うん。」

「ヤナギは?」

「時のはざまに消えていった。」

「そう……。」

グリーンと言い合うゴールドを眺めながらブルーと話していると、言い合っている2人の所にクリスが歩いていく。どうやら、仲裁に入ったみたい。

「今まで、ありがとね。」

「そんな神妙な顔して急にどうしたの?」

言い合うゴールド達や、何故かお見合いでもしているかのような雰囲気、レッドとイエローを眺めていると、声のトーンが下がったブルーの声に視線を向ける。

「ほら……。マシロにはヤマブキで助けてもらったし、四天王の時も、今回だって頼りっぱなしだし。」

もじもじしながら、微妙に視線をそらしながらお礼を言うブルーを見てピンとくる。これは……。

「ん?もしかして照れてる?このこのー。」

視線を合わせないブルーの頬を指でつつく。

思い返すと、面と向かってありがとうと言われたことはあまりなかったかもしれない。

確かに言い慣れない言葉って、妙に照れくさいよね。

「ああ、もう!やめなさい!人が素直にお礼を言ってるのにこの子は……!」

私の手を払いながら文句を言うブルー。でも、その口調は先程までの様子より、幾分明るくなった様な気がする。

うんうん。ブルーにはそのほうが合ってるね。神妙な顔なんてらしくないよ。

そんな時、プルルルとブルーのポケギアが鳴った。

「こんな時に誰よ……。って博士じゃない。ちよつと待っててね。もしも?」

お、博士もこっちの様子が気になったのかな?まあ、ゴールド達をセキエイに向かわせたのは博士だし、そりゃ気になるか。

「まあね。大体はマシロのお陰だけど……。いいじゃない。マ

シロ……。面白そうじゃない。」

会話の中で何故か私の名前が出たり、面白そうと言ったり、何の話をしているのやら。

ポケギアに向かって話すブルーは、しばらくすると私に視線を戻す。あ、終わったかな？

通話を切ったブルーは、注目を集めるように手を叩く。

「はい注目！グリーンもシルバーの事は置いて。レッドとイエローも、ポケギアを挟んでお見合いしない！」

いつの間にかレッドとイエローのお見合いに、ポケギアの向こうの人も加わっていた。

んー、あつちの通話相手は誰だろう。心当たりはないけど……。そんな私を尻目にブルーは話を続ける。

「ここにいるみんな、3日後セキエイに集合ね。」

「どういうことだ？」

みんなの気持ちを代弁するかのようグリーンが聞き返す。

「この事件で今回のポケモンリーグは中止らしいわ。でも、それだとつまらないじゃない？だから、あたしたちでエキシビジョンマッチをやるそうよ。」

「おお、面白そうじゃねーか。」

「それ、ボクも出ていいんですかね……。？」

「いいのいいの。つまらないなんてのは建前で、実際は事態の収集させたトレーナー達の紹介みたいなものだし。協会側としても犯人はジムリーダーでした、つてのも格好がつかないでしょ？」

ジムリーダーがロケット団幹部だったり、今回の首謀者がヤナギだったり。そりゃ、協会も体裁を気にするか。……ジムリーダーの選別どうなってるの？

ん？今ここにいてるみんなって？

「え、待ってブルー。それ、私も入ってるの？」

「そりゃそうよ。むしろなんで入ってないと思ったの？」

「いや、ホウオウとルギアの相手をして疲れたし。それに……。」

私は頭の上を指差す。そこには、スヤスヤと眠るきららの姿。

『zzz。』

静かだと思っただら寝ちゃってるんだよね。きららが寝るときってかなり消耗してるから、そういうのは遠慮したい。

「言っただでしょ？ 体裁を気にしてるだけなんだから、とりあえず出ておけばいいのよ。」

まあ、出るだけでいいなら楽だからいいかな。バトルはミスタが喜んで引き受けてくれそうだし。

「詳しくは博士の方から連絡があると思うから。それじゃ、あとはお見合いなり言い合いなり好きにきなさい。帰るわよマシロ。」

「わわっ！」

そう言っただら3体の鳥ポケモンをボールに戻すと、私の手を取ってブルーは走りだす。

「おみつ・・・!?!」

レッドとイエローがハモる声を背中に聞きながら、ブルーに引っぱられる形で、私も転ばないように気をつけながら森の中を駆ける。

「あの2人、なんであんな雰囲気なの？」

「レッドはイエローの帽子の下、知らなかったのよ。それがさっきの戦いで飛んでいったら、可愛いポニーテールが現れて面食らったんでしょね。」

へー、レッドはイエローの事をずっと男の子だと思ってたのか。・・・なんで今まで気づかなかったんだろう？ 男の子ってそんなもの？

「ま、そんな事よりマシロのお陰で肩の荷が下りたんだもの。今日はさっさと帰って、明日と明後日遊びつくすわよ！」

「え？ ホントに!?!」

ブルーが攫われた時から、・・・ううん。会った時からずっと、いつかブルーと一緒に色んな所に遊びに行きたいと思ってた。

でも、再開したブルーは色々なしながら抱えてて・・・だから、私はずっとブルーのお願いを聞いて手伝い続けてた。でも、ブルーがそう言うって事はブルーの中では全部決着がついたんだと思う。

だったらもう、遠慮しなくていいよね？

「ブルーに会った時から、ずっと、いつか一緒に外の世界に遊びに行けたらと思ってたんだ。」

「何言ってるのよ。マシロはもう色々な所に行ってるじゃない。」

「そうじゃないよ。」

私はブルーを追い越し、今度は私がブルーを引っ張る。

「ブルーと一緒に行く事に意味があるんだよ。」

振り返りながらそう言うと、何故かブルーは顔を赤くした。

「ちよつと、笑顔でそんな事言われたら照れるじゃない。」

「お、今日は2回目の照れ顔だ！」

やめなさいって言われるけど、私の本音だからどうしようも無いから大人しく照れててよね。

さあ、ブルーと何処に行こうかな？

楽しみだな!!



### 3. 5章 70話

仮面の男の事件が片付いた翌日。

あたしはマシロと一緒にキキョウ遊園地に来ていた。

というのも目覚めてそうそう……。

「ブルー！キキョウ遊園地に行こう！」

との一言で、行き先が決まった。

—————

「どれから乗ろうかな？ねえ、ブルーはどれがいい？」

「あたしはどれでもいいから、好きなのに乗りなさいよ。」

「んく……。ジェットコースターに観覧車。メリーゴーランドにその為諸々。悩むねえ。」

とか言う割に、向かっている先はジェットコースター。

やつぱり、1番目立つ乗り物に惹かれるのはどんな人も変わらないようね。

……というか、絶叫系のアトラクションは楽しめるのかしら？ホウオウとルギアとの空中戦のほうがよくばどスリリングだと思っただ……。

「ほらほら、早く行かないと他の人が並んじやうよ？」

「ハイハイ。今行くから慌てないですよ。」

急かす様にあたしの手を引つ張つるマシロを、落ち着かせる。

普段からは想像ができないほどのはしゃぎよう。一緒に来るだけでこれほど喜ばれるなら、普段からもっと遊びにいけばよかったわね。

ま、マシロのお陰で全部片付いた訳だし、あたしも目一杯楽しもうかしら！

この後、そう思っていたあたしの考えは甘かった事を痛感することになる。

—————

お昼前。

一通り乗り物を楽しみ、一息つこうと思ったあたしに。

「よしーもっかい行くよ!!」

と言つて、あたしの手を引いて2週目に向かう。

はいはい。今行くわよ。

—————

おやつ時。

「まだまだ行くよ!!」

………元気ねえ。

—————

夕暮れ時。

「んー、次で最後かな？」

「ちよつと……待ちな……さい。」

「ん?」

常に手を引かれ、アトラクションを周回すること3回。息も絶え絶えなあたしとは対称的に、元気いっぱいのマシロを引き止める。

いや、あなたなんでそんな元気なのよ。なんで、どうしたの? つて顔で見てるのよ。

「ちよつと・・・休憩に・・・しましょ？」

「でも・・・。」

「でもじゃない。」

「はい・・・。」

渋々といった感じで、近くのベンチに座る。

ふう、ようやく一息つけたわね。

「なんであなたはそんなに元気なのよ？」

「だって、ブルーと一緒になんだよ？ いっぱい遊ばないともったいないじゃん！」

「いやまあ、そこまで慕ってくれるのはありがたいんだけどね？ マシロは疲れてないの？」

「疲れてるよ？」

あつげらかんとマシロは言う。

でも、とてもそうは見えないのよね。ホントかしら？

「色んな人と戦ってきたからね。疲れてる姿を見せたら、つけこまれるかもしれない。いつでも余裕があるように見せとかないと、女の子の一人旅ってのは危ないからね。ブルーも知ってるでしょ？」

「まあ、ね。」

簡単そうに言ってるけど、一人旅するのは楽じゃない。

あたしは生きていく為に色んな事に手を染めてきたけど、この子は違うのよね・・・。マシロが旅に出たのも、戦いの中に身をおいてきたのもあたしのせいだし・・・。

そう思うと、少し罪悪感が湧いてくる。

「お、売店がある。ブルー、行ってみようよ！」

そんなあたしの気を察したのか、偶然なのか分からないけど、近くにあった売店の屋台を指差す。

・・・ホントに疲れてるのかしら？

「ハイハイ、行くわよ。」

笑顔を絶やさずにはしやぎ続けるマシロを見て、思わず笑みを浮かべながら追いかける。

「お菓子にお土産、うわ〜!!色々あるよ!!」

「そうね。」

屋台を見渡すと、見た目が綺羅びやかなものばかり。

そんな中、ふとガラス玉のついたアクセサリーが目にとまる。

「ふーん、ストラップもあるのね。」

「青色のものもあるよ！ねえねえ、これ！可愛くない!?お揃いでどう？」

あたしが手に取ったのは白いガラス玉の付いたストラップ。それに対し、マシロが手に取ったは青色のガラス玉が付いている。

それぞれ、相手の色のガラス玉を付けようってことね。

いいんじゃない？「これくさくさい。」買うの早いわね。いつの間にあたしの手からストラップ持っていったのよ。

お店の人がラッピングするのを断っているマシロのツイントールを眺めていると、いつだったか、きららとお揃いになっていると言っていたのを思い出す。

『その髪、伸ばしてるの?』

『伸ばしてる、というよりきららとお揃いになるようにしてる、って感じかな?』

『お揃い?』

『うん、ほら。こうしていると、きららの羽衣っぽいでしょ?やってみたかったんだ、友達と、お揃いってやつ。』

「・・・ねえ、ラッピングに使うリボンだけでももらえるかしら?できれば青色のやつ。」

「あいよ。」

「ありがとう。」

「それ、どうするの?」

「マシロはそのまま動かないでね。」

あたしは、リボンを受け取るとマシロの後ろに回り込む。そして、髪を結んでいる飾りっ気のない髪留めの所にリボンを結んでいく。  
んー・・・。

「似合ってはいるけど、子供っぽいかしら・・・?」

腕を組んで眺めると、マシロの身長の高さもあるからか子供っぽく見える。

「ありがと！後で鏡、見てみるね！それじゃ、これ。ブルーの分！」  
それでも。あたしの言った、子供っぽいという言葉を全く気にすることなく振り返ってお礼を言うと、あたしの手にさっきのストラップを握らせる。

「見て見てー！ブルーから貰ったポケギアに、お揃いのストラップ！完璧でしょ!!」

そして、あたしに見せびらかすようにポケギアについたストラップを振る。

・・・付けるのも早いわね。それなら、あたしもポケギアにつけておきましようか。マシロじゃないけど、お揃いってのも悪くないでしょ。

「・・・どう?」

「おおー!いいねいいね!」

お揃いのストラップを付けたポケギアを見せると、嬉しそうに笑う。いや、ずっと笑顔なんだけど一段と嬉しさが上がってる感じ。

「ほら。満足したなら今日は帰りましょ。流石に疲れたわ。」

「むう……。満足してないけど、仕方ない。無理は良くないし、帰ろっか。」

普段から無理ばかりしてた気がするけど、どの口が言うのかしら？

—————

そして、戦いが終わった3日後。

あたしはマシロを引き連れてセキエイ高原に来ていた。

「昨日も楽しかったね!」

「満足したようで、良かったわ……。」

遊園地で遊んだ次の日も、当然のように連れ回される。しかもジョウト全域場所問わず。

流石に元気過ぎない？あまり覚えてないけど、この子引きこもりだった気がするんだけど……。

「でも、わざわざセキエイまで来てエキシビションマッチかあ……。考えると面倒になってきた。もつとブルーと色んな所に行きたかったよ。」

「これが終わったら、また付き合っただけから。それに、マシロの晴れ舞台なんだから、そんな事言わないの。」

「やった!!……晴れ舞台？」

「ほらほら、早く行きましょ！」

マシロに連れ回されて疲れたからかしら？口が滑ったわ。

## 71話

2日間遊び倒した後、ブルーに連れられてセキエイ高原にやってきた。

「昨日も楽しかったね!」

「満足したようで、良かったわ・・・。」

んー、まだまだ遊び足りないけど仕方ない。

体裁の為やらなにやら言ってたけど、ロケット団幹部がジムリーダーをやったのに、今更何を取り繕うのやら。

「でも、わざわざセキエイまで来てエキシビジョンマッチかあ・・・。考えると面倒になってきた。もつとブルーと色んな所に行きたかったなあ。」

「これが終わったら、また付き合っただげるから。それに、マシロの晴れ舞台なんだから、そんな事言わないの。」

「やった!!・・・晴れ舞台?」

「ほらほら、早く行きましょ!」

なんか、誤魔化された気がするけど、ブルーはそれを隠すように私の背中を押す。

まあ、これが終わったらまたブルーと一緒にだし。サクッと終わらせちゃおう。こういうのはミスタが喜んでやってくれるよ。

そんなこんなで、背中を押されながらリーグ会場を進んでいくと、舞台に繋がる扉が見えてくると、大きな声が聞こえてきた。

『それでは第10回、ポケモンリーグ優勝者マシロ選手の入場です!!』

・・・今なんて?」

「タイミングはバツチりみたいね。ほら、行ってきなさい。」

「いや、今変な肩書きがついてなかった?」

「ほらほら、小さいことは気にしない・・・の!」

のー!と言うと同時に背中を叩き、私を舞台へ押し出す。

「ええ、ちよつとおおお!」

前にツンのめりながら舞台に出ると、綺麗に整った舞台の上に出

る。でも、天井や観客席は変わらずボロボロ。そのせいなのかは分からないけど、観客には誰も居ない。でも、舞台の上に付いている大型スクリーンには舞台に立っている私の映像が映っていた。

『今回のポケモンリーグは中止ということでしたが、バッジを8つ集めて予選免除の選手が居た為、特例ですが繰り上がり優勝という形での優勝となります!!あ、MCはこちらコガネラジオのクルミが独占生中継でお送りします!!』

「よっ！クルミちゃー！ー！ん!!」

「うるさい。」

舞台の隅っこには、既に他の凶鑑所有者の姿。その中でも、ゴールドのテンションが妙に高い。よっぼどうるさかったのか、隣のシルバーがしかめっ面をしている。・・・いや、シルバーはいつもあんな感じか。

いやいや、そんな事よりエキシビジョンマッチって話じゃ・・・？それに生中継？

「ちよつとブルー!?!色々聞きたいことがあるんどけど!?!」

「いやー。繰り上がり優勝なんて言ったら、マシロは辞退しちゃうでしょう?。」

「うん。面倒だし。」

「ハア・・・。だから黙ってたのよ。」

ブルーはため息をつきながら、通路から出てくる。

「今回の事件を解決した実力も含めての繰り上がり優勝よ。大人しく受け取るときなさい。」

「いらないし。そもそも、そんな事しても他の参加者が納得しないでしょう。」

予選免除されても、そもそも大会が中止になっているのに繰り上がり優勝なんて、他の参加者が黙っているはずないと思うんだけど・・・。「その為のエキシビジョンマッチよ。」

「え、もしかして晴れ舞台って言ったのは・・・。」

『えー、現在多数のメールが届いています。中止になった大会に繰り上がり優勝なんて事をしたら、他の参加者が納得しないのでは?と



いった内容が大多数です。そのような疑問はご尤もかと思われれます。なので、中止になったポケモンリーグの代わりと言ってはあれですが、只今より、新チャンピオンのエキシビジョンマッチを開催します!!対戦相手は、あのオーキド博士に認められポケモン凶鑑を託された7人のトレーナー!このトレーナー達との戦いを見れば、繰り上がり優勝にも納得して頂けるはずじゃ!・・・とのオーキド博士の推薦です。』

私の疑問を解説するかのようには、MCがどんどん話を進めていく。なるほど、首謀者は博士かあ・・・。

「ま、ここまでお膳立てされたんだから諦めなさい。ここまで大々的に出てるんだもの、今更辞退つてもクレームものよ?」

「むう・・・。でも、なんで博士は私を推したんだろう?」

もしかして、手紙に書いてあった自分の為につてやつ?言われなくても、わりと自分勝手にやってきたと思うんだけどなあ・・・。

『では、最初の組み合わせはこちら!皆さんご存知第9回優勝者、レツド選手!!そして、準優勝者グリーン選手VSマシロチャンピオン!!』  
「おっし!やるぞグリーン!」

「前もここで、お前と組んで戦ったな・・・。いくぞ。」  
隅から歩いてくるレッドとグリーン。

あそこにいるメンバーの実力からして、最初からラスボスじゃない?・・・と言うか2人?

『今回はエキシビジョンマッチということで、普段とは違うダブルバトルでお送りします!!互いに交代は禁止、出したポケモンのみで戦ってもらいます。』

ああ、ダブルバトルなのね。交代がないルールは、手持ちが少ない私にはプラスだね。・・・いや、マイナスじゃないだけかな。

・・・え、そんなことより私は?1人?

「私は誰と組むの?あ、もしかしてブルー!?!」

「そんな嬉しそうに言わないでよ・・・。あなた1人に決まってるでしょ?マシロのお披露目なんだから。」

「不公平!!」

「いや、チャンピオンのお披露目だし、あたしが出しゃばる訳にはいかないでしょ。」

「なら、1対1でよくない?」

「いや、1対1だと時間が・・・ね。生中継だし、それに突貫工事で舞台を直したから、舞台が長時間は耐えられないそうなのよね。」

「なら、もつと期間をあけるとか・・・。」

「博士いわく、こういうのは早いほうがいいんじゃない?」

「なんというか、ポケモン協会の都合がこれでもかどねじ込まれてるねえ・・・。これが大人の都合ってやつかあ・・・。」

「それでも!1人に対して2人はズルくない?」

「マシロなら大丈夫よ。ほら、行きなさい!」

そう言つて、また私の背中を押す。

促されるままステージを進み、レッドとグリーンの2人と対峙する。

「あの時とは違って、今度はちゃんとした舞台での勝負だな!」

「前も2対1で負けたからな。遠慮はしないぞ。」

「いや、少しは遠慮してよ・・・。」

1から10まで初耳とは言わないけどさ、3から10は初耳なんだよ?」

・・・まあ、先に聞いてたらこんな所には来なかったけどさ。

「フッシー!」

「リザードン!」

『レッド選手はフシギバナ。グリーン選手はリザードンを繰り返し出しました!チャンピオンは、この2体に対してどのように出るのか!!』

あの2体、完全に前の戦いを意識してるね。・・・そうになると、こっちも前と同じメンバーにしたいところだけど、きららは今エネルギーを全部使った反動で寝てるんだよねえ・・・。どうしたものか。

「いや、考えても仕方ないか。ミスタ、グロウお願い。」

わざわざ寝てるきららを起こすのも悪いし。と言うか、事件から3日しか経ってないのにまた戦わせるの?」

これが大人の都合ってやつか・・・。だんだん腹が立ってきた。

「ミスタ、グロウ。遠慮しなくてもいいみたいだから、思いっきりい  
よー!」

「そう来なくっちゃな!グリーン、あの日のリベンジだ!」

「いくぞ、レッド。気合いを入れろよ!」

『チャンピオンはスターミーと、・・・メタグロス?というポケモン出  
しました!!このポケモンはこの辺では見たことありませんね。』

『メタグロスは、はがねとエスパーの複合タイプで、ホウエン地方で石  
マニアから貰ったポケモンが進化したポケモンだそうよ。』

『そうなんですな!あ、いましれつとラジオに入ってきたのはオーキ  
ド博士から図鑑を受け取った1人で、ブルーさんです!』

『はあ、いい、よろしく!!』

ブルー、いつの間に解説席に・・・。

「リザードン、かえんほうしゃ!」

狙いはグロウ。はがねには、ほのお。まあ、当然だよな。だけど!

「ミスタ、ハイドロポンプ!」

グロウを庇うように立ち塞がったミスタが、かえんほうしゃを押し  
返す。ほのおにはみず。これも当然だよな。

『リザードンのかえんほうしゃを、スターミーのハイドロポンプが押  
し返す!少しずつですが、確実にリザードンに迫っています!!』

「レッド!」

「分かってる!フッシー、つるのムチ!」

押し返されるかえんほうしゃを見て、フッシーがミスタに攻撃を仕  
掛ける。

「グロウ!」

つるのムチに割り込んだグロウの腕にフッシーのツルが巻き付く。

「フッシー!そのままぶん投げろ!・・・え?」

意気込んだのも束の間、レッドは直ぐに困惑の声を漏らした。

「ビクともしない・・・!?!」

「そりゃ、グロウの重さって500kgを超えてるもん。」

「なんだって!?!」

「グロウ、思いっきりぶん投げろ!」

『これは驚きです！あの体で重さが500kg!!投げようとしたフシギバナが逆に宙をまっています。そして、かえんほうしゃとハイドロポンプがぶつかり合う中に一直線!』

「ちっーリザードン!」

少しづつ押されているからか、フツシーが巻き込まれるのを察したからのか、かえんほうしゃを止めると飛び上がり、ハイドロポンプを躲しながら前に進む。

「きりさく!」

そして、フツシーのツルをきりさくと、フツシーは舞台を滑りながら着地した。

「助かった!」

「気にするな。リザードンそのまま、フレアドライブ!」

『おおー!リザードンが華麗にハイドロポンプを躲し、フシギバナを助きました!これはファインプレーですね。』

『そうね。レッドは見た目通り考えが浅い時もあるから、ヒヤヒヤさせられる事も多いわ。』

「サラッと、貶していくねえ……。つと、来たね。」

フツシーのツルをきりさいたりザードンは、そのままスピードをおとさずにほのおを纏って突っ込んでくる。

これ、あの時に使ってた技だよね。フレアドライブ……。かつこいいじゃん。

「グロウ……。って、ミスタ!?!」

グロウに指示を出す直前、グロウに向かってくるリザードンの前にミスタが飛び出し、その体で受け止める。

「うわあ……。無茶するねえ。」

『これは、チャンピオンのスターミーが勝手に庇ったように見えましたが、みずタイプの自分が受けたほうがいいと判断したんでしょうか……。?』

いや、あれはお前の相手は自分だ、余所見するなよ。って感じかな？

「レッド!」

「分かってる！フッシー、ソーラービーム！」

体制を立て直したフッシーから、ソーラービームが放たれる。

狙われたのはミスタ。でも、ミスタが庇ってくれたんだから、こっちも体をはらないとね！

「グロウ！」

『おっと！今度はメタグロスがスターミーを庇って、その身でソーラービームを受け止めました！それに、ソーラービームを受けながらもフシギバナに向かって突き進んでいきます!!』

「嘘だろ!?ソーラービームを受けながら進んでくるのかよ!!」

「悪いけど、グロウはタフさが売りなんだよね！しねんのずつき！」

フッシーの目の前で突き進んだグロウが、その額に己の額を叩き込むと、フッシーの体が舞台に沈む。そして。

「ミスタ、体をはってたんだもん。用意は出来てるよね！」

リザードンを受け止めるミスタに視線を向けると、その体にエネルギーが満ちているのが分かる。

「ミスタ、メテオビーム！」

瞬間、閃光がリザードンを飲み込みみボロボロの観客席に叩きつけた。

そして、一瞬の静寂の後。

『決まりました！フシギバナとリザードンを倒し、勝利を掴んだのはマシロチャンピオンです！まさか、2対1で前回の優勝者と準優勝者を倒すとは驚きです！』

「2回目の敗北、かな？」

「そうだな。きらら抜きでの敗北か……。言い訳すらできん。」

『決着です！激闘を制したのは新チャンピオン、マシロ選手!!2対1をもものともせず、前期優勝者と準優勝者を跳ね除けました!!』

ふう……。とりあえず終わりかな？

「流石、新チャンピオンだな。強かったぜ！」

「ありがと。ま、飾りのチャンピオンだけどね。」

「くれると言うなら、受け取っておけばいい。マシロにはそれだけの實力がある。」

「いや、本音としてはいららないんだけど……。グリーン、いる？」

「受け取れないし、そもそもいらん。」

「ブーメランって言葉、知ってる？」

「知らん。」

「それじゃ、次も頑張れよ！」

レッドは応援の言葉を、グリーンは言いたいことだけ言って舞台から降りていく。

……ん？次？いま次って言った？

『では、次の試合にいきましょう!! 次の組み合わせは、ジヨウト地方の凶鑑所有者、ゴールド選手とシルバー選手!! 先日の事件の首謀者、仮面の男を止めるために尽力した実力者でもあります。さあ、この2人に対してチャンピオンはどう出るのか!! 2回戦、マシロチャンピオンVSゴールド、シルバー選手です!!』

……新チャンピオンのエキシビジョンマッチって、私  
が他のトレーナーと戦い続けるってこと??

## 72話

「さあ、行こうぜ！シルバー。」

「足を引っ張るなよ。」

「てめえこそな！」

ゴールドとシルバーが話しながら舞台上上がる。

『2人とも、意気揚々と舞台上上がってきました。チャンピオン側は、1戦毎にポケモンを入れ替えることが出来ますが、どう出るのでしょうか!？』

ここまで言うと、クルミは一旦マイクのスイッチを切る。

「今更ですが、こんな無茶なルールでホントに大丈夫なんですか？オーキド博士は大丈夫って言ってましたけど……。」

「大丈夫よ。さつきもちゃんと勝ったでしょ？」

「そうですけど……。それでも、普通のトレーナーじゃ連戦は厳しいんじゃない。」

「マシロは普通のトレーナーじゃないわよ。」

「第10回ポケモンリーグ。チャンピオンよ。」

—————

ふむふむ、チャンピオン側はこのタイミングで入れ替えが出来る。1人つてことに対する救済措置ってところかな？

それにしても、全部初耳なんだけど……。ちゃんと説明してこないかなあ……。まあ、説明を聞いてたら逃げたけどさ。信用されてない……。いや、むしろ信用されてるのか……？

「入れ替えられるって言っても、実質3体しかいないから、グロウとミスタどっちを引っ込めるか、なんだけど。」

「相手がゴールドとシルバーなら多分……、あの時の2体で来るかな？それなら……。」

「それじゃ、ミスタ下がって。」

そう言うと、ミスタはバツとこちらを振り向く。

え、なんで!? みたいになり返らないでよ。2回戦って言ってたぐら  
いだし、ミスタの出番はまだあると思うから、今は大人しく休んでて  
よ。

「それじゃ、かぶちー。お願い。」

袖から出したボールを投げ、かぶちーがグロウの隣に並ぶ。

「へっ、分かってんじゃないやねえか。そんなじゃシルバー。あの時のリベン  
ジというぜー!」

「ふっ。背中には任せたぞ。」

「バクたろうー!」 「オーダイル!」

出てきたのは予想通り、あの時の2体。性格的にそう来ると思った  
よ。だからあの時と同じ、グロウとかぶちーを出したんだけど・・・。  
「ミスタ、そんなに拗ねないですよ。」

私の隣まで引っ込んだミスタは、ツーンって感じでそっぽを向いて  
る。まあ、次出せば機嫌が治ると思うけど。

「相手は両方はがねタイプだ。分かってるな?」

「へっ。両方焼き尽くせばいいってことだろ? 任せろ!」

「ふっ・・・。相変わらず、頭の悪い回答だが、今回に限れば満点だ!  
いくぞー!」

『駆け出したのはオーダイル。その後ろをバクフーンがついて行きま  
す!』

「かぶちー! 迎え撃つよ!」

『それに対してチャンピオンはクチートを前に出し、後ろにメタグロ  
スといった並び!』

「オーダイル、きりさく!」

かぶちーとオーダイルが互いの間合いに入った瞬間、オーダイルが  
その手の爪を振る。

「かぶちー、つるぎのまいー!」

かぶちーはそれを、舞うように大顎でいなし、火花を散らす。

『これは・・・!! オーダイルが繰り出す左右からのきりさく攻撃を、ク



チートが大顎を使って逸らしています！まるで踊っているかのようです！」

「だったら、躲せないぐらいの大技を食らわせてやるぜ！シルバー、下がれ！バクたろう、かえんほうしゃ！」

ゴルドの言葉を聞いてオーダイルが飛び退くと、すかさず、かえんほうしゃを放つ。

「グロウ、ひかりのかべ！」

『オーダイルと入れ替わるようにして前に出たバクフーンのかえんほうしゃを、メタグロスのひかりのかべが受け止めました！ですがはがねタイプにほのおタイプの攻撃はダメージが大きいのか、メタグロスは苦しそうです！』

かぷちーを庇うようにかえんほうしゃを受け止めるグロウ。でも、解説の人が言うように苦しそうな表情を浮かべている。

「シルバー、今だ！」

「任せろ！オーダイル、おんがえし！」

バクたろうを飛び越え、腕を振り上げたオーダイルが飛び込んでくる。

そして、その腕を振り下ろそうとした瞬間。

「ふいうち！」

グロウの背中を蹴り、飛び上がったかぷちーがオーダイルを吹っ飛ばす。

「そのまま、はたきおとす！」

そして、勢いを殺さずに空中で回転し、かえんほうしゃを放ち続けるバクたろうに大顎を叩きつける。

『チャンピオンのクチートが、オーダイルの攻撃を出す瞬間を狙って吹っ飛ばしたかと思えば、そのままの勢いでバクフーンに大顎を叩きつける！これは、2体とも起き上がれなさそうです!!』

お、うまいこと決めてくれたね。さすがかぷちー。

「2人とも、うずまき島にいた時より強くなってるね。えらい、えらい！」

「一撃で吹っ飛ばしておいて、よく言う。」

「全くだぜ。と言うか、なんでオレ達が先輩達より後なんだよ。先輩達より後なんてプレッシャーでしかないっての。」

「それは私に言われても分からないんだよねえ……。そもそも私がチャンピオンとかさつき初めて聞いたし。」

「……。そういや、内緒って言ってたな。」

「……。やっぱり内緒だったんだ。」

「……。聞かなかったことにしてくれ。」

そう言うと、舞台の隅に引っ込んでいく2人。

……って事は、他のメンバーも知ってそうだね。蚊帳の外なのは私だけだったかあ……。レッドとかはオレが1番最初！とか言ってる。

『次の試合は、四天王事件を解決に導いた立役者、イエロー選手！オーキド博士から凶鑑のデータ集めを任せれたクリス選手です！……。あれ？』

早くも次の試合のアナウンスが響くなか、舞台の隅っこにいるイエローとクリスは、舞台上がらずに2人揃って首を横に振っていた。「何やってんだよ？次はお前らの番だろ？」

「ムリムリムリ。」

「せつかくなんだ。思いつきりぶつかって来い！」

「ムリですムリですムリですムリです！」

ゴールドがクリスを、レッドがイエローを諷めてるけど完全に萎縮しちゃってるね。

「そもそもわたし、捕獲の専門家だし……。」

「ボクなんて、四天王の時は無我夢中で……。」

「だぁー！煮えきらねえな！」

ゴールドが頭を掻きむしりながら叫んでるけど、対戦回数が減るならこちらとしてはありがたいんだけどなあ。

『なにかトラブルでしょうか……？』

アナウンスの声も戸惑っているよ。どうするんだろう？

「だったらその対戦カード、私達に譲ってくださいるかしら？」

そう思っていると、聞きなれた声とともにレポートで舞台に現れ

たのは複数のジムリーダー。

「エリカ!?それに、ミカンも。・・・後、なんでナツメまでいるの?」「マシロに縁のあるジムリーダーに声をかけた結果、わたしとエリカさんとナツメさんになったそうです。」

「あー、そうなんだ。」

「私はマシロを合法的に叩きのめせると聞いてきたんだが?」

なんか物騒なの混ざってるけど、人選間違ってるない?

『おおっとお!飛び入りでやってきたのは3人のジムリーダー!1人目はエスパタイプの手、自分で超能力も使えるナツメさん!2人目は、先日のエキシビジョンマッチでカントー側の主将を務めたエリカさん!3人目は、はがねタイプの使い手、鉄壁ガードの女の子!ミカンさん!あの一、わたしもこの3人が来るの聞いてないんですが・・・。』

『ごめんなさいね。サプライズのもりだったから黙ってたのよ!』  
スピーカーからオホホホと、ブルーの笑い声が聞こえてくる。声を小さくしても聞こえてるよ、ブルー・・・。

「そういう訳だ。」

「あまり嬉しくないサプライズだねえ・・・。」

「そう言わないで。わたし、進化したグロウと戦ってみたかったの。それに・・・。」

「ポケモンバトルの師匠として立ち塞がるなら、これ程の舞台はないと思いますか?」

「師匠か・・・。うん、そうだね。」

初めてバトルに負けた私に戦い方を教えてくれたのはミカンだし、かぶちーにつるぎのまいを教えてくれたのはエリカ。

確かに、私達にとつての師匠といえばこの2人だね。

それに比べてナツメは・・・、特に何も無い。

・・・やっぱり人選間違ってるない?

「おい、何か失礼なことを考えてないか?」

「気の所為でしょ。」

失礼なことじゃなくて真つ当な疑問だし。

「誰か知らねえが、こいつらはビビっちゃまってるしよ。あんたら、代わりにマシロをぶちのめしてやってくれ！」

「引き受けよう。」

ゴールドは焚きつけるし、ナツメは軽く引き受けちゃうし……。

と言うか、ゴールドは3日前にジムリーダーの顔と名前は見たでしよ。忘れるの早過ぎない？

## 73話

『えー……。予定とは違いますが、3回戦はジムリーダー連合VSマシロチャンピオン!3対3で行います!』

「3対3かぁ……。」

そう呟いても、私の取れる選択肢は1つしかない訳で。

「ミスタ、出番だよ。」

そう声をかけると、嬉しそうに飛び上がり私の前に飛んてくる。

ホント、バトルになるとウツキウキだね。まあ、へそを曲げられたままよりかは全然良いんだけど。

「あとは、グロウとかぶちーだけど……。」

かぶちーは全然余裕そうなんだけど、問題はグロウ。ソーラービームの中を突っ込んでもらったし、かえんほうしゃも受け止めた。疲れた表情から、多分やけどもしてるっぽい。

「確認なんだけど、このインターバルで回復しちやダメなの?」

『そうです。チャンピオンがどれだけ勝ち進めるか、という趣旨なので。回復は禁止です。』

入れ替えはオーケーって言い方から予想してたけど、やっぱりダメか。過酷なルールだねえ……。というか、きららを想定したルールっぽい。

「おっけー、分かった。……グロウ、まだいける?」  
「グオー!」

私の間に小さく頷くグロウ。まあ、なんやかんやグロウも負けず嫌いだよねえ。

『ホントのホントに回復禁止とか大丈夫なんですか!?』

『むしろ、禁止にしとかなないとマシロに勝てるわけないでしょ!!もう4人も負けてるんだから!!』

『そうですけど……。』

いや、だからマイク拾ってるってば。

・・・けど、流石に過大評価すぎる。こっちはもういっぱいだよ・・・。

「準備はよさそうね。ハガネちゃん、お願い！」

「いくぞ、フリーデイン！」

「では、モンジャラ。いきますよ！」

ミカンはハガネちゃん。

ナツメはフリーデイン。

エリカが・・・、モンジャラ？ラフレッシュアじゃないの？

「エリカはモンジャラ？」

「ええ。モンジャラでないと、勝てませんから。」

そう言ってニコツと笑うエリカに、少し背筋が寒くなる。

エリカが笑ってるって事は、絶対何かあるよね。ジムリーダー対抗戦でヤナギに負けたと言ってもカントーの主将。油断は出来ないかな。

『ミカンさんは、ハガネール。ナツメさんはフリーデイン。エリカさんはモンジャラを繰り出しました！』

「グロウ、かぷちー、ミスタ。3対3は初めてだけど、お願いね！」

「グオウ！」

「チー！」

「ー！」

『対してマシロチャンピオン。メタグロス、クチート、スターミーの3体・・・と言うか、顔ぶれはほぼ変わりません！』

そりゃ、3体しか戦えるポケモンがないもん。しょうがないじゃん!!

「いきます！ハガネちゃん、アイアンテール！」

「グロウ、コメットパンチ！」

『ハガネールの鋼の尻尾に、メタグロスが鋼の拳を打ち付ける！』

打ち合う度に火花を散らし、2度3度とぶつけ合う。

「フリーデイン、サイケこうせん！」

「ミスタ、ハイドロポンプ！」

ハガネちゃんとグロウが打ち合うと、ナツメのフリーデインが動き出

し、それをミスタのハイドロポンプで受け止める。

『フーデインのサイケこうせんと、スターミーのハイドロポンプがぶつかり合う！これは……！完全に互角！互いに1歩も譲りません！』

「おお……、流石ジムリーダー。」

「フツ。褒めている暇があるのか？」

「モンジャラ、つるのムチ！」

「ツツ！かぶちー、つるぎのまい！」

他に気を取られている間に、近づいていたモンジャラがかぶちーに  
つるを伸ばしてくるか、それをステップを刻んで躲していく。

「そうくると思ってましたわ！モンジャラ、手を緩めないで！」

『これはすごい！つるのムチを躲したクチートに向かって、更に1本、  
2本と、どんどんつるを増やしていきます！そして、クチートはそれ  
を踊るようにして躲す！躲し続けます！』

かぶちーが躲す度に、かぶちーの横をモンジャラのつるが通り過  
ぎ、いつの間にか、かぶちーの周りは躲したつるに囲まれていた。

「さあ、モンジャラ！からみつきなさい！」

そして、かぶちーの周りのつるが、一斉にかぶちーに絡みついた。

「かぶちー!?!」

『これは……！躲したと思っていたつるが、一斉にクチートに絡みつ  
き、その動きを封じています！これでは、さつきまでの踊っているか  
の様な動きは出来ません！』

モンジャラのつるは、かぶちーの動きだけじゃなくて、大顎も開け  
ないように上から巻き付き、開閉をも封じている。

「やられた……。だからモンジャラを選出したんだね。」

「言っただでしょう？モンジャラでないと、勝てない、と。そのまましめ  
つけるー！」

身動きが取れないかぶちーを、モンジャラがしめつけていく。

このままじゃ、まずい！

そう思った時。

「フーデイン、かなしばりだ！」

「ミスタ!?!」

ミスタに助けてもらおうと思ったが、先に動けないようになさしぱりをかけられる。

「それなら・・・グロウ！」

「行かせません！すなじごく！」

今度はグロウの周りをすなじごくで取り囲み、グロウの動きを封じる。

『すごい連携です！クチートの動きを封じたのと同時に、他のポケモンの動きを封じ、助けることが出来ないようにしています！こうなると、自力で脱出するしかないと思われませんが！』

「・・・この連携、最初から狙ってたの？」

「そうです。マシロに勝つなら、最初に狙うべきなのはどのポケモンか・・・。そう考えた時、あなたが私を頼ってくれた時の言葉を思い出しました。」

—————

「かぶちー、元々体が弱いから技の打ち合いになると不利なんだよね・・・。何かいい戦い方ないかな？」

—————

私が初めて負けた戦いの後、ミカンにポケモンバトルを教わってた時に分かった事。

グロウは技と技のぶつかり合いになっても押し負ける事は少なかった。けど、かぶちーは技の押し合いになると必ず負ける。

「だから、相手の攻撃を全部躲す。技が出る前に潰す。一撃で終わらせる。その戦い方が出来るように、つるぎのまいを教えてくださいなだったよね。」

「そうです。だから、1番打たれ弱いかぶちーを最初に倒す事を考えました。」

「だからモンジャラ、ね。」

なるほど。動きを封じて、大顎も使えなくする。完全にしてやられた形だね。

こうなると、一か八か。賭けるしかないか。

「確かに、ここまでは完全にしてやられたね。でもね・・・」



初めて負けた時から、ミカンとエリカに戦い方を教えてもらった。それから、四天王と戦って、シロガネ山でも戦って、ジヨウトのジムリーダーや仮面の男。色んな相手と戦ってきたんだ！

「かぶちーも強くなったんだよー！」

そう叫んだ瞬間、かぶちーの大顎が炎を纏う。

「かぶちー、全力でほのおのキバ！その場に叩きつけて！」

かぶちーが力を振り絞って、全身を回転させながら炎を纏った大顎を地面に叩きつけると、かぶちー自身ごと周囲のつるを焼き払う。

ただでさえ、ほのお、かみなり、こおりのキバは体の弱いかぶちーに負担が大きいから、あんまり使ってこなかったのに……。更に無茶な使い方させちゃったなあ……。

『ここでクチートが炎を纏い、無理矢理モンジャラのつるを焼き切ったあ!!』

「でも、これで抜け出せた！」

ここから、反撃開始だよ！

そう思った瞬間。かぶちーの後ろにフリーデインの姿が現れる。

「いや、想定通りだ。」

「嘘でしょ!!ここまで予想してたの!？」

「これで1抜けだ。サイコキネシス！」

「ツツ！ふいうちー！」

フリーデインの放ったサイコキネシスと、咄嗟に放ったふいうちは、かぶちーとフリーデインを互いに吹き飛ばす事になった。

「かぶちー!？」

「フリーデイン!!」

『フリーデインのサイコキネシスが決まると思われましたが、クチートも最後の意地を見せたのか!？互いに吹き飛ばされましたが、その後どちらとも動きません!!これは、両者戦闘不能のようです!』

2体が埋もれた場所の砂埃が晴れていくと、そのまま動かないかぶちーとフリーデイン。

「こっちはまだ終わってませんよ！ハガネちゃん、アイアンテール！」  
「ツ！グロウ、てっぺき！」

すなじごくに閉じ込められているグロウは、外からの攻撃を受け止めぬ。

「そこです！かみくだく！」

そして、受け止めたまま動けないグロウをそのままハガネちゃんの顎が挟み込み、地面に叩きつけた。

「グロウ!?!」

『今度はハガネールの顎が、メタグロスを捉えました！そして、こちらもこれで戦闘不能のようです！』

ハガネちゃんがグロウの上から退くと、そこには戦闘不能になったグロウの姿。

『流石のグロウも、連戦の後だと耐えられなかったようね。』

『そうみたいだね。やっぱりジムリーダーは強いなあ……。でも、これで1対1かな？』

つるが焼き切られたモンジャラを横目にミカンにそう言うと、エリカはフツと笑う。

「まだですわよ。モンジャラ、せいちよう！」

『エリカ選手のモンジャラ！つるが焼き切られて戦闘不能かと思われましたが、割れた天井から差し込む日差しを受けてみるみる成長し、あつという間に先程までと変わらない姿に!!』

「さあ、これで2対1ですわよ！」

『エリカの想定では3対1だったんだがな。』

「まあまあ、それだけマシロが強いつてことですよ。」

『かぶちーの真後ろにテレポートするからだよ。』

『離れた位置からだ、躲されるだろ。』

フリーデインがやられて悔しかったのか、悪態をつくナツメをミカンがなだめる。

あそこでフリーデインがやられるのは想定外だったみたい。

「まあ、想定外なのはそれだけじゃないみたいだよ？」

「え？」

エリカが聞き返した瞬間、キーンと何かが凍りつく音が聞こえた。

『これは!?!元気になったと思われたモンジャラが、一瞬で凍りつきま

した!!』

「あら、いつの間に……。いえ、フリーデインが倒されたんですもの、当然ですわね。ミスタ、お見事です。」

『いつの間にか自由になっていたスターミーが、モンジャラを一瞬で凍らせたようです!この冷気、まるでヤナギさんとのエキシビジョンマッチを思い起こします!』

「これで、1対1だね。」

「そうみたいね。でも……。ここまで、ですかね。」

「え?」

「降参です。」

そう言うと、ミカンはハガネちゃんをボールに戻す。

『ここでジムリーダー側、降参です!相性を考えた結果でしょうか?』

「こっちは3人。そのうえ、対策までしたのに1対1に持ち込まれたのよ?ここまでやられちゃ、わたし達の負けですよ。それでいいですよね?」

「そうですね。」

「残った1人がそう言うなら仕方あるまい。」

「それに……。ハガネちゃん、ミスタに勝ったことないのよ。」

振り返りながら問いかけると、エリカは笑いながら。ナツメは腕を組んで頷く。……ナツメは若干不服そうだけど。

そんな様子で3人は舞台をおりていく。

『決まりました!チャンピオンVSジムリーダー連合は、2体のポケモンが戦闘不能になりながらも、チャンピオンの勝利です!ジムリーダー連合も、ジムリーダーとしての意地を見せて、2組のトレーナーが倒すことすら出来なかった3体のうち、2体を戦闘不能にしました!!』

「……。こう言われると、オレ達が弱いみたいじゃねーか。」

「……。事実だ。」

「そうなんだけだよ!……。釈然としねえ。」

「オレもまた鍛え直さないと……。またシロガネ山にでも行ってみ

るか。グリーンも行かないか?」

「オレはジムリーダーとしての仕事がある。」

「あ、そうか。」

「だったら、オレもついて行っていいっすか、レッド先輩?」

「いやいや、急に何言ってるのよゴールド。すいません、この人空気読めなくて。」

「んだとお?」

「いや。全然いいよ。それじゃ、一緒に行くか。」

「さつすが先輩、話がわかる! ほら見るクリス、大丈夫だっただろ?」

「それは、たまたまでしょ。あなたはいつもそうなんだから……。」

「アハハハ……。」

なんだか、凶鑑所有者組が賑やかだなあ……。イエローが置いていかれてる気がするけど。

「それじゃ、あたしで最後かしら?」

そう言ったのは、いつの間にか降りて来ていたブルー。

「時間的には、少し余裕がある。って事は、それだけ、予定よりも早く終わった……。やっぱりマシロは強いわね。」

「まだあるの? こっちは満身創痍んだけど……。」

「え? まだきらがいるじゃない。」

「いや、きららはエネルギーを使い果てして寝ちゃってるよ?」

「嘘!? それじゃ、3体だけでエキシビジョンマッチを!? あー、もう……。そういう事は先に言いなさいよ……。」

「先に言わなかったのはブルーでしょ……。」

そういう事なら、こんな急に生放送なんてやらなかったのに……。と、なにやらブツブツと呟き出す。そして、顔を上げたブルーは最初に謝ってきた。

「ごめんなさい。そんな事ならもつと猶予を取れば良かったわね。」

「まあ、次で最後でしょ? ミスタなら頑張ってくれるよ。そうだよね?」

そう言うと、嬉しそうに飛び跳ねるミスタ。

少し前までそっぽ向いてたのはなんだったのやら。

「こんな感じだから、あまり気にしなくていいよ。……流石にまた同じことはやりたくないけど。」

「あなたがチャンピオンになったのと同じ様な偉業があれば、あふかもね。フフツ。」

笑われてるんだけど、もしかしてまだ何かあるの？ないよね？

『さあ、こちらで用意されたトレーナーは次で最後！カントー図鑑所有者、ブルー選手VSマシロチャンピオン。泣いても笑っても、これが最後の戦いです。』

大丈夫、解説の人も最後って言うてる。いや、最後じゃなくても、ミスタしか戦えるポケモンがないんだけどね。

## 74話

『えー、ここで少しお便りを読んで行きましょうか。』

「チャンピオン側、すぐ負けると思ってたけど勝ち残ってたスゴイ。」  
「チャンピオン強い。」

「繰り上げチャンピオンって思いながら見てたら、納得の強さ。」

私もそう思います。結構、というかかなりチャンピオン側が不利なルールのはずなんですけど、勝ってるんですよ……。ここまて来たら、最後まで勝ち進んでほしくなっちゃいます!!

「凶鑑所有者側、有利なんだからもつと頑張れよ!」

「前期チャンピオンVS新チャンピオンで終わると思ってた。」

「数的有利を活かすんだ!」

凶鑑所有者側、言うなれば、挑戦者側を応援する声も沢山ありますね。この放送もたくさんの人に楽しんでいただけているようで、私も嬉しいです。

「ちよいまちーうち呼ばれてへんけど!? スグに行くから待ときいや!!」

これは、アカネちゃん……ですね。わたしに言われても知らなかったからしょうがないでしょ……。え、ホントに来るの……?』

—————

「え、まだ増えるの?」

「もう増えないから安心しなさい。」

最後の不穏な呟きに思わず口に出た疑問にブルーは答えてくれる。良かった、もうお腹いっぱいだよ。

「本当は、きらららが出てきても勝てるように考えたルールんだけど、そもそもきらららが出てこないっていうね……。それでも勝ち残ってきた辺り、流石としか言えないわ。」

「みんなが頑張ってくれたからね。」

連戦っていう条件の中、戦ってくれた皆に感謝しないと。お便りを読み上げる間にかぷちーとグロウを戻したボールをそつと撫でながらいつもの袖口にしまう。

「お疲れ様。やっぱりレッド達とジムリーダーの連戦はキツイね。」

「それも、あたしで最後。ミスタ、負けても恨まないでね！いくわよ、カメちゃん！」

「恨まないけど、ミスタは執念深いから気をつけてね！」

むしろ、負けてきさらへの執着が他に向いてくれたら、それはそれでいいことだし。ミスタより強い相手がきさら以外にも増えてくれるといいな。

『それでは、試合開始です！』

「ミスタ！」

「カメちゃん！」

「ハイドロポンプ!!」

『互いのハイドロポンプがぶつかり合う！みずタイプ同士、意地と意地のぶつかり合いです！』

「ミスタの性格的に、そう来ると思ってたわ。」

「分かりやすいもんね。それに、ちよつと前に同じみずタイプに負けだから、きつと意固地になってるよっ！」

「あらそうなの？ま、それでも……。連戦で疲れてるミスタには負けてられないわよね！」

ブルーが叫んだ瞬間、ミスタのハイドロポンプが押し返されミスタがふつ飛ばされる。

「まだまだいくわよ、カメちゃん！ロケットずつき！」

手足を引つ込め、一直線にバランスを崩したミスタに突っ込んでくる。

「ミスタ、まだいけるよね？」

そう問いかけると、それに答えるようにミスタは空中で体制を立て直す。

「こつちも突っ込め！こうそくスピーン！」

そのまま互いに空中でぶつかる、高速で回転するミスタの体が力

メちゃんの甲羅にぶつかる。

『みずタイプ同士の対決！互いに一步も譲らない正面衝突！ハイドロポンプの対決はカメックスに軍配が上がりましたが、体と体のぶつかり合いではどちらに軍配があがるのでしょうか!？』

解説はあたかも互角みたいに言うけど、押されてるのはミスタなんだよね……。いや、スイクンに負けてから練習しだしたこうそくスピンだから、練度は低いけども……。それを考えてもあの甲羅が硬い。

「このままだと押し切られるか……。ミスタ、10まんボルト！」

ぶつかり合う中、ゼロ距離から10まんボルトを浴びたカメちゃんはそのまま舞台に落下する。が、すぐに立ち上がったカメちゃんの姿には、思ってたほどのダメージはない。

「あら？今度は接近戦かと思っただけど、違ったのかしら？」

「そのつもりだったんだけどね。流石に分が悪かったよ。」

多分、練度の高さなんて問題じゃない。そもそも、カメちゃん相手に接近戦は無理だと思う。硬すぎる。

「途中で逃げるなんて、ミスタらしくないんじゃない？」

「こっちは連戦なんだから大目に見てくれないかな？」

ほら、逃げたって言われたからミスタが少しムツとしてるじゃん。……はたから見たら分からないかもしれないけど。

「なら、また遠距離戦かしら？」

「そうだね。そっちの方が勝ち目がありそう。ミスタ、メテオビーム！」

「カメちゃん、ハイドロポンプ！」

『先程どのようにメテオビームとハイドロポンプがぶつかり合ういまずが、今度はメテオビームがハイドロポンプを撃ち抜きカメックスを直撃しました!……が、カメックス！手足を引っ込めてメテオビームを受けきっています!』

攻撃が止むと、そこにはからにこもったカメちゃんの姿。あの甲羅を砕くには、もっと溜めないと駄目みたいだね。……まあ、ブルー相手にそんな余裕はないんだけど。それに、なんだかんだミスタも連



戦で疲れてるから余計に溜め時間が必要だし。

「聞いてた通りの威力ね。あんなの普通に受けたら一発で戦闘不能だわ。」

「防いでおいて、よく言うよ。」

「それだけじゃないわよ！カメちゃん、もう一回ロケットずつき！」

「ミスタ、10まん……って、ミスタ!？」

さつきと同じように、体と体のぶつかり合いだと勝ち目がない。そう思ったら、ミスタは一目散にロケットずつきにこうそくスピんで突っ込んでいく。

「ああ言えば、きつと正面から来ると思ってたわ！」

「もしかして、さつき煽ったのって……。」

それじゃ、さつきの煽りは私じゃなくてミスタに向けたものだったのね……。しれつと盤外戦術をやってくるじゃん。

と、今更気づいても手遅れだった。

今度はミスタとカメちゃんがぶつかり合った瞬間、ミスタがふつとばされて観客席に突き刺さった。しばらく待っても起きてこないってことは、ここまでかな。

『スターミーは起き上がれないようです！最終戦は、ブルーさんとカメックスの勝利!』

「あーあ……。ミスタ、まんまと誘われちゃってえ。」

「ホント、ミスタが負けず嫌いで助かったわ。」

カメちゃんをボールに戻しながら歩いてくる。

「それでも、マシロが連戦じゃないとここまで予定通りにはいかなかったでしょうね。」

「いや、ミスタは連戦じゃなくても誘いに乗ってたと思うよ?」

「何言ってるのよ。連戦じゃなかったらまだ起き上がってきてるでしょ?それに、他の技の威力もさつきよりも高くなってるだろうしね。」

確かに。万全のミスタなら観客席に突き刺さってもすぐに起き上がってきてるか……。

「はあ。エリカといい、ブルーといい、すごい対策してくるじゃん。」

負けず嫌いって人の事言えないでしょ。」

「他が考えなしなだけよ。」

「おおう、バツサリ言い切ったね。グリーンが聞いたら喧嘩になりそう。う。」

「・・・ゴールドが聞いても喧嘩になりそうだね、凶星って意味で。」

「そんな時、会場の入口に現れた人影。」

「よっしゃ、ついたで！」

『え?・・・アカネちゃん、ホントに来たの!?!』

「当たり前や!それに、うちだけじゃないでえ?」

会場の入口で、声高らかに言うアカネ。そして、その後ろからぞろぞろと見覚えのある顔ぶれが現れる。

「トレーニングの最中、ラジオからゴールドくんの声が聞こえてね。」

「遺跡の調査を抜けてきたよ。」

「ふん。ここまで来るのは良いトレーニングになったわい。」

「リベンジさせてもらおうかと思ったが、先を越されたな。」

「前に会ったあの時は手合わせしなかったからな。と、そう思って来てはみたが終わってしまったか。」

『現れたのは、アカネちゃんを筆頭に、ハヤトさん、ツクシさん、シジマさん、イブキさん、マツバさんです!!・・・あのー、わたし何も聞いてないんですが、こういう場合はどうすればいいんでしょうか?・・・?』

「示し合わせたようにジョウトのジムリーダーが集結しちゃったよ。」

「というか、みんなラジオか生放送を見て来たの?」

「あら、人気者じゃないの。」

「なんでだろうねえ・・・?」

「そんなにヘイトを買うようなことは・・・してたわ。ジムをハシゴしてバツジ集めたし、イブキに至っては煽った記憶すらある。仕方ないとはいえ、自分で蒔いた種じゃん。」

「あーあ、出遅れたわ。」

「そう思っていたら、今度はアカネが出てきた側とは逆の入り口から声が上がると。そして、やはりというか後ろからぞろぞろとまたも見

知った顔。

「お嬢、抜け駆けですか？」

「うむ。どうせなら声を掛けてくれたら良かったものを。」

「SHIT!! ナツメ！マシロとやるなら、オレも呼べよ！」

「……………」

『反対側の入口からは、カスミさん、タケシさん、カツラさん、マチスさん、アンズさんです!! ……段々と収集がつかなくなってきたんですが!』

「あらあら。マシロ、大人気ね？」

「なんで…………？」

反対からはカントーのジムリーダー達。こつちに関しては本当に心当たりがないんだけど、変なところで恨みを買った覚えはないんだよなあ…………。

あ、元ロケット団幹部は別ね。

『あ、電話ですね。…………え、ラジオは延長？生放送は？あ、そつちも延長ですか…………。え？企画は任せた!?確かにジムリーダーが揃ってるのは絵になりますが…………。あ、ちよつとお!』

「…………なんだか、無茶振りされてるみたいだね。これ、どこまで予想してたの？」

「…………あたしもジムリーダーが揃うなんて思ってなかったわよ。ただ、最後はきららが全部倒すとは思ってたけどね。」

そういや、きららがいる前提のルールって言ってたっけ。まあ、万全のきららがいたら8人ぐらいなら勝ち抜けるとは思うけど。

『話は聞かせてもらったぜえ!!』

『ゴールドくん!?ここ、解説席なんだけど!!』

『ジムリーダーが揃ってるんだ、やることなんてバトルに決まってるだろ?』

『いや、あの…………。はい。そうですね。言うなればスペシャリストが揃ってるんだから、見る側もそれを一番望んでますよね。でも、ただ順番にやるのも前回のエキシビジョンマッチの二番煎じになるんじゃないですか?』

あ、文句を言うのを諦めた。

『おう。だからよ、さつきまでみたいにチーム戦にしようぜ?』

『2対2ですか?それなら、エキシビジョンマッチとは違う、見ごたえのある戦いになりそうですね。組み合わせはどうしましょう?』

『決まってるんだろ。エキシビジョンマッチで戦った者同士でチームだ。1度戦ったんだ、適当に決めるよりそっちのほうが息も合わせやすいだろう?』

『なるほど。ありですね。では、ヤナギさんは行方不明なので、7チームは確定ですね。どうせなら偶数にしたいところですが……。』

『それなら、凶鑑組で3チームつくるか。凶鑑所有者とジムリーダーの10チームでトーナメント。こりゃ視聴率爆上がりだぜ!』

『悪くないな。』

『ということは、次は敵同士ですね。』

『私はどうしましょうか……。?』

さつきチームだった3人が顔を見合わせる。

ああ、ヤナギは行方不明だからナチュラルにエリカが外される流れに……。

『グリーンは、ジムリーダー側か……。なら、イエロー。オレと組もうぜ?』

『え!?あの、はい……。頑張ります。』

イエローは顔を赤くしながら頷いている。なんか、青春してるねえ。

『ねえさん、よかつたらオレと組まないか?』

『あら、あたし?…。そうね、マシロはもう出れないし、いいわよ。』

こっちは姉弟でチームを組んでる。となると、余ってるのは……。

『なら、クリス!余り物のオレたちで出るぞ!』

『誰が余り物よ!?!』

クリスが解説席に怒鳴り返す。まあ、そうなるよね。グリーンがジムリーダーだから、凶鑑所有者側も、いい感じにチームが組み上がっていく。

『では、チームが出来上がったので組み合わせを決めていきますね。』

少々お待ちください。……ゴールドくんは、出場するんだから見ちゃだめよ。ほら、早く出て行つて。』

『おうー!』

「自然と省かれてしまいました。」

各々がチームを組むことになった相手と合流していく中、ナチュラルに省かれたエリカが歩いてきた。

「あはは。まあ、カントー側のリーダーが混ざるとバランスが悪くなるってことで。」

「フフツ、そう思うことにしますね。それに、今日はマシロに一矢報いたので満足です。」

「え? 実は私、嫌われてたりする?」

まさかそんなふうに言われるとは思ってなかったから、少し驚いた。

「そんなことはありませんよ。ただ、ジムに遊びに来るたびミスタが放流されるので、色々大変でした。」

「ごめんなさい。」

静かな圧力に屈する私。

エリカの所には強いポケモンがたくさんいるから、ミスタが意気揚々と乗り込んでいつちやうんだよね。それでいつも甘えてたけど、ミスタが暴れまわるんだから、そりゃ後片付けとか大変だよね。反省。

「ところで、マシロはどのチームが勝つと思いますか?」

「そうだねえ……。なんだかんだ、元幹部のマチスとナツメは頭一つ抜けてそうだけど、組み合わせ次第じゃないかな?」

『そこで笑ってるマシロさんとエリカさん! どうせなら、解説席でお話してくださいよ! 1人でこの数の実況をやるのはしんどいんですよ!』

ひーん! という泣き言が聞こえそうな声にエリカと顔を見合わせると、同時にフフツと、笑う。

「行きましようか。あちらも、無茶ぶりで苦労されてそうなので。」  
「そうだね。」

余った私達は、解説席にむかつて歩いていった。

## 75話

あれから2年。

今はエリカのお屋敷に居候中。いつもの縁側でのんびりぐでぐすと伸びている。

というのも、あの生放送のお陰で私は有名人になってしまったようで、ブルーとあつちこつちに旅行に行っても「サインください!」「バトルしてください!」「一目惚れです!」なんて色んな人が群がってくるようになった。

お陰で旅行も楽しめないし、人混みが鬱陶しいし、ブルーにも迷惑がかかるからって、旅行はご破産になった。別れ際、「レッドが優勝したときでも、ここまでじゃなかったわよ……。なんか、ごめんなさいね。」って謝られたのはこつちも申し訳なかった。

「謝られるぐらいなら、あの時逃げたほうがよかつたなあ……。」

「ありあら、お疲れですね。」

「あ、エリカ。……どこに行ってもチャンピオン、チャンピオン。嫌になつちゃうね。」

「フフツ。それだけ人気つてことですよ。女性で身長が低くてもチャンピオンになつたんですもの、注目の的というやつですね。」

「やめてよ……。150は超えた、はず……。」

と、口では否定しても世間的にはどうやらマスコツト的にも見られているそうだ。

女性でもチャンピオンになれる、小さくてもチャンピオンになれるというものは、世間的にも大きな影響を与えたいらしい。

まあ、お陰で私の気が休まるときはほとんどなくなったんだけど。

エリカのお屋敷にいるのも、「エリカに勝てればチャンピオンとバトルできる。」といった条件を盾にのんびりするため。エリカに認められてバツジを手に入れるトレーナーはそれなりにいるようだけど、エリカを倒すチャレンジャーってのは今のところは現れていない。

いないんだけど、何事も例外はいるもので。

「それに、野生の前チャンピオンがやってくるんだよねえ、ツンツン頭の下っ端を引き連れて。」

「大人気ですね。お陰で今日もジムは大盛況ですよ。」

ポケモンリーグの予選免除という新しい制度も相まって、毎日のように人が押し寄せている。

「それにしても、あの生放送の影響がこんなにあるなんてねえ。」

「そうですね。あの事件で有耶無耶になったエキシビジョンマッチもを、改めて開催していただく形になりましたから。」

「でも、組み合わせがあんなに偏るとは思わなかったけどね。」

その後、トーナメントの組み合わせはくじ引きで決めた結果。

Aブロックが、ミカンチーム、ハヤトチーム、シジマチーム、マツバチーム、アカネチーム。

Bブロックが、ブルーチーム、イブキチーム、ゴールドチーム、レッドチーム、ナツメチーム。

何故か図鑑所有者がグリーン以外Bブロックに集まるというね……。どうせならジムリーダーと図鑑所有者どちらが強いか、つてな感じの方が盛り上がりそうなのに。誰のくじ運が悪かったんだろうか？

……。あれ、もしかして私？

なんやかんや、ロケット団に四天王、仮面の男と全部の事件に顔を出してるし。

……。いや、それを言ったらエリカもじゃん。と言うかトーナメント参加者、大体関係者だよ。そう考えたら、むしろ偏る方が自然なのかも。

「しかし決勝が、マサスのいるチームとナツメのいるチームになるとは思いませんでした。」

「そうかな？あの2人って他のジムリーダーより頭1つ抜けてると思うんだけど。」

「確かに、強さという点では他の方より優れている所はあります。ですが、チーム戦となれば純粋な強さだけでは勝てないものです。」



「あー。そう言われると、妙に息が合ってたね、特にマツバとマチス。」  
あの2人、私の知らないところで何かあったのかな？ なんと  
か、互いの事を分かりあったような動きだったし。

その結果、優勝はマツバとマチスの2人がもぎ取った。

「ま、あのメンバーの中で1番運が良かった、とも言えるかもしれないけどね。あの2人がミカンチームに当たったら絶対勝てなかっただろうし。」

「運も実力のうち、と言いますよ。」

「そうだねえ。」

それは身にしみてわかる。

私だっけきららに会わなかったら、未だに貧弱体質引きこもり生活だったかもしれないしね。そう思いながら、庭先でグロウの上で日向ぼっこをしているきららを眺める。

「ところで、今回はいつまで滞在する予定で？」

「特に決めてないかなー？ エリカのお屋敷は居心地がいいから。」

「他のジムはそうでもないのですか？」

「基本的にはジム、だからね。ここまでのんびり出来る屋敷なんてないし……。」

ブルーと別れてからも、どこにいても人が集まってくるものだから1箇所長期滞在が出来なくなった結果、今みたいに地方を回りながらジムにお世話になる形に落ち着いた。

なんだかんだで互いにメリツトがあるしね。ジムは人が集まる、私は楽ができる。

……まあ、ナツメには追い返されそうになったけど。

あれはいつだったっけなあ……。

—————

その日はリニアが開通したからって、意気揚々と乗り込んだ日のこと。

リニアが開通したからって乗るんじゃないかって……。

どんなものと乗ってみたものの、有名人になった私に気づいた乗

客達がドンドン集まってきてマトモに身動きすら取れなくなった。

出口のない所で群がられると逃げられもしないから、ヤマブキに付いた途端ナツメのいるジムに駆け込む羽目になったよ。ジムに入ったら、待ち構えていたようで、ナツメが苦虫を噛み潰したような顔で仁王立ちしていた。

「帰れ。」

「流石エスパー、来るのが分かってたんだ！ちよつと助けてよ！」

「知らん。」

冷たくあしらうナツメを無視して、後ろの人たちに声をかける。

「ナツメに勝てたら相手になってあげるから、頑張つてね！」

「あ、おい!!」

そう言つて勝手に事務の奥に駆け込む。

すれ違いざま、よろしく！つて肩を叩いておく。

ナツメには、その日のうちに追い出された。

—————

「ジムも色々あるよね、つて話。」

「そうですね・・・。」

うーん、と伸びをしながら話を終わらせる。

ここにいれば、居心地はいいんだけどエリカの負担も大きくなるから、ここに居続ける訳にはいかないよねえ。

庭先でのんびりしているグロウ達を眺めると、ふと、ハウエンで言われたことを思い出した。

『ダンバルがメタグロスに進化した時には、力を貸してもらえるかな？』

そういや、ダイゴさんが力を借りたいって言つてたっけ？

あれから大分経つてるけど、ダイゴさん覚えてるかな？

私は忘れてたけど。

「・・・決めた！明日出発するよ。」

「今度は随分と急ですね。」

「うん、約束があるのを思い出して。ハウエン地方に行こうと思う。」

「それはまた、遠い所の約束ですねえ。」

「そうそう。だから、善は急げってね！」

それに、遠くに行けばこの有名税からも開放されるかもしれないし。

「それなら、今日は豪華にしないといけませんね。」

「え、ホントに!?ありがと〜!!」

「ええ。」

その日の夕食は、とても豪華なものが並んだ。

そして、人目につかないように朝早くからひっそりとエリカの屋敷を抜け出すと朝一でハウエン行きの船に乗り込んだ。

—————

「船旅も久しぶりだね。きららはあんまり好きじゃないって言ってたけど。」

『ふね、おそ〜い。』

デッキの手すりにもたれながら、久しぶりの船旅を堪能する。幸い、船の上だと私に話しかけてくる人はいないみたいで、のんびりきららとお話ができる。

「そういえば、ハウオウと戦ったあと1週間ぐらい眠ってたよね？その、キラキラしたエネルギー・・・?ってやつ、そんなに消耗したの?」

『きらきらしたえねるぎーはたくさんあるから、ほとんどへってないよ?でも、ほしからもらったえねるぎーはすぐになくなるんだー。』  
「星から貰ったエネルギー・・・。ミスタがメテオビームを使うときに集めてるやつかな?・・・ん?それじゃ、キラキラしたエネルギーってのと、星から貰ったエネルギーの2種類あるの?」

『そうそうー！きらきらしてるエネルギーだけになると、なんかばーん！！ってのはじけそうだから、おきていられないの。』

ばーんってのはじけそうって、爆発でもするの？まあ、あの威力を考えたたらそれぐらいの危険性はあるか・・・。

キラキラしたエネルギーってのは、相当あぶないものだったらしいけど、普段は星のエネルギーでバランスを取ってるって感じなのかな？

それを、戦いで消耗するとバランスが崩れてやばくなると。どうしようもないときは眠ることでどうにかしてるってことかな？

「りゅうせいぐんを使うとすごく疲れるのは、そのバランスがかなり崩れるってこと？」

『そうかもー？りゅうせいぐんは、ほしのえねるぎーちよつとだけつかって、きらきらしたえねるぎーをたくさんつかうの。それで、きららしたえねるぎーをつかうのはすごくつかれるんだー。』

なるほど、りゅうせいぐんを使うとすごく疲れるのはその為か。

「それじゃ、他の技はキラキラエネルギーを使ってるの？」

『めておびーむは、いっぱいのほしのえねるぎーにきらきらしたのをすこしたすかんじ？。』

「ふむふむ、りゅうせいぐんとは逆って感じ？」

『そうそうー！』

なるほど、りゅうせいぐんはキラキラエネルギーを大目、星のエネルギーを少なめに使う。

メテオビームは、キラキラエネルギーが少なめ、星のエネルギーを大目に使う、と。

今まで、りゅうせいぐんはここぞのタイミングでしか使わなかったけど正解だったみたい。

「ってことは、はめつのねがいは？」

『きらきらしたえねるぎーをばーん！ってしてる！』

「おお、結構危ない技だったんだねえ・・・。」

と、そんな話をしていると見えてきたのはカイナシティ。そろそろ降りる用意をしないと。

きららのことが分かったような分からなかったような感じだけど、元々不思議なポケモンだったから今更だね。

「それじゃ、行こっか。きらら。」

『はーい！』

とりあえず、せつかくホウエンに来たんだからサファイアとオダマキ博士に挨拶してから、ダイゴさんを探そうかな。どこに居るか分からないけど、石の洞窟に行けば案外簡単に会えるかも。

それに、石の洞窟はかぶちーの里帰りにもなるしちようどいいや。

## 4章

### 76話

ホウエン地方に付いてそうそう、オダマキ博士の元を尋ねる。

・・・が。

「サファイアは、つい先日ジム制覇の旅に出発してしまっただよ。あ、チャンピオンおめでどう。サファイアも飛び跳ねてたよ。」

「あ、どうも・・・。」

おめでどうって言われるほど、チャンピオンなんて肩書はいいものではなかったよ。

むしろ叩き返せるなら利子つけて返す。

「長旅で疲れただろう？よかつたらお茶でも飲んでいくかい？」

「いえ、挨拶に寄っただけなので。」

「そうかい？でも、残念だな。サファイアがいればきつと喜んだらうに。」

あれから大分経ったのにオダマキ博士もサファイアも私のことを覚えていたみたいで、すこし嬉しいかったり。

赤の他人に群がられると、あんなにも嫌なのにね。

「なら、追いかけてみようかな。急ぎの用もないし、今から行けば追いつくかも。ここから、1番近いジムって何処ですか？」

「ここからなら、トウカになるかな？サファイアに会えたら、よろしく頼むよ。あの子もきつと喜ぶ。」

挨拶を手短に済ませると、ミスタに乗ってトウカの方角に進む。

久しぶりにオダマキ博士と話したからか、昔のことを思い出した。そういえば・・・。サファイアは元気らしいけどルビーはどうして

るだろう？

連絡先も知らないし、どこに住んでるかも知らないから、こっちらら会うことはできないんだけど・・・。

サファイアの事を聞くとどうしても思い出す。



「あー……。通りすがりに、いばるを受けた一般トレーナーです。」  
「そうか、それはすまないことをした。」

目の前の人は、私のことをちらつとだけ見るとすぐに興味がないうで視線をそらす。

この反応、私のことを知らないっぽいね。流石に2年も前に話題になった有名人は知らないよね。良かった良かった。

地元だと2年経ってもそれなりにワイワイ言われてたけども……。次からは、旅の途中でも気を抜かないことだ。いつ、野生のポケモンに襲われるか分からないからな。」

「大丈夫、大丈夫。ミスタ、頼りになるから。……ああ、もう落ち着いてよ。強そうな相手を見つけるとすぐこうなるんだから。」

いばるの影響が残っているのか、興奮しているミスタを宥めていると目の前の人は微妙に蔑んだ目で私を見る。

「自分の手持ちすらまともにコントロール出来ないとは……。トレーナーのレベルがしれるな。」

瞬間、その言葉に激高したミスタがケツキングに飛びかかった。  
「きあいパンチ。」

と思ったら殴り返されて、後ろの林に突っ込んでいった。上から下に行ったと思ったら、今度は右から左に行ったり来たり、忙しい……。じゃなくて！

「ミスタ、大丈夫!?!…。先に飛び出したのはこっちだけど、やりすぎじゃない?」

口も悪いし、なんとなくお近づきにはなりたくない人種かも。

「急いでるんだ。君に構っている時間は……。なにつ?!」

と喋っている途中で、ミスタが飛んで行った方から放たれた閃光がケツキングを飲み込む。

そして、閃光が収まると林の中から葉っぱを引っ付けながらも元気な姿を出すミスタとは対象的に、メテオビームを受けたケツキングは地面に倒れ伏す。

「言わんこつちやない……。」

そんな一撃、ミスタには開戦の合図になるに決まってるでしょ。



「それより、ミスタは大丈夫そうだね。そつちの子は……。戦闘不能かな？ま、一発は一発ってことで。それじゃ。」

こつちから仕掛けたけど、挑発してきたのは向こうだし。これでおあいこでしょ。

まったく、サファイアに会いに来たのに時間食っちゃったよ。これで入れ違いとかになってなきやいいけど。

「待て。」

ケツキングをボールに戻しながら、背中を向けている私を呼び止める。

「なに？私に構っている時間はないんじゃないの？」

「負けたままで行かせたんじゃ、私の気持ちが収まらない。」

「いや、そんなの知らないし。」

「逃げるのか？ヤルキモノ！」

問答無用とばかりに次のポケモンを繰り出してくると、さつきとは逆にミスタに飛びかかってくる。

「かぶちー！」

それを、かぶちーの大顎が弾く。

さつき一発でかいの貰ったからね、ミスタには休んでもらわないと。

・・・それより。

「元々はあなたの技に巻き込まれただけなのに、逃げるもなにもないでしょ？」

「私もトレーナーだ。負けっぱなしでその背中を見送るなんてことはできません。」

この人、人の話聞かないんですけど……。

—————少し前—————

「早速、捕獲のコツを教えてくださいませんか？」

「ダメだ。」

「ど、どうしてですか？」

約束したのに話が違う、とセンリに詰め寄るミツル。だが、そんな様子を意に介さずにセンリは淡々と続ける。

「ミツルくん、キミは私に捕獲のコツを教えて欲しいと頼みに来た時、自分の病気を隠していたね？」

「そ、それは……。」

「キミのご両親に確かめたら、キミの病気はとても重く、療養のため明日遠くの町に引っ越す予定だとか。：ポケモンを扱うことは、思った以上に危険なことだ。健康なトレーナーにだつて何が起こるか分からない。1度もポケモンを手にした事の無い、それも明日には引っ越してしまうキミに対して責任は持てない。」

そう言つて背中を向けるセンリに対して、物陰に隠れて様子を伺つていたルビーは下唇を噛む。

「くっ……。相変わらず相手のことを考えないものの言い方。」

小さな声で悪態をつくが、家出中のルビーが自分の父でもあるセンリの前に飛び出す訳にはいかない。そんなことをすれば、当然連れ戻される。

「妙だな……。別の気配を感じる。」

足を止めたセンリは、おもむろにケツキングを繰り出す。

「マズッ……！」

存在がバレたかもしれないと思つたルビーは更に林の奥の物陰に飛び込んだ。

その瞬間。

『ウオオオオ!!』

ケツキングの雄叫びが響き渡ると、その場に1人の女の人が降りてくる。

「マシロさん!?!」

その人物は、ルビーもよく知る憧れの人物だった。

そして、そのトレーナーはあっさりとかツキングを沈めると、おもむろに繰り出されたヤルキモノの一撃も弾き返した。

「cute!!見てよミツルくん、生のかぷちーだよ!あの可愛さから

信じられないような一撃を繰り出すんだ！」

「わ、分かったからあまり振り回さないで……。」

「でも、マシロさんがなんでハウエンにいるんだろう？」

「それよりも、センリさんってジムリーダーでしょ？あの人大丈夫なの？」

「あの人なら大丈夫だよ。それより、トレーナーになりたいのならこの戦いはよく見ておくほうがいいよ。」

いばるから身を守り様子を伺っていると、上から現れた乱入者によって出るに切れなくなり、隅っこであわあわしていたミツルくんを物陰に引つ張り込んだ結果。

2人のいざこざを目の前で見ることになった。

「きりさくー！」

「ふいうちー！」

ヤルキモノが腕を振り下ろす瞬間を狙いその胸を大顎で穿つと、ヤルキモノが大きく後退する。

「タイミングの難しい、ふいうちを使いこなすか。トレーナーのレベルが低いと言ったのは訂正しよう。」

「しなくていいから、帰っていい？」

「勝負の最中に背中を見せるのか？きあいだめから、みだれひっかき！」

「つるぎのまいー！」

飛びかかってくるヤルキモノが繰り出す両手の爪を、かぶちーの大顎がいなししていく。爪と大顎がぶつかるたびにバチバチという音と、火花が散っていく。

「beautiful!!見てよ、ミツルくん！生のかぶちーのつるぎのまい!!さつきふいうちの美しい技のキレ、踊るようなつるぎのまい。どれもすごく美しい。でも、打ち合うたびになんか妙な音が……ミツルくん？」

「ハア……ハア……。」

その動きにテンションが上がるルビーに対して、ミツルは胸を押さえてその場に倒れ込む。

「ミツルくん!?・・・仕方ない、マシロさんの勇姿を見ておきたいけどミツルくんをこのままには出来ないな・・・。よいしょ、つと。今のうちにここを離れよう。」

ルビーは倒れたミツルを担ぎあげると、ひっそりとその場を後にした。

—————

そして、いつの間にか居なくなった傍観者に気づないまま、戦闘は激しさを増していく。

「上手く捌いているが、いつまで持つかな?」

「くっ・・・!」

この人、強い。

ただのみだれひつかきじゃない。

きあいだめで集中力を上げて繰り出される両手の爪は、かぶちーのつるぎのまいを捉え、少しづつ追い詰めていく。

「そこだつ!!」

そして、打ち合ったヤルキモノの爪が、かぶちーの大顎を大きく弾き上げた。

「ここまでだな。きあいパンチ!」

その隙を逃さず、ヤルキモノが渾身の一撃を繰り出そうと大きく腕を振りかぶった瞬間。

その動きがピタツと止まった。

「何っ!?」

「アイアンヘッド!」

逆に隙を作ることになったヤルキモノを、かぶちーの大顎が突き飛ばすと、男の後ろの林にまで吹っ飛んでいく。

「ヤルキモノ!」

目の前の男は慌ててヤルキモノの姿を追いかけていくと、そのそばでしゃがみこんで様子を伺っている。

それを見て私は手早くかぶちーをボールに戻すと、ミスタに小さな声で話かける。

「今のうちに行くよ。グリーンみたいな口の悪さにレッドみたいなバトルマニアを足したような人の相手なんかしてられないよ、絶対ろくなことがない。サファイアも追いかけていけないし。」

少しだけ不満そうなミスタだったが、サファイアの事を口にするとなんて納得してくれたのか私を乗せると静かにその場を後にした。

時間がないとか言ってたのに何あの人……。バトル愛好家？いや、バトル中毒者？

何にせよ、ミスタと気が合いそう。

—————

ヤルキモノを追って林に入ると、木に叩きつけられて倒れ込むヤルキモノ。ひと目見てこれ以上の戦闘は無理だと理解し、ヤルキモノをボールに戻そうとした際に気づく。

「これは……まひ、か？それに、爪に焦げたような後……。なるほどな、戦闘中のあの音はそういうことか。」

ヤルキモノをボールに戻す。

「あのつるぎのまいの途中に、ほのおのキバとかみなりのキバを混ぜていたのか。そして、攻撃を捌く度に少しずつダメージを蓄積させていた、と。見た目よりも随分と強かだな。……む？」

そう言いながら振り返ると、そこには誰の姿も無かった。

「勝負の最中に逃げるとは……。いや、違うか。勝負を決めるにはあの一撃で十分と理解していたのか。ルビーも、真面目にトレーニングに打ち込めば今頃は……。いや、男の進む道は自分で決めるべきだ。」

呟いたところで、最早後の祭り。今頃はどこかコンテストが開催されている町にでも向かっていることだろう。

「だが、家出となると話は別だ。早く追いかけていな。」

そう言うと、センリは静かに歩きだした。

## 77話

ひっそりと逃げ出した私は、足早にトウカシテイの郊外までやってきた。

ミスタはボールに戻ってお休み中なので、今は徒歩で移動。

ミスタも、少し煽られたから突っかからなくていいのに。そういえば、前もシジマさんに煽られた時も怒ってたっけ？

・・・もしかしてミスタ、私が馬鹿にされたから怒ってる？

もしそうなら、トレーナーとしてミスタに認められたみたいで嬉しくなる。

最初はただついてきてもらってただけで、トレーナーとしてはへっぽこできららとミスタにおんぶに抱っこされてたもんね。

私もきららやミスタに恥じないトレーナーになれてるかな？

「でも、やってきてそうそうバトルマニアと遭遇するなんて運がないや・・・。それに、つるぎのまいに色々な技を混ぜるやつ、とっておきだったんだけどなあ。」

ハア、とため息をつく。

エリカのモンジャラにしてやられてから、ひっそりと練習してたのにこんなところでお披露目する羽目になるとは・・・。

あれ？でも、かぶちーのつるぎのまいを正面から押しきることなんて事、エリカでもできなかったはず。

・・・もしかしたらあの人エリカよりも強い？

ハウエン、レベルが高いなあ・・・。

「ま、あの人のことは置いておこう。多分もう会うこともないだろうし。それにしても、ジムリーダーが不在だったお陰でサファイアの足取りがつかめないや。」

さつきジムに寄ってみたけど、ジムリーダーは居なかった。何故か急に音信不通になったらしい。おまけにサファイアもジムには来てなかったみたい。

ここに来てないなら、カナズミシティに向かっているのかも。

「不在、か。ここでもジムリーダーが暗躍してたら嫌だなあ・・・。」  
不在と聞いて、元ロケット団幹部の姿を思い出す。ついでに仮面の男も。

いやいや、どこもかしこもジムリーダーが黒幕なんて流石にないよね。

そんなことを考えながら歩いていると、ものすごい勢いで水が飛び出す噴水。そして、その周りに集まる人たちと騒ぎ声。

「あのポケモンを追いかけろったい！」

そんな最中、男の人を背負った子がトウカの森に駆けていくのを見送っていく。

「おお、あの子凄いな。私はクリスを受け止めただけで潰されたのに、人を背負ってあの速さで走れるんだ。」

そして、その後ろを2人の男女が追いかけていく。

「ちよっ、ちよっと待ってよ！」

「あわわわわ。」

2人は慌てふためきながら、さっきの子を追いかけていった。

「せわしないねえ。噴水もえらく派手だし、そういう風土なの？」

こっちの人はこういうのが趣味なのかな？わ、足元もびしょびしょだよ。

さっきの人といい噴水といい、ハウエンの人とは気が合わないかもしれない。

「いやいや、そんなことないよ。この噴水は、さっき女の子が壊したんだ。」

そう思っていると、噴水に集まるギャラリーの1人が説明してくれた。

「壊した？そんなに噴水が嫌いだったの？」

「いやいやいや、中にポケモンが閉じ込められたみたいでね。それを助けるために壊したみたいだよ？」

「あ、嫌いだから壊したわけじゃなかったんだ。」

良かった。

流石にさっきのバトルマニアみたいな血の多い人ばかりって

わけじやなさそうで少し安心した。

「あははは。流石にそんな人はいないよ。」

「そっか。なんか、安心したよ。さつきから、血の気が多い人と会ってばかりで。」

「それは災難だったね。．．．でも、助けたポケモンのトレーナーがデボンの社長だなんて。あのサファイアって子、お礼とかたくさん貰えるんだらうなあ。」

「え、サファイア?」

「うん、助けた時に自己紹介してたよ。」

おお、ポケモンを助ける為に噴水まで壊すなんて、なかなかやるじゃん。

いい子に育ったねえ．．．。

「まあ、その後。社長さんを襲ったポケモンを追いかけて、その社長さんを背負って森の方に走って行ったけど。」

あ、さつきは気づかなかったけど、あの子がサファイアだったか。

．．．．．人を背負って走れるほどパワフルに育ってくれて、お姉さん嬉しいよ。

「じゃなくて、追いかけないと!!」

「ん、君も追いかけるのかい? テレビの人といい、さつきの子、大人気だね。あ、トウカの森に入るなら気をつけなよ。迷いの樹海なんて呼ばれる森だからね。」

そう言っただけで走り出そうとした私の背中に、注意するようにと声をかける。

「ありがと。でも、多分大丈夫。グロウ! きらら!」

そのまま振り返ることなく、グロウを出すとその背中に飛び乗る。

ミスタは1戦交えた後だからね。今はグロウにお願いしよう。それに、あの速さで走れる人に私の足で追いつける気がしない。

「それじゃ、グロウ。頼んだよ! きららは、森に入ったら、サファイア



の場所探せる？」

『まかせろー!』

「まかせたー!」

そう言うと、グロウは一直線にサファイアの走り去った後を追いかけていった。

—————

「ダイ。これはきつと計画的な事件よ。」

「マリさん、どういうことですか？」

カメラを抱えたまま走るダイと呼ばれた青年は、隣を走るマリと呼んだ女性に疑問を投げかける。

「噴水の吸水口は切られてたし、そこにポワルンが吸い込まれていくし、その中から出てきたポケモンが社長から何かを奪っていったのよ? どう考えても偶然じゃないでしょ。」

「その姉ちゃんの言う通りったい。あの3匹、おなじしるしを入れとったと。」

「しるし?・・・いや、それよりあなた、さっきの一瞬でそれを!」

「すごい動体視力・・・。」

3人が話しながら社長を襲ったポケモン、ハスブレロを追いかけていくと、森の中に逃げ込んでいく。

そして、それを追う3人も続いて森の中に入ると辺りは鬱蒼とした木々に囲まれる。

「ねえ、サファイアちゃん? 流石にこの森の中でハスブレロを見つけてるのは無理なんじゃ・・・。」

「しっ!」

森に溶け込みハスブレロを見失ったマリがサファイアにそう言うが、サファイアは口に指をあてて静かにするようにとのジェスチャーをする。そして。

「ちやも、そこったい!」

1点を指差すと、そこに向かってアチャモがひのこを放ち、その辺りの草木を焼き尽くす。

そこから現れたのは青いバンダナをした、2人の男と1人の女の男女3人組。そして、その中の男が口を開く。

「よくわかりましたね。しぜんのちからという、自然の中に空間を作る技なのですが。」

「あたしはとーちゃんとフィールドワークをしながら、自然の中で育ったけんね、むしろこつちのがやりやすいつちゃ！コソコソと『荷物は奪った』って会話もよくきこえとーよ！」

「しかし、驚きましたね。今といい噴水の件といい・・・。」

「ごたくば聞きたくなか!!ポケモンば使って人のもん盗るち、どぎゃんつもりね！」

青いバンダナの男の話を遮り、声を上げた時男の周りにハスブレロがいないことに気づく。

「さっきのハスブレロは・・・。」

「きやあ!!」

「うおお!!」

瞬間、サファイアの後ろにいた2人がハスブレロによって川の中に引きずり込まれる。

「くっ！止めるったい、ちやも!どらら！」

サファイアの声に合わせて飛びかかる2体。その攻撃を両手で難なく受け止めるハスブレロ。

「こつちば、2体がかりなのに!？」

2体がかりでも容易く受け止められたことに驚いていると、青いバンダナをしている女が口を開く。

「おやおや、あなたのアチャモとココドラ。思った以上に疲れ傷ついているようですね。お忘れですか?先程噴水広場で戦ったこと。」

「・・・さめはだっっちゃね。」

「詳しいですね、その通りです。そして、念のため。最終進化でお相手しましょう。」

そう言つて女が取り出したのは水の石。それをかざすと、ハスブレロの体が輝きをはなち一回り大きくなつていく。

「さあ、止めです。ルンパツパー！」

進化し、ハスブレロから姿を変えたルンパツパがちやもとどらら、更にマリとダイの2人も一緒に川に沈めていく。

「ちやも、どららー！テレビ屋さん！このままじゃ……。」

サファイアに焦りが積もつていく。その時だった。

「グロウ、コメットパンチ！」

森の中から飛び出してきた影がルンパツパを殴り飛ばした。

「誰っちゃん!!」

その人物は、メタグロスに乗り着物と髪をなびかせ、バンダナを巻いた3人の前に立ちはだかると、サファイアに向けて口を開いた。

「久しぶりだね、サファイア。」

「マシロさん!?!」

—————

『こっちー!』

きららに先導されて森の中を突き進むと、先の方からなにやら声がある。

段々と声の方に近づいていくと、ルンパツパに沈められていく人とポケモン。そして、そのそばで男を背負ったまま焦った様子のサファイア。

状況はよくわからないけど、あのルンパツパをなんとかしたほうが良さそうだね。

「グロウ、コメットパンチ！」

森を突き進んだ勢いのままルンパツパを殴り飛ばすと、青いバンダナの3人組が目に入る。

あの3人がルンパツパのトレーナーかな？

そのまま3人の前に立ちふさがりながら、後ろのサファイアに声をかける。

「久しぶりだね、サファイア。」

「マシロさん!？」

肩越しに振り返りながらサファイアの名前を呼ぶと、驚いたような返事を返す。

『ひーろーはおくれてやってくるもの!』

「いや、ヒーローじゃないし。また、船で変な言葉覚えてきたね、……つと。サファイア、挨拶は後にしようか。ほら、下の2人。登って。」

「ハア、ハア……。ありがとう。」

「ブハツ!!……助かりました。」

手を貸して2人を引き上げると、アチャモとココドラもグロウの上に飛び乗ってくる。

すると、3人組の女の人が口を開く。

「何者ですか?」

「それはこっちの台詞かな?あなた達こそ、こんなことしてどういうつもり?」

「答える気はない、ということですか。ルンパツパ、ハイドロポンプ!」

「グロウ、ひかりのかべ!」

ルンパツパがハイドロポンプを放つが、それをひかりのかべで受け止める。

「これ、どういう状況?」

「貴方、この状況で凄く落ち着いてるわね。」

眼の前でせめぎ合うハイドロポンプとひかりのかべを見ながら、隣の女の人が呆れるような声でつぶやいた後、質問に答えてくれた。

「あの3人のポケモンが、サファイアちゃんか背負ってる人の物を盗んでいったのよ。それを追いかけてここまでできたらこの惨状。」

「え?それでその人背負ってきたの?」

「そうったい!この人の荷物、取り返さんといけんば!」

グロウに登りながら肯定するサファイア。

いや、人背負って普通に登ってこれるのすごいね。

「残念ですが、もうその荷物はここにはありませんよ。すでに他のメ

ンバーがアジトに持ち帰ってます。」

「なら、アジトの場所を吐かせんといけんね！」

「ストップ、サファイア。」

「あう。」

意気込むサファイアの額を指で弾く。

「盗られた物がないなら、もうあの人達には用はないでしょ？それよりその背中の人、早く病院に連れて行ったほうがいいんじゃない？目の前の事に気を取られて、優先順位を間違っちゃダメだよ？」

「うう……。その通りっちゃね。」

「我らの顔を見たものを見逃すだけでも？キバニア！サメハダー！」

さっさと病院に向かおうと思ったら、追加のハイドロポンプが2体分。

「これ程の攻撃を受けてもびくともしないなんて……。」

「すごかー。」

カメラを持った人とサファイアの驚く声が聞こえる。まあ、ルギアのエアロブラストに比べたらなんてことないよ。

「でも、これじゃ身動きが取れないんじゃない……？」

「大丈夫。きらら、控えめでお願いね？」

『おっけー。』

「控えめ？」

隣の女の人の不思議そうな声が聞こえた瞬間、きららの放ったメテオビームがハイドロポンプをかき消し、目の前のポケモンを薙ぎ払う。

「どわっ!!」

「きゃあっー！」

「はえー。」

「今のうちに。グロウ、逃げるよ！」

『ひーろーはさっそうとさるものだよ！』

三者三様の悲鳴のようなものを聞きながら踵を返し、森の出口に向かって動き出す。

しかし、船に乗る度ぎららが変な言葉を覚えてくるなあ・・・。

森を抜けると、カナズミシティの看板が目に入る。

「やつと抜けた。とりあえず無事みたいでよかったよ。」

「危ない所を助けてもらって、ありがとうございます。」

「ありがとう、助かったわ。わたしはマリ。こっちはダイね。それにしても、あのマシロちゃんが助けてくれるなんて思わなかったわ。2年前だっけ？チャンピオンになったの。どうりで見覚えがあると思っただ。」

あー、この人私のことを知ってるのか。

「事件の熱が冷めない中の生放送は、視聴率爆上げの伝説的な放送だったもの。新チャンピオンは女の子ってことで、性別や身長、体格なんて関係なくチャンピオンになれることを世間に知らしめた。それは色んなトレーナーに希望を与えることにもなったのよ？」

「はえ〜。」

テレビの人なら私のことを知ってるのも当然。かと思っていると全然予想してない所を褒められて少し驚いた。

そっか、そういうことなら私がチャンピオンになった意味はあつたのかもしれない。・・・少しだけ。

「あたしだって、そのひとりやけんね!」

そして、サファイアもそう言って胸を張ると、その動作で目を覚ましたのか、サファイアが背負ってる人が起き上がる。

「う、うう……。潜水艇の……。部品は?」

「ごめんち!取り返せんかったたい。」

「そうか……。」

「わたしたちはハウエンテレビの者です。これから、テレビと警察にこのことを伝えます。」

「ああ、すまない。・・・それと、サファイアちゃん。1つ頼まれてほしい。」

そう言うと、ゴソゴソと懐から1通の手紙を取り出す。

「旅の途中で構わない。ムロという町に寄ったら、ダイゴという男に……。この手紙を渡してほしい。君を……。信頼、して……。」  
「ちよつと、今ダイゴって!!」

限界だったのか、言いたいことだけ言うともた気を失う。

え、今ダイゴって言ったよね？

聞き返そうにもまた気を失っちゃったし、その人が私の知っているダイゴさんなのかどうか確かめることは出来ない。

……。ムロ、か。

「安心しい、社長さん。その手紙、引き受けたったい！カナズミジムを突破したら、すぐに行っちゃるけんね！」

「ねえ、サファイア。ジム制覇の旅、私もついて行っていい？」

「よかよか!!マシロさんが一緒なら、心強……。あ。」

サファイアは途中で言葉につまると、今度は申し訳無きそうに謝ってきた。

「やっぱりダメっちゃ。アイツと競争ばしよるのに、マシロさんについてきてもらっちゃズルっこになる。……。ありがたいんやけど、ジム制覇はあたしの力で成し遂げんと意味がなか。せやから、ごめんち！」

そう言つて手を合わせる。

誰かと競争してるみたい。どっちが先にジムを制覇できるか、つてところかな？

それなら、私が一緒に行くのはあまり良くはない。

「そういうことなら、仕方ないね。」

「サファイアちゃん、ジムまでの地図書いておいたから。ジムに行くなら、目を通しておいて。カナズミシティは広いからね。」

「ありがとー！」

「ジム制覇、がんばってね。」

立派な志しを持って旅をしてるのなら、邪魔はできないね。

手を合わせながら謝り倒すサファイアを応援すると、受け取った地図と手紙を握りしめて町の中に走っていった。

「それじゃ、残った人達は病院ね。」



「僕達もですか？」

「そりゃ、ね。川に引きずり込まれてたんだから。一応診てもらったほうがいいでしょ？」

「それもそうね。大人しく連れて行ってもらいましょう。」

そしてその日はマリさんとダイさんの2人を病院に送ると、ポケモンセンターで休むことにした。

—————

そして次の日。

マリさんとダイさん、社長さんの様子を見に病院に向かうと、ベンチに座っている2人が私に気づく。

「あら、マシロちゃん。様子を見に来てくれたの？」

「そんなところ。で、どう？」

「わたし達は問題なし。でも、社長さんの方は重症みたいね。命に別状はないけど、今も意識不明よ。それに……。」

「僕達が撮った映像が、無駄になっただんですよ！」

「……??どゆこと??」

急に映像の話をされても意味が分からない。

カメラが壊れたとか、そんな話？

「唐突に口を挟まない。」

パァン。

「あたっ。」

私の事を察してか、ダイさんの頭をひっぱたく。

「いきなり映像の話をされても分かるわけないでしょ。昨日の件、報道規制がかかったのよ。表向きには、『社長は散歩中に、野生のポケモンに襲われた。』ってことになってる。」

「つまりそれって、警察は動かないってこと？」

「そう。それに、社長が何故サファイアちゃんに手紙を託したのか。規制がなければ、この事件はニュースで流れ、ダイゴという男もこの事件を知ることになるはず。」

「それなのに、社長はわざわざ手紙をサファイアに渡した。……つま

り社長は規制がかかることを予想していた?」

「ええっ!」

マリさんと私の話を聞いて、驚いた声を上げるダイさん。

「デボンはホウエンきっての大企業。自社のネットワークを使わないのは何故?電話は?メールは?自社の社員は?それらを使わないのは……。」

「そのデボンって会社の内部に、さっきの青い集団のスパイが紛れ込んでるってこと?」

「その通り!!」

「ええ!?!段々と怖くなってきましたよ……。マリさん、この事件追うの止めたほうが……。あたっ。」

パン。

2度目の高い音が響く。

「何言ってるのよ。こういうのこそ、ジャーナリストの真骨頂じゃないの。私達だけが知ってる犯人の手がかり。」

「手がかり?」

なにかあったつけ?私には心当たりがないんだけど。

「連中のバンダナと、サファイアちゃん気づいた、ポケモンに入っていたっていうし。きつとアイツラのシンボルマークなのよ。ダイ、早く調べて!」

「は、はい。」

慌てながらも、ダイさんは手元のパソコンを操作する。

そして、少しの待ち時間の後表示された検索結果。

「出ました、マリさん!チーム、アクア……?」

「アクア団……ね。」

アクア団、か。ここにもロケット団みたいな組織があるんだ。それも、大企業にスパイとして潜り込んでるなんて、結構厄介じゃない?

……いや、ジムリーダーに混ざってるよりはマシか。

「とりあえず、アクア団ってのが暗躍してるのは分かったけど、目的はさっぱりだよな?あ、目的といえば盗られた道具って何だったの?」「そういえば、盗られた物が何だったのかはさっぱりね。社長さんは

潜水艇、って言ってたっけ。」

「ウーン……。盗られた物は何か分かりませんが、潜水艇といえばカイナ、ですよ。」

「そうね、カイナの造船所に行けば何か分かるかもしれない。」

アクア団の目的も分からず、盗られた物も何か分からない。でも、次にやるべきことは見えてきた、かな？

「それじゃ、わたし達はカイナに向かいますよ。マシロちゃん、よかつたらついてきてくれないかしら？あなたに助けてもらえるなら、これ程心強いことなんてないわ。」

「そうですね！僕からもお願いします！」

と、2人揃って頭を下げられる。

「私としては、ついて行ってもいいんだけど……。後から合流する形でもいいかな？」

「何か用事でもあるのかしら？」

「ほら、昨日言ってたダイゴって人。私は元々、ダイゴって人に会いに来たんだ。」

「だから昨日サファイアちゃんに、一緒に行こうって。」

「ま、それは断られちゃったけどね。それに、社長さんが手紙を渡す様な相手だもん。アクア団の事も何か知ってるかも。」

「なるほどね。……分かったわ！それならお互いに情報を集めつつ、カイナで落ち合しましょう。」

「オツケー。マリさん達も気をつけてね。あいつら、顔を見られたかには、なんて言うような連中だから。」

「ええ。気をつけて動くつもりだけど、できれば早くも合流してね？」

そんな声を聞きながら、私はカナズミシティを後にした。

—————

「ちよつとマリさん……。僕達だけで大丈夫なんですか？」

「大丈夫か大丈夫じゃないかで言うなら、大丈夫じゃないわね。」  
「ええっつ!?!」

不安そうなダイに追い打ちをかけると、素っ頓狂な声を上げる。  
「それでも、マシロちゃんが協力してくれるんだもの。何かあっても助けてくれるわよ。」

「何かあつてからじゃ遅いんじゃない?」

そんな呟きは聞こえないふりをする。

ジャーナリストとして、特ダネを前に引くことは頭にはなかった。  
「とりあえず局長に、自由に動けるように許可をもらっておきましょう。あとは……。」

そう言うと、マリは頭上のポワルンを見上げる。

当たり前のようにそこにいたポワルンは、マリの手持ちではない。  
先日襲われた社長の手持ちである。

その社長も、今は意識不明。故に、面倒を見るトレーナーが必要なのだが……。

「このポワルン、どうしよつか?」

「マシロちゃんに預ければよかったんじゃないですか?それか、サファイアちゃんとか。」

「サファイアちゃんはジム制覇の旅の途中よ?そんな彼女の手持ちの枠を減らすようなことできないわよ。マシロちゃんに至っては、初対面なのに協力してくれるのよ?これ以上の頼みは流石に厚かましいと思わない?」

「……それもそうですね。」

それに、協力してもらおうとなると矢面に立つのはマシロちゃんになる。そのマシロちゃんにポワルンを預けるのは、危険の真っ只中に放り込むようなことにもなり得る。

言葉の裏ではそんなことを思っていたのは口に出さずに諦めたように続ける。

「仕方ない、か。わたし達が連れていきましよう。」

「ええ、いいんですか!?!勝手に連れ出したりして。」

「他に頼れる人がいないんだから、しょうがないでしょ。それに、さつ

きも言われたでしょ？」

「??？」

「顔を見られたからには、って。ポワルンも放っておく訳にはいかないのよ。」

逃げようとした際に、強硬手段にでたあの3人組。マシロちゃんの  
お陰で難なく逃げられたものの、助力がなければ逃げられなかった可  
能性もありえた。

「それなら、社長さんは……。」

「社長さんなら大丈夫よ。気を失ってたから、あいつらの顔を見てな  
いはず。それにデボンの社長なんて有名人を、入院中にどうこうする  
のは難しいわよ。荷物を奪われた時も、部下もつけずにお忍びって感  
じだから奪えたって所もあるでしょうしね。」

「マリさん、よく考えてますね……。」

「ジャーナリストなら、いついかなる時も特ダネを逃さないために思  
考をめぐらせるものよ。」

そう言つて立ち上がると、マリは上司に直談判するためスタスタ  
と歩きだし、ダイがその後ろを慌てて追いかけていった。

## 79話

2人と別れたあとミスタに乗って海を渡り、やってきたのはムロタウンの外れにある石の洞窟。

「さてと。あの石マニアのダイゴさんがムロにいるとしたら、ここしかないよね?」

洞窟の中を歩きながら周囲を見渡す。

が、見える範囲には人つ子ひとり居ない。つまり、誰かに尋ねることもできない。

「まあ、こんなそもそもこんなへんぴな場所、誰も来るわけないか。それよりも、かぶちー。」

歩きながらボールからかぶちーを出すと、軽く周囲を見渡す。

すると、石の洞窟だと気づいたのか心なしか嬉しそうな気がする。「久しぶりの里帰りだもんね。ダイゴさんを探しながらのんびり歩こうか。」

そう言っただかぶちーにあわせてのんびり洞窟を歩いていると、後ろから声をかけられる。

「マシロさん?」

「あれ、サファイア?こんなところでどうしたの?」

振り返ると、そこには昨日別れたばかりのサファイアの姿があった。

「ちよつと、特訓をば……。」

昨日、一緒に行くのを断ったからか、少し気恥ずかしそうに頭をかきながらそんなことを呟く。

「特訓?」

「そうったい。この町のジムリーダーは、今晚しか挑戦は受けれないって……。でも、今のあたしの実力じゃ多分……負ける。」

「それで特訓、ね。」

「どうやら、この町のジムリーダーは忙しいようで今晚しか挑戦できないらしい。」

でも、今の実力だと勝てないからここに特訓しにきたと。

「あれ？手紙は？」

「申し訳ないけど、後回ししたい。」

「あらら。」

まあ、私もまだダイゴさんに会えてないし。もしかしたら洞窟にいない可能性もある。そう考えると、今晚しか挑めないジムの方を優先するのも仕方ないか。

そう思っていると、サファイアはおもむろに頭を下げた。

「マシロさん、お願いだった！あたしを、鍛えてください！」

「へ？」

「昨日、一緒に行くお願いを断っておきながら、あつかましいかもしれない。でも、ジムに挑戦するまで時間がないったい！やけん……！」

「ああ、もう……!!とりあえず頭を上げてよ。」

知り合いに頭を下げられるとすごく話しづらい。

「あまり教えるのは得意じゃないけど、それでもいい？」

「……!!よろしくお願いします!!」

こうして、何故かサファイアの特訓をすることになった。

—————

サファイアの手持ちは、アチャモ ココドラちやもとどららの2体。

今はとりあえず、野生のポケモン達と戦ってもらってる。

見た感じ、野生のポケモン達との戦い方は様になってると思う。

「サファイア、野生のポケモンと戦うことに慣れてる？」

「そうたい。フィールドワークの手伝いで野山で育ったけん、野生のポケモンと戦うことは日常茶飯事やけんね。」

「なるほど。」

野山で育った、か。だから人を抱えたまま、あんな速さで走れたんだ。やけにパワフルだと思っただけど、そういうことね。

「じゃあ、今度は私の手持ちとやってみようか。」

野生のポケモンを倒した後、今度は私と戦ってもらう。

「グロウ、お願い。」

「マシロさんの、メタグロス。正面から見ると、すごい迫力ついた。……ちやも、どらら！」

グロウを前にして息を呑むサファイア。それでも、怯むことなくグロウに立ち向かってくる2体。

その2体の攻撃をグロウは両腕で難なく受け止める。

「硬いっ……!!だったら、ちやも!!」

どちらはそのままグロウに攻撃を続ける中で、ちやもが距離を取る。そして、その口からグロウに向かってひのこを放つ。

「グロウ、ひかりのかべ！」

そのひのこをひかりのかべで受け止めると、どららの攻撃を受け止めていた腕を振り、どららを弾き飛ばす。

「どらら!!くっ……。やっぱり強かね！」

うくん、力不足かな？

この町のジムリーダーのことは知らないけど、今のままでジムリーダーに勝つのは少し厳しい気がする。

「率直に言うけど、このままでと難しいと思うよ？」

「そげんこと、分かるとるったい!だから、こうして特訓をば……!!」

「はいはい。分かっているから、ちよつと落ち着いて。」

「……ごめんたい。」

私の感じたことを言うと、かなり焦った様子。でも、私の言葉をすぐに聞き入れる辺りはまだ冷静かな？

「私が言いたいのは、今晚無理に挑戦しなくてもいいんじゃないかってこと。後回しにしたり、もつと力をつけてからでもいいと思うけど？」

「でも、それじゃ間に合わんかもしれん!!……11歳でポケモンリーグを勝ち抜いた人がおるけん、あたし達は11歳になるまでに同じぐらい強くなるうって。そう約束したつ人がおるんよ。だから、あと70日と少しまでに、ジムを制覇せんといかんのよ……。」

約束、か……。約束は大事だよね。

しかし、11歳でリーグ優勝。なんか心当たりがあるんだけ



ど……。

いや、そのことは今は置いておこう。

「それ、前に言ってた競争相手？」

「ううん……。もう、顔も覚えてないずっと昔に遊んだ子供。でも、その日のことを忘れたことはなか。」

「だからそんなに焦ってるんだ。」

ずっと昔の約束、か。

「あたしは弱いけん……。青い格好をした奴らにも勝てんかった。カナズミのジムリーダーにもギリギリの所だった。ムロのジムリーダーには勝ち目すら見えてない。それでも……。それでもあたしは、後回しなんてことはできんね!!」

サファイアがそう叫んだ瞬間、ちやもとどららの体を光が包む。

「これって……!?!」

「トレーナーの気持ちに伝えてポケモンが進化することがあるとは聞いてたけど……。実際に見るのは初めてかも。」

光が収まると、そこには姿を変えたちやもと、ワカシャモどらら。

ゴールド達のポケモンが、うずまき島で3体同時進化したっていうのは聞いたけど。実際に見ると結構びっくりするね。

「ちやも、どらら!!この子達が応えてくれたなら、あたしも応えてあげんとね!マシロさん、もう1度お願いするったい!」

「わかった。教えるって言っちゃったしね、やれるだけのことはやるう。」

気持ちの面ではサファイアもポケモン達も十分で、それは目の前で進化として形になって現れた。

あのままだと勝てないと思ってたけど、今ならいい勝負にはなると思う。

それでも、勝てるかどうかは分からないんだけど。

「ところで、今晚挑むジムリーダーってどんな人？」

なので、ジムリーダーの特徴を聞いてみる。基本的にジムリーダーは1つのタイプを極めたエキスパート。タイプが分かれば有利に戦える。

・・・タイプに一貫性があるって、ある意味挑戦者に対するハンデみたいなものだよね。まあ、それをものともしないのがジムリーダーだって人達なんどけどね。

「かくとうタイプの使い手で、相手の力を利用する『柔の奥義』ってのを使うったい。」

「『柔の奥義』ね。それならグロウじゃなくて、かぶちーが適任かも。かぶちー、いるー?」

辺りに声をかけると、物陰からひよこつと顔をのぞかせるかぶちー。

里帰り中だから自由に散歩してたところを邪魔するのは申し訳ないけど、少し協力してもらおう。

「ごめんね、かぶちー。少しだけこつちを手伝ってもらってもいい?」  
「ちー!」

テトテトと私の足元まで歩いてきたかぶちーは、手を上げて快く引き受けてくれた。

「グロウ、お疲れ様。それじゃ、かぶちー。よろしくね。」

—————

そして、日が落ちる前。

洞窟を飛び出し山を駆け下りるサファイア。

「やれることはやった。あとは、全力でジムリーダーにぶつかるとけったい!」

走りながらジム戦に向けて意気込むと、洞窟での特訓を思い出す。  
「・・・でも、かぶちーには歯がたたんかった。」

どららの攻撃は全ていなされ、ちやもの速さでも当てられなかった。

「マシロさんにはまだまだ敵わんね。・・・それでも、かぶちーのふいうちのタイミングはなんとなく掴んだったい。」

『相手の力を利用する『柔の奥義』。多分、かぶちーのつるぎのまい

やふいうちがそれに1番近いと思う。だから、かぶちーの動きを体に慣れさせたらかなり勝率は上がるんじゃないかな?』

そう言つて容赦なく叩きのめされた。

その光景を思い出すと、たはは・・・と苦笑いを浮かべる。

そして。

『あとは、もっとシンプルな解決策。わざわざ“柔の奥義”なんて気にせずに、遠距離攻撃を一方的に放ち続ける。こんな感じで。』

そう言つと、グロウはラスターカノンを放つと周囲の岩をどんどんと撃ち砕いていった。

「あれもマネできんね。出来るのはちやものかえんほうしやぐらいいたい。」

それでも、遠距離で戦えないよりは全然まし。そう思つてかえんほうしやも練習した。それでも、最終的な切り札はマシロさんを驚かせた技。

『本命の一撃を隠してふいうちを誘う、か。うん、いいね。その技はきつと、ジムリーダーを倒すのに役に立つよ。』

結局、ふいうちを誘つてまで放つた一撃も軽くないなされたけど・・・それでもマシロさんのお墨付きをもらった技。

「この技で、あのジムリーダー様を倒すつたい!!」

—————

「ありがとね、グロウ、かぶちー。」

走つていったサファイアを見送つてしばらく。

洞窟の中を散歩しながらかぶちーとグロウにお礼を言う。

サファイアはジムリーダーに勝てるかな?

出来ることはやったつもりだけど、どう取り繕つても時間が足りなかった。だから、かぶちーに一発当てれそうになった技を重点的に鍛えることにしたけど・・・。

「ま、あとはサファイア次第かな。」

と言いつつも、多分勝てるんじゃないかなーとは思つてる。あのに

どげりを放ったときは、少しヒヤツとしたもん。それに、数時間特訓しただけなのに伸び幅は多分ゴールド達より大きかった気がする。

まあ、まだゴールド達のほうが強いけども。

そんなことを考えていると、ゴゴゴゴと足元が揺れだす。

「わわっ・・・!!」

ふらつきながらも咄嗟にグロウにつかまると、しばらくして地鳴りは収まった。

「・・・ふう、収まったかな？」

周囲を見渡すと、洞窟の壁やら天井やらがミシミシと音をたてている。

うーん、洞窟が崩れたら嫌だし早く出ようか。

かぷちーをボールに戻しグロウに飛び乗ると、出口に向かって一直線に飛んでいく。

そして、洞窟を飛び出すと目の前に広がるのは満点の星空。

「おお、もうそんなに時間が経ってたんだ。・・・あれ？」

そして、その星の中に見覚えのある後ろ姿。既にかなり小さくなっているけど、あれは・・・。

「メタグロスの後ろ姿？ってことは、ダイゴさん!?グロウ、あれ追って!!」

こうして、洞窟を飛び出してそうそう見覚えのある後ろ姿を追いかける。はじめた。

「えっ、マシロさん!」

ん？今、誰かに呼ばれたような・・・。

でも、こんなところに知り合いなんて居ないはずだし、気のせいかな。

—————

「行っちゃった・・・。急に飛び出していったから、聞こえなかったのか、急いでいたのか。」

先日見かけた憧れの人物を、またもや思わぬところ見かけたが、ルビーに気づくことなく飛び去っていった。

そして、その背中を見送るルビーの後ろに現れるサファイア。

「マシロさんは大丈夫やろうけど、アイツは無事やろかね?・・・あ。」  
「ん?」

そして、振り返ったルビーとサファイアの目が合う。

「キミか。こんなところでどうしたの?」

そして何事もなく、どうしたの?なんて言ってくるルビーに対して声にならない声を上げ、その場でしばらく飛び跳ねると大声で叫んだ。

「あたしは!この!石の洞窟から!すごい地響きがしたけん!あんたが埋まつてるかもしれん思つて飛んできたつたい!それなのにあんたは!」

思わず耳を塞ぐルビー。

「べ、別に助けてくれなんて頼んでないよ。確かに野生のポケモンの群れに襲われて大変だったけど、ダイゴさんつて人と協力してね。スマートに乗りグエ・・・!」

「今、なんと!?ダイゴつて言った!?その人はどこに!?はよ答えんね!!」  
喋る途中のルビーの襟元を掴みブンブンと振り回しながら畳み掛ける。

「も、もう・・・海の、向こうに・・・飛んで、行ったよ。」

「そ、そんなあく・・・。」

海の向こうを指さしながら、苦しそうに答えたルビーの襟を離すと、その場にしゃがみ込み手紙を握りしめる。

「ゴホツゴホツ・・・。全く、相変わらず野蛮なんだから。」

「あたしはその人を探してたとに、なんでアンタが・・・。」

「手紙?そういえば、ダイゴさんと同じ方向にマシグエ・・・!」

ルビーが呟いている途中でサファイアがおもむろにルビーの襟を掴む。そして、そのまま駆け出すと崖の上から飛び降り、ホエルオーえるるの背中に飛び移る。

「あんた!!案内するつたい!!」

## 80話

「あくあ、見失った。」

あの後ろ姿を追いかけ海の上を飛んでいるが、追いつくことはできなかった。それどころか、辺りに霧が漂ってきて前後左右もよく見えない。

「これだけ霧が深いと仕方がない、か。」

そう呟くと、おもむろにきららがボールから飛び出してきた。

『ふあく、よくねたよく。おはよー!』

「おはよう、きらら。よく寝てたね。」

『わっ!なにこれまっしろ!!』

「うん。霧が深くて真っ白だねえ。」

『なにこれ、おもしろーい!!』

と、何故か楽しそうなきらら。まあ、怖がるよりは全然いいかな。

「ん?あれは・・・船?」

そう思っていると、霧の中からおもむろに見えてきたのはボロボロの船。こんなところにこんなものが・・・。

「ま、ちようどいいか。この霧の中進むのも危ないし、今日はここで休もう。」

『おー。』

—————

そうして船の中に足を踏み入れると、船の中は植物だらけ。これはまた、随分と長い間放っておかれたみたいだねえ・・・。

「お、きのみもある。・・・ズリにブリー、セシナの実。ノワキの実もある。まるできのみ博物館だ。」

『あまーいー!』

そんな中で、きららはブリーの実をかじっていた。手が早い。

まあ、こんな場所だし誰かの所有物ってことはないだろうからいいか。

「それよりも、どこか寝られる場所を・・・ん？」

そう言いながら周囲を見渡していると、周りの草の中をゴソゴソと走り回る影。

何がいる。そう思った瞬間、その影は一直線にきらららに向かつて飛びかかっていった。

『ん？』

そして、振り返ったきららのサイキネシスに弾き返されてペタンと床に尻もちをついた。

『やるかー？やるのかー？』

「きららに飛びかかるのは無茶だよ・・・。あと、きららもやらないからね？野生のポケモンかな？確か、プラスルとマイナン、だっけ。」

そこにいたのはでんきタイプのポケモン、プラスルとマイナン。どうやら、この2体の縄張りだったみたいで、急に襲いかかってきた。

「ごめんね。荒らすつもりはないんだけど、ちょっとお邪魔させてもらうね。」

そう言っただけで進もうとすると、私の足にしがみついて止めようとする。なんだろう・・・。この先に行かせたくないような、そんな感じ。

この先に、なにか大事なものでもあるのかもしれない。でも私としても詮索するつもりはないけど、休めるところは探したい・・・。

ん？それなら、この子達に聞けばいいんじゃない？

私は足元にしゃがみ込むと、プラスルとマイナンに話しかけた。

「ねえねえ。この先には行かないからさ、どこかキレイで休めそうな部屋に案内してくれないかな？一晩で出ていくから、お願い！」

そう言っただけで手を合わせると、プラスルとマイナンは顔を見合わせる。そして、今度は私の足を引っ張ってさつきとは別の場所に向かう。

お、案内してくれるっばいね、良かった。今はこっちがお邪魔してる立場だし、追い出されることも考えたけどそんなことにはならなかった。

そして、案内されたのはそれなりにキレイな、あまり植物が生い

茂ってない、一晩過ぐすぐらいなら問題無さそうな感じの客室。

「おー、外に比べると全然キレイ。ありがとね。」

そう言ってボロボロのイスに腰掛ける。でも、プラスルとマイナンは部屋の入り口でジツとこちらを見続ける。

「まだなにかあるの……って、そうか。私がウロウロしないように見張ってるのか。」

よっぽど大事なものがあるんだねえ。

プラスルとマイナンに気を使わせ続けるのも悪いし、夜が明けたら早いとこ出発しないと。

そう思っただけの準備を始めると、プラスルとマイナンの耳がピーンと立つ。

そして、慌てたように顔を見合わせると部屋の外に飛び出している。

「……どうしたんだらう?」

『おきやくさんみたいだよー? ……かんしよく!!』

「ああ、うん。お粗末様。それより、お客さんって?」

『よにん、かな? ひとりはさふあいあだね。』

「サファイア? あの子もこんな所に?」

もしかしたら、サファイアも同じように霧で足止めされたかな?

あつ! 私がダイゴさんに追いつけなかったんだから、サファイアも手紙渡せてないよね? 手紙どうするんだらう?

『あと、ひとりはしらないひとだけど、ほかのふたりはあったことがある……?』

「ん? 会ったことがある……? 知り合いつてこと?」

『んー、わかんない。なんだか、すごくなつかしいきがする。』

「懐かしい、か。」

大分前に会ったことがある人物ってこと? ホウエンでそんな人物いないと思うけど……。

流星にダイゴさんはないよね? 私より先に海に出てたのに、私の後にこんな所に来るはずないし。

「ま、会ってみればわかるか。サファイアにジムの事聞いてみたいし。」



きざらら、それ食べたなら私達も行くよ。」

『はいー！』

いつの間にか食べ始めていた2つ目をみながらそう言うと、元気に返事を返す。

が、食べるスピードは変わらずにのんびりとしたものだった。

ーーーーーーーーー

「表だ。」

「ならあたしは裏。」

マシロが訪れたすてられ船の中。一組の赤いフードの男女がコイントスを行っていた。

・・・結果。

「クソっ。外れた。」

「ほら、サツサと行きな。」

「わーったよ。」

裏表を外した男が1人、船の奥に歩いていく。そして、後ろ姿が見えなくなった時。

「・・・さて、そこに隠れてる奴！あんたもサツサと出てきなよ!!」

おもむろに植物が生い茂った中に腕を突っ込む。すると、そこから飛び出してきたのはサファイア。

サファイアもダイゴを追いかけるルビーと共にムロを飛び出したものの、マシロと同じように霧に阻まれここで足止めを食っていた。

「逃さないよー！」

「グッ・・・！んのお!!」

女は飛び出したサファイアの顔を掴むが、サファイアはその腕を蹴り上げ腕から逃れる。

「ちやも、どくららー！」

「キュウコンー！」

「いきなりなにするったいー顔をみせ・・・うああっ!!」

急に掴みかかってきた相手の顔を見ようと目を見開いた瞬間、目に激痛がはしり顔を抑える。

「フッフ、目があついだろ？からーいマトマの実をすりつぶした汁が出る仕掛けの手袋だ。この船に入った瞬間、隠れてるお前の気配を感じた。残って正解だったね。お、こっちもケリがついたね。」

直ぐ側でぶつかり合っていたちやもとどららも、キュウコンの炎の前に倒れ伏していた。

「こん．．．のおお!!」

地面をバァン!と両手で叩き、砂埃を巻き上げる。

「ちやも!!どらら!!」

そして、2体をボールに戻すと周囲の植物の中に飛び込む。

実力的にも格上。まともに戦っても勝ち目はないとの判断だった。

「ちっ．．．。今度は完全に気配を消したか。」

赤いフードの女は、しばらくの間周囲をキョロキョロと見渡すと舌打ちをしながらその場を後にする。

それを木の上に隠れ場所を移したサファイアが見送るが、その顔は苦痛に歪んでいた。

「ハアハア．．．。なんてヤツつたい。最初から気づいていたってホントにやるか？あたしだって気配ば隠していたとよ。それに、あの強さ。」

ボールに戻した2体を見ると、どららどころか炎タイプのちやもですら大やけどにされてしまった。

「目もあけられん．．．!敵の姿も確かめられんかった。それよりもマズイのはアイツつたい!!」

見た目ばかり気にしたおちやらけたルビーのことを思いだす。

もう1人の男と鉢合わせしてたらひとたまりもない。そう思い鼻をクンクンと動すと、ルビーを探し始めた。

そして、すぐにその姿を見つけることができたが、何故か地面に倒れ込んでいた。

「やっぱり．．．。ほら、しっかりするったい!!」

木の上からそっと手を伸ばすと、ルビーの体を木の上に引き上げる。

「うーん．．．。う、うわっつ!!」

「しーっ！」

ルビーからすれば急に目の前に現れたサファイアの顔に声を上げるが、サファイアがそれを諫める。

「いつつ……。ボクを後ろから殴ったのはキミか!？」

「なんば言うとるか!下を見いや！」

「あいつは……。？」

ルビーが下を見ると、部屋の中を物色している男の姿。ルビーを殴ったのはあの男らしい。

「この船にある何かを盗りにきたらしい悪人ったい!あたしももう1人に襲われたとよ。」

「そうか。ん?それよりも、あの男がいるあの部屋はイタズラ好きな2匹が近づかせないようにしてた……。」

「ホムラ、ここか？」

「あ、あの女ったい!!」

木の上から様子を探っていると、先ほどサファイアを襲った女が現れる。その女は部屋の中の男をホムラと呼んだ。

「カガリ、やっぱりきたのか?でも、もう探知機は見つけてやったぜ、ほら!!」

そう言って手の中の機械をカガリと呼んだ女に見せびらかす。が、カガリはそれを一瞥するだけ。

「それより、女の子がいなかったか？」

「女あ?ボウズならいたが……。って、ヤロウどこ行った!？」

「チツ……。1人じゃなかったか、面倒だな。」

ホムラはルビーが転がっている場所を見るとだれもないことに声を上げ、カガリは舌打ちしながら周囲を見渡す。

「今度見つかつたらただではすまんよ。」

「なら、逃げる?」

「悪党相手に背中を向けたくはないけど、うちの2匹は大やけどを負ってるとよ。」

「ボクの手持ちも3匹とも混乱してるんだぞ?勝ち目は無いんじゃないか?」

「何か手は……。」

「ちー……。」

「ん？」

そうつぶやくサファイアに、聞き慣れないポケモンの鳴き声が届く。

「他にもまだポケモンがおると？」

「ああ。手に負えない野生のいたずらっ子が2匹ね。」

「2匹ね、ちようどよか。その2匹に協力してもらおうたい。」

「えく!?無理だつて!!」

「無理でもやらんと。逃げるにしても、ここから下りないといかんけんね。さあ、行くよ!」

「仕方ない……!!」

「せえの!!」

声を合わせてイタズラっ子、プラスルとマイナンの隣に飛び降りると、小さな声で耳打ちをする。そして、プラスル達は小さくうなずくと、ルビー達の指示に従った。

「かげぶんしん!!」

プラスルとマイナンの分身がホームラとカガリを取り囲む。そして、驚いている2人の意表を突くようにバリバリと10まんボルトを浴びせる。

「がっ……!?!」

「ううおおおお!!」

「今だ!」

そして2人が怯んだ瞬間、ルビーとサファイアはその場を離れ物陰に飛び込む。

「よか!野生のポケモンやけど、敵に勝ちたいけんからかあたし達の指示にしたがつてくれとると!それにしても、目が見えなくても分かるすごか攻撃たいね!」

目の見えない状態のサファイアに変わり、ポケモン図鑑を開くルビー。

「プラスとマイナス。一緒に居るだけで特殊攻撃が強くなるだつて

!?!?・・・それにしても、さつきまでボクをからかっていた2匹なのにボクの指示に従ってる。あの探知機ってやつ、よっぽど奪われたくないんだな。」

ルビーがそう考え込んだ時だった。

「なめるな、ちび共!!キユウゴン!!」

キユウゴンが周囲一体を焼き払い、プラスルとマイナンのぶんしんをかき消し本体だけが残る。

「なにしとるね、次の指示を出さんと!?!」

サファイアの声にルビーはハツとするが、気づいた時にはホムラのコータスによってマイナンが突き飛ばされていた。

「邪魔だな。」

そして、プラスルを踏みつけようとした瞬間だった。

「かぶちー!」

横の草むらから飛び出したクチートがコータスを突き飛ばした。

「野生のポケモンだからって好き勝手やってるねえ。この前会ったバトルマニアといい、青い集団といい、ハウエンの人達って乱暴すぎない?」

「誰だあ、テメエ?」

「・・・かぶちー?」

現れたのは先に船に訪れていたマシロ。

そよ乱入者に対して睨みつけるホムラとは対象的に、カガリは怪訝な表情を浮かべながら小さく呟く。

「この声って・・・マシロさん!?!」

「なんでこんな場所にマシロさんが!?!」

「え?」

「あんだ、マシロさんを知ってるつとね?」

「キミこそ、マシロさんを知ってるの?」

そして、それを後ろから見つめるルビーとサファイアは驚きの声と共に顔を見合わせた。

「野生のポケモンだからって好き勝手やってるねえ。この前会ったバトルマニアと言い、青い集団といい、ハウエンの人達って乱暴すぎない?」

「誰だあ、テメエ?」

「・・・かぶちー?」

目の前の大男は私を睨みつけるが、横にいる女の方はなにやら呟きながら考え込んでいる。

そんなことよりプラスルは・・・。あ、無事にマイナンの方に向かっているね。

「なんでアンタがマシロさんの知り合いなんね!」

「そんなの、キミには関係ないだろ!」

ところで、後ろが賑やかなんだけどなにやってるんだろうか?

声的にはサファイアと・・・。誰だろう? まあ、いつか。

「それで、今日は赤い集団かあ。ハウエン地方も碌でもない組織が多すぎない?」

「オレたちマグマ団を碌でもないだっテ? その小さいなりでよく言っタ! てめえの後ろにいる2人と2匹ごと、消し炭にしてやるよっ! コータス、かえんほうしゃ!」

「ミスタ、ハイドロポンプ!」

相手のかえんほうしゃに対してミスタを繰り出すと、ハイドロポンプをぶつけて一瞬で押し返す。

「うおっ! 水タイプもいたのか!」

「チッ。焼き尽くすのはアンタの得意分野じゃないだろ? 引っ込んでな! キュウコン!」

と、今度はキュウコンがかえんほうしゃを放つ。

すると、コータスの炎を押し返したハイドロポンプがドンドン蒸発していく。

「え、嘘。ドンドン蒸発していくんだけど、何その火力。」

「ホムラ、今のうちにさっきの2人を始末してきな！」

「仕方ねえな、この場は任せるぜ。」

そう言つてコータスに飛び乗ると、私の横をすり抜けようとする。  
「かぶちー！」

それをもう一度、かぶちーが横から突き飛ばし、横を通らせないようにする。

「おわっ!?コイツもいたことを忘れてたぜ！」

「どこまでも世話が焼ける……。キュウコン！」

そう言つて尻尾の先に炎が灯り、かぶちーに向かって放たれる。かぶちーはステップを刻んでその炎を躲していくが、躲した炎が周囲にどんどんと燃え広がりがぶちーを囲っていく。

気づけば足のふみ場がほとんど無くなり、その場からほとんど動けなくなっていた。

「さあて、周りは火の海。いつまで避け続けられるかな？」

「これは、不味い……。かな？」

「ホムラ！今のうちだよ、サツサとしな！」

「言われなくてモ!!」

かぶちーの動きを封じて、ホムラと呼ばれた男がもう一度後ろに向かう。

「仕方ない、か。グロウ！」

私は後ろに向かってボールを投げる。

「マシロさんといえば、かぶちーの舞だろ!？」

「いいや！全部正面突破するミスタの強さったい!!」

そして、相変わらず賑やかな後ろの2人に向かってグロウが飛んでいく。

「ちよつと、後ろの2人！舌噛まないでね！」

「「え?」」

ボールから飛び出したグロウは、その背中にプラスルとマイナンを乗せると後ろの2人を引っ掴み、船の外に飛び出す。

「うわわわわ！」

「マシロさアア……。」

そして、そのまま霧の中に消えていく。

これで、あつちは大丈夫でしょ。なんか叫んでたけど。

「チツ、逃げられたか。お前がチンタラしてるからだ。」

「ああ!? オレが悪いっての力?」

「仲いいねえ……。」

『なかよしなの?』

「多分ね。」

追いかけるのを諦めたホムラが女の横に並ぶと、燃え広がる炎で2人の顔が見えるようになる。そして、女の方と目が合うと、ニヤリと笑った。

「ふうん。たまたま同じニツクネームかと思ったら、懐かしい顔じゃないか。ホムラ、ソイツを持って先に帰ってな。」

「カガリ、いいのかよ? 今なら2人がかりでサクツとやれるぜ?」

「消化不良なんだ。このまま不完全燃焼で終わったらつまらないだろ?」

「そうかヨ。それなら、オレはさきに戻ってるぜ。」

ホムラと呼ばれた大男は、そう言ってそのまま船の外に飛んで行った。

「てつきり2人がかりで来ると思ってたよ。」

「言ったら、それじゃつまらないってさ。それよりも、随分と久しぶりだね。何年ぶりだろうねえ。」

「え?」

そう言われて相手の顔をじつと見る。が、全然思い出せない。

「ごめん、わかんないや。」

「まあ、ジョウトで一回会っただけだからね。あの時はまだコイツもロコンだったか。」

ジョウト……、ロコン……?

2つのキーワードから、ふと思い出したのは初めてかぶちーと一緒に戦った相手。

「ああ!!あの時の!!」



「思い出したかい？」

「思い出した！へえ、身長伸びたねえ。成長期？」

「そう言うアンタは変わんないね。あの頃と同じちっさいままだ。」

「グツ・・・！」

地味に気にしてる事を・・・。

いや、それよりも。

「でも、始末とか物騒なこと言うようになったんだね。人が変わったみたい、反抗期？」

「誰が反抗期だ。・・・別に対したことじゃない。アンタに会ってホウエンにやって来て色々やってきたけど、全てを焼き尽くするのが1番楽しくて美しいって気づいただけさ。」

「人って変わるものだねえ・・・。」

「今ではマグマ団幹部、三頭火のカガリって呼ばれてる。」

「そうなんだ、私はマシロ。残念ながら、マグマ団ってのは知らないんだ。」

「そうかい？まあ、関係ないさ。アンタはここで、燃え尽きる。」

そう言うのと、キュウコンの尻尾の先に炎が灯り周囲にひろがっていく。

そして、辺りをどんどんと炎の海で囲っていく。

あのキュウコン、グリーンのととは比べ物にならないぐらいの火力だね。まあ、比較対象が数年前のグリーンだからあてにはならないかもしれないけど。

それよりも、だよ。

「ちよつと、ここプラスル達の家なんだから派手に燃やすのはやめてくれない？なんなら場所変えてもいいからさ。」

「はっ！なんで野生のポケモンなんかに遠慮しなくちゃいけないのさ！」

鼻で笑って、全く話を聞いてくれない。

「さあ、覚悟はできてるかい？キュウコン！」

「ミスタ！」

キュウコンのかえんほうしゃとミスタのハイドロポンプがぶつか

り合う。

そして、驚く事に少しずつミスタが押されていく。

「これだけ燃えてるんだ。相性なんてひっくり返るさ。」

「そうみたい、だね。」

これだけの炎に囲まれてたら、ミスタの水技も威力が落ちる。それに、このままだと船のほうに燃え尽きるかも。

・・・あんまりやりたくなかったけど仕方ないか。プラスル達には後で謝っておこう。

「きらら、お願いしていい？」

『やるぞー、ちょうやるぞー!』

「さっきも言ってたそれ、ハウエンに来るときに乗ってた船の中で見たテレビのやつ?」

『そう!』

「そう・・・。」

相変わらずテレビの影響を受けやすい。

「とりあえず、超やるのは駄目だからね。船が沈んじゃうから。」

『わかったー!』

「何をゴチャゴチャと、言ってるのさー!」

「ミスタ、さがってて。」

そう言うと、大人しく後ろにさがったミスタ。

意地をはってそのまま戦い続けるかも、と少し思ったけどそんなこととはなかった。

そして、遮るものがなくなり目の前に迫るかえんほうしや。

「きらら、メテオビーム。」

が、きららがメテオビームを放つとかえんほうしや飲み込んでき、そのままキュウゴンごと船を貫通していく。

「なっ!?!」

メテオビームが収まった後には、倒れたキュウゴンに外まで続く通路が出来上がった。

・・・プラスル達、謝っても許してくれないかもしれない。

「・・・アンタ、そんなに強かったのかい?」

『どや〜!』

「まあ、それなりにね。それよりも、まだやる? 私としては帰ってくれたほうが助かるんだけど?」

「チツ……。このかりは今度返すよ。」

胸をはるきららを尻目に、キュウコンをボールに戻すとオオスバメに掴まれて出来上がったばかりの通路を飛び去っていく。

「ふう……。ミスタ、とりあえず残り火の消化お願い。」

ミスタはすぐに周りに水を撒いていく。

ミスタに消化を頼み周囲を確認していると、そのタイミングでグロウが帰ってくる。

サファイア達はどこかに置いてきたようで、背中に乗っているのはプラスルとマイナンのみ。その2体も新しくできた通路と惨状を見て目を丸くしている。

「あ……。赤いのは追い払ったけど、少し散らかしちやって……。そう言くと、ぴよんと両肩に跳び移ってきてポカポカと叩いてくる。」

「わっ! ゴメン、ゴメンってば!」

叩くと言ってもそれほど痛くもない。まあ、怒るに怒れないプラスル達の精一杯の抗議って感じ?

「ちゃんと片付けもやっていくから! そんなに怒らないでよー!」

—————

「マシロさんといえば、かぶちーの舞だろ!」

「いいや! 全部正面突破するミスタの強さったい!!」

マシロの後ろで言い合うルビーとサファイア。

「ちよつと、後ろの2人! 舌噛まないでね!」

「え?」

そんな2人を、グロウが掴むとプラスルとマイナンを乗せて船の外に離脱していく。

「うわわわわ!」

「マシロきアアン!!」

そして、そのまま海の上を漂いながらも口論をやめることはなかった。

「アンタが譲らないから、またマシロさんに助けられることになったみたい！」

「譲らなかったのはそつちだろ!?」というか、またってなんだよ!!」

「それはアンタに関係なか!!」

グロウに掴まれながらグググと顔を突き合わせるが、そのさなかルビーがハツとする。

「ねえ、えるるはいる?」

「え?呼べば来ると思うけど。」

「なら、早く呼んで。マシロさんなら大丈夫だとは思うけど、相手は2人なんだ。早くグロウを戻してあげないと。」

「ツツ・・・!!そうったいね。」

そういうやいなや、口笛をピーっと吹く。

しばらくすると、海の中から姿を現したえるる。

「グロウ、ここままでいいよ。・・・ボクの手持ちが混乱してなかったら、一緒に戦えたんだけど。」

グロウがえるるの背中にルビー達を下ろす際、そう呟く。

「アタシの手持ちですら大ヤケドったい。アンタなんか、助けにならないとね。」

「・・・戦う力を持っていることと、それを使うのは別の問題だよ。」

「・・・どういふことったい?」

「・・・キミには関係ない話だよ。」

サファイアは不思議そうに問いかけたが、ルビーはそれに答えなかった。

「またね、グロウ。プラスルとマイナンも、グロウと一緒に戻っても大丈夫かな。ボク達は戦えないから足手まといになるけど・・・。」

「あたし達はよか!早くマシロさんの所に戻るったい!」

そう言うと、グロウはプラスル達を乗せて船に戻って行った。

「wonderful!!マシロさんのグロウ、たくまשיきコンテストにでたらブツチギリで優勝なんだろうなあ・・・。ダイゴさんのメタ

グロスもカツコよかったし。」

「あー!!またダイゴさんの話しをしよんね!!ダイゴさんに会えんかったあたしへのあてつけったい!?!」

「それはキミの被害妄想だよ。それより、ダイゴさん。追いかけてもいいの?。」

「ぐぬぬ。．．．アンタと言い合いしとつてもしょうがなか。えるる、出発するったい。」

—————

## 82話

すてられ船での戦いから数日。

ようやくカイナシテイにやってきた。

「いやー、片付けに結構時間かかっちゃったね。マリさん、まだカイナにいるかな？」

あの後、燃えた木や植物を片付けて、風穴の空いた船の壁に流木やらなにやらを積み重ねて穴を塞いで、プラスル達と遊んでいたら数日が経っていた。

そしてようやくカイナにやってきたが、市場やらなにやらで人が多い。

「造船所って言ってたっけ。その辺の人に聞けば分かるかな。」

そう思い、適当に目に付いた市場の出店のおじさんに声をかけた。

「ねえねえ、ちよつといいい？」

「あいよーご入用は？」

声をかけた店はモンスターボールを取り扱っている店。ダイブボールにネストボール、ネットボール等。それに、シンオウから仕入れたって書いてあるヒールボールにダークボール。

多いねえ……。じゃなくて。

「ああ、ごめん。ちよつと聞きたいことがあって。カイナの造船所ってどこにあるかわかる？」

「造船所なら、港の方だな。つて嬢ちゃん、どつかで見たことがあるよ  
うな……。？」

「え、気のせいでしょ。」

ヤバい。何も考えずに声をかけたけど、色んな地方のモンスターボールを取り扱ってる店なら私のことを知っていてもおかしくはない。

「いや、記憶力には自信が……。あ!!」

「これください!!3個!!」

咄嗟に引つ搦んだのはヒールボール。とりあえず、その場に並んで

いた3個分の金額を押し付ける。

「お、おう。まいど。」

「それじゃ!!情報ありがと!!」

そう言うやいなや、手早く立ち去る。

全く、こんな人混みでチャンピオンなんて言われたらどうなるやら。ホウエン地方、血の気の多いバトルマニアとか赤いのとか青いのとかいるし。ただでさえすてられ船で時間取られたのに、余計なところで時間を使っていられないよ。

そんなこんなでボールを鞆にしまつて造船所に向かうと、ちょうどマリさんとダイさんが造船所のレポートをしていた。

「カイナシテイの造船所に何者かが侵入!!完成間もない潜水艇かいえん1号を奪い逃走しました。クスノキ館長のお話によると、造船所を襲ったのは赤い装束の一団だそうです。館長、現場監督のツガ氏他に、居合わせた民間人の少年も巻き込まれたという情報もあります。こちらがその映像です。」

近くにあつたモニターに目を移すと、そこには帽子をかぶった少年。

・・・なんか、ルビーによく似てる気がする。

「この少年は侵入者度共に潜水艇に乗り込むとそのまま行方が分からなくなっています。」

そしてそのまま行方不明、か。って、映ってる赤いのってすてられ船で会ったマグマ団と同じ奴ら?」

「あ、マシロちゃん!」

そんな事を考えていると、私に気づいたマリさんとダイさんが駆け寄ってくる。

「いつこちらに?」

「ついさつき。あつちもこつちも赤い集団で忙しいね。」

「あつちもこつちも?」

「少し前、私も会ったよ。追り返したけど。」

「ええ……。まあ、無事で何よりだわ。それより、今からクスノキ館長に会うからあなたも来て!あ、あなたの話も後で聞かせてね!!」

私の手を引いて事件の余韻で人が多い中、造船所の中を走り抜ける  
と館長らしき人に声をかける。

「クスノキ館長！」

「キミは？」

「ホウエンテレビのインタビュアーのマリです。内密の話があるので、少し時間をいただけますか？」

「え？ち、ちよつと!？」

そう言つてマリさんは返事も聞かずに館長の腕を掴むと、造船所の奥に引つ張り込んだ。

そして、周囲をキョロキョロと見渡し人がいないことを確認する。

「突然すみません。館長はデボンのツワブキ社長から届く部品の到着を待っていた……。そうですね？」

「何故、それを？」

「表向きでは野生のポケモンに襲われて部品は行方不明、となつてますが本当は違う。ツワブキ社長も謎の集団に襲われたんです！」

「何だつて!？」

「そのあたりの話、オレにも詳しく聞かせてくれないか？」

館長が驚いた声を上げた瞬間、物陰からなにやら聞き覚えのある声が聞こえてくる。

そして、姿を表したのは個人的にはあまり会いたくなかった人物。

以前出会ったバトルマニア。

「あなたは!!トウカの新ジムリーダー、センリさん!!」

「え、ジムリーダー？」

「ええ。この前ジムリーダーになったばかりだけど、実力は折り紙付き!!センリさんも手伝ってくれるなら百人力よ！」

いや、まあ、強いのは知ってるけどね。ジムリーダーだったかあ……。

「ツワブキ社長が襲われたのはトウカの森で、その時は青い集団でした。今回は……。」



「知りたいのはそんな事じゃない!!」

マリさんの話を遮るように大きな声を上げると、その肩を押しつける。そして、後ろにいた私と目があう。

「ん、キミは……。」

「ア、ドウモー。」

「……いや、今はそんなことよりも。」

今度は私に絡んでくることはなく、私達の横を通り過ぎると側にあった機械を操作する。

「海流の流れ、あとはかいえん1号の航行データにカメラのテープ。118番道路で消息不明、か。これだけあれば十分か。」

「一体何を!？」

必要なものが揃ったのか、センリさんはマリさんの言葉に何も答えずに造船所をでて船着場に歩いていく。

「オレは息子を探している。引越し早々家出をしたバカ息子だ!知りたいのは息子、ルビーの足取り。それだけだ。」

「えっ?ルビー?」

つてことは、やっぱりあの映像に映ってた少年はルビーで、実はジムリーダーの息子で……ルビーもバトルマニアに育ったのかなあ。

「じゃ、じゃあ侵入者と共に姿を消した少年っていうのは……!？」

「邪魔をしたな。」

そして、水上バイクに乗り込むとそのまま水の上を進んでいった。

……聞かせてくれて言いながら全部自分で調べていったよあの人。

「ちよっ?!ええ……。随分勝手な人ですねえ。」

小さくなつていく背中をみながらダイさんが呆然としている。

「確かに。でも、自分の息子が家出したら誰だつて心配するもんじやない?」

「う……。でも言い方つてもものが……。」

「それは同感だけだね。ま、自分の息子がどこにいるのか分からない状態なのに、ニュースにもなつてないひつたくりの事件の話を始められたら、苛立つのも分かるけど。」

ルビーの事を聞いたのに、赤とか青とか言われたらそりゃ怒鳴りたくもなるでしょ。

ん?.....怒鳴るほど心配してるってこと?

.....あれ、口は悪いけどただの心配性なパパの可能性が.....?

「マシロちゃん、ダイ。センリさんを追うわよ!」

「ええ!?本気ですか?」

「本気よ。あの人を追えばきつと息子さんとも接触出来るわ。」

「そうすれば、造船所を襲った組織のことも聞き出せる、と?」

「そうよ。」

マリさんは船着き場から歩き出すと、ダイさんが慌てて追いかける。

「で、でもアクア団って組織の名前も分かってるのにそんな必要があるんですか?」

「それは社長の事件だけでしょ。今回も同じ組織だとは限らないわ。思い出して、トウカの森で私達が出会ったのは青い集団。でも、今回の造船所を襲ったのは赤い集団。」

「ツツ!!2つの組織が暗躍している!」

「そゆこと。」

「それじゃ、マシロちゃん。センリさんを追いながら、マシロちゃんが会ったっていう赤い装束の話聞かせてもらえるかしら?」

「オツケー。」

造船所を後にした私達は、マリさんの車に乗り込んだ。

—————

「じゃあ、マシロちゃんが会ったマグマ団って奴らの目的は分からない

かったのね。」

「うん。何かを持ち出した様な事は言つてたけど。」

「とりあえず、アクア団とマグマ団の2つの組織が存在してるのはわかりましたね。」

「そうね。局からも長期取材という形で自由に動く許可ももらったし、焦らず目の前の事から追つていきましよう。」

運転席に座るダイさんに、助手席下のマリさん。そして、後部座席に私が座る形。

そんな中、ポワルンが少しだけ光りながら姿を変えると、ポツポツと雨が降り出し、雨脚は一気に強くなり土砂降りになる。

「酷い雨ですね。……ってポワルン!?あぶな!ちよっ、暴れるな!」

「待って、ダイ。停めて。何だか、外に出たがってるみたい。」

マリさんに言われて、道の端に車を停めると外には天気研究所の看板。奥には建物の影。

「天気研究所……?それに、あれは!」

ピカツと雷が鳴り、一瞬だけ空が明るくなつたときに見えた。天気研究所の屋上、胸ぐらを掴まれたルビーと、ルビーを持ち上げるゼンリさんの姿。

「あの少年、防犯ビデオに映つてた……!!ってマシロちゃん!」

それが見えた瞬間、私は車から飛び出す。

「行ってくる!ミスタ!」

そして、ミスタをボールから出すとその背中に飛び乗った。

—————

マシロが天気研究所にくる少し前。

潜水艇から逃げ出したルビーは、道中で出会った海パンさんと一緒に、天気研究所に逃げ込んでいた。

「ザングースとハブネークから逃げる一心で飛び込んだけど、誰もいない。無人なのかな?」

「夜だからだろ?気象の記録は機械が勝手につけてるらしいぜ。」

「へえ。……あれ?ZUZU?」

海パン男と話していると、姿が見えなくなったZUZU。その姿を探して周囲を歩いていると足元にポロックが落ちている事に気づく。それを拾いながら追いかけていくと、どんとと屋上に続いている。

「なんでこんなに・・・？しかも、ZUZUの好きな味に調合してある。まるで、ボクが作ったポロックみたいだ。」

「そうだ。お前の作ったポロックだ。造船所でばら撒いただろ？それを拾ってきた。」

ポロックを拾いながら歩くルビーの背中に、低い声がかげられた。その声はルビーがよく知る、そして今一番会いたくない人物、センの声。

「なんで、ここに・・・？」

「親をなめるな。お前の行動など何もかもお見通しだ！」

「グツ・・・!!」

そう怒鳴ったセンは、ルビーの胸ぐらを掴み上げる。

「離・・・せ・・・!!」

「離せだど?!親に向かって何だその口の聞き方は?!」

怒鳴るセンをZUZUがなだめようとするが、直ぐ側のヤルキモノに押しのけられる。

「どれだけ怒られてもいい、その覚悟ができているから。」

「家出なんてバカなマネをしたんじゃないのか!」

バキツ、と掴み上げたルビーを殴り飛ばし、階段の下に突き落とす。

「お、おい!?!大丈夫か!?!」

ルビーの姿がないことに気づいて周囲を探していた海パン男が、突き飛ばされたルビーに気づくと慌てて駆け寄り声をかける。

「どうした?文句があるならかかってこい!!」

「あわわわわ、なんだあの超こええ人は!?!」

そして、屋上にいるセンの見てビビった声を出す。

「ボクの、父です。家出中のところを見つかっちゃって・・・。」

「連れ戻されそう、ってわけか。こういう時はサッサと謝っちゃまえ! あんなに、こええんだ、それがいい!!」

(そう、ボクには今3つの選択がある。1つは海パンさんの言うようにごめんなさいをすること。2つ目はこの場をやり過ごして逃げる。そして3つ目……っ!!)

「ケッキング!!」

「うわああ!!」

考え事をしているルビーを、足元の階段ごと持ち上げる。

階段の先にいたルビーは、持ち上げられたことによって逃げ場がなくなってしまう。

が、そんなルビーに救いの声かけられる。

「随分と派手にやってるねえ。ルビー、大丈夫？」

「え？マシロさん？なんでここに？」

「ほら、手を貸して。っと、ミスタの上に2人は狭いね。グロウ。」

そう言つてルビーに手を差し出したマシロは、グロウの上にルビーを引っ張り上げる。

「またキミか。これは親子の問題だ。口を挟まないでもらおう。」

「私もそうしたいんだけどね。ルビーが困つてそうだから思わず、ね。」

下にいるセンリに軽く返す。

「で、とりあえず手を貸したけど状況がよくわかってないんだよね。」

「……行き当たりばったりですね。」

「まあね。だからさ、ルビー。」

苦笑いを浮かべて、言葉を区切る。

「君はどうしたい？家出してまでやりたいことがあつたんでしょ？このまま逃げてもいいし、なんなら私がルビーのお父さんの相手をしてもいいし。」

「それは……。」

(マシロさんが手を貸してくれるなら、今の状況も簡単にひっくり返る。でも、それでいいのか……？マシロさんの強さに憧れて、自分を鍛えて。もう2度と誰かを怖がらせることがないようにたくさんのコンテストに出場してきた。そして、ホウエン地方であの子と競争している途中なのに、まだコンテストも出場していないのに。それな

のに、そのマシロさんに、助けてもらう？」

「・・・そんなこと、できる訳がないよね。」

「ルビー？」

「いえ、決めました。こんなところで逃げてなんていられない。ボクは、父さんと戦います！だから、ごめんなさい。マシロさんの手は借りません。ボクは、ボクの力で父さんを認めさせる！」

「そっか。」

「話をついたか？」

2人のやり取りを黙って聞いていたセンリが声を上げる。

「うん。マシロさん程強くない、マシロさん程美しくもない。まだまだ醜い姿かもしれないけど、今ここで父さんを超える！行くよ  
COCO！NANA！」

そして、グラエナのNANAとエネコロロのCOCOを繰り出しグロウの背中を飛び降りると、階段を駆け降りセンリに向かって走り出した。

「その海パン!!どうなってるのよ!」

「オレだって知らねえよ!っていうかアンタ誰だよ!」

「階段が壊れてる。これじゃあ屋上には行けませんね・・・。」

言い合う声が聞こえて下を見ると、海パンの人とマリさんとダイさんが屋上を見上げていたのでそつちに飛んでいく。

「マシロちゃん!?あの2人はどうなってるの!!」

「壮絶な親子喧嘩中、って感じ?」

「止めなかつたんですか!」

「ルビーが覚悟決めちゃってたからね、邪魔するのも悪いし。」

「ちよつと!それで2人になにかあつたらどうするのよ!!組織の情報が聞き出せなくなるじゃないの!!」

「やばそうなら止めるから大丈夫。とりあえず、乗って。」

グロウに3人を乗せると屋上の上に飛び上がる。

「止めるからって、そんな簡単に・・・。」

「おや?君達は・・・?」

そして、マリさんが話したそうとした時その後ろから声がかけられる。

声をかけた人物はチルタリスに乗った2人組の女性。1人は飛行服にゴーグルが一体になった帽子を被り、もう1人は特徴的な赤い髪にヘソ出しスタイル。

・・・この雨の中、寒くないのかな?

「え、ジムリーダーのナギさんとアスナさん!?どうしてここに!」

「いや、トウカジムにセンチさんが居ないからって探しに来たんだ。届けも出さずにいなくなったから、苦情が殺到してね。」

「あたしは修行でジムを空けすぎておこられちゃって、アハハ・・・。」  
ナギと呼ばれた方は静かに答え、アスナと呼ばれた方はそう言っって頭をかく。

ハウエンのジムリーダー、自由すぎない?

「それで、君達の方は？」

「わたし達はハウエンテレビの者で、下で親子喧嘩をしてる2人を追いかけてて。」

「オレは違うけどな。」

「親子喧嘩？」

飛行服の人は海パンの人の言葉は聞かずに、チラツと天気研究所の屋上を見る。

「あの子がセンリさんの息子、か・・・。」

「親子喧嘩って、止めなくていいんですか？」

「好きにやらせてあげてよ。いざとなったら私が止めるからさ。」

「止めるって、新人とはいえ片方はジムリーダーだよ!?そんな事できる訳・・・!」

「待った、アスナ。」

焦った声を遮ると、ナギと呼ばれた人が私をじっと見つめる。

「君がそう言うならこの場は任せるよ、マシロ。」

「うん、ありがと・・・って、私のこと知ってるの?」

「これでも、ジムリーダーだからね。他の地方の事でも、それなりに知っているさ。」

「有名人なんですか?」

「そうだね。ジョウト・カントー地方のチャンピオン、と言えばそれなりに有名人になるのかな?」

「ええ!？」

流石にジムリーダーは私の事を知ってるか。後ろの人は知らなかったみたいだけど。

「そういや、センリさんも私の事を知らなかったね。新人だからかな?」

「ま、そういう事でここは大人しく見守っててよ。」



「NANA、はかいこうせん!!COCO、アイアンテール!!」

センリと対峙したルビーは、先制とばかりに攻撃を繰り出す。が、はかいこうせんはケツキングに、アイアンテールはヤルキモノに受け止められる。そして。

「それで戦っているつもりか？その技は両方とも、オレが教えた技だっ!!」

センリの言葉と共に弾き返されるNANAとCOCOは、吹き飛びながらも体制を立て直すとルビーの左右に着地する。

「いいや、ここからだよ。ZUZU、マッドショット!!」

「む!!」

階段の下、センリの死角から雨どいを通して、センリの真横から放たれるマッドショットは意表を突き、センリ共々、ヤルキモノとケツキングを泥で固めていく。

「ぐっ!!きあいパンチ!!」

が、下半身を固められながらもきあいパンチでマッドショットを打ち返していく。

「COCO、アイアンテール!」

それを更にアイアンテールで弾き返すルビー。動けないセンリとは裏腹に、ルビーは弾き返されるマッドショットを躲すこともできる。そのお陰でダメージは少ない。

そして、土砂降りの雨のおかげで泥や水が無尽蔵に供給される。状況は少しずつルビーに傾いていた。

「ケツキング、ビルドアップ!」

だが、力を溜め込んでいたケツキングがセンリの体を固めていた泥を吹き飛ばす。そして、先程ルビーを持ち上げた階段を持ち上げ、振り回そうとする。

「しばらく大人しかったのは力を溜め込んでたから、だよな。でも、それはこっちも同じだよ!NANA、はかいこうせん!!」

ルビーの隣で力を溜め込んでいたNANAが一気にそれを解き放つ。

「ぐおおおお・・・!!」

NANAの放ったはかいこうせんはケツキングが持ち上げた階段を粉碎し、身動がとれないセンリごとケツキングとヤルキモノを飲み込んだ。

「ハア：：ハア：：。あれをまともに受けたら、流石に父さんでも：：え？」

息を整えながらセンリがいた場所に歩いていくと、そこにあつたのは倒れたセンリの姿ではなく床に空いた大穴。

「まともに受けていたら、な。ヤルキモノ、きりさく！」

「下つ・・・！うわあああああ！！」

そして、下から聞こえた声と同時にルビーの足元が細切れにされ崩れ去る。

（くそっ！！階段は囷で、本命は床に穴を空けて下に逃げること！！）

「COCO、NANA！！」

「頭を冷やすんだな。ケツキング、ふぶきー！」

足場が崩れたルビー達は空中で体制を立て直そうとするが、センリはそれを許さなかった。

COCOとNANAは身動きの取れない空中で氷づけにしていき、さらにルビーの体を凍らせていく。

「ぐっ・・・！！MIMI、ミラーコート！！」

そんな中でもルビーはMIMIヒンバスを繰り出し、自身に迫るふぶきから身を守ることが出来たが、下の階に着地したときにはCOCOとNANAは氷づけにされ戦闘不能になる。

「自分の身は守ったか・・・。だが、そのヒンバスだけでまだ戦うつもりか？」

「だけ、じゃないよ。ZUZU！！」

ルビーが叫んだ瞬間、上から飛び降りてきたのはZUZU。

階段を引つ剥がされたことで屋上に行けなかったが、足場を崩された下の階に落ちたことで、ルビーの目の前に飛び降りることができるようになり、センリと対峙する。

「父さんが下に落としてくれたお陰で、ZUZUがここに来られるようになった。そしてZUZUは、父さんの知らない新しいボクの手持

ち。」

「新しい手持ちなら、手の内が分からない。そう言いたいのか？」

「・・・時の流れは移り行けども、変わらぬその身のたくましさ。身につけたるは、不屈の心！」

ルビーの言葉と共に、その体を輝かせるZUZU。

「・・・進化か。タイミングに気づいていたのか？」

光が収まると、そこにいたのは一回り大きくなった体のZUZU<sup>ラグラーズ</sup>。

「ただの偶然だよ。でも、ZUZUが応えてくれたんだ。こんなところで、負けられない！ZUZU!!」

「ケツキング!!」

「うおおおおおおお!!」

2体がぶつかり、衝撃が当りに広がり建物にヒビが入っていく。が、そんな惨状を気にすることなく2人は戦いを続ける。

「グツ・・・!!」

「進化したとはいえ、ケツキング相手に力勝負は分が悪いだろう？諦めろ。」

押し負け、弾かれたのはZUZUの方。

それでもルビーは諦めない。

「まだまだよ！この天気が、ボクに味方してくれる！ZUZU、だくりゆう!!」

「これは!!」

放たれたのは、センリの視界を覆うほどのだくりゆう。

「ならば、ケツキング！ふぶき!!」

が、センリのケツキングが建物を破壊しながら迫るだくりゆうを一瞬で凍りつかせる。

「そう来ると、思ってたよ!!ZUZU!!」

「ム・・・!!」

ルビーが叫んだ瞬間、ZUZUが凍っただくりゆうを叩き割りケツキングに迫る。

「ケツキングの特性は、なまけ。攻撃した後はしばらく動けない。だから屋上でも、力を溜める必要があった！」

「・・・そうだ。だが、まだこちらにはヤルキモノが・・・！これは・・・！！」

センリがヤルキモノに目を向けると、M I M Iのひかりのかべによって囲まれ、身動きが取れなくなっている。

「いつの間に・・・！！」

「さっきのたくりゆうにのって、ね！これでZ U Z Uを止められるポケモンはいない！いけつZ U Z U、からげんき！！」

振り下ろされたZ U Z Uの腕はケツキングを建物の床に叩き伏せる。それと同時に、建物にピキピキとヒビが入る。

「からげんきも、オレが教えた技・・・。強くなったな、ルビー。」

「コンテストだけが目標じゃ、ないから。」

「フツ。・・・そうか。」

そして、それは2人が話している間にどんどん広がっていきルビーとセンリの足元にまで及んでいく。

「不味いな・・・。ルビー！ポケモン達をボールに！」

「う、うん！！」

それに気づいたセンリが顔色を変えて叫び、2人が慌ててポケモン達をボールに戻した瞬間足元が崩れた。

「ぬおっ！！・・・む？」

「うわあ！！・・・あれ？」

宙に放り出された2人が、落下すると思った瞬間。

ナギのチルタリスがセンリを、マシロのグロウがルビーを受け止める。

「やるじゃん、ルビー。」

「マシロさん・・・。ありがとうございます。」

「黙ってジムを空けたと思ったら、こんなところで親子喧嘩？」

「またあんたか・・・。」

「ハア・・・。あっちの子は、アンタに似ず素直にお礼を言えていい子だねえ・・・。」

ルビーが優勢かと思つた戦いは、建物が崩壊したことで中断となり、地上に降りた私達は、向かい合う親子を黙って見守っていた。

「ルビー、何故誕生日を引越しの日に選んだか分かるか？」

「・・・え？」

「コンテストへの挑戦を許そう。・・・そう言おうと思つていた。」

そして、静かに話すセンリさんの言葉によつぽど驚いたのか、口をパクパクさせ言葉にならない様子のルビー。

驚いて声も出ないつて、きつとこういう事を言うんだらうねえ。

「お前ももう11。自分の道は自分で決めるものだ。・・・オレにはコンテストの良さはなにも分からんがな。」

「・・・父さん。」

「男が自分で決めたことなら、やり遂げるまで帰ってくるな！それと、カイナで派手にバラ撒いたらしいが、自分の道具はちゃんとしまっておけ。」

「あ、ありがとう。」

そう言つてポロツクケースをルビーに手渡すと、ルビーに背を向ける。

「・・・それから、たまには母さんに連絡を入れろ。心配をかけるんじゃない。」

そう言つと、今度は何故か私の前に歩いてくる。

「君にも、礼を言う。」

「え？」

「さつき、ルビーを助けてくれただろう？・・・遅くなつたが、私はセシリ。名は何と言う？」

「マシロ。」

「ありがとう、マシロくん。」

それだけ言つと、チルタリスの背中に乗り込む。

「ねえ？コンテストの挑戦を許すつもりなら、なんで追いかけたの？放つておいても良かったんじゃない？」

「勝手に居なくなつたら心配するだろう。それに、自分の口で伝えよ

うと思つていたことだからな。」

「なら、別にこんな親子喧嘩をしなくても良かったんじゃない……?」

「ルビーの覚悟を確かめる為だ。」

コンテストへの挑戦を許すのなら、わざわざジムを空けてまで自分で探す必要はない。もしかしたら、特別な理由でもあったのかと思つて聞いてみたんだけど……、そんなことはなかった。

「ちよつとルビー!!君のお父さんって、口が悪くて肉体言語派だけど、もしかして意外と子煩悩?」

「ボクも驚いてますけど……。どうやらそうみたいです。」

スーツとルビーの横に移動して小さい声で話していると、センリさんを載せたチルタリスが飛び立っていく。

「ありがとう、父さん。」

その背中にルビーは小さくお礼を言っていた。

「なによ、意外といい父親じゃないのよ。」

「全くだぜ!」

「でも、あれが父親だとルビーが家出したくなる気持ちも分かるよね。」

「「確かに!!!」」

その横で私達は妙な一体感を出していた。

—————

「世話をかけたな。」

チルタリスに乗ったセンリが口を開く。

「全くだよ。息子を探すなら、せめて届け出ぐらいだしてくれないと。」

「タハハ……。ごめんなさい。」

「ハア……。アスナはもういいよ。」

センリを攻めたつもりが、アスナが謝ることになってしまったため息をついた。その様子を気にすることなく、センリは言葉を続ける。

「いつから上に?」

「最初から、かな。」

「意外だな。止めなかったのか？」

「私はそのつもりだったんだけど、さっきのマシロって子に好きにさせろ。ってね。」

「あの子に言われたとしても、ナギさんなら途中で止めに入るかと思っただけです。」

「・・・私も、そう思っていたさ。」

「??」

少しだけ重たくなった口調に、アスナは首をかしげる。

「アスナは気づかなかったか？あの子、あの親子喧嘩を見ながらずっとこちらを気にしていた事に。」

「え？」

「きつと、邪魔をしようとしたら容赦なく私達を攻撃してきただろう。そんな目をしていた。」

「え〜？あんな可愛い子が、ですか？」

「あの子は何者だ？」

「ジョウト・カントー地方のポケモンリーグチャンピオン。」

「フツ・・・、そうか。やはり、只者ではなかったか。」

「ハイハイ。あの子の話は置いといて、あなた達は一旦本部に顔を出してもらおうよ。」

ナギは問題児の新人ジムリーダーを連れてポケモンリーグ協会本部に向かっていった。

## 84話

ルビーの壮大な親子喧嘩のあと、海パンさんと別れた私達はダイさんの運転する車に乗ってシダケタウンに向かっていた。

ちなみに、あの後天気研究所は崩壊した。

あれ、どうするんだろう？急な集中豪雨で崩れたとか、そういうことにするのかな？

「じゃあ、あなたは巻き込まれただけで赤い奴ら・・・、マグマ団の事は詳しく分からないのね？」

「はい。カイナでも巻き込まれただけなので。」

「マリさん、これからどうするんですか？ポワルンもルビー君に懐いちゃって・・・。」

「そうね、このままルビー君に預けちゃいませうか。」

「ええ?!いいんですか!？」

「いいんじゃない?これだけポワルンを連れ回しているんだもの、今更でしょ?。」

「怒られても知りませんよ・・・。」

と、あんな感じで前の席で2人が話し込む。

その隙に、ルビーが私に話しかける。

「ありがとうございます、マシロさん。船といいさつきといい、グロウにも助けられっぱなしですね。」

「船・・・?あ!もしかしてすてられ船に居たのってルビーだったの?」

「そうです。・・・気づいてなかったんですか?」

「あー、うん。久しぶりだったし、声だけだったからね。」

そっか。あのときさらが言ってたサファイア以外の知り合いの2人は、カガリとルビーのことだったのか。

「ってことは、サファイアと言い合いをしてたのもルビーか。相変わらず仲良しなんだねえ。」

「聞こえてましたか・・・。」

恥ずかしそうに視線をそらしたと思えば、不思議そうにこっちを見



る。

「あれ？サファイアの事も知ってるんですか？それに、相変わらずって・・・？」

「そりゃ知ってるでしょ。あの時一緒に居たんだから。」

「あの時って・・・？」

「ルビーとサファイアがボーマンダに襲われた時だよ。」

「・・・・・・・・・え？」

そう言うと、何故かすごい驚いた顔をするルビー。

え、なんか変なこと言った？

「どしたの？」

「いえ・・・。なんでも・・・ないです。」

「??？」

なんでもない様には見えないんだけど、私何か変なこと言ったかな？

何やら俯いたまま考え込んでたし・・・。ありや、顔の前で手を振っても反応しないや。

「疲れたんじゃないですか？派手な親子喧嘩だったし。」

「そうかなあ・・・。」

話しかけるタイミングを伺っていたのか、ルビーが黙り込むと前の席から声をかけられる。

「それよりマシロちゃん。あなたが会ったマグマ団は三頭火って言ったのよね？なら、マグマ団には少なくとも3人のリーダー格がいるってことよね？その3人がリーダーなのか、その上にまだ誰がいるのか・・・。」

「どうなんだろう？今度会ったら聞きてみるよ。」

「今度って・・・。あんな連中にまた会って無事で済む保証なんて思うんですけど・・・。」

「ま、何とかなるって。」

「軽いわねえ・・・。」

その後、ルビーが会話に混ざらないまま私達を乗せた車はシダケタウンに向かっていった。

そして、シダケについた途端、ルビーはコンテスト会場に飛び込んでいきサラッと全部門を制覇していくのを私達は観客席から眺めていた。

「ぶつちぎりですね。」

「流石ね。」

「コンテストに疎い私でも分かるぐらいには圧勝だねえ……、ってあれ?」

コンテストが終わった途端、会場の外に走り出したルビー。

なんか、車で話した後から情緒不安定だね。なにかあったんだろうか?」

「周りの人もほとんど外に出たみたいだし、わたし達も出ましようかなにやらルビー君も外に走って行っちゃったし。」

そう話しながらコンテスト会場を出ると、ルビーの姿はすぐに見つかったが、何故かルビーはバスに乗り込もうとしていた人をドミノ倒しにしていた。

「ああもう、すみません!!ちよつと、ルビーくん!?何してるの!」

「ちよつと知り合いがいて。ほら、この人なんです……けど……。あれ?ミツルくん、そんなに髪長かったっけ?……っていうか女の人?」

その光景を見た瞬間、謝りながらルビーに駆け寄るマリさん。

そんな中、ルビーはドミノ倒しになった人の中から1人を引っ張り起こして紹介しようとする。

が、ルビー本人が何故か困惑していた。

「あー……。ごめんなさい、人違いでした……。」

「いいのよ。あながち、間違いでもないし。あなた、ルビーくんよね?わたし、ミチル。ミツルのいところでよく似てるっていわれるの。それに、トウカでの出来事聞いてるわ。ミツルも喜んでたもの。」

「いどこでしたか……。」

「ま、それでもこれはやり過ぎだと思っけとね。」

笑いながらルビーのやった事を許すミチルさん。

心が広いねえ。・・・つと、それよりも。

「とりあえず、話は後にしない？ここじゃ、ドミノにした人の視線が痛いんだけど・・・。」

「あ・・・。」

私の言葉でようやく周囲の視線に気づいたのか、私達はミチルさんを連れてその場を後にした。

「あれ、何かあったんですか？」

「いいから、早く車まわして。」

「??？」

あとからやってきたダイさんは、頭に？マークを浮かべていた。

「——————」

「つまりルビー君は、ミチルさんをミツル君と間違えたのね？」

「ハイ・・・。あまりにも似てたもので。」

「フフ、よく言われるの。それに、さっきも言ったけどわたしもルビー君のこと、ミツルから聞いてから会えてよかったわ。ミツルも喜んでたし、病気も少しづつ良くなっているの。」

「それで、ミツル君は？」

「検査のために、大きい病院のある町に移ったわ。・・・今日の朝に。」

「ええ~~~~~~~~。」

ちようど今朝に出発したと聞いて、ルビーがヘナヘナと崩れ落ちる。

まあ、友達と会えると思っただけなら入れ違いになったって知ったらそうなるか。

「まあ、いいじゃん。友達の病気が少しずつ良くなってるんでしょ？」

「そうですけど・・・。」

『シダケとカナズミを繋ぐために開発されていたカナシダトンネルですが、たまたま建設現場で落盤事故が発生したとのことです。現場は混乱しており、いまだ被害の正確な状況はわかっていません。』

そう話していると、車に備え付けられたTVから緊急のニュースが

流れる。

「カナシダトンネル!?うちの近くです!!」

「ダイ!行くわよ!」

「合点!!」

ミチルさんが驚くのと、マリさんが声を上げたのはほぼ同時に、すぐさま返事を返すダイさん。

「さすが、ジャーナリストだねえ。行動が早い。」

「あの、ボクは・・・?」

「あなたも来るのよ!ミチルさんも、このまま一緒に行きましょう!」  
「はい!」

こうしてカナシダトンネルに向かった私達。

現場に着くとマリさんとダイさんは車から降りると、取材の準備を始める。それを眺めていた私とルビーとミチルさんはその場にいた作業員に声をかけられる。

いや、私達というかミチルさんにな。

「あ、ミチルさん!!今連絡しようと思ってたんだ。今さつき、またトンネル内の岩盤が崩れて、リュウジさんとの連絡が途絶えた!!」

「え・・・?」

聞いた途端、息を呑むミチルさん。

「リュウジさん?知り合いかな・・・つとおお!」

「ミチルさん!」

そして、後ろの席から運転席に乗り込むと車を急発進させてトンネルを突き進む。が、落盤してたせいで思うように進めず、すぐに車を止めそのまま車を降りて叫びだす。

「リュウジさん!!リュウジさあん!!」

「急にどうしたの?」

「リュウジさんが・・・!?この現場で働いてる私の婚約者が中に!!」

「婚約者!」

あー、婚約者かぁ……。婚約者が行方不明になったら、そりゃ慌てるよね。

「ちよつと、ミチルさん!」

「急にどうしたんですか!？」

「婚約者が中に取り残されてるんだって。」

「ええ!？」

「そりや大変だ!」

車を追いかけてきたマリさん達と話す間も、ミチルさんは声を上げ岩をどかそうとしている。

「ミチルさん、無茶よ!あたし達素人にできることなんて……。」

「できます!ZUZU!!」

マリさんの声を遮り、ルビーが車から降りるとZUZUを繰り返す。

お、ルビーになにか考えがあるっぽい。

「ZUZUの頭のヒレは優秀なレーダーなんです。岩盤を退かせることができなくても、水や空気の流れから人や物の存在を感じ取ることができます。」

おお、便利だね。

「行け!ZUZU!!」

そう言つてZUZUが地面に潜った瞬間、ルビーは一目散に逃げ出す。

そして、他の3人はZUZU掘り起こした泥を頭から被った。

「ルビー、1人だけちやつかり泥が被らないように逃げたね。でも、まあ……。リュウジさんは無事に見つかったみたいだね。」

マリさん達は1人だけ逃げたルビーに白い目を向けるが、人を抱えて戻ってきたZUZUを見て顔色を変える。

「リュウジさん!!ありがとう、ルビー君!」

「いえいえ。これでバスの件は無かったことにしてください。あ、あとコンテストで審査員をするときはボクに投票してくださいね。」

そして、ルビーの言葉を聞いて今度は呆れ顔になるミチルさん。さつきから表情がよく変わるねえ。

車の中から眺めながら、そんな事を思っている時だった。

ドドドドド!!

と、轟音と共に洞窟が崩れだした。

「うわああ!!」

「きやああああ!!」

マリさんや他の作業員が悲鳴を上げ、崩れる場所から離れていく。「やれやれ。せつかく人払いもかねてドーンとトンネルを崩してやったのに、紛れ込んだ奴がいるとはねえ。」

そして、崩れた土砂の上に現れたのは赤い装束の集団。カガリとたくさんの下っ端連中。

下っ端達はそこから飛び降りるとマリさん達や作業員を取り囲むと、ポケモンを繰り出していく。

崩したってことは、最初の崩落もマグマ団の仕業かあ。赤いのも青いのもろくなことしないね。おっと、見てる場合じゃないか。

「ん・・・?アイツは・・・。予定変更、だね。」

車から出ようとした瞬間、オオスバメに掴まれ飛び上がったカガリがルビーに向かって一直線に飛んでいく。

「うわあ!?!」

「少し、付き合ってもらおうよ!」

そして、ルビーを引っ掴むとそのまま洞窟の奥に飛んでいくと、その姿を見たZUZUもその後を追っていく。

「ありや。ルビーだけ連れてったけど、ファンだったのかなあ。」

「ちよつとマシロちゃん!?!車から出てきて助けてよ!!」

窓からルビーの後ろ姿を眺めているとマリさんに急かされて、急いで車から降りる。

「まあ、センチさんと互角に戦ってたし大丈夫だと思っけど、できるだけ早く片付けようか。」

「くっ……。離せっ!!」

「無駄だよ、やめときな。」

自身を掴む手を引き離そうともがくルビーに、カガリは冷たく答える。

「あたしの手袋から、今はザロックとネコブの汁を混ぜ合わせた液体が出てる。粘性の高い天然の接着剤さ。」

「なんで、ボクを!?!」

「すつとぼけんじゃないよ。捨てられ船でも、カイナでも会ってるってのにさ。覚えてなかったの、かい!!」

言い切ると同時にルビーを地上に放り投げる。が、地面にぶつかる前にルビーを追いかけていたZUZUがその体を受け止めた。

「ありがとう、ZUZU。」

「なら、今度は忘れないように覚えときな!あたしはマグマ団三頭火のカガリ!さあ、お前の力見せてみな!」

「ZUZU!」

そう言つてキュウコンを繰り出すカガリ。

ルビーに襲いかかるキュウコンの爪を、ZUZUが受け止める。

「なんだい、潜水艇だと人目を避けるようにしてたから、人気のない所まで連れてきたつてのに。その様子だと気にする必要はなかったかい?」

「……。随分と詳しいですね。まるで見てきたみたいだ。」

「似たようなものさ、ほら。」

カガリは頭のツノを引き抜くと、手に持った紙をあぶる。すると、そこにはルビーの顔が浮かび上がってきた。

「あたし達の装束には、このライターが仕込まれている。おまえが関わってきた事件も、この記憶の炎を共有することでなにもかもお見通ししてわけさ。」

「なるほど……。それなら、隠す必要はなさそうですね!」

ルビーは手持ちのポケモンを全て繰り出すと、目の前のカガリをキツと睨みつける。

「いいねえ、その目つき。ようやく本気でやりあえるって訳だ!」

「—————」

「さて、こんなもんでしょ。」

目の前にはマグマ団の下っ端でできた人の山。

洞窟が崩れたらまずいから、きららにはお休みしてもらったら結構時間かかっちゃったよ。

「一人で全部片付けちゃいましたね……。」

「流石、マシロちゃん。」

「所詮下っ端だしね。それより、他の作業員は皆逃げてるね。エライエライ。」

「あとは、連れて行かれたルビー君なんだけど……。これじゃあ、車で通れないわね。」

そう言つてマリさんが見つめるのは、マグマ団が崩した岩で塞がれた道。

「これぐらいなら、ミスタでもぶち抜けるかな。」

「え?」

振り返つたマリさんの視線の先には、力を溜めはじめたミスタ。

「ちよつと、マシロちゃん!? どうするつもり!？」

「瓦礫はどうにかするから、マリさん達は車の準備をしてて。」

「……!! ダイ、車!! 急いで!」

「は、はい!!」

ダイさんは車を回し、マリさんがそれに乗り込む。

そうして準備をしている間にミスタの準備も整う。

「ミスタ、メテオビーム!!」

溜めたエネルギーを一気に放出すると、メテオビームが目の前の瓦礫の山を吹き飛ばしながら反対側の手口まで突き抜けていく。

そして、メテオビームが通り過ぎた後は瓦礫がキレイになくなり、車が走れる道ができ上がった。



「凄いですねえ……。一瞬で車が通れる道ができちゃいましたよ。」  
「ダイ、行くわよ！」

「了解！」

そう言うのと、ダイさん達が乗った車が瓦礫のなくなった道を一直線に走っていく。

「それじゃ、私達もいこつか。ミスタ、お願い。」

私はミスタに飛び乗ると、ダイさんが乗った車を追いかけた。

—————

一方、ルビーとカガリの戦いは少しずつカガリの方に傾いていた。

「あたしのキュウコンは、9つの尾から9つの火球を放つことができ  
る。アンタのポケモンで、こいつを全部撃ち落とすのは無理だ。」

「くそっ……!!」

「ドンドン火力を上げていくよ！キュウコン、かえんほうしゃ!!」

そして、尻尾の炎だけでなくキュウコンの口から放たれたかえんほうしゃがルビーとポケモン達を飲み込んでいく。

「うわああああ!!」

かえんほうしゃがおさまると、地面に膝をつくルビーと地面に倒れ伏すルビーのポケモン達。

「アンタが潜水艇で戦った相手は、熱によって相手に幻覚を見せる精神攻撃の使い手。アイツが相手なら気合でなんとかできたかもしれないけど、あたしはそんなまどろっこしいのはキライでね。ただひたすら、相手を焼き尽くす。」

「……………」

膝をつきながらルビーはカガリを睨みつけるが、そんなことは意に介さずルビーにツカツカと歩み寄りながら、カガリは言葉が続ける。  
「おまえ、コンテストに熱心らしいね。あたしもキレイなモノは大好きだよ。でも、こんなにリボンが美しさの象徴？そんなはずないだろ。この世で最も美しいのはすべてが炎に飲み込まれていく瞬間。」

そう言っただけで、リボンは灰になっていく。

それを見ることもせず、カガリは膝をつくルビーに視線を合わせる。

「アンタ、あたしの仲間にならないか・・・ツツ!!」

そして、ルビーに声をかけた瞬間その場を飛び退くと、その場をメテオビームが通り過ぎていった。

「今のは・・・!?まさか、マシロの・・・!?」

(仲間になれ?それにマシロさん・・・!?いや、今はそれよりも。)

カガリはメテオビームが放たれた方を見て小さく呟き、その間にルビーは自身のポケモンたちに駆け寄る。

「みんな・・・!!」

(ひどいやけどだ。水タイプのMIMIやZUZUまで。この人は強すぎる。でも、今のがマシロさんの攻撃なら・・・!!)

「さあ、どうするんだい?」

ルビーはZUZU以外のポケモンをボールに戻す。

「・・・時の流れは移りゆくけども、変わらぬその身のたくましさ。ほとばしりたるは怒りの激流。」

カガリの言葉には答えずルビーは小さく呟く。

「・・・そんな話はお断りです!ZUZU、だくりゅう!!」

そして、大きな声でカガリに答えるのと同時に、周囲の炎をかき消しながらカガリに迫るの水の奔流。

「へえ、まだこんな攻撃が出来たんだね。でも、返事は残念だよ。かき消せキュウコン、はかいこうせん!!」

それを、キュウコンが放ったはかいこうせんが薙ぎ払い打ち消していく。

「今だ!マッドショット!!」

「チツ・・・!!」

はかいこうせんがだくりゅうを薙ぎ払った瞬間、だくりゅうの影から放ったマッドショットがカガリとキュウコンにかかり視界を奪う。(特性のげきりゅうが発動した状態のだくりゅうを、簡単にかき消した。この敵は強すぎる・・・!!正直まともに相手をしてたら勝てない。だけど、さっきの攻撃がマシロさんのものならもうすぐ・・・!!)

そう考えていた時、さっきの閃光が放たれた方から1台の車が走ってくる。

「来たっ!!」

「ルビー君、無事!？」

「なんとか、ね!」

走ってきた車の開けられた後部座席に飛び乗ると、ZUZUをボールに戻す。

「クソっ、逃がすか! キュウコン!!」

自身にかかった泥を拭いながら指示を出すと、キュウコンが尻尾から火球を放つ。

「あわわわわ! 来ましたよ!」

「慌てないの! 私達には……」

「ミスタ、ハイドロポンプ!!」

キュウコンが放った火球が車に迫った瞬間、後ろから放たれた水流が火球をすべてかき消す。

「マシロちゃんがついてるわ!!」

—————

前を走る車に迫る炎をかき消しながら、カガリと車の間に割り込む。

「……アンタもいたんだね。」

「さっきまで車の中にいたから気づかなかったかな?」

話している間に車はトンネルを抜けていき、車が見えなくなるとカガリの視線は私の方に向けられる。

「アンタがいたのなら、ルビーの奴と遊んでいるんじゃないか?」

「そう? その様子だと、結構楽しんだんじゃない?」

「……まあね。」

泥だらけの様子を見るに、ルビーが一矢報いたかな?

「でも、アンタともう一度やり合う方が楽しみだったさ! キュウコン!」

「ミスタ!」

「かえんほうしゃー!」「ハイドロポンプ!」

私達の間で水と炎がぶつかり合う。

そして、数秒の拮抗の後押し切ったのはミスタ。

かえんほうしゃをかき消し、キュウコンにハイドロポンプを浴びせる。

前に戦った時より、火力が下がってるね。既にルビーと戦ったからかな?

「キュウコン!!チツ、思ったより消耗してやがる・・・。」

「みたいだね。ところで、なんでルビーを連れて行ったの?」

「・・・カイナでの戦いから、実力を隠してそうだと思ってね。隠してるものに興味が出るのは仕方ないだろ?」

「で、ヤブをつついたらルビーにしてやられた訳ね。」

「・・・フン。」

泥だらけの姿を見てそう言うと、認めたくないのか鼻を鳴らしてそっぽを向く。

意地っ張りだねえ。

「疲れてるのならやめときなよ。そんな状態だとミスタには勝てないよ。」

「・・・認めたくないけど、そうみたいだね。」

視線をそらしたままキュウコンを引っ込める。

「お?意外と素直。」

「アンタとやるときは、全力じゃないとつまらないからね。チャンピオン?」

「・・・調べたの?」

「気になるものは徹底的に調べないと気がすまない質でね。」

それでルビーも連れて行ったの?船でもそうだったけど、相変わらずはた迷惑な。

「ま、アンタとの決着は楽しみに取っておくよ。」

「あ、待って待って!」

そのまま帰ろうとしたところを慌てて呼び止める。

「・・・なにさ?」

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど……。」

と思つたけど、振り返つたカガリの泥だらけの姿を見て言葉が詰まる。

うーん、泥まみれのまま話につきあわせるのもあれだよな。いや、自業自得ではあるんだけど。

「……確か、近くに温泉で有名な町があつたよね？」

「フエンタウンのことかい？」

「フエンっていうの？とりあえず、そこで温泉にでも入りながら話そうよ。泥だらけなのも気になるでしょ？グロウ！」

「そりや気になるけど、あそこは今……、つてちよ!？」

気になると言うカガリをグロウが引つ摺むとそのまま洞窟の外に向かい、その隣に私とミスタが並ぶ。

「何でアンタに付き合わなきゃならないのさ？」

「さつきはルビーを付き合わせたんだから、今度は私と付き合つてくれてもいいでしょ？」

「なんでルビーを連れて行つたら、アンタと付き合わないといけないのさ……。」

「私、ルビーのお姉さんみたいなものだし。ま、ルビーのことは置いて温泉温泉！」

「ハア……。ウキウキなところに水をさすようで悪いけど。今、火山の活動は止まつてるから、温泉は楽しめないよ。」

……え？

## 86話

意気揚々とやってきた私達を出迎えたのは冷え切ったフエンタウン。  
ン。

「えー!!なんでこんなに冷え切ってるのお?!」

「だから言っただろ・・・。」

最早抵抗すらせずにグロウに掴まれてなすがままのカガリ。

「せっかく来たのに温泉に入れないとか!!理不尽にも程があるよ!!」

「文句はアクア団の連中に言いな。アイツラが隕石のエネルギーをぶつけて火山活動のエネルギーを抑え込みやがったせいだからね。」

「あの青い連中・・・。次会ったらぶっ飛ばしてやる。」

ん? 隕石のエネルギーをぶつけて抑え込んだ?

なら、その隕石のエネルギーをなんとかすれば火山が復活して、温泉が楽しめるのでは・・・?

「ねえ、カガリ。その隕石のエネルギーをぶつけた場所ってどこ?」

「そんなの火口に決まってるだろ?」

「なら、そこに行くよ!」

場所を聞いた私達は、そのままフエンタウンを通り過ぎると火口に向かっていった。

—————

「きてきて。火口に到着、つと。」

「いや、アタシは置いて行けよ。」

「まだ聞きたいこと聞いてないし。」

「ならさっさと聞きなよ。」

そんなカガリの言葉を聞きながら火口を覗き込む。が、見た目ではよくわからない。

「きらら。」

『はーい。』

「いや、人の話も聞けよ。」

後ろでグロウに掴まれたまま、カガリが何やら言ってるけど今は火山の方が重要だから、後でね？

「きらら、火山がどんな状態か分かる？」

『んー……。かざんのうえをへんなのがおさえつけてる……。？』

ふむふむ、変なのつてのがアクア団がぶつけた隕石のエネルギーつてやつだね。

「きらら。それ、同じ様なエネルギーをぶつけて相殺できる？」

『できる……。かも？』

かも、かあ……。でも、可能性があるならやってみる価値はあるかな？

フエンタウンなんて冷え切ってるしね。

「それじゃ、お願い。かなり消耗することになると思うけど、こんなことできるのきららしいかないから。」

『まかされたー！』

「こつちの話を聞けよ!!」

「うわっ!!びっくりした!!」

『わわっ！』

カガリが急に大声を出すからびっくりしたよ。きららなんて、私の頭にへばりついちゃったし。

「一人で何を言ってるのさ。」

「ちよつと火山を復活させようかと思って。」

「ホムラのやつが、そこに居合わせたトレーナーと炎を撃ち込んだけど無理だったんだ。そんなこと出来るのかい？」

「やってみないと分からないかな。」

でも、炎を撃ち込むのも有りかもしれない。隕石のエネルギーを相殺するのと、火山を活性化させるエネルギーを同時に撃ち込めば可能性は上がりそう。

「だからさ、カガリも手伝ってよ。」

「仕方ないね。ここまで連れてこられたんだ、少しぐらい付き合ってやるよ。」

そう言うと、グロウの腕から抜け出して私に並ぶ。

「話が早くて助かるよ。」

「別に。それより、勝算はあるんだろうね?」

「全部きらら頼みだけど、カガリもいるしなんとかなると思うよ?」

『がんばる!』

「きららって、アンタの頭にひっついてるそいつかい? 本当に大丈夫なんだろうねえ……。」

見た目はかわいいもんね、そう思うのもしょうがないよね。あと、頭に引っ付いたのはカガリが大声出すからだよ。

「ま、論より証拠ってね。早速だけど始めるよ。カガリは、いい感じのタイミングで全力の炎を撃ち込んで。」

「アバウトだねえ……。ま、全力で燃やせばいいだけならアタシの得意分野だ、キュウコン!」

「それじゃあきらら。デカいの一発よろしくね! りゅうせいぐん!!」

瞬間、空から落ちてきたのは1つの巨大な隕石。それが一直線に火口に向かっていく。

「なっ……!!……ハハッ、アタシらも負けてらんないね! キュウコン、ドンドン火力上げてくよ!!」

キュウコンの尻尾の先にドンドン炎が集まり、それは次第に大きな火球を形成していく。

「おお! やるじゃん!」

「アンタが言うと、嫌味にしか聞こえないね!」

「いやいや、本心だつて。」

「……チツ。」

何故か舌打ちされた。本心なんだけどなあ……。

ドゴオン

その時、きららの放ったりゅうせいぐんが轟音をたてながら火口にぶつかる。

火口に目を向けると、りゅうせいぐんが少しだけ溶岩に沈んだ状態



で何かと拮抗しているように停止していた。

「むう……。きららのりゆうせいぐんと拮抗するとは、なかなか手強い。きらら、いけそう?」

『だいじょうぶ、いけるよ!』

きららが答えた瞬間、りゆうせいぐんが火口に沈み込む。

「今だ!ぶち込め、キュウゴン!」

そして、それを追うようにキュウゴンが作り出した特大の火急が火口に撃ち込まれた結果。

火山が噴火した。

「ハハッ!ホントになんとかしちまったよ!」

「カガリが手伝ってくれたからね。」

「……それより、このままじゃアタシたちお陀仏じゃないか?」

「……………」

噴き上がる溶岩を呆然と見上げる私とカガリ。

「きらら!?まだいける?いけるよね?いけなかったらヤバイんだけど!?!」

『つかれたけど、がんばるよ!!』

特大のりゆうせいぐんって、きららの負担が大きいんだけど、頼れるのはきららしかいないんだ。ごめんね、もう少しだけ頑張つて。

「きらら、はめつのねがい!」

そして、きららが銀色の光を放つと噴き上がる溶岩が一瞬で消え失せる。

「……アンタ、そんなことも出来たんだね。」

「まあね。危なすぎて使ったことは殆どないんだけど。」

『ふい〜…………』

「…………。おつかれ、きらら。」

フラフラと降りてきたきららを両腕で抱える。

『ひさしぶりにつかれたよ。われはあまいものをしよもうする。』

「おっけ。好きなだけ食べていいよ。」

『わ〜い!!ふわあ〜……。でも、つかれたから、ちよつとねる〜……。』  
「ありがとね、きらら。」

そう呟いてきららをボールに戻す。

「さて。火山が復活したことだし、さっさと行くよ。」

「お?どしたの?急に乗り気じゃない。」

「アクア団の連中が今頃泡吹いてると思うと、そりゃ乗り気にもなるさ。」

「アクア団とマグマ団って仲悪いの?」

「まあ、ね。理念は真逆だし。・・・ほら、行くよ。」

そう言っって意気揚々とグロウに飛び乗るカガリ。

あ、グロウに乗ってくんた。

—————

「ふう〜。泥も落とせてアクア団の奴らも一泡吹かせてやれたし、いい事づくめだねえ。」

「ねー。」

フエンに戻った私達は、温泉に浸かっつてのんびり羽根を伸ばしていった。

「火山が休止して温泉はやってないよ。それに、さっき何かが発射したような音までしたし何かの前触れじゃなきやいいけど。・・・あれ?!?温泉が湧いてる!?!?なんで!?!」

つてお店の人は焦ってたけど、泥だらけのカガリの姿を見ると快く通してくれた。

「で、聞きたいことってなんなのさ?」

温泉に浸かると、直ぐにカガリが口を開く。

もう少しのんびりすればいいのに、せっかちなんだから。

「えつとね。マグマ団三頭火ってやっぱり3人なの?」

「ああ、捨てられ船で会った大男もその1人さ。ホムラつつつてね、

コータスの煙で眠らせるなんて、凶体に似合わない事が得意なやつだ。もう1人はホカゲ。熱で相手を幻惑する精神攻撃の使い手さ。こっちはまあ、見た目通りの奴だね。」

「で、カガリはシンプルに焼き尽くすって感じかあ。分かりやすくもいいね。それで、リーダーは？」

「アタシ達マグマ団をまとめているのは、マツブサってリーダーさ。」

あ、三頭火がリーダーじゃないんだ。

「でも、初めて会った時はあんなに素直で可愛かったのに、なんでこんなに反抗期拗らせちゃったの？」

「誰が反抗期だ。・・・別に大した事じゃないよ。コンテストに躓いてたときに、思い切ってロコンからキュウコンに進化させたのさ。でも、炎のコントロールがうまくいかなくて苦労してときに、リーダーが話しかけてきたんだ。『いい炎だ。加減するなんてもったいないねえ、どうせなら思いっきりぶっ放しちまえよ。場所なら用意してやる。』ってね。それからだね、マグマ団として動くようになったのは。」

昔を思い出すように空を見上げ、遠い目をするカガリ。

「カガリが反抗期拗らせたのは、その人のせいかあ・・・。」

「だから・・・。ハア、それはもういい。それより、アタシも聞いていいかい？」

「ん〜？」

言い返すのも諦めたのか、盛大なため息をつくカガリ。それより、とカガリは言葉を続ける。

「なんでわざわざこんなところに連れてきたのさ。さっきの話なんて、洞窟で話せばすぐ済む話だろ？」

「いやまあ、そうなんだけど。・・・カガリとはあんまり戦いたくないな〜って。」

「ハア？なんでだよ？」

あー、やっぱり聞かれるよねえ。

カガリ、気になることはとことん聞いてくるタイプだし、誤魔化すのは難しいかなあ。少しはずかしいけど仕方ない、か。

「・・・初めてカガリ会った時、私、コテンパンに負けたでしょ。」

「ああ。今では想像もできないぐらい弱っちゃったねえ……。」

「そうそう……。その時負けたから、私はミカンにポケモンバトルを教えてもらおうと思ったし、トレーナーとしても成長しないといけないと思っただ。だから、あの一戦。私にとつては結構大事な一戦だったんだよね。だから、その時の相手がカガリでさ。再会できてちよつぱり嬉しかったりしたんだよ？でも、その相手がマグマ団っていう組織にいるって聞いたたら悲しくなるでしょ？」

あの時の負けがなかったら、かぶちもグロウも今ほど成長してなかったかもしれない。私もトレーナーとして成長せずに、きららとミスタに頼りっぱなしのへっぽこトレーナーだったかもしれない。

そう思うと、あの時の相手がカガリでせっかく再会出来たのに、そのカガリがマグマ団に居るのってやっぱり嫌なんだよね。

「だからさ、カガリ。マグマ団辞めてくれないかな？」

そう言うのと、少しだけ沈黙が流れる。

「ハア……。それが本題か。サツサと切り出せばいいものを、まどろっこしい。」

「いやー、あの素直なカガリがこんなになっちゃってるからさ、それ相應の何かがあったんじゃないかなーって思うとね。」

「フン。それで、アタシが首を縦に振ると思ってるのかい？」

「やっぱり、ないよねえ……。」

素直に聞いてくれるとは思ってなかったけど、キツパリ言われるとやっぱりシヨックだね。

リーダーをしばき倒してマグマ団を潰さないと駄目かあ。

「それに、ここにいればアンタとやり合う機会が増えそうだしね。」

あ、そういう感じ？ミスタと仲良くなれそう。

「話は終わりがいい？それなら、帰らせてもらおうよ。」

そう言っ立ち上がり出口に向かって歩き出す。

が、手前で立ち止まって振り返る。

「ところで、アンタ。ルビーのやつとはどんな関係だい？」

「お？気になる？」

「フツ……。面白そうな奴らが知り合いだと、気になるだろ？」

「う〜ん……。友達、というよりお姉さん。的な感じ？昔、ルビーを助けた事があったんだ。……まあ、接点なんてそれだけなんだけど。」  
「……。そうかい。」

カガリはそれだけ言うと、そのまま温泉を出ていった。

「あくあ、次会ったら敵同士かあ。でも、マグマ団とアクア団と戦う理由が、マリさんの手伝いだけじゃなくなったね。」

さて、私も一息ついたらマリさん達を追いかけないと。

次にマリさん達が向かうのは、コンテスト会場のあるハジツゲタウンかな？

—————

オオスバメに掴まれ、空を飛びながら1人眩く。

「フン。何が次に会ったら敵同士、だよ。最初から敵同士だったっての。」

つまり、あいつにとってアタシは敵としても見られていなかったってことか。ムカつくやつだね。

「でも、次にあったらアイツも本気で来るだろうね。……楽しみだよ。」

だが、アイツの事を調べた時にはきららの情報はなかった。つまり、公式戦には一度も出してないアイツの切り札って事だ。

……。まあ、逆に言えば切り札を隠したままチャンピオンに成り上がったとも言える。

「面白い。アタシが燃やせない相手なんて久しぶりだ。ついでに、ルビーってやつのも調べておこうか。そつちからアイツの情報も出てくるかもしれないしね。」

楽しくなってきたねえ!!

## 87話

そんなこんなでミスタに乗って、ハジツゲタウンにやってきた。周りにはハラハラと火山灰が舞っている。

「お？火山灰が降り出したってことは本格的に火山が復活したみたいだね。良かった良かった。さて、マリさん達はコンテスト会場かな？」

と行ってただけど・・・、あれ？あのソライシラボって建物の前に停まってる車、ハウエンテレビのロゴが入ってる。

マリさん、あそこに居るのかな？

「おじやまします。」

「あ、マシロちゃん。そっちは大丈夫だった？」

「問題なし！マリさんも大丈夫そうだね。ルビーの姿が見えないけど、コンテスト？」

「ええ。なにか、思い詰めた様な顔をしてたからそつとしておこうと思ってる。」

思い詰めてた・・・？

なんだろう？車で話していた時も何やら思い詰めてたけど・・・。

「マリさん、何かドタバタしてるし取材出来る感じじゃないですよ。今日は帰りましょう。マリさん？」

「ウーン。」

ダイさんが声をかけても、マリさんは唸るだけ。

マリさんはマリさんで何かが引つかかっているのかもしれない。

「遅くなりました。ルネのミクリです。」

そんな時、この場所に新しい来訪者がやってきた。

なんか、妙に派手な格好の人だなあ。

そう思っていると、その後ろからぞろぞろとついてくる4人の女の人達。そして・・・。

「し、師匠~~~~!!待ってください~~~~い!!」

その後ろから何故かルビーが走ってきた。

……師匠って何？

「ルビーくん!!なんでキミと一緒に!」

「あれえ、ダイさん!あ、マシロさんも!!洞窟では助かりました、ありがとうございます。」

「いいよいいよ。それより、師匠って?」

「あの人、ボクのコンテストの師匠なんです。弟子入りしたんですよ。それよりここはなんの場所なんですか?・・・うわっ、すごいこわそうなポケモン。」

「何言ってるんだよ、ジムリーダーの息子だろ?」

何も知らずにこの場所にやってきたらしいルビーは、辺りをきよろと見渡すと、水のない水槽に入ったポケモンを見てこわそうなんて言ってる。

いやいや、このリリーラとアノプスって書いてあるポケモンより、キミのお父さんのほうがおつかないよ。

「・・・ん?」

そう思って2人を見ていると、そつと水槽に近づくハート型のポケモン。

そのポケモンは静かに水槽のスイッチに近づくと、そのボタンを押そうとして。

「何この子、ハート型のポケモン?めっちゃくちゃ可愛いんだけど!!」

スイッチに触れる前に抱え上げる。

「ラブカスという種類のポケモンだ。名をエリザベスという。」

「そっか。はい、エリザベス返すね。・・・で、何をしようとしてたの?」

「気づいていたのかい?」

「スイッチを押そうとしたことぐらいはね。全く、ルビーも変なのに弟子入りしたねえ。」

相変わらず水槽を眺めながらダイさんと話し込んでいるルビーを見ながら呟く。





る？ホントに人の名前？

「君もどうだい？君ほどの実力者なら、是非とも協力してほしいんだが……。」

4人の名前にびっくりしていると、おもむろに話をふられる。

「え？それって、さつき言ってたジムリーダーの招集ってやつ？」

「うむ。」

「あー、それなら遠慮させてもらおうかな。マリさんとの先約があるし。あ、でもマリさんがついていくって言うならいいけど。」

「そうか。」

少しだけガツカリしたような表情で呟く。

ゴメンね。経験上、ジムリーダーってだけで信用出来なくて。そんな私が入っても足並みが揃わなくなるだけだから、ついていっても一緒に何かするってことはないかなあ。

というか、この人もジムリーダー？

「……あの、最後に1つだけ伺いたい事があるんですけど。『海水位の上昇』や『エネルギーバランスの崩壊』なんて話、ここに来て初めて知りました。現場の映像も全然出てきませんし、何か理由でもあるんですか？」

部屋の奥でマリさんが研究員に詰め寄っているが見える。その人は、マリさんの言葉を聞いて眉間にシワを寄せながら怒鳴り返していた。

「何言ってるの!!あんたらテレビ局がそこまでメディアに載せないって決めたんでしょーが!!わたしらはむしろ、異変のことまできちんと報道してほしいと思ってますよ!!」

「!!」

「……全く、火山のデータを取っていたら急に火山の活動が停まるし。焦ってデータを解析したら、いきなり噴火したようなデータを表情したと思えば、火山は何事もなかったかのように活動を再開してるし。こっちも訳わかんなくて忙しいんですよ。」

そして、ブツクサと文句を言いながらデータの解析に戻っていく。「なんだかよく分からないけど、報道規制をしているのはテレビ局っ

てこと?」

「そうみたい……。ちよつと局長に電話してみる。」

そう言つてマリさんは建物の外に出ていき、ダイさんはその後ろを追いかけていった。

……とりあえず、火山を復活させたのは私（とカガリ）つてのは面倒くさそうなので黙つておこう。

—————

「第一制作局のマリです。局長でいらつしやいますか?」

『やあ、君か。どうだね?取材の方は。』

「ええ。そのことでお尋ねしたいんです。えんとつ山、火山活動停止の件についてですが……。」

『ああ。報道規制したことかい?局内で協議して決定したんだ。いたずらに大衆を不安にさせてはいけないからね。』

「ですが、局長……!!」

『とにかく!!君達は赤い装束の1団のことだけを追つてくれればいい。よろしく頼むよ。』

「ちよつ……!!」

「こちらの話を聞かずに、言いたいことを言うと電話を切られた。

「マリさん……?」

「……ダイ。局に戻るわよ。」

電話を握るマリの手は怒りでプルプルと震えている。

「なにあれ!!納得できるわけないでしょ!!こうなりや直談判よ!!」

「ええ!!ルビー君はどうするんですか?」

「取材なんて後よ!規制されるなら、取材した意味すらなくなるもの!!」

「……相当お怒りですね。」

「当たり前よ!!わたし達が真実を隠すなんて事、1番やつちやいけな  
いんだから!!」

「そんな声を荒らげてどしたの?」

そして、そんな様子のマリ達に合流するマシロ。

「悪いわね、マシロちゃん。野暮用でちよつと局に戻る事になったわ。」

「野暮用？ルビーの事はどうするの？あの師匠と一緒に行くみたいだけど。」

「野暮用の方が優先ね。マシロちゃんは どうするの？これはテレビ局、わたし達の問題だからマシロちゃんが付き合う必要はないわ。だから、ルビー君についていってもいいのよ？」

「ん〜……。マリさんについていくよ。個人的に初対面のジムリ―ダーは信用しないようにしてるから。それに、約束だしね。」

「……ありがとね、マシロちゃん。それじゃ、ダイ!!明日の朝イチで出るわよ!!」

「了解!」

—————

翌朝。

「ここからは別行動よ。」

「急にどうしたんですか?」

「野暮用よ、や・ぼ・よ・う。」

「はあ……。」

「まあまあ。ルビー君も、せつかく弟子入り出来たんだから色々と学んできなよ。」

ルビーとマリさん達が話しているのを眺めていると、昨日の人が話しかけてきた。ミクリさん、だったっけ?

「別行動か、残念だ。」

「野暮用だからね、仕方ないよ。それより、ルビーの事よろしくね。なんか最近情緒不安定っぽいから。」

私がおか言ったのが原因かもしれないのに別行動をとるのはちよつと気がかりだけど、マリさんとの先約があるし……。

それに、ルビーに肩入れしすぎるとサファイアとの競争に影響が出るかもしれないしね。

またズルっこって言われちゃう。

「弟子と認めた以上、責任は果たそう。……私達はヒマワキシティに向かう。野暮用が終わってからでも構わない、手を貸してくれると助かる。」

「確約はできないけど、覚えておくよ。」

「ありがとう。」

「マシロさーん！師匠も何を話してたんですかー？」

2人で話していた所にルビーにが駆け寄ってくる。

「なんでもないよ、ルビーに何かあつたら殺す。って言っただけ。」

そう言つてニツコリとミクリさんに笑顔を向けておく。

「なんでそんな物騒な事を言ってるんですか……。」

「そんな事、youは一言も言つてないだろ。」

ルビーには呆れられて、ミクリさんには軽く流されてしまったけど、別に冗談つてわけじゃないんだけどな。

裏で変なことされても困るし、釘をさしておくに越したことはないよね。

まあ、基本的にはジムリーダーは良い人だから大丈夫だと思いたい。

「ま、ルビーだけに肩入れするのもサファイアに悪いし、そろそろ潮時だったって事で。サファイアに会つたらよろしく言つといて。」

「あ、はい……。伝えておきますね！」

サファイアの名前を出すと、一瞬だけ表情が曇つたような気がした。が、直ぐにいつもと同じ表情で、いつも以上の声で返事を返す。

ん？  
もしかして、サファイアの事で何か引つかかっている？

「それじゃあ、行こうか。」

「はいー！」

私が少し考え込む間に2人は車に乗り込むと、そのまま空に浮かび飛び去っていく。

へえ。車つて飛ぶんだ。

「マシロちゃん！わたし達も行くわよ！」

「あ、うん！」

空を眺めている間に横付けされた車に乗り込む。

「これは飛ばないの？」

「飛ばないわよ！あんなプライベートな車と一緒にしないでよ！こっち  
ちはただの社用車よ!!」

「あははく……。マシロちゃん、今のマリさんにテレビ局関連の話は  
しないほうがいいよ。局の方針に不満爆発中だから。」

「当然でしょ！報道の人間が真実を隠してどうするのよ!!ガミガミガ  
ミガミ……。」

怒鳴るように声を上げて一息でまくしたてる。

成る程、これは触らないほうが良さそうだ。

でも、車の話しか振ってない気がするんだけど

……。情緒不安定なのはマリさんもだったかあ。

「それじゃあ、マグマ団は1人のリーダーと3人の幹部がいて、他は構成員ってところかしら?」

「こそ。マツブサってリーダーと、カガリ、ホムラ、ホカゲって言ったかな?」

「ちゃんと情報を持って帰ってきてくれるから助かるわ。ルビー君は巻き込まれただけって言い張って、あまり協力的じゃなかったのよね。」

「ウーン、何か悩んでるみたいだったしコンテストの事以外に気を使う余裕がなかったのかも。」

思い返せば、天気研究所の後にサファイアの事を口にしてから様子がおかしくなった気がする。

「かもしれないわね。…それにしても、すぐに追いついてくると思ってたのに、結構時間がかかったわね。マグマ団の幹部、そんなに強かったの?」

「あ、うん。強かったよ。」

ホントはその幹部と一緒に温泉行ってただけ、なんだけど。

「あ、見えてきましたよ!」

運転しているダイさんが声を上げ、マリさんと一緒に前を見た瞬間。

テレビ局の方から火柱が上がった。

「うわっ!!」

「きゃっ!!」

「おっとと。」

ダイさんがとつさに急ブレーキをかけたことで、マリさんは悲鳴を上げた。

私は前につんのめりながら踏ん張った。頑張った。

「今のは・・・?」

「行くわよ、ダイ!!」

「は、はい!!」

その場で車を停めて、駆け出す2人。

「流石ジャーナリスト。行動が早い。．．．つと、置いてかれちゃう。早く追いかけないと。」

そして、その後ろを追いかけると何故か茂みの影に隠れだす2人。その後ろに私もそつと隠れる。

「どうしたの?」

「あそこに居るの、局長なんだけど、なんだか雰囲気か．．．。」

「何か変、ですね。」

2人に習って茂みから火柱の上がった所を覗き込むと、対峙している2人の人影。

片方はバクーダを従え、見覚えのあるマークが入った赤い装束の男。

ってことは、もう1人の方が局長かな? トドゼルガを出してる。なら、さっきの火柱はバクーダの技かな。

そう思っていると、局長がパチンと指を鳴らす。

それを合図に現れたのは見覚えのある3人組。

「あの3人って、トウカの森で会った人じゃ．．．!!」

「なんで局長がああ3人組と?．．．つまさか!」

「そのままさかってやつ、だね。」

あらら。こっちではジムリーダーじゃなくてテレビ局の局長かあ。

全く、裏の顔がある人は取り入るのが上手いね。

—————

マシロ達が到着する少し前。

火柱が上がったその場所で、2人の人影が向かい合っていた。

「水道局員に化けたり、テレビ局員に化けたり。アクア団の連中は忙しそうじゃねえか。なあ、アオギリ。」

「おやおや、誰かと思えばマツブサ。あなたでしたか。」

「久しぶりだな。裏でコソコソとセコいことをやってくれたじゃねえか。お陰で赤い装束の1団はお茶の間でおなじみの迷惑集団になっ

ちまって、動きにくくて仕方ねえ。」

「あなた達が目立ってくれたお陰で、我々は目立つことなく動けて大助かりですよ。」

「心底、ヘドの出る野郎だぜ!!バクーダ!!」

「トドゼルガ!!」

「かえんほうしゃ!」

「れいとうビーム!」

2人の間でぶつかりあった技が、互いに相殺し打ち消し合う。

「男なら、腕一本で勝負だろうが!」

「もちろん。その方面でも負けませんがね!こおりのキバ!」

トドゼルガのキバがバクーダの背に突き刺さる。

「トドゼルガの2本のキバは、10トンの氷山をも粉碎する威力。そのキバから発する冷気は相手の体を凍りつかせる。」

「ハッ!!バクーダの特性はマグマのよろい。凍ることはねえ!そして、背中に深く突き刺してくれたお陰で、てめえのトドゼルガは動けねえよなあ!!そのままふんかだ!バクーダ!!」

バクーダの背中から噴き出した炎が、火柱を上げてトドゼルガを吹き飛ばし、アオギリの足元にドサツと落下する。

「・・・負けました。と、言いたいところですが。」

とアオギリが言葉を区切ると、倒れていたトドゼルガがムクツと起き上がる。

「トドゼルガにもあついいしぼうという特性がありました。どれだけマグマを浴びせられようともダメージを負うことはありません。」

「チツ。この場で起動部品を奪い取ってやろうと思ってたが、このままだと罫が明かない、か。・・・なあ、アオギリ。オレたちが潜水艇を手に入れたのは知ってるよな。だが、その性能を引き出す為の部品はてめえらが持っている。」

「・・・そうですね。」

アオギリはマツブサの意図が読めずに、困惑しながらも静かに同意する。

「互いに海底洞窟に行きたいのにお互いに邪魔をしあってるわけだ。」



「・・・何が言いたいのですか？」

「オレたちは敵同士。だが、そいつを一旦飲み込んで手を組もうって言うてるんだよ。かいえん1号をホウエンの最深に到着させる。その間だけ一時休戦するのはどうだ？当然、海底洞窟に行ったあとは敵同士。」

「依存なし。・・・と言いたい所ですが。」

おもむろにアオギリがパチンと指を鳴らす。

すると、アオギリの後ろに現れる3人の男女。

「あなた達マグマ団が、どうやって火山を復活させたのかを聞かないと、手は組めませんね。我々も教授を騙して隕石のエネルギーを火山活動を停止させるパワーに転化させる装置を作らせて、ようやく可能になったものです。それを短時間で復活させる手段を持っているのなら、手の内を明かしてもらわないと、簡単には信用できませんね。」

「悪いが、アオギリ。あれはオレたちじゃねえよ。」

「嘘はやめてください。あなたたち以外に誰がそんな事が出来るんですか？これ以上隠し事をするなら、交渉決裂。ですね。」

そう言うと、マツブサににじり寄るアオギリたち。

チツ、と舌打ちをしながら後退りするマツブサの前に、赤い装束の男が割り込んだ。

「本当だ。あんたらの言う装置ごと燃やして火山に撃ち込んで、それでも隕石のエネルギーには勝てずに火山は沈静化したままだったぜ。」

「ホムラか、いいタイミングだ。」

「一応、他の連中にも声をかけたが少し時間がかかるってヨ。」

「なら、誰がそんな事をしたというのです？」

「さあな。だが、考えてみるよアオギリ。もしオレたちが火山を復活させたのなら、今頃隠したりせずにてめえらのことを笑ってやってるさ。」

「・・・確かに、それはそうですね。なら一体誰が・・・。」

マツブサの言葉を聞いて、考えこむアオギリ。

「分からねえもんは考えてもしようがねえだろ。手を組むのか!? 組ま

ねえのか!？」

「・・・いいでしょう。火山を復活させた相手は気になりますが、それより海底洞窟に向かうほうが重要です。」

「ふう。一時はどうなるかと思っただぜ。」

「ふん！総帥リーダーに感謝することです。」

「イズミさん、やめなさい。」

ホムラに突つかかるイズミを諫めながら3人組に目を向けると、アオギリは眉をひそめる。

「・・・おや、ウシオさん。あなたもいたのですか？あなたの事は作戦から外したはずですが。」

「体のことなら・・・、大丈夫です。」

ウシオと呼ばれた人は、もう1人の男に肩を借りて苦しそうにしながらも気丈に返事を返す。

「そんな事を言っているではありません。えんとつ山で失敗したあなたは使わない、と言っているのです。」

「そんな・・・。」

が、そんなウシオに冷たく返すアオギリ。

「ヒュー。怖い怖い。」

「ホントホント。」

「だよナ！」

それを見て口笛を吹くホムラの横に、いつの間にか現れた着物姿の少女、マシロが頷いている。

「・・・ホムラ、そいつは誰だ？」

「・・・ア？ぬあつ!!誰だ!？」

それを見たマツブサが、眉をひそめながらホムラに問いかけると、隣を見たホムラが驚いて飛び上がった。

そして、それを見たマシロも驚く。

「うわっ！びっくりした!!」

「それはこっちのセリフだぜ！」

「チッ！バクーダ、とっしん!!」

「危なっ!!」

その様子を見てバクーダをけしかけるが、ひらりと躲してマツブサたちから距離をとる。

「ちよつとーいきなりとっしんなんて怪我したらどうするの?」

「・・・あなた、何者ですか?」

その姿を見てアオギリが問いかけるが、イズミは顔色を変えて声を荒らげた。

「あの小娘はっつ・・・!!<sup>リーダー</sup>総帥、気をつけてください。トウカの森で邪魔をしてきたトレーナーです。」

「あれ?ふくん・・・。局長なのに私の事を知らないんだ。」

「何者かと聞いているんです!!」

緊張感のない口調から、苛立ちを隠せずに語尾が強くなる。が、それを聞いてもマシロは表情を一切変えずあつけらかなとしたままで答えた。

「そうだね・・・。強いて言うなら、通りすがりの正義の味方、かな?」

—————

「どういうことでしょうか・・・?」

「アクア団とマグマ団の双方の目的は海底洞窟って場所にあつて、そのためにそれぞれが部品と潜水艇を奪った・・・?」

「それで、お互いに歯がゆい思いをするぐらいなら手を組もうってことかな?」

「そして、局長の正体はアクア団のリーダー・・・?報道規制も自身の悪事を隠すためのもの・・・?」

あちやー。マリさん、結構ショックを受けてるね。自分の上司が悪の組織のリーダーって言われたら、仕方ないか。

「マリさん、逃げましょう!幸い、アイツラはこっちに気づいてません。今なら逃げられます。」

「でも、逃げてどうするのよ!?今なら局に戻れば悪事の証拠を押さえられるかもしれないわ!」

「ダメですよ！周りが敵か味方が分からないところに飛び込むなんて！デボンの社長が部品を自分自身で運んでた事、覚えてますよね？社長はこういったことも予想してたんですよ！結果的には奪われてしまいましたか・・・。」

「なら、どうするのよ!?!」

「知らせましょう。ルビー君に。戦う力を持った人達に。僕たちじゃあどうにもできません。」

静かに、諭すように話すダイさんを見て少しだけ驚いた。

こういう時に冷静になれるのは凄いね。うん、いいコンビだ。

「良い案だね。相手が手を組んだのなら、こつちもそれなりの戦力が必要になってくるし。・・・そつちは任せてもいい?」

物陰で屈んだ状態から立ち上がると、ダイさんが素つ頓狂な声をあげる。

「へ?」

「マシロちゃん!?まさか、戦うつもり?相手は、アクア団とマグマ団のリーダー。それと他に4人もいるのよ!?流石に無茶よ!」

確かに、火山を復活させたからきららはお休み中で万全とは言えない。

「でも、ここでアイツラを抑えたら全部解決するんだよね。部品と潜水艇を取り返して、火山を停止させたアクア団を張り倒せる。それに、カガリを引き込んだマグマ団も潰せる。いい事づくめ♪」

「・・・なんか、私怨まざってませんか?」

「いやいやダイさん。最初から私は個人的な理由でしか動いてないって。」

「ま、あつちは私が相手をしてくるから。その間に他の人に知らせてきてよ。」

「でも・・・。」

「行きましょう、マリさん。僕たちがいても邪魔になるだけです。」

「分かったわ。マシロちゃん、気をつけてね。」

そう言って心配そうな顔をする2人。

「さっきのを見た感じ、よっほどの事がなければ負けないから大丈夫

だって。勝率で言うと、80%はあるんじゃないかな？」

「え？」

そんな顔されるとこっちも行きづらいから、安心させようと思ったらむしろ変な顔をされた。

まあ、きららがいれば負けることないだろうから100%だったんだけども。

「それじゃ、行ってくるよ。」

軽く手を振って物陰から、そつと出ていく。

さてさて、日頃の恨みを晴らしに行きますか。

「ふざけた態度ですね。…皆さん、任せましたよ。トウカの森で会ったトレーナーなら、あなた達の不始末です。」

「まあ待てよ、アオギリ。」

そう言っただけを返すアオギの肩に手をおいて、呼び止めるマツブサ。

「なんですか?」

「ここは1つ、オレたちが相手をしてやろうじゃねえか。部下の不始末は上司の責任ってな。せっかく手を組んだんだ、足並みを揃えるって意味でも一戦交えるのも悪くねえだろ?」

「ハア……。いでしよう。あなた達は下がってなさい。」

アオギリは大きいため息をつくとき、部下を下がらせる。

「しかし、マツブサ。あなたと手を組んで最初に相手をするのがこのような小娘とは、締まりませんねえ。」

「景気づけにはいいだろ?バクーダ!」

「そうですね。トドゼルガ!」

「かえんほうしゃ!」

「れいとうビーム!」

2体の攻撃がマシロに命中し、煙を上げながら辺りに衝撃が広がる。

「あつけないですねえ。」

「いや……。さて、アオギリ。」

マツブサがアオギリに声をかけるのと同時に、煙が晴れる。

そこには、無傷のマシロ。そして、その前でひかりのかべを展開しているグロウの姿。

「ほう。単身で乗り込んでくるだけはあるじゃねえか。」

「うーん。どっちもヌルいねえ……。」

「……なんだと?」

感心して褒めていたマツブサの語尾が一気に強くなる。

「ハッ！だったらその身で確かめてみやがれ！ふんかだあ！」

バクーダの背中から噴き出したマグマがグロウに迫る。

「ミスタ、ハイドロポンプ。」

それを正面から迎え撃つのはミスタのハイドロポンプ。

両者の技は2人の間でぶつかりあうと、マグマが水流に押し流されていき、そのままバクーダに押し返した。

「バクーダ!!」

「口先だけですか？情けないですね。トドゼルガ、アイスボール！」

マツブサの次に動いたのはアオギリ。トドゼルガが自身を氷に包み縦横無尽に周囲を反射して跳ね回る。

「今度はピンボール？」

「跳ね回るほど威力もスピードも増していきます。この攻撃、見切れますか？やりなさい、トドゼルガ！」

「グロウ、コメットパンチ。」

乱反射しながら高速で跳ね回るトドゼルガ。それが一直線にグロウに突っ込んだ瞬間、鋼の拳が迎え撃ち、一撃で地面に叩き伏せる。

「なっ!？」

「見切るもなにも、最後はそっちから来てれるんだから。待つてればいいだけでしょ？」

「チツ……。アオギリ。この小娘、できるぞ。」

「……。そのようですね。」

マツブサとアオギリが認識を改める一方。

「いやいや、そっちができなさすぎるんだよ。さっきのかえんほうしやはカガリの方が強いし、れいとうビームとか貧弱すぎ。私が戦ってきた相手は川とか湖とか凍らせるレベルだよ？その程度の冷気が効くと思ってる？」

マシロは冷たく言い返す。

「ま、いいや。楽に済むならそれに越したことはないしね。それじゃ、しばらく寝てくれるかな？ミスタ、メテオビーム！」

そして、マツブサとアオギリ。2人に向かって放たれるメテオビーム。

「バクーダ、かえんほうしゃ！」

「トドゼルガ、れいとうビーム！」

それを起き上がったバクーダと新たに繰り出したトドゼルガが押し返そうと技を放つが、一方的に押し込まれる。

「なんだと!？」

その光景にマツブサが驚きの声を上げる。

「コータス！オーバーヒート!!」

それを見て、今まで静観していたホムラが参戦する。だが、それでもメテオビームの威力は衰えなかった。

「何をしているのですか!？あなた達も加勢しなさい!!」

「は、はいっ!!」

それを見たアオギリも自らの部下に加勢するように命令を出す。

「自分で下がってろって言ったくせに、身勝手なリーダーだね・・・。これがパワハラ上司ってやつ?」

「・・・ッ！黙りなさい！ルンパツパー！」

「サメハダー！」

「ペリッパー！」

「「ハイドロポンプ!!」」

援護するために繰り出された3体が同時に繰り出したハイドロポンプ。それが加勢されたことでようやく両者が拮抗する。

「おー。ミスタと張り合えるなんてやるじゃん。」

「態度だけでなく、技の威力もふぎけてますね・・・!!」

「こっちは6人だつてのにヨオ!!」

焦るホムラ達に対して、マシロは更に追い打ちをかける。

「それじゃ、おかわりいくよ。グロウ、ラスターカノン!!」

ようやく拮抗した所に、追加で放たれる銀色のエネルギー弾。当然のごとく拮抗は崩れ、メテオビームとラスターカノンがマグマ団とアキラ団を吹き飛ばしていく。

「ぐあああああ!!」

「きやああああ!!」

そして、衝撃で巻き上がった砂埃がはれると立っているのはリー



ダーの2人だけで、他の部下たちは地面に倒れ伏していた。

「・・・チツ!!」

「役に立たない部下ですね・・・!!」

「自分でどうにもできなくて部下に頼ったのに、酷い言い草だね。」

「私の部下をどう使おうと、私の自由です。」

「ふくん。私には理解出来ないね。」

アオギリの言葉に、マシロは冷ややかな目を向ける。

「それに私。そういうロケット団みたいな考え方、嫌いなんだ。」

「・・・だったら、なんだと言うんですか?」

「別に。ただ、痛い思いをしながら寝てもらっただけだよ。ミスタ!」

声と同時に片手を上げる。

「それじゃ、おやすみ。」

そして、言葉と同時に腕を振り下ろした瞬間。ミスタから放たれたメテオビームが一直線にマツブサとアオギリに向かって行く。

「・・・ここまでか。」

「・・・ッ!!」

マツブサは小さくつぶやき目を閉じ、アオギリは小さく舌打ちをしたその時。

「キュウコン、はかいこうせん!」

「マグマツグ、かえんほうしゃ!」

赤装束の2人組がマツブサとアオギリの間に降り立つと、メテオビームを受け止める。

「何だこのアホみてーな威力は!?!」

「文句を言ってる暇なんてないよ!油断したら一瞬でやられるっての!」

そして、ギリギリの所でメテオビームを2人組によって相殺され、その姿を見たマシロは人影に向かって手を振った。

「あ!カガリじゃん!やつほ!」

「・・・知り合いか?」

「・・・まあね。リーダー、面倒なのに絡まれてるね。それに、なんでアクア団と一緒にボロカスにやられるのさ?」

肩越しに振り返ったカガリがマツブサに声をかける。

「助かった、カガリ、ホカゲ。アクア団とは、潜水艇を完成させるために手を組もうと持ちかけて協力しようってときに、そこにそいつが乱入してきた。」

「なら、タイミングはよかったみたいだな。ほら、受け取れリーダー。」

そう言っただけで寄越したのは紅色と藍色の宝珠<sup>たま</sup>。

「おお。よくやった、ホカゲ。」

「なんですか、それは？」

「・・・これがあれば、グラードンとカイオーガをコントロール出来る。・・・ほらよ、受け取れ。」

渋々といった感じで答えながら受け取った宝珠の片方を放り投げ、それを受け取ったアオギリがしげしげとそれを眺める。

「ほう、そんなものがあつたんですか。手を組んだんだ裏では、宝珠を使つて有利に立ち回るつもりだった、と。あなたも人の事言えませんねえ。」

「うるせえ。そもそも目の前のアイツをどうにかしねえと、コイツを手に入れても意味はねえよ。」

そう言っただけでマシロを睨みつけるマツブサ。

だが、それを諫めたのはカガリ。

「目的が達成できたのなら、サツサとずらかった方がいいよ。海底洞窟まで行ってしまえば、流石にアイツも追えないだろうしね。」

「えらく警戒してるが、そんなにやばい相手なのか？」

「別の地方でチャンピオンになった奴・・・いや。火山を復活させたやつ、って言ったほうが分かりやすいか。」

「あいつが・・・。」

「ホカゲ！」

「おう！」

「かえんほうしゃ!!」

マグマツグとキュウコンのかえんほうしゃがマシロに向けて放たれる。

「グロウ！」

それをグロウがひかりのかべで正面から受け止める。

「今だよ！」

「チツ！行くぞ、アオギリ！」

「まさか、あんな小娘相手に背中を見せることになるとは思いませんでしたね！」

マツブサに急かされ、憎まれ口を叩きながら飛び上がりその場を離れていく2人。

「悪いけど、見逃すつもりはないよ！ミスタ！」

瞬間、ミスタの体が輝くほど蓄積されたエネルギーが一気に開放され、周囲を明るく照らしながら2人に向けて放たれた。

「なんだと!？」

それを見てカガリは焦った声を出す、その時にはすでに2人の背後にまでメテオビームが迫っていた。

そして、振り返ったマツブサとアオギリが驚愕した表情を浮かべたその時。

2人が持っていた宝珠が輝き、ミスタのメテオビームがひかりのかべのようなものにぶつかりあった。

「嘘!?!あれ、防げるの!?!」

マシロが驚く声を上げるそんな中、ぶつかり合う閃光で照らされたマツブサとアオギリの影が巨大なポケモンのようなシルエットを浮かび上がらせた。

「あれは、ポケモン・・・?」

マシロが疑問の声を上げる中、メテオビームを防ぎ切った2人は闇夜の空に消えていった。

「ふう〜。焦ったね。まさかあの距離で狙い撃ちするとは思わなかったよ。」

「防がれるとも思わなかったけどね。」

「それに関してはアタシも想定外。流星に終わったかと思ったよ。」

カガリは両手を軽く上げてそれに同意する。

「それより、どうすんだよ。ホムラとアクア団の連中、おやすみしてるぜ?。」

「起きてるよ！バルビート、シグナルビーム！」

ホカゲの言葉を聞いて、起き上がったアクア団の一人がバルビート3体を繰り出し、マシロに向けてシグナルビームを放つ。

が、グロウのひかりのかべにビビをいれただけでシグナルビームが防がれる。

「まだ起きてたんだ。．．それより、妙に威力が高いけど、バルビートの周りに浮いてるその明かりのせい？」

「めざとい方ですね!!」

その疑問にいち早く気づいたマシロに悪態をつきながらも攻撃の手は緩めない。

「ホカゲ！合わせな！」

「おう！」

「かえんほうしゃ!!」

そして、その流れを見逃さずに追撃をかけるホカゲとカガリ。

「それは流石に受けきれないかな！ミスタ、ハイドロポンプ!!」

ホカゲとカガリの追撃に少し焦りながらも、かえんほうしゃをハイドロポンプで受け止める。

「相性で不利とはいえ、2人がかりで互角かよ！」

そう言つて悪態をついた瞬間だった。

「互角で十分！コータス、えんまくダ!!」

倒れていたコータスから嘖き上がるえんまくが、その場にいた全員の視界を遮る。

「ゴホツ．．!!」

「リーダーは既にずらかった以上、長居は無用ダ！」

「ゲホツ．．！突然だがいいタイミングだ、ホムラ！さつきみたいに狙い撃ちされたくなけりや、全員散りなっ!!」

マシロが咳き込んでいる間に、アクア団とマグマ団が一斉に飛び立ち散り散りになる。

「あーもう！ミスタ、こうそくスピーン！」

ミスタの回転によって周囲の煙を吹き飛ばし、スグに上を見上げる。

上空には既に小さくなった人影がいくつかと、3人が肩を貸し合っているせいでまだ近くを飛んでいる青い装束の人影。

「あんなろくでもないリーダーなのに、部下は仲間思いだね。…ま、そのせいで逃げ遅れてるんだけど。ミスタ、ハイドロポンプ！」

仲間思いな所に感心し、少しだけ加減したが遠慮はしない一撃。それが3人組に迫る途中で。

「かえんほうしゃー！」

地上から放たれたかえんほうしゃで相殺される。

「余所見なんて、つれないねえ。」

「あれ？カガリは逃げなかったの？」

上から横に視線を向けると、そこには1人だけで残ったカガリの姿。その姿に思わず疑問の声を投げかける。

「ま、殿は必要だろ？それに、ここはアンタが気にしてた船の上でもないし、泥だらけでもない。なら、アンタも本気でやれるって訳だ。」

「ホント、ミスタみたいなこと言うねえ…。」

呆れたような、疲れたような声を出すマシロ。

「ま、私も少しだけ。あの時の相手とは、いつかもう一回戦えたらいいなーとは思ってたしね。ちようどいつか。」

「へえ。それは意外だね。」

「だってさ。あれだけコテンパンに負けたんだよ？そりゃ、リベンジ。したいよね？」

そう言うとマシロは真面目な表情を浮かべ、それを見たカガリは嬉しそうに笑った。

「いいねえ、その表情!!ようやく本気のアンタと戦える!!」

「やるよ、かぶちー!!」

ミスタとグロウを戻した後、かぶちーを繰り出す。

「自慢のスターミーじゃなくていいのかい？」

「かぶちーじゃないと、リベンジにならないでしょ？それに、皆私の自慢のポケモンだよ!!」

「そうかい!!なら、その自慢のクチートでかかってきな、マシロ!!」

「ようやく名前を呼んでくれたのに、こんな状況なのはうまく喜べな

いなあ・・・。  
いくよ、カガリ!!」

## 90話

「かぶちー!」

「キュウコン!」

マシロとカガリ。両者の間で2体がぶつかり合い、ギリギリと拮抗した後、互いに弾きあい距離が開く。

「やっぱり、あの時は全然違うねえ。流石、チャンピオンになっただけのことはある。」

「あれはお飾りみたいなものだけどね。」

「ハッ!お飾りだろうとアンタが強いのは事実だろ?アがるねえ!」

そう言いながら、キュウコンの尻尾の先から放たれる無数の火球。

かぶちーは、それを踊るように躲しながらキュウコンに向かって駆け出す。

「綺麗なもんだ!アンタなら、コンテストのマスターランクでも優勝できそうだ!」

「ありがと!でも、コンテストには興味ないかな!」

「そうかい!キュウコン、かえんほうしや!」

近づくかぶちーに対して、今度は避けきれないような広範囲のかえんほうしやを放つ。

「かぶちー、こおりのキバ!」

それが当たる直前、冷気を纏った大顎を地面に突き立てると、かぶちーの目の前にこおりのつららが出来上がる。

が、そのつららは一瞬で溶けた。

「ハッ!そんなちんけな氷、スグに溶けるに決まってるだろ!」

「だろうね?」

「あん・・・?」

表情を崩さない私の顔を見て怪訝な声を上げるカガリ。

そのままカガリは溶けたつららの後ろをに目をやると顔色が変わった。

「・・・いない!?!」

「さて、かぶちーはどこかな？」

その時、キュウコンの上でバチバチという音とかすかな光。それに気づいたカガリが視線を上に向ける。

「チツ、上か！」

「正解！だけど、気づくのが遅かったね！」

夜に紛れて見失ったかぶちーの姿に気づいた時には、キュウコンに大顎を振り下ろす直前。

「かぶちー、はたきおとす！」

「キュウコン、受け止めろ！」

そして振り下ろした大顎を、キュウコンは尻尾を丸めて受け止めたる。

が、2体の間でバチバチと電撃が迸り、衝撃でキュウコンの足元は砕け、周囲に衝撃がはしる。

「この威力、本当にあの時と同じクチートかよ？」

「真正正銘、あの時のかぶちーだよ！さあ、たたみかけるよ！」

「やらせるかよ！オーバーヒート！」

「ツツ!!まずっ、かぶちー！」

叩きつけた大顎を跳ね上げ反動で一気に距離を取る。

そして、飛び退ったかぶちーを追うように、キュウコンの全身から炎が吹き荒れ、かぶちーは熱波にさらされながらも距離を取って上手く着地した。

まともには受けなかったけど、少しもらったかな？

「チツ、判断も早い。流星はチャンピオン、だね。」

「いやいや、あれを受けて動けるのも流星だよ？」

「動ける・・・？ああ。ってことは、やっぱりさっきのはかみなりのキバだね？」

「あ、気づいてた？」

「あれだけバチバチさせてたらね。どおりでオーバーヒートが出るのが少し遅い訳だ。お陰で仕留めそこねた。」

どうやら、キュウコンの不調から気づいたみたい。

と言うか、感電させてなかったらかぶちー黒焦げだったかも・・・。



危ない危ない。

「マヒにもなってるし、オーバーヒートも撃たされた。こりゃ、長期戦は不利だね。キュウコン、ほのおのうず！」

キュウコンが放ち、周囲の地面に散らばった火種が勢いよく燃え上がり、火柱と化しながらかぶちーとキュウコンの周りを取り囲んでいく。

「さあ、炎のステージの上で決着をつけようじゃないか！」  
「望むところ！」

と強がってはみたものの……。  
めっちゃあついですけど！

これじゃ、かぶちーだって長期戦は無理だつて！

燃え上がった炎の熱気にあてられ内心で悲鳴を上げる。

「さあ、躲す広さもないこのステージ。どう切り抜ける！受けてみな、これがアタシの全力の炎だ！」

瞬間、キュウコンが放った全力のかえんほうしゃ。

周りの炎よりも更に明るく熱い、躲すことも出来ないほどの巨大な炎。

「避けられないならやるしかない、かな。かぶちー！」

「チー！」

私の声に大きくうなずくかぶちー。

「つるぎのまい！」

その場で踊りながら助走をつける。そして……。

「全力で突っ込んで！」

炎が目前に迫る中その身を回転させ、さながらドリルのように炎の中を突き進んでいく。

「正面突破か、面白い！アタタが燃え尽きるのが先か、炎を突き破るのが先か、根比べといこうじゃないか！」

「こういうのはミスタの得意分野なんだけど、ね！」

そう言っている間も、炎の中を突き進んでいくかぶちー。

だが、炎の勢いに押されかぶちーのスピードが少しずつ下がっていく。

「どうやら、根比べはアタシの勝ち・・・ツツ!!」

カガリがそう言った瞬間、不意にキュウコンのかえんほうしやが止まる。

「これは・・・、マヒかつー!」

視線を向けると、そこには体を痙攣させているキュウコン。

「今だよ、かぷちー!」

瞬間、回転を止め一気に地面を踏み込むとキュウコンとの間合いを詰める。

「チツ!キュウコン、はかいこうせん!」

「ふいうちー!」

目の前に迫ったかぷちーに対してキュウコンが口を開くが、技が出るよりも早くキュウコンの体をかぷちーが弾き飛ばす。

「キュウコン!!」

焦るカガリの声とほぼ同時。宙に浮いたキュウコンの後を追うようにかぷちーが飛び上がるとその大顎を大きく振りかぶる。

「これで、終わりだよ!かぷちー、はたきおとす!」

そして、勢いよく振り下ろした大顎はキュウコンの目の前を通り過ぎた。

「・・・あれ?」

「・・・なんだと?」

そして、キュウコンを素通りしたかぷちーの大顎は地面を叩きつけ、巨大なクレーターをつくる。

それを見たカガリと私が素っ頓狂な声を上げると同時に、かぷちーは地面に倒れ込んだ。

「・・・限界、かな。やつぱり、あの炎を突っ切るのは無茶だったかあ。」  
私はかぷちーに歩み寄ると、そのまま抱き起こそうとするが、あまりの熱さに顔をしかめる。

「あちち。まずは、やけどなおしからだね。後は・・・。」

そして、そんな私を見るカガリの顔も何故か、しかめっ面をしていた。

「どしたの？そんな眉間にシワを寄せて。勝ったんだからもっと嬉しそうな顔すればいいのに。」

「チツ。こんなつまらない勝ち方なんて嬉しくもない。それに……。」  
そう言うと、キュウコンの方をチラッと見る。

「受け止めた尻尾はまともに動かないし、オマケにふうちで喉元を打ち抜きやがって。これじゃ、尻尾からも炎は出せないし、かえんほうしゃもはかいこうせんも撃てない。……こんなんで勝ったなんて言えるかよ！引き分けだ、引き分け。」

吐き捨てるようにそう言うと、キュウコンをボールに戻す。

「これで、1勝1敗1分けってわけだ。決着は次に持ち越した。」

「あれ？私が勝ったことなんてあったっけ？」

むしろ、負けっぱなしのイメージしかないんだけど。

「ハア？すてられ船での事、もう忘れたのかい？」

「あれは別に勝負じゃなかったでしょ？」

「容赦なくぶっ放しておいてよく言うよ。」

そう言うとカガリは、オオスバメを出してその足に捕まる。

「まあ、いいさ。楽しみが先に伸びたと思えば。」

そして、そのまま飛び上がっていくカガリ。

「次こそ負けないからね。」

「ハッ！こつちの台詞だよ。」

その背中に声をかけると、顔だけ振り返るとそれだけ言って、夜の空に消えていった。

座り込んだままそれを見送ると、手当を終えたかぶちーを抱き抱える。

すると、ちようどそのタイミングでかぶちーが目を覚ます。

「ちー……？」

「あ、起きた？ごめんね、かぶちー。負けちゃったよ。あ、いや、カガリは引き分けてって言ってたっけ。」

状況が読み込めずにキョロキョロと周囲を見渡すかぶちーに、引き分けになったことを告げる。

ついつい負けちゃったって言っちゃったけど、引き分けだったっけ。

いやいや、引き分けてって言われてもキュウコンは元気だったし、あれは負だよねえ……。

「ちー!!」

と、そう思っていると唐突にかぶちーの頭に私の頭が挟み込まれる。

「ちよつと、かぶちー!?!痛い痛い!!」

「くちー!」

唐突なかぶちーの行動に抗議の声を上げると、私の頭を挟む力が弱まる。いやまあ、痛いつて言っても少しだけだし、甘噛みみたいなものだったけど。

「ちー!」

そう思いながら顔を上げると、何故か満足そうに声を上げるかぶちー。

あ、もしかして励ましてくれてる？

自分のでも意外だけど、かぶちーからみても分かる位には凹んでたらしい。

「ふふ、ありがとね。」

でも、初めてかぶちーと戦った相手だし、勝ちたかったんだよね。あー、なんか、自覚したらもつとへこむ。

・・・あれ?かぶちーの顎の奥、何か挟まってる？

「かぶちー、何これ?」

「ちー!!」

そう言つて奥に手を伸ばそうとすると、さつきよりも強く挟み込まれる。

「痛い痛い!取らないからやめて!」

そう言つて手を引っ込めると、かぶちーは私の腕の中からピョンと飛び出す。

チラツとしか見えなかったけど、かぶちーから貫つた石に似てた気がする。でも、触るのも嫌がるつてことは、よっぽど大事なもののなかもしれない。これ以上あれに触るのはやめとこう。

「でも、かぶちー。動けるようになっても無理は駄目だよ?今はゆっ

くり休んでて。」

腕の中から飛び出したかぶちーをボールに戻す。

私をはさめるぐらいには元気になっても、カガリと1戦やった後だしね。

でも、この後はどうしよう。

アクア団とマグマ団のリーダー2人には逃げられた。追いかけてうにも行き先は分からない・・・事もないかもしれない。

「潜水艇に海底洞窟って言ってたっけ？ってことは、行き先は海の底・・・？でも流石にそんなとこまでは追えないよね・・・。」

あー、やっぱり逃がしたのはまずかったかも。

でも、潜水艇で海底洞窟って場所に行けるなら他の潜水艇を使えばなんとかなるかもしれない。

「となると、カイナの造船所に行くのが1番いいかな？一応、館長とは顔見知りだし。ミスタ！」

カガリと戦う前に戻したミスタをもう一度出す。

すると、やれやれ。といった感じで体を横に振る。

ん？なにか言いたそうな感じだけど・・・あ！

「わかったーミスタならカガリに勝てたって言いたいんでしょー！」

そう言うと、次は任せろと言わんばかりに胸を張るミスタ。いや、体の中央にある宝石が胸であつてるのかわかんないけど。

「ミスタが戦いたいのは分かるけどね。カガリ、すごく強いし。」

そう言いながらさつきまでの戦いを思い出す。

結局、かぶちーであの炎を躲し切ることができなかった。もしかしたら、かぶちーで勝つのは難しいかもしれない。

それでも、カガリにはかぶちーと一緒に勝ちたいんだよね。

「・・・ま、次いつ会えるか分かんないし、今はカイナに向かおう。お願いね、ミスタ。」

私はミスタに飛び乗ると、カイナに向けて飛び立った。

—————

「マシロのやつ、予想以上の強さだったね。」

オオスバメに捕まったまま、手の中にあるボールに目を向ける。その中ではキュウコンがスヤスヤと眠っている。

出会ったときは目も当てられない程だったのに、今ではあたしを手玉にとるぐらいに強くなつてやがる。さっきの戦いだって、キュウコンをマヒにしたり喉元を狙ったり、ペースは常にマシロが握ってた。引き分けたのだって相性が良かったからだ。

「相手がスターミーだったら、間違いなく負けてたね。それに、公式戦には1度も出てない火山を復活させたあいつ。」

あれには全く勝てる気がしない。

チツ。いつの間にか随分さきに行かれたもんだ。

「つたく、負けっぱなしはガラじゃない。あたしももつと強くなんないとね。」

そうつぶやくカガリの口調は少しだけ楽しそうだった。

## 91話

カガリとの戦いの後、休みながらカイナに向かった結果、結構な時間を経てしまった。

いつの間にか天気は崩れ豪雨が降り出し、カイナの町に着いたときには、大半が水の中に沈んでいた。

「うわあ〜・・・。大分酷いことになってるね。この雨のせいなのか、他の要因なのかは分かんないけど。」

これだけひどい有り様なら、どこかに避難所が作られてるはず。素直に造船所に行っても誰もいないだろうし、そっちに行ってみようか。

ボートが集まってるし、あの建物かな？

「・・・あれ?」

そう思っただけで周囲を見渡していると、水面をなにやらバシャバシャと泳いでいるのか溺れているのか、よく分からない様子で飛び跳ねているポケモンが目に入る。

「ミスタ、あそこまで降りれる?」

「ー」

ミスタはいつもの電子音で返事をする、一目散にそこに飛んでいく。

そのまま私はそのポケモンをサツと抱えあげ様子を見ると、そのポケモンはまだら模様の土色をしていた。

「見た目的に水タイプ・・・だね。ヒレもあるし。それなのに泳ぎが下手なのはなんでだろう。普段は流れの穏やかな川に住んでる子が流されたのかな?」

なーんかどっかで見たことあるような気がするんだけど。

まあ、いいや。

野生のポケモンならとりあえずボールに入れておこう。

確か、この前買ったヒールボールが鞆の中に・・・と。あつたあつた。

「が、ボールを近づけてもそのポケモンがボールに収まることはなかった。」

「あれ？入らないってことは、誰かの手持ち……？それなら、このまま避難所に連れて行くのか。」

「手の中でぐったり、というかどんより？しているポケモンを抱えて、避難所に向かう。」

「どうやら、病院をそのまま避難所にしてるようで私達はその屋上に降りる。」

「よつと。ありがと、ミスタ。……あれ？」

「屋上に降り立つと、屋上の端、手すりにもたれかかっている人影に気づく。」

「そして、その人影が誰か分かった途端、私は素っ頓狂な声を上げた。」

「ルビー？こんな雨の中、何してるの？」

「マシロさん……!？」

「私の声を聞いたルビーも素っ頓狂な声を上げた。」

「建物の中に入らないの？」

「中はちよつと……。居づらくて。」

「手すりにもたれかかったまま、こちらを見ずに呟くように話すルビー。」

「うーん、こつちを見もしないし、間違いなく何かあったみたい。」

「あのヒラヒラしたルビーの師匠には何かあったら後で殺すって言ったはずなのに……。後でしばらく。」

「何があったの？」

「……ボクは、マシロさんに言われるまで、サファイアがあの時助けた女の子だとは知らなかったんです。」

「へえ……。……え!？」

「あれ？もしかして、私のせい!？」

「余計なこと言った!？」

「私が余計なこと言ったから?？」

「いえ……。それに関しては問題ないです。ただ、次にあの子の前で戦うときは、自分で納得できる自分でありたい。そう思っていました。」



だから、ホウエン地方でもコンテストに出場して、全てのランクを制覇しようとしていたんです。」

問題ない、ようには全然見えないんだけど。

「そんな中で、ヒワマキシテイで再会しちゃったんですよ。ちょうどその時ブルーピッグの群れに遭遇て、咄嗟にサファイアを助けたんです。」

今のところ、問題はなさそうだけど。

「その後です。助けたことで、隠してた実力がバレちゃって……。それで、今ホウエンで起きている事態に対抗するため、ジムリーダー達が少しでも戦力が欲しいって。サファイアも協力するから、ボクにも力を貸してほしいって言われて……。でも、ボクはその言葉に首を縦に振る事が出来なかったんです。」

「それは、どうして?」

「コンテストを制覇してないボクだと、またあの子を恐がらせてしまうかもしれない……。いや、そもそもマグマ団のカガリって人にも足も出ませんでした。戦闘になってもボクだと足手まといになるかもしれない。そう思ったとき、つい興味ないって素っ気ない態度を取ってしまったんです。そしたら、サファイアはものすごく怒って、2度とその顔を見せるなって言われて……。」

ああ、なんか私の一言で事態がややこしくなってる……。

「それで、ヒワマキにはいられなくてコンテスト会場のあるカイナに來たんです。それなのに、ボクを追いかけてきた師匠が飛び入りで参加してきて、そのせいで美しさ部門だけリボンが取れなくて、MIMIに八つ当たりして……。ホント、何やってるんでしょうね。」

うーん……。なんか、1つ1つは小さいことでも、全部がダルマ式に悪い方に転がっていったって感じ?

というか、飛び入りって……。師匠なのに何やってるのよあのヒラヒラ。

しばくだけじゃ足りないかもしれない。

それより、さつきから妙にソワソワして腕の中のポケモンが落ち着かないんだけど。どうしたんだろう?

「まあ、八つ当たりはよくないね。ちゃんとMIMIに謝った。」

「・・・もう、MIMIはいないんです。八つ当たりした後、そのまま海の中に逃げ出しちゃったんです。」

「逃げちゃったんだ・・・。海の中だと、流石に見つかからないかあ・・・。」  
ルビーの為には探してあげたいけど、無理かなあ・・・。逃げ出した子を探すとしても、海の中を探すのは難しいよね。

「ところで、マシロさんはどうしてここに？」

「私？私は海底洞窟に行ける潜水艇がないかと思ってね。マグマ団とアクア団のリーダーを逃がしちゃったし。」

「・・・マシロさんも、戦ってたんですね。」

「まあ、成り行きでね。」

そう言うと、何故か余計に落ち込むルビー。

まあ、背中を向けてるから何となくそう感じるだけなんだけど。

「・・・マシロさんは成り行きでも戦ってるのに、ボクは大事な仲間がいなくなってから、こんなところで迷ってる。ボクだけが状況を変える方法を知っているっていうのに。」

「え・・・？それってどういうこと・・・っとお!？」

どういう事かと聞こうとした瞬間だった。

抱きかかえていたポケモンが飛び出したかと思ったら、回転しながら尾ビレでルビーの頭をスパアンと叩いた。

おお、いい音。

「マシロさん!?急に、どうし・・・た・・・。」

そして、引っ叩かれたルビーが振り返って自分の頭を叩いたポケモンを見た瞬間、驚いた表情で絶句する。

「MIMI!?どうして、ここに?！」

あ、この子がルビーの言ってたポケモンなんだ。

「途中で溺れてるのか泳いでいるのかよくわからない感じだったから拾ってきたんだけど、その子がMIMI?！」

「・・・はい。マシロさんは、父さんと戦ったときに少し見ただけでしたっけ?！」

「あー・・・。たしかにそうかも。」

言われたら、ルビーがお父さんと戦ってたときにチラツと見た様な気がする。ヤルキモノの攻撃を止めてたっけ？

「ごめん、MIMI。ボクはキミに酷いことを言ってしまった。引っ叩かれても、文句は言えな痛ぁー！」

今度は視線を合わせるために屈んで話すルビーの頬をスパアんと引っ叩く。

「あははっ!!MIMI、さっきまでとは打って変わって、元気だね。」  
「マシロさん!?笑ってないでなんとかしてくださいよ!!」

暴れまわるMIMIを両手で抑えながら、悲鳴を上げるルビー。

「ごめんごめん。でも、悩みのタネが1つ減ったじゃん。」

「え?・・・もしかしてMIMI、一緒に戦ってくれるってこと?」

自分の目の前の高さを持ち上げたMIMIに問いかけるルビー。  
そして、その言葉にうなづくMIMI。

「MIMIもこう言ってるけど、ルビーはどうするの?」

「・・・あの時と、同じですね。ボクが父さんと戦った時と。マシロさんが助けてくれて、今度はMIMIも背中を押してくれる。それなのに、ボクだけが逃げるわけにはいかないよね。」

そう言うと、ルビーはそっとMIMIを下ろす。

「君の口上、まだ行ってなかったよね。たとえその身が朽ち果てゆけども、変わらぬ心の美しさ。身につけたるは、思いやる心。名前は・・・っっ!!」

その時だった。MIMIの体を眩い光が包みこんでいく。そして、光が収まったときそこにいたのはさっきまでとは全く違う姿。

「これって、進化?」

長い体にピンクのようにも、水色のようにも見えるウロコ。

いや、そもそも見る角度によって色が違う・・・?なら、虹色って言うべきかな?

・・・というか。

「はえ〜・・・。すっごいキレイなポケモン。」

「キミ、だったんだね。ミロカロス・・・、ずっとボクが探していたポケモン。」

ルビーはMIMIの顔を少しだけ撫でると、ありがとうとつぶやきながらMIMIをボールに戻す。そして、私の方に視線を向けたときにはその顔にはもう迷いはなかった。

「マシロさんも、ありがとうございます。MIMIを連れてきてくれて。」

「偶然だよ、偶然。お礼を言われる事じゃないって。」

「それでも、MIMIの事以外でも、ずっとボクを助けてくれましたから。」

「そうかな?」

「そうですよ。言うなれば、マシロさんは、ボクにとって人生の師匠ですね。……っと、のんきに話してる場合じゃありませんでしたね。」

そういうと、ルビーは建物の中に駆けていった。

「吹っ切れたみたいだね。というか、私が師匠ねえ……。全然ガラじゃないんだけど。というか、もう1人の師匠は何してるの?」

はあく、とため息をつきながらルビーの後を追おうとした時だった。

雨音に混じって、不意にバシャバシャと水面をハネるような音が聞こえた。

「今のは……?」

屋上から下を覗き込むと、さっきのMIMIみたいに水面をハネるポケモン。

まあ、これだけ浸水してたらそういうポケモンもたくさん出てくるよね。

「ミスター!」

屋上から飛び降りるのと同時にミスタが私を受け止めるとその勢いのまま、ハネているポケモンをサツとキャッチする。

見ると、赤い体に長いヒゲ。

「今度は、コイキングかく。コイキングは元々泳ぐの下手だし、こんな状況だと溺れるのも当然かあく。」

「コイキチ〜!コイキチ〜!!」

そんな事を呟いていると、近くの建物からコイキチを探す声。

コイキチって、多分この子だよな。

スーッと声のする建物に近づいていくと、窓から顔を出して、コイキチと叫ぶ子供の姿。

「コイキチって、この子?」

「え?・・・わっ!!」

抱えていたコイキチは、その子の姿を見るやいなやその子の腕に飛び込んでいく。

「おお。すごく懐いてるね。」

「はい!あなたが助けてくれたんですか?」

「助けたというか、拾ったというか。まあ、そんな感じかな?」

「ありがとうございます。でも、この水害の中でどうやって?」

「ミスタがいるからね。水害ぐらい、なんてことないよ。」

「そっかあ。ならきつと、すごいトレーナーなんですね!!」

なんかこの子、微妙に話がズレてると思ったら目の焦点もあつてない。もしかして・・・。

「君、目が見えないの?」

「はい。あーあ、ボクにもそれだけの腕があれば、あなたみたいに困った人を助ける事ができるのに・・・。」

目が見えないのに他人の心配するなんて、優しいというかお人好しというか。

「大丈夫だよ。この事態をどうにかするために、たくさんの人が頑張ってる。」

そう言った瞬間、避難所から飛び上がる車。その上にはルビーの姿が見えた。

私の弟子が状況を変えられるって言うてるんだから、師匠である私が信じない訳にはいかないよね。

「コイキチは見つかつたんだから、君も早く避難しなよ。それじゃ!」  
そう言って少年の前から飛び上がると、宙を飛ぶ車を追いかけた。

## 92話

私はエアカーに追いつくとそのまま乗り込み、状況を確認している。

「カイオーガとグラードンを目覚めさせて、それを操ってるのが海底洞窟にいる、と。」

いや、それ間違いなくマツブサとアオギリじゃん……。  
というかその2体を操る宝珠って、あの時手下から手渡されてたやつ？

なおさら、あの時逃げられたのが悔やまれるなあ……。

「はあく。火山を復活させるんじゃないかなあ……。」

「え？火山ですか？」

「あー……。なんでもないから、気にしないで。」

火山を復活させてなかったらきからも戦えたし、

もしあのときらが全力なら、あの時2人を逃がすこともなかったのに。

あと、ルビーにも変な顔されたし。

「それで、その海底洞窟に行く手段は？」

「あの子……。サファイアが連れていたポケモン、名前をジーランスといいます。古代では、このポケモンと共に深海まで潜って漁をしていたらしいです。」

「その力を使えば、深海にある海底洞窟に行けるって事ね。」

「そういう事です。」

昔の人は海底まで潜って漁をしてたんだ。すごいなあ。

「ですが、行けると言ってもジーランス1体で何人も運べるわけじゃありません。」

「となると問題は、誰が行くか、かな。」

「はい。師匠達が乗り込むのが1番いいんですが……。先程ハギ老人に連絡した所、確定ではありませんが大人1人、もしくは子供2人が限界。との見立てでした。」

「まあ、1体だけで海底まで大人を何人も運ぶのはしんどいよね。となると、相手は2人。」

そこでルビーは言葉を区切る。そして、意を決した様に言葉を続けた。

「なので、海底洞窟にはボクとサファイアが向かおうと思います。それで、師匠達にはグラードンとカイオーガの方を止めてほしいんです。」

「いいの？子供って条件なら、背が低い私も行けると思うけど……。それに、今のマツブサとアオギリ、宝珠の影響でどうなってるか……。」

ミスタのメテオビームを防いだあの時、一瞬見えた影。あれはグラードンとカイオーガで間違いないと思う。あの2人にミスタのメテオビームが防げるとは思えないし。

だとすると、今あの2人はグラードンとカイオーガからエネルギーの供給みたいな、何かの影響を受けてるんじゃないかと思うんだけど……。

「それでも、超古代ポケモンの2体を放っておく理由にも行きません。それを止めるならボクより、マシロさんの方が適任です。流石に、超古代ポケモンより海底洞窟にいる敵の方が強い。なんてことはないでしょう?」

「それはない。というより、トレーナーとして見ても多分ルビーの方が強いかな?」

マツブサとアオギリと戦った感じと、ルビーが自分の父親と戦った時の感じを比べても、あの時の実力を出せるなら問題ないと思うんだけど……。

宝珠の影響がどう出るか、が問題かなあ……。

「なら、師匠達はグラードンとカイオーガを止めることに専念して下さい。それが1番被害が少なくなるはずですよ。」

確かにルビーの案だと、私達がグラードンとカイオーガを止めてる間に宝珠を取り返せば被害はほぼない、と言える。

「だが、確実に宝珠を取り戻す事を考えるならマシロ、君が行ったほうがいいのでは?」

このタイミングで口を挟んだのは、乗っているエアカーを運転しているミクリ。

「え？ルビーがやるって言うてるのに、なんでこっちの師匠は水をさすようなことを言うのかな？」

おもむろに口を開いたかと思えば、ルビーの決意に水を差すようなことを言うから、思いつき襟を引つ張ってやる。

「ぐっ！襟を引つ張るのは、やめたまえ！」

コンテストといい、今といい、水をさすことしかしないじゃん。

ルビー、こんなのが師匠でホントにいいの？

「師匠っていうなら、少しぐらい弟子のことを信頼しなよ。最小の戦力で宝珠を取り返して、最大戦力でグラードンとカイオーガを止める。これが一番いいでしょ？」

「むう……。」

不服そうではあったけど、納得したように口を閉じる。

ま、そうは言ってもきちららが眠ってるから、どれだけ力になれるかはわかんないんだけどね。

「マシロさん……。ありがとうございます。」

「いいのいいの。決めたのはルビーなんだから。……それより、気をつけてね。ルビーなら大丈夫だと思うけど、宝珠の影響がどう出るかわからないから。」

「分かりました。……でも、どうしてマシロさんは、こんなにもボクのことを助けてくれるんですか？」

私の言葉に頷くと、疑問に思ったのかそんな事を聞いてくる。

「あー……。やっぱり気になる？」

「そうですね。昔、少し会っただけなのにここまで親切にしてくれるのはやっぱり気になりますね。」

「私、友達少ないからね。その少ない友達が困つてるとき、手を貸したくなるんだよね。」

そう言うと、ルビーは少しだけポカンとする。

「……ちよつと、意外です。」

「そう？ま、ルビーだってサファイアを助けたいから今こうしてるん



でしょ？それと同じだよ。」

「・・・そうですね。」

すると一転、今度はスツと納得したような表情になる。

それに、1度は守りきった相手だもん。ルビーにはサファイアと仲良くして欲しいよね。

・・・もし、あの時ブルーを助けることが出来たら私達はどんな関係になってたんだろうか？

「・・・マシロさん？どうかしましたか、急にボーつとして。」

「つと。何でもないよ。ただ、こうなる前にアクア団とマグマ団を何とかできなかつたのかなく、つて。」

危ない危ない。ちよつと考え込んでたみたいだから、咄嗟に適當なことを言っておく。

「・・・そう言われると、耳が痛いな。だが、君もチャンピオンなら知っているだろう？ポケモン協会も万能ではない、と。」

「それはもう、嫌って程知ってるよ。お飾りのチャンピオンを祭り上げるぐらいだしね。」

「お飾り、ですか？そんなことはないと思いますけど。」

「ま、はたから見ればそうだろうね。」

というか、そう見えないと私がチャンピオンにやった意味がないし。

「どういうことですか？」

「ルビーは、仮面の男がおこした事件は知ってるよね？」

「はい。ロケット団残党を率いてポケモンリーグを台無しにした事件ですよ？そして、それを止めたマシロさんが繰り上げとしてチャンピオンになった。ジムバッジも集めていたので資格は十分だ、と。」

「そうそう。そっちのヒラヒラしてる方は？」

「・・・概ね同じだ。あと、ヒラヒラはいい加減やめたまえ。」

絶対やめてあげない。

「ということは、ポケモンリーグを中止にして優勝者なしになるよりも、繰り上げでもいいから新チャンピオンが誕生したほうがいい理由があった、つてことですか？」

「そうそう、ルビーは察しがいいね。新チャンピオンを祭り上げることで、世間の目はポケモンリーグをめちやくちやにした仮面の男から、その仮面の男を止めた新しいチャンピオンに注目したんだよ。」

「あの大々的なエキシビジョンマッチですね。」

「うん。その結果、仮面の男の正体については誰にも触れられることはなく、世間の記憶から消えていった。」

「仮面の男の正体・・・?」

エアカーを運転しているヒラヒラの師匠が不思議そうな声を上げる。

「ってことは、やっぱり他の地方にはこの情報は伝わってないね。」

「・・・つまり、仮面の男の正体が世間に知られることはポケモン協会にとつては不味いことだった、ってことですか?」

「・・・ツツ!!・・・まさか!?!」

ルビーがそう呟いた瞬間、声を上げたのはヒラヒラの師匠。

「お、流石にジムリーダーをやってる方は気づいたかな?」

「・・・あの事件で、ジョウト地方のジムリーダーが1人亡くなったと聞いているが、そういうこと、なのか?」

「そういうこと、だね。」

「・・・なんとということだ。」

そう呟きうなだれるヒラヒラの師匠。

そして、そこまで話すとルビーも理解した様子。

「待って下さい!!それじゃあ、仮面の男の正体はその亡くなったジムリーダーで、ポケモン協会はそれを隠すためにマシロさんを祭り上げたってことですか!?!」

「流石ルビー、大正解だよ。」

師匠とは裏腹に声を上げるルビーにパチパチと手を叩く。まあ、この辺の事情は後から説明されて実質、事後承諾だったけどね。

「ルビーがそんな顔しなくていいよ。一応、私にもメリットがあったしね。」

何故かルビーがしよぼくれた顔をしていたので、一応悪いことだけじゃないことは伝えておく。

「そうなんですか?」

「そうそう。まあ、この辺はルビーに言っても分かんないだろうし、気にしないでよ。そんな昔のことより、気にしないといけなのはルビーの方だよ。なんてったって、海底洞窟に乗り込むんだから。」

「君達、見えてきたぞ。」

運転しているヒラヒラ師匠の声で、私達は前を向く。視線の先には荒れた海の上のホエルオーの背中に乗っている2人の人影。

「それじゃ、ルビー。頼んだよ。」

「はい。行きましょう!」

――エキシビジョン後の1幕――

「ふうん。私を祭り上げたのはポケモン協会の不祥事を隠すためだった、と?」

「事後承諾になったのは申し訳ないと思っている。このことはオーキド博士にも伝えていない。ただ、繰り上げで君を新チャンピオンにしたい、とだけ言っただけだ。」

「だろうねえ。伝えてたら、間違いなく断られてただろうし。」

まあ、直接私に言っても間違いなく断ってたから、外堀から攻めたのは正解だったよ。

こういうセコいことは得意だね、ポケモン協会。

「ま、なったものは仕方ないし、その思惑には乗ってあげるよ。」

「助かる。」

「でも、そういう事ならこっちの頼みも聞いてくれるよね?」

「何かな?」

「ブルーとシルバー。2人とも、仮面の男のせいで生きていくために色々汚いこともやってきたと思うんだけど、お咎めなしにしてほしいんだ。」

仮面の男のせいで人生歪められてるんだからね。その仮面の男の

正体を隠すなら、その辺りのケアもやって欲しいものだけだ。

「分かった。マスク・ド・チルドレン仮面の子供達と呼ばれた者たちには便宜をはかっておこう。」

「どうも。」

ブルーとシルバーみたいな子が他にもいたんだ。

まあ、他の人はどうでもいいんだけど向こうが勝手にやってくれるのなら別にいいか。

「全く……。ロケット団の幹部といい、仮面の男といい、ポケモン協会の内部はどうなってるの?」

「・・・返す言葉もない。」

「まあいいや。ブルーとシルバーの2人がお咎めなしになるなら、世間の目ぐらいいくらでも集めるし。」

少なくとも、私を庇って攫われたブルーの分は派手にチャンピオンをやっておこう。

## 93話

「あたしなら5分、頑張れば10分息がもつけん!!」

「やめるんだ、サファイア!!」

近づいた瞬間、言い争う声が聞こえる。

まあ、この悪天候の中、はつきり聞こえたのはサファイアの声だけで、様子から察しただけなんだけど……。

というか、この悪天候の中でも聞こえる程の大声。相変わらずパワフルだねえ。

「気持ちには分かるが、海底洞窟は想像を絶する深さだ！悔しいが、今の私達にそこに行く方法は、ない……。」

そして、サファイアと一緒にいる人の声が聞こえる距離になった瞬間。

「方法なら、ありますよ!!」

ルビーがそう言いながら2人の乗るホエルオーの背に飛び降りた。

あ、2人じゃなかった。おじいさんとおばあさんがいるや。逃げなくて大丈夫なのかな？

「アンタ、何しに来たったい!」

「まあまあ、サファイア。落ち着いてよ。」

「マシロさん!?なんでコイツと!?!」

私もルビーに続いて飛び降りると、サファイアに声をかける。

なんかすぐく驚いてるけど、それよりなんで葉っぱなんて着てるの？そっちのほうが驚きなんだけど。

「それは、後で。それより、文句は話を聞いてからでもいいでしょ?」

「ぐぬぬ。マシロさんがそう言うなら……。」

「OK!それじゃ、続けるよ。船乗りのおじさん、ハギ老人から聞いた話ですが、大昔の人はポケモンの力で深海に潜っていたそうです。そのポケモンが、今、彼女が抱えているポケモン、ジーランス。ジーランスの技、ダイビングを使えば潜水艇がなくても海底洞窟まで行ける!」

「バカな!!」

そこまで話した時を上げたのはサファイアの隣にいた女性。確か、ジムリーダーの……。

誰だっけ？

「信じられん。ポケモンの力で深海に行く？この非常事態に聞いたこともない昔話、アテにできるわけが……!!」

「待って、先生!!その話……。あたしは信じるけん!!」

昔話って聞く耳を持たない態度に対して、意外とサファイアがすんなり信じてくれる。

「このじらら、さつき津波に襲われた時に不思議な力を発したと。それで、一瞬やったけど水があたしらを避けたんよ。それを思えば、今の話も……。」

「OH!なかなか話が分かるじゃないか。それじゃ、ちよつと待ってよ。……あ、もしもし?度々どうも。……え、体長?えーつと、80cmぐらいですかね?あー、少々小ぶり……。ハイ。」

そう言ってルビーはポケギアを取り出し電話をかけると、メジャーを使ってジールランスのサイズを測っていく。

「あー、そのぐらいだと子供2人が限界?分かりました。ありがとうございます。……。」

「子供2人って、まさか!」

「そのまさかだ、ナギ。ルビーが自ら行くと言っている。ジールランスの持ち主である彼女とね。」

声を荒げたナギを諫めるように、ヒラヒラの師匠がエアカーから降りてきて話しかける。

あー、そうだ。ナギって言ってたっけ、この人。

「無茶だ!潜るだけじゃない、グラードンとカイオーガを操るものと戦うのだぞ!」

「私の弟子だ。今は彼を信じてみようと思う。」

「お?少しは師匠らしいことを言うじゃん。」

「フツ。君のルビーに対する師匠としての立ち振舞に感化されたのかもしれないな。」

ようやく師匠らしいこと言ったんじゃない？

そう感心していると、今度はサファイアが声を上げる。

「ちよつとー！アンタ、どげんこつ?!あの人が師匠って、マシロさんとうんな関係ね!?!」

「おいおい。そんなことより、キミはまだそんな格好をしてるのかい？これから海に潜ろうって時に葉っぱとツタじゃあね。」

「そんなことじゃなか・・・。」

「ほら。」

そう言つてルビーはサファイアの言葉を遮り、サファイアに向けてサツと服を差し出す。

「キミの分も作つておいた。きつと、キミに似合うと思う。」

そう言われたサファイアは、一瞬だけ顔を伏せる。そして、ルビーの手から服をひつたくるのように受け取るとサツと腕を通していく。

「話は後で聞かせてもらうけんね!なんでマシロさんと一緒にいるのかとか、師匠ってどういうことなのかとか!!」

「ふふつ、分かったよ。」

「それと、マシロさん!」

「え、私?」

サファイアの言葉にルビーが笑っていると、今度は何故か私を呼ぶ。

「ルビーが弟子って言うなら、ムロで特訓してもらったあたしだって、マシロさんの弟子って言っても問題なかよね!」

「いや、別にいいけど・・・。それってそんなに大事?」

「当然ったい!コイツだけがマシロさんの弟子なんて我慢ならんね!!」

競争してるってだけあって、すごい張り合うねえ。でも、私の弟子かどうかで張り合わなくてもいいんじゃない?

「まあ、やる気になってるからいいか。それより、2人共気をつけてね。海底なんて、何かあっても助けにはいけないから。」

「はいー!」

「任せるったい!」

2人は私の言葉に頷くと、互いに手を取り合いジーランスの背びれを掴む。そして。

「せーのっ!!」

と！声を合わせて叫ぶと海に飛び込んでいった。

「・・・さあ、2人が深海に行った今のんびりしてはいられない。宝珠を奪還するまで、少しでも被害を食い止めなければ。私は、ツツジとトウキと合流すして、グラードンを食い止める。ナギ、マシロ。キミたちはどうする?」

「私は、司令塔としての役割がある。本音を言えば私も合流したいのだが、難しいだろう。」

「それなら、私は・・・ん、何この音?」

言いかけたとき、妙な音が段々と近づいてくるのが聞こえた。

「上だ!」

ヒラヒラの声で上を見上げると、豪雨の中姿を表したのは巨大な飛行船。

そして、その瞬間ピリリリとポケギアが鳴る。

「ギアが通じた!?もしもし!?」

『私だ!』

「理事!!すると、まさか!」

『そうだ。私は今、この巨大飛行船バ・グーンのなかだ。察しの通り、ミナモもグラードンの影響で人がいられる状態ではなくなった。故に、有事のため移動システムを起動させ、本部ごと空に舞い上がった!』

おお、なんか便利そう!!

『ここまでご苦労だった、ナギ。ここからは私が指揮を取る。』

「なら、私は・・・!!」

『行つてくれ!すでに交戦中のジムリーダーに合流し、超古代ポケモンの進撃を阻止せよ!あと、そこのおじいさんとおばあさんは飛行船に乗ってください。この天変地異だと、下手なところにいるより安全でしょう。』

そう言われたおじいさんとおばあさんは、チリーンのねんりきかな



？そのままふわふわと飛行船に飛んでいった。そして、ナギはチルタリスに飛び乗ると、ゴーグルを装着する。

「聞いている通りだ。私はアスナとテツセンさんと合流し、カイオーガの方に向かう！」

「うむ。なら、マシロ。キミはどうする？」

「うーん……。」

数はキレイに分かれた。なら、きららがまだ本調子じゃない以上、私は少しでも有利な方向に向きたいけど、どうしようかな。

とりあえず、道具がどれぐらい残ってるかな？

そう思って、鞆を開ける。

カガリと戦ったあとにも使ったし、そんなにも余裕は……。

あれ？これって……？

「……マシロ？」

「……っと、何でもない。私はちょっと後から合流するよ。」

「そうか……。だが、キミが手を貸してくれるだけで心強い。ナギ、行こう！」

「ああ!!」

そう言って、2人はこの場で分かれて飛び立つ。

それを見送ると、私はきららの入ったボールを手のひらに乗せて話しかける。

「きらら、起きてるっ？」

『ねてるっ。』

よしよし、起きてるね。

「そっか。今、どれぐらいエネルギーは戻ってる？」

『さんわりぐらいー？』

寝てるらしいけど、素直に答えてくれるきらら。

3割……。それだと、ジムリーダーと協力しても止めれるか微妙なところ。なら、さつき見つけたアイテムに頼ったほうがいいかもしれない。

まあ、それも博打みたいなものだけど。

「それでも、うまく行けばグラードンとカイオーガ。両方なんとかで

きるかもしれないなら、悪くない賭けかも。」

『どうするの？』

そう言いながら、ポンツとボールから飛び出したきらら。

「来てくれるか分からないけど、強力な助っ人を呼ぼうかと思って。」

『すけっと？』

「うん。だから私達は一旦、えんとつやまに向かうよ。」

『えんとつやま？』

「私知ってる中で、ホウエンで一番高い場所だから。こっちの合図が1番届くんじやないかな、って。」

まあ、そもそも届いても助けてくれるかも分からないから、願望込み込みの希望的なところが大きいけど。

「えんとつやまについたら、またきららにお願いしないといけないんだけど……。また無理させてごめんね。」

『うゆ。がんばる〜。』

少し眠たそうにしながらも頷いてくれるきらら。

ホント、いつもきららには助けてもらってばかりだね。

「それじゃ、私達も動こうか。ミスタ、お願い！」

私は、ボールから飛び出したミスタに飛び乗るとそのまま一直線にその場を後にした。

—————

そして、その少し後。

えんとつやまから立ち上った一筋の閃光。

それを目撃したのは……。

—————

「機嫌よく爆進してんだ。邪魔はさせないよ、ジムリーダー！」

「……っ！離しなさい!!」

ジムリーダーのツツジの襟を掴み、そのまま人気の消えたミナモの

町に飛び立つ。

「……ん？」

そして、そのさなかえんとつやまから立ち上った一筋の閃光を目にする。

「今の光は……？」

「あれは、マシロの……？。マシロのやつ、またなにかやろうとしてんのか？……っと、今はこいつが先か。ほらよっ！」

「きゃっ!!」

ツツジを放り投げた先は、民宿モナミ。

民宿として開店しているはずの店も、この騒動で今や無人。

「さて……。この状況でマシロのやつが何をやっているのかは気になるが、まずはグラードンのやつを自由にさせないと、ね。」

「……あなたの狙いは、とおせんぼでグラードンの動きを封じているノズパス、ですね。そのために私達を分断して各個撃破、といったところでしょうか？」

「お？本を片手に持つてるだけあって勤勉だねえ。その通りだよ。」

カガリがそう言うと、ツツジはハアと深いため息をつく。

「私達ジムリーダーを相手に各個撃破……。なかなか舐められたものですね。」

「ハンデもつけようか？」

「安い挑発ですね。……分かりますよ？少しでもこちらのペースを崩そうとしてるんでしょうが、その手には乗りません。」

「……チツ。」

思惑通りにはいかずに舌打ちをするカガリ。

事実、ツツジはノズパスを守るだけでグラードンの進撃を止め続ける事ができる以上、カガリの挑発にのる必要もない。

「小細工は不要ってわけだ。なら、さっさと始めようか!!」

故に、これ以上の問答は不要だった。

## 94話

「ユレイドル、まぎつく!!」

先に動いたのはツツジ。

ユレイドルから伸びる触手がキュウコンに絡みつく。

「へえ・・・? 保守的なことを言っていた割には、好戦的じゃないか。」  
「守るだけでいいとは言いましたが、倒してしまっても問題ありませんもの。」

「言うじゃないか。・・・だが、正面からの押し合いでこのあたしが負けると思ってるのかい!?!」

瞬間、キュウコンの体から炎が吹き上がり、絡みついた触手を伝いユレイドルの体をも燃やしていく。

「あら、言うだけの事がありますよね。これだけの炎、アスナさんでも出せませんかよ?」

「あんたこそ、そんな悠長でいいのかい? このままだと、消し炭だぜ?」

そういう間にもユレイドルの体に炎が燃え広がり、その体がぐらりと傾く。

(正面からのぶつかり合いで負けたのなんて、アイツぐらい・・・ん?)  
カガリが先日戦った白い髪の女の子が脳裏をよぎった瞬間、ユラリと倒れかけていたユレイドルの体がムクリと起き上がる。

「何っ・・・!?!」

そして、そのままキュウコンを投げ飛ばすと、襖を突き破っていく。

「ここが畳敷きの民宿で助かりましたわ。ホテルのような、コンクリートや大理石の床だと、こうはいきませんもの。」

「床・・・? チツ、キュウコン!!」

カガリの声と同時に崩れた襖の奥から飛び上がるキュウコンが、ユレイドルの足元の畳を焼き尽くしていく。

そこには、むき出しになった地面に張り巡らされているユレイドルから伸びる根っこがあった。

「ねをはる、か。こいつで体力を回復していたってわけか。」

「ご明察、ですわ。」

「ハッ！好戦的と見せかけて、裏ではちゃっかりセコいことをやってんのな。流石は、ジムリーダー。食えないねえ。」

「あなたのキュウコンだって、ほとんどダメージがないじゃありませんか。」

鼻で笑うカガリの言葉を軽く流すツツジ。

だが、今の攻撃でダメージがない事に少しだけ驚いた声を上げる。

「あの程度で音を上げるような、ヤワな鍛え方はしてないんでね。」

「それは残念ですわ。」

（それに、あの程度でやられるようじゃアイツには勝てないさ。）

「それじゃあ……。根っこをはって動けないアンタに、相応しい舞台を用意してやるよ！キュウコン、ほのおのうず！」

瞬間、ユレイドルどころかカガリとツツジすらも覆うように炎が吹きあがる。

自身すらも巻き込む、遠慮のない攻撃にツツジの表情は歪む。

「クッ……。アナタ、正気ですか!?!自分すら巻き込むような炎、アナタだって無事では済みませんよ!?!」

腕で顔を多いながら焦るツツジとは裏腹に、涼しい顔をしたままその場を微動だにしないカガリ。

「この程度の炎で音を上げるなんて、だらしないねえ。……………ん？」

「「ひええく〜!!」」

その時、燃え移った炎が襖を燃やし、奥に隠れていた3人の人影があらわになった。

「あわわわ、おれはプログラマー！ハウエンはどんな所か楽しみに旅行に来たのに……。」「

「お、おれグラフィッカー！ちよつと寝てる間にこんな事になるなんて!!」

「ぼくはゲームデザイナー！ハウエン地方って怖い!!」

そして、3人で固まりながらガタガタと震えながら自己紹介を始め

る。

「まだ人が・・・!!」

「チツ・・・。ウゼエな！自己紹介なんかしてんじゃねえよ。キュウコン！」

そう言うと、キュウコンの口にエネルギーが溜まり始める。

「不味いですわ！あなた達、早く逃げ・・・!!」

「はかいこうせん!!」

放たれた閃光は3人の方に一直線に向かつてく。

「アナタ、なんてことを・・・!!」

「あん・・・？何を言ってるんだ、あんな奴ら勝負の邪魔だろ？」

抗議の声を上げるツツジに対してカガリは、またもや涼し気な顔で何でもないように言い放つ。

そして。

「聞こえただろ？さっさと失せな！」

3人がいた方に声をかけた。

「え・・・？」

その様子に困惑の表情を浮かべながら、もう1度3人の方に向き直るツツジ。

そこには固まってガタガタと震える3人と、その横に空いた大きな穴。

その穴は民宿を貫通し、外への1本道ができていた。

「「ヒィ~~~~!!」」

それを見た瞬間、3人は悲鳴を上げながらその穴を駆け抜けていく。

「ハッ！みつともない連中だね。」

その背中を見送りながら、吐き捨てるカガリ。

だが、ツツジはその様子を驚いた顔で見つめる。

「アナタ・・・。まさか、あの3人を逃がすために？」

「はあ？そんな訳ないだろ。邪魔だったただけだ。」

ツツジの問いかけに何でもなしに返事をしたカガリだったが、内心ではツツジと同じく自身の行動に驚いていた。

(チツ……。確かに、あんな連中助ける義理なんてないはず……。マシロと同じ温泉なんかに入ったからか、アイツのお人好しが移ったか……。)

「アナタ、お名前は？」

「……カガリ。」

「カガリさん。私、少々あなたのことを誤解していたようです。てつきり、目的のためなら手段を選ばない方だと思っていました。」  
「誤解じゃないさ。これからアンタは、それを身を以て知ることになる。」

カガリがそう言うと、キュウコンの尻尾の先に炎が灯りキュウコンの頭上に集まっていく。

その炎はドンドンと大きくなり、次第に巨大な火球となっていく。  
「あら、今度は大技ですか？ですが、私のユレイドルは常に根からエネルギーを吸い上げています。倒すことは不可能ですわよ？」

「そいつはどうか？」  
「……どういうことですか？」

カガリの言葉に眉をひそめるツツジ。

「気づいてないなら、教えてやるよ。アンタのユレイドルをよーく見てみな。」

「……つつ!!これは……!!」

そう言われ、ユレイドルを見たときにようやくその異変に気付いた。

ユレイドルの焦げた肌が治っていないことに。

「ユレイドルが、回復していかない!?どういう事ですの!？」

「分からないなら、教えてやるよ。1つは周囲を囲む炎。これが常にユレイドルの体をジリジリと焼いている。」

「ですが、それだけで回復できないなんて事には……。」

「1つって言っただろ？もう1つは、ある意味アンタが原因だ。」

「……私?……ハッ、まさか!？」

原因が自身にあると言われたツツジは周囲を見渡す。そしてノズパスを見た瞬間、何かに気付いたように空を見上げた。

そこには、グラードンが作り出した擬似的な太陽。

「ようやく気付いたようだね。グラードンがここに居続ける限り、あの太陽も動くことはない。そして、あの太陽によって、この大地は枯れ果てている。……つまり、この大地にはユレイドルが吸い上げられるものなんて、何も残っちゃいないってことさー」

「くっ……！ユレイドル!!」

「遅え!!」

そして、ユレイドルに指示を出そうとした瞬間。

それよりも早くキュウコンの作り出した火球がツツジもろともユレイドルを飲み込んだ。

「きゃああああああああ!!!」

悲鳴と共に燃え上がる爆炎。

「いくら耐久に優れてると言っても、こんだけやれば倒れんだろ。」  
炎を眺めながらそうつぶやく。

すると、遠くで足を止めていたグラードンが動き出すのが見えた。

「ん？ついでにノズパスも倒れたか？」

「……っつ。……ええ。炎が当たる瞬間、ノズパスが私を庇ってくれましたから。」

カガリの言葉に答えたのは、炎の中から姿を表したツツジ。

その姿は所々が焼け焦げていたが、体は無事の様子だった。

「お陰でグラードンは動き出すわ、服は燃えるわで大変ですわ。」

「ユレイドルもろとも燃やし尽くしたつもりだったんだがな。」

「あら？それなら、加減したのはどうしてですか？わざわざ私の足元を狙う必要ありませんでしたよね？」

「チツ……。根を張ったままで、また起き上がられても面倒だからだ。深読みすんな。」

「フフツ。分かりましたわ、そういう事にしておきましょう。」

「そうしろ。ついでに、本なんか持ってないでもっと周囲を見たほうがいいぞ。」



「・・・最近、他の方にも似たようなことを言われましたわ。」

ツツジの脳裏をよぎるのは、いつかのジム戦で戦った女の子。

(しかし、サファイアとは比べるまでもない程の実力でしたわね。しかし、吸い上げられるエネルギーが無いことには先に気づいていたのですから、そんなことをする必要はないことは分かっていた筈なのに。案外お人好しな性格なのでしょうか・・・?)

(チツ・・・。確かに、さつきからあたしらしくねえ。マシロのお人好しが移ったか?)

そんなツツジの思いとは裏腹に素っ気ない態度を崩さないカガリ。

だが、カガリ自身。内心では自身の行動に困惑していた。

「1つ聞いていいですか?」

「あん?」

「なぜマグマ団に?」

「・・・さあね。なんでだったかな、忘れちゃったよ。」

「そうですか。」

そんな質問にも素っ気なく返すカガリ。

だが、ツツジはそのことを微塵も気にすることなく言葉を続ける。

「では、もう1つだけ。・・・アナタ、きつとマグマ団には向いていませんわ。」

そして、その言葉を聞いた瞬間カガリは大きくため息をついた。

「ハア・・・。あたしも最近、似たようなことを言われたよ。マグマ団をやめろ、ってね。」

「あら? 良いお友達じゃありませんか。そのお友達、大事にしたほうがいいですわよ?」

「・・・友達じゃねえよ。」

そう言ってそっぽを向くカガリに対して、ツツジは少しだけ笑う。

「フフツ。そうですか。」

「何を笑ってるのさ?」

「いえ? 友達とは言わなくても、きつと良き関係なのだろうな、と。そう思っただけですわ。」

「チツ・・・。ん?」

その時だった。ルネの方角から巨大な衝撃が走り、地面を揺らす。「どうやら、グラードンとカイオーガの方でもなにかあったみたいだね。まったく、無駄話なんかしてたから世紀の瞬間を見逃しちまったじゃないか。」

「あら、それはごめんあそばせ?。」

「心のこもったねえ謝罪だなあ、おい。まあいいさ。それじゃ、アタシは行くぜ。」

ハア、とため息を付きながら飛び上がるとカガリはそのまま飛び去っていった。

「・・・トドメも刺さずに行ってしまうなんて、本当に甘い方ですねえ。」

「ふう・・・。妙に疲れる戦いだっとな。」

ツツジとの1戦のあと、カガリが降りたのはミナモの灯台の頂上。そこから町を、辺りを見渡す。

「しっかし・・・。大地を増やすつつてもよ、こんな枯れ果てた大地なんかを増やしても、ポケモンはおろか、人間だって住めやしないだろうに・・・。本当にこれで良かったのかよ、リーダー・・・?。」

見下ろした先に広がる枯れ果てた大地を前に小さく呟くと、ルネの方に視線を向ける。そして、迸るエネルギーにため息をつく、今度はえんとつ山の方に視線を向ける。

「ま、なっちまったもんは仕方ない。ルネからエネルギーが広がっている以上、あつちには行けないからねえ。今は、マシロのヤツが何をやってるのか、覗きに行くとしますかね。・・・ツ、これ・・・は・・・!!」

そう言って再度飛び上がった瞬間、カガリは強烈な光に飲み込まれた。

カガリが光に飲み込まれた同時刻。

「クツ・・・!!今の光は・・・!!ハッ、あの子は!」

そう言っつて、ダイゴはさつきまで握っていたはずの少女の方を見る。が、既にそこには誰もおらず少女の手を握っていた筈のダイゴの手は、空を握っていた。

「はぐれてしまったか・・・。」

「ダイゴくん、どうするの?」

「やむをえん。心苦しいが・・・。伝説のポケモンが目覚めた以上、ここで悠長にはしていられない。行こう、フヨウ。」

「分かった。」

ダイゴと共にいるもう1人の女性、四天王の1人であるフヨウに声をかけると、それぞれメタグロスとメタングと共に飛び上がる。

「でも、これ程までに広がるエネルギーの本流。合流するのにも一苦労、だよな。」

「全くもって、その通りだ。・・・うおっ!!」

その瞬間だった。ダイゴとフヨウの側を一瞬で何かが通り過ぎた。

「ダイゴくん、今の・・・。」

「分からない。だが、このエネルギーの本流の中を突き進むことの出来る程のポケモンが手を貸してくれるというのなら、これほど心強いことはない!」

この時、ダイゴ達が目にしたのは銀色と虹色の軌跡。

そして、その背に乗っていたのは・・・。。。

—————

「あれ?今、誰か追い越した?んく・・・。流石にこのエネルギーの本流の中にいるわけ無いか。」

いやはや、それよりもこの2体がワザワザこんな遠い所まで来てくれて、手を貸してくれるなんて大感謝だね。

乗っている背中をさすりながら、心のなかでお礼をいう。

それじゃ、頼んだよ。

ホウオウ、ルギア。

## 95話

「んん．．．っつ。ここは．．．?」

目を覚ましたカガリは、体を起こしながら周囲を見渡す。

辺りは木に囲まれ、気を失っている間に森の中に飛ばされた様子。

「ルネから放たれた光に巻き込まれて、よくわからない所に飛ばされたか．．．?しつかし、どこの森だここ．．．?」

辺りを見渡していると、側で倒れ込んでいるオオスバメを見つめる。

が、ひと目見た瞬間カガリはオオスバメをボールに戻した。

「あの様子だと、しばらくは飛べなさそうだな。空から出るのは諦めてるしかないか．．．なら、キュウゴン。」

そして、代わりにキュウゴンをボールから出すとその場から、歩き始めようとした瞬間。

ふと違和感に気づく。

「．．．さつきから、何かの気配がするな。」

そう呟いた瞬間、後ろの木の上から電撃が放たれ一直線にカガリとキュウゴンに襲いかかる。

「チツ!誰だ!」

身を翻し、電撃を躲す。そして、電撃の放たれた方に向き合う。

「上だ!キュウゴン、かえんほうしゃ!」

そして、木の上に向かってかえんほうしゃを放った。

すると、慌てたように木の上からポトツと落ちてきたのは2体のポケモン。

「プラスルとマイナン?ハッ、いきなり攻撃してくるとはいいい度胸．．．。」

そこまで言っただけカガリは、マイナンの手にある古びた手帳に気づく。

「この手帳は．．．。もしかしてお前ら、捨てられ船にいたチビ共か!」  
楽しそうに言うカガリとは対象的に、プラスルとマイナンは体を起

こすとバチバチと放電してカガリを威嚇する。

「あのときは、大分ボロボロにしてやったと思っただがなあ。それなのに、このあたしにまた立ち向かってくんのか。．．いいねえ。気に入った。」

そう言つて、無防備にツカツカと2体に歩み寄る。そして、そのまま無造作に掴み上げるとポイッとキュウコンの方に放り投げる。

キュウコンは2体を尻尾で受け止めると、そのまま滑り台のようにスーツと滑らせ背中に乗せる。

「状況が分からねえ中、いがみあつて体力を消耗すんのは得策じゃねえだろ？ここは一時休戦というじゃないか。」

そう言いながら歩き出したカガリは、木になつていたきのみをもぎ取る。

「オボン、か。ほらよ。」

そして、もう1つ追加でもぎ取ると1つをキュウコン、もう1つをプラスルとマイナンに放り投げる。

キュウコンはきのみにそのままかぶりついたが、プラスルとマイナンの方に投げられたきのみは、1度プラスルの頭で跳ねた後マイナンの手の中に収まった。

—————

「う．．ん。．．は？」

そして、ほぼ同時刻。

同じ様に目覚めたのはルビー。そして、目に入ったのは草原の様な風景。

「確か、海底洞窟から上がってきて．．．ルネシテイで戦っていたはずなのに．．．そうだ！カイオーガとグラードンの激突に巻き込まれて．．．。サファイアは!？」

飛び起きたルビーは、ハツとして周囲を見渡す。すると、すぐ側に倒れているサファイアを見つけ、その体を揺さぶった。

「サファイア！しつかり!!」

「ん・・・ん？あれ、ダイゴさんは？・・・それに、ここは？」

「分からない。あの激しい戦いの中、ハウエンが大混乱の中でも、その影響を全く受けない美しく、そして穏やかな場所。」

サファイアと共に周囲を見渡すルビー。

そして、状況が飲み込めず混乱する2人に歩み寄る人影。

「ボンジュール、ご両人。お目覚めですか？ようこそ、この最終特訓の地へ。」

その声に振り返るルビーとサファイア。

そこには、1人の中年の男。そしてその後ろに双子の様な子供が2人。

「あなたは誰ですか!?それにここは!？」

「あたしらは、大混乱の中にいたとやのに、どうなつとると!？」

「ノンノン。質問は1つずつしなくてはいけませんよ、ルビー、サファイア。」

「!？」

ノンノン、と指をふる男が名乗ってもいない自身の名前を呼ばれ驚愕するルビーとサファイア。

が、その様子を気にすることもなく目の前の男は話を続けた。

「まずは1つ目の質問から。私の名はアダン。ミクリの師、そして、君達を助けた者だ。」

「師匠の・・・師匠!？」

「次に2つ目。ここがどこか、と言うとマボロシ島。そう呼ぶ方が多いですね。正確な名称は私も知りません。ハウエン地方にある1つの島ですが、ある種隔絶された不思議な場所です。」

「マボロシ島・・・。」

「ウイ！」

隔絶された場所と聞き、キョロキョロと周囲を見渡すサファイア。「そして今、君達が1番気になっている事・・・。今ハウエン地方がどうなっているか。」

そう言うと、アダンはボールからキングドラを繰り出す。

そして、キングドラが作り出した水のスクリーンに映し出され

たのは、カイオーガとグラードン。

だが、そこに映っているのはそれだけではなかった。

「カイオーガとグラードンが、肩を並べて何かと戦つとーと・・・？」

「あのポケモンは、ハウオウとルギア!？」

「ウイ。あなた達のグラン・メテオを利用した攻撃でカイオーガとグラードンの動きは止まったように見えました。ですが、実際はアクア団とマグマ団のリーダーから宝珠たまを追いつき、暴走から開放するのがやっとだったようです。そして、その時の衝撃で吹き飛ばされたキミ達を助けている間に割り込んできたのがハウオウとルギア。そして・・・。」

「待つたいたい！あの背中に乗ってるのって!!」

「マシロさん!？」

説明の最中、ハウオウの背に乗っている人物に気がついたサファイアの声にルビーが驚いた声を上げる。

そこにいたのは2人が師匠と呼び慕った人物であるマシロだった。

「その通り。彼女がああ2体を操りカイオーガとグラードンが放つエネルギーを打ち消しながら戦っています。それでも溢れ出るエネルギーは抑えきれません。」

「なら、はよなんとかせんと!!」

「ノンノン、話はまだ終わっていません。ハウオウとルギア、2体で抑えきれないエネルギーは今現在、ハウエンには一切の影響を与えていません。」

「・・・どういうことですか?」

ルビーの問いかけに、水のスクリーンの映像が切り替わる。

そこには、ドーム状に広がる銀色のエネルギーの奔流が映し出される。

「これは?」

「今、ルネシティを包みこんでいる高密度のエネルギーの奔流です。このエネルギーが、カイオーガとグラードンから溢れた分のエネルギーをシャットアウトしています。そして、そのエネルギー源がこのポケモン、ジラーチ。」



ドーム状に広がるエネルギーの頂上、そこに映るのは一際強い輝きを放つポケモン。

「そして、新旧2人のチャンピオンのミクリとダイゴと四天王。彼らが操る3体の伝説のポケモン、レジロック、レジアイス、レジスチル。彼らがそれをサポートする形でエネルギーの拡散を押し留めています。」

「はえ。そんなことが出来るポケモンがいたとね?」

「サファイア、キミの手助けのお陰ですよ。」

息を呑むサファイアに、アダムは優しく声を掛ける。

が、次の瞬間その顔は険しいものになる。

「・・・ですが、それでも結局は時間稼ぎにしかならないということですよ!!カイオーガとグラードンと決着をつける運命にあるルビーとサファイア。キミ達2人が特訓する間の時間稼ぎにしか、ね。フウ、ラン!」

「ハイ。バネブー、じんつうりき!!」

アダムが、フウとランと呼ぶと先程の双子が声を合わせて動き出しルビーとサファイアに向けて技を繰り出す。

いきなりの事に驚きながら飛び退く2人。

そして、その瞬間。その場に飛び込んでくる2つの小さな影。

「行けっ、チビども!!」

その声とともにルビーとサファイアの前に着地したのはプラスルとマイナン。

2体は頬からバチバチと火花をたてると、2体から放たれたほうでんがバネブーから放たれた衝撃波を弾き返した。

そして、攻撃を防いだプラスルとマイナンは、ピョンと飛び上がるとルビーとサファイアに嬉しそうに抱きついた。

「プラスルと、マイナン・・・?」

「それに、今の声って・・・。まさか!」

「フム・・・。ランが、この島に私達以外の気配があると言っていました。アダムはそこで一瞬の言葉を区切る。そして、プラスルとマイナン

が飛び出してきた方を睨みつけながら言葉を続けた。

「そして、マグマ団幹部のカガリ。」

「!!!」

アダンの視線の先、そこに立っている人物を見た瞬間。

驚きで動けなかったのは、ルビーとサファイア。

そして、それとは対象的に臨戦態勢を崩さず攻撃の矛先を変えたのはフウとラン。

「バネブー、じんつうりき!!」

2体のバネブーから放たれたのは先程と同じ技。

だが、さっきの攻撃は加減されていたのか威力は段違いだった。

「キュウゴン、かえんほうしゃ!!」

そして、その攻撃をなんてことないようにキュウゴンの炎が押し返し、そのままバネブーを包みこんだ。

「いきなりごあいさつだねえ。少しぐらい、話を聞いてもいいんじゃないかい?」

「ごあいさつ、なんてふざけてるの?」

「アナタ達マグマ団がぼくたちから宝珠を奪い去った事、忘れたとは言わせないよ?」

そう言われて、合点がいったのか納得したようにカガリは頷く。

「ああ。ホカゲが持ってきたアレ、アンタらから奪ってきたのか。それは悪いことをしたね。」

「なにをいけしやあしやあと!!」

「アナタ達のせいで、今ホウエンは!!」

怒りをあらわにしながら、フウとランはソルロックとルナトーンを繰り返す。

「いわなだれ!!」

ソルロックとルナトーンから放たれたいわなだれがカガリとキュウゴンに迫る。

その様な状況でもカガリは表情を崩すことはなかった。

「ハア・・・人の話を聞けよ。ほのおのうず!!」

瞬間、カガリに迫る岩がほのおのうずに取り込まれ巻き上げられ、

すべての岩はカガリに届くことはなかった。

「すごか。あの岩を全部巻き上げる程の炎、あたしには無理だった。」

その様子を見て、サファイアが感嘆の声を上げる中。

「この岩、利子つけて返すぜ。かえんほうしゃ!!」

巻き上げられた岩を炎が包み込みながらソルロックとルナトーンに撃ち返される。

「コスモパワー!!」

撃ち返されたオマケ付きのいわなだれ。それに対して防御力を上げるフウとラン。

「ラン、後ろに!」

「ありがとう、フウ!」

そして、ソルロックが前にルナトーンがその後ろに隠れる形で攻撃に備えた2体に燃え盛るいわなだれが降り注いだ。

「この隊列なら!」

「受けるダメージは最小限!」

ドドドドドドと、轟音をたてながら降り注ぐ岩が止まった時。そこには傷だらけのソルロックと、最小限のダメージのルナトーン。

「そして、ソルロックが岩を受けている間に!」

「ルナトーンがめいそうで能力を高めた!」

「受けてみて、サイコキネシス!!」

フウとラン。声を合わせて放たれたサイコキネシスが放たれた瞬間。

「チツ、ウゼエな。」

「お前ら、ちよつと黙れ。」

キュウコンの放ったはかいこうせんが、衝撃波をかき消しルナトーンを飲み込んだ。

「なっ・・・!?!」

フウとランが驚いた声を上げた瞬間、ルナトーンはドサツと地面に

倒れ込む。

2人に残ったのは残ったのは、満身創痍のソルロックのみ。

「下がりなさい、フウ、ラン。」

その時の流れ、口を挟んだのはアダン。

そう言つて彼は、フウとランの2人を庇うようにカガリの前に立つ。

「マグマ団幹部という肩書は、伊達じゃないようですね。・・・それにその様子だと、どうやら戦いに来た訳ではないようです。」

「ハア・・・。ようやくまともに話ができそうな奴が出てきたな。」

やれやれ、と疲れたようなカガリ。

そして、その後によく言葉はその場にいる全員が驚くことになる。

「その話。あたしも混ぜろよ。」